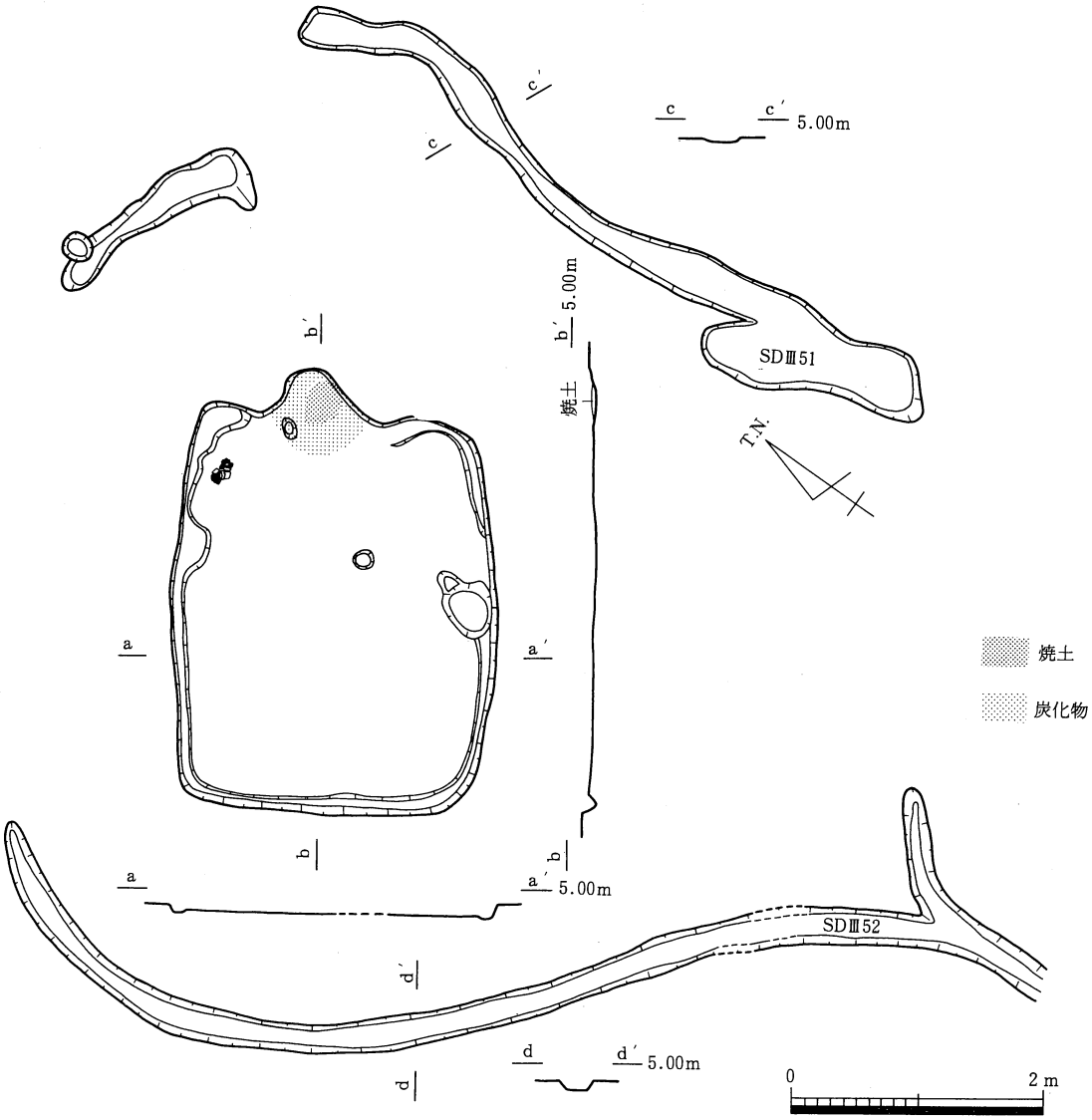
痕顕著。(18・19) はマダコ用の蛸壺で，残りの良い (18) は口縁部に穿孔がある。いずれもやや雑な作りのものである。(20～24) は須恵器で，(21) は大型の杯，(22) は漏斗。(23) は杯蓋で，調査時には確認できなかったが混入品の可能性も否定できない。 (藤好)

ＳＨⅢ19 (第187・423図　図版103　ＳＨ8627)

第２微高地中央部よりのＧ15区で検出した竪穴住居である。周囲に周溝と考えられるＳＤⅢ51・52等がめぐる。平面形はやや隅丸の長方形を呈し，長軸約3.2m，短軸約2.6m，残存深約0.08mを，また主軸の方位はＮ59°Ｅを測る。面積は8.0㎡である。内部構造としては東側の短辺に竈状の張り出しがある。竈状の遺構は焼土化しており，内部には炭化物の集積が確認できた。全周に壁溝がめぐる。主柱穴は明確には確認できなかったが，２穴の可能性が高い。また，周溝は南部で広がっており，この住居は南に空間を意識した構造のものであろう。当遺跡で検出した第Ⅲ期の竪穴住居では，平面形が隅丸長方形のものは第１微高地北部に２棟程あるが，いずれも長辺に竈が設置されたもので，本住居の竈の位置は異質な感を受けるものである。

(第432図25) は中型の甕で，球形に近い体部を持ち，体部外面と口縁部内面は刷毛調整で，体部内面



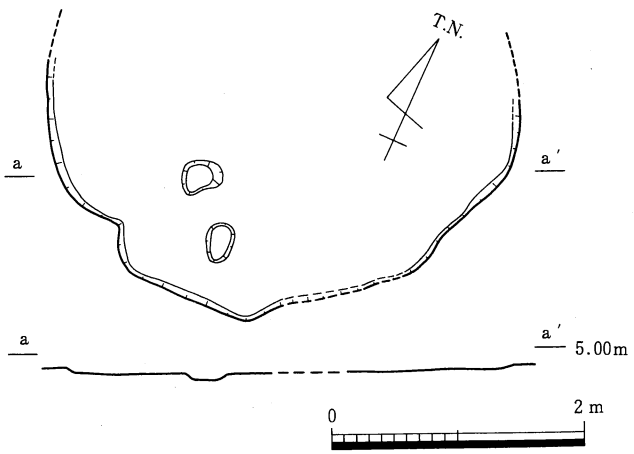
第187図　SHⅢ19，SDⅢ51・52 平・断面図

はナデ調整である。(26) は鉢の破片で内面に暗文が残る。　(藤好)

ＳＨⅢ20（第188・423図）

第２微高地中央部よりのＧ15区で検出した。ＳＨⅢ19の東に隣接する。北半部は削平を受け消失し，中央部を南北に後世の溝で切られる。平面形は不整形なもので，主柱穴炉とも確認できなかった。長軸3.7m以上，短軸2.6m以上，残存深約0.07mを測る。

（第423図27）は須恵器の杯である。（藤好）

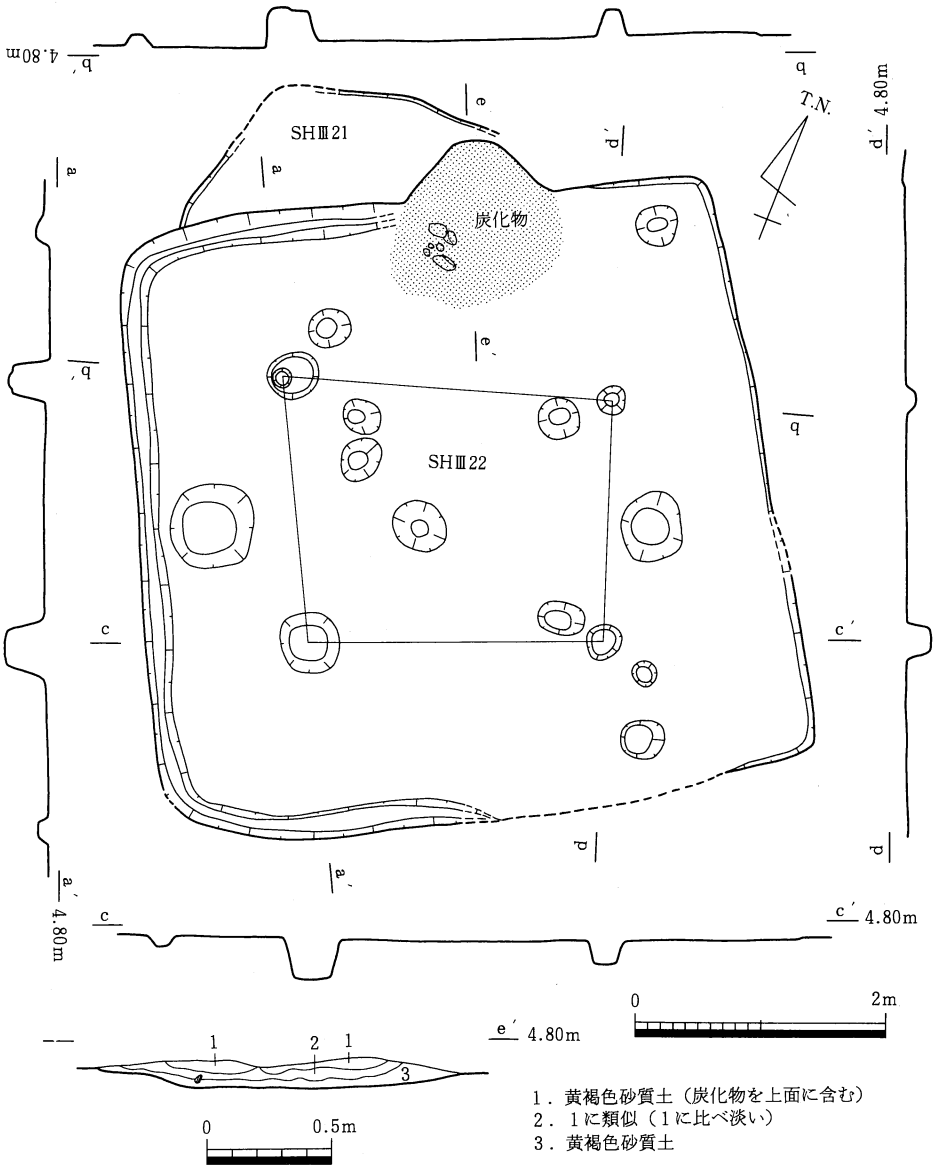


第188図　SHⅢ20 平・断面図

ＳＨⅢ21・22（第189・423図　図版103　ＳＨ8625・8626）

Ｆ15区で検出した竪穴住居址である。ＳＨⅢ21・22は，後世の削平を受け床面を残すのみの状況で検出された。両者は切り合い関係を持ち，ＳＨⅢ22がＳＨⅢ21を切り込んでいる。また，その切り合いによりＳＨⅢ21の大部分は失われ，コーナー部分を残すのみであった。そのためＳＨⅢ21規模及び構造については，不明である。

ＳＨⅢ22の平面形は隅丸方形を呈し長軸5.2m，短軸5.0m，残存深0.04mを測る。主軸の方位はＮ24°Ｗを測る。面積は24.3㎡で，当該期の竪穴住居址の中では平均的な規模である。内部構造としては，北辺の中央部やや東よりに作り付け



第189図　SHⅢ21・22 平・断面図

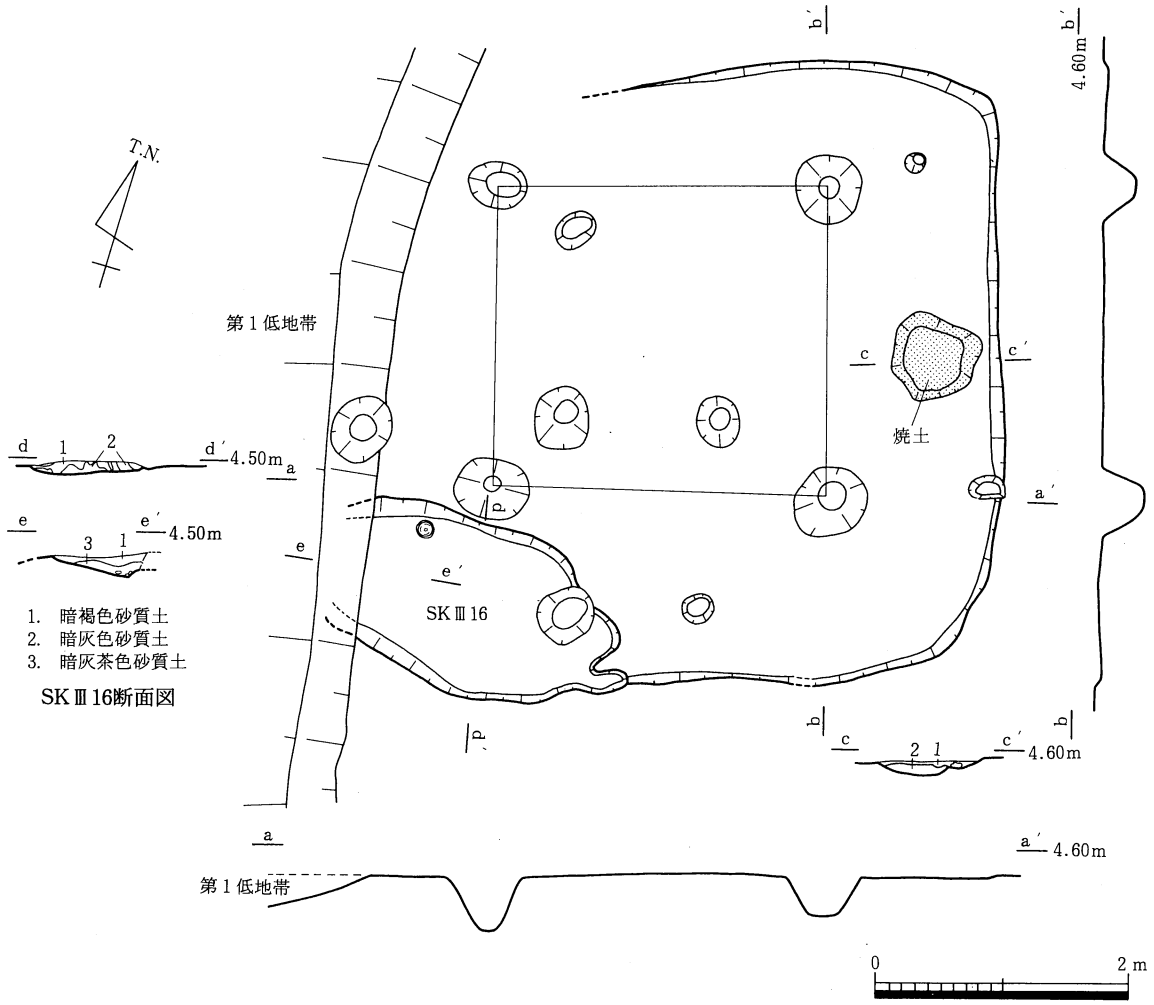
の竈を備えていた。主柱穴は4柱穴確認できた。また，西半部には壁溝が検出できた。その状況より，本来は全周を巡っていたものと考えられる。

ＳＨⅢ22の出土土器の内床面直上のものを，２点抽出した。（第423図28）は製塩土器の口縁部である。（29）は須恵器の杯身である。

資料が少ないため，ＳＨⅢ22の時期を特定するのは比較的難しいが，須恵器の資料より６世紀末と考えたい。（西村）

ＳＨⅢ23（第190・424図　図版122・123　ＳＨ8630）

調査対象地にわずかにかかる第３微高地の西端，第１低地帯に面した微高地上，Ｂ・Ｃ12区で検出した３棟の竪穴住居群中もっとも北に位置する。西部は第１低地帯に面する斜面部にかかり，西辺を確認できなかった。平面形は隅丸方形を呈すると考えられ，長軸5.0m以上，短軸4.8m以上，残存深約0.02mを，また主軸の方位はN20°Wを測る。面積は24.3㎡を測る。残存状況は良くない。東辺中央部に竈の下部と考えられる焼土を検出した。主柱穴は４穴と考えられる。本住居は，西側は低地帯に連なる斜面部に面しており空間的な余裕はないにもかかわらず，東辺中央に，竈をもつ。通例であれば，空間利用上からも北辺に竈を設置したほうが合理的であると考えられるが，敢えて東辺に設置している点は注目される。３棟の竪穴住居が軒を揃えて同時併存であることから，東側に統一して竈を設置したものであ

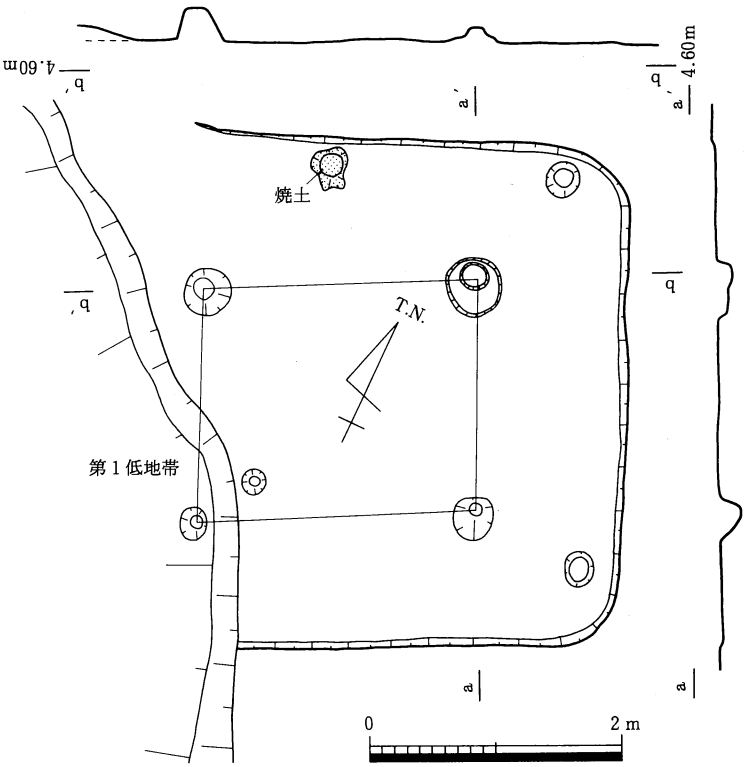


第190図　SHⅢ23，SKⅢ16 平・断面図

ろうか。住居の南西部で土坑を検出したが，埋土の類似からその先後関係は明確ではない。（第424図1～6）は床面直上出土の土器である。（1）は中型の甕の口縁部で内面に刷毛調整の痕跡が残る。（2）は土製品で，土馬の頸部と考えられ内部は中空で，外面に手綱の表現と考えられる沈線が走る。（3～6）は須恵器で，（5・6）は内部の土坑から出土し，外面にヘラ記号が施される。　（藤好）

ＳＨⅢ24（第191図　図版123　ＳＨ8629）

ＳＨⅢ23の南に隣接する竪穴住居で，Ｂ・Ｃ12区で検出した。西辺が削平を受けており，全体を確認するには至っていない。平面形はやや隅丸の方形を呈すると考えられ，長軸4.0m以上，短軸3.1m以上，残存深約0.02mを，また主軸の方位はＮ22°Ｗを測る。残存状況は良くない。面積は18.4㎡で，やや小型の部類に属する。竈・炉は検出できなかった。主柱穴は４穴である。本竪穴住居は，隣接する３棟中もっとも小型のものであり，竈を持たないことから住居としては使用されなかった可能性が高い。図化し得るような遺物は出土していない。（藤好）



第191図　SHⅢ24 平・断面図

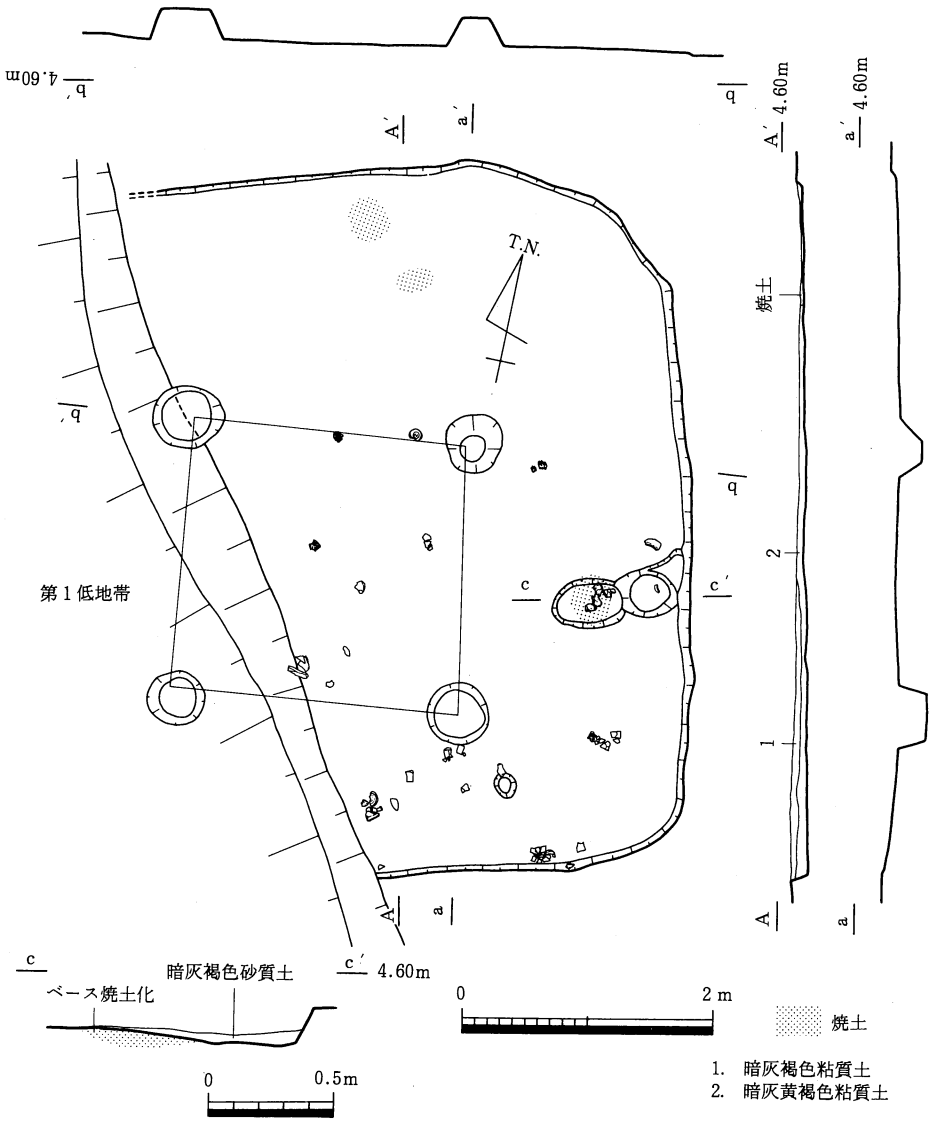
ＳＨⅢ25（第192・424図　図版124　ＳＨ8628）

ＳＨⅢ24の南に隣接する竪穴住居で，Ｂ・Ｃ12区で検出した。同様に西辺が削平を受けており，全体を確認するには至っていない。平面形はやや隅丸の方形を呈すると考えられ，長軸5.7m，短軸4.0m以上，残存深約0.04mを，また主軸の方位はＮ13°Ｗを測る。残存状況は良くない。面積は30.8㎡である。主柱穴は４穴である。東辺で焼土化した部位を確認しており，竈が付設されていた可能性が高い。

（第424図７～27）はいずれも床面直上出土の土器である。（７～11）は甕で，（７）は体部内外面に刷毛調整が施される。（８）は内外面ナデ調整。（11）は中型の甕で口縁部が直立気味で，体部内外面は刷毛調整。（12）は頸部がくびれないが，製塩土器と考えられ，口縁部外面には平行叩き目がつく。（13・14）は鉢。（15～18）は甑と考えられるが，（15）はやや大型であることから竈である可能性も否定できない。（19～27）は須恵器である。　（藤好）

ＳＨⅢ26（第193・425図　図版154・155　ＳＨ8632）

第４微高地の東北端，Ｄ・Ｅ12・13区で検出した２棟の竪穴住居の内，西側に位置するものである。ＳＢⅢ106に切られる。ほぼ正方形を呈し，長軸4.5m，短軸4.4m，残存深約0.２mを，また主軸の方位はＮ44°Ｗを測る。主軸の方位がこの時期のものとしては珍しく，西北方位を示すが，この方位は北に位置する第２低地帯に面した緩斜面部に設置されたためのものと考えられる。面積は17.5㎡で，この時期の竪穴住居としては平均的な規模のものである。内部構造としては，北辺中央部に竈を持ち，主柱穴は



第192図　SHⅢ25 平・断面図

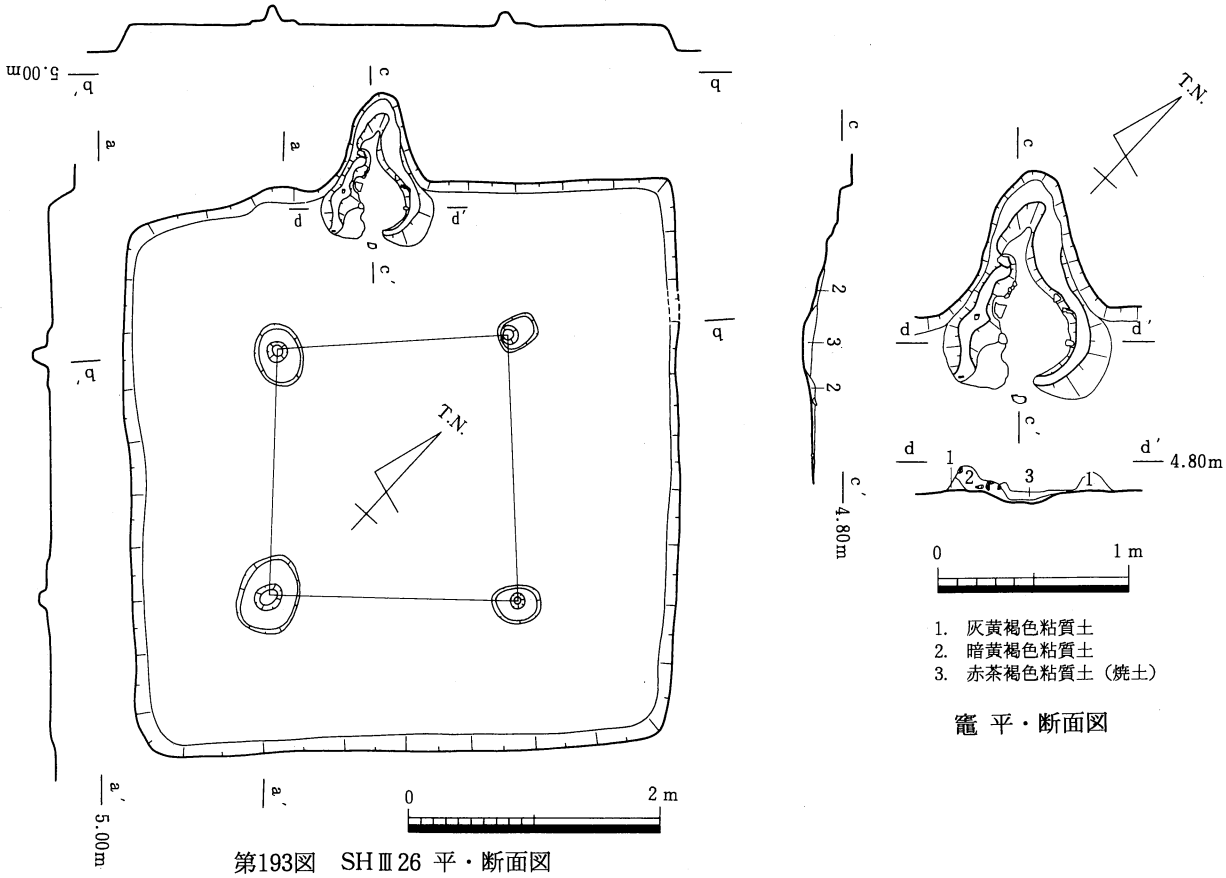
4穴である。

（第425図1）は床面直上出土の須恵器杯蓋である。　（藤好）

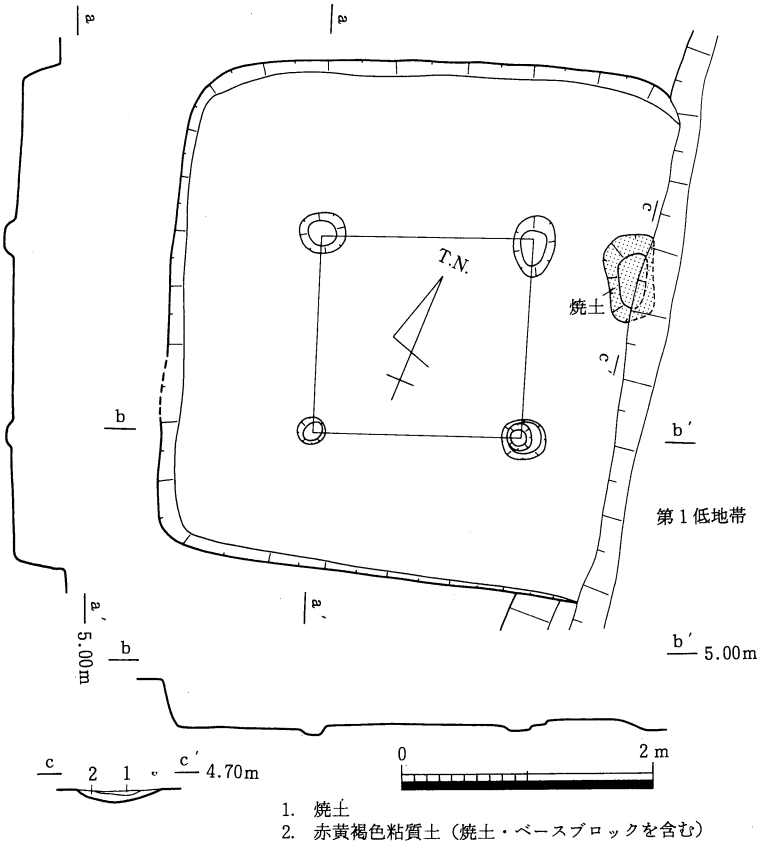
SHⅢ27（第194・425図　図版155　SH8631）

第4微高地の東北端，D12区で検出した竪穴住居でSHⅢ26の東に位置する。本遺構は，東部を第1低地帯により消失しており，完全な状況では検出できなかった。またSBⅢ107に切られる。平面形は，四隅がやや丸みを持つほぼ正方形のものと考えられ，長軸4.1m，短軸3.6m以上，残存深約0.35mを，また主軸の方位はN18°Wを測る。面積は16.2㎡を測る。ほぼ平均的な規模のものである。内部構造は，主柱穴は4穴からなる。東辺は欠落しているものの，中央やや北よりに焼土化した部分があり，隣接して竈が存在した可能性が高い。本竪穴住居は，その方位においてSHⅢ26とは逆に東の第1低地帯に面した斜面の影響を受けたものと考えられる。

（第425図2～8）は床面直上出土の土器である。（2）は把手付の球胴の甕で，口縁端部は垂直面取りで，内外面を刷毛調整する。（3）は竈の鍔の部分である。（4～8）は須恵器，（8）は提瓶でカキ目調整が顕著である。　（藤好）



第193図　SHⅢ26 平・断面図



第194図　SHⅢ27 平・断面図

ＳＨⅢ28（第195・425図　図版156・157　ＳＨ8717）

Ｆ10区で検出した竪穴住居址である。ＳＨⅢ29と切り合い関係にあり，ＳＨⅢ29を切り込んでいる。上半部は削平を受けかなり残りが悪い。平面形は隅丸方形を呈し長軸4.8m，短軸4.3m，残存深0.04mを測る。主軸の方位はＮＳを測る。面積は20.2㎡で，当該期の竪穴住居址の中では平均的な規模である。内部構造としては，北辺の中央部やや東よりに作り付けの竈を備えていた。主柱穴は４柱穴確認できた。西辺には部分的に壁溝が検出できた。

ＳＨⅢ28の床面直上の土器として，最大図化できるもの２点抽出した。（第425図９）は須恵器の杯身である。（10）は須恵器甕の上半部である。

資料が少ないため，ＳＨⅢ28の存在時期を特定するのは比較的難しいが，須恵器の坏の形状より６世紀末に当るであろう。（西村）

ＳＨⅢ29（第195・425図　図版157　ＳＨ8718）

Ｆ10区で検出した竪穴住居址である。ＳＨⅢ28と切り合い関係にあり，ＳＨⅢ28に切られている。上半部は削平を受けかなり残りが悪い。平面形は隅丸方形を呈し長軸4.6m，短軸4.6m，残存深0.10mを測る。主軸の方位はＮ15°Ｗを測る。面積は21.3㎡で，当該期の竪穴居址の中では平均的な規模である。内部構造としては，北辺の中央部に作り付けの竈を備えている。主柱穴は４柱穴確認できた。西辺には部分的に壁溝が検出できた。

ＳＨⅢ29の床面直上より出土した土器として，最大図化できるもの５点を抽出した。（第425図11・12）は製塩土器の上半部である。（13・14）は須恵器杯蓋である。（15）は須恵器の底部で，杯の可能性がある。

資料が少ないため，ＳＨⅢ29の時期を特定するのは比較的困難であるが，須恵器の資料より６世紀後葉ないし６世紀末前後に当るであろう。（西村）

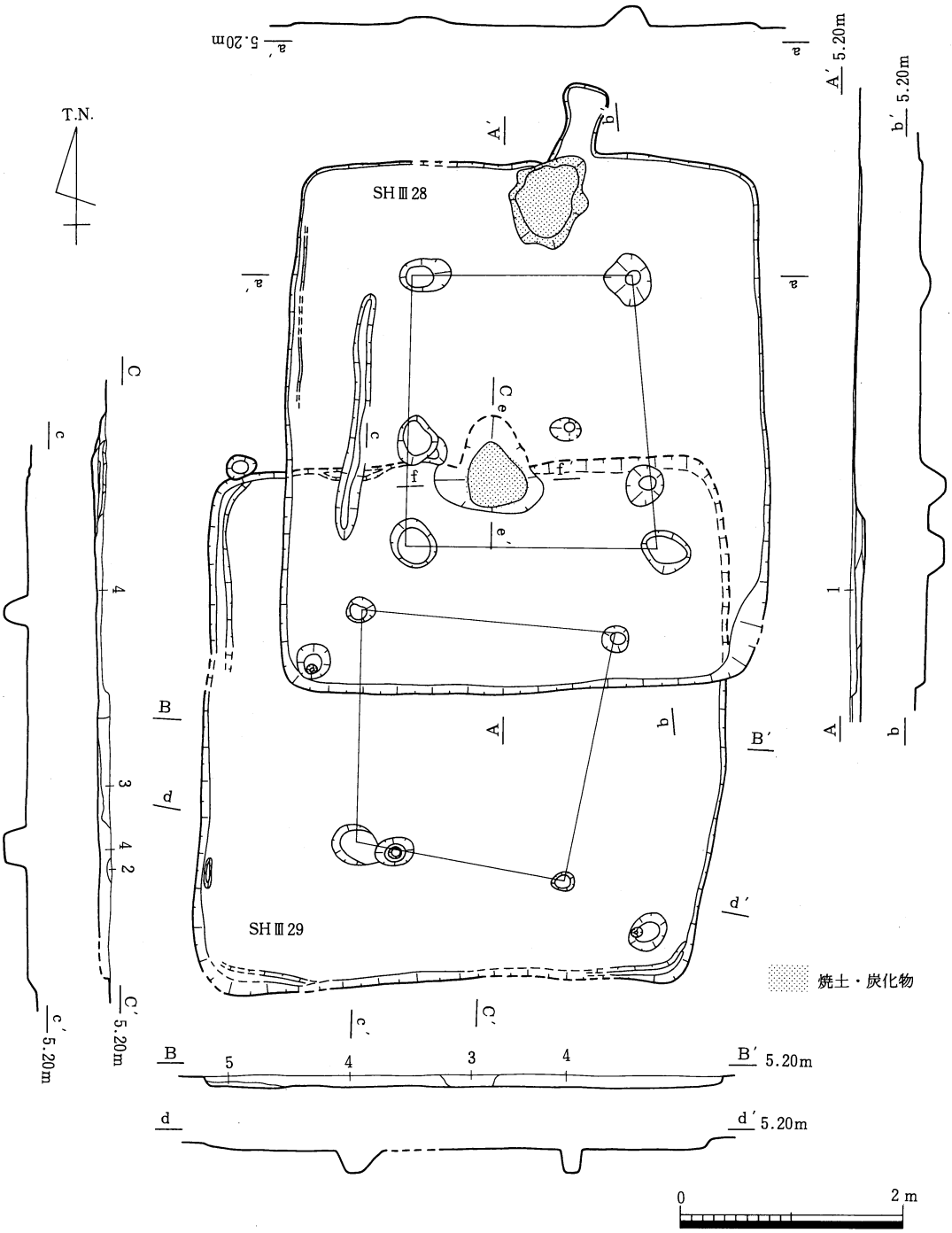
ＳＨⅢ30～37（第196・197・425・426図　図版158　ＳＨ8720～8727）

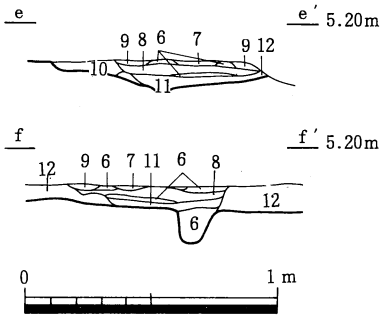
第４微高地の西部，ＧＨ９区で検出した竪穴住居群で，著しく重複し，埋土も類似することから検出に困難を有した住居群である。残存状況も悪く埋土の深さもわずかしか残っていない。ＳＨⅢ32は小型の方形土坑ＳＫⅢ23に，ＳＨⅢ35・ＳＨⅢ37はＳＤⅢ109に，またＳＨⅢ37はＳＤⅢ110に切られている。竪穴住居の規模・棟数・相互の切り合い関係は，竈の残存状況や壁溝中の微妙な埋土の差により判断せざるを得なかった。７棟の位置を見ると，わずかに切り合いは持つものの東南に離れるＳＨⅢ37を除き，西寄りに６棟が集中する。この西寄りの６棟は，西部に位置するＳＨⅢ30～33，東部に位置するＳＨⅢ34～36と中央のＳＨⅢ36の概ね３群に区分される。竈の痕跡は中央のＳＨⅢ36を除き，いずれも北部のものしか残存しない。西群は，切り合い関係から南から北へ順次建て替えられ，東群も切り合いが一部不明瞭な点もあるが，その可能性が高い。またＳＨⅢ31とＳＨⅢ33，ＳＨⅢ32とＳＨⅢ35は形状や規模が非常によく類似するなど，東西両群の内容の近似性は注目される。

ＳＨⅢ30は，西寄りの竪穴住居群中最も先行する時期のものである。形態は方形を呈し，残存状況は悪く，東南隅の壁溝部だけを検出した。なお主軸方位は，この群中では最も東寄りの方位を示す。

ＳＨⅢ31は，ほぼ正方形の平面形を呈し，長軸6.8m，短軸6.4m，残存深約0.05m，主軸の方位Ｎ15°Ｗ，面積44.2㎡を測る。やや大型の住居で，壁溝を持つ。

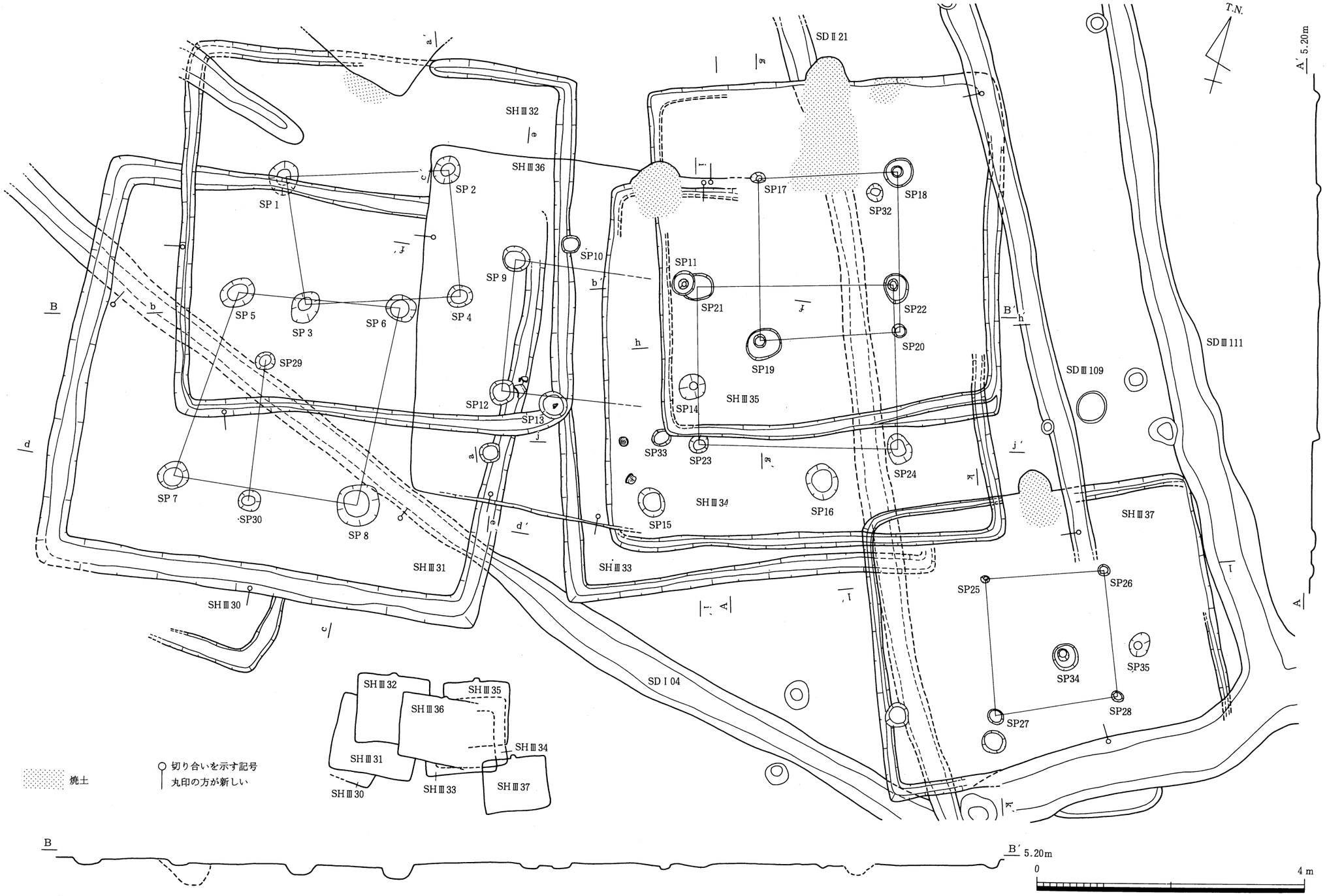
ＳＨⅢ32は，西群中もっとも北に位置する住居で，北部をＳＫⅢ23に切られる。平面形は，ほぼ正方形を呈し，全周に壁溝がめぐる。長軸5.8m，短軸5.5m，残存深約0.07m，主軸の方位Ｎ10°Ｗ，面積





1. 暗褐茶灰色砂質土
2. 明灰色砂質土
3. 暗褐灰色砂質土
4. 暗黄褐灰色砂質土（やや砂粒を含む）
5. 暗灰黄褐色粘質土
6. 暗灰色砂混じり粘質土（焼土を多量に含む）
7. 5に類似（炭を含む，焼土を若干含む）
8. 暗灰色砂混じり粘質土（5・6に比べ暗い，炭を多量に含む）
9. 暗灰色砂混じり粘質土
10. 暗灰色砂混じり粘質土
（5・6に比べやや明るい，暗茶色Mn粒を多く含む）
11. 暗褐灰色砂質土
12. 灰黄色粘土混じり砂質土

第195図　SHⅢ28・29 平・断面図



第196図　SH Ⅲ 30～37 平・断面図

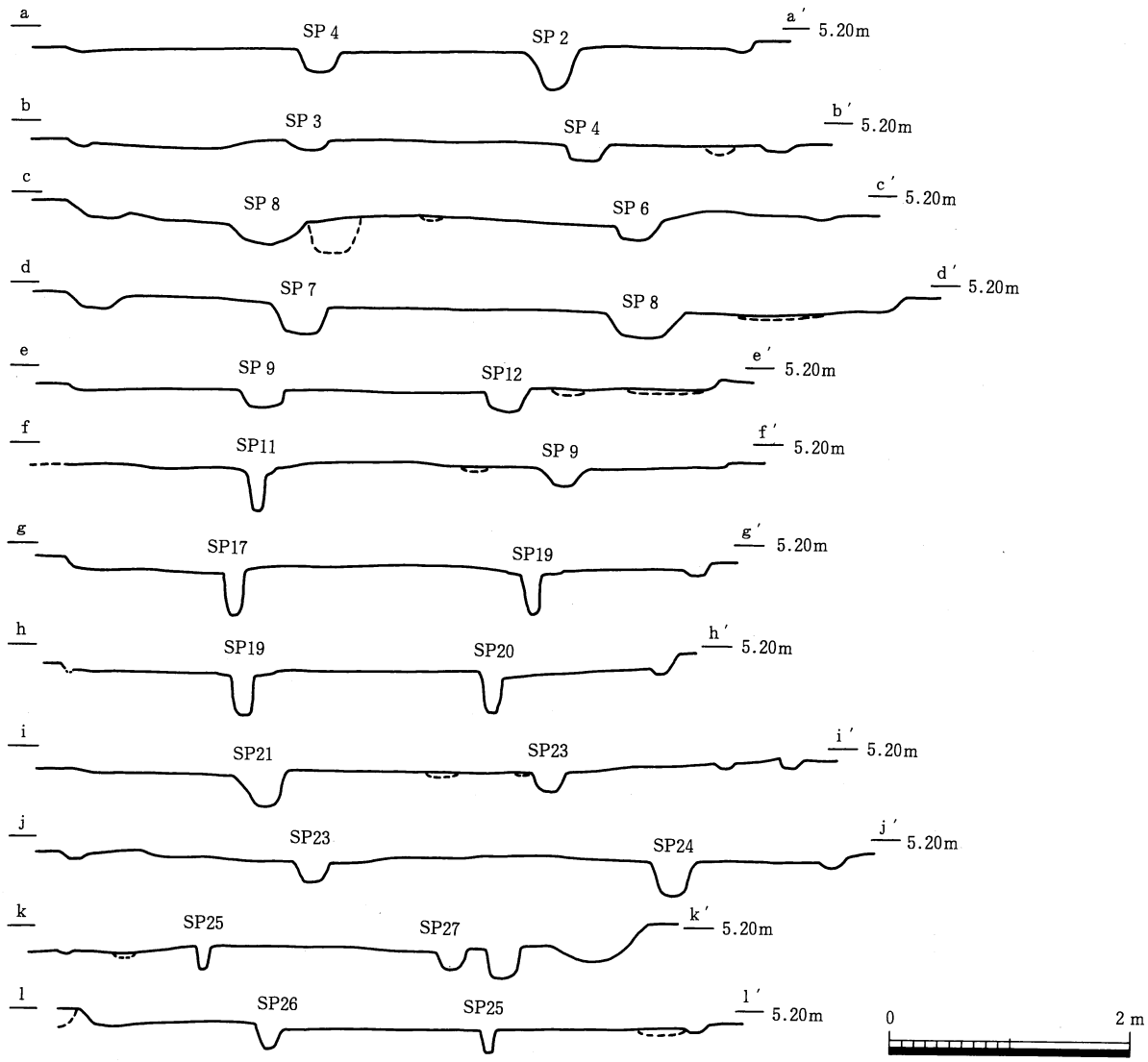
32.8㎡を測る。北辺中央部に竈の痕跡と考えられる焼土を検出した。

ＳＨⅢ33は，東群のもっとも先行する住居で，ほぼ正方形を呈すると考えられ，長軸5.6m以上，短軸3.0m以上，残存深約0.07m，主軸の方位Ｎ16°Ｗを測る。全周に壁溝を持ち，東南部をＳＨⅢ37に切られる。

ＳＨⅢ34は，ほぼ正方形を呈し，長軸5.9m，短軸5.5m，残存深約0.05m，主軸の方位Ｎ15°Ｗ，面積33.6㎡を測る。主柱穴は４穴である。

ＳＨⅢ35は，東群中もっとも北に位置する住居で，北辺中央部に竈を持つ。ＳＨⅢ36に切られる。ほぼ正方形を呈し，長軸5.4m，短軸5.1m，残存深約0.1m，主軸の方位Ｎ17°Ｗ，面積17㎡を測る。主柱穴は４穴である。

ＳＨⅢ36は，ＳＨⅢ30～36中もっとも新しい時期のもので，北辺に竈の痕跡が認められる。東辺は確認できなかったが，竈の位置が北辺の中央部に位置するとすれば，東西に長い長方形を呈する。また先行するＳＨⅢ35の竈の南端が直線を呈し，本住居の北辺の延長線上に位置することも，ＳＨⅢ36が長方形プランを呈していたことを示すものであろう。長軸約5.3m，短軸約4.5m以上，残存深約0.05m，主



第197図　SHⅢ30～37 断面図

軸の方位N７°W，面積28.3㎡を測る。

ＳＨⅢ37は，やや東南方向にずれる住居で，南辺をＳＨⅢ110に切られる。やや東西方向に長い形状を呈し，長軸約5.2m，短軸約4.3m，残存深約0.02m，主軸の方位N18°W，面積22.7㎡を測る。

ＳＨⅢ30～37は，接近することから同時併存としては，多くても２棟ほどであろう。平面形はＳＨⅢ37ともっとも新しいＳＨⅢ36がやや長方形になる可能性がある他はほぼ正方形に近い平面形を持つ。主軸の方向性は，やや真北方位のものから西にふる方位への変化が認められる点は注目される。またＳＤⅡ21とした第Ⅱ期の溝は，途中でＳＤⅢ93に切られ，連続して検出したものではない。この溝はその方位が南部ではやや地形に影響され蛇行するが，北部は直線的に走ることから別の時期の所産の可能性も否定できない。埋土の類似からＳＤⅡ21の北部は，ＳＤⅢ93から分岐したものである可能性も考えられる。こうした点からすれば，ＳＨⅢ30・31に代表される西群はその方位からＳＤⅢ93と併存が考えられ，ＳＤⅢ93から北に分岐する溝は先進の方向性を持ちこの竪穴住居群の西群に伴うもので，東群に切られる可能性も十分ある。

（第425図16・17）はＳＨⅢ32の床面直上から出土した甕と須恵器の杯蓋である。甕は口縁端部を直角に面取りする。（18）は，ＳＨⅢ31の床面直上出土の須恵器の杯で，天井部はヘラ削りが施されている。（19～24）はＳＨⅢ36の床面直上から出土したもので，（19）は中型の甕で，口縁部は短く，体部外面は刷毛・内面はナデ調整である。須恵器の杯は残りの良いものはいずれもヘラ削りを施す。

（第426図１～４）はＳＨⅢ35の床面直上から出土したものである。（１）は土師器の脚台，（２～４）は須恵器で（３）は杯身で底部ヘラ削り，（４）は長頸壺である。（８・10・11）は，ＳＨⅢ33～35の重複部からの出土の須恵器である。（９）はＳＨⅢ33・36の重複部から出土した須恵器で底部はヘラ削りを施す。（５～７）はＳＨⅢ37の床面直上から出土した杯で，（５・７）はヘラ削りが認められる。（12）はＳＨⅢ30～37の重複部から出土した杯身である。出土した遺物には明確な時期差は認められず，近接した時期の初産と考えられ，出土須恵器杯の残りの良い杯はいずれもヘラ削りが施され，径もやや大型のものが多く，隣接するＳＤⅢ20と近時した時期であると考えられる。（藤好）

ＳＨⅢ38（第198・426図　ＳＨ8711）

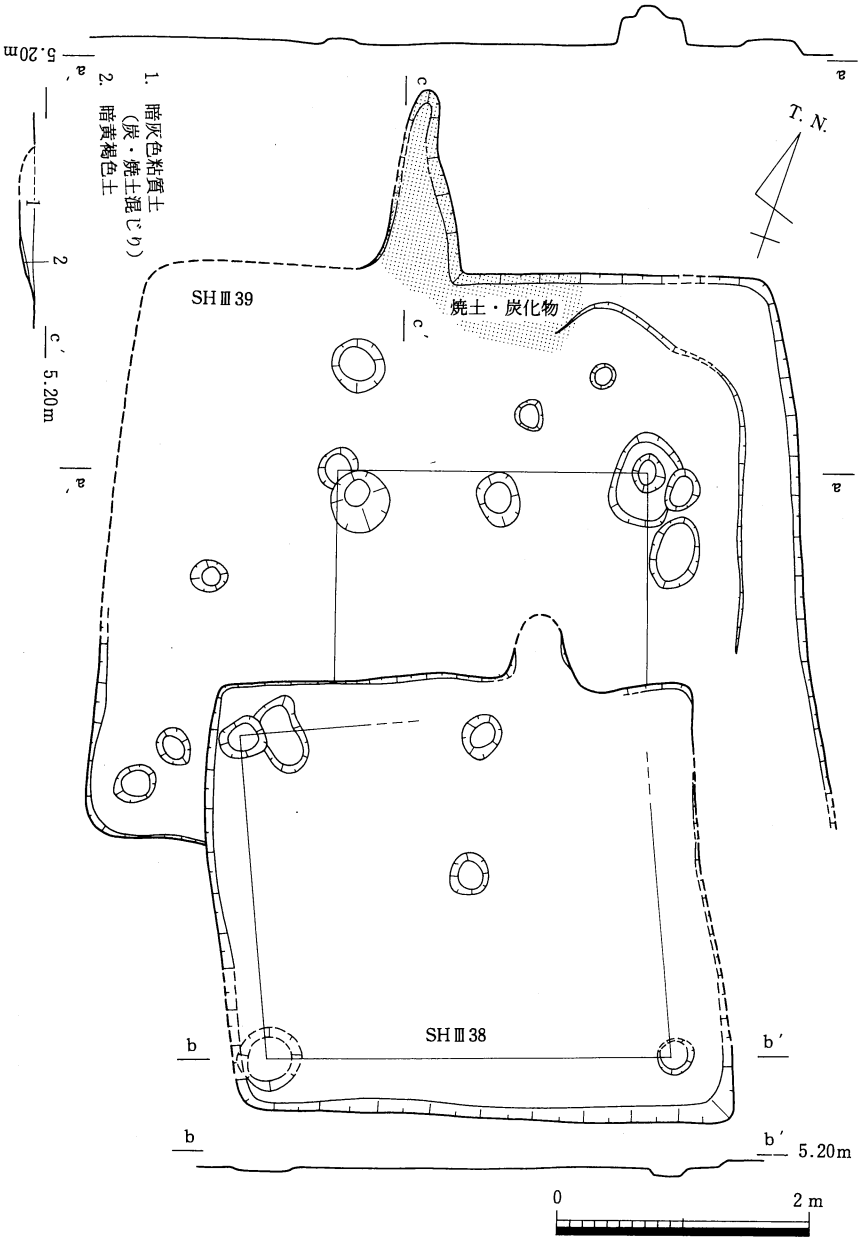
Ｇ９区で検出した。第４微高地中央部の古墳時代後期竪穴住居群中に位置し，同時期のＳＨⅢ39南半部を切る。また南半を溝ＳＤⅢ110・113に切られる。殆ど床面まで削平されており，残存状態は不良である。平面形は正方形に近く，長軸3.9m，短軸3.5mを測り，主軸方位はN20°Wで，面積は16.9㎡と，当該期の竪穴住居中では平均的な規模である。北辺で東に偏して造り付け竈を持つ。煙道部は短く，炉床の掘り込みは浅い。主柱穴は４本で四隅の壁面にほぼ接している。壁溝は検出していない。主柱穴より製塩土器（第426図13），床面より須恵器杯蓋小片（第426図14）を出土している。

製塩土器は厚手で肩部で緩く屈曲して口縁部はほぼ直立し，外面に並行叩きを施す。杯蓋は口縁部の小片である。６世紀後葉の特徴を備えている。（大久保）

ＳＨⅢ39（第198・426図　ＳＨ8710）

Ｇ９区で検出した。第４微高地中央部の古墳時代後期竪穴住居群中に位置し，同時期のＳＨⅢ38に南半部を切られる。殆ど床面まで削平されており，残存状態は不良である。平面形はほぼ正方形で，長軸5.5m，短軸4.8mを測り，主軸方位はN13°W，面積は26.4㎡で，当該期の竪穴住居中ではやや大形である。北辺中央部に造り付け竈を持つ。煙道部は比較的長く延びる。削平と柱穴の重複が著しく，本住居に伴う主柱穴の特定は困難である。また壁溝も検出できなかった。

竈から甑，床面から須恵器杯身，壺片を出土している。甑（第426図15）は弱く外傾して外面縦ハケ，内面横ハケを加える。杯身（16～19）は比較的口径が大きく立ち上がりも高い。底部の遺存する（16）ではヘラ切り後，回転ヘラ削りを施している。（20）はこのように図示したが壺口縁部の可能性もある。全般的に6世紀後葉に位置付けて矛盾はない。　　（大久保）



第198図　SHⅢ38・39 平・断面図

ＳＨⅢ40（第199・426図図版159　ＳＨ8719）

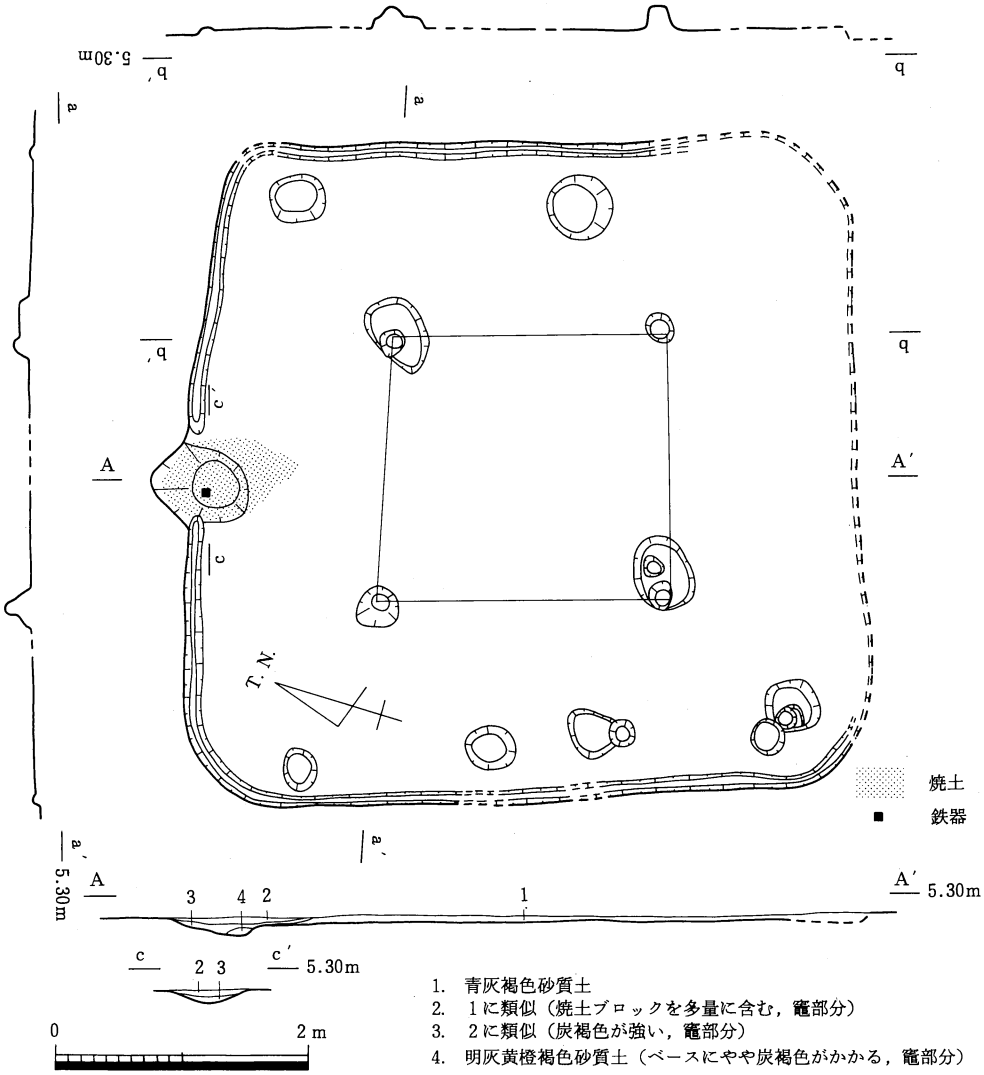
Ｆ９区で検出した竪穴住居址である。東には隣接してＳＨⅢ46が位置する。上半部は削平を受けかなり残りが悪い。平面形は隅丸方形を呈し長軸5.3m，短軸5.2m，残存深0.10mを測る。主軸の方位はN20°Wを測る。面積は27.4㎡で，当該期の竪穴住居址の中では平均的な規模である。内部構造としては，北辺の中央部に作り付けの竈を備えている。主柱穴は4柱穴確認できた。また，建て替えが行なわれたと考えられ，主柱穴に隣接して複数の柱穴が確認された。削平を受けている南辺を除く三辺に壁溝が確認できた。本来は全周していたものと思われる。

床面直上より出土した土器として，最大図化できるもの3点を抽出した。（第426図21）は土師器の鉢である。底部は丸底であり，口縁部は「く」字状に外反し端部は尖り気味に丸く納まる。体部内面にはハケが顕著。（22・23）は須恵器杯蓋及び身である。

資料が少ないため，ＳＨⅢ40の時期を特定するのは比較的困難であるが，須恵器の特徴より6世紀後葉ないし6世紀末に当るであろう。　　（西村）

ＳＨⅢ41（第426図）

第4微高地の東端，Ｄ９・10区で検出した。第1低地帯に面した斜面部で位置し，残存状況は悪く，東部は確認できなかった。長軸5.0m，短軸3.0m以上を測る。



第199図　SHⅢ40 平・断面図

（第426図24）は床面直上から出土した須恵器の杯蓋である。（藤好）

ＳＨⅢ42（第426図）

第４微高地の東端，Ｄ９区で検出した。第１低地帯に面した斜面部で位置する。基本的には方形を呈すると考えられるが，とくに東南隅はいびつな形状を示す。主柱穴は円形にめぐる柱穴群が相当すると考えられるが，不整合性が高く，断定できない。長軸約4.7m以上，短軸約4.2m，残存深約0.12mを測る。面積は19.5㎡である。

（第426図25～29）は床面直上から出土した土器で，（25）は土師器の中型の甕で口縁部内面に刷毛目が残る。（26～28）は鉢で，（25）は小片のため傾きには誤差があり，（28）の内面には暗文が残る。（藤好）

ＳＨⅢ43（第200・426・427図　図版160　ＳＨ8709）

Ｇ９区で検出した。第４微高地中央部の古墳時代後期竪穴住居群中に位置し，同時期のＳＨⅢ44に過半を切られる他，溝３条，堀立柱建物一棟と重複し，残りは余り良くない。平面形は正方形に近く，長軸6.1m，短軸5.7mを測り，主軸方位はＮ11°Ｗ，面積は36.5㎡で，当該期の竪穴住居中では平均的な規模である。残存深0.22mを測る。竈は遺存していない。主柱穴は４本で比較的内よりに位置するが，規

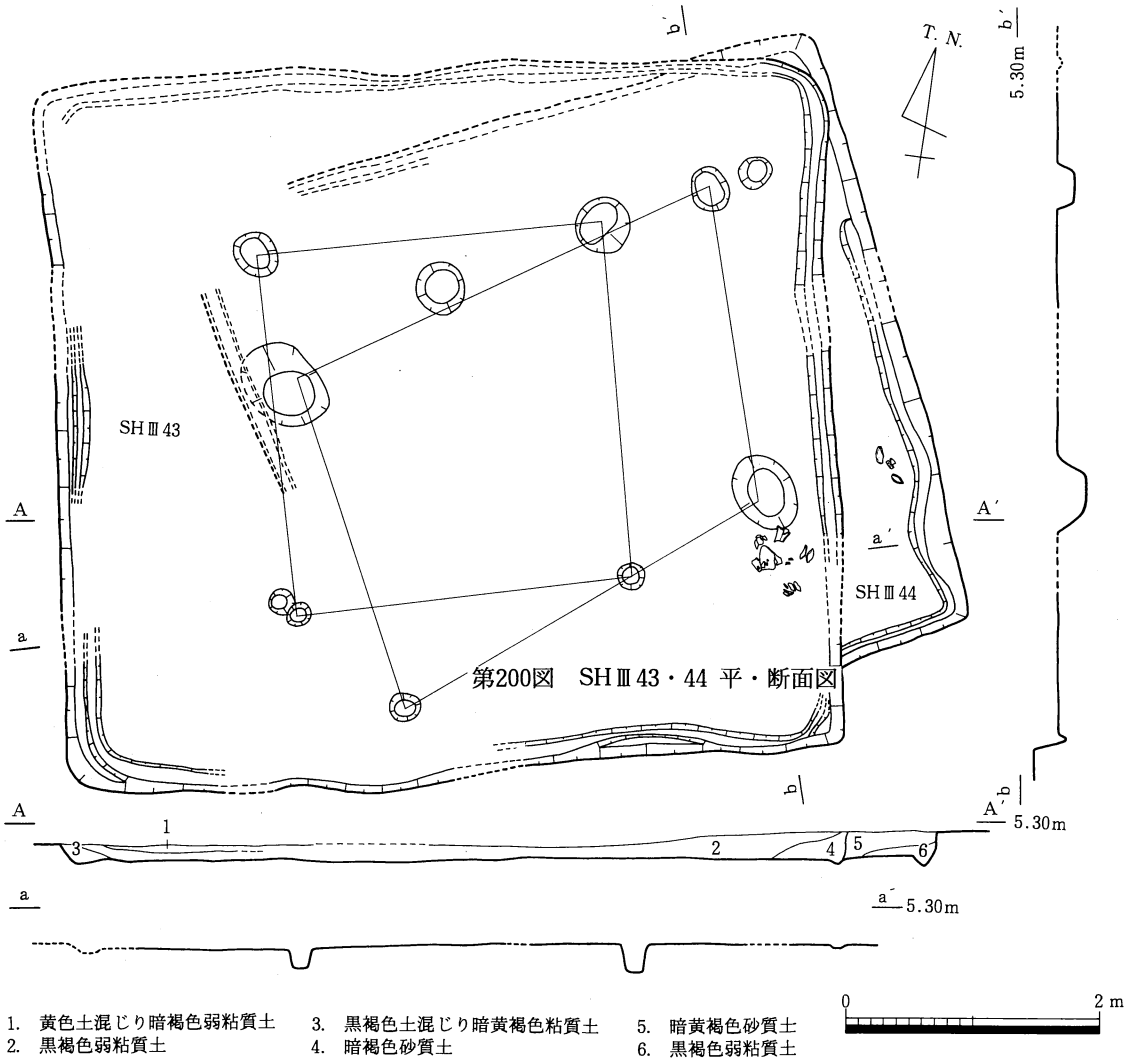
模・柱間寸法のばらつきが大きい。壁溝は四周で認められる。床面から須恵器杯蓋を出土している。（第426図30）は床面遺存の須恵器杯身で口径の小形化と共に口縁立上り部・受部が共にかなり矮小化しているが底部には回転ヘラ削りを施す。６世紀末葉に比定出来る。　（大久保）

ＳＨⅢ44（第200・426･427図　図版160　ＳＨ8708）

Ｇ９区で検出した。第４微高地中央部の古墳時代後期竪穴住居群中に位置し，同時期のＳＨⅢ43を切り，溝３条，堀立柱建物一棟と重複する。平面形は方形を呈し，東西辺がやや長く長軸5.1m，短軸5.0mを測り，主軸方位はＮ23°Ｗ，面積は22.5㎡で，当該期の竪穴住居中では平均的な規模である。また残存深0.2mを測る。重複する溝に破壊されて竈は遺存していない。主柱穴は４本でかなり内よりに位置する。壁溝は四周で認められるが全周しない。東南隅主柱穴周辺を中心に床面からは須恵器杯身および土師器片を検出している。

（第426図31～33）は何れも未だ箱形を呈し頂部には回転ヘラ削りを施す杯蓋である。６世紀後葉に位置付けられる。

なお（第427図１～７）はＳＨⅢ43・44重複部分で検出した遺物で何れに属するとも決し難いものである。（１・２）は土師器の大形球形甕ないしは長胴甕であろう。（３）は土師器大形鉢である。（４）は



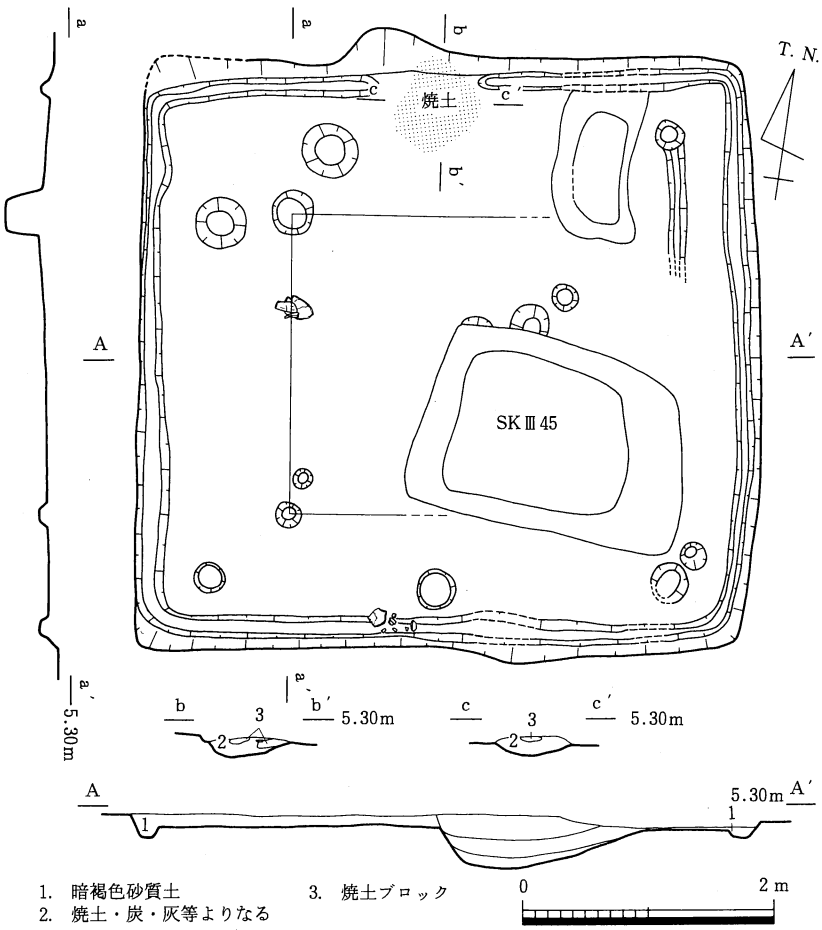
第200図　ＳＨⅢ43・44 平・断面図

製塩土器で直立する口縁部外面に並行叩きを施す。（５）は器種不明。甑の一部には中位に突帯を持つ例があるのでそれかも知れない。（６）は土師器竈であろう。（７）は須恵器杯蓋，形状から見てＳＨⅢ44に属する可能性が高い（久保）

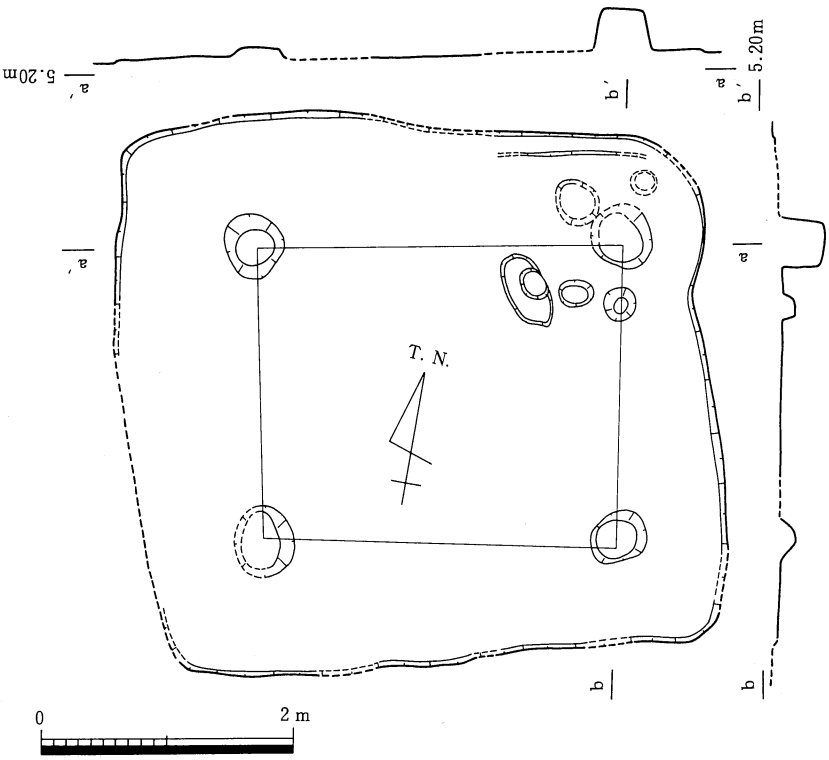
ＳＨⅢ45（第201・427図　図版160・161　ＳＨ8707）

Ｇ８・９区で検出した。第４微高地中央部の古墳時代後期竪穴住居群中に位置し，同時期のＳＨⅢ43・44の東側に接する。平面形はほぼ正方形を呈して長軸4.9ｍ，短軸4.7ｍを測り，主軸方位はＮ８°Ｗ，面積は23.0㎡と，当該期の竪穴住居中では平均的な規模である。残存深は0.1ｍに留まる。北辺中央部のやや西よりに造り付け竈を持つ。煙道の張り出しは短い。これより僅かに東側にずれて炉床状の窪みがあり，焼土が詰まる。主柱穴は４本で，比較的内よりに位置するが，東辺２穴は本住居と重複する二基の土坑（ＳＫⅢ45等）に破壊され残存しない。壁溝は全周している。

本住居床面では比較的多量の土器が残されていた。（第427図８）は小形の球形甕，（９）は口縁部である。（10・11）は土師器土鍋。該期の同器種の中では際立って小形の部類である。（12・13）は甑口縁部片である。（14・15）は須恵器杯蓋。（16）の須恵器杯身は立上り部がひどく矮小化して底部外面に回転ヘラ削りも認められない。６世紀末葉ないし７世紀初頭



第201図　SHⅢ45 平・断面図



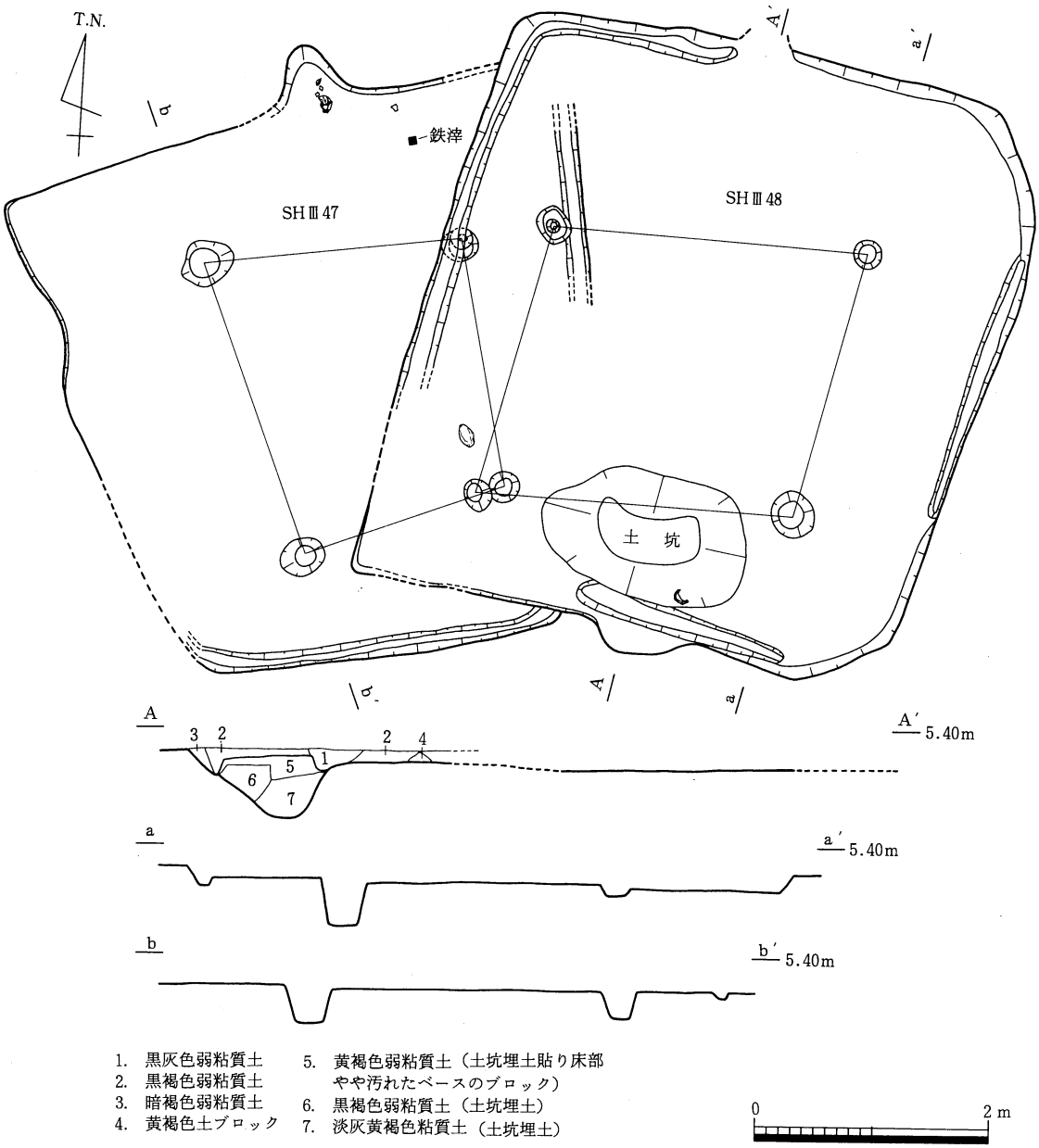
第202図　SHⅢ46 平・断面図

に位置付け得る。　（大久保）

ＳＨⅢ46（第202図　図版161　ＳＨ8716）

Ｅ９区で検出した竪穴住居址である。西には隣接してＳＨⅢ40が位置する。ＳＢⅢ171・172等とは切り合い関係にある。後世の削平と，掘立柱建物・土坑・溝等の切り込みにより，残りはかなり悪く不明な点が多い。平面形は隅丸方形を呈し長軸4.7m，短軸4.5m，残存深0.06mを測る。主軸の方位はＮ６°Ｗを測る。面積は19.6㎡で，当該期の竪穴住居址の中では平均的な規模である。内部構造として確認できたものは主柱穴と壁溝である。主柱穴は４柱穴確認できた。北辺に壁溝を部分的に確認できた。

ＳＨⅢ46からは，須恵器及び土師器の細片が少量検出されただけで，時代を特定出来る資料は見出せなかったが，周辺部に所在するＳＨⅢ40の主軸方位及び規模等類似する点が多く，この住居址はＳＨⅢ40時期に近い６世末前後の竪穴住居址の可能性が高い。　（西村）



第203図　SHⅢ47・48 平・断面図

ＳＨⅢ47（第203，427図　図版162　ＳＨ8706）

Ｆ・Ｇ８区で検出した。第４微高地中央部の古墳時代後期竪穴住居群中に位置し，溝ＳＤⅢ93を切るが同時期のＳＨⅢ48に過半を切られる。また上半部を予備調査時のトレンチに破壊されて遺存状態は良くない。平面形はほぼ正方形を呈し，長軸4.7m，短軸4.7mを測る。主軸方位はＮ17°Ｗ，面積は23.5㎡と，当該期の竪穴住居中では平均的な規模である。残存深は僅かに0.08mを残すだけである。北辺中央部に造り付け竈を持つ。煙道張り出しは短い。主柱穴は４本で，比較的内よりに位置するが柱間間隔にばらつきが大きい。壁溝は南半部のみ検出し得た。遺物は小片ばかりであるが住居の遺存状態から考えてほぼ床面直上と見成して良い資料である。

（第427図17・18）は須恵器杯蓋，（19～21）は須恵器高杯である。（19）の杯部は杯蓋同様の調整でヘラ切り後回転へら削りを加えてから脚部に接合している。６世紀末葉に位置付けられる。　（大久保）

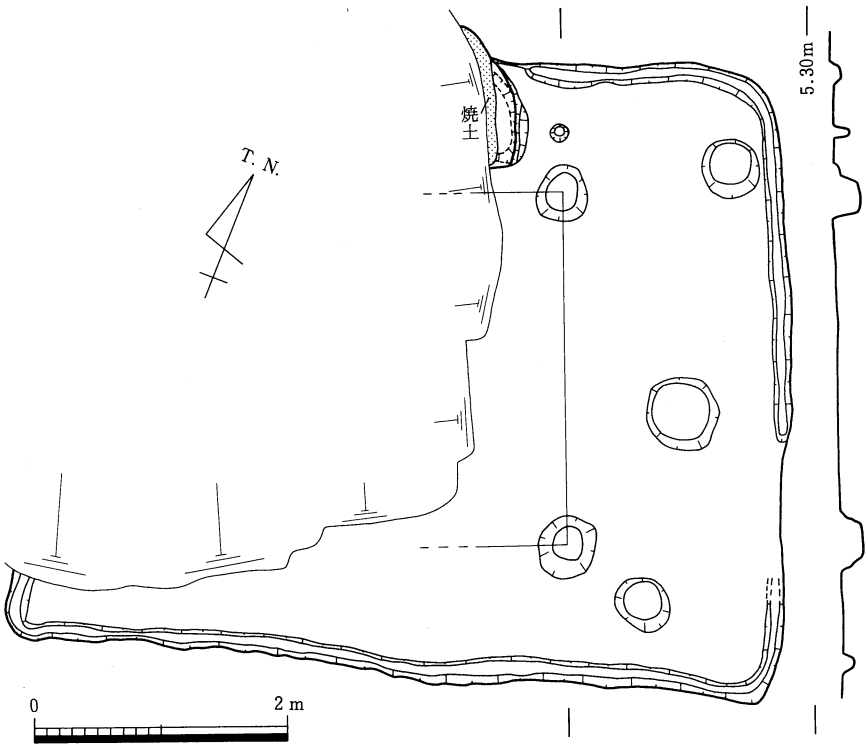
ＳＨⅢ48（第203・427図　図版162　ＳＨ8705）

Ｆ８区で検出した。第４微高地中央部の古墳時代後期竪穴住居群中に位置し，同時期のＳＨⅢ47の過半を切る。また上半部を予備調査時のトレンチに破壊されて遺存状態は良くない。平面形はほぼ正方形を呈し，長軸5.1m，短軸4.8mを測る。主軸方位はＮ14°Ｗ，面積は24.5㎡と，当該期の竪穴住居中では平均的な規模である。残存深は僅かに0.14mを測る。北辺中央部に造り付け竈を持つが，大部分を破壊されている。主柱穴は４本で，比較的内よりに位置するが柱間間隔にばらつきが大きい。また床面南半部中央に平面楕円形の土坑があるが，後に埋め戻されている。上面には丁寧に黄色土を貼る。壁溝は断続的に四周で検出した。遺物は小片ばかりであるが住居の遺存状態から考えてほぼ床面直上と見成して良い資料である。

（第427図23・24）は土師器杯である。（23）は口縁端部内面を斜めに面取りし，内面に暗文を持つ。（25）は土師器甑底部片。小片のため図のように復元したが傾きは再考の余地がある。（26）は須恵器杯蓋で頂部平坦面をよけて直下に帯状に回転へら削りを加える。６世紀末葉ないしは７世紀初頭に比定出来る（大久保）

ＳＨⅢ49（第204・427図　図版162　ＳＨ8704）

Ｈ８区で検出した。第４微高地中央部に位置するが，他の竪穴住居との間隔がかなりある。北西部１／３以上を野井戸に破壊され，また著しい削平を受けて残存深は約0.04mと遺存状態は良くない。平面形は方形で，東西辺がやや長い。長軸6.1m，短軸4.9mを測る。主軸方位はＮ20°Ｗ，面積は29.9㎡と，当該期の竪



第204図　ＳＨⅢ49 平・断面図

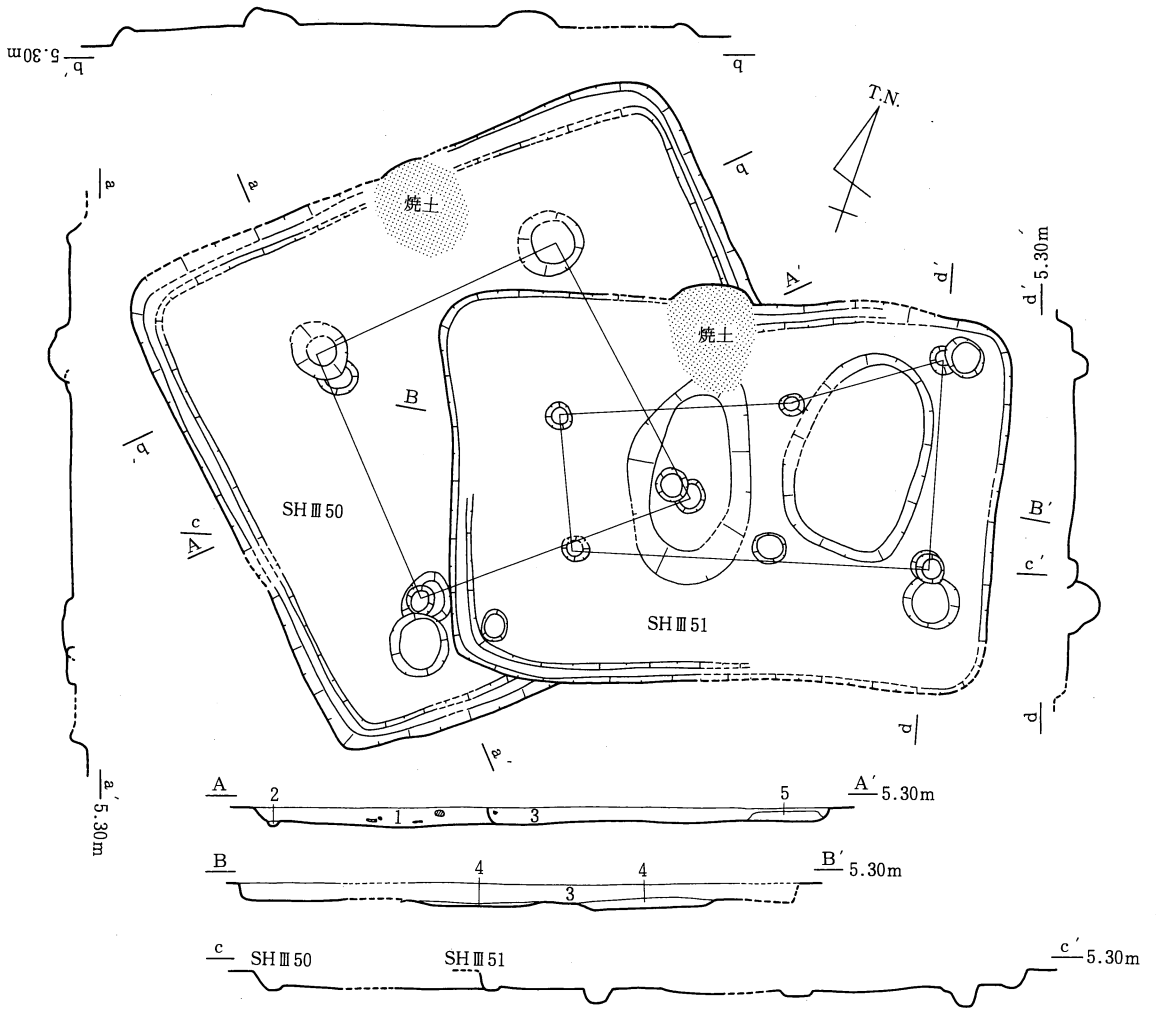
穴住居中では平均よりやや大きい。大部分を破壊されているが北辺中央部に造り付け竈を持ち，平面楕円形に浅く炉床が窪み，焼土片が堆積していた。主柱穴は４本で，かなり内よりに配される。壁溝はほぼ全周するようである。

（第427図27）は須恵器杯蓋口縁部片，（28）は瑳口縁部ないしは無蓋高杯杯部片であろう。以上の資料に限られるため時期の特定が困難であるが６世紀後葉から７世紀前葉の幅で捉えることが出来る。

（大久保）

ＳＨⅢ50（第205・428図　図版140・163　ＳＨ8713）

Ｅ・Ｆ８区で検出した竪穴住居址である。南には隣接してＳＨⅢ52が位置する。ＳＨⅢ51とは切り合い関係にあり，この住居址はＳＨⅢ51に切られている。なお，この住居址は後世の削平と柱穴の切り込みにより残りがかなり悪い。平面形は隅丸方形を呈し長軸4.6m，短軸4.3m，残存深0.12mを測る。主軸の方位はＮ43°Ｗを測る。面積は19.3㎡で，当該期の竪穴住居址の中では平均的な規模である。内部構造としては，北西辺の中央部に作り付けの竈を備えている。主柱穴は４柱穴確認できた。また，主柱穴に隣接して複数の柱穴が確認され，建て替えが行なわれた可能性がある。壁溝は部分的に４辺で確認さ



1. 暗茶褐色土（ベースブロックを含む）
2. １に類似（やや暗い）
3. 暗灰褐色砂質土
4. ２に類似（やや暗い）
5. 焼土

第205図　SHⅢ50・51 平・断面図

れ，本来は全周を巡っていたものと考えられる。

ＳＨⅢ50より出土した土器として，最大図化できるもの14点を抽出した。（第428図１～６）は中位の埋土中より出土した土器である。（第428図１・２）は土師器の甕の上半部及び口縁部である。口縁部は「く」字状に外反し端部は僅かに肥厚し平坦に仕上げる。（４）は土師器甕の把手である。（第428図５）は土師器台付皿の高台部である。（６）は須恵器の坏身の口縁部である。

（第428図７～14）は上位の埋土中より出土した土器である。（７・８）は土師器の甕口縁部である。（10・11）は土師器竈片である。（12～14）は須恵器の坏身の口縁部である。

ＳＨⅢ50の時期は床面直上の資料が得れなかったため，時代を特定するのは比較的困難であるが，出土遺物中の土師器の特徴より６世紀後葉～７世紀前葉と考えたい。（西村）

ＳＨⅢ51（第205・428図　図版140・163　ＳＨ8714）

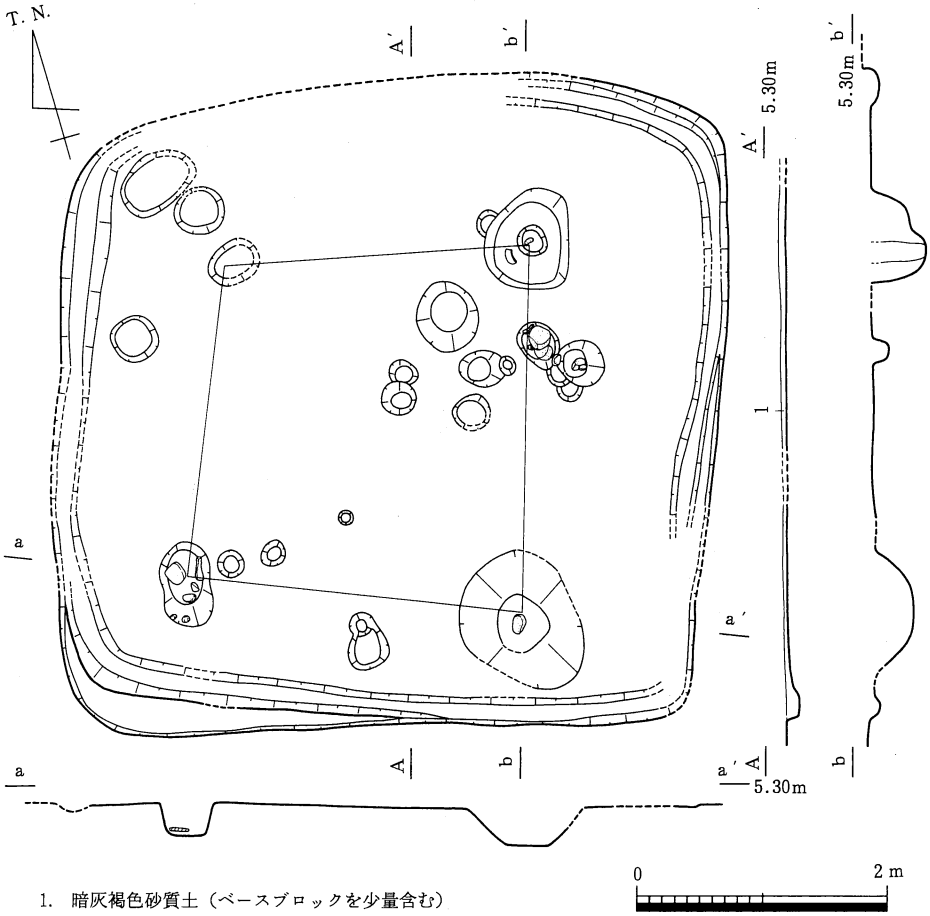
Ｅ・Ｆ８区で検出した竪穴住居址である。南には隣接してＳＨⅢ52が位置する。ＳＨⅢ50とＳＫⅢ52と切り合い関係にあり，ＳＨⅢ50を切り，ＳＫⅢ52には切られている。なお，この住居址はＳＨⅢ50同様後世の削平と柱穴の切り込みにより残りがかなり悪い。平面形は隅丸長方形を呈し長軸4.3ｍ，短軸3.0ｍ，残存深0.16ｍを測る。主軸の方位はＮ18°Ｗを測る。面積は13.0㎡で，当該期の竪穴住居址の中では平均的な規模である。内部構造としては，北辺の中央部に作り付けの竈を備えている。主柱穴は６柱穴確認できた。壁溝は東辺を除く３辺に部分的に検出できた。

床面直上より出土した土器として，最大図化できるもの８点を抽出した。（第428図15）は土師器の甕の口縁部である。（17）は土師質の蛸壺である。（18）は須恵器の坏蓋である。天井部中央部につまみを持ち内面に返りを有する，蓋と身の逆転直後の資料である。（19・20）は須恵器の高杯脚部である。(21･22)は須恵器の提瓶あるいは平瓶の口縁部である。

ＳＨⅢ51の時期は，須恵器の特徴より７世紀前葉に当る。（西村）

ＳＨⅢ52（第206・428図　図版140・163　ＳＨ8715）

Ｆ７区で検出した竪穴住居址である。北には隣接してＳＨⅢ50・51が位置する。ＳＫⅢ52・ＳＤ



第206図　SHⅢ52 平・断面図

Ⅲ95と切り合い関係にあり，ＳＤⅢ95を切り，ＳＫⅢ52に切られている。なお，この住居址は後世の削平と柱穴の切り込みにより残りがかなり悪い。平面形は隅丸方形を呈し長軸5.2m，短軸5.1m，残存深0.06mを測る。主軸の方位はN20°Wを測る。面積は26.0㎡で，当該期の竪穴住居址の中では平均的な規模である。内部構造としては主柱穴と壁溝の存在が明らかになった。主柱穴は４柱穴と推定できるが，後世の土坑の切り込みにより，３柱穴しか検出できなかった。また壁溝は４辺をめぐるが，北西隅では住居址掘方ラインと，壁溝との間に僅かなずれを見出せる。そのため，この住居址は建て替えが行なわれた可能性がある。

床面直上より出土した土器として，最大図化できるもの11点を抽出した。（第428図23～26）は土師器の甕の口縁部である。（27・28）は土師器の坏である。口縁端部内面は平坦に仕上げ稜を持つ。（29・31）は須恵器の坏である。（29）は須恵器のつまみの付く坏蓋である。この資料は混入の可能性がある。（30）は須恵器の高杯脚部である。（32）は須恵器の椀である。体部外面に２条のの沈線を持つ。

ＳＨⅢ52の時期は，須恵器及び土師器の特徴より７世紀前葉でも比較的古い段階に当るであろう。

（西村）

ＳＨⅢ53（第207・429図　図版140・164　ＳＨ8712）

Ｅ７・８区で検出した竪穴住居址である。この住居址は後世の削平と柱穴の切り込みにより残りがかなり悪い。ＳＫⅢ57と切り合い関係にあり，同土坑により切られている。平面形は四辺が僅かに張り気味な方形を呈する。長軸4.8m，短軸4.1m，残存深0.10mを測る。主軸の方位はN17°Wを測る。面積は19.8㎡で，当該期の竪穴住居址の中では平均的な規模である。内部構造としては，北辺の中央部に作り付けの竈を備えている。この住居址は建て替えが行なわれていて，貼り床をかいして床面が２面確認できた。主柱穴は１・２次面伴に４主柱穴確認できた。壁溝は２次住居（新）に伴い，全周をめぐる。なお，住居外には，付属施設と考えられる円形の周溝（ＳＤⅢ128）がめぐる。

床面直上より出土した土器として，最大図化できるもの10点を抽出した。（第429図１）は土師器の甕の口縁部である。（２）は土師器の坏である。（３・４）は土師器の皿である。（５・６・８）は須恵器の坏である。（５・６）は坏身（８）は坏蓋である。（９・10）は須恵器の甕の口縁部である。

ＳＨⅢ53の資料は土師器及び須恵器の資料間で時期差があるが，土師器の特徴よりＳＨⅢ53の時期は７世紀前葉に当るであろう。　（西村）

ＳＨⅢ54（第429図　ＳＨ8702）

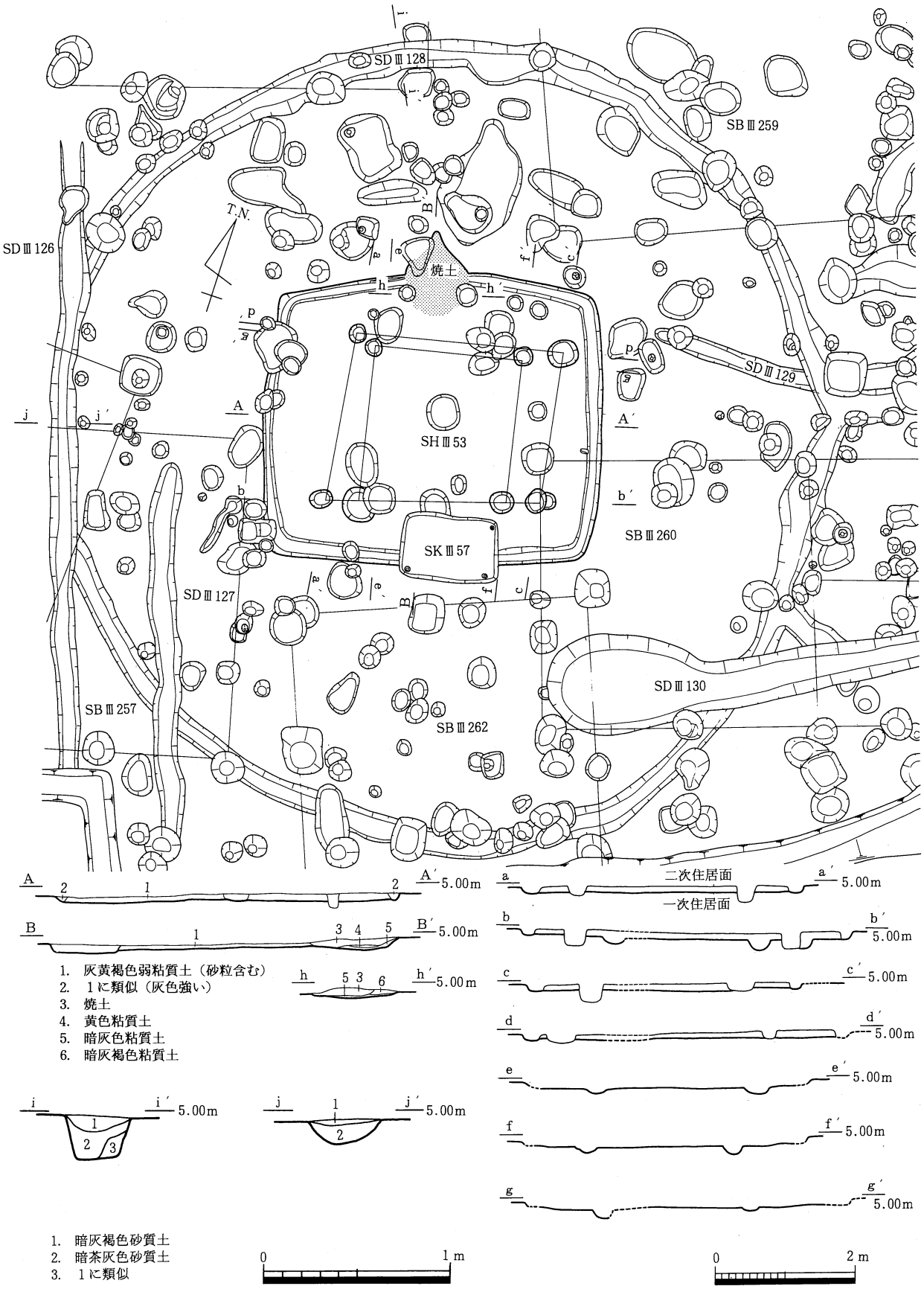
第４微高地の南部，F・G７区で検出した竪穴住居で，残存上は悪く，壁溝のみを検出した。後世の掘立柱建物の柱穴で切られており，竈や主柱穴は確認できなかった。残存する壁溝からほぼ正方形を呈すると考えられ，長軸5.1m以上，短軸5.3mを，また主軸の方位は真北方位を示す。推定面積は26.0㎡を測る。

（第429図11～15）は床面直上から出土した遺物で，（11）は土師器の中型の甕で，頸部のくびれが少なく，外面は刷毛調整，体部内面はナデ調整である。胴部最大径が下位にくるものと考えられる。（12～15）は須恵器の杯である。　（藤好）

ＳＨⅢ55（第208・429図　図版165　ＳＨ8701）

第４微高地の東南部，Ｅ７区で検出した竪穴住居で，ＳＤⅢ151とＳＫⅢ60に切られる。ほぼ正方形を呈し，長軸4.4m，短軸4.0m，残存深約0.12mを，また主軸の方位はＮ８°Wを測る。面積は17.3㎡で平均的な規模のものである。

内部構造としては，北辺の中央部に作り付けの竈を有し，主柱穴は４穴である。東辺を除き壁溝が認



第207図　SHⅢ53，SDⅢ128 平・断面図

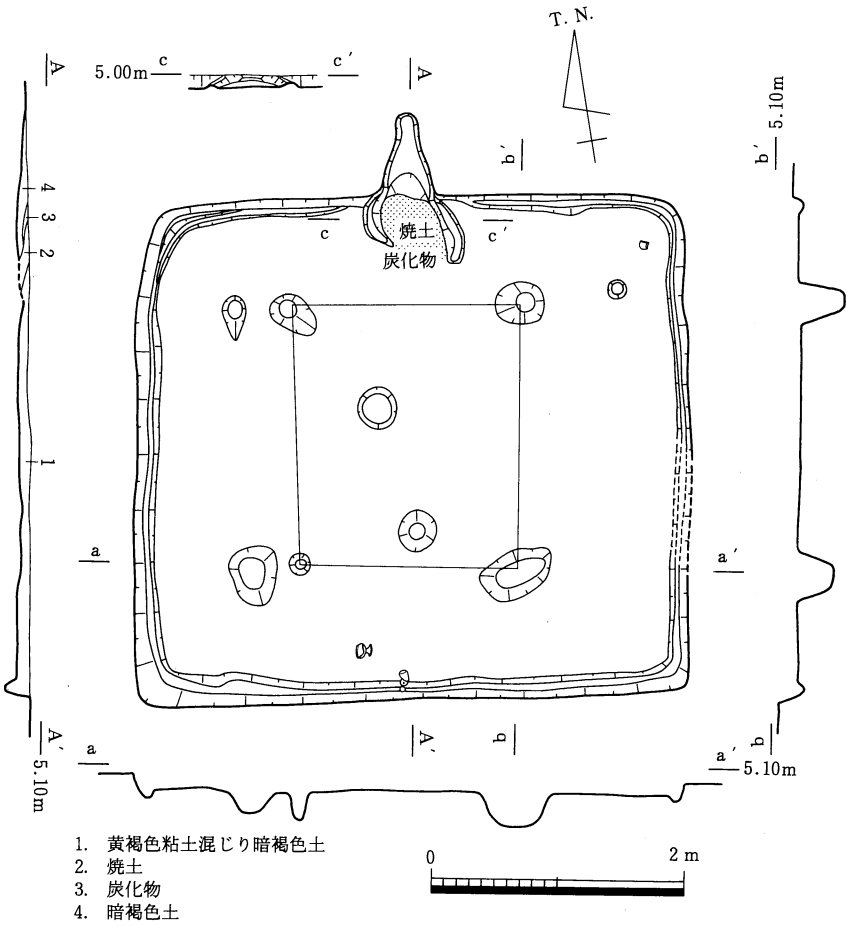
められる。出土遺物としては，南壁寄りの部位から蛸壺が出土している。

（第429図16～22）は概ね床面直上から出土した遺物で（16・17）は鉢か，（18）は口縁外面に平行叩きを施す製塩土器，（19・20）は蛸壺。（21・22）は須恵器杯と高杯である。（藤好）

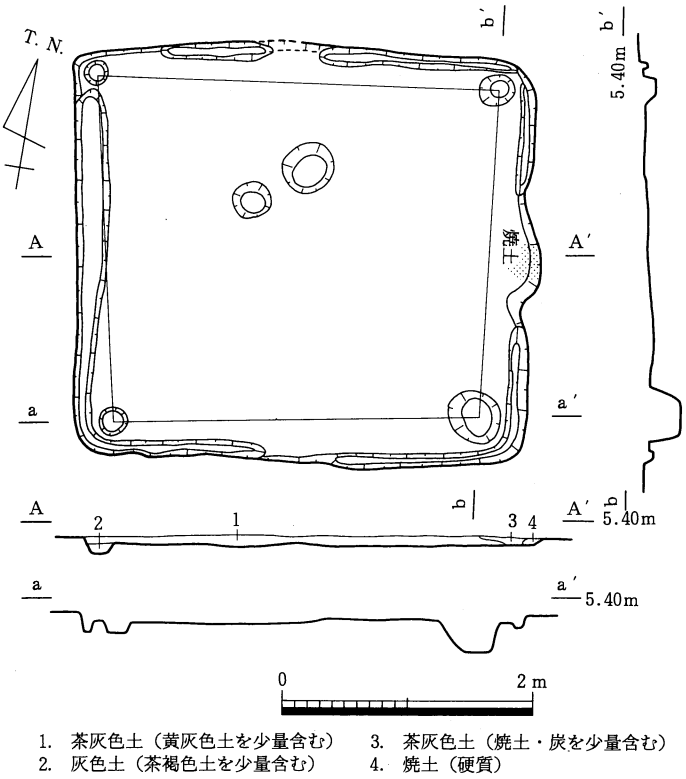
ＳＨⅢ56（第209・429図　図版166　ＳＨ8703）

Ｈ６区で検出した。第４微高地中央部に位置するが，他の竪穴住居群とはかなり距離がある。弥生時代後期の溝ＳＤⅡ23を切って造られる。平面形は正方形に近いが僅かに東西辺が長い。長軸3.7ｍ，短軸3.3ｍを測り，主軸方位はＮ10°Ｗ，面積は11.9㎡で，当該期の竪穴住居中では小形である。残存深は約0.1ｍを測る。東辺中央部に煙道部張り出しの弱い造り付け竈を持つ。主柱穴は４本で，竪穴四隅にほぼ接して配される。壁溝はほぼ全周するが，北側二隅の主柱穴部分などで途切れる。本住居のように竈を東辺に設ける例は第四微高地では類例が無い。位置的に同時期の住居群とはやや距離を置くことと合わせて注意すべき点である。

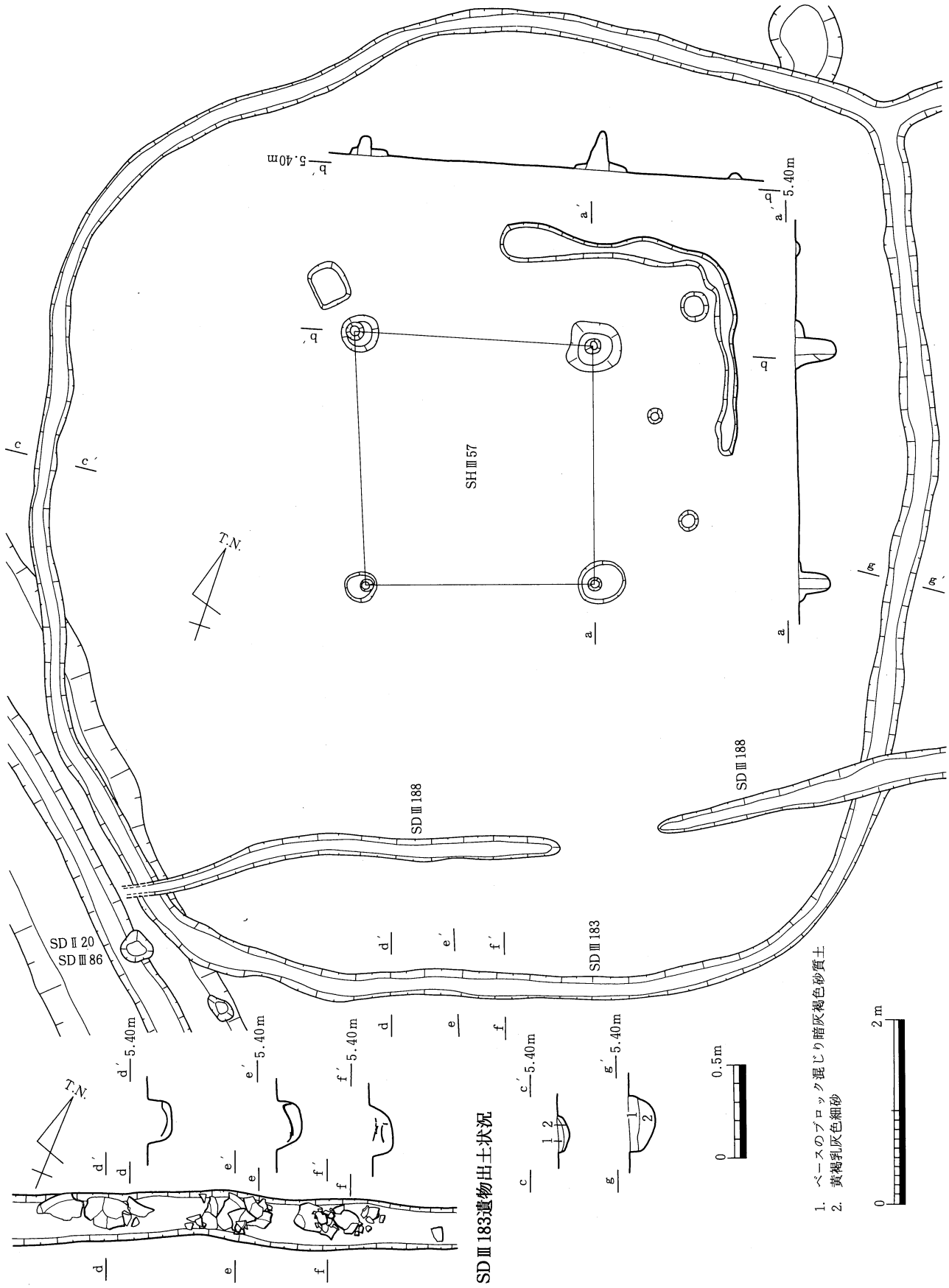
床面および覆土中で検出した遺物の大部分が重複する弥生後期の溝ＳＤⅡ23に関連するもので本住居に伴う資料は殆ど無い。（第429図23・24）は弥生後期の甕で本住居とは関係無い。（25）は土師器甕ないしは甑端部。（26・27）は土師器椀，（26）は口縁部内面を斜めに面取りする。（28）は小片であるが須恵器𤮋頸部片であろう。以上の資料では時期の特定が困難である。６



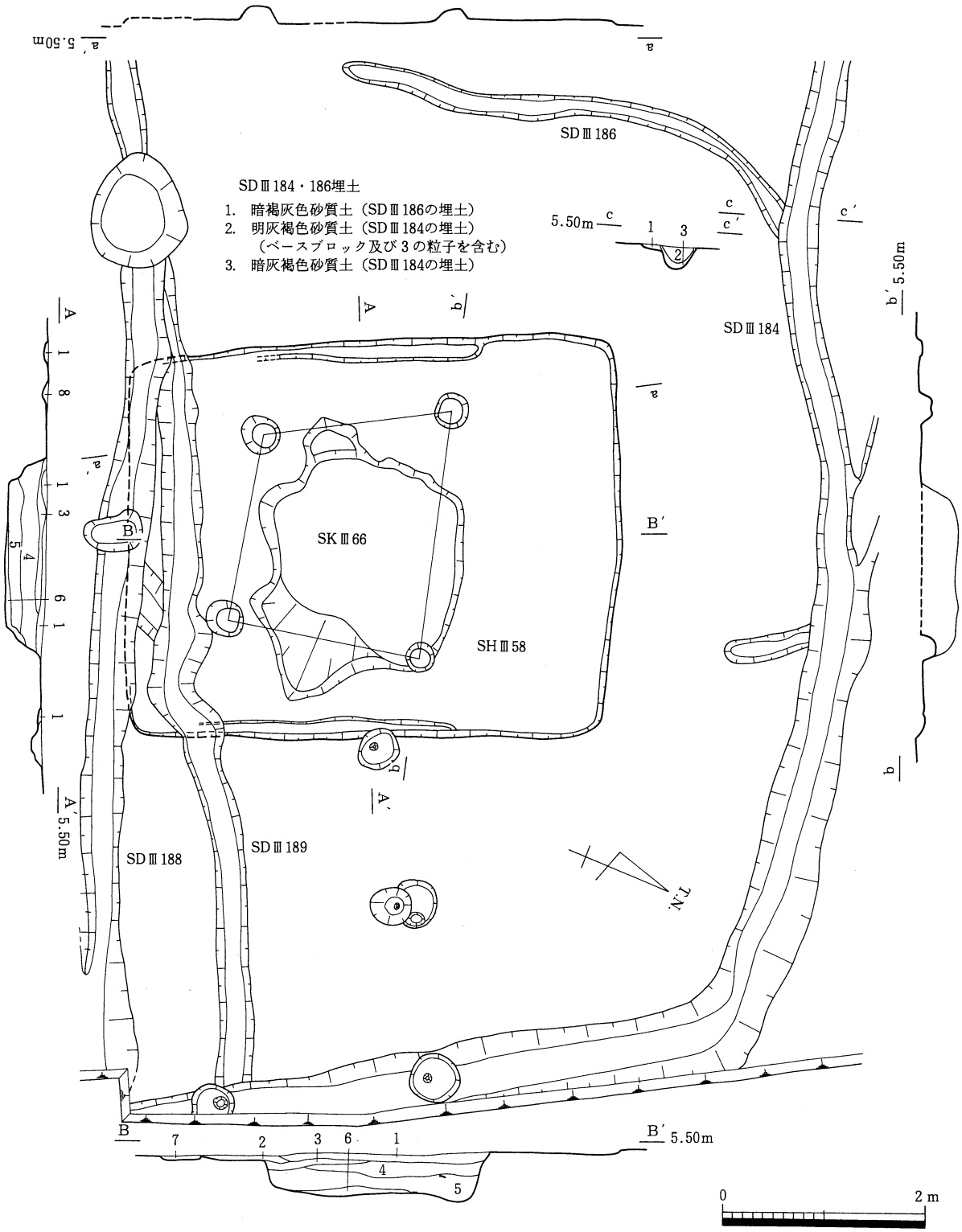
第208図　SHⅢ55 平・断面図



第209図　SHⅢ56 平・断面図



第210図　SH Ⅲ 57，SD Ⅲ 183 平・断面図



SHⅢ58・SKⅢ66埋土

1. 明灰褐色砂質土
2. 明灰黄褐色のベースのブロックが混ざる明灰褐色砂質土
3. 2に類似（2よりさらにベースブロックが多い）
4. 暗灰褐色シルト
5. 4に類似（ベースブロックを含む）
6. 暗灰褐色シルト（炭片と下部に焼土を含む）
7. 暗灰褐色砂質土（SDⅢ189の埋土）
8. 2に類似（2に比べベースブロックが多い）

第211図　SHⅢ58，SKⅢ66，SDⅢ184・186 平・断面図

世紀後葉から７世紀前半までの時間幅で捉えるしかない。（大久保）

ＳＨⅢ57（第210図　図版166）

Ｈ・Ｉ２区で検出した竪穴住居址である。東には隣接してＳＨⅢ58・59が位置する。この住居址は後世の削平により残りがかなり悪く，床面しか残っていなかった。平面形は不明瞭ながら隅丸方形を呈するものと思われる。長軸4.3m以上，短軸3.9m以上を測る。主軸の方位はＮ18°Ｗを測る。面積は27.4㎡で，当該期の竪穴住居址の中では平均的な規模である。内部構造として確認できたものは主柱穴と壁溝の一部である。主柱穴は４柱穴確認できた。壁溝は北辺で部分的に確認できた。また，住居外には，付属施設と考えられる円形の周溝（ＳＤⅢ183）がめぐる。

ＳＨⅢ57からは，須恵器及び土師器の細片が少量検出されただけで，時代を特定出来る資料は見出せなかったが，周辺部に所在するＳＨⅢ58・59等の主軸方位及び規模等類似する点が多く，ＳＨⅢ59はこれらの時期に近い竪穴住居址であろう。（西村）

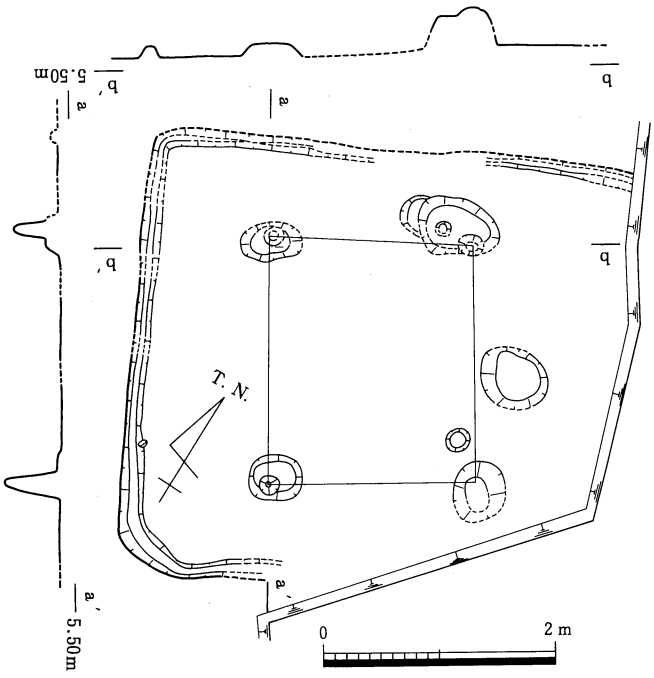
ＳＨⅢ58（第211・429図　図版167　ＳＨ8728）

Ｈ1・２区で検出した竪穴住居址である。この住居址は後世の削平により残りがかなり悪く，床面しか残っていなかった。周辺には隣接してＳＨⅢ57・59が位置する。ＳＫⅢ66，ＳＤⅢ188・189と切り合い関係にある。ＳＤⅢ188・189には切られている。ＳＫⅢ66は住居址のほぼ中央部分でＳＨⅢ58と切り合っているが，住居址の残りが悪いためその切り合いは，不明瞭であるがＳＨⅢ58が切っている可能性が高い。平面形は隅丸長方形状を呈し長軸4.9m，短軸3.9m，残存深0.06mを測る。主軸の方位はＮ23°Ｗを測る。面積は19.1㎡で，当該期の竪穴住居址の中では平均的な規模である。主柱穴は４柱穴確認できた。壁溝は東西辺に部分的に検出できた。また，住居外には，付属施設と考えられる周溝（ＳＤⅢ184・185）が北半部めぐる。　床面直上より出土した土器として，最大図化できるもの２点を抽出した。（第429図29）は土師器の甕の上半部である。（30）は須恵器の坏身である。

資料が少ないため，ＳＨⅢ58の時期を特定するのは比較的困難であるが，須恵器の特徴より６世紀末ないし７世紀初頭に当るであろう。（西村）

ＳＨⅢ59（第212図　図版167　ＳＨ8729）

Ｈ１区で検出した竪穴住居址である。この住居址は後世の削平により残りがかなり悪い。また東辺南辺は調査区外に当り，不明瞭な点が多い。周辺には隣接してＳＨⅢ57・58が位置する。ＳＤⅢ190・191・192・193等の溝と切り合い関係にあり，それらに切られている。平面形は隅丸方形を呈し，長軸3.9m以上，短軸3.8m以上を測る。主軸の方位はＮ28°Ｗを測る。面積は16.1㎡で，当該期の竪穴住居址の中では平均的な規模である。主柱穴は４柱穴を確認した。北の一部・東・南の一部に壁溝を確認した。また，不明瞭であるが貼り床の痕跡が認められた。



第212図　SHⅢ59 平・断面図

ＳＨⅢ59からは，須恵器及び土師器の細片

が少量検出されただけで，時代を特定出来る資料は見出せなかったが，周辺部に隣接するＳＨⅢ57・58等の主軸方位及び規模等類似する点が多く，ＳＨⅢ59はこれらの時期に近い７世紀初頭前後の竪穴住居址であろう。（西村）

3.掘立柱建物

ＳＢⅢ01（第221図　ＳＢ87120）

Ｈ30区で第Ⅲ期にも凹地として存続したＳＤⅢ01の南側斜面で検出した掘立柱建物である。ＳＢⅢ01と切り合う状況で検出した掘立柱建物である。１間（3.3m）×１間（2.1m），棟方向Ｎ10°Ｅを測る。等高線と直行する方向に棟方向を向ける。柱穴の掘り方は円形で径0.4m，深さ0.50mを測る。柱穴内には詰め石の礫が検出した。出土遺物はない。埋土は暗黄褐色砂質土である。図化し得るような遺物は出土していない。（藤好）

ＳＢⅢ03（第430図　ＳＢ87119）

Ｉ29区で，ＳＨⅢ02を切り，またＳＢⅢ07と切り合う状況で検出した掘立柱建物である。５間（12.0m）×１間（5.2m），棟方向Ｎ13°Ｗを測る。柱間は桁行2.3～2.8m・梁間5.2mを測る。柱穴掘り方は，隅丸方形方形を呈し，概ね柱根を確認した。掘り方は，径約0.6m，深さ0.45mを測る。梁間は桁行柱間の２間分に相当する。埋土は概ね暗黄灰色の砂質土である。柱穴からは，蛸壺・黒色土器・緑釉陶器等が出土している。

（第430図１）は大型の蛸壺で内外面指頭痕顕著。（２）は黒色土器椀のＡ類で，内面に暗文の痕跡が認められる。（３）は脚台杯の杯で，底部は薄い。（藤好）

ＳＢⅢ04（第220・430図　図版63　ＳＢ87116）

Ｉ・Ｊ28・29区でＳＢⅢ05と切り合う状況で検出した掘立柱建物である。５間（11.8m）×２間（4.5m），棟方向Ｎ11°Ｗを測る。柱間の平均は桁行2.2～2.7m・梁間2.2～2.3mを測る。柱穴掘り方は，不整円形を呈し径約0.7m，深さ約0.23mを測る。埋土は概ね灰褐色砂質土と暗褐色粘質土である。柱穴からは土師器杯黒色土器椀等が出土している。（第430図４）は黒色土器椀のＡ類，（５・６）は擬似高台の杯である。時期は出土遺物より11世紀代と考えられる。（藤好）

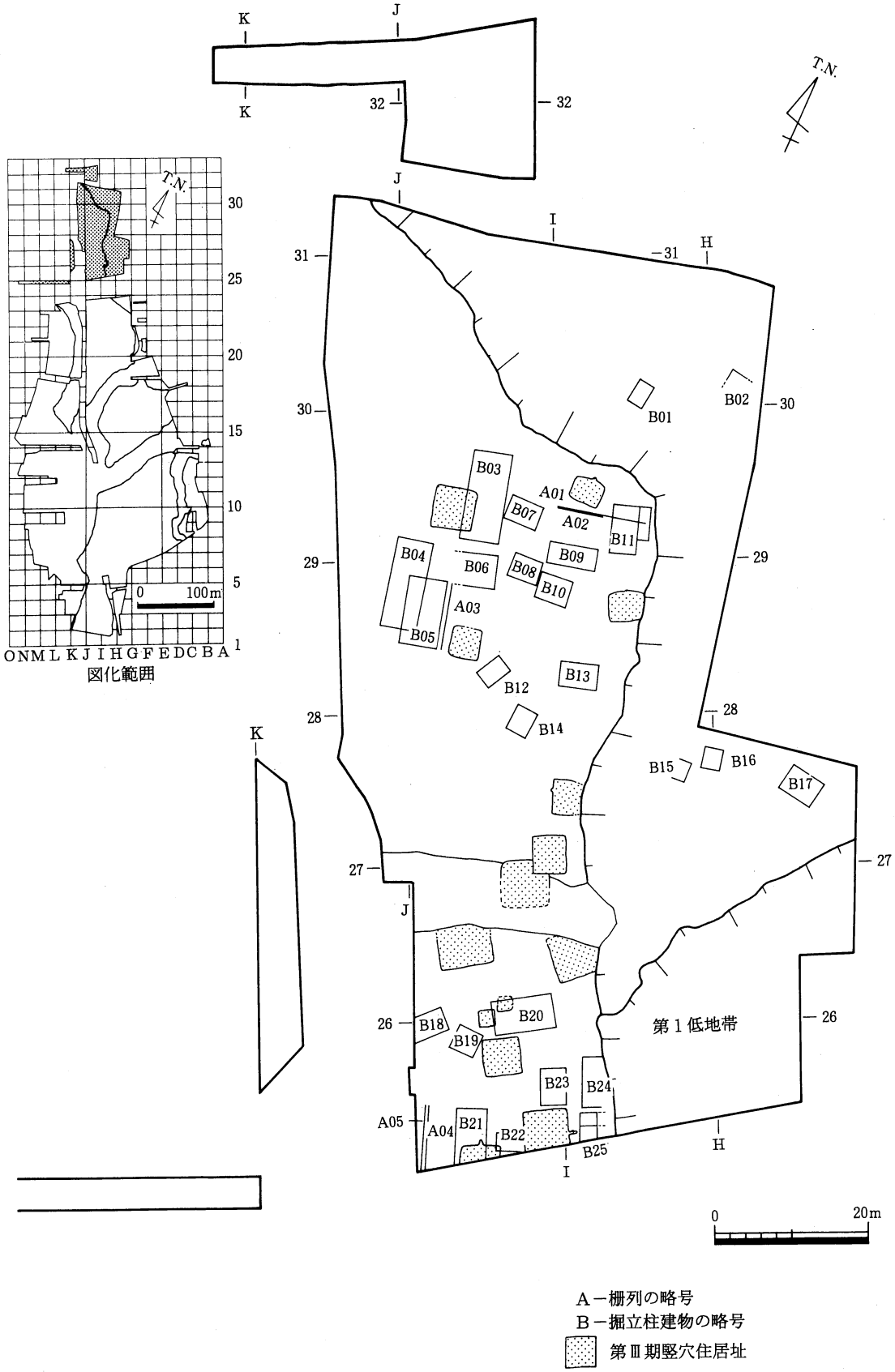
ＳＢⅢ05（第221・430図）

Ｉ・Ｊ28区でＳＢⅢ04と切り合う状況で検出した掘立柱建物である。４間（8.9m）×２間（5.0m），棟方向Ｎ13°Ｗを測る。柱間の平均は桁行2.0～2.4m・梁間1.7～3.3mを測る。柱穴掘り方は，不整円形を呈し径約0.6m，深さ約0.17mを測る。埋土は概ね灰色砂質土と暗褐色粘質土である。柱穴からは，土師器椀・黒色土器椀Ａ類・羽釜等が出土している。（第430図７）は羽釜で内傾する口縁部と体部中央よりやや下に鍔がつく。内外面に板ナデと指頭痕が認められる。（藤好）

ＳＢⅢ06（第430図）

Ｉ28区で検出した掘立柱建物である。２間（4.7m）以上×２間（4.7m），棟方向Ｎ88°Ｅを測る。柱間は桁行2.0～2.7m・梁間2.2～2.5mを測る。柱穴掘り方は，不整円形を呈し径約0.6m前後，深さ約0.34mを測る。柱穴からは，黒色土器椀Ａ類・緑釉陶器椀・土師器椀・皿等が出土した。

（第430図８）は緑釉陶器椀で，器壁は薄い。（９）は黒色土器椀Ａ類底部，（10～13）は擬似高台の杯で（11・12）は非常に薄い作りのものである。（藤好）



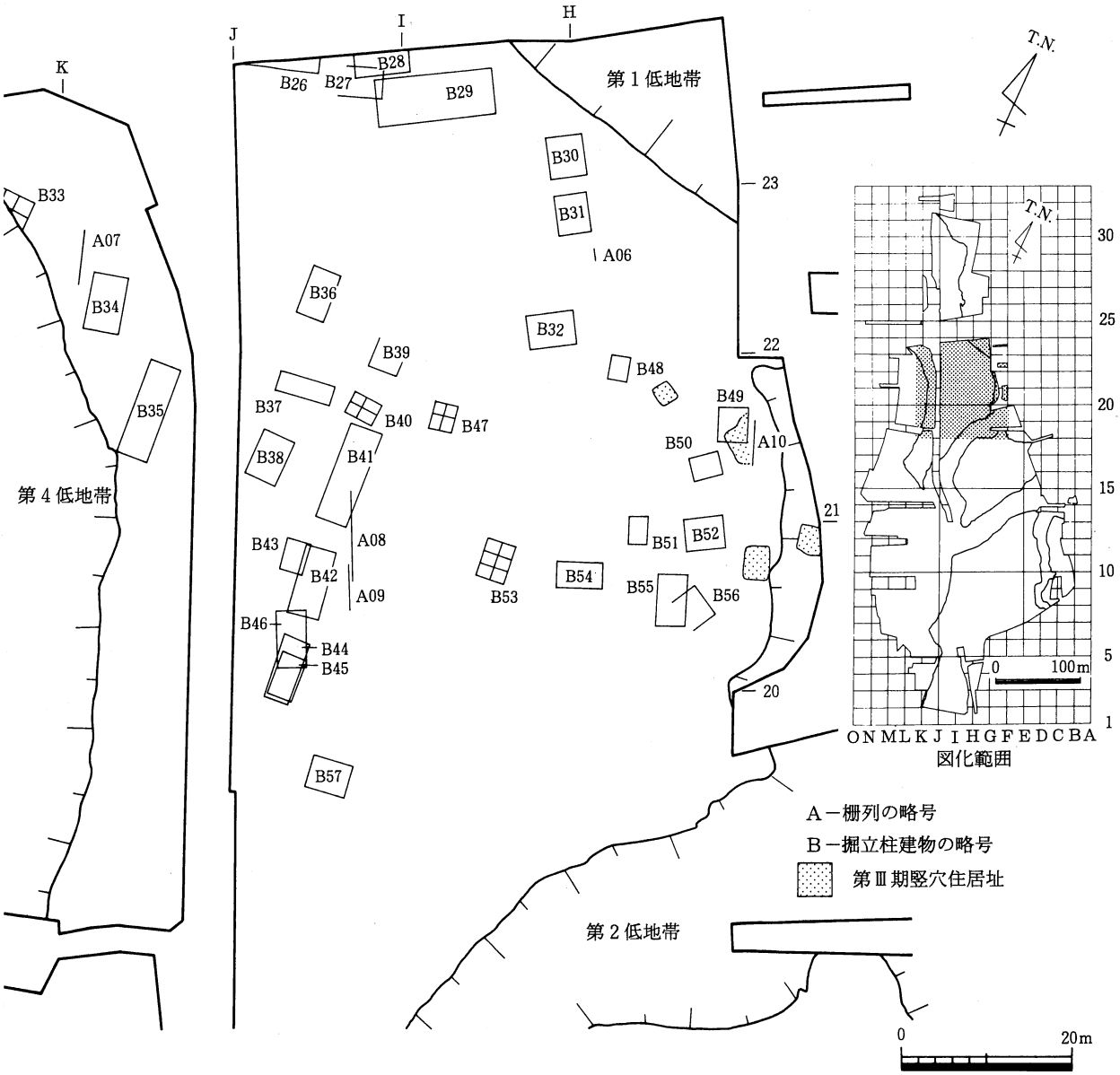
第213図　第1微高地北半部 第Ⅲ期掘立柱建物・柵列 配置図

ＳＢⅢ07（第221図　ＳＢ87121）

Ｉ29区で，ＳＢⅢ03と切り合いを持つ状況で検出した掘立柱建物である。２間(4.2m）×１間（3.2m），棟方向Ｎ90°Ｅを測る。柱間は桁行2.0～2.2m・梁間3.2mを測る。柱穴掘り方は，円形を呈し径約0.4m，深さ約0.44mを測る。埋土は，概ね暗褐色粘質土と黄褐色粘質土からなる。図化し得るような良好な遺物は出土していない。（藤好）

ＳＢⅢ08（第222図　図版64　ＳＢ87118）

Ｉ28・29区でＳＢⅢ10に切られた状況で検出した掘立柱建物である。２間（3.8m）×２間（3.1m），棟方向Ｎ90°Ｗを測る。柱間は桁行1.8～2.0m・梁間1.5～1.6mを測る。柱穴掘り方は，不整円形を呈し径約0.6m，深さ約0.32mを測る。埋土は地山土を含む暗褐色系の土である。図化し得るような良好な遺物は出土していないが，瓦質土器及び白磁の細片が出土している。（藤好）

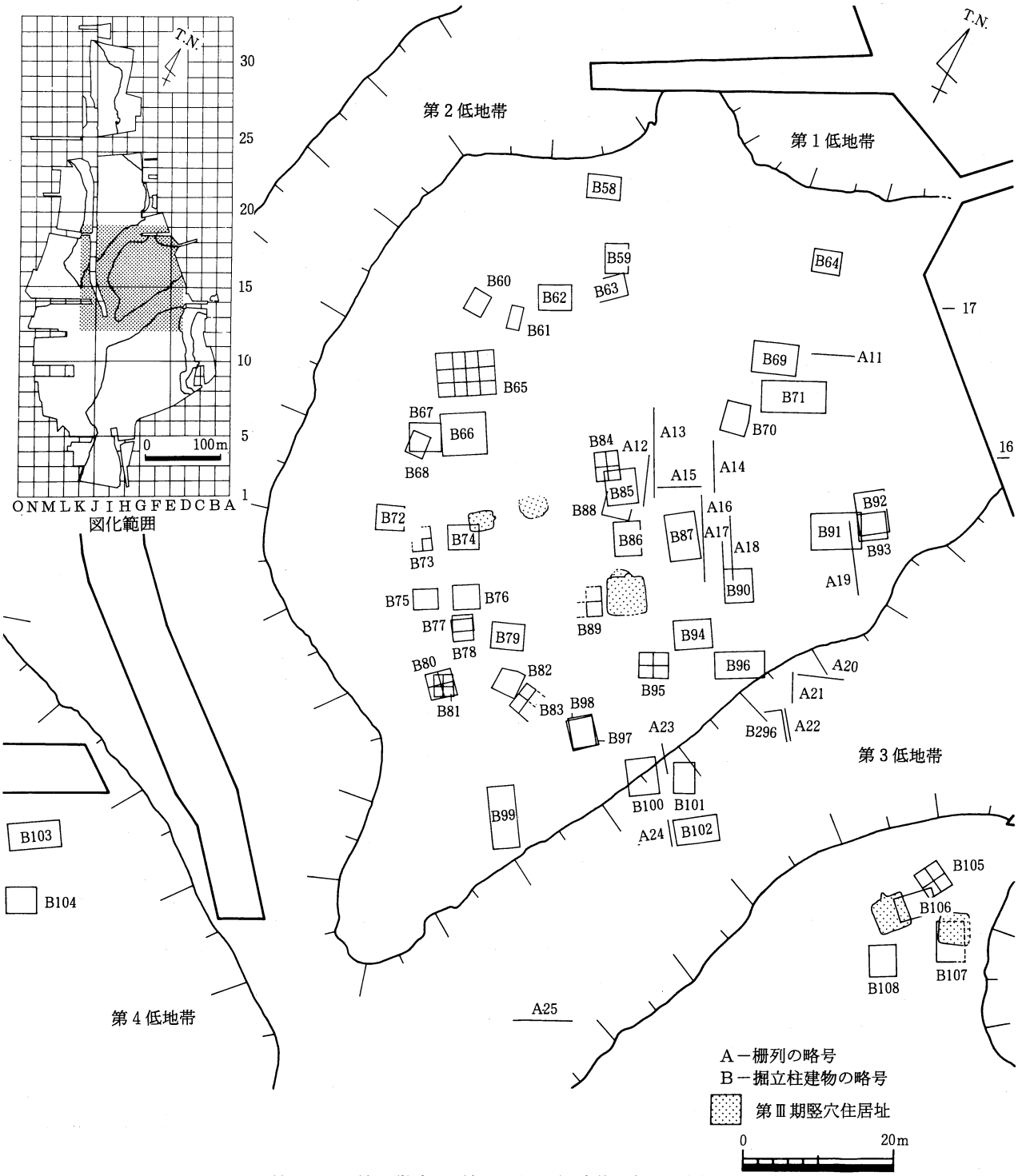


第214図　第１微高地南半部 第Ⅲ期掘立柱建物・柵列 配置図

ＳＢⅢ09（第222・430図）

Ｈ・Ｉ28・29区で検出した掘立柱建物である。３間（6.3m）×１間（2.9m），棟方向Ｎ79°Ｅを測る。柱間は桁行2.0～2.2m・梁間2.9mを測る。柱穴掘り方は，円形を呈し径約0.4m，深さ約0.05～0.22mを測る。埋土は暗黄褐色系の土である。柱穴からは，弥生土器・土師器杯・鞴の羽口片等が出土している。

（第430図14）は擬似高台の杯の底部である。（藤好）



第215図　第２微高地 第Ⅲ期掘立柱建物・柵列 配置図

ＳＢⅢ10（第222・430図）

Ｈ・Ｉ28区で検出した掘立柱建物でＳＢⅢ08を切る。３間もしくは２間（4.2m）×２間（3.5m），棟方向Ｎ86°Ｅを測る。柱間は桁行1.1～1.8m・梁間1.6～1.9mを測る。柱穴掘り方は，円形を呈し径約0.6m，深さ0.05～0.23mを測る。埋土は暗黄褐色系の土である。柱穴からは，土師器杯片等が出土している。

（第430図15）は羽釜の鍔である。（藤好）

ＳＢⅢ11（第223・430図）

Ｈ29区でＳＡⅢ01と切り合う状況で検出した掘立柱建物である。３間（6.5m）×１間（3.4m），棟方向Ｎ17°Ｗを測る。柱間は桁行2.1～2.2m・梁間3.4mを測る。東桁側に廂を持つ可能性がある。柱穴掘り方は，不整円形を呈し径約0.4m，深さ約0.20mを測る。柱穴からは，土師器椀片等が出土している。埋土は暗褐色系の土である。

（第430図16）は土師器の杯で器壁は比較的薄い。（藤好）

ＳＢⅢ12（第430図）

Ｉ28区でＳＢⅢ02と切り合い関係を持つ掘立柱建物である。１間（3.9m）×１間（2.5m），棟方向Ｎ31°Ｅを測る。柱間は約，桁行3.9m・梁間2.5mを測る。柱穴掘り方は，円形を呈し径約0.6m，深さ0.07～0.32mを測る。埋土は灰褐色系の土である。

（第430図17）は内外面にカン入が認められる青磁椀である。（藤好）

ＳＢⅢ13（第430図）

Ｈ28区でＳＤⅢ02に切られる掘立柱建物である。南北の側柱列の柱穴の整合性にやや欠けるが，４間（5.0m）×２間（3.5m），棟方向Ｎ75°Ｅを測る。柱間は桁行1.2～3.8m・梁間0.9～1.5mを測る。柱穴掘り方は，不整円形を呈し径約0.4m，深さ0.08～0.20mを測る。柱穴からは，須恵器杯底部が出土している。埋土は灰褐色系の土である。

（第430図18）は須恵器の杯で底部はヘラ切りである。時期は，出土遺物が混入でなければ６世紀後半にあたる。（藤好）

ＳＢⅢ14（第223・430図　ＳＢＮＢ10）

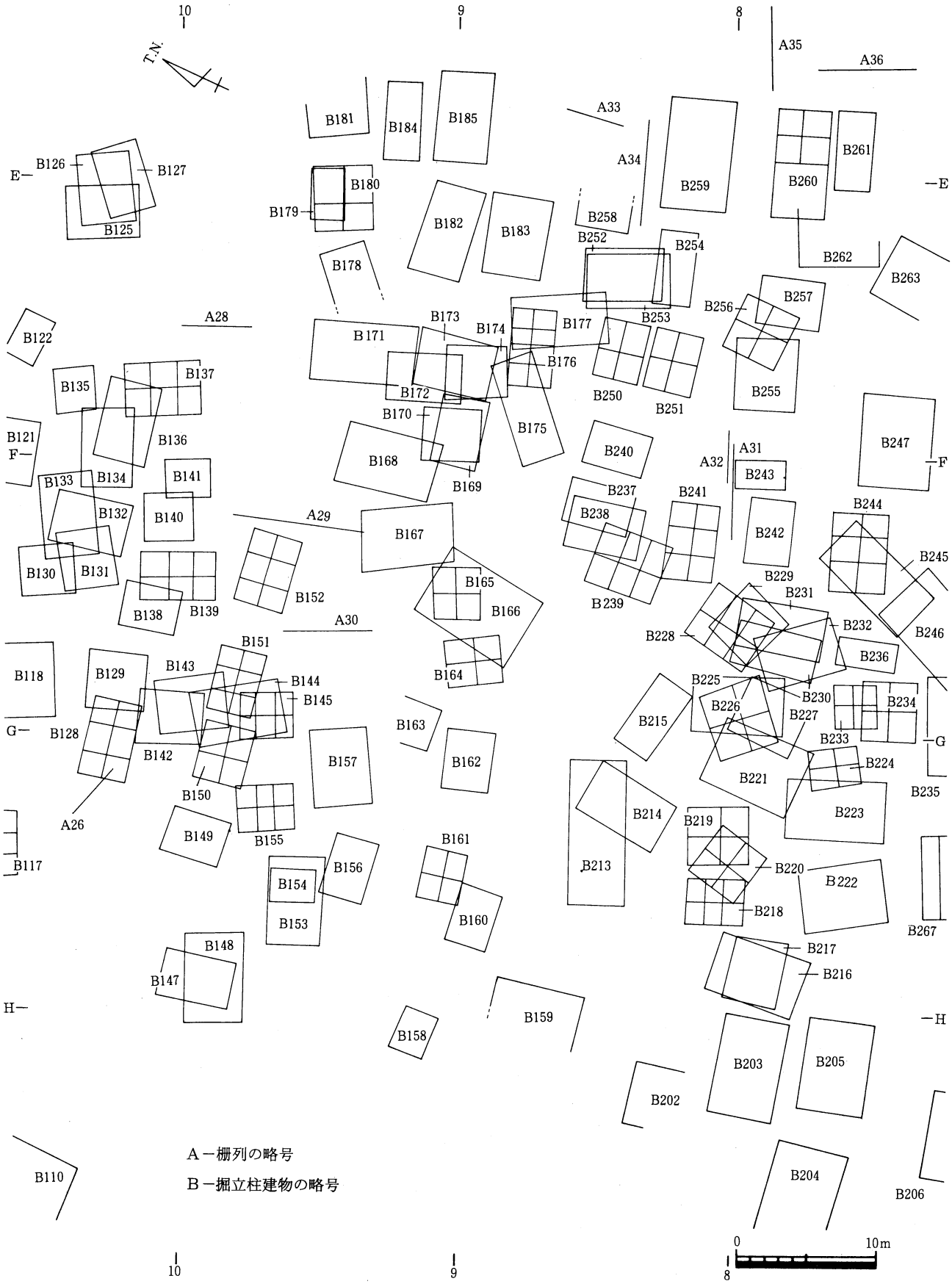
Ｉ27区で検出した掘立柱建物である。２間（3.4m）×２間（2.8m），棟方向Ｎ５°Ｅを測る。柱間は約，桁行1.7m・梁間1.3～1.5mを測る。柱穴掘り方は，不整円形を呈し径約0.5m，深さ約0.36mを測る。埋土は暗褐色系の粘質土である。土師器甕片等が出土している。

（第430図19）は土師器の中型の甕の口縁である。口縁部の内外面に暗文状のヘラ磨きが認められる。遺物が小片のため，時期確定要素となるか判断がつかないが，上限として６世紀後半としておく（藤好）

ＳＢⅢ17（223・430図　図版64　ＳＢＮＥ01）

第１低地帯流路２の北側の平坦部，Ｇ27区で検出した掘立柱建物である。４間（4.9m）×２間（3.9m），棟方向Ｎ78°Ｗを測る。柱間は桁行1.5～1.7m・梁間1.9～2.0mを測る。柱穴掘り方は，不整円形を呈し径約0.7m，深さ約0.44mを測る。弥生時代の遺物包含層に掘り込まれているため出土遺物には弥生時代の土器片が多いが，埋土は奈良時代以降のグライ化したシルト土壌を含んでいることから，時期的には少なくとも奈良時代以降から平安時代前半期の所産である可能性が高い。

（第430図20）は土師質の土器の口縁で端部は台形状に面取りする。器形は小片のため器形は不明確である。（藤好）



第216図　Ｇ９区周辺 第Ⅲ期掘立柱建物・柵列詳細 配置図

第217図　第4微高地 第Ⅲ期掘立柱建物・柵列 配置図

ＳＢⅢ18（第224・430図）

Ｉ25・26区で検出した掘立柱建物で，ＳＨⅡ10を切る。２間（3.4m）以上×２間（2.9m）棟方向Ｎ45°Ｅを測る。柱間は桁行1.5～1.9m・梁間0.8～1.2mを測る。柱穴掘り方は，円形で，埋土は暗褐色系の土である。柱穴からは，須恵器杯蓋が出土している。

（第430図21）は宝珠つまみがつく杯蓋である。時期は出土遺物からすれば，７世紀前半期とすることができよう。（藤好）

ＳＢⅢ19（第224図　ＳＢＮＡ15）

Ｉ25区で検出した掘立柱建物である。２間（3.4m）×１間（3.3m），棟方向Ｎ88°Ｗを測る。柱間は桁行1.6～1.8m・梁間3.3mを測る。柱穴掘り方は，円形を呈し径約0.4m，深さ約0.27mを測る。埋土は暗褐色ないし灰褐色系の砂質土である。柱穴からは，弥生時代の土器小片が出土しており，梁間１間であること方位的な類似性から第Ⅱ期の所産の可能性も考えられる。（藤好）

ＳＢⅢ20（第224・430図　ＳＢＮＡ14）

Ｉ25区でＳＨⅢ11と切り合う状況で検出した掘立柱建物である。４間（8.0m）×２間（4.4m），棟方向Ｎ59°Ｅを測る。柱間は桁行1.5～2.5m・梁間1.9～2.5mを測る。柱穴掘り方は，隅丸方形を呈し径約0.8m，深さ約0.50mを測る。柱穴からは，土師器の甕片が出土している。時期は出土遺物より６世紀後半から７世紀にあたる。（藤好）

ＳＢⅢ21（第224・430図　図版65　ＳＢＮＡ18）

Ｉ25区でＳＨⅢ13を切る掘立柱建物である。４間（7.1m）以上×２間（4.0m），棟方向Ｎ21°Ｗを測る。柱間は桁行1.3～2.2m・梁間2.0mを測る。柱穴掘り方は，不整円形を呈し径約0.7m，深さ約0.41mを測る。柱穴からは，土師器の椀が出土している。時期は出土遺物より７世紀代にあたる。（藤好）

ＳＢⅢ22（第430図）

Ｉ25区でＳＨⅢ13を切る掘立柱建物である。２間（2.9m）以上×１間（2.3m），棟方向Ｎ72°Ｅを測る。柱間は桁行1.3～1.6m・梁間2.3mを測る。柱穴掘り方は，円形を呈し径約0.5m，深さ約0.32mを測る。埋土は暗褐色系の砂質土である。柱穴からは，黒色土器椀A類等が出土している。方位的な共通性かすれば，第１低地帯沿いに南北に走るＳＤⅢ03と同時併存の建物と考えられる。時期は出土遺物より11世紀にあたる。（藤好）

ＳＢⅢ23（第225図　図版65・66　ＳＢＮＡ16）

Ｉ25区で検出した掘立柱建物である。３間（4.5m）×２間（3.3m），棟方向Ｎ23°Ｗを測る。柱間は桁行1.4～1.6m・梁間1.5～1.8mを測る。柱穴掘り方は，不整円形を呈し径約0.7m，深さ約0.30mを測る。柱穴からは，土師器の細片が出土している。（藤好）

ＳＢⅢ24（第225図　ＳＢＮＡ17）

Ｈ25区でＳＤⅢ03と切り合う状況で検出した掘立柱建物である。４間（6.6m）×２間（1.8m）以上，棟方向Ｎ22°Ｗを測る。柱間は桁行1.3～2.0m・梁間1.8mを測る。柱穴掘り方は，円形を呈し，径約0.6m，深さ約0.27mを測る。埋土は暗褐色系の砂質土である。柱穴からは，内面に同心円文のある須恵器甕片が出土している。（藤好）

ＳＢⅢ25（第225・430図）

Ｈ25区でＳＢⅢ24の南接して検出した掘立柱建物である。２間（3.5m）以上×１間（2.0m），棟方向Ｎ22°Ｗを測る。柱間は桁行1.7～1.8m・梁間2.0mを測る。柱穴掘り方は，円形を呈し，径約0.8m，深

さ約0.35mを測る東側柱列北第２穴がやや小型のものであることから，総柱の建物の一部分である可能性が高い。埋土は暗褐色ないし灰褐色系の砂質土である。須恵器の杯が出土している。時期は出土遺物から６世紀後半ないし７世紀前半と考えられる。（藤好）

ＳＢⅢ26（第225・430図　ＳＢＳＡ04）

Ｉ22区で検出した掘立柱建物である。５間（8.9m）×１間（1.9m）以上，棟方向N74°Ｅを測る。柱間は桁行1.7～2.0m・梁間1.9mを測る。柱穴掘り方は，隅丸方形を呈し，径約0.8m，深さ0.07～0.20mを測る。北側の大半は調査区外へ延びる。柱穴から，須恵器の高杯の脚部と蛸壺片等が出土している。時期は出土遺物から７世紀前半とと考えられる。（藤好）

ＳＢⅢ27

Ｉ23区で検出した掘立柱建物で，ＳＢⅢ28・29と切り合う。２間（4.3m）以上×１間（3.6m），棟方向N72°Ｅを測る。柱間は桁行2.0～2.3m・梁間3.6mを測る。柱穴掘り方は，円形を呈し，径約0.3m，深さ約0.18mを測る小型のものである。（藤好）

ＳＢⅢ28（第226図　ＳＢＳＡ02）

Ｈ・Ｉ23区で検出した掘立柱建物で，ＳＢⅢ27・29と切り合い関係を有し，ＳＢⅢ29より先行する。４間（6.4m）×１間（1.7m）以上，棟方向N61°Ｅを測る。柱間は桁行1.4～1.9m・梁間1.7mを測る柱穴掘り方は，隅丸方形を呈し，径約0.7m，深さ約0.15mを測る。時期は出土遺物から７世紀前半と考えられる。（藤好）

ＳＢⅢ29（第226図　ＳＢＳＡ01）

Ｈ・Ｉ23区で検出した掘立柱建物で，ＳＢⅢ27・28と切り合い関係を有し，ＳＢⅢ28より後出する。６間（13.6m）×３間（5.6m），棟方向N62°Ｅを測る。柱間は桁行2.0～3.0m・梁間1.7～2.1mを測る。検出した柱穴は掘り方が，小型のものが多いが，南側柱列東第３穴等に隅丸方形を呈するやや大型ものがあり，これが本来の形状であると考えられる。径約0.5m，深さ約0.14mを測る。暗褐色系の砂質土を埋土とする。時期は出土遺物から７世紀前半と考えられる。（藤好）

ＳＢⅢ30（第227・430図　図版67　ＳＢＳＡ05）

Ｈ22区で検出した掘立柱建物で平安時代の溝であるＳＤⅢ09に切られる。３間（5.0m）×３間（4.1m），棟方向N32°Ｗを測る。柱間は桁行1.5～1.7m・梁間1.3～1.５mを測る。柱穴掘り方は，概ね隅丸方形を呈し，径約0.8m，深さ約0.34mを測る。柱穴から６世紀後半から７世紀と考えられる土師器甕口縁が出土している。（藤好）

ＳＢⅢ31（第227・430図　図版67　ＳＢＳＡ09）

Ｈ22区で検出した掘立柱建物で，梁間こそ間数が異なるものの，規模方位ともよく類似し，同時併存と考えられる。３間（4.8m）×２間（3.7m），棟方向N33°Ｗを測る。柱間は桁行1.6～1.7m・梁間1.8～1.9mを測る。柱穴掘り方は，隅丸方形を呈し，径約0.8m，深さ約0.34mを測る。柱穴中から６世紀末から７世紀前半の須恵器の杯が出土している。（藤好）

ＳＢⅢ32（第227図　図版67　ＳＢＳＡ08）

Ｈ22区で検出した掘立柱建物で，ＳＤⅢ14・ＳＫⅣ03に切られる。３間（5.6m）×３間（4.1m），棟方向N59°Ｅを測る。柱間は桁行1.7～2.0m・梁間1.2～1.5mを測る。柱穴掘り方は，隅丸方形を呈し，径約0.8m，深さ約0.53mを測る。埋土は暗灰色砂質土である。本掘立柱建物は北に隣接するＳＢⅢ30・31と共通した方位を示し。その規模や柱穴形状も非常によく類似する。かつ本掘立柱建物の東辺とＳＢ

Ⅲ30・31の西辺はほぼ一直線上にのり，３棟は同時併存と考えられる。時期は３棟の関連からすれば，概ね６世紀末から７世紀初頭と考えられる。（藤好）

ＳＢⅢ33（第228・430図　図版68　ＳＢ8601）

Ｋ22区で検出した総柱建物である。南半分第４低地帯流路２により切られている。また，東側柱の柱穴は，８世紀前半のＳＤⅢ13を切り込んでいる。３間（5.3m）×２間（3.3m），棟方向N87°Wを測る柱間は桁行1.6～2.1m・梁間1.6～1.7mを測る。柱穴掘方は，楕円形及び不整円形を呈し径約0.8m，深さ0.38mを測る。埋土は灰褐色系の粘土で細分すれば３層に区分できる。また，全ての柱穴内には詰め石と凹みが確認された。

出土遺物として，土師器・須恵器片が少量出土している。出土遺物中図化出来るもの１点を抽出した。（第430図32）は７・８世紀代の須恵器坏身である。出土遺物と溝との切り合いより，この建物の時期は８世紀中葉以降であろう。（西村）

ＳＢⅢ34（第230・431図　図版68　ＳＢ8602）

Ｊ22区で検出した掘立柱建物である。南妻には棟持柱を検出したが，北妻では検出できなかった。４間（6.8m）×２間（3.8m），棟方向N11°Wを測る。柱間は桁行1.6～2.１m・梁間1.9mを測る。柱穴掘方は，隅丸方形あるいは不整円形を呈し径約0.6m，深さ0.38mを測る。埋土は暗灰褐色系の粘質土である。柱痕は東側柱列の第１柱穴を除く全ての柱穴で確認された。なお東側柱列の第１柱穴中には安山岩質の詰め石を検出した。

出土遺物として，土師器・須恵器片が比較的多量に出土している。出土遺物中図化出来るもの16点抽出した。（第431図１）は土師器甕の口縁部である。（２・３）は土師器皿の口縁部である。（２）の皿は，内湾気味に端部に続き，端部は玉状に肥厚する。（３）の底部より屈曲し端部に延びる。端部は丸く納まる。（４）土師質の蛸壺片である。（５～10）はつまみの付く須恵器坏蓋である。（11～15）は須恵器坏身の底部である。（11）を除き（12～15）は，高台部が付く。高台は断面台形状を呈し，外下方に開く。（16）は須恵器提瓶の体部片である。出土遺物よりこの建物の時期は８世紀前半頃であろう。

（西村）

ＳＢⅢ35（第229図　図版69　ＳＢ8604）

Ｊ21区で検出した比較的規模の大きな掘立柱建物である。５間（11.8m）×１間（3.7m），面積43.7㎡，棟方向N3°Wを測る。柱間は桁行2.2～2.5m・梁間3.7mを測る。柱穴掘方は，方形・円形・楕円形等不規則な形態を呈し，径約0.5m，深さはかなり浅く0.12mを測る。柱痕は四つの柱穴で確認された。埋土は暗灰褐色系の土である。

この建物は削平によりかなり柱穴の残りが悪く柱穴形態が不規則な形態を取るのも，上半部が削平を受けているためであろう。柱穴の遺存状況と現状の梁間寸法からみて，棟持柱が削平により消失している可能性が高い。またＳＢⅢ35の配置上の特徴は，棟方向をＳＢⅢ35より東へ21m離れたＳＢⅢ41と合わせ，概ね，ＳＢⅢ41と並列配置の関係になる点である。

出土遺物として土師器の細片のみ出土している。そのため遺物から建物の時期を判断する事は出来ないが，方位及び配置よりこの建物はＳＢⅢ41とほぼ同一時期と考え，８世紀中葉前後に当てたい。

（西村）

ＳＢⅢ36（第230・431図　ＳＢＳＡ07）

Ｉ27区で検出した掘立柱建物である。北部に位置するＳＤⅢ10等の流路と共通した方位を示す。３間（5.9m）×２間（3.3m），棟方向Ｎ00°Ｅを測る。柱間は桁行1.8～2.1m・梁間1.5～1.8mを測る。柱穴掘り方は，隅丸方形を呈し，径約0.8m，深さ約0.43mを測る。埋土は暗褐色系の土である。柱穴から８世紀前半代の須恵器杯蓋が出土している。本掘立柱建物はその方位的共通性等からＳＢⅢ38等の南部に展開する建物群との併存が考えられる。（藤好）

ＳＢⅢ39（第431図　ＳＢ8605）

Ｉ21区で検出した。２間（4.0m）？×１間（3.5m），棟方向Ｎ00°Ｅを測る掘立柱建物である。ただし東列第２穴が他柱穴に比べて著しく小形であること，また西列の対応する柱穴が未検出であることから，１間×１間の可能性もある。柱間寸法の平均は桁行1.8～2.2m・梁間3.5mを測る。柱穴掘り方は，西列北第１穴，東列第２穴が楕円形を，他は略方形を呈し，径約0.6m，深さ0.10～0.28mとなる。柱穴埋土は暗灰褐色を呈する。なお東列北第１穴・西列第３穴では柱痕を検出した。柱穴からは弥生後期甕・製塩土器小片をが出土した。ただしこれが本建物の時期を示すかどうかははなはだ疑問である。

（第431図18）は甕。体部は比較的良く張り，外面に並行叩きを残す。口縁部は鋭く屈曲して内面に稜を持つ。（19）は製塩土器脚部片。下端は開かず低い筒状を呈し外面指押さえが顕著である。共に弥生時代後期末葉ないしは古墳時代初頭に位置付けられる。（大久保）

ＳＢⅢ40（第299・431図）

Ｉ21区で検出した。２間（3.8m）×２間（2.6m）を測り，棟方向Ｎ84°Ｗでほぼ真北に向く総柱建物である。柱間寸法の平均は桁行1.8～2.0m・梁間1.2～1.4mを測る。柱穴掘り方はいずれも不整円形を呈するが，西列北３穴は著しく小さい。掘り方径は約0.5m，深さ0.27mを測る。東列北１穴からは須恵器杯蓋，飯蛸壺小片が出土した。

（第431図20）は飯蛸壺釣り手部片。方柱状を呈し上端は強くなでて凹む。（21）は須恵器杯蓋。かなり扁平で口縁端部は短く折れる。７世紀後葉から８世紀前半に位置付け得る。（大久保）

ＳＢⅢ41（第233・431図　図版70　ＳＢ8607）

Ｉ20・21区で検出した。溝ＳＤⅢ10・25・27からなる方形区画の中で棟方向をほぼ合わせる同一規模の掘立柱建物ＳＢⅢ35・42・44等と極めて規格的な配置関係を持った建物群を構成する。５間（12.0m）×２間（4.0m）を測り，棟方向Ｎ00°Ｅと真北に向く大形の掘立柱建物である。なお東西列とも北２穴がⅣ期の溝ＳＤⅣ01によって失われている。柱間寸法の平均は桁行2.3～4.6m・梁間1.9～2.1mを測る。柱穴掘り方は，棟持柱南北２穴が略円形を呈する他はほぼ方形を呈する。また棟持柱２穴は径・深さともに側柱列に比して小さい。径は棟持柱で約0.7m，深さ0.39m，その他では約0.6～0.9m，深さ0.3～0.5mとなる。東列北１・３・６穴，西列北３・５・６穴，南列棟持柱で柱痕を検出した。柱穴からは土師器甕口縁，須恵器皿が出土した。

（第431図22）は土師器甕口縁部，（23）は須恵器皿，口縁部は短いが強く直線的に外傾する。８世紀代に下る可能性が高い資料である。（大久保）

ＳＢⅢ42（第231・431図　図版70・71　ＳＢ8609）

Ｉ20区で検出した。ＳＢⅢ41等と同一の建物群に属し，形態，規模も類似する。５間（8.３m）×２間（3.9m）で，棟方向Ｎ８°Ｗとほぼ真北に向く大形の掘立柱建物である。柱間寸法の平均は桁行2.0～2.2m・梁間1.9～2.0mを測る。柱穴掘り方は，方形ないしは円形を呈する。棟持柱２穴は側柱列

に比して目立って浅い。径約0.6m，深さ0.40mとなる。北列棟持柱，西列北１・６穴以外で柱痕を検出した。柱穴からは須恵器杯・同高杯・土師器皿小片等若干量を出土した。

（第431図24）は土師器皿であろう。薄手で体底部境は比較的明瞭である。口縁部は強く外傾して内面に暗文を施す。（25）は須恵器杯蓋つまみ片，扁平でボタン状を呈する。（30）は須恵器高杯脚部片，脚端は下に摘み出す。（28・29）は須恵器杯身で比較的薄手である。全体として７世紀後葉を上らない。（24）の土師器皿は８世紀前半に比定できる。（大久保）

ＳＢⅢ43（第231図　図版71　ＳＢ8608）

Ｉ20区で検出した。ＳＢⅢ42と重複する。２間(3.7m)×１間（2.8m）で，棟方向Ｎ７°Ｗとほぼ真北に向く掘立柱建物である。柱間寸法の平均は桁行1.7～2.0m・梁間2.8mを測る。柱穴掘り方は，方形ないしは円形を呈し，径約0.7m，深さ0.30mとなる。遺物は伴わない。（大久保）

ＳＢⅢ44（第232図　図版71　ＳＢ8610）

Ｉ19区で検出した。ＳＢⅢ45に切られＳＢⅢ46と重複する。３間(7.4m）×２間（3.2m）で，棟方向Ｎ３°Ｗとほぼ真北に向く掘立柱建物である。西側柱列南半はⅣ期の溝ＳＤⅣ01によって失われている。柱間寸法の平均は桁行2.4～2.7m・梁間1.5～1.7mを測る。柱穴掘り方の形態・寸法は規則性に乏しく，径約0.6m，深さ0.36mとなる。遺物は伴わない。

ＳＢⅢ45に切られることから７世紀後半～８世紀前半以前に位置付けられる可能性がある。（大久保）

ＳＢⅢ45（第232・431図　図版71　ＳＢ8611）

Ｉ20区で検出した。ＳＢⅢ44を切りＳＢⅢ46と重複する。特にＳＢⅢ44とは棟方向，柱配置までほぼ一致する。３間（5.2m）×２間（3.1m）で，棟方向Ｎ00°Ｅとほぼ真北に向く掘立柱建物である。西側柱列南半はⅣ期の溝ＳＤⅣ01によって失われている。柱間寸法の平均は桁行1.7～1.8m・梁間1.5～1.6mを測る。柱穴掘り方の形態・寸法は規則性に乏しく，径約0.6m，深さ0.28mとなる。柱穴から土師器小片が出土した。

（第431図31）は薄手の土師器。内外面指押さえが顕著で口縁端部は波打つ。小片で断定し難いが７世紀後半～８世紀前半の当該地方最終末の製塩土器の可能性がある。（大久保）

ＳＢⅢ46（第232図）

Ｉ20区で検出した。ＳＢⅢ43・44・45と重複する。柱穴の切り合いから内後二者より先行することが判る。４間（6.6m）×２間（3.5m），棟方向Ｎ23°Ｗの掘立柱建物である。柱間寸法の平均は桁行1.5～1.9m・梁間1.7～1.8mを測る。柱穴掘り方は不整円形ないしは略方形を呈し，径約0.7m，深さ0.33mとなる。遺物は伴わない。

ＳＢⅢ45に切られることから７世紀後半～８世紀前半以前に位置付けられる可能性がある。（大久保）

ＳＢⅢ47（第233図）

Ｈ21区で検出した。北東隅穴がＳＤⅢ24を切る。２間（3.3m）×２間（2.6m）で，棟方向Ｎ９°Ｗ，ほぼ真北に向く総柱建物である。北列西２穴を欠損する。柱間寸法の平均は桁行1.5～1.8m・梁間1.3mを測る。柱穴掘り方は円形ないしは楕円形を呈し，径約0.４mを測る。深さは0.06～0.16mと削平を受けた為か遺存状態は悪い。遺物は伴わない。（大久保）

ＳＢⅢ48（第233図　ＳＢ8612）

Ｇ21区で検出した。２間（2.7m）×２間（2.3m），棟方向Ｎ２°Ｗの掘立柱建物である。北列棟持柱を欠損する。柱間寸法の平均は桁行1.2～1.5m・梁間1.1～1.2mを測る。柱穴掘り方は円形を呈し径約

0.3mと柱間寸法の割には小振りである。深さは0.08～0.20mとなる。遺物は伴わない。　（大久保）

ＳＢⅢ49（第234図）

G21区ＳＡⅢ10の西側で検出した掘立柱建物である。この建物はＳＨⅢ16と切り合いを持つ。２間（4.1m）×２間（3.4m），棟方向N22°Wを測る。柱間は不揃いながら桁行1.８～2.3m・梁間1.7mを測る。柱穴掘方は，円形及び不整円形を呈し径約0.3m，深さ1.7mを測る。

出土遺物としては，土師器の細片が数点出土しているだけで時期の判断の決め手になるものはないが，周辺に位置する７世紀代の建物の方位に類似するため，概ね７世紀代であろう。　（西村）

ＳＢⅢ50（第234図　図版72　ＳＢ8613）

G21区で検出した掘立柱建物である。２間（3.5m）×２間（2.9m），棟方向N52°Eを測る。柱間は桁行0.8～1.7m・梁間1.4～1.5mを測る。柱穴掘方は，円形及び不整円形を呈し径約0.5m，深さ0.23mを測る。埋土は茶灰色系の粘質土である。

出土遺物として，弥生土器・土師器・黒色土器等の細片が出土している。黒色土器より平安時代以降であろう。　（西村）

ＳＢⅢ51（第234図　ＳＢ8614）

G20区で検出したＳＨⅡ16を切り込んでいる，掘立柱建物である。２間（3.2m）×２間（2.1m），棟方向N23°Wを測る。柱間は桁行1.5～1.7m・梁間1.0～1.1mを測る。柱穴掘方は，円形及び不整円形を呈し径約0.5m，深さ0.53mを測る。埋土は暗褐色土である。

出土遺物として，弥生土器・須恵器の細片が出土している。須恵器の細片より，この建物は概ね７世紀代であろう。　（西村）

ＳＢⅢ52（第431図）

G20・21区で検出した掘立柱建物である。残りが悪く側柱の一部は検出できなかった。２間（4.7m）×２間（3.8m），棟方向N59°Eを測る。柱間は桁行2.2～2.5m・梁間1.8～2.0mを測る。柱穴掘方は，楕円形を呈し径約0.4m，深さ0.15mを測る。

出土遺物としては，土師器・須恵器片が出土している。出土遺物中図化出来るもの１点抽出した。（第431図32）は須恵器瑳の体部片である。頸部付近の内面には絞り痕，外面には沈線を二条施している。出土遺物よりこの建物は６世紀後葉に当る。　（西村）

ＳＢⅢ53（第234図）

H20区で検出した。竪穴住居ＳＨⅡ15等と重複する。３間（4.7m）×２間（3.4m）で，棟方向N４°Eと，ほぼ真北に向く総柱建物である。南列西２穴を欠損する。柱間寸法の平均は桁行1.5～1.6m・梁間1.3～2.1mを測る。柱穴掘り方は略方形を呈するものが多いが，北列西１・２穴，南列西３穴は，円形ないし不整円形を呈し，かつ際立って小振りである。径は0.4～0.8mを測る。深さは0.04～0.18mと極めて浅い。柱穴規模・形態にこのようなばらつきが大きいため，やや疑問は残るが，整った配置関係から総柱建物と推定した。柱穴からは弥生前期土器片のみを出土している。　（大久保）

ＳＢⅢ58（第235図）

F17区で検出した掘立柱建物である。３間（4.6m）×１間（3.0m），棟方向N71°Eを測る。柱間は桁行1.4～1.6m・梁間3.0mを測る。柱穴掘方は，円形並び楕円形を呈し径約0.4m，深さ0.20mを測る。

出土遺物として弥生の土器が出土しているが，弥生時代に当るかどうかは不明瞭である。　（西村）

ＳＢⅢ59（第235図ＳＢ8618）

Ｆ17区でＳＢⅢ63と切り合う形で検出した掘立柱建物である。１間（4.1m）×１間（3.２m），棟方向Ｎ21°Ｗを測る。柱間は桁行4.1m・梁間3.2mを測る。四隅の柱穴掘方は，楕円形並び不整円形を呈し径約0.9m，深さ0.36mを測る。（西村）

ＳＢⅢ62（第235図　ＳＢ8619）

Ｇ16・17区で検出した掘立柱建物である。３間（4.5m）×１間（3.4m），棟方向Ｎ65°Ｅを測る。柱間は桁行1.4～1.6m・梁間3.4mを測る。柱穴掘り方は，円形を呈し，径約0.3m，深さ0.03～0.21mを測る。柱穴内には詰め石が見られ，混入品と考えられる鏡片と黒色土器椀Ａ類片が出土している。時期は出土遺物から11世紀以降と考えられる。（藤好）

ＳＢⅢ63（第432図）

Ｆ17区でＳＢⅢ59と切り合う形で検出した掘立柱建物である。建物西辺の柱穴を欠くが２間（3.8m）以上×２間（2.9m），棟方向Ｎ53°Ｅを測る。柱間は桁行1.7～2.1m・梁間1.3～1.6mを測る。柱穴掘方は円形並びに不整円形を呈し，径約0.4m，深さ0.07mを測る。

出土遺物としては，中世の土師器の小皿片が出土している。（西村）

ＳＢⅢ64（第235図　ＳＢ8637）

Ｅ17区で検出した掘立柱建物である。１間（3.7m）以上×２間（3.0m），棟方向Ｎ76°Ｅを測る。柱間は桁行3.7m・梁間1.4～1.6mを測る。柱穴掘方は，円形並び不整円形を呈し径約0.4m，深さは残りが悪く0.16mを測る。柱痕は北側柱列の除く全ての柱穴で確認された。埋土は暗褐色系の粘土及び砂質土からなり細分すれば６層に区分できる。この建物は削平によりかなり残りが悪く柱穴が浅い。柱穴の遺存状況と現状の桁行寸法からみて，側柱が削平により消失している可能性が高い。

出土遺物としては，土師器の細片が数点出土しているのみであり，遺物から時期を判断する材料は無いが，８世紀のＳＢⅢ79に主軸方位が類似し概ねこの建物に類似する時期であろう。（西村）

ＳＢⅢ65（第236・432図　図版105　ＳＢ8621）

Ｇ・Ｈ16区で検出した総柱の掘立柱建物としては最大級の建物である。４間（7.7m）×３間（5.8m），棟方向Ｎ63°Ｅを測る。柱間は桁行1.7～2.1m・梁間1.8～2.1mを測る。柱穴掘り方は，隅丸方形を呈し，径約0.9m，深さ0.17～0.41mを測る。側柱と束柱の規模がほとんど同じで，中心的な総柱の建物と考えられる。埋土は黒褐色ないし暗褐色系の土である。柱穴から６世紀後半の須恵器の杯片が出土している。

この時期の建物は，第２微高地上には，本ＳＢⅢ65以北には，認められず，空間的なゆとりも十分ではない。また本総柱建物の南には，ＳＢⅢ66・67をはじめとして，同時期または非常に近接した時期の建物群が，棟通りを東西に向け，同一基準線上に並ぶ。また第２微高地南部の同一時期の可能性の高い建物群は，２間×２間の規格化された小型の建物である点からすれば，ＳＢⅢ65を中心とした第２微高地上の建物群の展開は，第１微高地西部や北半部の建物群や第４微高地の南端部の建物群とは異なった性格もしくは機能を有するものである可能性が高い。こうした小型の建物群の集中的な展開は，下川津遺跡では，他の地点では認められず，特徴的である。

また本総柱建物の示す基準方位は，第２微高地だけではなく，第１微高地の北寄りの６世紀末から７世紀初頭にかけての竪穴・掘立柱建物に共通して認められる方位であり，この時期の建物群が認められない第１微高地南部においても，基準区割り溝と考えられるＳＤⅢ32や小規模な区割り溝のＳＤⅢ37等

に共通した方位が認められる点は，注目される。（藤好）

ＳＢⅢ66（第236図　ＳＢ8624）

Ｇ・Ｈ16区で検出した掘立柱建物で，ＳＢⅢ67に切られる。１間（6.0m）×３間（5.5m），棟方向Ｎ63°Ｅを測る。柱間は約，桁行6.0m・梁間1.6～2.0mを測る。柱穴掘り方は，隅丸方形を呈し，径約0.7m，深さ約0.34mを測る。東西の柱列は，北に隣接する総柱の掘立柱建物ＳＢⅢ65の西側柱列と西から３列の柱列とほぼ一致する線上の配置を見せる。南北の柱列が長く桁側となると考えられるが，１間であり，その間に柱が設置された痕跡は認められなかった。特異な形状を示す建物である。下川津遺跡の今回の調査対象地南端に位置する掘立柱建物群中のＳＢⅢ181は南辺の側柱の延長線上に，側柱列と同規模の柱穴が同間隔で東へ延び，柵列となっている例がある。本ＳＢⅢ66の西側柱列の間隔は，ＳＢⅢ65とほぼ等しく，また両建物間の間隔も一致する。こうした点からすれば，本遺構は，建物とするよりは，ＳＢⅢ65に面した塀状の柵列である可能性も十分考えられる。（藤好）

ＳＢⅢ67（第237図　ＳＢ8622）

Ｈ16区で検出した掘立柱建物である。ＳＢⅢ66を切り，ＳＢⅢ68と切り合い関係にある。３間（4.2m）×２間（3.6m），棟方向Ｎ68°Ｅを測る。柱間は桁行1.3～1.4m・梁間1.7～1.9mを測る。柱穴掘り方は，隅丸方形ないし円形を呈し，径約0.6m，深さ約0.41mを測る。埋土はである。第２微高地西部では，本遺構以外では３間×２間の建物はなく，２間×２間の特徴的な建物が集中する。位置関係からみても，ＳＢⅢ65に付随した機能を有する建物であろう。なお本遺構とほぼ類似した形態を持つ建物ＳＢⅢ85・86が，第２微高地の中央部東寄りに棟方向を南北に向けて建てられ，その南部にはＳＢⅢ96のような２棟並び，その南部には４間×２間のＳＢⅢ96が棟方向を東西に向ける。第２微高地はほぼ中央を境として，東西では，当該時期の建物群の内容に大きな差異が認められる点は注目される。時期は配置，主軸方位よりＳＤⅢ66・65に類似する時期と考えられる。（藤好）

ＳＢⅢ69（第237図　図版106　ＳＢ8638）

Ｅ16区で検出した掘立柱建物である。４間（5.8m）×２間（4.1m），棟方向Ｎ73°Ｅを測る。柱間は桁行1.3～1.5m・梁間2.0～2.1mを測る。柱穴掘方は，隅丸方形を呈し径約0.4m，深さ0.17mを測る。柱痕は半数の柱穴で確認された。埋土は黒色土系である。

出土遺物としては，弥生土器・土師器の細片が出土しているのみであり，遺物から時期を判断する材料は少ないが，８世紀のＳＢⅢ79に主軸方位が類似し概ねこの建物に類似する時期であろう。（西村）

ＳＢⅢ70（第237図　ＳＢ8640）

Ｆ16区で検出した掘立柱建物である。２間（4.1m）×２間（3.4m），棟方向Ｎ７°Ｗを測る。柱間は桁行1.9～2.2m・梁間1.6～1.8mを測る。柱穴掘方は，円形を呈し径約0.4m，深さ0.15mを測る。柱痕は部分的に確認された。埋土は暗褐色系の砂質土で細分すれば６層に区分できる。

遺物から時期を判断する材料は無いが，６世紀後葉のＳＢⅢ82に主軸方位が類似し概ねこの建物に類似する時期であろう。（西村）

ＳＢⅢ71（第238・432図　ＳＢ8639）

Ｅ16区ＳＢⅢ69の南側で検出した掘立柱建物である。この建物は側柱及び棟持柱の一部が検出できなかった。４間（8.6m）×２間（4.4m），棟方向Ｎ68°Ｅを測る。柱間は桁行2.0～2.3m・梁間2.1～2.3mを測る。柱穴掘方は方・円・不整円形等不規則な形態を呈径約0.5m，深さ0.12mを測る。柱痕は半分の柱穴で確認された。埋土は黒色土系である。この建物は削平によりかなり柱穴の残りが悪く柱穴

が不規則な形態を取る。また，棟持柱と側柱の一部が検出できなかったのも，削平を受けているためであろう。

出土遺物としては，土師器・須恵器の細片が出土している。須恵器１点を図化した。（第432図３）は，須恵器杯身片である。出土遺物よりこの建物の時期は，６世紀後葉であろう。（西村）

ＳＢⅢ72（第238図　図版106　ＳＢ8625）

Ｈ15区で検出した掘立柱建物である。２間（3.9m）×２間（3.5m），棟方向Ｎ71°Ｅを測る。柱間は桁行1.9～2.0m・梁間1.7～1.8mを測る。柱穴掘り方は，西側の斜面寄りになるほど形状が小規模となり整わないが，これは斜面部に立地することによる残存状況によるものであろう。柱穴掘り方は東側柱列では概ね隅丸方形を呈し，径0.２～0.5m，深さ約0.20mを測る。第２微高地でもっとも西に位置する建物で，東側柱列はＳＢⅢ67の西側柱列と，また南側柱列はＳＢⅢ74の北側柱列と同一線上に位置する。時期は配置，主軸方位によりＳＢⅢ67に類似すると考えられる。（藤好）

ＳＢⅢ73（第432図）

Ｈ15区で検出した総柱の掘立柱建物である。２間（3.0m）×２間（2.6m）と考えられ，棟方向Ｎ30°Ｗを測る。柱間は約，桁行1.5m・梁間1.3mを測る。柱穴掘り方は，円形を呈し，径約0.3m，深さ約0.14mを測る。西北部の柱穴は不明瞭である。

時期は出土遺物から８世紀頃と考えられる。（藤好）

ＳＢⅢ74（第238・432図　ＳＢ8626）

Ｇ15区で検出した掘立柱建物である。竪穴住居の周溝であるＳＤⅢ52を切る。２間（4.2m）×２間（3.4m），棟方向Ｎ65°Ｅを測る。柱間は約，桁行2.1m・梁間1.6～1.8mを測る。柱穴掘り方は，隅丸方形ないし円形を呈し，径約0.5m，深さ0.10～0.33mを測る。柱穴から土師器の皿が出土している。時期は出土遺物から８世紀頃と考えられる。（藤好）

ＳＢⅢ75（第239図　図版107　ＳＢ8627）

Ｈ15区で検出した掘立柱建物で，西側柱列が総柱のＳＢⅢ65と揃える。２間（3.4m）×２間（2.7m），棟方向Ｎ64°Ｅを測る。柱間は桁行1.5～1.9m・梁間1.3～1.4mを測る。柱穴掘り方は，円形を呈し，径約0.5m，深さ約0.27mを測る。時期は出土遺物から８世紀頃と考えられる。（藤好）

ＳＢⅢ76（第239図　図版107　ＳＢ8628）

Ｇ15区で検出した掘立柱建物，ＳＢⅢ74の南で東西の側柱列を同一直線上にのせる。また西のＳＢⅢ75と北側柱列を同一直線上にのせる。２間（3.8m）×２間（3.1m），棟方向Ｎ66°Ｅを測る。柱間は約，桁行1.9m・梁間1.4～1.7mを測る。柱穴掘り方は，円形を呈し，径約0.5m，深さ0.07～0.24mを測る。埋土はである。時期は出土遺物から８世紀頃と考えられる。（藤好）

ＳＢⅢ77（第239図　図版107　ＳＢ8629）

Ｇ14区で検出した掘立柱建物で，ＳＢⅢ77の南に位置する。２間（2.7m）×１間（2.1m），棟方向Ｎ62°Ｅを測る。柱間は桁行1.3～1.4m・梁間2.1mを測る。柱穴掘り方は，円形を呈し，径約0.5m，深さ約0.19mを測る。重複すると考えられるＳＢⅢ78と合わせ２間×２間の建物である可能性も否定できない。ＳＢⅢ77とは主軸方向がわずかにずれ，時期的に近似するかは明瞭ではない。時期は出土遺物から８世紀頃と考えられる。（藤好）

ＳＢⅢ79（第240・432図　図版108・109　ＳＢ8630）

Ｇ14区で検出した掘立柱建物である。２間（4.3m）×２間（3.3m），棟方向Ｎ74°Ｅを測る。柱間は

桁行2.0～2.3m・梁間1.6～1.7mを測る。柱穴掘り方は，円形を呈し，径約0.6m，深さ0.04～0.33mを測る。やや主軸方向が東に振るが，地形に影響された可能性もある。柱穴からの出土遺物としては，須恵器杯・蓋・土錘等がある。時期は出土遺物から8世紀と考えられる。（藤好）

ＳＢⅢ80（第240・432図　図版108・109　ＳＢ8631）

G14区で検出した総柱の掘立柱建物で，同じ総柱の建物であるＳＢⅢ81と切り合い関係にあるものの，埋土の類似からその先後関係は今一不明瞭である。2間（3.7m）×2間（3.6m），棟方向N36°Wを測る。柱間は桁行1.8～1.9m・梁間1.8mを測る。柱穴掘り方は，隅丸方形気味のもので，径約0.3～1.0m，深さ0.15～0.35mを測る。束柱は小規模の円形の掘り方を持つ。時期は出土遺物から8世紀頃と考えられる。（藤好）

ＳＢⅢ81（第240・432図　図版109　ＳＢ8632）

G14区で検出した掘立柱建物で，ＳＢⅢ80と重複する。2間（3.1m）×2間（2.6m），棟方向N23°Wを測る。柱間は桁行1.5～1.6m・梁間1.2～1.4mを測る。柱穴掘り方は，円形を呈し，径約0.6m，深さ約0.20mを測る。東側柱列はＳＢⅢ65の西側と同一線上にのるなど多くの第2微高地西部の建物群と共通した方位を示す。柱穴から須恵器の杯等が出土している。（藤好）

ＳＢⅢ82（第240・432図　図版109）

G14区で検出した掘立柱建物で，ＳＢⅢ83と切り合い関係にある。2間（3.4m）×2間（3.3m），棟方向N3°Eを測る。柱間は約，桁行1.7m・梁間1.5～1.8mを測る。柱穴掘り方は，円形を呈し，径約0.4m，深さ約0.34mを測る。西の側柱列がやや短く，不整なものである。時期は出土遺物から6世紀後葉と考えられる。（藤好）

ＳＢⅢ83（第241図　図版109・110　ＳＢ8633）

G14区で検出した総柱の掘立柱建物で，ＳＢⅢ82と切り合い関係にある。2間（3.4m）×2間（3.8m），棟方向N18°Eを測る。柱間は桁行約1.7m・梁間1.7～2.1mを測る。柱穴掘り方は不整円形を呈し，径約0.6m，深さ約0.43mを測る。ＳＤⅢ40南部と共通した方位を示し，地形に制約されたものである可能性が高い。（藤好）

ＳＢⅢ84（第241・432図　図版110　ＳＢ8641）

F15・16区で検出した総柱建物である。残りが悪く側柱の一部は検出できなかった。2間（3.7m）×2間（3.2m），棟方向N32°Wを測る。柱間は桁行1.8～1.9m・梁間1.6mを測る。柱穴掘方は，円並びに不整円形を呈し径約0.7m，深さ0.19mを測る。埋土はベース混じりの黒灰茶褐色粘質土の単層である。

出土遺物としては，土師器・須恵器の細片が出土している。須恵器2点を図化した。（第432図17）は底部を欠く須恵器坏身である。たちあがりは僅かに内傾し直線的に延びる。（18）は須恵器提瓶の口縁部である。出土遺物よりこの建物の時期は，6世紀後葉であろう。（西村）

ＳＢⅢ85（第241・432図　図版110　ＳＢ8642）

F15区でＳＢⅢ84と切り込む形で検出した掘立柱建物である。3間（5.0m）×3間（4.0m），棟方向N30°Wを測る。柱間は桁行1.5～1.8m・梁間1.2～1.4mを測る。柱穴掘方は，隅丸方・不整円形を呈し径約0.7m，深さ0.40mを測る。柱痕は二つ柱穴を除く全ての柱穴で確認された。埋土は茶灰色系の砂質土である。

出土遺物としては，6世紀後葉・8世紀の資料が出土している。図化できるもの6世紀後葉の須恵器

2点を図化した。（第432図19・20）である。出土遺物よりこの建物は，8世紀代に当る。　（西村）

ＳＢⅢ86（第242・432図　図版111　ＳＢ8643）

Ｆ15区でＳＢⅢ85の南側で検出した掘立柱建物である。3間（4.7m）×2間（3.5m），棟方向Ｎ26°Ｗを測る。柱間は桁行1.4～1.7m・梁間1.6～1.9mを測る。柱穴掘方は，不整円形を呈し径約0.5m，深さ0.40mを測る。柱痕は一部の柱穴で確認されただけである。埋土は茶灰色系の砂質土である。

出土遺物としては，6世紀後葉・8世紀の資料が出土している。2点図化した。（第432図21）は8世紀代の土師器の杯ないし皿の口縁部である。内面には，暗文が認められる。（22）は6世紀の須恵器の坏身である。出土遺物よりこの建物の時期は，8世紀前半頃に当る。　（西村）

ＳＢⅢ87（第242図　図版111　ＳＢ8644）

Ｆ15区でＳＢⅢ86の西側で検出した掘立柱建物である。4間（6.4m）×3間（4.2m），棟方向Ｎ29°Ｗを測る。柱間は桁行1.3～2.0m・梁間1.3～1.5mを測る。柱穴掘方は，隅丸方・楕円・不整円形等の形態を呈し径約0.4m，深さ0.19mを測る。柱痕は一部の柱穴を除く全ての柱穴で確認された。埋土は暗褐色系の砂質土である。

出土遺物としては，土師器の細片が数点出土しているのみであり，遺物から時期を判断する材料はない。主軸方位よりＳＢⅢ92と類似する時期かもしれない。　（西村）

ＳＢⅢ89（第241図）

Ｆ・Ｇ15区で検出した総柱建物である。西半分後世の攪乱により失われている。1間（2.0m）以上×2間（3.9m），棟方向Ｎ25°Ｗを測る。柱間は桁行2.0m・梁間1.8～2.1mを測る。柱穴掘方は，円・不整円形を呈し径約0.7m，深さ0.21mを測る。柱痕は束柱を除く四つの柱穴で確認された。

出土遺物としては，土師器の細片が数点出土しているのみであり，遺物から時期を判断する材料はない。主軸方位及び配置よりＳＢⅢ85・86と関連の強い建物と，考えられる。そのため8世紀の前半頃の時期に当てたい。　（西村）

ＳＢⅢ90（第432図　図版112　ＳＢ8646）

Ｅ・Ｆ15区で検出した。この建物はＳＡⅢ17と組み合わされる掘立柱建物である。2間（4.6m）×1間（3.8m），棟方向Ｎ26°Ｗを測る。柱間は桁2.3m・梁間3.8mを測る。柱穴掘方は，円形を呈し径約0.4m，深さ0.18mを測る。柱痕は西側柱列側で確認された。埋土は灰色系の砂質土である。

この建物は削平によりかなり残りが悪い。柱穴の遺存状況と現状の梁間寸法からみて，棟持柱が削平により消失している可能性が高い。

出土遺物としては，土師器・瓦質土器が少量出土している。出土遺物中図化出来るもの1点を抽出した。（第432図23）は土師器椀の口縁部である。端部は丸く納まり外面にはわずかに指頭痕が見出せる。出土遺物よりこの建物は，概ね中世に当る。　（西村）

ＳＢⅢ91（第243図　図版112　ＳＢ8645）

Ｅ15区で検出した掘立柱建物で，ＳＢⅢ90・ＳＡⅢ19と切り合い関係にある。4間（6.7m）×3間（4.5m），棟方向Ｎ64°Ｅを測る。柱間は桁行1.5～1.9m・梁間1.3～1.7mを測る。柱穴掘り方は円形を呈し，径0.1～0.4m，深さ0.03～0.13mを測る。土師器の椀が出土している。時期は出土遺物から13世紀前後と考えられる。　（藤好）

ＳＢⅢ92（第243図）

Ｅ15区で検出した掘立柱建物で，ＳＢⅢ91・93と切り合い関係にある。3間（5.8m）×1間（4.0

m)，棟方向N30°Wを測る。柱間は桁行1.6～2.1m・梁間約4.0mを測る。柱穴掘り方は円形を呈し，径約0.5m，深さ0.07～0.18mを測る。西側に位置するＳＢⅢ87と近似した方位を持つ。柱穴内からは，土師・須恵・黒色土器片等が出土している。時期は出土遺物から中世頃と考えられる。（藤好）

ＳＢⅢ93（第243・432図）

Ｅ15区で検出した掘立柱建物で，西側に柵列ＳＡⅢ19を持つ。２間（3.8m）×１間（3.５m），棟方向N60°Ｅを測る。柱間は桁行1.8～2.0m・梁間約3.5mを測る。柱穴掘り方は円形を呈し，径約0.3m，深さ約0.15mを測る。時期は出土遺物から12～13世紀頃と考えられる。（藤好）

ＳＢⅢ94（第243・432図　図版112　ＳＢ8647）

Ｆ14区で検出した掘立柱建物である。２間(5.1m）×１間（3.8m），棟方向N62°Ｅを測る。柱間は桁行2.5～2.6m・梁間3.8mを測る。柱穴掘方は，円形を呈し径約0.3m，深さ0.17mを測る。柱痕は一部柱穴を除く全ての柱穴で確認された。埋土は暗灰色系の砂質土で細分すれば３層に区分できる。なお，この建物には棟持柱が見出せないが，柱穴の遺存状況と現状の梁間寸法からみて，棟持柱が削平により消失している可能性が高い。

出土遺物としては，土師器・黒色土器が少量出土している。出土遺物中図化出来るもの２点を抽出した。(第432図25）は土師器椀の口縁部である。端部は丸く納まり外面には指頭痕が認められる。(26）は土師器の坏の口縁部である。端部は脹らみ気味に端部に続き丸く納まる。出土遺物よりこの建物は，概ね中世に当る。（西村）

ＳＢⅢ95（第244・432図　図版113　ＳＢ8648）

Ｆ14区で検出した総柱建物である。側柱の一部は未検出である。２間（3.9m）×２間（3.5m），棟方向N67°Ｅを測る。柱間は桁行1.9～2.0m・梁間1.7～1.8mを測る。柱穴掘方は，楕円形を呈し径約0.6m,深さ0.25mを測る。柱痕は束柱を除く全ての柱穴で確認された。埋土は暗灰褐色系の砂質土である。

出土遺物としては，土師器・須恵器片が出土している。出土遺物中図化出来るもの１点を抽出した。（第432図27）は底部を欠く須恵器の坏身である。たちあがりは内傾し直立気味に端部に続き，端部は丸く納まる。出土遺物よりこの建物は６世紀後葉に当る。（西村）

ＳＢⅢ96（第244・432図　図版112　ＳＢ8649）

Ｅ・Ｆ14区で検出した掘立柱建物である。４間（6.4m）×２間（3.4m），棟方向N64°Ｅを測る。柱間は桁行1.4～1.9m・梁間1.7mを測る。柱穴掘方は，隅丸方・円形を呈し径約0.6m，深さ0.23mを測る。柱痕は四つの柱穴を除く全ての柱穴で確認された。埋土は暗褐色系の砂質土である。

出土遺物としては，土師器・須恵器片が出土している。出土遺物中図化出来るもの２点を抽出した。（第432図28・29）は須恵器坏蓋である。(29）の端部内面には浅い一条の段が認められる。出土遺物よりこの建物は６世紀後葉に当る。（西村）

ＳＢⅢ97（第244図　図版113　ＳＢ8634）

Ｆ・Ｇ14区で検出した掘立柱建物で，ＳＢⅢ98と重複する。２間（4.1m）×２間（3.5m），棟方向N38°Wを測る。柱間は桁行2.0～2.1m・梁間約1.7～1.8mを測る。柱穴掘り方は不整円形を呈し，径約0.6m，深さ約0.25mを測る。方位的には２間×２間の総柱建物ＳＢⅢ80と共通する。また本建物ＳＢⅢ98との先後関係は明確ではないが，規模方位の一致状況からすれば，側柱列の柱数の差はあるが，建て替えの結果による可能性が高い。ただ両者の先後関係は明瞭ではない。柱穴内からの出土遺物としては，土師・須恵・瓦器及び須恵質の瓦片等が出土している。（藤好）

ＳＢⅢ98（第244図　図版113　ＳＢ8635）

Ｆ・Ｇ14区で検出した掘立柱建物で，ＳＢⅢ97と重複する。３間（4.0m）×２間（3.3m），棟方向Ｎ35°Ｗを測る。規模的にはＳＢⅢ97の方がわずかに大きい。柱間は桁行1.9～2.1m・梁間約1.5～1.8mを測る。柱穴掘り方は不整円形を呈し，径約0.6m，深さ約0.08～0.22mを測る。方位・規模では，本建物はＳＢⅢ77・78・86と近似する。（藤好）

ＳＢⅢ99（第254・432図　ＳＢ8636）

Ｇ13区で検出した掘立柱建物である。ＳＤⅢ42・65を切る。３間（8.3m）×１間（3.6m），棟方向Ｎ28°Ｗを測る。柱間は桁行2.4～3.2m・梁間約3.6mを測る。柱穴掘り方は円形を呈し，径約0.4m，深さ約0.16mを測る。掘り方中には根石を持つものが多い。柱穴内からは和泉型の瓦器椀が出土している。時期は出土遺物から13世紀と考えられる。（藤好）

ＳＢⅢ100（第432図）

Ｆ13・14区でＳＢⅢ101の東側で検出した掘立柱建物である。２間（4.9m）×２間（3.９m），棟方向Ｎ30°Ｗを測る。柱間は桁行2.4～2.5m・梁間1.9～2.0mを測る。柱穴掘方は，円形を呈し径約0.4m，深さ0.61mを測る。

出土遺物としては，土師器片が少量出土している。出土遺物中図化出来るもの１点を抽出した。（第432図32）は土師器椀の口縁部である。器壁は比較的厚く，端部は丸く納まる。出土遺物よりこの建物は概ね中世に当る。（西村）

ＳＢⅢ101（第254・433図　図版114）

Ｆ13区でＳＢⅢ100の西側で検出した掘立柱建物である。２間（3.7m）×１間（2.8m），棟方向Ｎ23°Ｗを測る。柱間は桁行1.8～1.9m・梁間2.8mを測る。柱穴掘方は，円形を呈し，径約0.3m，深さ0.11mを測る。埋土は灰褐色砂質土系である。なお西側柱列の北第１・３柱穴中には詰め石及び根石を検出した。

出土遺物としては，土師器・瓦器片が少量出土している。出土遺物中図化出来るもの１点を抽出した。（第433図１）瓦器椀の口縁部である。器壁は薄く端部は丸く納まる。出土遺物よりこの建物は概ね中世に当る。（西村）

ＳＢⅢ102（第433図）

Ｆ13区で検出した掘立柱建物である。残りが悪く側柱及び棟持柱の一部を欠く。３間(5.9m）×２間（3.5m），棟方向Ｎ60°Ｅを測る。柱間は桁行1.5～2.7m・梁間1.5～2.0mを測る。柱穴掘方は，円形を呈し径約0.3m，深さ0.11mを測る。

出土遺物としては，土師器・瓦質土器片が少量出土している。出土遺物中図化出来るもの１点を抽出した。（第433図２）は瓦質土器椀である。器壁は比較的に厚く，端部は尖り気味に丸く納まる。体部内面にはミガキと暗紋が認められる。出土遺物よりこの建物は概ね中世に当る。（西村）

ＳＢⅢ103（第293・433図　ＳＢ87110）

Ｊ13区で検出した掘立柱建物である。３間（6.8m）×１間（3.6m），棟方向Ｎ60°Ｅを測る。柱間は桁行2.1～2.4m・梁間3.6mを測る。柱穴掘方は，円形を呈し，径約0.３m，深さ0.14mを測る。柱痕は二つの柱穴で確認された。なお，この建物の南辺には，廂が付く可能性がある。

出土遺物としては，土師器・黒色土器片が少量出土している。出土遺物中図化出来るもの２点を抽出した。（第433図３）は黒色土器椀の底部である。高台部は尖り気味に端部は丸く納まる。内面にはミガ

キが認められる。（4）は土師器坏である。底部は平底で屈曲し外上方に延び，端部は丸く納まる。出土遺物よりこの建物は，10世紀前半前後であろう。（西村）

ＳＢⅢ104（第293・433図　ＳＢ87111）

Ｊ13区で検出した掘立柱建物である。２間（4.0m）×２間（3.5m），棟方向Ｎ67°Ｅを測る。柱間は桁行1.7～2.3m・梁間1.7～1.8mを測る。柱穴掘方は，円・不整円形を呈し，径約0.5m，深さ0.26mを測る。

出土遺物としては，土師器・黒色土器片が少量出土している。出土遺物中図化出来るもの４点を抽出した。（第433図５）は土師器の椀である。高台部は垂直気味に下方に延び端部は丸く納まる。体部は内湾気味に端部に続き，端部は丸く肥厚する。内外面にミガキ，外面下半に指頭痕が認められる。（第433図６・７）は土師器の皿である。（８）は高台部を欠く内黒の黒色土器の椀である。底部内面にはミガキが認められる。出土遺物よりこの建物は，11世紀前半前後であろう。（西村）

ＳＢⅢ105（第246・433図　図版168　ＳＢ8650）

第４微高地東北端，Ｄ13区で検出した総柱の掘立柱建物である。２間(3.7m）×２間(3.7m)，棟方向Ｎ56°Ｗを測る。柱間は，桁行約1.7～2.0m・梁間1.7～2.0mを測る。柱穴掘り方は隅丸方形を呈し，径約0.5m，深さ0.13～0.39mを測る。束柱は側柱と比較すると小型である。柱穴内から土師・須恵・黒色土器等が出土している。本建物は地形的な制約を受けた方位を呈するものと考えられる。（藤好）

ＳＢⅢ106（第246図　ＳＢ8651）

Ｄ12・13区で検出した掘立柱建物である。３間（5.2m）×２間（3.2m），棟方向Ｎ51°Ｅを測る。柱間は，桁行1.7～1.9m・梁間1.5～1.7mを測る。柱穴掘り方は隅丸方形ないし不整円形を呈し，径約0.4m，深さ約0.18mを測る。（藤好）

ＳＢⅢ107（第433図）

Ｄ12区で検出した掘立柱建物で，ＳＨⅢ27と切り合い関係にある。東部は第１低地帯により消失している。４間（5.3m）×２間（3.6m），棟方向Ｎ22°Ｗを測る。柱間は，桁行約0.9～1.7m・梁間約1.4～2.2mを測る。柱穴掘り方は隅丸方形を呈し，径約0.6m，深さ約0.13mを測る。西側柱列の北第３穴をはさむ南北柱間は狭く，３間である可能性もある。とすれば東側柱列の柱穴は本建物の柱穴ではなくなり，建物規模は判断できない。柱穴から須恵器杯が出土しているが，出土柱穴はＳＨⅢ27と重複しており，混入品である可能性もある。（藤好）

ＳＢⅢ108（第246図）

Ｄ・Ｅ12区で検出した掘立柱建物である。２間（4.3m）×２間（3.6m），棟方向Ｎ25°Ｗを測る。柱間は，桁行2.1～2.2m・梁間1.7～1.9mを測る。柱穴掘り方は隅丸方形もしくは不整円形を呈し，径約0.4m・深さ約0.09mを測る。（藤好）

ＳＢⅢ112（第247・433図　ＳＢ87085）

Ｇ11区で検出した。３間（5.7m）×２間（3.9m），棟方向Ｎ60°Ｅを測る掘立柱建物である。またこの建物は南・北両面に廂を伴う。南北両面の廂の内北側の廂は３間検出したが，南側の廂は２間しか検出できなかった。身舎の柱間寸法は桁行1.6～2.2m・梁間1.9～2.0m，廂の間は，1.2mを測る。柱穴掘方は，円・不整円形を呈し，径約0.4m，深さ0.42mを測る。柱痕は南辺の廂の東第２・３柱穴中に認められた。なお第３柱穴中には柱根が残っていた。柱穴埋土は暗灰色系の砂質土である。

出土遺物中図化出来るもの６点を抽出した。なお，この土器は，北側柱列の東第１柱穴内より出土し

た資料である。（第433図11）は土師器の坏である。底部は突出し，体部は僅かに内湾し口縁端部に続く。端部は僅かに肥厚し丸く納まる。（12～14）は土師器の皿である。平坦な底部より内湾気味に口縁端部に続き，口縁端部を丸く納めるものと，底部端部で屈曲し，外湾気味に口縁端部に続くものに別れる。（15・16）は11世紀末前後の内黒の黒色土器椀である。高台部は外下方に開き，体部は内湾気味に口縁端部に続く。端部は丸く納まる。出土遺物より11世紀前半である。（西村）

ＳＢⅢ113（第248・433図　図版169　ＳＢ87086）

Ｇ・Ｆ11区で検出した掘立柱建物である。３間（5.5m）×２間（3.6m），棟方向Ｎ38°Ｅを測る。柱間は桁行1.6～2.0m・梁間1.8mを測る。柱穴掘方は，円形を呈し，径約0.8m，深さ0.55mを測る。柱痕は確認されなかった。なお一部の柱穴を除く全ての柱穴低部には複数の小礫からなる根石を検出した。埋土は暗灰色系の砂質土である。

出土遺物中より２点の土師器片を抽出した。（第433図17・18）は土師器甕の口縁部である。出土遺物よりこの建物は６世紀後葉～７世紀頃であろう。（西村）

ＳＢⅢ114（第248図　図版170　ＳＢ87087）

Ｆ10・11区北辺をＳＢⅢ113と接する位置で検出した掘立柱建物である。なおこの建物の棟通りには二つの束柱が等間隔で配されている。２間（4.2m）×２間（4.0m），棟向Ｎ58°Ｅを測る。柱間は桁行2.0～2.2m・梁間2.0mを測る。柱穴掘方は，円形並びに不整円形を呈し，径約0.6m，深さ0.44mを測る。柱痕は束柱を除く全ての柱穴で確認された。埋土は暗灰色系の粘質土である。

出土遺物より時期を判断する材料は無いが，建物の構造状ＳＢⅢ116に類似する。そのため，ＳＢⅢ116の時期に概ね類似するものと考え，６世紀後葉に考えられる。（西村）

ＳＢⅢ115（第246図　図版170　ＳＢ87072）

Ｆ10・11区で検出された掘立柱建物である。２間（4.5m）×２間（3.3m），棟方向Ｎ65°Ｅを測る。柱間は桁行2.1～2.4m・梁間1.5～1.8mを測る。柱穴掘方は，円形を呈し，径約0.4m，深さ0.18mを測る。柱痕は一部の柱穴で確認された。埋土は暗灰色系の砂質土である。（西村）

ＳＢⅢ116（第247・433図　図版171　ＳＢ87088）

Ｇ10区で検出された掘立柱建物である。なおこの建物はＳＢⅢ114同様に棟通りに二つの束柱が等間隔で配されている。２間（3.8m）×２間（3.1m），棟方向Ｎ61°Ｅを測る。柱間は桁行1.9m・梁間1.5～1.6mを測る。柱穴掘方は，隅丸方並びに円形を呈し，径約0.7m，深さ0.43mを測る。柱痕は半数の柱穴で確認され，径約0.3mを測り比較的大きい。埋土は暗灰色系の粘質土及び砂質土からなる。

出土遺物として，土師器・須恵器片が少量出土している。出土遺物の中で図化出来るもの１点を抽出した。（第433図19）は６世紀後葉の須恵器坏身である。立ち上がりは直線状に短く延び内側に僅かに内傾する。端部内面には鈍い稜を持つ。出土遺物よりこの建物は６世紀後葉に当る。（西村）

ＳＢⅢ117（第249・433図　ＳＢ87089）

Ｇ10区でＳＢⅢ116と切り合う形で検出した総柱建物である。３間（4.5m）×２間（3.６m），棟方向Ｎ66°Ｅを測る。柱間は桁行1.4～1.6m・梁間1.7～1.9mを測る。柱穴掘方は，円並びに不整円形を呈し，径約0.7m，深さ0.48mを測る。柱痕は束柱と側柱の一部を除く全ての柱穴で確認できた。埋土は暗灰色系砂質土及び粘質土からなる。

出土遺物中図化出来るもの２点抽出した。（第433図20）は土師器甕の上半部である。口縁部は「く」の字状に外反し端部は丸く納まる。体部内外面にはハケが顕著に認められる。（21）は土師器台付皿の高

台部である。この建物の時期は，出土遺物より７世紀頃であろう。（西村）

ＳＢⅢ118（第249図　ＳＢ87103）

Ｆ10区で検出した掘立柱建物である。なおこの建物は北面に廂を伴う。廂は身舎の桁行と同様３間検出したが，東第２柱穴は検出できなかった。３間（5.1m）×２間（4.2m），棟方向Ｎ65°Ｅを測る。この建物の桁行柱間は第１・３間を狭く，第２間を広く設定している。桁行第１・３間1.5m，第２間2.3m・梁間2.0～2.2m・廂の梁間1.0mを測る。柱穴掘方は，円形並びに不整円形を呈し，径約0.6m，深さ0.26mを測る。柱根は身舎と廂の一部の柱穴で検出した。柱穴埋土は暗灰色系の砂質土である。

出土遺物としては，土師器片が少量出土しているだけである。そのため出土遺物より時期を判断する事は出来ないが，主軸方位・配置状でこの建物は，ＳＢⅢ117に類似する。そのため，この建物は，ＳＢⅢ117に類似する時期に当るものと考え，７世紀頃と考えたい。（西村）

ＳＢⅢ119（第250・433図　図版171　ＳＢ87073）

Ｅ・Ｆ10区で検出された掘立柱建物である。なおこの建物は東の梁面には廂をもっている。２間（3.8m）×２間（3.7m），棟方向Ｎ85°Ｅを測る。柱間は桁行1.7～3.6m・梁間1.7～2.0mを測る。柱穴掘方は，隅丸方・円・不整円形等不規則である。径約0.５m，深さ0.26mを測る。柱痕は身舎の一部の柱穴で確認された。埋土は暗灰色系の砂質土で，細分すれば４層に区分できる。

出土遺物中図化出来るもの１点を抽出した。（第433図22）は６世紀後葉の須恵器杯身である。立ち上がりはわずかに外湾気味に短く延び端部は丸く納まる。天井部外面にはヘラケズリが認められる。この建物の時期は，出土遺物より６世紀後葉に当る。（西村）

ＳＢⅢ120（第250・433図　図版172　ＳＢ87071）

Ｅ10区で検出された掘立柱建物である。なお西妻列の棟持柱は突出していて，柱通りは不揃いである。２間（3.5m）×２間（2.6m），棟方向Ｎ79°Ｗを測る。柱間は桁行1.1～2.2m・梁間1.2～1.4mを測る柱掘方は，円形を呈し，径約0.3m，深さ0.16mを測る。柱痕は一部の柱穴で確認された。埋土は暗灰系の砂質土である。

出土遺物中図化出来るもの１点を抽出した。（第433図23）は６世紀後葉の須恵器杯蓋である。口縁端部は尖り気味に丸く納まり，内湾気味に天井部に続く。天井部外面にはヘラケズリが認められる。この建物の時期は，出土遺物より６世紀後葉に当る。（西村）

ＳＢⅢ121（第250・433図　図版172　ＳＢ87074）

Ｅ・Ｆ10区でＳＫⅢ26と切り合う形で検出した掘立柱建物である。東妻柱列ではＳＫⅢ26が切り込んでいるため，棟持柱が失われている。３間（4.6m）×２間（3.0m），棟方向Ｎ74°Ｅを測る。柱間は桁行1.4～1.6m・梁間1.5mを測る。柱穴掘方は，円形並びに不整円形を呈し，径約0.4m，深さ0.27mを測る。柱痕はほとんどの柱穴で確認された。埋土は暗灰色系の砂質土・粘質土からなる。

出土遺物中図化出来るもの１点を抽出した。（第433図24）は甕の把手部である。外面には指頭痕が顕著に残る。この建物の時期は，出土遺物より６～８世紀代である。（西村）

ＳＢⅢ123（第251図）

Ｅ・10区で検出した掘立柱建物で，北側に柵列ＳＡⅢ27を持つ。３間（5.7m）×２間（3.7m），棟方向Ｎ46°Ｅを測る。柱間は，桁行1.4～2.3m・梁間1.7～2.0mを測る。柱穴掘り方は不整円形を呈し，径約0.5m，深さ約0.22mを測る。ＳＢⅢ124と共にＳＤⅢ84もしくはＳＤⅢ83によって区画された地区内の建物である。（藤好）

ＳＢⅢ124（第433図）

Ｄ10区で検出した掘立柱建物で，ＳＢⅢ123と共にＳＤⅢ83・84で区画される。やや不明瞭ではあるものの，４間（8.2m）×２間（3.8m），棟方向Ｎ60°Ｅを測る。ただ，３間×２間の建物が重複しているとすれば，ＳＢⅢ123とほぼ同一規模の建物となり，その可能性も十分考えられる。柱間は，桁行2.0～3.7m・梁間1.8～2.0mを測る。柱穴掘り方は円形を呈し，径約0.4m，深さ0.07～0.23mを測る。本遺構やＳＨⅢ123を「コ」の字型に囲む溝であるＳＤⅢ83は，特にその北部の東西方向の流れは，東半部において，あたかもＳＨⅢ124と対応して，北へ拡張する。またその方位も，ＳＨⅢ125と共通した方位を示す。こうした点からすれば，ＳＨⅢ123とＳＨⅢ124は，方向こそ異なるものの，同一の溝を共有する。両建物は同時併存の可能性が非常に高い。柱穴内には，土師・黒色土器等が少量出土してい(藤好)

ＳＢⅢ125（第433図）

Ｅ10区で検出した掘立柱建物で，ＳＤⅢ84を切り，ＳＢⅢ126・127と重複する。３間（5.３m）×２間（3.8m），棟方向Ｎ25°Ｗを測る。柱間は，桁行1.7～1.8m・梁間約1.9mを測る。柱穴掘り方は不整円形もしくは隅丸方形を呈し，径約0.5m，深さ約0.05～0.19mを測る。柱穴から須恵器杯片等が出土している。時期はＳＤⅢ84を切ることから少なくとも８世紀以降と考えられる。（藤好）

ＳＢⅢ126（第433図）

Ｄ・Ｅ10区で検出した掘立柱建物で，ＳＨⅢ125と重複し，ＳＤⅢ84とＳＢⅢ127を切る。３間（4.9m）×２間（4.0m），棟方向Ｎ64°Ｅを測る。柱間は，桁行1.5～1.8m・梁間約2.0mを測る。柱穴掘り方は円形を呈し，径約0.5m，深さ0.08～0.18mを測る。本建物は，概ねＳＨⅢ125と共通した方位を示し，先行するＳＨⅢ127はＳＨⅢ123と類似した方位を持つことから，本遺構の時期には，条里と共通した方位が採用されていたと考えられる。柱穴内からは須恵器の杯が出土している。時期は出土遺物から11世紀前後と考えられる。（藤好）

ＳＢⅢ128（第251・433図　図版173　ＳＢ87090）

Ｇ・Ｆ10区でＳＢⅢ129・142と切り合う形で検出した掘立柱建物である。３間（5.8m）×２間（3.5m），棟方向Ｎ79°Ｅを測る。柱間は桁行1.5～2.3m・梁間1.7～1.8mを測る。柱穴掘方は，隅丸方・円・楕円等不規則な形態を呈し，径約0.6m，深さ0.34mを測る。柱痕は一部の柱穴で確認された。埋土は暗灰色系の粘質土・ないし砂質土からなる。

出土遺物中図化出来るもの１点を抽出した。（第433図31）は土師器の皿である。平底の底部より，短く内湾し口縁端部に続く。端部は丸く納まる。外面にミガキ内面に放射暗紋が認められる。出土遺物よりこの建物の時期は，７世紀前半頃であろう。（西村）

ＳＢⅢ129（第433図）

Ｆ10区でＳＢⅢ128・142と切り合う形で検出した掘立柱建物である。２間（4.3m）×２間（4.2m），棟方向Ｎ20°Ｗを測る。柱間は，桁行2.0～2.3m・梁間2.0～2.2mを測る。柱穴掘方は，円形ないし不整円形を呈し，径約0.4m，深さ0.22mを測る。

出土遺物中図化出来るもの１点を抽出した。（第433図32）は土師器の皿ないし杯の口縁部である。端部丸く納まり，内面には放射暗紋が認められる。出土遺物よりこの建物の時期は，７世紀頃に考えたい。（西村）

ＳＢⅢ130（第252・433図　図版173　ＳＢ87083）

Ｆ10区でＳＨⅢ28・29，ＳＢⅢ131・132・133等と切り合う形で検出した掘立柱建物である。２間

（4.0m）×２間（3.8m），棟方向N29°Wを測る。柱間は，桁行1.9～2.1m・梁間1.7～2.1mを測る。柱穴掘方は，隅丸方・円・楕円形など不規則な形態を呈し，径約0.5m，深さ0.27mを測る。柱痕は半数の柱穴で確認された。埋土は暗黄灰系の粘質土・砂質土からなる。

出土遺物中図化出来るもの２点を抽出した。（第433図33）は土師器椀の口縁部である。端部は丸く納まる。（34）を須恵器杯の口縁部である。端部は丸く納まる。この建物の時期は，出土遺物より７世紀頃が考えられる。（西村）

ＳＢⅢ131（第433図）

Ｆ10区でＳＨⅢ29，ＳＢⅢ130・132・133等と切り合う形で検出した掘立柱建物である。３間（4.3m）×２間(3.8m)，棟方向N55°Ｅを測る。柱間は，桁行1.3～1.5m・梁間1.7～2.1mを測る。柱穴掘方は，不整円形並びに円形を呈し，径約0.6m，深さ0.22mを測る。柱痕は確認出来なかった。

出土遺物中図化出来るもの２点を抽出した。（第433図35）は土師器甕の口縁部である。ラッパ状に開き口縁は平坦に仕上げる。内面には横ハケを施す。（第433図36）は土師器壺ないし甕の底部である。底部は平底で内・外面には横ハケを施す。出土遺物より詳細な時期を判断できないが，概ね６～８世紀の範囲内で捉えられるものであろう。（西村）

ＳＢⅢ132（第252・434図　ＳＢ87078）

Ｆ10区でＳＨⅢ29，ＳＢⅢ130・131・133・134，ＳＰⅢ01等と切り合う形で検出した掘立柱建物である。３間（5.5m）×２間3.7m），棟方向N12°Wを測る。柱間は，桁行1.6～2.0m・梁間1.8～1.9mを測る。柱穴掘方は，隅丸方形並びに円形を呈し，径約0.7m，深さ0.44mを測る。柱痕は半数以上の柱穴で確認された。埋土は暗灰色系の粘質土・砂質土からなる。

出土遺物中図化出来るもの５点を抽出した。（第434図１）は小形の甕口縁部である。口縁部は「く」の字状に外反し端部は丸く納まる。内面には荒いハケが横方向に認められる。（２～４）は皿の口縁部である。口縁端部は丸く納まり，（３・４）の内面には放射暗紋が認められる。（５）は須恵器高杯の脚端部である。この建物は８世紀後半～９世紀前半に当るＳＰⅢ01を切り込んで構築している。そのため９世紀以降になるものと考えられる。（西村）

ＳＢⅢ133（第253・434図　図版174　ＳＢ87081）

Ｆ10区でＳＨⅢ29，ＳＢⅢ130・131・132・134・等と切り合う形で検出した掘立柱建物である。３間（6.1m）×２間（3.8m），棟方向N61°Ｅを測る。柱間は，桁行1.8～2.2m・梁間1.7～2.1mを測る。柱穴掘方は，隅丸方形・円・楕円形等不規則な形態を呈する。径約0.5m，深さ0.31mを測る。柱痕は約半数の柱穴で確認された。埋土は暗灰色系の砂質土・粘質土からなる。

出土遺物中図化出来るもの２点を抽出した。（第434図６・７）は土師器甕の口縁部である。頸部より外湾気味に口縁端部に続き，端部は平坦に納まるものと，わずかに上方に摘み上げられるものとがある。出土遺物より詳細な時期の判断は出来ないが，主軸方位及び配置より，ＳＢⅢ135・137・139等と類似する７世紀頃が考えられる。（西村）

ＳＢⅢ134（第253・434図　図版174　ＳＢ87076）

Ｅ・Ｆ10区でＳＢⅢ132・133・135・136と切り合う形で検出した掘立柱建物である。３間（5.7m）×２間（3.8m），棟方向N69°Ｅを測る。柱間は，桁行1.6～2.2m・梁間1.8～2.0mを測る。柱穴掘方は，隅丸方・不整円形を呈し，径約0.8m，深さ0.43mを測る。柱痕は全ての柱穴で確認された。埋土は灰褐色系の砂質土からなる。

出土遺物中図化出来るもの４点を抽出した。（第434図８）は土師器杯ないし皿の口縁部である。口縁は外反し端部は丸く肥厚する。（９）は土師器甕口縁部である。（10・11）６世紀後葉の須恵器杯蓋である。（10）の天井部はヘラ切りの後ナデ調整を施し，口縁端部は外下方に延び端部は丸く納まる。出土遺物よりこの建物の時期は，６世紀後葉に当る。（西村）

ＳＢⅢ135（第434図　図版175　ＳＢ87084）

Ｅ10区でＳＢⅢ134と切り合う形で検出した掘立柱建物である。２間（3.2m）×２間（2.8m），棟方向Ｎ61°Ｅを測る。柱間は，桁行1.5～1.7m・梁間1.2～1.6を測る。柱穴掘方は，円・楕円形を呈し，径約0.6m，深さ0.31mを測る。なおこの建物は北に延びる可能性がある。

出土遺物中図化出来るもの２点を抽出した。（第434図12）は須恵器杯身の口縁部である。わずかに外上方に傾き端部は尖り気味に丸く納まる。（13）は須恵器杯蓋である。立ち上がりは短く，尖り気味に納まる。受け部は短く丸く納まる。この建物の時期は，主軸方位及び配置状より７世紀代のＳＢⅢ137に類似する時期が考えられる。（西村）

ＳＢⅢ136（第254・434図　図版175　ＳＢ87077）

Ｅ・Ｆ10区でＳＢⅢ134・137と切り合う形で検出した掘立柱建物である。４間（5.7）×２間（3.9m），棟方向Ｎ79°Ｅを測る。柱間は，桁行1.2～1.6m・梁間1.9～2.0mを測る。柱穴掘方は，隅丸方・円・不整円形等不規則な形態を呈し，径約0.6m，深さ0.38mを測る。柱痕は約半数の柱穴で確認された。埋土は暗灰色系の砂質土である。

出土遺物中図化出来るもの１点を抽出した。（第434図14）は青磁椀の高台部である。遺物中に６世紀後葉の資料を含むが，この建物の時期は概ね９世紀以降であろう。（西村）

ＳＢⅢ137（第254・434図　図版176　ＳＢ87075）

Ｅ９・10区でＳＢⅢ134・136と切り合う形で検出した総柱建物である。３間（5.3m）×２間（3.8m），棟方向Ｎ27°Ｗを測る。柱間は，桁行1.8～2.0m・梁間1.8～2.0mを測る。柱穴掘方は，隅丸方・円・楕円形等不規則な形態を呈し，径約0.7m，深さ0.47mを測る。柱痕は一部の柱穴で確認された。埋土は暗茶灰色系の砂質土ないし粘質土である。

出土遺物としては６・７世紀の土師器・須恵器等が少量出土している。これらの出土遺物中で図化出来るもの６点を抽出した。（第434図15～17）は甕の口縁部である。（18）は土師器皿の口縁部である。内湾気味に延び，端部は丸く納まる。（19）は６世紀後葉の須恵器杯身口縁部である。たちあがりは短く，外湾気味に内傾する。（20）は須恵器高杯脚部である。この建物の時期は，出土遺物より，７世紀代で考えられる。（西村）

ＳＢⅢ138（第434図　図版176　ＳＢ87082）

Ｆ９・10区でＳＢⅢ139と切り合う形で検出した掘立柱建物である。３間（4.2m）×２間（3.0m），棟方向Ｎ13°Ｗを測る。柱間は，桁行1.3～1.4m・梁間1.4～1.6mを測る。柱穴掘方は，円ないしは楕円形を呈し，径約0.6m，深さ0.20mを測る。

出土遺物中図化出来るもの１点を抽出した。（第434図21）は土師器甕の口縁部である。内面にはハケが顕著に認められ，端部は僅かに肥厚する。（22）は土師器椀の口縁部である。遺物より詳細な時期は判明しないが，この建物は，主軸方位及び配置より７世紀前半のＳＢⅢ128に類似する時期が考えられる。（西村）

ＳＢⅢ139（第255・434図　図版177　ＳＢ87079）

Ｆ９・10区でＳＢⅢ138と切り合う形で検出した掘立柱建物である。３間（5.3m）×２間（3.3m），棟方向はＮ23°Ｗを測る。柱間は，桁行1.5～2.1m・梁間1.4～1.9mを測る。柱穴掘方は，円ないし不整円形を呈し，径約0.7m，深さ0.26mを測る。柱痕は四つの柱穴で確認された。埋土は暗灰色系の砂質土ないし粘質土からなる。

出土遺物中図化出来るもの４点を抽出した。（第434図24）は土師器甕の口縁部である。外湾状に屈曲し端部は丸く納まる。内外面共に荒いハケが認められる。（25・26）は底部を欠く土師器皿である。出土遺物よりこの建物の時期は７世紀頃に当るであろう。（西村）

ＳＢⅢ140（第434図）

Ｆ９・10区でＳＢⅢ141と切り合う形で検出した掘立柱建物である。２間（3.7m）×２間（3.4m），棟方向Ｎ66°Ｅを測る。柱間は，桁行1.7～2.0m・梁間1.6～1.8mを測る。柱穴掘方は，円並びに不整円形を呈し，径約0.5m，深さ0.14mを測る。

出土遺物中図化出来るもの１点を抽出した。（第434図27）は口縁部を欠く須恵器杯身である。底部は平坦で屈曲し口縁部方向に延びる。出土遺物及び配置状の特徴より８世紀頃であろう。（西村）

ＳＢⅢ141（第434図）

Ｆ９・10区でＳＢⅢ140と切り合う形で検出した掘立柱建物である。２間（3.4m）×２間（2.7m），棟方向Ｎ27°Ｗを測る。柱間は，桁行1.7m・梁間1.1～1.6mを測る。柱穴掘方は，円形を呈し，径約0.4m，深さ0.11mを測る。

出土遺物中図化出来るもの１点を抽出した。（第434図28）は高台の付く須恵器杯身の底部である。高台は屈曲部の近くに接合され，断面不整台形状を呈する。出土遺物より８世紀後半に当る。（西村）

ＳＢⅢ142（第255図　図版177　ＳＢ87091）

Ｆ９・10区でＳＢⅢ128・129・143・144・150・151等と切り合う形で検出した掘立柱建物である。３間（4.5m）×３間（3.9m），棟方向Ｎ22°Ｗを測る。柱間は，桁行1.1～1.7m・梁間1.9～2.0mを測る。柱穴掘方は，円形ないし不整円形を呈し，径約0.8m，深さ0.26mを測る。柱痕は一つの柱穴を除く全ての柱穴で確認された。埋土は灰黄色系の粘質土である。出土遺物としては，６世紀末・７世紀初頭前後の土師器・須恵器片が少量出土している。そのため出土遺物より，この建物の時期は，概ね７世紀前半頃に当るであろう。（西村）

ＳＢⅢ143（第256・434図　図版177　ＳＢ87092）

Ｆ９・10区でＳＢⅢ142・143・144・150・151等と切り合う形で検出した掘立柱建物である。３間（4.8m）×２間（3.8m），棟方向Ｎ28°Ｗを測る。柱間は，桁行1.4～1.9m・梁間1.9mを測る。柱穴掘方は，隅丸方ないし不整円形を呈し，径約0.7m，深さ0.42mを測る。柱痕は全ての柱穴で確認された。また大多数の柱穴に根石ないし詰め石をしている。埋土は灰黄色系の粘質土ないし砂質土である。

出土遺物中図化出来るもの１点を抽出した。（第434図29）は天井部を欠く須恵器杯蓋である。出土遺物より概ね，この建物は８世紀前半前後であろう。（西村）

ＳＢⅢ144（第256・434図　ＳＢ87099）

Ｆ9区でＳＢⅢ142・143・145・150・151等と切り合う形で検出した掘立柱建物である。３間（6.5m）×2間（4.0m），棟方向Ｎ35°Ｗを測る。柱間は，桁行2.0～2.3m・梁間1.8～2.2mを測る。柱穴掘方は，円形ないし不整円形を呈し，径約0.5m，深さ0.33mを測る。柱痕は南妻柱列の東第2・3柱穴で確認された。

出土遺物中図化出来るもの１点を抽出した。（第434図30）須恵器皿の口縁及び底部片である。底部は平坦で屈曲し口縁端部に続く。端部は尖り気味に丸く納まる。出土遺物よりこの建物は，８世紀後半前後であろう。（西村）

ＳＢⅢ145（第257・434図　ＳＢ87098）

Ｆ９区でＳＢⅢ144・150・151，ＳＫⅢ27等と切り合う形で検出した総柱建物である。東柱の一部はＳＢⅢ151により切られている。３間（3.7m）×２間（3.3m），棟方向Ｎ22°Ｗを測る。柱間は，桁行1.2～1.3m・梁間1.6～1.7mを測る。柱穴掘方は，不整ないし円形を呈し，径約0.8m，深さ0.28mを測る。柱痕は７柱穴で確認された。埋土は暗灰黄色系の粘質土ないし砂質土である。

出土遺物中図化出来るもの２点を抽出した。（第434図31）は皿ないし杯の口縁部である。内湾気味に端部に続き，端部は丸く納まる。内面には放射暗紋が認められる。（32）は７世紀前葉の須恵器の杯蓋の口縁部である。出土遺物よりこの建物は，７世紀の前半に当る。（西村）

ＳＢⅢ146（第434図　図版178　ＳＢ87107）

Ｉ９区で検出した掘立柱建物で，ＳＤⅢ86を切る。東部側柱列だけを検出したと考えられる。？間（？m）×２間（4.5m），棟方向Ｎ23°Ｅを測る。柱間は，梁間2.1～2.4mを測る。柱穴掘り方は円形を呈し，径約0.4m，深さ約0.15mを測る。柱穴内から須恵器の口縁が出土している。時期は出土遺物から６世紀後葉と考えられる。（藤好）

ＳＢⅢ147（第257図　図版179　ＳＢ87093）

Ｇ９・10区でＳＢⅢ148，ＳＤⅢ109と切り合う形で検出した掘立柱建物である。４間（5.2m）×３間（3.2m），棟方向Ｎ10°Ｗを測る。柱間は，桁行1.1～1.4m・梁間1.0～1.2mを測る。柱穴掘方は，隅丸方形ないし不整円形を呈し，径約0.6m，深さ0.33mを測る。柱痕は全ての柱穴で確認された。埋土は灰褐色系の砂質土ないし粘質土である。

土師器・須恵器の細片のみで，時期を判断するうえで基準になる資料は出土していない。そのため方位及び配置を基準にすれば，ＳＢⅢ149・150等が同一グループをなすものと考えられ，それらの建物の時期より６世紀後葉前後の時期が考えられる。（西村）

ＳＢⅢ148（第257・434図　図版179　ＳＢ87094）

Ｇ９区でＳＢⅢ147，ＳＤⅡ29，ＳＤⅢ109と切り合う形で検出した掘立柱建物である。３間（6.4m）×１間（4.2m），棟方向Ｎ67°Ｅを測る。柱間は，桁行1.9～2.4m・梁間4.２mを測る。柱穴掘方は，円形を呈し，径約0.3m，深さ0.37mを測る。なお，この建物には棟持柱が検出できなかったが，現状の梁間寸法（4.2m）からみて削平により消失しているものと考えられる。

出土遺物中図化出来るもの２点を抽出した。（第434図34）は底部を欠く土師器の椀である。（35）は須恵器杯の底部である。出土遺物よりこの建物の時期は，11世紀前後であろう。（西村）

ＳＢⅢ149（第256図　図版179　ＳＢ87095）

Ｇ９・10区でＳＢⅢ150の南側で検出した掘立柱建物である。２間（4.0m）×２間（3.3m），棟方向Ｎ５°Ｗを測る。柱間は，桁行1.9～2.1m・梁1.6～1.7mを測る。柱穴掘方は，円形ないし隅丸方形を呈し，径約0.4m，深さ0.19mを測る。柱痕は南側柱列の一部の柱穴で確認された。埋土は暗灰色系の砂質土ないし粘質土である。

図化に耐えるような遺物は出土していないが，６世紀後葉の須恵器を含むため，概ねこの時期に当るであろう。（西村）

ＳＢⅢ150（第258・434図　図版180　ＳＢ87096）

Ｇ・Ｆ９区でＳＢⅢ142・143・144・145・155と切り合う形で検出した総柱建物である。２間（4.3m）×２間（3.4m），棟方向Ｎ79°Ｅを測る。柱間は，桁行1.9～2.4m・梁間1.5～1.9mを測る。柱穴掘方は，隅丸方形ないし不整円形を呈し，径約0.7m，深さ0.40mを測る。柱痕は一つの柱穴を除く全ての柱穴で確認された。埋土は灰黄色系の粘質土である。

出土遺物中図化出来るもの２点を抽出した。（第434図36）は須恵器杯蓋である。天井部はヘラケズリを施し丸味を帯びて口縁端部に続く。端部は丸く納まる。（37）は器種不明の須恵器である。出土遺物より，この建物の時期は６世紀後葉に当る。（西村）

ＳＢⅢ151（第258・435図　図版178　ＳＢ87097）

Ｆ９区でＳＢⅢ142・143・144・145，ＳＫⅢ28と切り合う形で検出した総柱建物である。３間（4.7m）×２間（3.5m），棟方向Ｎ79°Ｅを測る。柱間は，桁行1.1～2.9m・梁間1.4～2.1mを測る。柱穴掘方の内側柱は，円ないし不整円形を呈し，径約0.7m，深さ0.37mを測る。束柱の掘り方は小形の円形を呈で径約0.4m，深さ0.14mを測る。柱痕は４柱穴を除く全ての柱穴で確認された。埋土は灰黄褐色系の砂質土である。

出土遺物中図化出来るもの２点を抽出した。（第435図１）は土師器の高杯の脚部片である。（２）は須恵器杯蓋である。天井部はヘラケズリを施し，体部との境には一条の稜をなす。口縁端部は平坦に仕上げている。器壁は比較的厚い。出土遺物は，６世紀後葉の時期を示す物があるが，配置よりＳＢⅢ152と同一時期，７世紀頃になる余地もある。（西村）

ＳＢⅢ152（第259・435図　図版180　ＳＢ87080）

Ｆ９区で検出した総柱建物である。３間（5.5m）×２間（3.6m），棟方向Ｎ83°Ｅを測る。柱間は，桁行1.7～2.0m・梁間1.8mを測る。側柱の柱穴掘方は，円形ないし不整円形を呈し，径約0.7m，深さ0.41mを測る。束柱の柱穴掘方は小形の円形を呈し，径約0.3m，深さ0.12mを測る。柱痕は一つ側柱と束柱を除く全ての柱穴で確認された。埋土は暗灰褐色系の砂質土である。

出土遺物中図化出来るもの３点を抽出した。（第435図３）は底部を欠く土師器の皿である。口縁端部は丸く仕上げ，外面にはミガキ，内面には放射暗紋を施している。（４）は須恵器杯身である。たちあがりは短くわずかに内傾している。底部はヘラケズリを施している。（５）は底部を欠く須恵器杯身である。体部は直線状に外上方に延び，端部は尖り気味に丸く納まる。出土遺物よりこの建物は７世紀前半頃に当る。（西村）

ＳＢⅢ153（第259図　図版181　ＳＢ87101）

Ｇ９区でＳＢⅢ154を切り込む形で検出した掘立柱建物である。３間（6.0m）×２間（3.８m），棟方向Ｎ68°Ｅを測る。柱間は，桁行1.8～2.3m・梁間1.9mを測る。柱穴掘方は，円形ないし不整円形を呈し，径約0.6m，深さ0.40mを測る。柱痕は３つの柱穴を除く全ての柱穴で確認された。埋土は暗灰褐色系の砂質土ないし粘質土である。出土遺物より，時期の判断が出来る資料はないが，概ね６～８世紀頃であろう。（西村）

ＳＢⅢ154（第259・435図　図版181　ＳＢ87102）

Ｇ９区でＳＢⅢ153に切きられた形で検出した掘立柱建物である。北妻柱列の棟持柱はＳＢⅢ153により消失している。２間（3.2m）×２間（2.4m），棟方向Ｎ21°Ｗを測る。柱間は，桁行1.6m・梁間1.0～1.4mを測る。柱穴掘方は，円形を呈し，径約0.3m，深さ0.14mを測る。

出土遺物中図化出来るもの１点を抽出した。（第435図６）は土師器の甕の口縁部である。明確に時期が解る遺物はないが，主軸方位及び配置状よりこの建物は，ＳＢⅢ155・143等の概ね８世紀頃であろう。（西村）

ＳＢⅢ155（第260・435図　図版181　ＳＢ87100）

Ｇ９区でＳＢⅢ150，ＳＨⅢ39と切り合う形で検出した総柱建物である。３間（4.1m）×２間（3.3m），棟方向Ｎ28°Ｗを測る。柱間は，桁行1.2～1.6m・梁間1.5～1.8mを測る。柱穴掘方は，円形ないし不整円を呈し，径約0.5m，深さ0.32mを測る。柱痕は２柱穴を除く全ての柱穴で確認された。埋土は灰褐色系の砂質土である。

出土遺物中図化出来るもの２点を抽出した。（第435図７）は土師器杯の口縁部である。（８）は須恵器杯身口縁部である。出土遺物より，細かな時期の判断が出来る資料は少ないが，主軸方位及び配置よりＳＢⅢ143等とほぼ同一時期時期と考えられ，概ね８世紀頃であろう。（西村）

ＳＢⅢ156（第260・435図　ＳＢ87054）

Ｇ９区で検出した。３間（4.3m）×２間（3.0m）で，棟方向Ｎ84°Ｅとほぼ真北に直交する掘立柱建物である。柱間寸法の平均は桁行1.4～1.5m・梁間1.4～1.6mを測る。柱穴掘り方は円形ないしは楕円形を呈し，径約0.6m，深さ0.09～0.31mとなる。柱穴からは須恵器短頸壺蓋，土師器台付皿片を出土した。

（第156図９）は土師器台付皿で強く張った脚部を持つ。内面に暗文は認められない。（10）は須恵器短頸壺蓋頂部と体部の境はかなり明瞭で箱形を呈する。口縁部は小さく外に摘み出し端部は面を成す。７世紀中～後葉に比定できる。（大久保）

ＳＢⅢ158（第435図　ＳＢ87108）

Ｇ・Ｈ９区で検出した掘立柱建物で，ＳＨⅢ37等と重複する。２間（3.2m）×２間（2.4m），棟方向Ｎ90°Ｅを測る。柱間は，桁行1.5～1.7m・梁間1.1～1.3mを測る。柱穴掘り方は円形を呈し，径約0.4m・深さ約0.25mを測る。柱穴内から須恵器杯が出土している。時期は，出土遺物からすれば６世紀後半と考えられる。（藤好）

ＳＢⅢ160（第435図　ＳＢ87058）

Ｇ８・９区で検出した。２間（4.0m）×２間（3.0m）で，棟方向Ｎ85°Ｅとほぼ真北に直交する掘立柱建物である。柱間寸法の平均は桁行2.0m・梁間1.5mと桁行方向がかなり長めである。柱穴掘り方は円形を呈するものが多く，径約0.6m，深さ0.30mとなる。なお北列中央穴で須恵器杯身を出土している。

（第435図13）は須恵器杯身で比較的高い立上り部を持つ。６世紀後葉に比定できる。（大久保）

ＳＢⅢ161（第261図　ＳＢ8755）

Ｇ９区で検出した。竪穴住居ＳＨⅢ44を切る。２間（3.4m）×２間（3.3m），棟方向Ｎ80°Ｅの総柱建物である。柱間寸法の平均は桁行1.4～2.0m・梁間1.6～1.7mを測る。柱穴掘り方は円形ないしは楕円形を呈する。竪穴住居との重複のため，検出したかぎりでは径・深さ共にばらつきが大きく，径約0.2～0.5m，深さ0.25mを測る。東列北１穴で柱痕を確認した。遺物は伴わない。（大久保）

ＳＢⅢ162（第261・435図　ＳＢ87056）

Ｇ８・９区で検出した。竪穴住居ＳＨⅢ45を切る。３間（4.2m）×２間（3.5m），棟方向Ｎ74°Ｅの掘立柱建物である。西側棟持柱穴を欠損する。柱間寸法の平均は桁行1.1～1.9m・梁間1.7～1.8mを測

るが，両側とも桁行方向中央の柱間を左右に比べ広く設定する特徴を持つ。柱穴掘り方は円形ないしは略方形を呈し，径約0.6m，深さ0.44mを測る。

（第435図14）は須恵器杯身。比較的口径が大きく高い立上り部を持つ。6世紀後葉に位置付け得る。

（大久保）

ＳＢⅢ163（第435図）

Ｆ・Ｇ９区で検出した。北半部を溝ＳＤⅢ113に切られ形態規模は不明であるが，梁間は２間（3.0m）となる。棟方向はＮ00°Ｅと真北を向く掘立柱建物である。柱間寸法の平均は桁行1.2～1.5m・梁間1.3～1.7mを測る。柱穴掘り方はほぼ円形を呈し，径約0.4m，深さ0.25mを測る。柱穴から土師器甕類口縁部小片を出土した。７～８世紀代の溝に切られることから６世紀代に比定できる可能性が高い。

（第435図15）は甕口縁部片。端部は丸く納め内面は横ハケを施す。古墳時代後期から奈良時代まで存在し得る器種である。本例自体は小片のためそれ以上の限定は出来ない。（大久保）

ＳＢⅢ164（第261図　図版182　ＳＢ87035）

Ｆ８・９区で検出した。２間（3.9m）×２間（3.3m），棟方向Ｎ31°Ｗの総柱建物である。なお西辺に接する溝ＳＤⅢ94は本建物に伴う雨落ち溝の可能性が高い。柱間寸法の平均は桁行1.9～2.0m・梁間1.6～1.7mと，桁行方向がやや長い。柱穴掘り方はほぼ円形を呈し，径約0.5m，深さ0.22mを測る。全体的に残りは良くないが，特に束柱が著しく浅い。東列すべて，南列２穴，西列北１・２穴で柱痕を確認した。（大久保）

ＳＢⅢ165（第262図　図版182　ＳＢ87044）

Ｆ８・９区で検出した。２間（3.7m）×２間（3.3m），棟方向Ｎ66°Ｅの総柱建物である。柱間寸法の平均は桁行1.8～1.9m・梁間1.5～1.8mを測る。柱穴掘り方は束柱が円形，他は略方形を呈し，径約0.5～0.8m，深さ0.41mを測る。南列西１・２穴を除き柱痕を確認した。それによれば柱径は0.2m程度となる。また未確認の２穴では掘り方底面に拳大の礫を据えている。遺物は伴わない。（大久保）

ＳＢⅢ166（第262図　図版183　ＳＢ87050）

Ｆ８・９区で検出した。ＳＢⅢ164・165・167等と重複し，西列北２穴，南列西３穴を欠損する。４間（7.6m）×３間（5.2m），棟方向Ｎ８°Ｅとほぼ真北を向く掘立柱建物である。柱間寸法の平均は桁行1.6～2.2m・梁間1.6～1.8mを測る。柱穴掘り方は円形ないしは略方形を呈し，径約0.5m，深さ0.10～0.31mを測る。南列西２穴を除いて柱痕を検出した。それによれば柱径は0.2m程度となる。遺物は伴わない。（大久保）

ＳＢⅢ167（第263・435図　図版183　ＳＢ8753）

Ｅ９区で検出した。溝ＳＤⅢ113等と重複する。３間（6.7m）×２間（4.6m），棟方向Ｎ28°Ｗの掘立柱建物である。柱間寸法の平均は桁行0.09m・梁間0.28mを測る。柱穴掘り方は円形ないしは楕円形を呈し，径約0.5m，深さ0.09～0.28mを測る。東列北２穴を除いて柱痕を検出した。柱穴から須恵質杯を出土した。

（第435図16）は須恵質杯で極めて薄手である。体部は直線的に開く。９～10世紀に位置付けられる。

（大久保）

ＳＢⅢ168（第263図　ＳＢ8759）

Ｅ・Ｆ９区で検出した。溝ＳＤⅢ113等と重複する。４間（6.6m）×３間（4.3m），棟方向Ｎ10°Ｗとほぼ真北を向く掘立柱建物である。南列西３穴を欠損する。柱間寸法の平均は桁行1.4～2.1m・梁間

1.2～1.7mを測る。柱穴掘り方は不整円形を呈するものが多く，径約0.5m，深さ0.31mを測る。東列北２穴，西列北１穴で柱痕を検出した。それによれば柱径は0.2m程度となる。遺物は伴わない。(大久保)

ＳＢⅢ169（第435図）

Ｅ９区でＳＢⅢ168と切り合いＳＢⅢ170に切られる形で検出した掘立柱建物である。２間（4.3m）×２間（3.2m），棟方向N79°Ｅを測る。柱間は，桁行2.0～2.3m・梁間1.1～2.1mを測る。柱穴掘方は，不整円形を呈し，径約0.7m，深さ0.18mを測る。

出土遺物中図化出来るもの２点抽出した。（第435図17）は土師器皿の口縁部である。器壁は比較的厚く端部は丸く仕上げている。(18）は須恵器高杯の脚部である。外面に一条の沈線を施している。出土遺物より詳細な時期は摑めないが，主軸方位及び配置状でＳＢⅢ238・250等とほぼ同一時期と考えられ，時期的には７世紀後半前後に当るものと考えたい。（西村）

ＳＢⅢ171（第264・435図　ＳＢ87070）

Ｅ９区でＳＢⅢ172・173，ＳＨⅢ46と切り合う形で検出した掘立柱建物である。４間（7.5m）×２間（4.2m），棟方向N21°Wを測る。柱間は，桁行1.7～1.9m・梁間1.9～2.3mを測る。柱穴掘方は，隅丸方形ないし円形形を呈し，径約0.6m，深さ0.37mを測る。柱痕は１つの柱穴で確認されたのみである。

出土遺物中には，７～９世紀の土器を含む。それらの土器より図化出来るもの１点抽出した。（第435図19）は底部を欠く土師器皿である。体部は内湾し端部に続く，端部は玉状に肥厚する。外面にはミガキ，内面には放射暗紋を施している。出土遺物より９世紀前後の時期と考えられる。（西村）

ＳＢⅢ172（第435図　図版184　ＳＢ87065）

Ｅ９区でＳＢⅢ171・173・174，ＳＨⅢ46と切り合う形で検出した掘立柱建物である。３間（5.6m）×２間（3.3m），棟方向N21°Wを測る。柱間は，桁行1.7～2.0m・梁間1.6～1.7mを測る。柱穴掘方は，円形ないし不整円形を呈し，径約0.7m，深さ0.31mを測る。

出土遺物中図化出来るもの３点を抽出した。（第435図20・21）は土師器皿である。(20）は底部より内湾気味に口縁部に続き，端部は平端気味に仕上げる。外面下半部がヘラケズリ及びミガキ，上半部はミガキ，内面には放射暗紋が認められる。(21）の内面には暗紋は認められない。(22）は須恵器杯身である。たちあがりは短く内傾気味に仕上げ，受部は短く尖り気味に丸く仕上げている。出土遺物よりこの建物は，６世紀後葉に当る。（西村）

ＳＢⅢ173（第264・435図　図版184　ＳＢ87069）

Ｅ８・９区でＳＢⅢ171・172・174と切り合い，中でもＳＢⅢ174に切られる形で検出した掘立柱建物である。３間（5.8m）×２間（4.2m），棟方向N11°Wを測る。梁間の柱間は2.0～2.2m，桁行の柱間はかなり不揃いで1.7～2.3mを測る。柱穴掘方は，円形ないし不整円形を呈し，径約0.7m，深さ0.32mを測る。柱痕は４柱穴で確認された。埋土は暗灰褐色系の砂質土である。

出土遺物中図化出来るもの３点を抽出した。（第435図23）は土師器甕である。(24）はつまみを欠く須恵器杯蓋である。内面には短くかえりが付く。(25）は須恵器の甕口縁部である。出土遺物よりこの建物の時期は７世紀前半頃に当る。（西村）

ＳＢⅢ174（第435図）

Ｅ８・９区でＳＢⅢ169・173・175・176と切り合う形で検出した掘立柱建物である。３間（4.4m）×２間（3.7m），棟方向N23°Wを測る。柱間は，桁行1.3～1.6m・梁間1.8～1.9mを測る。柱穴掘方は，円形ないし不整円形を呈し，径約0.7m，深さ0.24mを測る。

出土遺物中図化出来るもの１点を抽出した。（第435図26）は土師器の甕の頸部及び口縁部である。くの字状に外上方に延び，端部は平坦に仕上げるが，わずかに上方に肥厚している。内面の頸部より下半はヘラケズリを施している。この建物は，主軸方位及び配置状で，ＳＢⅢ252とほぼ同一時期と考えられ，６世紀後葉頃であろう。（西村）

ＳＢⅢ176（第265・435図　図版185　ＳＢ87066）

Ｅ８区でＳＢⅢ174・175・177と切り合う形で検出した総柱建物である。４間（5.4m）×２間（3.2m），棟方向Ｎ70°Ｅを測る。柱間は，桁行1.2～1.6m・梁間1.6mを測る。柱穴掘方は，不整円形を呈し，径約0.6m，深さ0.18mを測る。柱痕は３柱穴で確認された。埋土は暗灰褐色系の砂質土である。

出土遺物中図化出来るもの４点を抽出した。（第435図27）は土師器皿の口縁部である。外面にはヘラミガキが施されている。（28）は須恵器杯蓋である。天井部には平坦なつまみが付く，内面には短い返りが付く。（29）は底部を欠く６世紀後葉の須恵器杯身である。たちあがりは短くわずかに内傾する。受け部は短く丸く仕上げている（30）は高台部を欠く，須恵器杯身である。器壁は厚く端部を丸く仕上げる。出土遺物より，この建物は６世紀後葉に当る。（西村）

ＳＢⅢ177（第435図）

Ｅ８区でＳＢⅢ176・250・252・253と切り合う形で検出した掘立柱建物である。２間（6.7m）×１間（3.6m），棟方向Ｎ27°Ｗを測る。柱間は，桁行3.2～3.5m・梁間1.7～1.9mを測る。柱穴掘方は，円形ないし不整円形を呈し，径約0.6m，深さ0.28mを測る。

出土遺物中図化出来るもの１点を抽出した。（第435図31）は土師器椀の口縁部である。端部は如意状外反し，尖り気味に丸く納まる。なお，この建物の周囲には，複数の建物及び，柱穴が多数検出されている。そのため，この中世の土器は，混入によるものである可能性が高い。この建物の時期は，主軸方位・配置状の特徴よりＳＨⅢ40，ＳＢⅢ170等と同一時期の可能性が高く，６世紀末～７世紀初頭前後の時期が考えられる。（西村）

ＳＢⅢ178（第435図）

Ｅ９区で検出した掘立柱建物である。残りが悪く西半部は検出できなかった。１間以上（2.3m以上）×２間（3.4m），棟方向Ｎ48°Ｅを測る。柱間は，桁行2.3m・梁間1.3～2.1mを測る。柱穴掘方は，円形ないし不整円形を呈し，径約0.6m，深さ0.19mを測る。

出土遺物中図化出来るもの１点を抽出した。（第435図32）は６世紀後葉の須恵器杯蓋である。天井部より体部にかけては，丸味を持て口縁部に至り，端部を丸く仕上げている。天井部にはヘラケズリが認められる。この建物の時期は，図化資料以外の土器より７世紀中葉前後に当るであろう。（西村）

ＳＢⅢ180（第435図）

Ｅ９区でＳＢⅢ179と切り合う形で検出した総柱建物である。２間（4.7m）×２間（3.8m），棟方向Ｎ62°Ｅを測る。柱間は，桁行2.0～2.7m・梁間1.7～2.1mを測る。柱穴掘方は，円形を呈し，径約0.5m，深さ0.26mを測る。

出土遺物中図化出来るもの１点を抽出した。（第435図33）は土師器椀である。端部は如意状に外反し尖り気味に丸く仕上げる。出土遺物よりこの建物の時期は，概ね９・10世紀頃であろう。（西村）

ＳＢⅢ181（第436図）

Ｄ９区でＳＢⅢ180の東側で検出した掘立柱建物である。残りが悪く東半部は未検出である。２間（3.8m）以上×２間（4.1m），棟方向Ｎ61°Ｅを測る。柱間は，桁行1.7～2.1m・梁間1.5～2.6mを測

る。柱穴掘方は，円形ないし不整円形を呈し，径約0.5m，深さ0.19mを測る。

出土遺物中図化出来るもの２点を抽出した。（第436図１）は内黒の黒色土器椀の底部である。高台部は垂直気味に短く，外下方に延び端部を丸く仕上げる。（２）は須恵器の杯底部である。底部は平坦で屈曲し外上方に延びる。出土遺物よりこの建物の時期は概ね９・10世紀頃であろう。（西村）

ＳＢⅢ182（第436図）

Ｅ８・９区で検出した掘立柱建物である。２間（6.4m）×１間（4.0m），棟方向Ｎ83°Ｅを測る。柱間は，桁行2.9～3.5m・梁間4.0mを測る。柱穴掘方は，円形を呈し，径約0.6m，深さ0.27mを測る。

出土遺物中図化出来るもの３点を抽出した。（第436図３）は長胴甕の体部である。外面には荒い縦方向のハケ，内面には横方向の板ナデが施されている。（４）は土師器の杯底部である。（５）は須恵器杯底部である。底部は平坦で，屈曲し外上方に延びる。内外面には火襷が認められる。出土遺物よりこの建物の時期は概ね７～９世紀頃であろう。（西村）

ＳＢⅢ183（第265・436図　図版185　ＳＢ87063）

Ｅ８区で検出した掘立柱建物である。３間（5.9m）×３間（4.2m），棟方向Ｎ75°Ｅを測る。柱間は，桁行1.9～2.0m・梁間1.2～1.6mを測る。柱穴掘方は，円形を呈し，径約0.5m，深さ0.39mを測る。柱痕は６柱穴で確認された。埋土は暗灰色系の砂質土ないしシルトである。

出土遺物中図化出来るもの３点を抽出した。（第436図６）は甕の上半部である。体部はわずかに内傾し頸部に続き屈曲して口縁端部に至り，端部は平坦に仕上げている。調整は内外面ともにハケが認められる。頸部外面には指頭痕が認められる。（７・８）は天井部を欠く６世紀後葉の須恵器杯蓋である。（８）の外面には，鈍い一条の稜線が認められる。出土遺物よりこの建物の時期は，６世紀後葉前後であろう。（西村）

ＳＢⅢ184（第436図）

Ｄ９区でＳＢⅢ185の北側で検出した掘立柱建物である。３間（5.7m）×１間（2.2m），棟方向Ｎ70°Ｅを測る。柱間は，桁行1.6～2.2m・梁間2.2mを測る。柱穴掘方は，円形ないし不整円形を呈し，径約0.6m，深さ0.16mを測る。

出土遺物中図化出来るもの２点抽出した。（第436図９・10）は須恵器杯身の口縁部である。端部は丸く仕上げている。その外の資料を含めた出土遺物より，この建物の時期は９～10世紀前後であろう。（西村）

ＳＢⅢ185（第436図）

Ｄ８・９区でＳＢⅢ184の南側で検出した掘立柱建物である。３間（6.7m）×１間（3.9m），棟方向Ｎ70°Ｅを測る。柱間は，桁行2.2～2.3m・梁間3.9mを測る。柱穴掘方は，円形ないし楕円形を呈し，径約0.5m，深さ0.25mを測る。

出土遺物中図化出来るもの３点抽出した。（第436図11・12）は土師器杯である。（12）は口縁部を欠くもので，底部は短く突出すし，体部は外上方に直線状に延びる。（13）は底部の一部を欠く須恵器杯である。底部は平坦で，屈曲し直線状に端部に至る。端部は丸く仕上げている。出土遺物よりこの建物の時期は，９～10世紀頃に当る。（西村）

ＳＢⅢ186（第436図）

Ｊ８区で検出した掘立柱建物である。南北両隅の柱穴は土坑により切られている。２間（4.9m）×２間（3.6m），棟方向Ｎ28°Ｗを測る。柱間は，桁行2.4～2.5m・梁間1.5～2.1mを測る。柱穴掘方は，円

形を呈し，径約0.3m，深さ0.20mを測る。

出土遺物として，土師器・瓦器片が出土している。出土遺物中図化出来るもの１点を抽出した。（第436図14）は土師器の小皿である。底部は平坦で，ヘラ切りの後ナデを施している。出土遺物より11世紀頃が考えられる。（西村）

ＳＢⅢ187（第436図）

Ｊ８区でＳＢⅢ188と切り合う形で出した掘立柱建物である。３間（6.2m）×２間（4.3m），棟方向Ｎ26°Ｗを測る。柱間は，桁行1.8～2.4m・梁間2.1～2.2mを測る。柱穴掘方は，円形ないし不整円形を呈し，径約0.4m，深さ0.14mを測る。

出土遺物として，土師器・瓦器・瓦質土器等が出土している。出土遺物中図化出来るもの１点を抽出した。（第436図15）は瓦器椀の口縁部である。端部はわづかに丸く肥厚させ，外面下半に指頭痕，内面にはヘラミガキを施している。出土遺物よりこの建物の時期は12・13世紀前後と考えられる。（西村）

ＳＢⅢ188（第266・436図　ＳＢ87115）

Ｊ８区でＳＢⅢ187と切り合う形で検出した掘立柱建物である。２間（4.8m）×１間（2.６m），棟方向Ｎ20°Ｗを測る。柱間は，桁行2.3～2.5m・梁間2.6mを測る。柱穴掘方は，円形ないし不整円形を呈し，径約0.3m，深さ0.24mを測る。

出土遺物中図化出来るもの１点を抽出した。（第436図16）は土師器の小皿である。底部は平坦で，ヘラ切りの後ナデを施している。出土遺物よりこの建物の時期は，13世紀前後と考えられる。（西村）

ＳＢⅢ189（第266図　図版186　ＳＢ87113）

Ｋ８区で検出した掘立柱建物である。３間（6.3m）×１間（3.7m），棟方向Ｎ27°Ｗを測る。柱間は，桁行2.0～2.2m・梁間3.7mを測る。柱穴掘方は，円形を呈し，径約0.４m，深さ0.25mを測る。埋土は茶灰色系の砂質土である。

出土遺物として土師器の細片が少量出土しているだけであり，詳細な時期の判断はつかないが，方位・配置状の特徴よりＳＢⅢ187と類似する時期が考えられる。（西村）

ＳＢⅢ191（第266・436図　ＳＢ87114）

Ｉ８区でＳＢⅢ192の北側で検出した掘立柱建物である。４間（8.2m）×２間（4.4m），棟方向Ｎ20°Ｗを測る。柱間は不揃いで，桁行1.3～3.0m・梁間1.8～2.6mを測る。柱穴掘方は，円形ないし不整円形を呈し，径約0.5m，深さ0.25mを測る。

出土遺物中図化出来るもの２点を抽出した。（第436図17）は内黒の黒色土器椀の底部である。高台部は外下方に短く延び端部は丸く仕上げている。（18）は土師器の小皿である。底部はヘラ切りである。これらの図化資料以外のものとして，土師器・須恵器・黒色土器等が出土している。出土遺物よりこの建物の時期は12世紀以降に当るものと考えられる。（西村）

ＳＢⅢ192（第436図　図版186　ＳＢ87112）

Ｉ７・８区でＳＢⅢ191の南側で検出した掘立柱建物である。２間（4.3m）×１間（2.9m），棟方向Ｎ62°Ｅを測る。柱間は，桁行1.9～2.4m・梁間2.9mを測る。柱穴掘方は，円形を呈し，径約0.4m，深さ0.10mを測る。

出土遺物中図化出来るもの２点を抽出した。（第436図19）は瓦器の椀である。高台部は短く内湾気味に口縁部に続く。口縁端部は丸く仕上げる。外面下半部には指頭痕上半部にミガキ内面下半には暗紋が施されている。（20）は土師器椀底部である。出土遺物よりこの建物の時期は，10・11世紀前後であろ

う。（西村）

ＳＢⅢ194（第436図）

Ｉ７区でＳＡⅢ45と切り合う形で検出した掘立柱建物である。なお東西両面には柵列ＳＡⅢ44・46が主軸方向を合わせ配されている。３間（6.1m）×２間（5.0m），棟方向Ｎ24°Ｗを測る。柱間は，桁行2.0～2.1m・梁間2.4～2.6mを測る。柱穴掘方は，円形を呈し，径約0.3m，深さ0.11mを測る。

出土遺物中図化出来るもの２点を抽出した。（第436図21）は土師器椀である。体部は外上方に延び，端部は丸く仕上げる。（22）は土師器小皿である。底部は平坦で，ヘラ切りを施している。出土遺物よりこの建物の時期は，10・11世紀前後であろう。（西村）

ＳＢⅢ195（第267図）

Ｊ６・７区でＳＤⅢ159に切られる形で検出した掘立柱建物である。３間（6.2m）×２間（3.6m），棟方向Ｎ67°Ｅを測る。柱間は，桁行2.0～2.1m・梁間1.7～1.8mを測る。柱穴掘方は，円形ないし不整円形を呈し，径約0.5m，深さ0.41mを測る。

出土遺物として土師器・須恵器片が出土している。出土遺物よりこの建物の時期は，11・12世紀前後であろう。（西村）

ＳＢⅢ196（第436図）

Ｉ・Ｊ７区で検出した総柱建物である。周辺部の遺構により柱穴の残りは悪い。３間（5.５m）×２間（3.9m），棟方向Ｎ61°Ｅを測る。柱間は，桁行1.5～2.0m・梁間1.9～2.0mを測る。柱穴掘方は，円形ないし不整円形を呈し，径約0.6m，深さ0.12mを測る。

出土遺物中図化出来るもの１点を抽出した。（第436図23）は底部を欠く土師器椀である。出土遺物よりこの建物の時期は，12・13世紀前後であろう。（西村）

ＳＢⅢ197（第436図）

Ｉ７区でＳＢⅢ196と切り合う形で検出した掘立柱建物である。北側柱ははＳＤⅣ12により切られている。３間（5.5m）×１間（2.3m）以上，棟方向Ｎ66°Ｅを測る。柱間は，桁行1.7～2.0m・梁間2.3mを測る。柱穴掘方は，円形を呈し，径約0.3m，深さ0.30mを測る。

出土遺物中図化出来るもの３点を抽出した。（第436図24）は土師器の壺の口縁部である。（25）は甕の口縁部である。外湾気味に端部に続き，端部は中央に凹みを持つ。（26）は土師器皿の底部である。高台部は尖り気味に外下方に延びる。出土遺物よりこの建物の時期は，８世紀前後であろう。（西村）

ＳＢⅢ198（第267・436図　図版187　ＳＢ87029）

Ｉ６区でＳＢⅢ199の西側で検出した掘立柱建物である。南面には不揃いな廂が伴う。３間（5.3m）×１間（3.0m），棟方向Ｎ71°Ｅを測る。柱間は，桁行1.7～1.8m・梁間3.0mを測る。柱穴掘方は，円形ないし不整円形を呈し，径約0.4m，深さ0.45mを測る。柱痕は４柱穴で確認された。

出土遺物中図化出来るもの１点を抽出した。（第436図27）は土師器の小皿である。底部はわずかに膨らみ気味で，ヘラ切りの後ナデを施している。出土遺物よりこの建物の時期は，11世紀前半であろう。（西村）

ＳＢⅢ199（第268・436図　図版187　ＳＢ87028）

Ｉ６区でＳＢⅢ198の東側で検出した掘立柱建物である。４間（9.6m）×１間（4.1m），棟方向Ｎ18°Ｗを測る。柱間は，桁行2.3～2.5m・梁間4.1mを測る。柱穴掘方は，円形を呈し，径約0.4m，深さ1.15mを測る。柱痕は４柱穴で確認された。

なおこの建物には棟持柱を持たないが柱穴の遺存状態と，現状の梁間寸法（4.1m）からみて棟持柱が削平により消失している可能性が高い。

出土遺物中図化出来るもの２点を抽出した。（第436図28）は底部を欠く瓦器椀である。端部をわずかに肥厚させ丸く仕上げている。外面下半部には指頭痕が認められる。（29）は土師器の椀底部である。高台部は外下方に短く延びる。端部は丸く仕上げる。出土遺物よりこの建物の時期は，12世紀前後であろう。（西村）

ＳＢⅢ200（第268図　図版187　ＳＢ87026）

Ｉ６区でＳＤⅢ163を切る形で検出された。２間（5.0m）×２間（3.5m），棟方向Ｎ70°Ｅを測る掘立柱建物である。なお北面には廂を伴う。身舎の柱間寸法は，桁行2.3～2.7m・梁間1.6～1.9m，廂の梁間は，1.1mを測る。柱穴掘方は，円形ないし不整円形を呈し，径約0.3m，深さ0.29mを測る。この建物の詳細な時期が判断出来る資料はないが，概ね11世紀～13世紀前後であろう。（西村）

ＳＢⅢ201（第269・437図　図版188　ＳＢ87027）

Ｉ６区でＳＤⅢ163と切り合う形で検出した総柱建物である。３間（5.0m）×２間（3.6m），棟方向Ｎ67°Ｅを測る。柱間は，桁行1.6～1.7m・梁間1.8mを測る。柱穴掘方は円形ないし不整円形を呈する。側柱の柱穴は束柱に比べ一回り大きく，径約0.6m，深さ0.49mを測る。束柱の柱穴掘方は，径約0.6m，深さ0.06mを測る。柱痕は束柱を除く全ての柱穴で確認された。

出土遺物中図化出来る遺物５点を抽出した。（第437図１）は底部を欠く土師器椀である。（２・３）は土師器の杯である。底部は平坦で内湾気味に口縁に続く。（４）は６世紀後葉の須恵器杯蓋である。天井部はヘラケズリを施し，丸味を帯びて口縁端部に続く。器壁は比較的厚い。（５）須恵器の提瓶ないし平瓶の口縁部である。出土遺物よりこの建物の時期は，６世紀後葉前後である。（西村）

ＳＢⅢ203（第269図　ＳＢ87047）

Ｈ７・８区で検出した。４間（7.2m）×３間（4.6m），棟方向Ｎ79°Ｅの掘立柱建物である。柱間寸法の平均は桁行1.3～2.5m・梁間1.5～1.7mと桁行方向で中寄りの二つの柱間の間隔を広く設定する特徴がある。柱穴掘り方は不整円形を呈し，径約1.5mを測る。深さ0.19mと遺存状態は良くない。遺物は伴わない。（大久保）

ＳＢⅢ204（第270図　図版188　ＳＢ87039）

Ｈ７区で検出した。西端を攪乱により欠損するが，他例から見て４間（7.9m）以上×３間（5.0m），棟方向Ｎ83°Ｅの掘立柱建物と推定できる。柱間寸法の平均は桁行1.5～2.4m・梁間1.5～1.8mと桁行方向で中寄りの二つの柱間の間隔を広く設定する特徴がある。柱穴掘り方は不整円形を呈し，径約0.5mを測る。深さ0.13mと遺存状態は良くない。南列東２穴で辛うじて柱痕の一部を確認した。遺物は伴わない。（大久保）

ＳＢⅢ205（第270図　図版189　ＳＢ87038）

Ｈ７区で検出した。４間（6.8m）×３間（4.7m），棟方向Ｎ75°Ｅの掘立柱建物である。柱間寸法の平均は桁行1.6～1.7m・梁間1.3～1.9mを測る。柱穴掘り方は不整円形を呈し，径約0.5mを測る。深さ0.04～0.26mと遺存状態は良くない。遺物は伴わない。（大久保）

ＳＢⅢ206（第271図　図版189　ＳＢ87036）

Ｈ７区で検出した。３間（6.2m）×２間（4.2m），棟方向Ｎ77°Ｅの掘立柱建物である。西列北２穴を欠損する。梁間方向で２穴目を著しく北列に寄せた配置を持つ。柱間寸法の平均は桁行2.0～2.2m・

梁間1.5～2.7mを測る。柱穴掘り方は不整円形を呈し，径約0.5m，深さ0.28mを測る。北列すべてと南列西２穴で柱痕を検出した。それによれば柱径は0.1m程度となる。遺物は伴わない。　（大久保）

ＳＢⅢ208（第437図）

Ｈ６・７区で検出した。ＳＢⅢ207・209等と重複する。西端を欠損するので形態・規模は不明である。現存で3.5m以上×3.2m，梁間２間，棟方向Ｎ69°Ｅの掘立柱建物である。柱間寸法の平均は桁行1.7～1.8m・梁間1.6mを測る。柱穴掘り方は方形を呈するものが多いが，形態・規模のばらつきが大きい。径約0.6m，深さ0.17mを測る。柱穴から瓦質土器椀，土師質小皿を検出した。

（第437図６）は瓦質土器椀で端部は丸く納める。口縁部のみ帯状に黒変する。（７）は土師質小皿。底部は体部に比べてやや厚手でヘラ切り痕をとどめる。体部は強く外傾し短いが未だ然程矮小化していない。　（大久保）

ＳＢⅢ209（第271図　ＳＢ87032）

Ｈ６・７区で検出した。ＳＢⅢ210等と重複する。２間（4.5m）×２間（3.4m），棟方向Ｎ31°Ｗの掘立柱建物である。柱間寸法の平均は桁行2.2～2.3m・梁間1.7mを測る。柱穴掘り方は方形ないしは隅丸方形を呈し，径は約0.6mを測る。深さ0.09～0.21mは遺存状態は良くない。西列北２穴を除いて柱痕を検出した。それによれば柱径は0.1～0.２m程度となる。遺物は伴わない。　（大久保）

ＳＢⅢ210（第272・437図　ＳＢ87033）

Ｈ６・７区で検出した。ＳＨⅢ56等と重複する。４間（7.1m）×２間（3.5m），棟方向Ｎ74°Ｅの掘立柱建物である。柱間寸法の平均は桁行1.7～1.9m・梁間1.7～1.8mを測る。柱穴掘り方は方形ないしは不整円形を呈し，径約0.5m，深さ0.30mを測る。東列北１穴，南列西４穴を除いて柱痕を検出した。それによれば柱径は0.1～0.2m程度となる。柱穴から土師質椀小片を出土した。

（第437図８）は土師質椀高台片。低いが比較的径は大きい。　（大久保）

ＳＢⅢ211（第271図　ＳＢ87034）

Ｇ・Ｈ６区で検出した。ＳＨⅢ56等と重複する。２間（3.5m）×１間（2.9m）だが，梁間柱間が異様に広い点で疑問が残る。棟方向Ｎ79°Ｅの掘立柱建物と復元した。桁行方向の柱間寸法の平均は3.5mを測る。柱穴掘り方は円形ないしは隅丸方形を呈し，径約0.5m，深さ0.18mを測る。西列全てで柱痕を検出した。それによれば柱径は0.1m程度となる。遺物は伴わない。　（大久保）

ＳＢⅢ212（第272図　ＳＢ87031）

Ｈ６区で検出した。３間（4.7m）×２間（3.8m），棟方向Ｎ85°Ｅと，ほぼ真北に直交する掘立柱建物である。柱間寸法の平均は桁行1.5～1.8m・梁間1.8～2.0mを測る。柱穴掘り方は方形ないしは楕円形を呈し，径約0.6m，深さ0.33mを測る。北列西２穴を除いて柱痕を検出した。それによれば柱径は0.1～0.2m程度となる。遺物は伴わない。　（大久保）

ＳＢⅢ213（第273・437図　ＳＢ87043）

Ｇ８区で検出した。５間(10.4m）×２間（4.3m）で，棟方向Ｎ67°Ｅのやや大形の掘立柱建物である。柱間寸法の平均は桁行1.6～2.3m・梁間2.0～2.3mを測る。柱穴掘り方は隅丸方形ないしは円形を呈し，径約0.6m，深さ0.30mを測る。西列北２穴を除いて柱痕を検出した。それによれば柱径は0.1～0.2m程度となる。また未検出の一穴では根石を確認している。なお本建物では検出した全ての柱痕部分に多量の焼土を含んでいた。従って抜き取り痕は確認できなかったものの，廃絶時に柱を外している可能性が高い。また「抜き取り跡」にもれなく焼土が詰まることからすれば，本建物は火災により廃絶

したことも想定できるかも知れない。

（第437図９）は土師質杯。体底部境はかなり明瞭で薄手だが，底部縁辺をやや厚く残す。体部はかすかに内湾気味に開く。（10）は土師質杯だがやや浅い。体部は僅かに内湾気味に開く。（11）は土師質皿。該期の杯でしばしば認められる平高台状の突出した底部を持つ。（大久保）

ＳＢⅢ214（第273・437図　ＳＢ87042）

Ｇ８区で検出した。ＳＢⅢ213と重複する。５間（6.0m）×３間（3.8m），棟方向Ｎ７°Ｅと，ほぼ真北を向く掘立柱建物である。柱間寸法の平均は桁行1.3～1.8m・梁間1.9mとやや不揃いである。柱穴掘り方は方形ないしは楕円形を呈し，径約0.5m，深さ0.36mを測る。北列西３穴，東列北５穴を除いて柱痕を検出した。それによれば柱径は0.1m程度となる。柱穴から粗製の土師器椀を出土した。

（第437図12）は瓦器椀。内面暗文は認められないが外面には指押さえを顕著に残す。（大久保）

ＳＢⅢ215（第437図　ＳＢ87060）

Ｆ・Ｇ８区で検出した。ＳＢⅢ225と重複する。３間（5.7m）×２間（2.8m），棟方向Ｎ79°Ｗの掘立柱建物である。北列西２穴を欠損する。柱間寸法の平均は桁行1.7～2.1m・梁間1.3～1.5mを測る。柱穴掘り方は円形ないしは楕円形を呈し，径約0.5m，深さ0.20mとなる。遺物は伴わない。

（第437図13）は瓦器椀。断面三角形の低いが比較的径の大きい高台を持つ。見込み部には平行線暗文をとどめる。（大久保）

ＳＢⅢ216（第437図）

Ｇ７・８区で検出した。ＳＤⅡ21，ＳＢⅢ217等と重複する。２間(6.7m）×２間（4.2m），棟方向Ｎ２°Ｗの掘立柱建物である。柱間寸法の平均は桁行3.2～3.5m・梁間2.0～2.2mと桁行方向がかなり広い。柱穴掘り方は一様ではなく，径約0.5m，深さ0.16mを測る。柱穴から土師器椀小片を出土した。

（第437図14）はやや厚手で内湾気味に立ち上がる土師器椀。端部は丸く納める。（15）は薄手の土器杯ないしは皿で強く外傾して口縁部は僅かに肥厚する。（大久保）

ＳＢⅢ217（第274図　図版190　ＳＢ87041）

Ｇ７・８区で検出した。ＳＤⅡ21，ＳＢⅢ216，ＳＫⅢ42等と重複する。３間（4.6m）×２間（4.1m），棟方向Ｎ79°Ｅの掘立柱建物である。柱間寸法の平均は桁行1.5～1.6m・梁間1.7～2.4mを測る。柱穴掘り方は方形ないしは円形を呈し，径約0.5m，深さ0.22mを測る。東列北１穴を除いて柱痕を検出した。それによれば柱径は0.1m程度となる。遺物は伴わない。（大久保）

ＳＢⅢ218（第274・437図　図版191　ＳＢ87049）

Ｇ８区で検出した。３間（4.2m）×２間（3.1m），棟方向Ｎ21°Ｗの総柱建物である。柱間寸法の平均は桁行1.3～1.5m・梁間1.5～1.6mを測る。柱穴掘り方は形態・規模ともにばらつきが大きく，特に束柱２穴はかなり小型である。径約0.6m，深さ0.08～0.27mを測る。束柱及び西列北２・３・４穴を除き，柱痕を確認した。それによれば柱径は0.2m程度となる。柱穴から土師器甕片を出土した。

（第437図16）は土師器甕で口縁部はほぼ直立し外面ナデ調整，内面横ハケを加える。古墳時代後期から奈良時代まで存在する器種でそれ以上の特定は困難である。（大久保）

ＳＢⅢ219（第437図）

Ｇ７・８区で検出した。ＳＢⅢ220と重複する。２間（4.3m）×２間（3.8m），棟方向Ｎ23°Ｗの総柱建物である。柱間寸法の平均は桁行2.0～2.3m・梁間1.8～2.0mを測る。柱穴掘り方は不整円形を呈し，径約0.6m，深さ0.23mを測る。柱穴から須恵器杯小片を出土した。

（第437図17）は須恵器杯底部片。体底部境は不明瞭で底部はヘラ切り痕を残す。ほぼ７世紀代に比定できる。（大久保）

ＳＢⅢ220（第437図）

Ｇ７・８区で検出した。ＳＢⅢ218・219と重複する。２間（3.9m）×２間（3.9m），棟方向N75°Wとほぼ真北を向く総柱建物である。西列北２穴を欠損する。柱間寸法の平均は桁行1.9～2.0m・梁間1.9～2.0mを測る。柱穴掘り方は不整円形ないしは楕円形を呈し，径約0.5m，深さ0.15mを測る。柱穴から土師質椀小片を出土した。

（第437図18）は土師質椀高台部。断面三角形の低いが比較的径の大きい高台を持つ。（大久保）

ＳＢⅢ221（第274・437図　ＳＢ87046）

Ｆ・Ｇ７・８区で検出した。４間（6.8m）×３間（4.9m），棟方向N00°Eと真北を向く掘立柱建物である。柱間寸法の平均は桁行1.3～2.0m・梁間1.2～1.9mを測る。柱穴掘り方は方形ないしは不整円形を呈し深さのばらつきが大きい。径約0.7m，深さ0.11～0.50mを測る。柱穴から土師器杯，同甑小片を出土した。

（第437図19）は甑端部片内面に横ハケを施す。本例は明らかに他の資料と時期が異なる。（20～22）は土師質杯。体底部共に薄手で，体部は直線的に開く。（大久保）

ＳＢⅢ223（第437図）

Ｇ７区で検出した。ＳＢⅢ221・224等と重複する。東列２・４穴の比定についてはやや疑問が残るが，４間（7.2m）×２間（4.2m），棟方向N20°Wの掘立柱建物と復元した。柱間寸法の平均は桁行1.5～2.0m・梁間2.0～2.2mを測る。柱穴掘り方の形態・規模はばらつきが大きく，径約0.7m，深さ0.20mを測る。柱穴から須恵器杯，土師器羽釜？を出土した。

（第437図23）は土師器羽釜ないしは長胴甕口縁部片である。煮沸形態としては比較的薄手で口縁端部を摘み上げる。（24）は高台径から判断して須恵器台付皿であろう。底部縁辺近くに低い高台を付す。底部外面には「×」形の篦記号が認められる。（大久保）

ＳＢⅢ224（第437図　ＳＢ87045）

Ｇ７区で検出した。ＳＢⅢ221・223等と重複する。２間（3.6m）×２間（2.8m），棟方向N31°Wの総柱建物である。柱間寸法の平均は桁行1.7～1.9m・梁間1.3～1.5mを測る。この地点では柱穴の重複が激しく，本来の掘り方平面形態の忠実な復元が困難である。現状で径約0.8m，深さ0.18mを測る。柱穴から土師器甑小片を出土した。

（第437図25）はこのように図示したが甑底部片の可能性がある。（26）は直立する口縁部の直下に厚手の突帯状の鍔を持つ羽釜である。（25）の甑とは時期を違える可能性が高い。（大久保）

ＳＢⅢ225（第438図）

Ｆ・Ｇ７・８区で検出した。ＳＢⅢ221・223・226等と重複する。３間（6.3m）×２間（3.8m），棟方向N20°Wの掘立柱建物である。西列の柱通りがやや悪いが柱間寸法の平均は桁行2.0～2.3m・梁間1.8～2.0mを測る。この地点では柱穴の重複が著しく，本来の掘り方平面形態の推定が困難である。現状で径約0.7m，深さ0.25mを測る。小片ばかりであるが柱穴から黒色土器椀，須恵質杯，土師質杯，甑等比較的多量の土器片を出土した。（第438図１・８・９）を出土した東列北３穴，（５・６）を出土した同北１穴の資料が他に比べ多かった。

（第438図１）は土師器甑，（２・３）は羽釜である。（４・５）は土師器杯，全体に薄手だが底部がや

や厚い。またやや浅目で体部は内湾気味に開く傾向がある。（６）は土師器高台付杯，薄手で小形の高台を底部縁辺に付す。（７）は黒色土器Ａ類椀，他の資料と時期がずれる。（８～10）は須恵器杯でやはり薄手。体部は内湾気味に開き，外表に火襷が顕著である。（大久保）

ＳＢⅢ226（第438図）

Ｆ・Ｇ７・８区で検出した。ＳＢⅢ221・225・227等と重複する。２間（5.2m）×２間（4.2m），棟方向Ｎ49°Ｅの総柱建物である。柱間寸法の平均は桁行2.5～2.7m・梁間2.2～2.3mを測る。この地点では柱穴の重複が激しく，本来の掘り方平面形態の忠実な復元が困難である。現状では形態・規模ともにばらつきが大きく径約0.8m，深さ0.18mを測る。（第438図11～14・18）を出土した南列中央穴を始め柱穴から土師質杯，同皿，同椀，甕等比較的多量の土器片を出土している。ただし本建物の場合，西列北１穴，南列中央穴に見るように別柱穴との重複あるいは抜き取り痕の存在が明確であり，検出遺物中に時期を違えたものを含む恐れが大きい。

（第438図11）は土師器甕，（12～18・20）は土師器杯である。ただし（15・16）は口縁部形状が他とは異なり時期を違える可能性が高い。（19）は恐らく土師器皿でやはり時期を違える。（21）は須恵器皿である。（大久保）

ＳＢⅢ227（第438図）

Ｆ・Ｇ７区で検出した。ＳＢⅢ221・225・226等と重複する。３間（4.9m）×２間（4.３m），棟方向Ｎ４°Ｅとほぼ真北を向く掘立柱建物である。柱間寸法の平均は桁行1.4～2.0m・梁間1.9～2.4mと梁間方向でやや広い。また棟持柱がやや東に偏している。柱穴掘り方は規模・形態ともにばらつきが大きく径約0.7m，深さ0.20mを測る。柱穴から土師質杯を出土している。

（第438図22）は口縁部と底部がやや分厚くなるが全体に薄手の作りで体部はほぼ直線的に開く。（大久保）

ＳＢⅢ228（第438図）

Ｆ７・８区で検出した。ＳＢⅢ229・231等と重複する。３間（4.9m）×２間（4.2m）で棟方向Ｎ13°Ｅとほぼ真北を向く総柱建物である。柱間寸法の平均は桁行1.7～1.8m・梁間2.1mを測る。柱穴掘り方は形態・規模ともにばらつきが大きいが，西南隅を除いてコーナー部の柱穴が大きい傾向がある。径約0.7m，深さ0.24mを測る。柱穴から黒色土器椀・土師質椀，土鍋等を出土した。

（第438図23）は土師器長胴甕で口縁部を分厚く作る。（24～27）は土師質椀である。（28）は土師器杯で口縁部を細かく屈曲させ極めて薄手である。（29・30）は黒色土器Ａ類椀。（29）は比較的高い高台を持つ。（大久保）

ＳＢⅢ229（第438図）

Ｆ７・８区で検出した。ＳＢⅢ228・231等と重複する。２間（4.3m）×２間（3.9m）で棟方向Ｎ67°Ｗの掘立柱建物である。ただし平面形態は総柱建物に近い。また中央部は別の建物の柱穴が位置するため，本来存在した束柱を欠損している可能性も残る。柱間寸法の平均は桁行1.0～2.4m・梁間1.9～2.0mを測る。柱穴掘り方は円形ないしは方形を呈し，径約0.6m，深さ0.22mを測る。柱穴から黒色土器椀・土師質杯を出土した。

（第438図31）は土師質高台付杯，薄手で底部縁辺に低い高台を持つ。（32）は黒色土器Ａ類椀である。（大久保）

ＳＢⅢ230（第438図　ＳＢ87061）

Ｆ7・8区で検出した。ＳＢⅢ231・232・228・229等と重複する。3間（5.8m）×2間（3.0m），棟方向N8°Wと真北に近い向きを持つ掘立柱建物である。柱間寸法の平均は桁行1.2～2.0m・梁間1.4～1.6mを測る。この地点では柱穴の重複が激しく，本来の掘り方平面形態の忠実な復元が困難である。現状では形態・規模ともにばらつきが大きく径約0.9m，深さ0.30mを測る。柱穴から土師器杯，皿を出土した。

（第438図33）は土師器杯で口縁部内面小さく面取りし，内面には暗文を持つ。（34）は土師器皿，内外面ヘラ磨きで暗文はない。ほぼ７世紀前半に比定できる。（大久保）

ＳＢⅢ231（第439図　ＳＢ87062）

Ｆ７・８区で検出した。ＳＢⅢ228・229・230・232等と重複する。４間（6.2m）×２間（3.5m），棟方向Ｎ15°Ｗと真北に近い向きを持つ掘立柱建物である。柱間寸法の平均は桁行1.3～1.7m・梁間1.7～1.8mと，桁行き方向で中寄り２柱間の間隔が狭い特徴を持つ。この地点では柱穴の重複が激しく，本来の掘り方平面形態の忠実な復元が困難である。現状では形態・規模ともにばらつきが大きく径約0.8m，深さ0.30mを測る。

（第439図１）は須恵器杯ないしは小形壺の底部である。（大久保）

ＳＢⅢ232（第439図）

Ｆ７区で検出した。ＳＢⅢ228・229・230・231等と重複する。３間（5.7m）×２間（4.0m），棟方向Ｎ40°Ｗの掘立柱建物である。柱間寸法の平均は桁行1.6～2.3m・梁間1.8～2.2mと，桁行き方向で中寄りの柱間の間隔がやや狭い特徴を持つ。この地点では柱穴の重複が激しく，本来の掘り方平面形態の忠実な復元が困難である。現状では形態・規模ともにばらつきが大きく径約0.9m，深さ0.22mを測る。柱穴からは土師質杯小片などを出土した。

（第439図２）は土師質の杯ないしは椀口縁部。薄手であるがかなり粗雑な作りで内外面に指押さえが顕著である。（３・４）は土師質杯で薄手の作りを持ち，体部は比較的直線的に開く。（大久保）

ＳＢⅢ233（第275・439図）

Ｆ７区で検出した総柱の掘立柱建物で，ＳＢⅢ234等と切り合い関係にある。２間（3.1m）×２間（3.0m），棟方向Ｎ64°Ｅを測る。柱間は，桁行1.3～1.8m・梁間1.4～1.6mを測る。柱穴掘り方は隅丸方形を呈し，径約0.7m・深さ約0.27mを測る。ＳＨⅢ54より後出する。柱穴からは土師器の椀等が出土している。遺物からすれば11世紀代のものと考えられる。（藤好）

ＳＢⅢ234（第275・439図　図版191　ＳＢ87019）

Ｆ７区で検出した掘立柱建物である。２間（4.3m）×２間（3.6m），棟方向Ｎ68°Ｅを測る。柱間は，桁行2.1～2.2m・梁間1.8mを測る。柱穴掘り方は円形を呈し，径約0.6m・深さ約0.36mを測る。柱穴内から讃岐産の瓦器椀が出土している。時期は出土遺物から12～13世紀と考えられる。（藤好）

ＳＢⅢ235（第439図　ＳＢ87020）

Ｆ・Ｇ７区で検出した掘立柱建物である。３間（7.1m）×１間？（3.2m），棟方向Ｎ66°Ｅを測る。柱間は，桁行2.2～2.5m・梁間1.0～1.1mを測る。柱穴掘り方は円形を呈し，径約0.5m・深さ約0.30mを測る。柱穴内から黒色土器Ａ類の椀等が出土している。時期は出土遺物から11世紀と考えられる。

（藤好）

ＳＢⅢ236（第439図）

Ｆ７区で検出した掘立柱建物である。本遺構の周辺は，柱穴の密集度が異常に高く，柱穴の組合せの

確定は非常に困難であり，限界もある。２間（4.2m）×１間（2.0m）と考えた。棟方向N11°Wを測る。柱間は，桁行1.8～2.4m・梁間2.0mを測る。柱穴掘り方は円形を呈し，径0.6m・深さ0.20mを測る。柱穴内から瓦器椀が出土している。時期は出土遺物から13世紀と考えられる。（藤好）

ＳＢⅢ237（第275・439図　図版192　ＳＢ87037）

Ｆ８区で検出した。ＳＢⅢ238・239等と重複する。３間（4.8m）×２間（3.3m），棟方向Ｎ９°Ｗとほぼ真北を向く堀立柱建物である。柱間寸法の平均は桁行1.5～1.7m・梁間1.4～1.9mを測る。妻柱列の柱通りがやや悪い。柱穴掘り方は円形ないしは楕円形を呈し，径約0.6mを測る。深さ0.26mと，遺存状態良くない。東列北１・２穴，北列２穴で柱痕を確認した。それによれば柱径0.2m程度となる。遺物は伴わない。東列北１穴で若干量の遺物を出土している。

（第439図18）は土師器小形球形甕，（19）は土師器甑である。（20）は須恵器高杯で脚は短いが比較的裾が良く開く。７世紀代に位置付けることが可能である。（大久保）

ＳＢⅢ238（第276・439図　図版192　ＳＢ87052）

Ｆ８区で検出した。ＳＢⅢ237・239等と重複する。３間（5.3m）×２間（3.6m），棟方向N11°Wとほぼ真北を向く堀立柱建物である。柱間寸法の平均は桁行1.5～2.0m・梁間1.5～2.1mを測る。柱穴掘り方は円形ないしは略方形を呈し径約0.6mを測る。深さは0.27mと遺存状態はあまり良くない。ただし，東列北１・４穴，南列２穴以外で柱痕を確認できた。それによれば柱径0.1～0.2m程度となる。柱穴からは土師器甕口縁部片を出土した。

（第439図21）は土師器甕類の口縁部，（22）は須恵器杯蓋である。口縁部を短く折り曲げる。７世紀後葉から８世紀前半に比定できる。（大久保）

ＳＢⅢ239（第276・439図　図版192　ＳＢ87051）

Ｆ８区で検出した。ＳＢⅢ237・238等と重複する。３間（5.1m）×２間（4.4m），棟方向Ｎ３°Ｗとほぼ真北を向く総柱建物である。柱間寸法の平均は桁行1.5～1.9m・梁間2.0～2.4mを測る。柱穴掘り方は円形ないしは方形を呈し，径約0.4～0.8m，深さ0.28～0.58mを測る。束柱２穴が他に比べ著しく小形でかつ浅い。また本建物では束柱２穴を除いて明確に柱抜き取り痕を確認できた。更に抜き取り痕を確認した柱穴を含め，東列北４穴，西列北４穴および束柱２穴を除いて柱痕を検出した。それによれば柱径は0.1～0.2m程度となる。柱穴からは（第439図23）の土師器甕類口縁部片を出土したにすぎない。（大久保）

ＳＢⅢ240（第439図）

Ｅ・Ｆ８区でＳＨⅢ50・51を切る形で検出した掘立柱建物である。３間（4.4m）×２間（3.1m），棟方向Ｎ９°Ｗを測る。柱間は，桁行1.4～1.6m・梁間1.4～1.7mを測る。柱穴掘方は，隅丸方形ないし円形を呈し，径約0.5m，深さ0.34mを測る。

出土遺物中図化出来る遺物１点を抽出した。（第439図24）は６世紀後葉の須恵器杯身である。たちあがりは短く内傾し端部は丸く仕上げる。受け部は尖り気味に短く延びる。この建物の時期は，切り合い・主軸方位・配置状の特徴よりＳＢⅢ173・237・251等とほぼ同一時期と考え７世紀前半前後に当るものと考える。（西村）

ＳＢⅢ241（第439図）

Ｆ８区で検出した。ＳＤⅢ95等と重複する。３間（5.7m）×２間（3.5m），棟方向N74°Ｅの総柱建物である。西側束柱を溝に切られ欠損する。柱間寸法の平均は桁行1.8～2.0m・梁間1.7～1.8mを測る。

柱穴掘り方は円形ないし楕円形を呈し，径約0.6m，深さ0.04～0.22mを測る。柱穴からは（第439図25）の土師器甕類口縁部片を出土したにすぎない。（大久保）

ＳＢⅢ242（第439図）

Ｆ７・８区で検出した。２間（4.8m）×２間（3.3m），棟方向Ｎ70°Ｅの掘立柱建物である。柱間寸法の平均は桁行2.2～2.6m・梁間1.6～1.7mと，桁行き方向の柱間がかなり広い。掘り方平面形は円形ないし楕円形を呈し，径約0.6m，深さ0.19mを測る。

（第439図26）は土師器長胴甕ないしは羽釜口縁部であろう。（27）は須恵器の台付小壺と考えられる。土師器甕は平安時代前半までは下る資料であろう。（大久保）

ＳＢⅢ243（第439図）

Ｅ・Ｆ７・８区でＳＨⅢ52を切る形で検出した掘立柱建物である。２間（3.6m）×１間（2.0m），棟方向Ｎ26°Ｗを測る。柱間は，桁行1.6～2.0m・梁間2.0mを測る。柱穴掘方は，円形を呈し，径約0.6m，深さ0.23mを測る。

出土遺物として，土師器・須恵器・瓦質土器等が出土している。出土遺物中図化出来る遺物１点を抽出した。（第439図28）は須恵器杯の底部である。出土遺物より12・13世紀前後に当るものと考える。（西村）

ＳＢⅢ244（第439図　ＳＢ87018）

Ｆ７区で検出した総柱の掘立柱建物と考えられる。３間（5.5m）×２間（4.3m），棟方向Ｎ68°Ｅを測る。柱間は，桁行1.5～2.2m・梁間2.1～2.2mを測る。柱穴掘り方は円形を呈し，径0.6m，深さ0.23mを測る。須恵器の杯片・土師器の皿片等が出土している。時期は出土遺物から11世紀と考えられる。（藤好）

ＳＢⅢ245（第277・440図　ＳＢ87014）

Ｆ７区で検出した掘立柱建物で，ＳＢⅢ244を切り，ＳＢⅢ246と切り合い関係にある。５間（7.8m）×２間（3.8m），棟方向Ｎ21°Ｅを測る。柱間は，桁行1.5～1.7m・梁間1.6～2.2mを測る。柱穴掘り方は円形ないし隅丸方形を呈し，径0.6m，深さ0.33mを測る。柱穴内から須恵器杯片・土師器甕片・甑片等が出土している。時期は出土遺物から６世紀末ないし７世紀初頭と考えられる。（藤好）

ＳＢⅢ246（第277・440図）

Ｆ７区で検出した掘立柱建物であるが，東側柱列は比較的柱穴が揃うが，西側柱列は明確性に欠ける。５間（8.8m）×２間（4.8m），棟方向Ｎ22°Ｅを測る。柱間は，桁行1.4～2.0m・梁間2.2～2.6mを測る。柱穴掘り方は円形及び不整円形を呈し，径0.7m，深さ0.06～0.31mを測る。柱穴からの出土遺物には，６世紀末前後から13世紀にかけての遺物が出土している。ただ時期的の後出する遺物は，東側柱列からは出土していない。本遺構は，北部でＳＢⅢ245と重複し，概ね共通した方位・形態を示すが時期的に異なる。本遺構の東側柱列だけからなる柵列としたほうが妥当かもしれない。建物とすれば13世紀代，柵列とすれば６世紀末から７世紀前半期のものであろう。（藤好）

ＳＢⅢ247（第440図　図版193　ＳＢ87015）

Ｅ・Ｆ７区で検出した掘立柱建物である。４間（6.6m）×３間（5.2m），棟方向Ｎ70°Ｅを測る。柱間は，桁行1.5～1.7m・梁間1.5～1.9mを測る。概ね，柱穴掘り方は隅丸方形を呈し，径約0.7m，深さ約0.45mを測る。柱穴内からは土師器皿・須恵器杯・黒色土器椀Ｂ類等が出土している。ただ黒色土器は東北隅の北側柱列東第１穴からの出土であり，この柱穴は浅い溝に切られており，混入したものであ

る可能性が考えられる。

本建物の北東部で，祭祀遺構を確認した。北側柱列の東第1柱間には，柱列と直交して須恵器長頸壺が2点並列に据えられていた。両長頸壺は，非常によく類似し，長頸壺を結んだ直線の垂直2等分線が，側柱列の真心を結んだラインとなることから，両長頸壺の同時併存，また両長頸壺とＳＢⅢ247との関連は明らかである。長頸壺検出時点では，埋土の類似からピットの掘り方を検出することはできなかったが，長頸壺下部にピットの基底部を検出したことから，柱穴の真心間を結ぶラインと直交するように並列してピットが穿たれ，長頸壺が安置されたことが窺われる。また，南側の長頸壺は建物内に位置することから，祭祀が行なわれたのは柱穴掘削後ではなく，柱位置の確定後であり，おそらくは棟上げ後になされたと考えられる。祭祀の意味合いについてであるが，ＳＢⅢ247の伴う祭祀と類似した例は下川津遺跡の他の建物では認められないため，祭祀が行なわれた位置関係が普遍的なものかの根拠がやや薄いが，本例はＳＢⅢ247の北東部鬼門の位置に当ることから，一応棟上げに伴う地鎮祭的な性格を考えておきたい。

また下川津遺跡で認められる建物の祭祀は，柱穴内に土師器質の小皿もしくは杯が複数枚埋納された状況で出土する例は認められるが，いずれも時期的には中世のものが大半であり，また柱穴内からの出土ということもあり，柱の抜き取り後の可能性が高い。こうした例は建物の廃絶に伴う祭祀である可能性が高く，ＳＢⅢ247に見られる建物の完成前の祭祀とは異なる。時期は出土遺物から9世紀と考えられる。（藤好）

ＳＢⅢ248（第278・440図　ＳＢ87017）

Ｅ・Ｆ７区で検出した掘立柱建物で，北側柱列に柵列ＳＡⅢ37を持つ。3間（6.6m）×3間（4.6m），棟方向Ｎ67°Ｅを測る。柱間は，桁行1.9～2.7m・梁間1.4～1.7mを測る。柱穴掘り方は概ね隅丸方形を呈し，径約0.9m・深さ約0.41mを測る。建物の東側柱列の延長線上にＳＢⅢ247の西側柱列があり，建物規模もほぼ一致する。時期は出土遺物は小片であり，やや時期の確定資料としては，難があるがＳＢⅢ247との近似性から9世紀代の建物と考えられる。（藤好）

ＳＢⅢ249（第278・440図　ＳＢ87016）

Ｅ・Ｆ６区で検出した掘立柱建物である。4間（7.2m）×2間（3.4m），棟方向Ｎ74°Ｅを測る。柱間は，桁行1.4～2.1m・梁間1.6～1.8mを測る。柱穴掘り方は円形もしくは隅丸方形を呈し，径約0.6m・深さ約0.32mを測る。出土遺物がやや小片であり，時期確定資料としては難点があるが，建物方位がやや北に振ることや，建物の規模形態等から8世紀以前のものである可能性が高い。（藤好）

ＳＢⅢ250（第279・440図　ＳＢ87067）

Ｅ８区で検出した総柱建物である。ＳＢⅢ177・251と切合い関係にあり，ＳＢⅢ250はＳＢⅢ251を切っている。2間（4.0m）×2間（3.3m），棟方向Ｎ79°Ｅを測る。柱間は，桁行2.0m・梁間1.6～1.7mを測る。柱穴掘方は，円形ないし不整円形を呈し，径約0.6m，深さ0.29mを測る。柱痕は3柱穴で確認された。

出土遺物中図化出来る遺物6点を抽出した。（第440図29）は底部を欠く土師器の土鍋である。口縁部は体部より鈍く屈曲し外上方に延びる。端部は平坦に仕上げる。内外面にはハケが施されている。（30～32）は土師器の皿である。（30・31）は口縁部で端部は丸く仕上げている。外面にはミガキ，内面には放射暗紋が認められる。（32）の口縁端部はわずかに平坦面をもち，内面には放射暗紋を施している。（33・34）は土師器高杯の脚部である。端部は尖り気味に丸く納まる。この建物は配置状で，ＳＢⅢ169・

238等とほぼ同一時期とみられ７世紀後半前後に当るものと考えたい。（西村）

ＳＢⅢ251（第279・441図）

Ｅ８区で検出した総柱建物である。ＳＢⅢ250・ＳＤⅢ123と切合い関係にあり，ＳＢⅢ251はＳＢⅢ250に切られている。２間（4.1m）×２間（3.7m），棟方向Ｎ80°Ｅを測る。柱間は，桁行2.0～2.1m・梁間1.7～2.0mを測る。柱穴掘方は，円形ないし不整円形を呈し，径約0.8m，深さ0.29mを測る。柱痕は３柱穴で確認された。

出土遺物中図化出来る遺物２点を抽出した。（第441図１・２）は土師器甕の口縁部である。出土遺物よりこの建物の詳細な時期の判断は出来ないが，切り合い・配置状の特徴よりＳＢⅢ173・237・240等とほぼ同一時期と考えられ，７世紀前半前後と考えられる。（西村）

ＳＢⅢ252（第279・441図　図版194　ＳＢ87064）

Ｅ８区で検出した掘立柱建物である。ＳＢⅢ177・253・254と切合い関係にあり，ＳＢⅢ253とはほぼ重複し，ＳＢⅢ252はＳＢⅢ253を切っている。３間（5.7m）×２間（3.7m），棟方向Ｎ22°Ｗを測る。柱間は桁行1.6～2.1m・梁間1.7～2.0mを測る。柱穴掘方は，隅丸方形ないし不整円形を呈し，径約0.6m，深さ0.33mを測る。

出土遺物中図化出来る遺物５点を抽出した。（第441図３）は土師器甕の口縁部である。口縁部は「く」の字状に外反し端部は平坦で，わずかに上方に肥厚する。内外面には，わずかにハケが認められる。（４）は土師器の椀である。口縁端部は丸く仕上げ，外上方にわずかに折れる。（５～７）は須恵器の杯である。（５）は８世紀後葉の須恵器杯身の底部である。高台部は短く屈曲点の近くに付く。（６・７）は６世紀末あるいは７世紀初頭の須恵器杯蓋と身の資料である。出土遺物よりこの建物の時期は，６世紀後葉前後である。（西村）

ＳＢⅢ253（第279・441図）

Ｅ８区で検出した掘立柱建物である。ＳＢⅢ177・252・254と切合い関係にあり，ＳＢⅢ253はＳＢⅢ252に切られている。３間（5.9m）×２間（4.0m），棟方向Ｎ25°Ｗを測る。柱間は，桁行1.6～2.2m・梁間1.9～2.1mを測る。柱穴掘方は，隅丸方形ないし円形を呈し，径約0.5m，深さ0.26mを測る。

出土遺物中図化出来る遺物１点を抽出した。（第441図８）は土師器の杯底部である。高台は短く屈曲点の近くに付く。なお，この建物の周辺には，建物として抽出できない柱穴が多数あり，この土器は混入資料の可能性が高い。この建物の時期は，切り合いと配置状の特徴で，６世紀後葉～７世紀前後に属するものと考えられる。（西村）

ＳＢⅢ254（第441図）

Ｅ８区で検出した掘立柱建物である。ＳＢⅢ252・253，ＳＤⅢ128と切合い関係にあり，ＳＢⅢ254はＳＢⅢ252に切られ，ＳＤⅢ128を切っている。３間（5.3m）×２間（2.5m），棟方向Ｎ74°Ｅを測る。柱間は，桁行1.7～1.8m・梁間1.2～1.3mを測る。柱穴掘方は，円形ないし楕円形を呈し，径約0.6m，深さ0.17mを測る。

出土遺物中図化出来る遺物３点を抽出した。（第441図９）は土師器甕の口縁部である。体部より「く」の字状に外反し端部はわずかに上方に肥厚する。(10) は土師器皿の口縁部である。内面には放射暗紋が認められる。(11) は６世紀後葉の底部を欠く須恵器杯身である。たちあがりは短くわずかに内傾する。出土遺物よりこの建物の時期は６世紀後葉に当る。（西村）

ＳＢⅢ255（第441図）

Ｅ７・８区で検出した掘立柱建物である。ＳＢⅢ256，ＳＤⅢ124と切合い関係にあり，ＳＤⅢ128を切っている。２間（5.0m）×２間（4.5m），棟方向N70°Ｅを測る。柱間は，桁行2.5m・梁間2.1～2.4mを測る。柱穴掘方は，円形ないし楕円形を呈し，径約0.5m，深さ0.21mを測る。

出土遺物中図化出来る遺物１点を抽出した。（第441図12）は底部を欠く須恵器杯である。端部は丸く仕上げ，外面には火襷きが認められる。出土遺物よりこの建物の時期は９世紀に当る。（西村）

ＳＢⅢ257（第441図）

Ｅ７・８区で検出した掘立柱建物である。ＳＢⅢ256，ＳＤⅢ128と切合い関係にあり，ＳＤⅢ128を切っている。３間（4.6m）×２間（3.6m），棟方向N17°Ｗを測る。柱間は，桁行1.4～1.7m・梁間1.7～1.9mを測る。柱穴掘方は，円形ないし楕円形を呈し，径約0.5m，深さ0.17mを測る。

出土遺物中図化出来る遺物１点を抽出した。（第441図13）は須恵器杯蓋の口縁部である。これ以外の資料を含めた遺物より，この建物は９世紀前後に当るものと考えられる。（西村）

ＳＢⅢ258（第441図）

Ｅ８区で検出した掘立柱建物である。１間（1.9m）以上×２間（3.8m），棟方向N75°Ｅを測る。柱間は，桁行1.9m・梁間1.7～2.1mを測る。柱穴掘方は，円形を呈し，径約0.5m，深さ0.23mを測る。

出土遺物中図化出来る遺物１点を抽出した。（第441図14）は６世紀後葉ないし７世紀初頭の須恵器杯身である。たちあがりは短くわずかに内傾する。出土遺物よりこの建物は，６世紀後葉ないし７世紀初頭前後に当るものと考えられる。（西村）

ＳＢⅢ259（第280・441図　ＳＢ87068）

Ｄ・Ｅ８区でＳＤⅢ128を切り込む形で検出した掘立柱建物である。なお北辺には主軸方向を合わせてＳＡⅢ34が配されるが，この柵列は廂と解釈したほうがいいかもしれない。この建物の周辺には，建物にならない柱穴が多数検出された。そのため，一部の建物の柱穴については，どの柱穴が建物に伴うものか絞り切れていないものがある。５間（7.8m）×２間（4.8m），棟方向N72°Ｅを測る。柱間は，桁行1.3～1.8m・梁間2.4mを測る。柱穴掘方は，円形ないし不整円形を呈し，径約0.5m，深さ0.30mを測る。柱痕は一部の柱穴で確認されたのみである。埋土は暗灰褐色系の砂質土である。

出土遺物中図化出来る遺物４点を抽出した。（第441図15）は底部を欠く内黒の黒色土器椀である。内外面ともにミガキが認められる。（16～18）は須恵器の杯である。（16）は７・８世紀頃の杯蓋の口縁部である。（17・18）は10世紀頃の杯である。底部は平坦で屈曲し直線状に端部に続く。（17）の外面には火襷きが認められる。この建物の時期は，出土遺物より概ね９～10世紀前後であろう。（西村）

ＳＢⅢ260（第280図）

Ｄ・Ｅ７区で検出した掘立柱建物である。ＳＢⅢ262，ＳＤⅢ128と切合い関係にあり，ＳＤⅢ128を切っている。なおこの建物の桁行東２間には束柱を伴う。そのため東半部は床張り，西半分は土間とみることが出来る。４間（7.9m）×２間（3.8m），棟方向N69°Ｅを測る。柱間は，桁行1.7～2.1m・梁間1.8～2.0mを測る。柱穴掘方は，円形を呈し，径約0.4m，深さ0.22mを測る。

図化できる遺物はないが，土師器・須恵器片よりこの建物の時期は概ね９～10世紀前後であろう。

（西村）

ＳＢⅢ261（第281・441図）

Ｄ・Ｅ７区でＳＢⅢ260の南側で検出した掘立柱建物である。３間（5.7m）×１間（2.7m），棟方向

N68°Eを測る。柱間は，桁行1.4～2.4m・梁間2.7mを測る。柱穴掘方は，円形ないし不整円形を呈し，径約0.5m，深さ0.20mを測る。なお2柱穴に根石を検出した。

出土遺物中図化出来る遺物2点を抽出した。（第441図19）は土師質の杯である。底部は平坦で屈曲し直線状に外反する。（20）は須恵器の杯である。底部は平坦で屈曲し直線状に外反する。出土遺物よりこの建物の時期は，9～10世紀前後である。（西村）

ＳＢⅢ262（第441図）

Ｅ７区でＳＢⅢ260・ＳＤⅢ128と切り合う形で検出した掘立柱建物である。この建物は削平により残りが悪く東側柱は検出できなかった。3間（5.7m）×2間（4.4m），棟方向N27°Wを測る。柱間は，桁行1.8～2.1m・梁間2.0～2.4mを測る。柱穴掘方は，隅丸方形ないし円形を呈し，径約0.6m，深さ0.19mを測る。

出土遺物中図化出来る遺物1点を抽出した。（第441図21）は須恵器杯の口縁部である。その他の資料よりこの建物の時期は，9・10世紀前後である。（西村）

ＳＢⅢ263（第441図）

Ｅ７区で検出した掘立柱建物である。2間（4.6m）×1間（2.6m）以上，棟方向N3°Eを測る。柱間は，桁行2.0～2.6m・梁間2.6mを測る。柱穴掘り方は小型の円形を呈し，径約0.5m，深さ約0.24mを測る。出土遺物としては，須恵器の杯がある。（藤好）

ＳＢⅢ264（第281・441図　ＳＢ87021）

Ｅ６・７区で検出した掘立柱建物で，ＳＢⅢ265・ＳＤⅢ151と切り合い関係にある。南辺の中央穴が不明瞭であるが，3間（5.7m）×2間（3.7m）と考えられ，棟方向N22°Wを測る。柱間は，桁行1.8～2.1m・梁間1.8～1.9mを測る。柱穴掘り方は円形を呈し，径約0.4m，深さ約0.22mを測る。柱穴内からの出土遺物としては土師器の椀もしくは杯の口縁がある。時期は出土遺物から9～11世紀と考えられる。（藤好）

ＳＢⅢ265（第281・441図　ＳＢ87022）

Ｅ６区で検出した総柱の掘立柱建物で，ＳＢⅢ264と切り合い関係にある。2間（3.9m）×2間（3.8m），棟方向N22°Wを測る。柱間は，桁行1.9～2.0m・梁間1.9mを測る。柱穴掘り方は円形を呈し，径約0.6m，深さ約0.26mを測る。時期は出土遺物から9～11世紀と考えられる。（藤好）

ＳＢⅢ267（第282・441図　ＳＢ87040）

Ｇ７区で検出した。ＳＤⅡ22等と重複する。3間（6.2m）×2間（3.3m），棟方向N66°Eの掘立柱建物である。なお北列とほぼ1.2mの間隔で並行して同様の柱間間隔を持つ柱穴列が存在する。本建物に伴う廂の可能性がある。ただし柱間寸法の平均は桁行1.9～2.3m・梁間1.6～1.7m，廂部分2.0mを測り，身舎・廂を問わず全体的に柱間間隔に厳密な規格性に乏しい。このような建物で廂が伴いうるかはやや疑問が残る。掘り方平面形は円形ないし方形を呈し，径約0.7m，深さ0.33mを測る。廂部分ではやや小振りである。柱穴からは須恵質杯，土師質杯を出土した。

（第441図26）は土師質高台付杯，薄手で底部縁辺に低い高台を付す。（27）は須恵器杯で体部は余り開かないようである。（大久保）

ＳＢⅢ268（第282・441図　ＳＢ87008）

Ｇ６区で検出した総柱と考えられる掘立柱建物で，ＳＢⅢ269・ＳＤⅡ22・23と切り合い，ＳＤⅡ22・23より新しい。3間（3.8m）×2間（3.8m），棟方向N26°Wを測る。柱間は，桁行1.1～1.4m・梁

間1.4～2.4mを測る。中央南北の柱列が東に偏り，廂状の形態を呈する。柱穴掘り方は円形ないし隅丸方形を呈し，径約0.7m，深さ0.09～0.38mを測る。西側柱列が，ＳＢⅢ217・267・268と同一直線上にのり，また東側柱列にも共通性が認められるなど，関連した建物である可能性が高い。（藤好）

ＳＢⅢ269（第283・441図　ＳＢ87013）

Ｇ６区で検出した掘立柱建物で，ＳＤⅡ23・ＳＢⅢ268・271と切り合い関係にある。東南隅にに柱穴が認められず，南面に部分的な廂を持つ建物と考えられる。３間（7.4m）×２間（4.6m），棟方向Ｎ68°Ｅを測る。柱間は，桁行2.4～2.6m・梁間2.3mを測る。柱穴掘り方は円形を呈し，径約0.5m，深さ約0.27mを測る。柱穴内からは須恵器の杯が出土している。時期は出土遺物から11世紀代と考えられる。（藤好）

ＳＢⅢ270（第284・441図　ＳＢ87011）

Ｇ６区で検出した掘立柱建物である。２間（3.2m）×２間（3.2m），棟方向Ｎ78°Ｗを測る。柱間は，桁行1.5～1.7m・梁間1.3～1.7mを測る。柱穴掘り方は円形を呈し，径約0.4m，深さ約0.26mを測る。建物の方位からすれば，第Ⅲ期の竪穴住居との類似性が高い。柱穴内から土師器の高杯が出土している。（藤好）

ＳＢⅢ271（第284・442図　図版194　ＳＢ87009）

Ｇ６区で検出した掘立柱建物で，ＳＢⅢ269と切り合い関係にあり，ＳＤⅢ148に切られる。４間（6.7m）×３間（4.5m），棟方向Ｎ82°Ｗを測る。柱間は，桁行1.5～2.0m・梁間約1.5mを測る。柱穴掘り方は円形を呈し，径約0.5m，深さ約0.32mを測る。南側柱列がＳＢⅢ270の北側柱列と概ね共通するが，柱穴内から薄い作りの土師器の椀・杯や須恵器の杯が出土している。時期は出土遺物から11世紀代と考えられる。（藤好）

ＳＢⅢ272（第442図）

Ｇ６区で検出した掘立柱建物で，ＳＢⅢ273・ＳＴⅢ20・ＳＤⅢ139と切り合い関係にある。３間（5.1m）×１間（3.9m），棟方向Ｎ17°Ｗを測る。柱間は，桁行1.4～2.1m・梁間約3.9mを測る。柱穴掘り方は円形を呈し，径約0.5m，深さ0.06～0.36mを測る。西側柱列と東側柱列の規模の相違が目につくが，西側柱列は柱の抜き取りによる拡張の可能性がある。柱穴内からは和泉産の瓦器椀等が出土しており，13世紀代のものと考えられる。（藤好）

ＳＢⅢ273（第442図　ＳＢ87010）

Ｇ６区で検出した掘立柱建物で，ＳＢⅢ272，ＳＤⅢ139・153と切り合い関係にある。南側柱列の中央穴が明瞭ではないが，４間（5.5m）×２間（4.6m）となる可能性が高い。棟方向Ｎ67°Ｅを測る。柱間は，桁行1.2～1.7m・梁間2.0～2.6mを測る。柱穴掘り方は円形を呈し，径約0.5m，深さ0.09～0.41mを測る。埋土は灰褐色系の砂質土である。柱穴内からは土師器の皿・杯・瓦質のこね鉢が出土している。（藤好）

ＳＢⅢ274（第442図）

Ｇ６区で検出した掘立柱建物で，ＳＢⅢ273の東に隣接し，ＳＤⅢ147を切る。２間（5.0m）×２間（4.8m），棟方向Ｎ69°Ｅを測る。柱間は，桁行2.3～2.7m・梁間2.2～2.6mを測る。柱穴掘り方は円形を呈し，径約0.4m，深さ約0.08～0.46mを測る。埋土は灰褐色系の砂質土である。柱穴内から瓦器椀・瓦質のこね鉢・亀山焼の甕・土師器杯が出土している。出土遺物や形態上の特長からＳＢⅢ273と近接した時期の所産と考えられる。遺物から13世紀前後と考えられる。（藤好）

ＳＢⅢ275（第284・442図　ＳＢ87012）

Ｇ５・６区で検出した掘立柱建物で，西辺がＳＢⅢ274と接する。南北の妻柱列が明確ではないが，一応４間（4.9m）×２間（3.7m）と考えられる。棟方向Ｎ25°Ｗを測る。柱間は，桁行1.1～1.3m・梁間1.1～2.6mを測る。柱穴掘り方は円形を呈し，径約0.4m，深さ約0.30mを測る。柱穴内からは土師器皿と内面に油煙が付着した須恵器杯もしくは燻しが不明瞭な讃岐産の瓦器と考えられる椀が出土している。時期は出土遺物から13世紀と考えられる。（藤好）

ＳＢⅢ276（第285・442図　ＳＢ87003）

Ｇ５区で検出した掘立柱建物で，ＳＤⅢ145・146・157に切られる。３間（4.2m）×２間（3.3m），棟方向Ｎ66°Ｗを測る。柱間は，桁行1.2～1.6m・梁間1.6～1.7mを測る。柱穴掘り方は概ね隅丸方形を呈し，径0.3～0.9m，深さ0.17～0.54mを測る。埋土は暗褐色混じりの黄褐色土である。四隅の柱穴の規模が，他の柱穴と比して大きい。（藤好）

ＳＢⅢ277（第283・442図　図版195　ＳＢ87025）

Ｉ５区でＳＤⅢ164と切り合う形で検出した掘立柱建物である。３間（5.5m）×３間（4.0m），棟方向Ｎ70°Ｅを測る。この建物の桁行柱間は第１・３間が一律短く，第２間が一律長い点に特徴がある。第１・３間の桁行柱間は1.4～1.6m，第２間の桁行柱間は2.5～2.6mを測る。梁間1.2～1.4mを測る。柱穴掘方は，円形ないし不整円形を呈し，径約0.6m，深さ0.37mを測る。柱痕は８柱穴で確認された。埋土は灰褐色系の砂質土である。

出土遺物中図化出来る遺物１点を抽出した。（第442図33）は甕の口縁部である。口縁部はラッパ条に開き端部は，平坦に仕上げる。内面には，ハケが認められる。出土遺物と配置状の特徴より概ねＳＢⅢ280と同一時期と考えられ６世紀後葉前後に当る時期が考えられる。（西村）

ＳＢⅢ279（第285図　ＳＢ87023）

Ｈ・Ｉ５区でＳＤⅢ164と切り合う形で検出した掘立柱建物である。４間（6.7m）×３間（5.0m），棟方向Ｎ60°Ｅを測る。柱間は桁行1.5～2.0m・梁間1.5～1.8mを測る。柱穴掘方は，隅丸方・円・不整円形不規則な形態を呈し，径約0.6m，深さ0.28mを測る。柱痕は１柱穴で確認されたのみである。

図化できる資料はないが，土師器・須恵器片よりこの建物の時期は，10世紀後半以降に当る可能性が高い。（西村）

ＳＢⅢ281（第286・442図　ＳＢ87006）

Ｇ・Ｈ５区で検出した掘立柱建物で，ＳＤⅢ153・154・157と切り合い関係にある。西妻柱列の中央穴が明確ではないが，３間（7.6m）×２間（3.7m）の総柱建物と考えられる。棟方向Ｎ61°Ｅを測る。柱間は，桁行2.5～2.6m・梁間1.8～1.9mを測る。柱穴掘り方は円形を呈し，建て替えが行なわれた形跡を残す。概ね径約0.4m，深さ約0.38mを測る。埋土は灰褐色系の砂質土である。柱穴内からは讃岐産の土師器鍋・瓦器椀・青磁椀等が出土している。ＳＤⅢ75・ＳＡⅢ39と方向を同じくする。特に柵列ＳＡⅢ39とは同時併存の可能性が高い。時期は出土遺物から13世紀前後と考えられる。（藤好）

ＳＢⅢ282（第286・442図　ＳＢ87005）

Ｇ５区で検出した掘立柱建物である。ＳＤⅢ154と切り合い関係にある。埋土の類似から先後関係にやや明確性を欠くが，本遺構の方が後出する可能性は高い。複数棟の建物が併存するものである可能性も否定できないが，一応４間（8.5m）以上×３間（2.5m）の建物としておく。棟方向Ｎ61°Ｅを測る。柱間は，桁行1.7～2.7m・梁間1.5～1.3mを測る。柱穴掘り方は円形を呈し，径約0.3m，深さ0.03～

0.35mを測る。方位等からＳＢⅢ281との併存が考えられる。埋土は灰褐色の砂質土である。柱穴内の出土遺物としては畿内産の瓦器椀の破片，土師器杯片等が出土している。時期は出土遺物から13世紀前後と考えられる。（藤好）

ＳＢⅢ283（第287図　ＳＢ87004）

Ｇ５区で検出した掘立柱建物で，ＳＢⅢ282と切り合い関係にある。一部調査区外に延びるが，東西に廂を持つ建物であると考えられる。３間（6.4m）×２間（3.6m），棟方向Ｎ32°Ｗを測る。柱間は，桁行1.7～2.5m・梁間1.7～1.9mを測る。柱穴掘り方は円形を呈し，径約0.3m，深さ約0.25mを測る。埋土は灰褐色の砂質土である。方位的な共通性等から，ＳＢⅢ282と共通した時期の所産である可能性が高い。（藤好）

ＳＢⅢ285（第442図）

Ｈ４区でＳＢⅢ284と切り合う形で検出した掘立柱建物である。２間（4.6m）×２間（3.５m），棟方向Ｎ82°Ｅを測る。柱間は桁行2.0～2.6m・梁間1.7～1.8mを測る。柱穴掘方は，円形を呈し，径約0.4m，深さ0.14mを測る。

出土遺物中図化出来る遺物２点を抽出した。（第422図39）は土師器甑の上半部である。（40）は須恵器鉢の上半部である。出土遺物よりこの建物の時期は，６世紀後葉～７世紀前半前後の可能性が高い。（西村）

ＳＢⅢ286（第287・442図　図版196　ＳＢ87002）

Ｇ４区で検出した総柱の掘立柱建物と考えられ，２間（3.4m）×２間（3.2m）以上を測ると考えられる。棟方向Ｎ31°Ｗを測る。柱間は，桁行約1.7m・梁間約1.6mを測る。柱穴掘り方は概ね隅丸方形を呈し，径約0.8m，深さ約0.45mを測る。建て替えが行なわれた可能性が高い。埋土は暗褐色系の土である。埋土中から土師器片が出土している。（藤好）

ＳＢⅢ287（第288・443図　図版197　ＳＢ87125）

Ｉ４区でＳＢⅢ289に切られる形で検出した総柱建物である。３間（4.3m）×２間（3.1m），棟方向Ｎ36°Ｗを測る。柱間は，桁行1.3～1.5m・梁間1.5～1.6mを測る。柱穴掘方は，円形な不整円形を呈し，径約0.7m，深さ0.36mを測る。

出土遺物中図化出来る遺物２点を抽出した。（第443図１・２）は土師器の土鍋である。口縁部は「く」字状に屈曲し外上方に延びる。端部は平坦に仕上げる。内外面にはハケが顕著である。（２）の端部は上方にわずかに肥厚する。出土遺物及び切り合いより６世紀後葉前後であろう。（西村）

ＳＢⅢ288（第288図　図版197　ＳＢ87127）

Ｉ４・５区で検出した総柱建物である。ＳＢⅢ289・ＳＤⅢ166・170と切合い関係にあり，ＳＢⅢ288はいずれの遺構からも切られている。３間（4.5m）×２間（3.4m），棟方向Ｎ44°Ｅを測る。柱間は，桁行1.4～1.5m・梁間1.7mを測る。柱穴掘方は，円形ないし不整円形を呈し，径約0.8m，深さ0.63mを測る。柱痕は８柱穴で確認された。埋土は褐灰色系の粘質土ないしシルトである。

出土遺物より時期を判断する資料はない。この建物の時期は，切り合いより６世紀後葉前後であろう。（西村）

ＳＢⅢ289（第292・443図　ＳＢ87126）

Ｉ４区でＳＢⅢ287・288と切り合う形で検出した掘立柱建物である。３間（5.5m）×２間（3.7m），棟方向Ｎ22°Ｗを測る。この建物の桁行柱間は第１・３間が一律短く，第２間が一律長い点に特徴がある。第１・３間の桁行柱間は1.5～1.9m・第２間の桁行柱間は2.3～2.5mを測る。梁間1.8～1.9mを測

る。柱穴掘方は，隅丸方・円・不整円形等不規則な形態を呈し，径約0.8m，深さ0.50mを測る。柱痕は2柱穴を除く全ての柱穴で確認された。

出土遺物中図化出来る遺物3点を抽出した。（第443図3）は土師器土鍋の口縁部である。（4・5）は6世紀末ないし7世紀初頭の須恵器杯身である。たちあがりは短く外湾気味に延びる。出土遺物よりこの建物は6世紀末ないし7世紀初頭前後の時期に属するものと考えられる。（西村）

ＳＢⅢ290（第289・443図　図版198・199　ＳＢ87122）

Ｉ4区で検出した掘立柱建物である。4間（6.5m）×2間（3.2m），面積20.8㎡，棟方向N19°Wを測る。柱間は，桁行1.6～1.8m・梁間1.6mを測る。柱穴掘方は，隅丸方形を呈し，径約1.0m，深さ0.50mを測る。柱痕は2柱穴を除く全ての柱穴で確認され，径平均0.15mを測る。

なお，この建物及び周辺に位置するＳＢⅢ291・292・293は主軸方位・配置状でグループをなす。また，このグループの周辺には整地層がみられ，建物はその上に構築している。

出土遺物中図化出来る遺物3点を抽出した。（第443図6～8）は土師器甕の口縁部である。頸部より「く」字状に外反し端部は平坦に仕上げる。（6）は上方にわずかに摘み上げ，（7・8）は外側にわずかに摘み上げている。この建物の時期は出土遺物と配置状の特徴より7世紀初頭前後であろう。（西村）

ＳＢⅢ291（第290・443図　図版198・200　ＳＢ87123）

Ｉ3・4区で検出した掘立柱建物である。5間（10.2m）×2間（4.7m），面積47.9㎡，棟方向N17°Wを測る。柱間は，桁行1.9～2.3m・梁間2.2～2.5mを測る。柱穴掘方は，隅丸方形ないし円形を呈し，径約1.0m，深さ0.62mを測る。柱痕は全ての柱穴で確認され，径約0.23mを測る。

出土遺物中図化出来る遺物5点を抽出した。（第443図9～11）は土師器の甕口縁部である。（12）は底部を欠く土師器の杯ないし皿である。体部は丸味を持ち，端部は外側に摘み出す。（13）は7世紀初頭の須恵器杯蓋である。天井部は平坦でつまみを欠く。受け部は肥厚して比較的厚い。返りは短く湾曲し尖る。この建物の時期は出土遺物と配置状の特徴よりＳＢⅢ290・292・293とほぼ同様で7世紀初頭前後であろう。（西村）

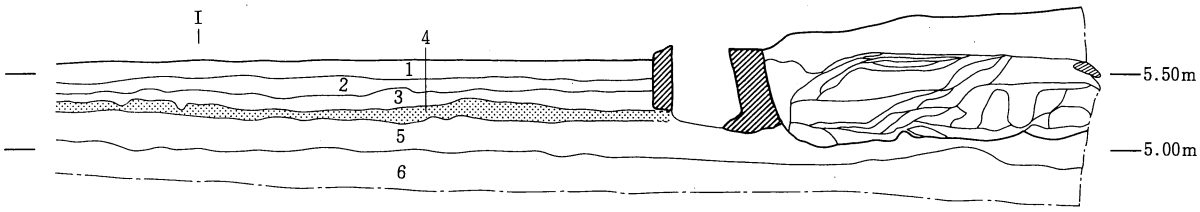
ＳＢⅢ292（第292・443図　図版200　ＳＢ87001）

Ｇ・Ｈ3区で検出した掘立柱建物である。ＳＢⅢ291と対をなす建物である。ＳＢⅢ291よりやや小型の建物で，4間（7.5m）×2間（3.3m），棟方向N15°Wを測る。柱間は，桁行1.6～2.3m・梁間1.6～1.7mを測る。柱穴掘り方は隅丸方形を呈し，径約0.9m，深さ約0.54mを測る。埋土は，黄褐色の地山土に暗褐色土が混じる。柱穴内から須恵器・高杯脚片・土師器の鉢もしくは椀の破片が出土している。（藤好）

ＳＢⅢ293（第443図　図版198・201　ＳＢ87124）

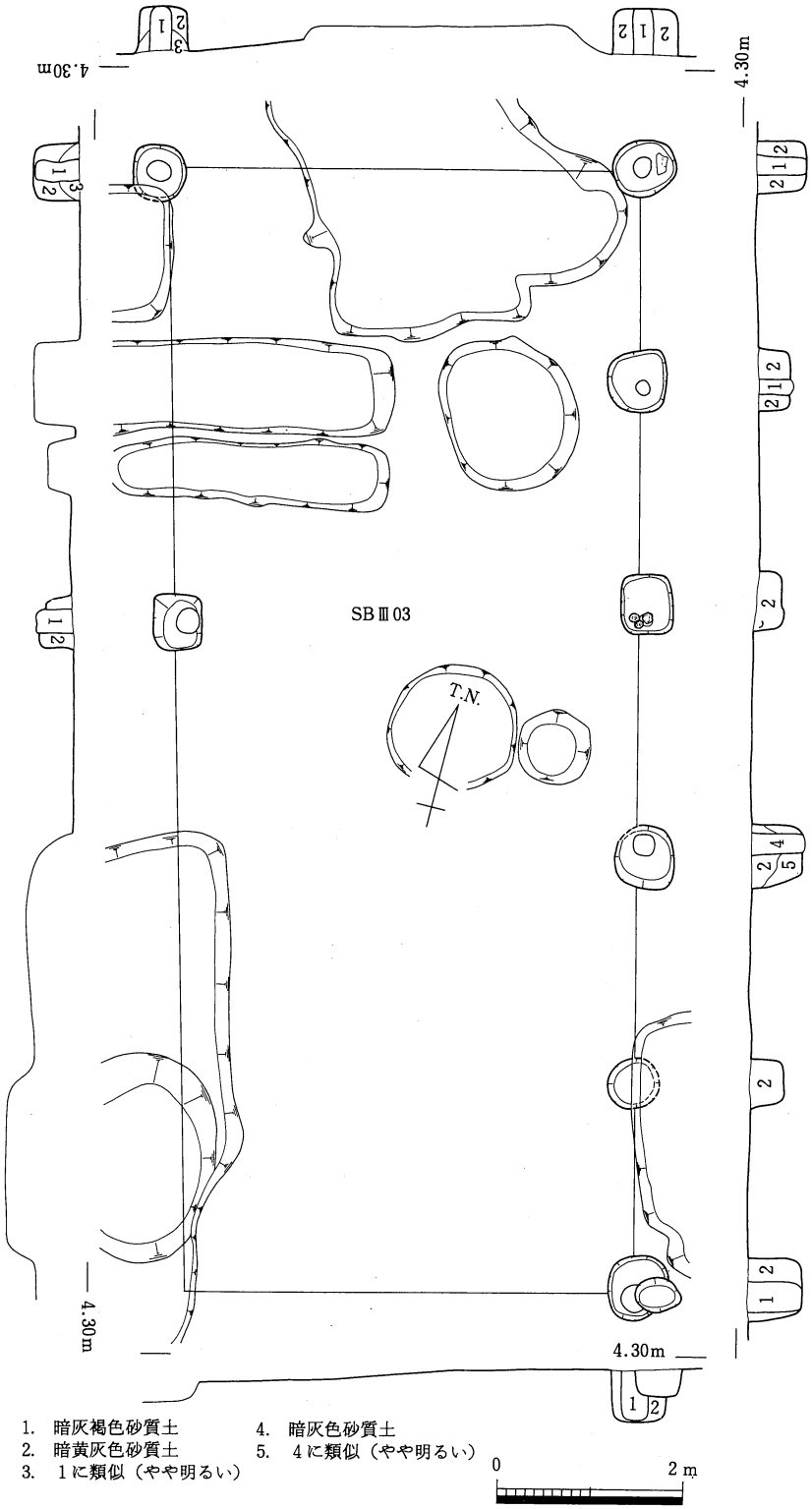
Ｉ2区で検出した掘立柱建物である。5間（12.5m）×2間（3.1m），面積38.8㎡，棟方向N67°Eを測る。柱間は，桁行2.2～2.7m・梁間1.5～1.6mを測る。柱穴掘方は，隅丸方形を呈し，径約1.0m，深さ0.47mを測る。柱痕は全ての柱穴で確認され，径約0.17mを測る。

出土遺物中図化出来る遺物7点を抽出した。（第443図17）は土師器甕の口縁部である。外上方に延び端部は平坦に仕上げる。（18・19）は土師器高杯の脚部である。（20）は須恵器高杯脚部である。（21）は須恵器杯蓋の口縁部である。（22）は須恵器甕の口縁部である。（23）は須恵器壺の口縁部である。頸部より外湾し口縁端部に続き，端部は平坦に仕上げている。この建物の時期は出土遺物と配置状の特徴よりＳＢⅢ290・291・292とほぼ同様で7世紀初頭前後であろう。（西村）

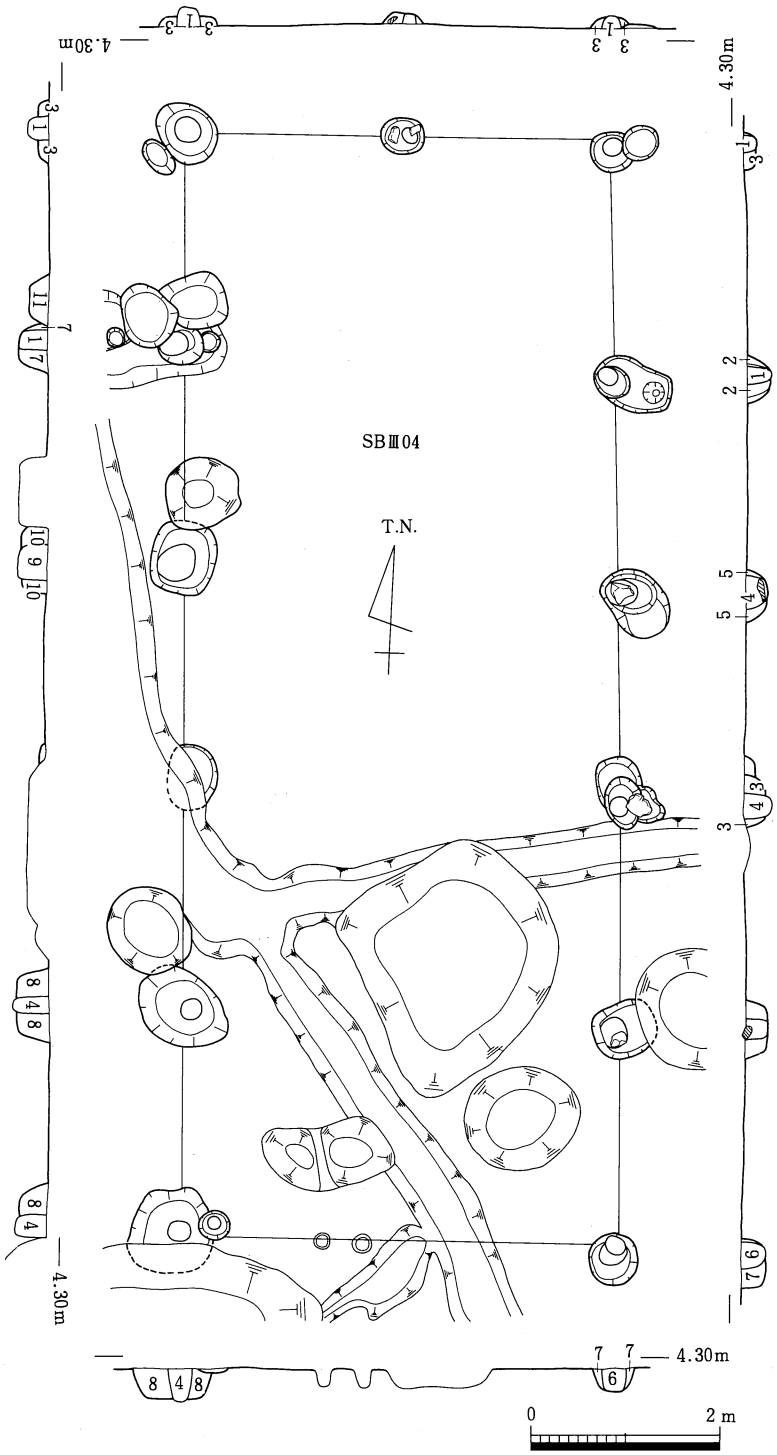


1. 現耕作土
2. 黄灰色砂質土
3. 褐灰色粘質土
4. 黄褐色粘質土（整地層）
5. 茶黄灰色粘質土（ベース）
6. 暗黄灰色粘土（ベース）

第218図　H・I 4区 北面土層断面図

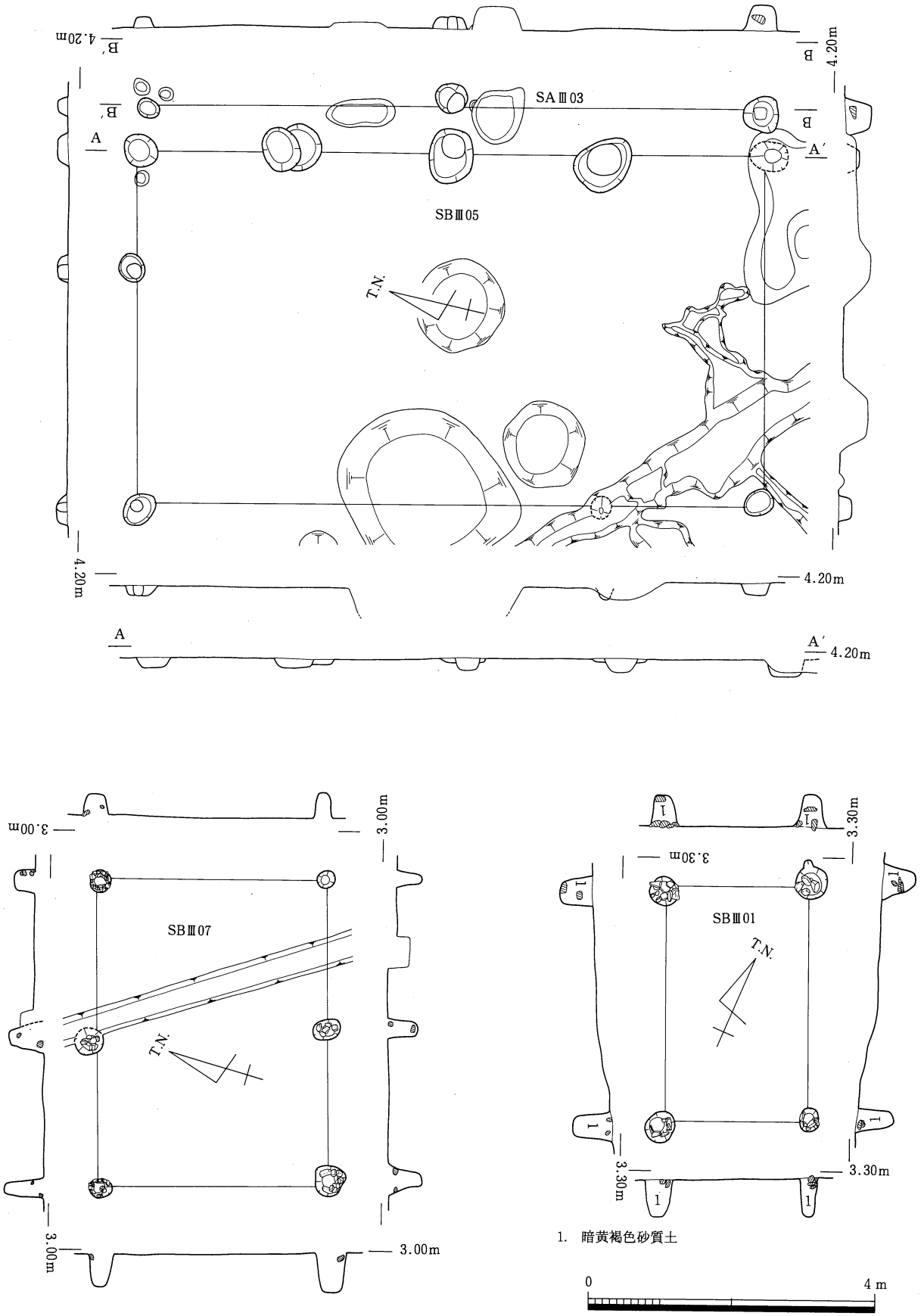


第219図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(1)

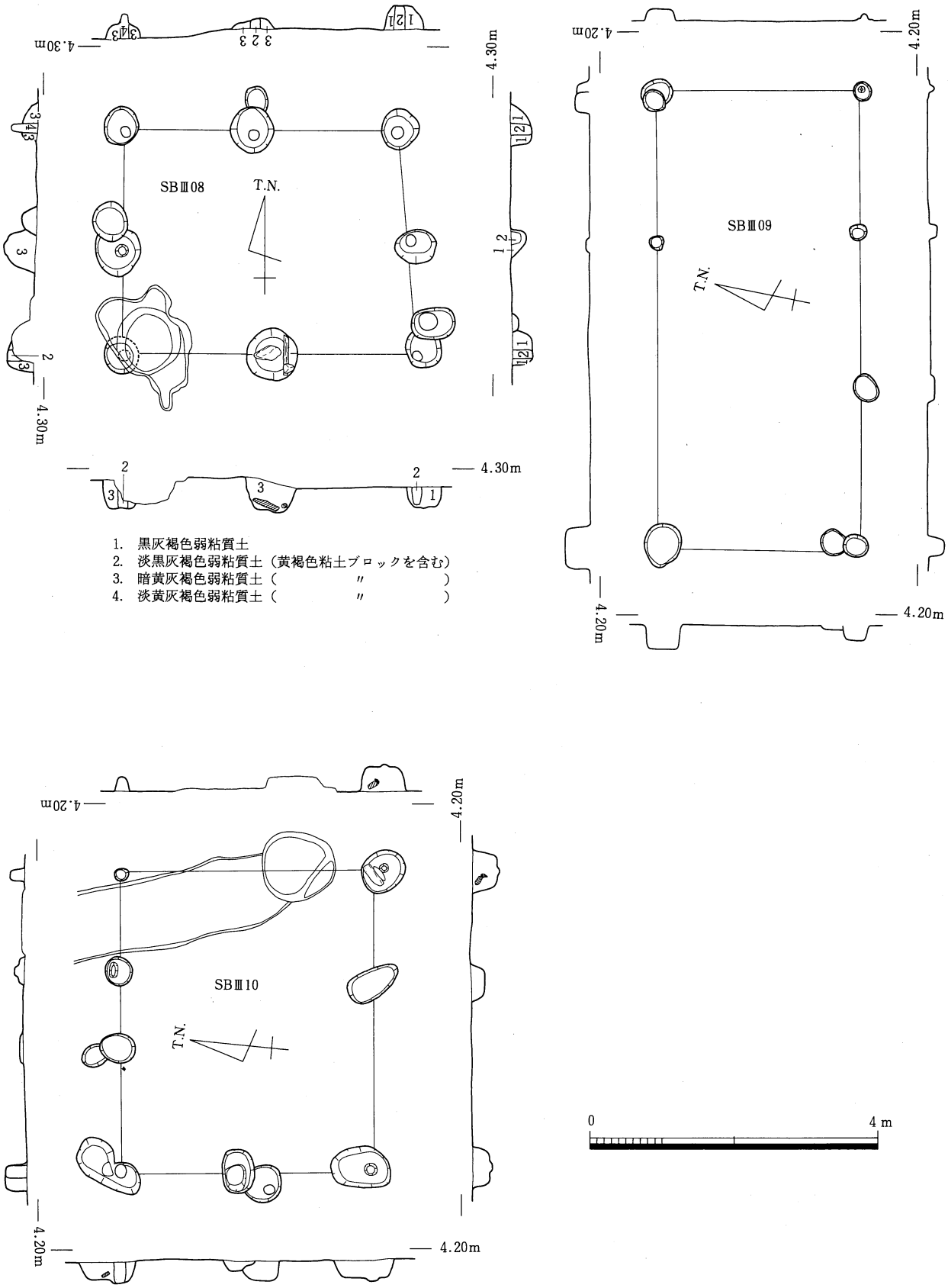


1. 暗褐色粘質土
2. 茶褐色粘質土
3. 〃 (黄色粘土粒含む)
4. 暗灰褐色粘質土
5. 灰褐色粘質土(黄色粘土粒含む)
6. 暗黄褐色粘質土
7. 黄褐色粘質土
8. 黄灰褐色粘質土(黄色粘土粒含む)
9. 灰色粘質土
10. 黄灰色粘質土
11. 茶色砂質土

第220図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(2)

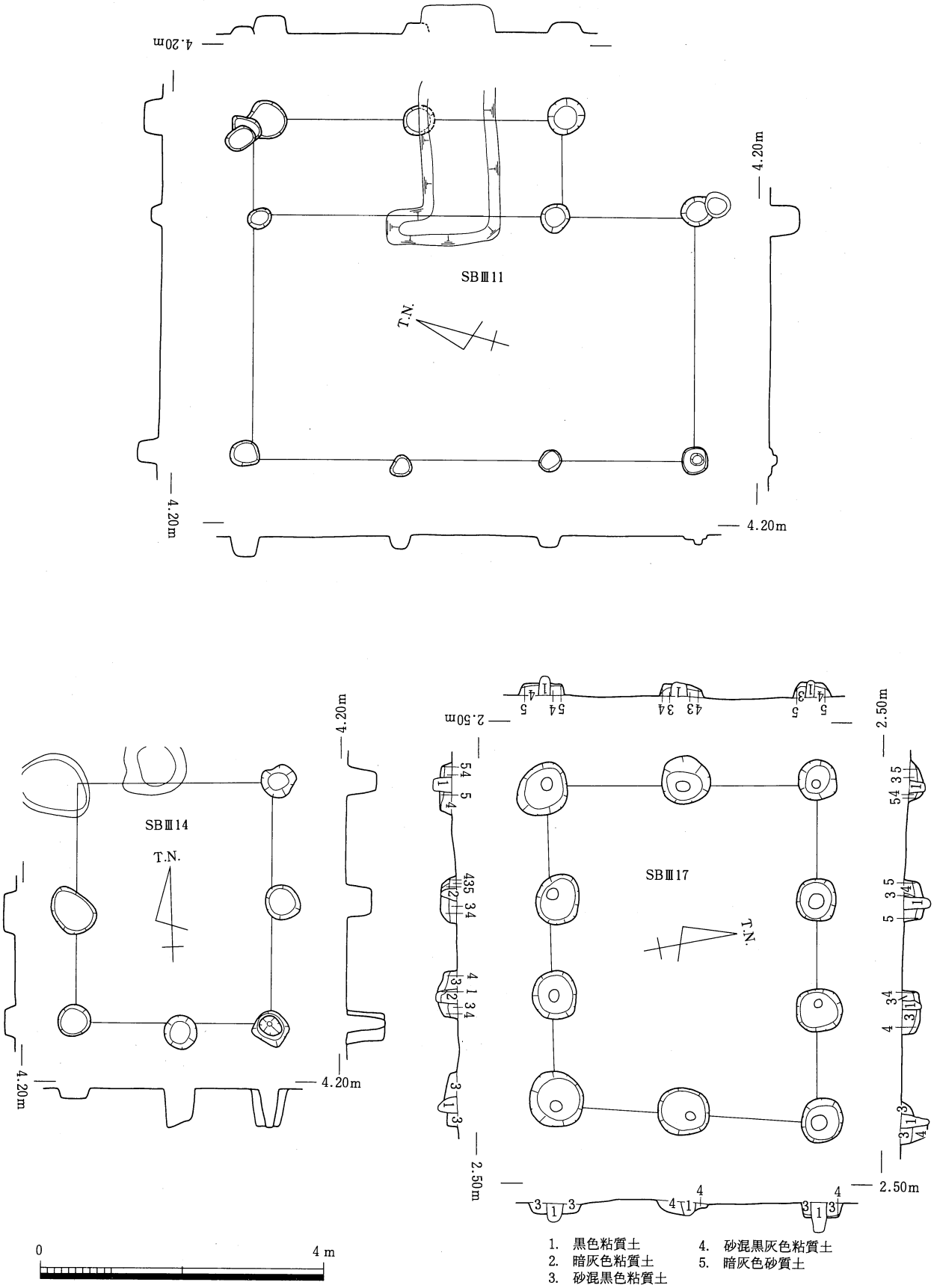


第221図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(3)

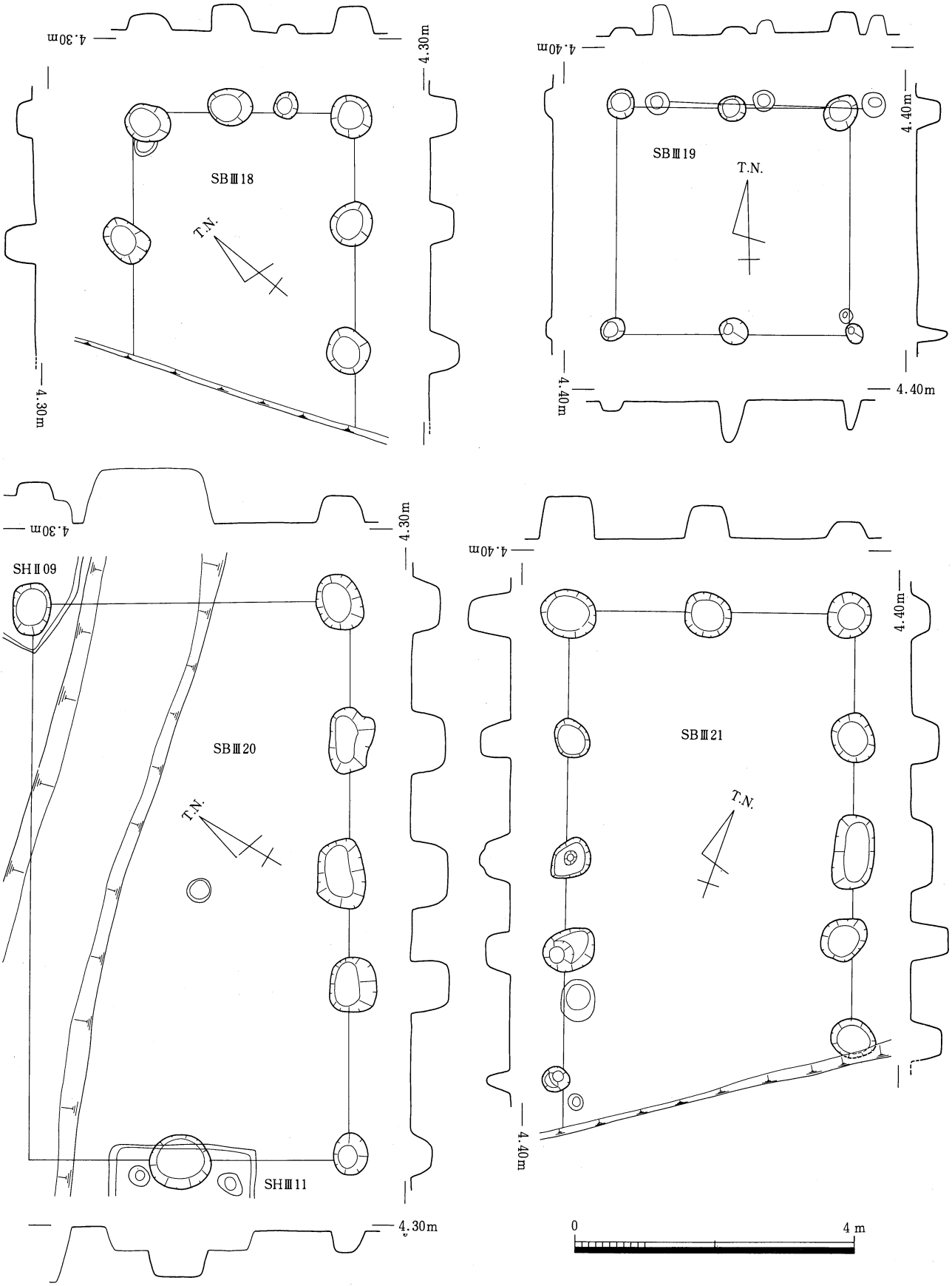


1. 黒灰褐色弱粘質土
2. 淡黒灰褐色弱粘質土（黄褐色粘土ブロックを含む）
3. 暗黄灰褐色弱粘質土（　　〃　　）
4. 淡黄灰褐色弱粘質土（　　〃　　）

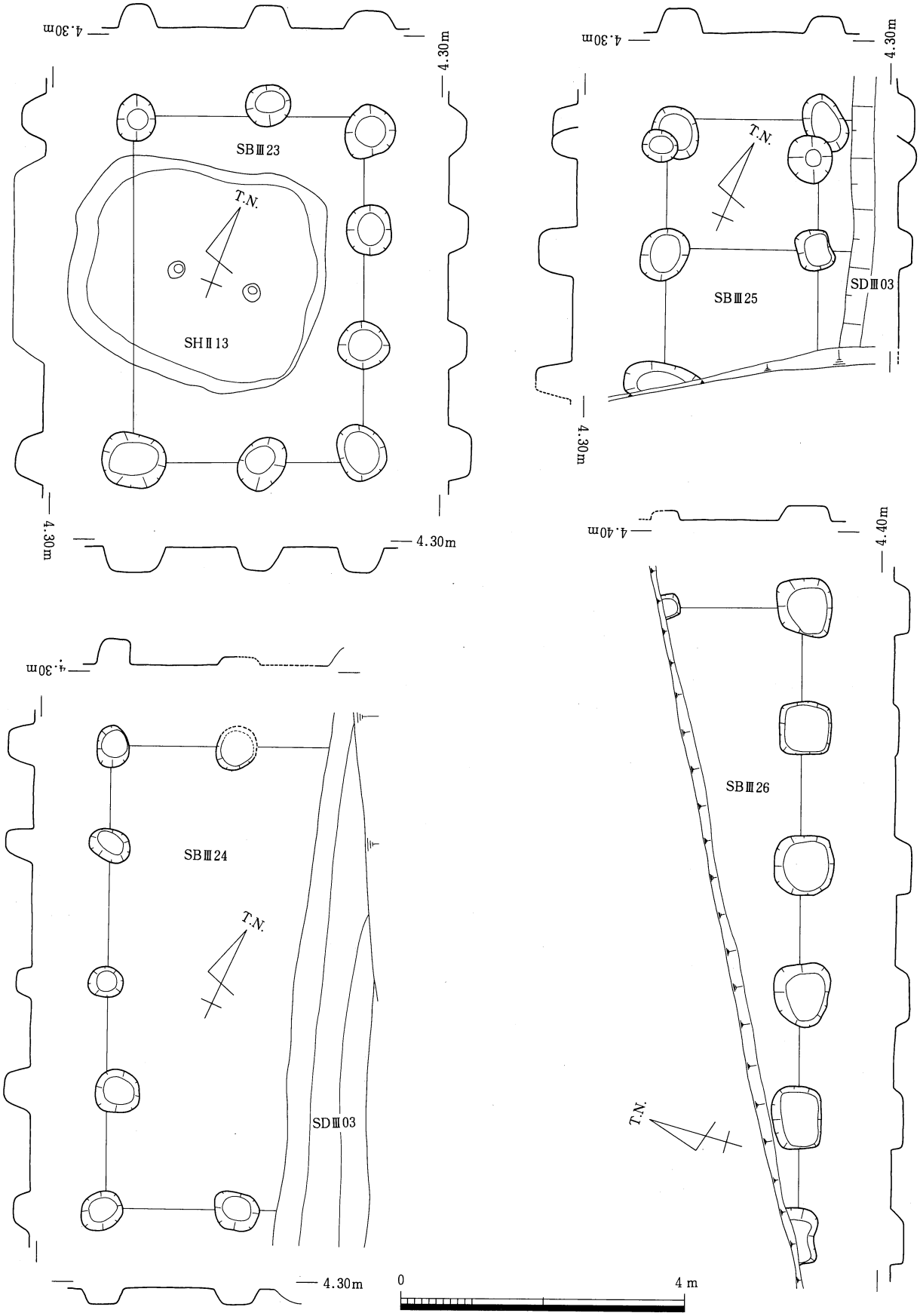
第222図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(4)



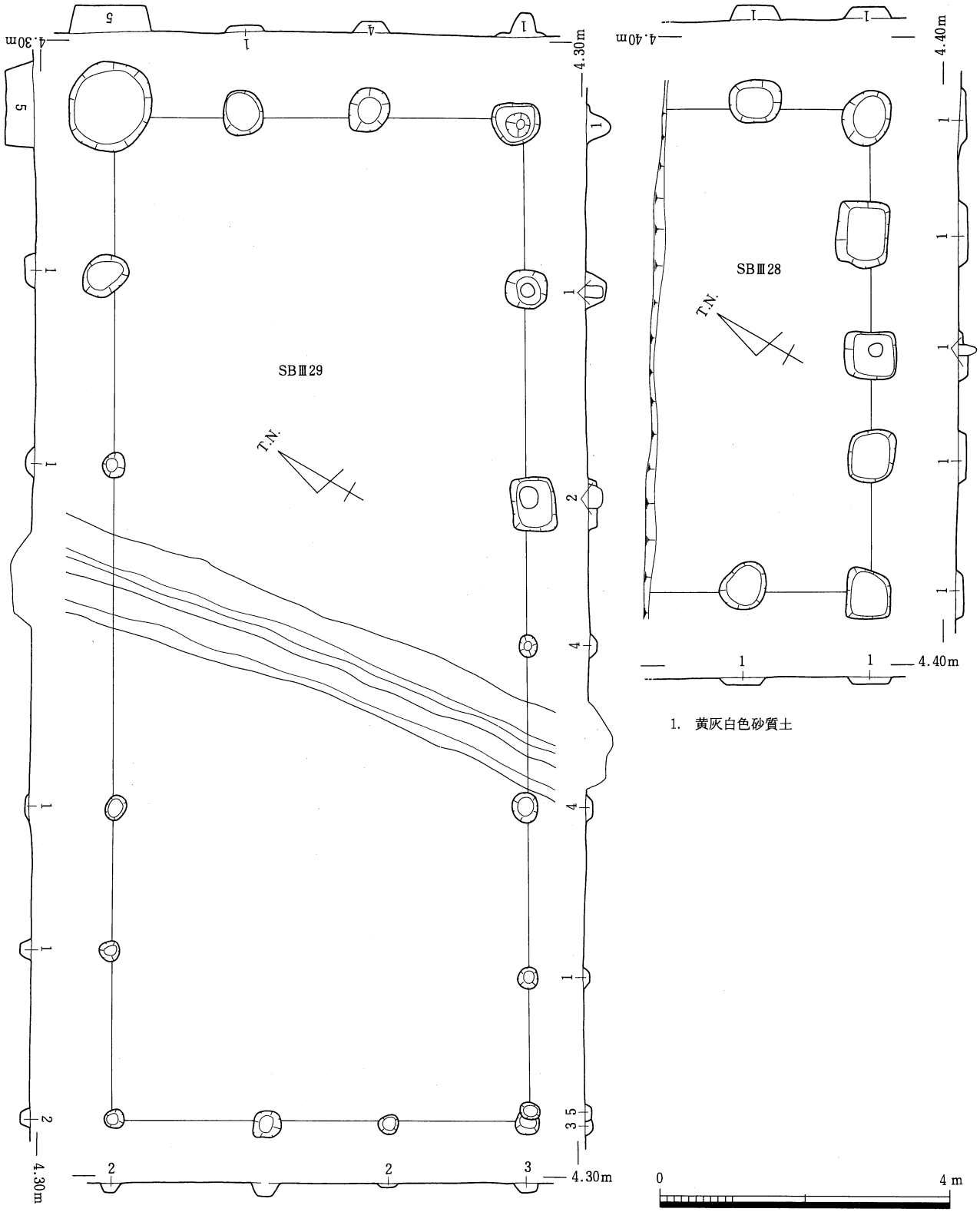
第223図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(5)



第224図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(6)



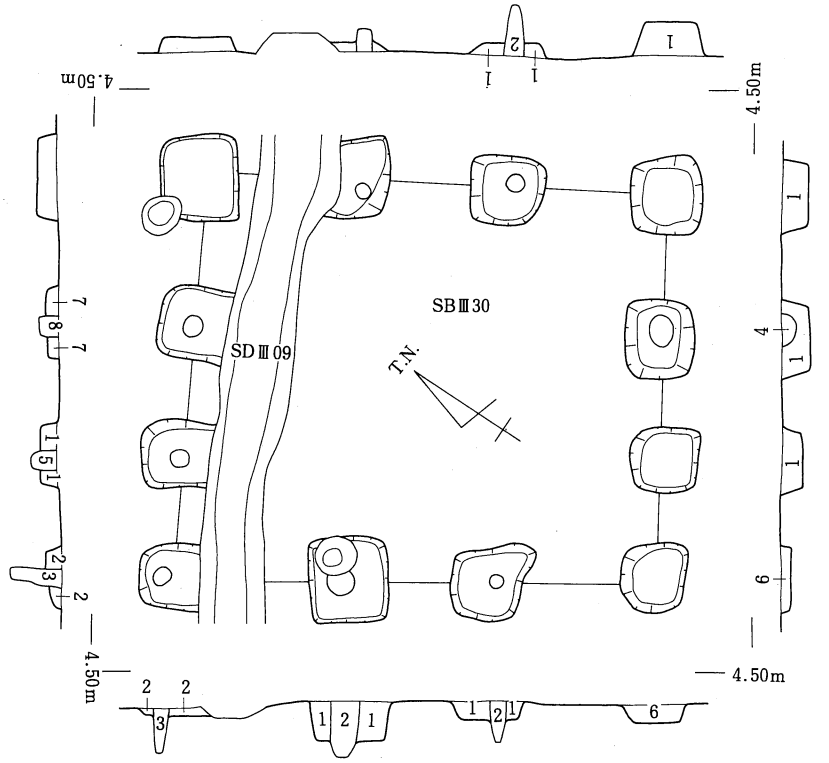
第225図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(7)



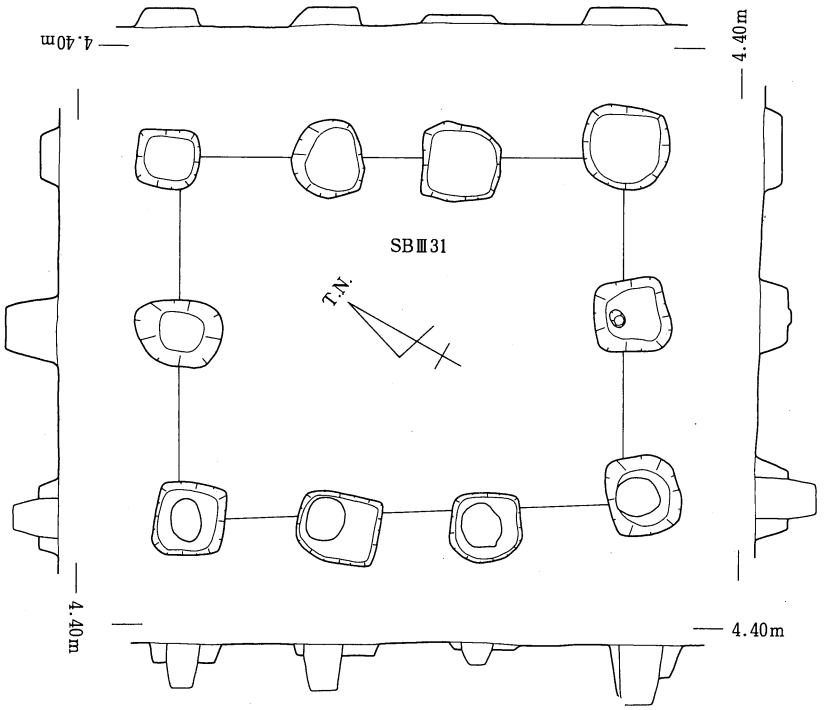
1. 黄灰白色砂質土

1. 暗褐色砂質土（硬質）
2. 1に類似（硬質，炭を含む）
3. 〃（硬質，炭及び焼土を多く含む）
4. 暗黄灰色砂質土（硬質）
5. 黄灰色砂質土（硬質）

第226図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(8)

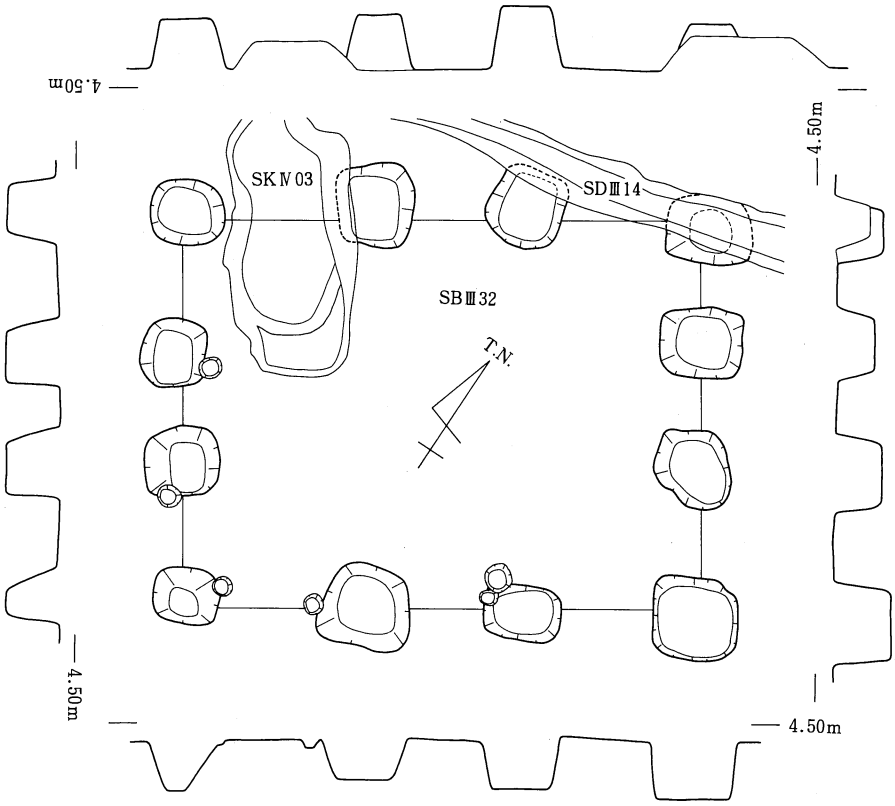


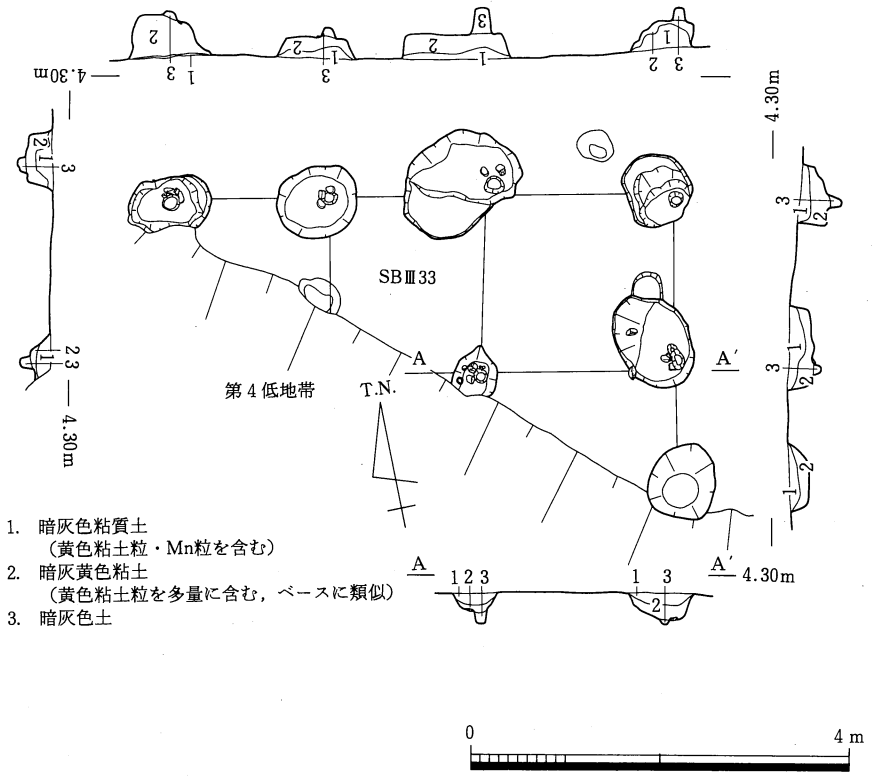
1. 黄灰色砂質土
2. 〃 （炭含む）
3. 〃 （炭多し）
4. 灰色砂質土（炭含む）
5. 灰色砂質土
6. 黄灰白色砂質土
7. 白黄灰色砂質土
8. 茶黄灰色砂質土



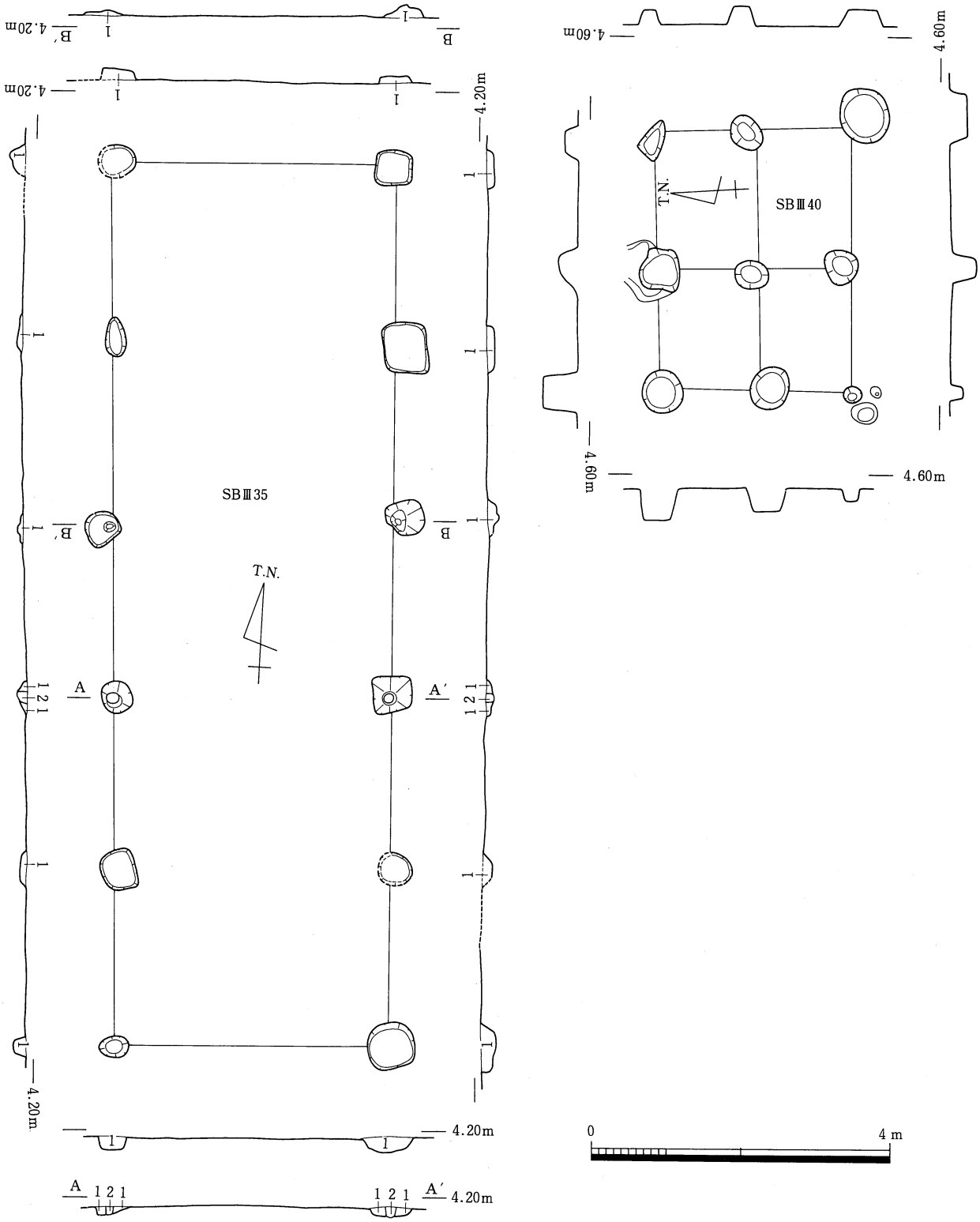
0 4 m

第227図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(9)



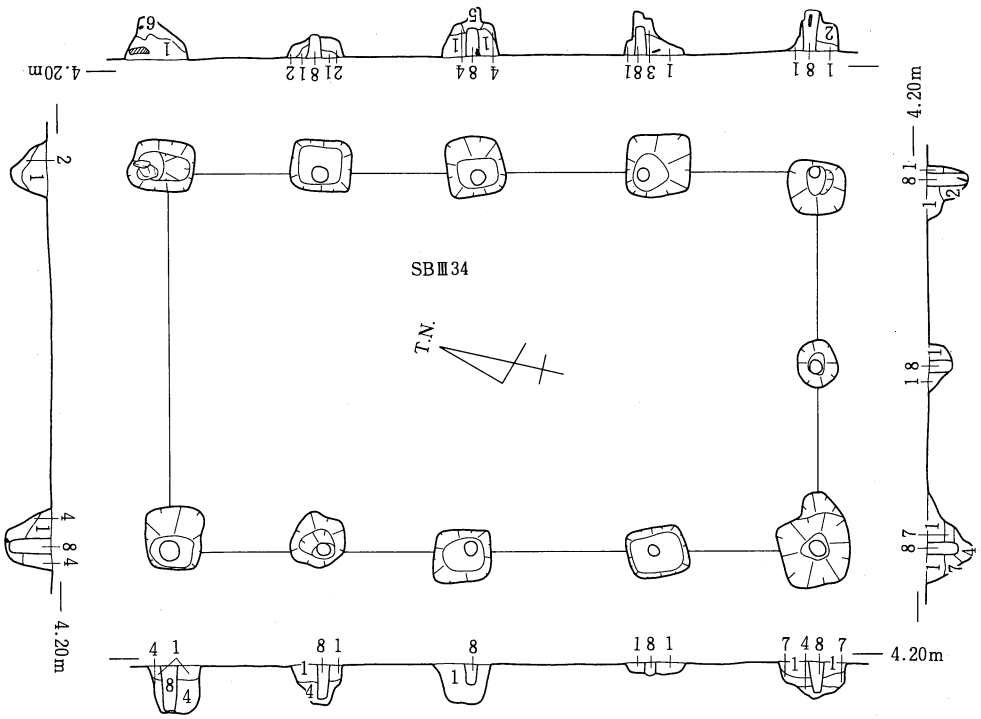


第228図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(10)

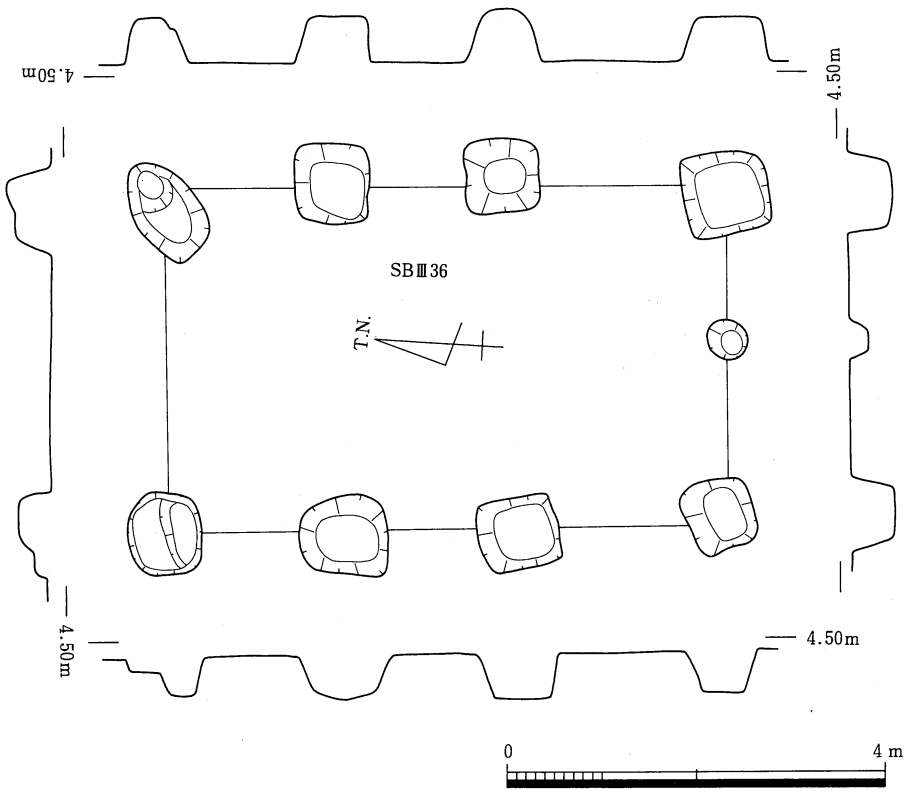


1. 暗灰色土（黄色粘土ブロック含む）
2. 暗灰色粘質土

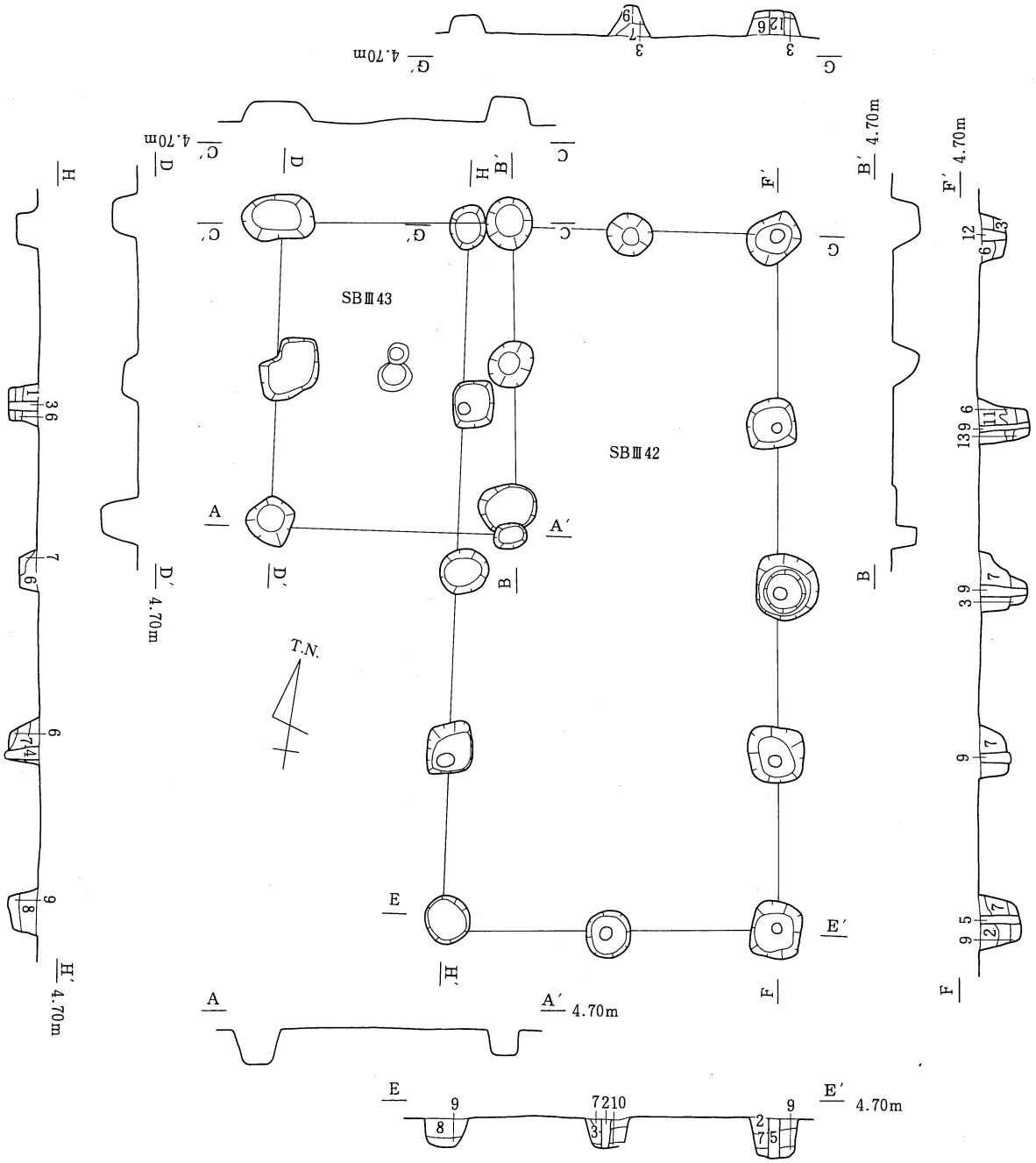
第229図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(11)



1. 暗灰褐色土（Mn粒を含む）
2. 暗灰茶色粘質土（Mn粒を含む）
3. 暗灰褐色粘質土（Mn粒を含む）
4. 暗灰色粘質土
5. 暗灰色粘土
6. 暗灰黄褐色粘質土（ベースに類似）
7. 暗灰褐色粘土（ベースの粒・Mn粒を含む）
8. 淡灰黄色砂質土



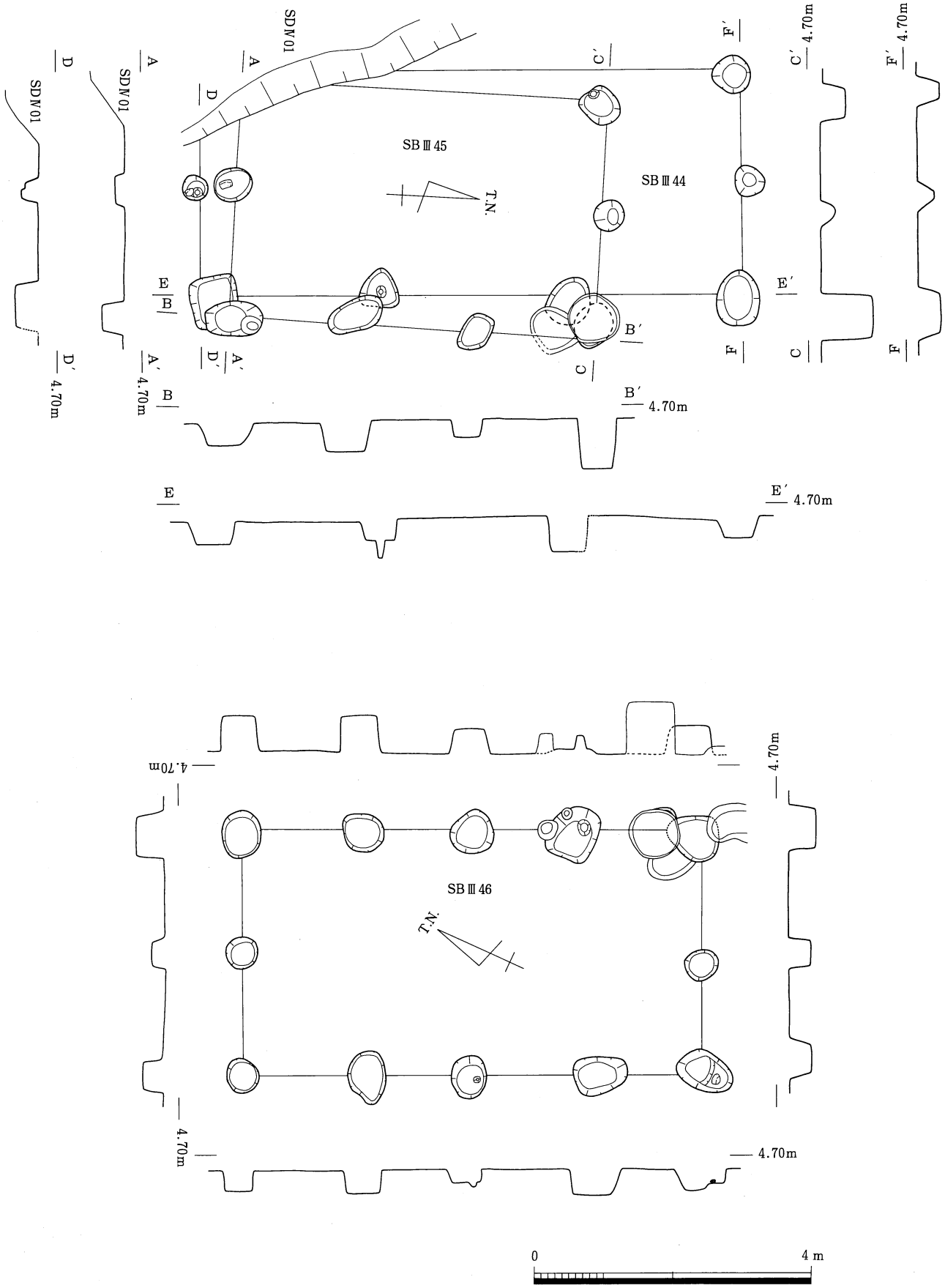
第230図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(12)



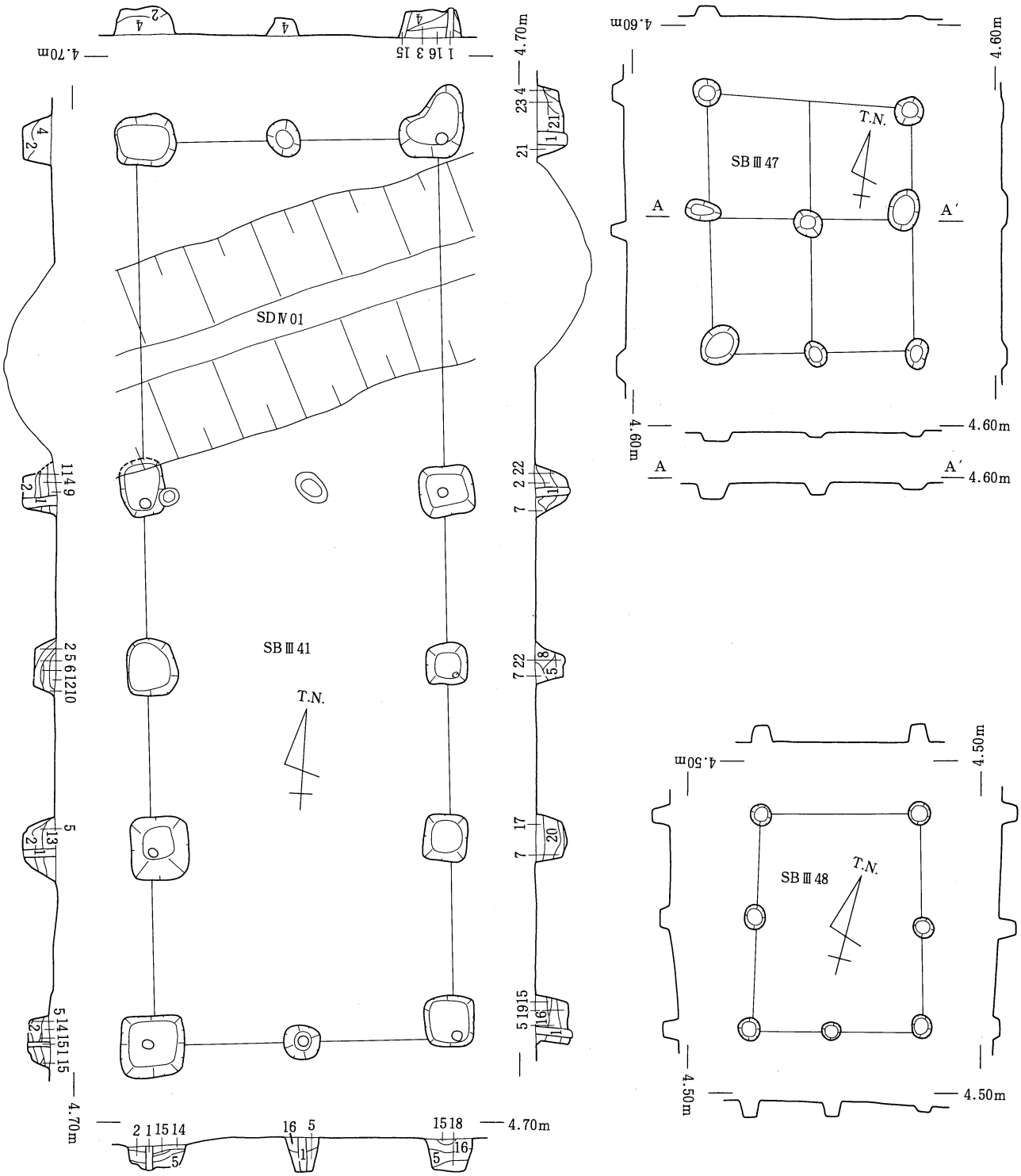
1. 灰褐色土（粘性弱い）
2. 黄褐色粘質土
3. 暗褐色粘質土
4. 〃　（やや灰色がかる）
5. 〃　（かなり粘性強い）
6. 褐色粘質土
7. 暗黄褐色粘質土
8. 〃　（やや粘性弱い）
9. 暗灰褐色粘質土
10. 〃　（粘性強い）
11. 淡褐色土（粘性弱い）
12. 淡灰褐色粘質土
13. 黒灰色粘質土（粘性強い）

0　4 m

第231図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(13)

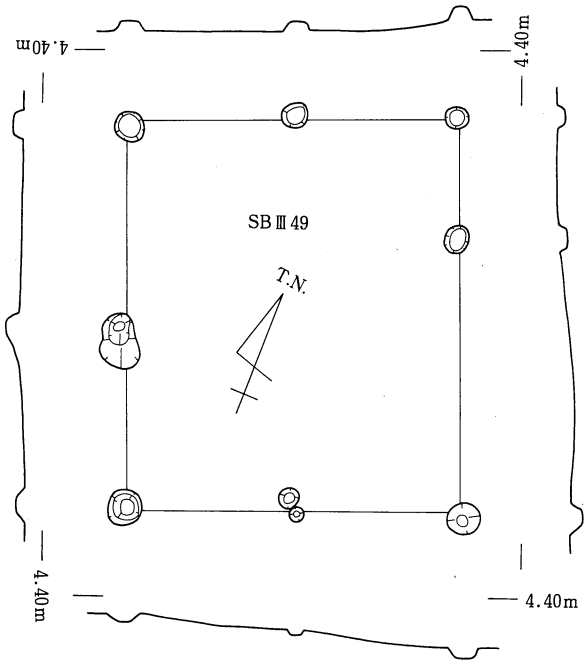


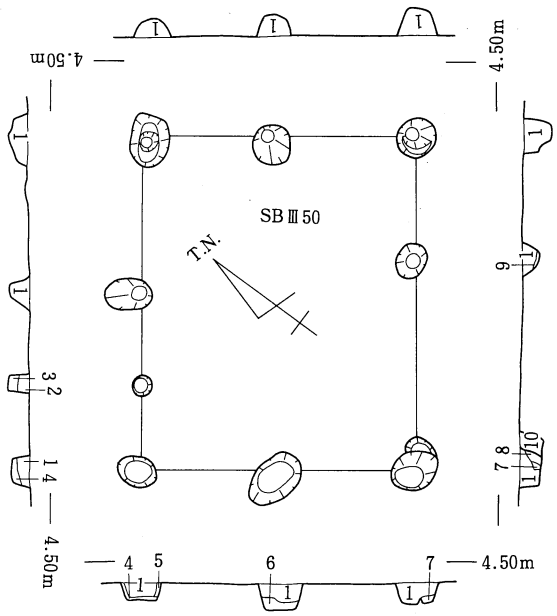
第232図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(14)



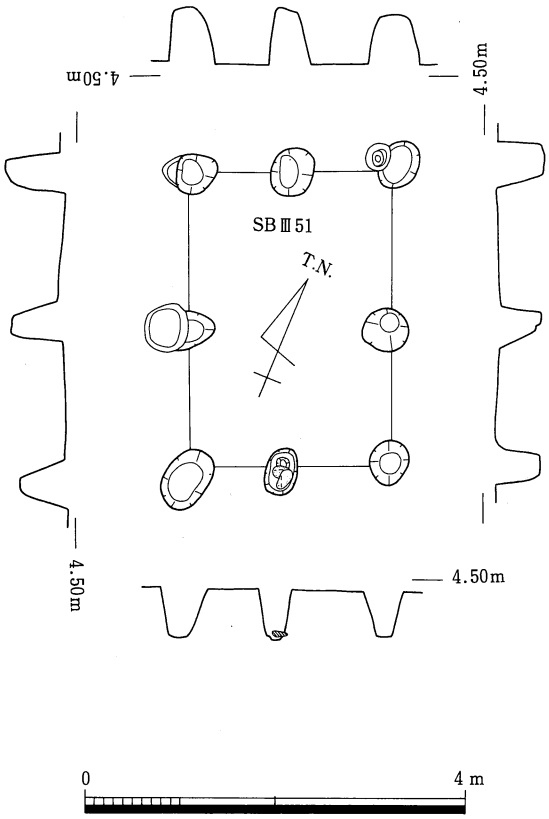
1. 暗灰褐色粘質土（粘性かなり強い）
2. 〃
3. 暗灰褐色砂質土
4. 暗褐色砂質土
5. 暗褐色粘質土
6. 〃 （Mn粒を含む）
7. 〃 （黄褐色土ブロック混入）
8. 〃 （灰色細砂が部分的に混在）
9. 淡灰褐色砂質土
10. 淡灰褐色粘質土
11. 暗灰褐色粘質土（やや炭混じり）
12. 褐色砂質土
13. 灰褐色砂質土（砂粒まがい）
14. 灰褐色粘質土
15. 黄褐色土
16. 淡褐色砂質土
17. 〃 （下層に比べ粘性が弱い）
18. 暗灰色粘質土
19. 〃 （柱根に比べやや明るい）
20. 暗黄褐色粘質土
21. 暗黄褐色砂質土（きめが細かい）
22. 黒褐色粘質土
23. 暗黄灰褐色砂質土

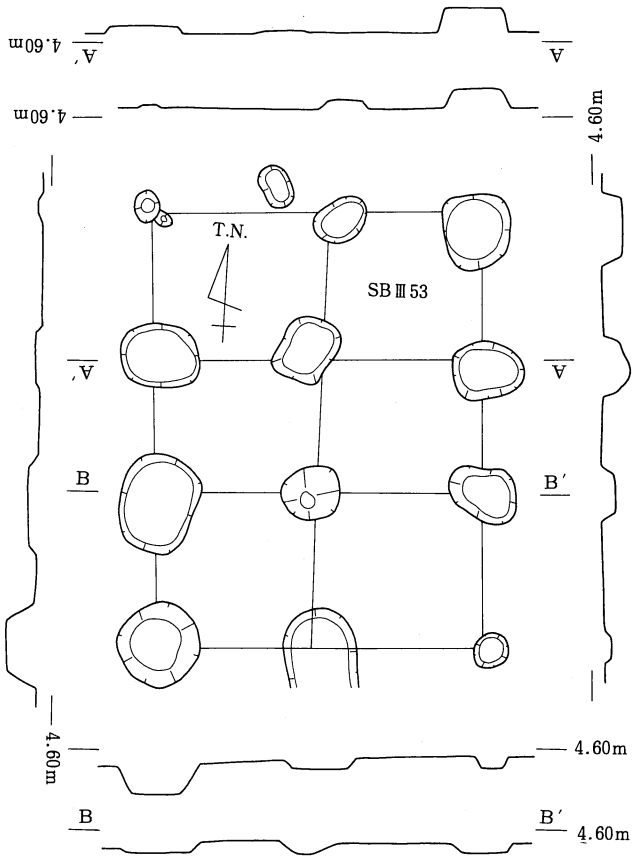
第233図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(15)



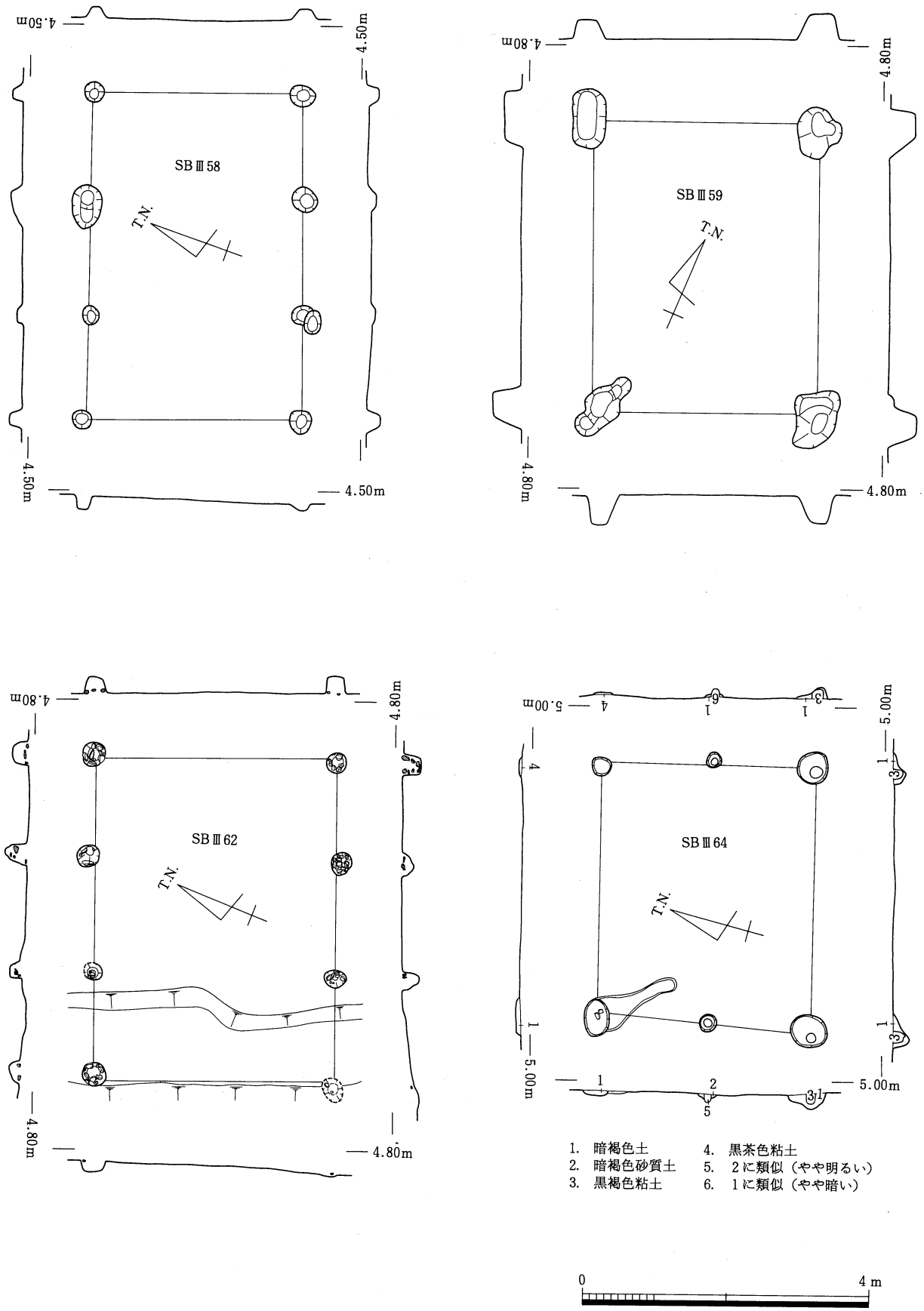


1. 暗褐色粘質土
2. 黄灰色粘質土
3. 茶灰色粘質土
4. 茶褐色粘質土
5. 灰褐色粘質土
6. 黄茶褐色粘質土
7. 灰茶色粘質土
8. 黄褐色粘質土
9. 茶色粘質土
10. 1に類似

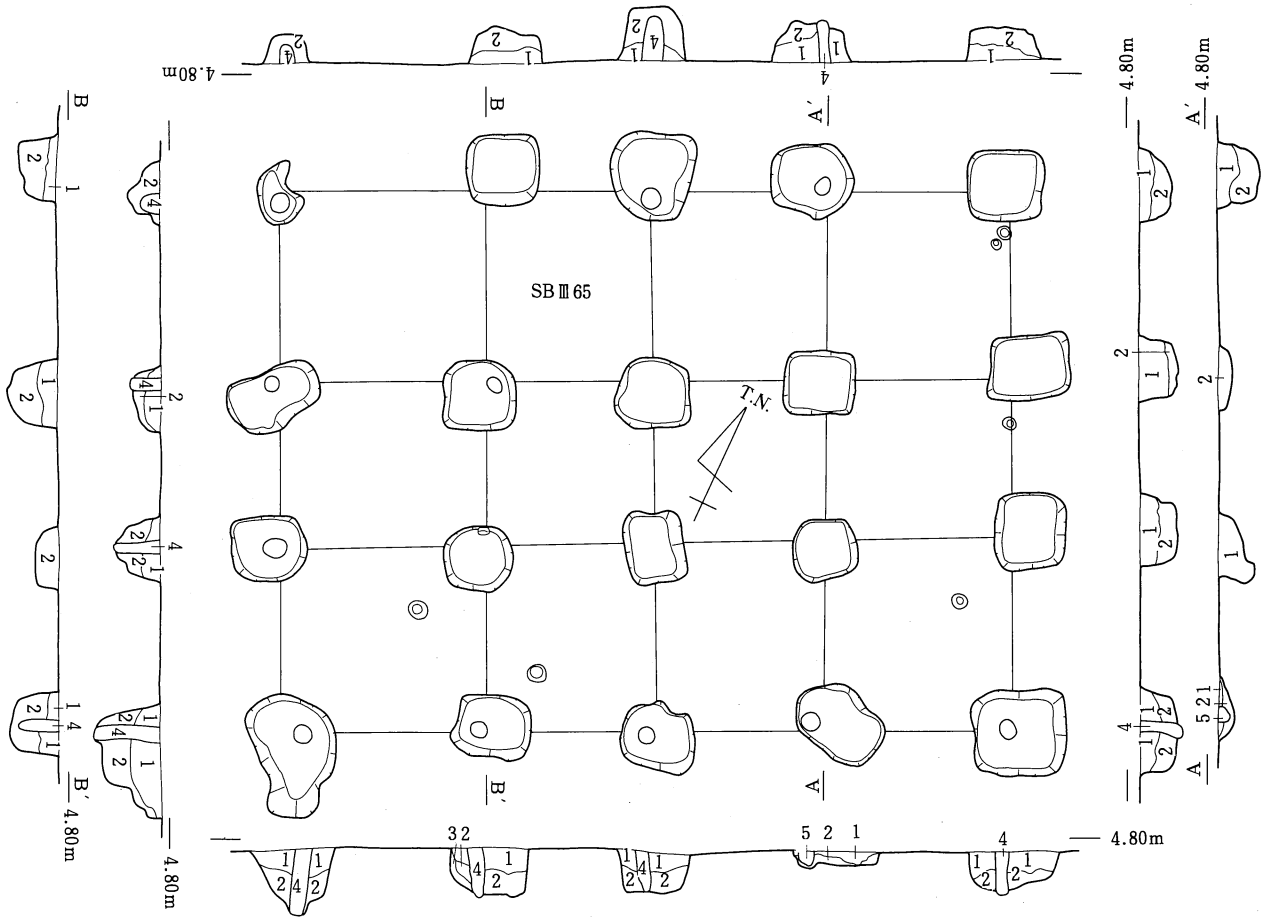




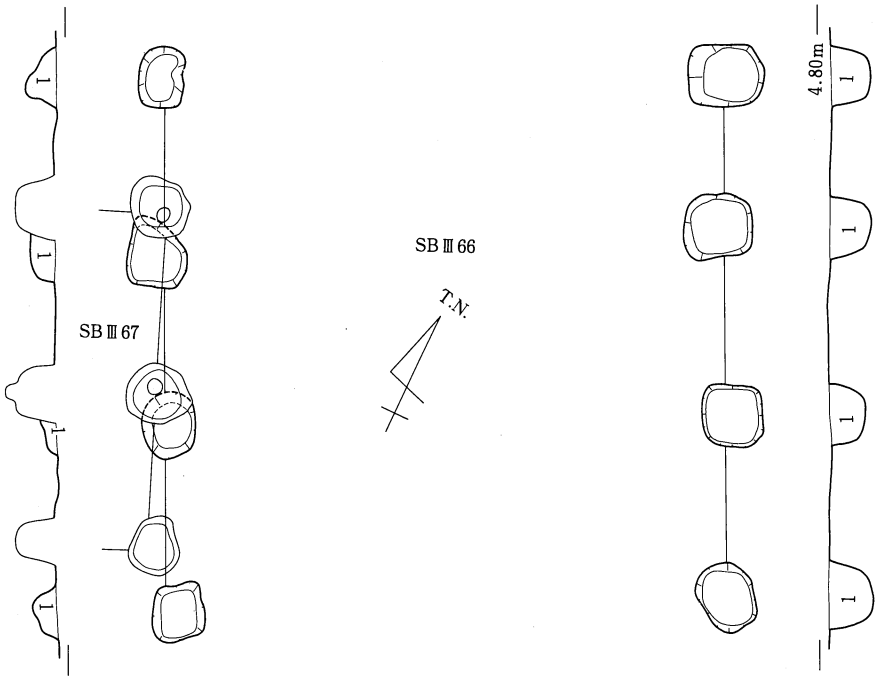
第234図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(16)



第235図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(17)



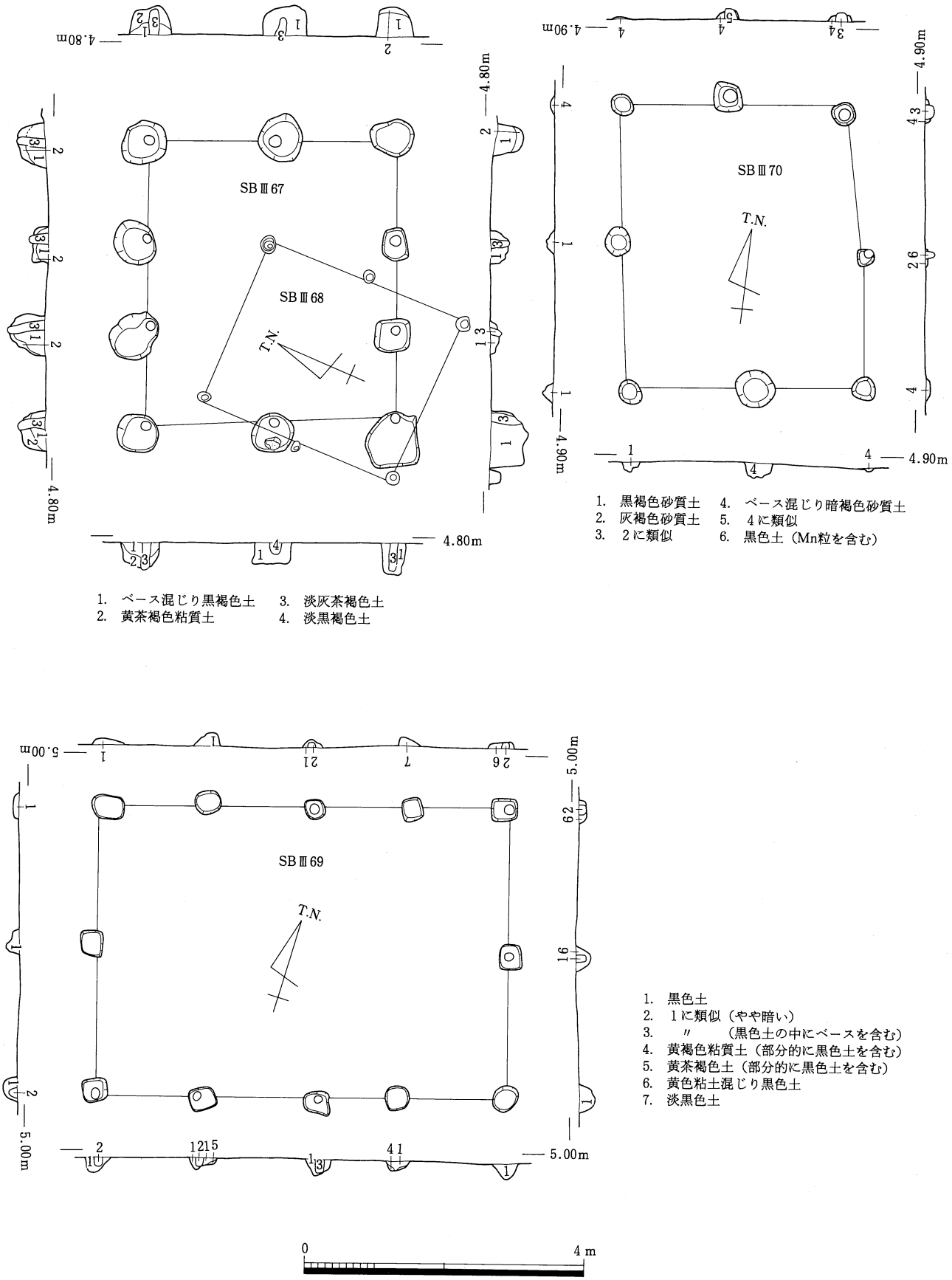
1. ベース混じり黒褐色土　2. 暗茶褐色粘質土　3. 黒褐色粘質土　4. 黒灰褐色土　5. 黒褐色土



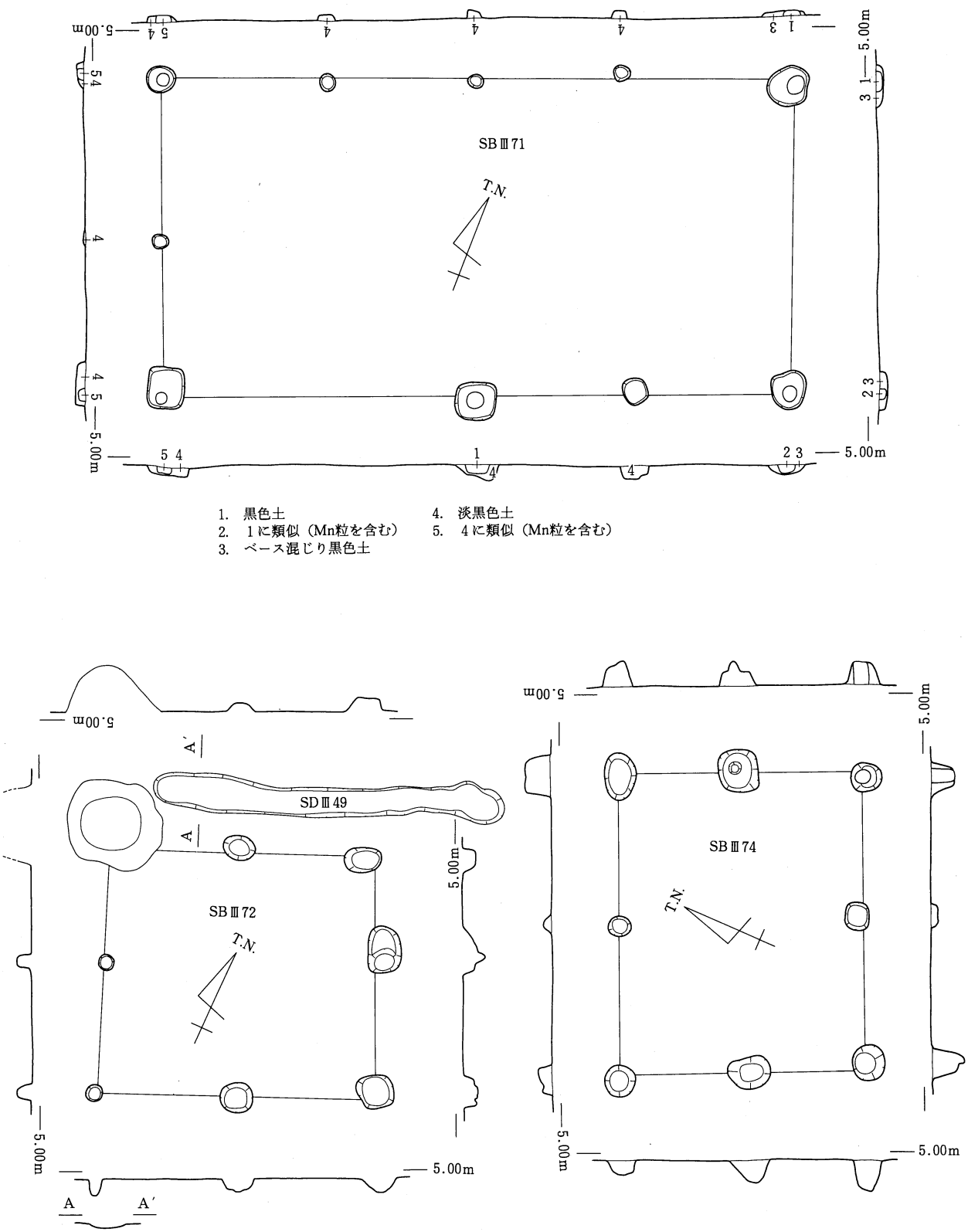
1. ベース混じり黒灰茶褐色粘質土
（淡灰黄色・黒褐色・茶褐色土ブロックを含む）

0　4 m

第236図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(18)

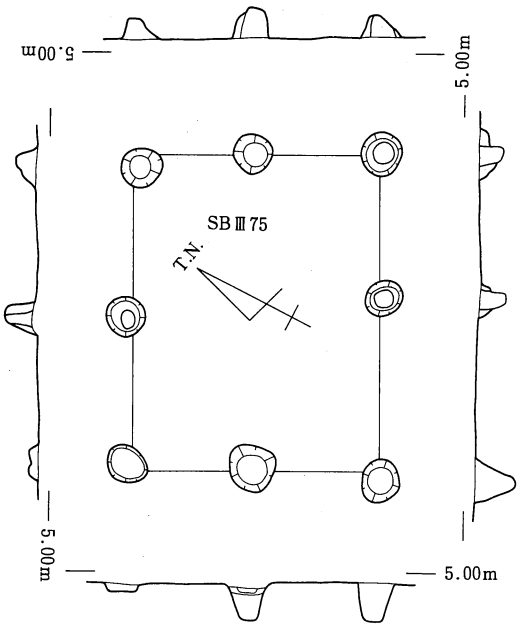


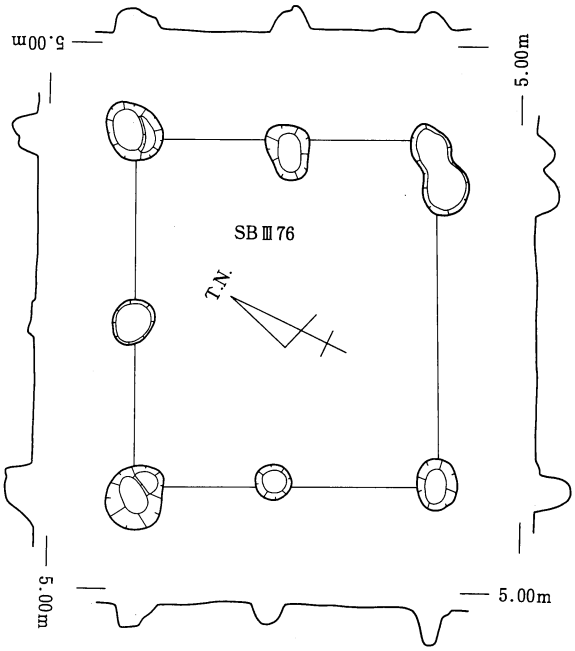
第237図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(19)

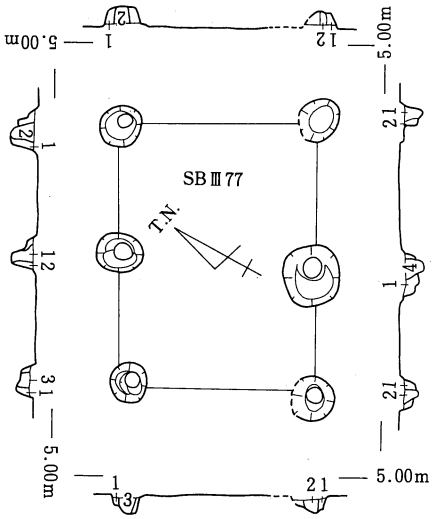


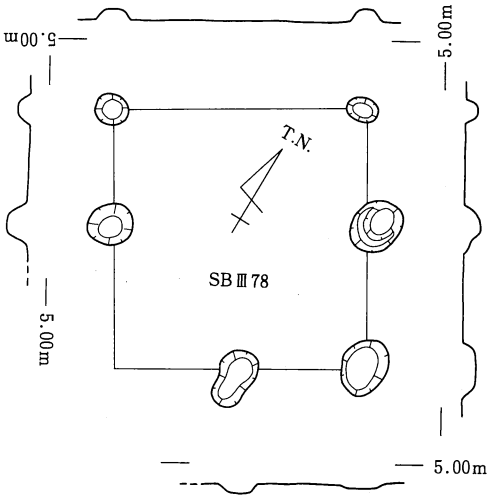
1. 黒色土
2. 1に類似（Mn粒を含む）
3. ベース混じり黒色土
4. 淡黒色土
5. 4に類似（Mn粒を含む）

第238図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図⑳



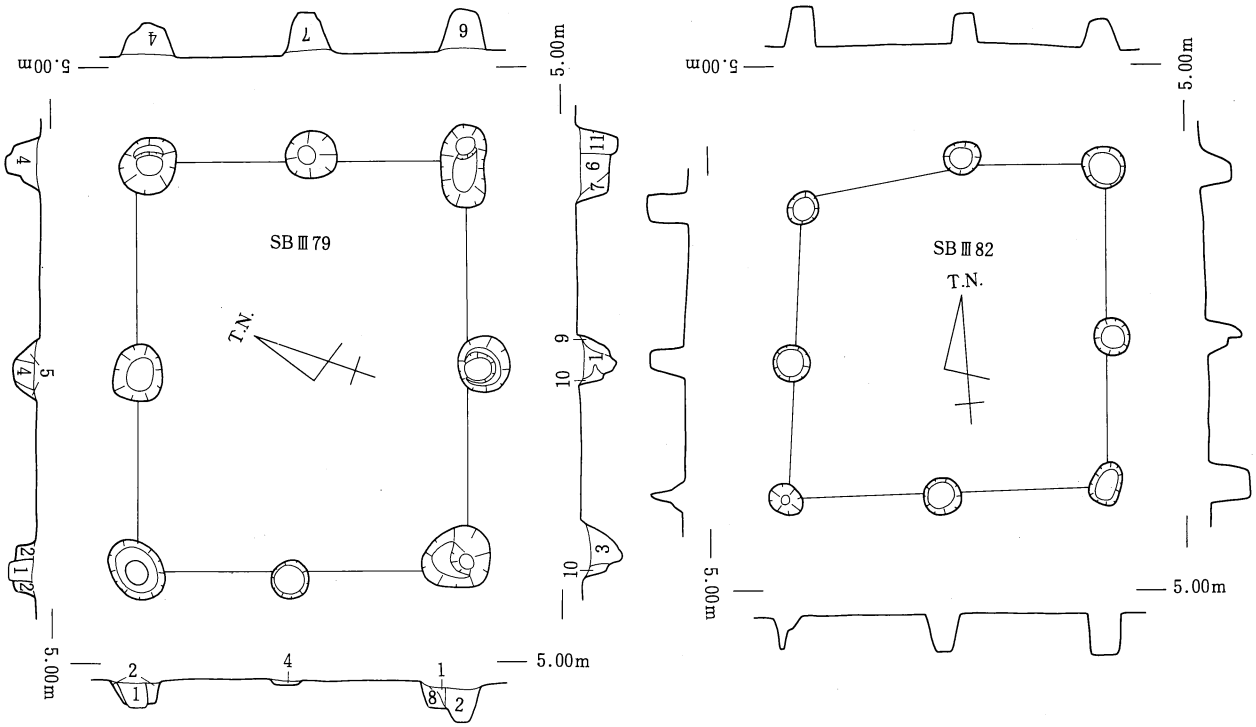






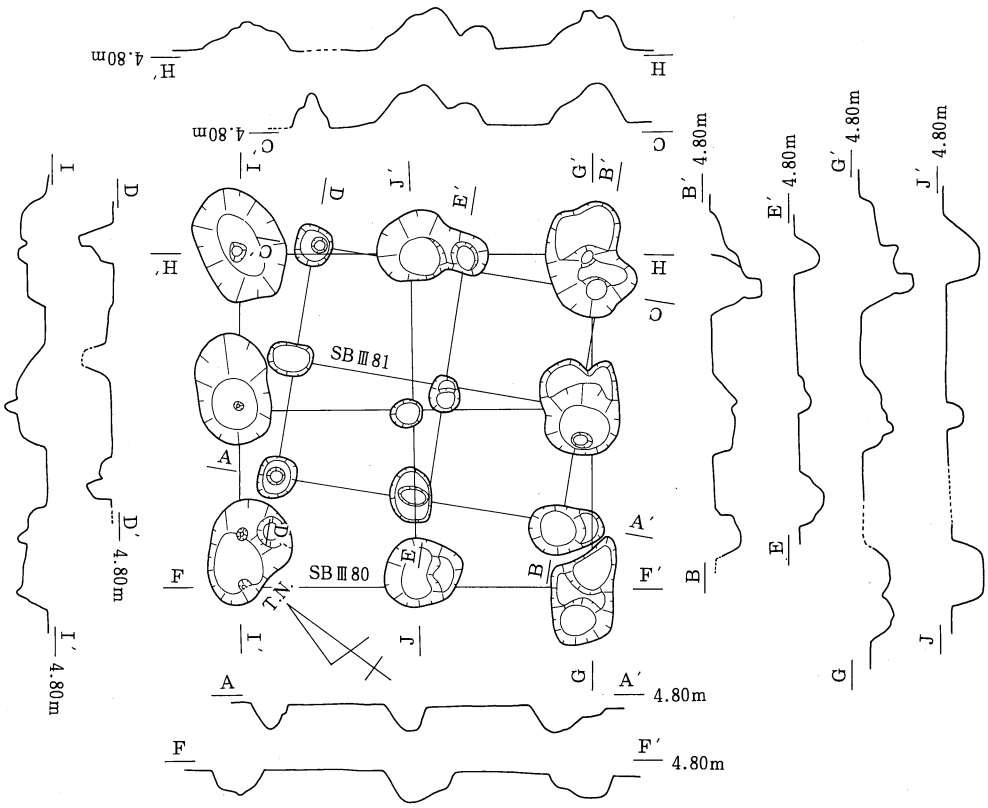
1. 暗褐色粘質土
2. 1に類似（ベースブロックを含む）
3. 〃 （炭を少量含む）
4. 〃 （やや砂質）

第239図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(21)

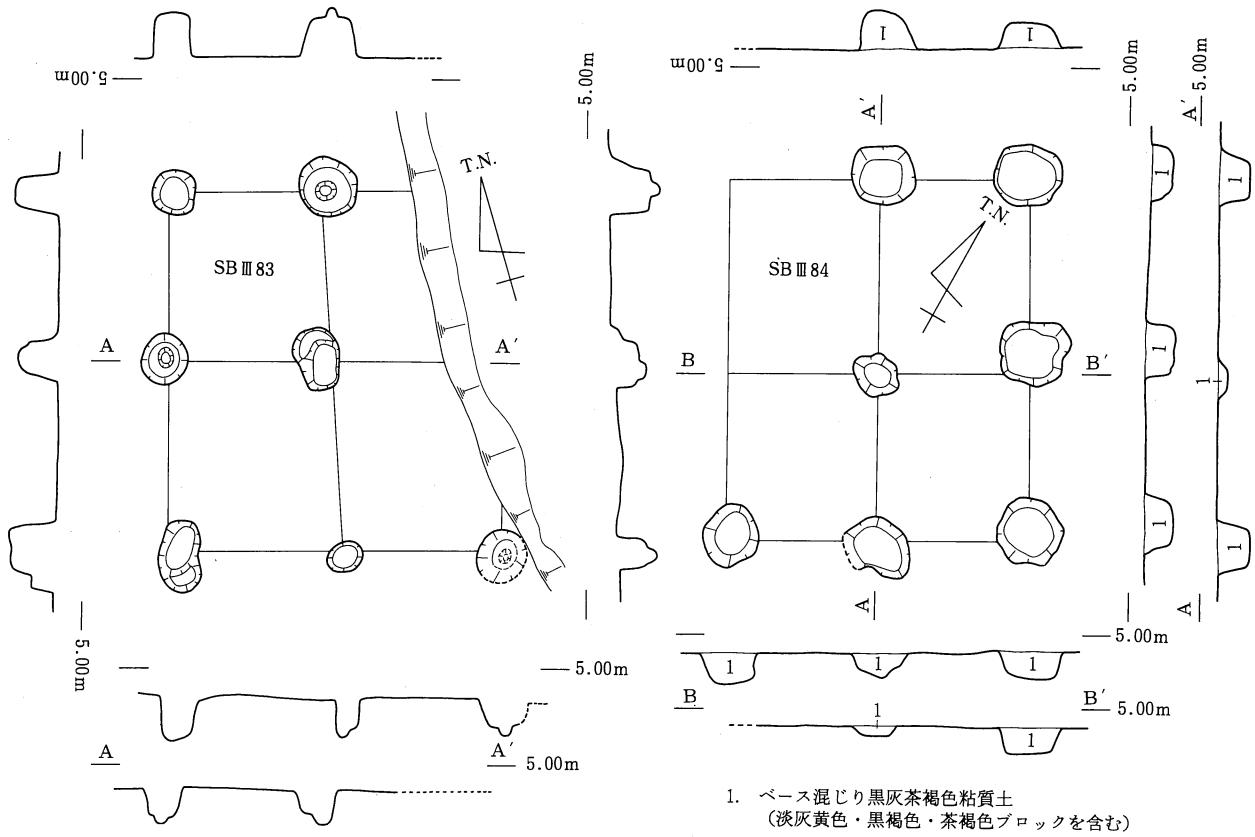


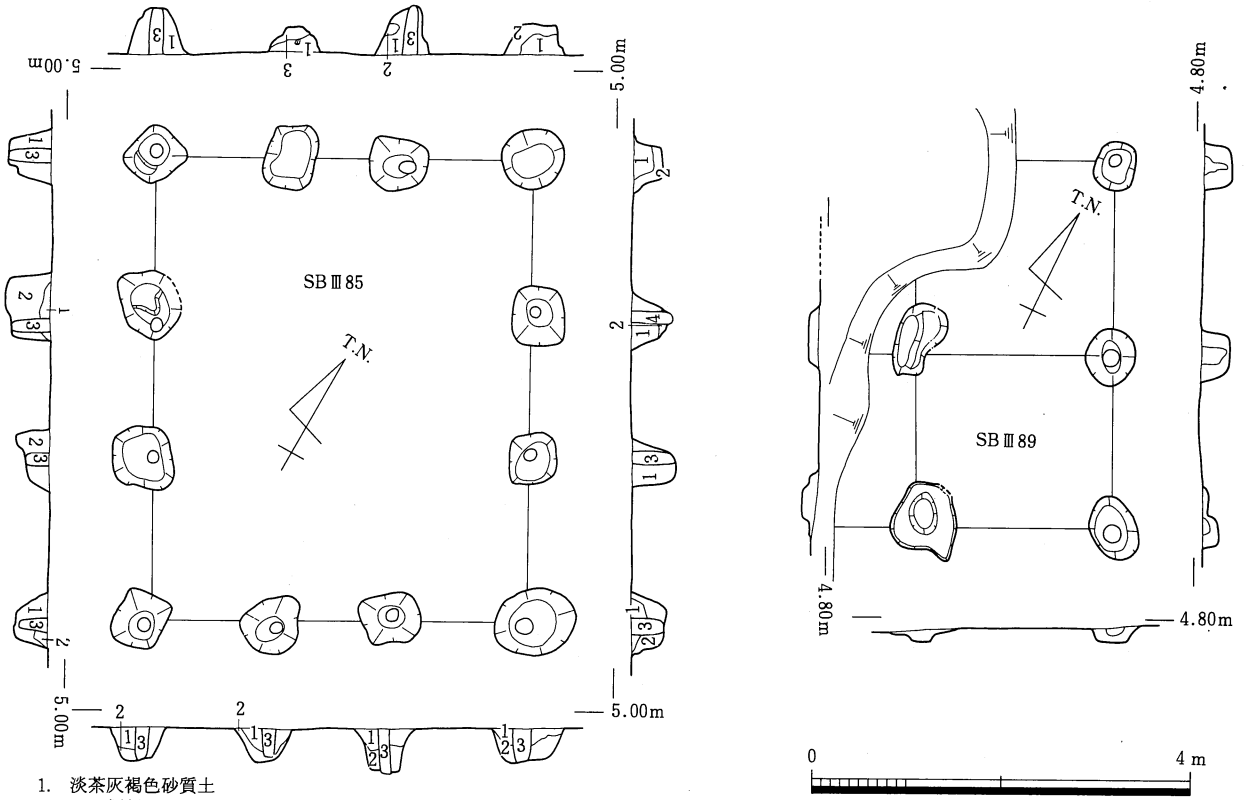
1. 暗褐色粘質土
2. 1に類似（ベースブロックを含む）
3. 〃　（炭を含む）
4. 灰褐色粘質土
5. 4に類似（ベースブロックを含む）
6. 〃　（やや砂質）
7. 4に類似（やや砂質，ベースブロックを含む）
8. 暗灰黄褐色粘質土
9. 暗灰褐色粘質土
10. 9に類似（ベースブロックを含む）
11. 〃　（やや砂質，ベースブロックを含む）

0　4 m

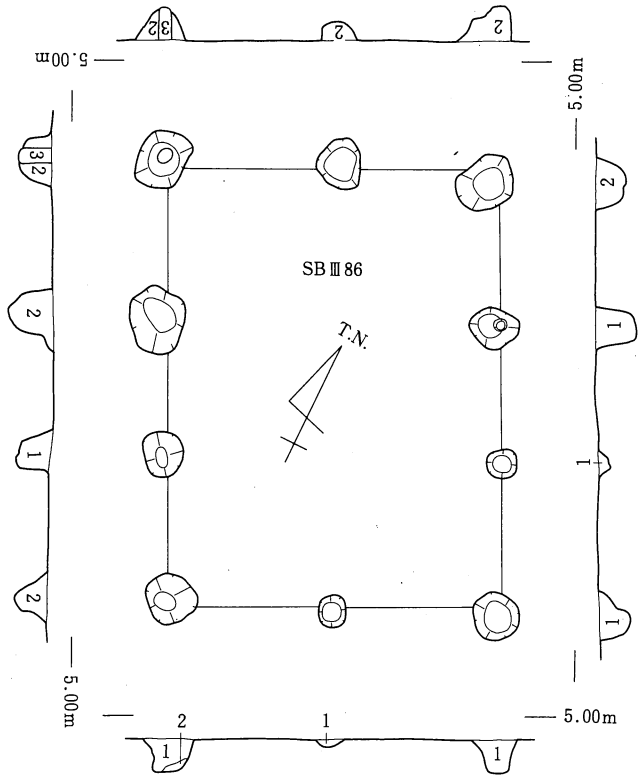


第240図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(22)

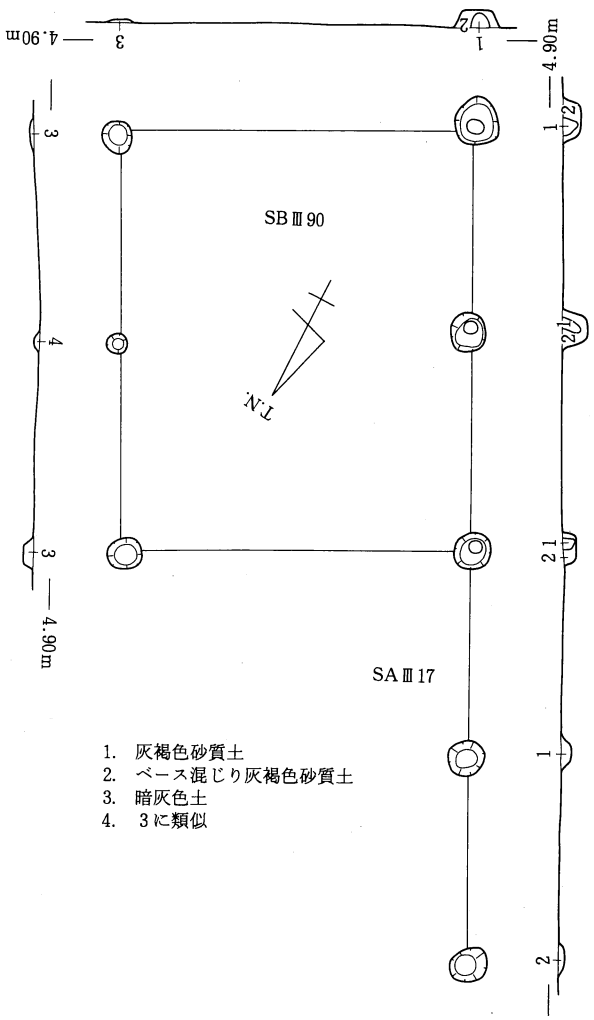




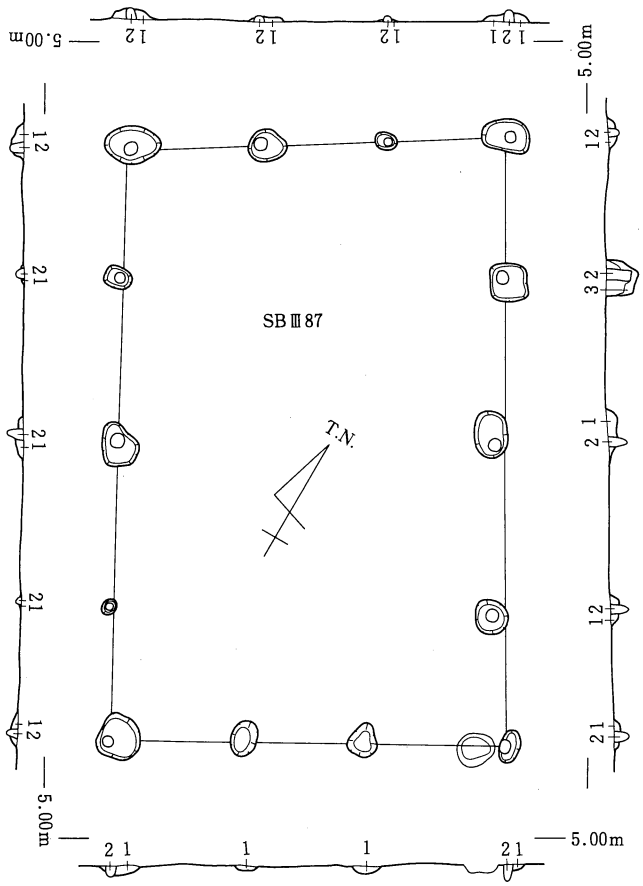
第241図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(23)



1. 淡茶灰褐色砂質土　2. 1に類似（ベースを含む）　3. 茶灰褐色砂質土



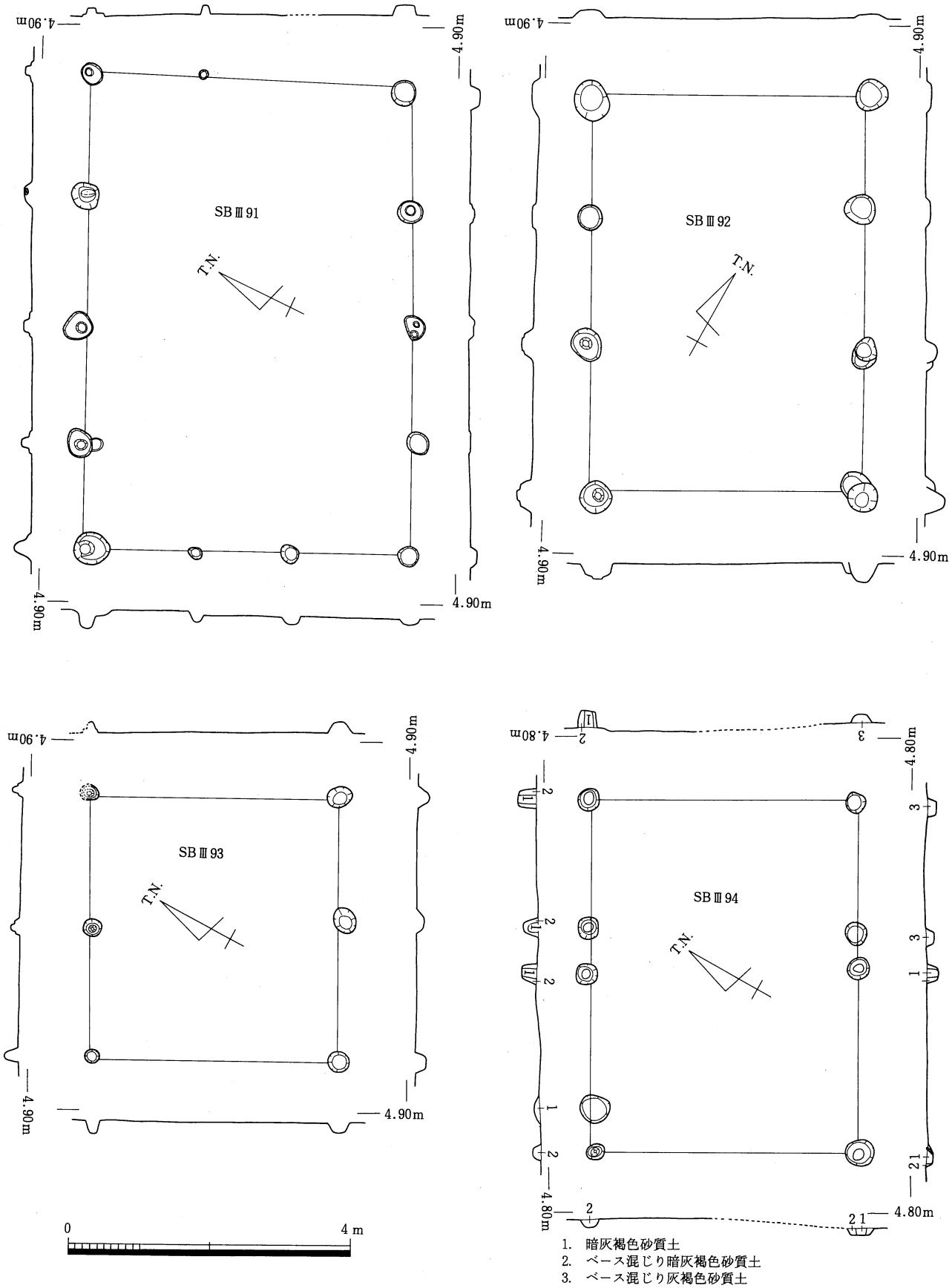
1. 灰褐色砂質土
2. ベース混じり灰褐色砂質土
3. 暗灰色土
4. 3に類似



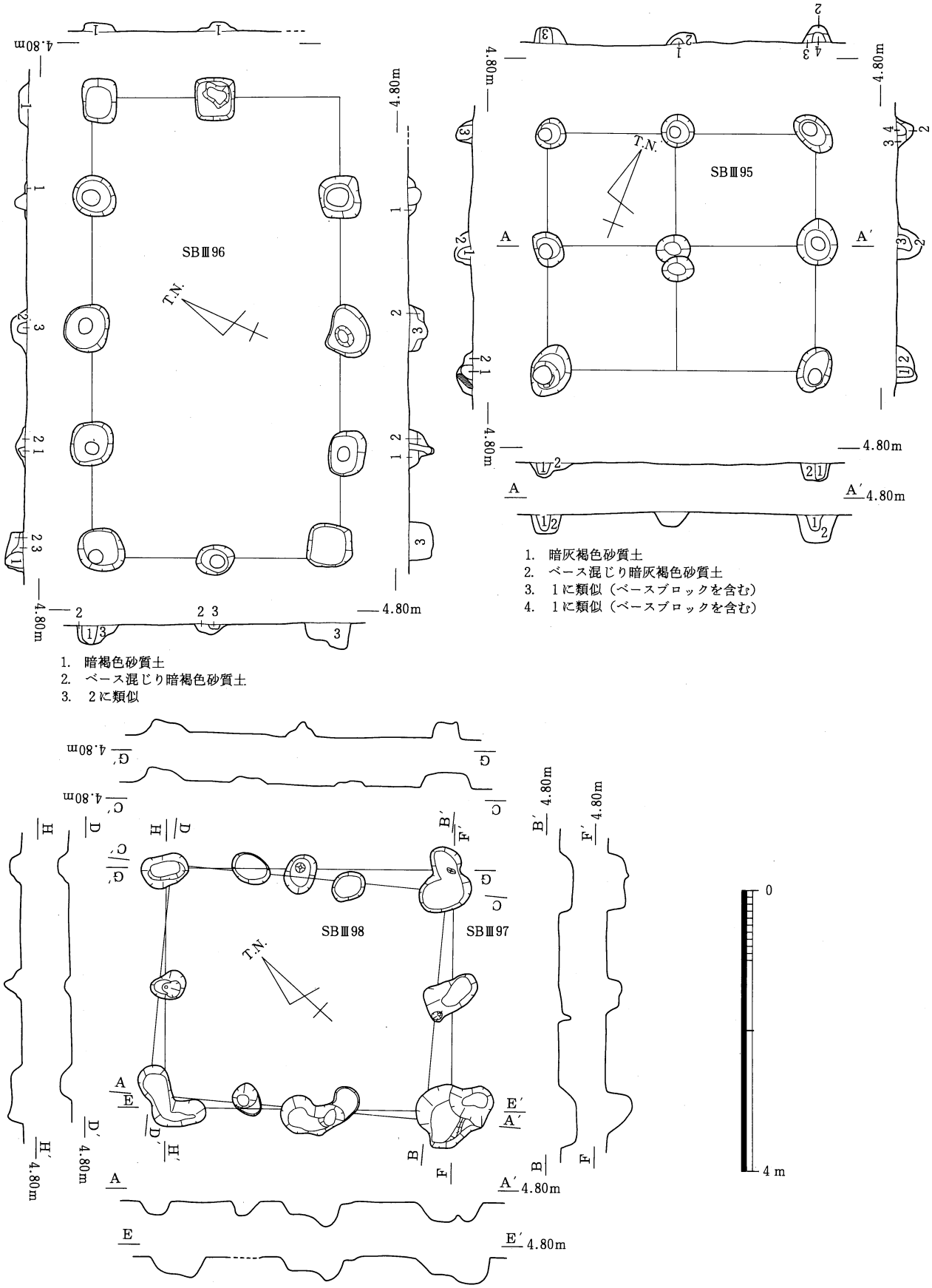
1. ベース混じり暗褐色砂質土
2. ベースが混じらず暗褐色砂質土
3. 黄褐色砂（ベース）に，暗褐色砂質土のブロックを含む

0　4m

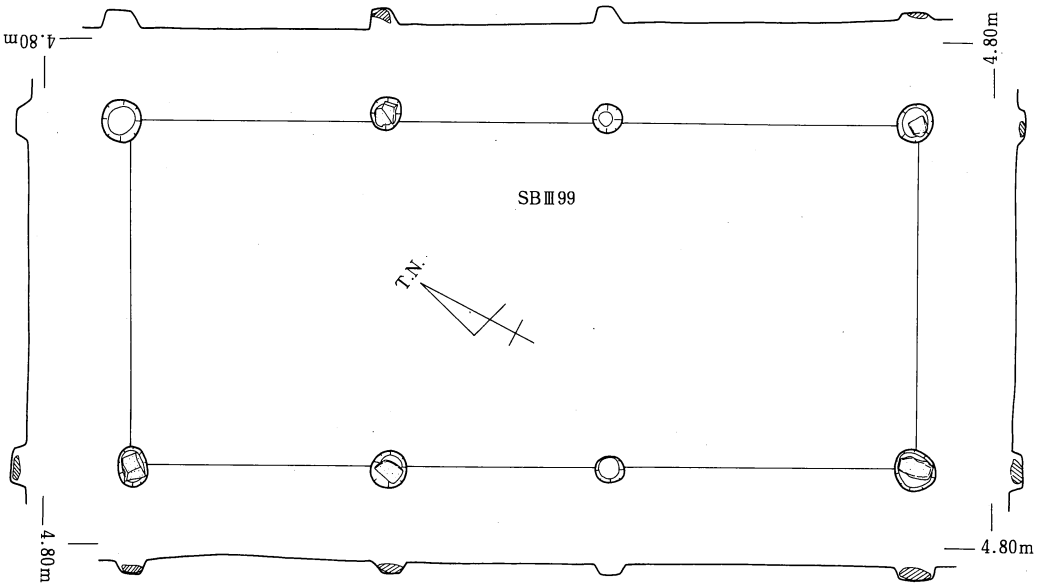
第242図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(24)

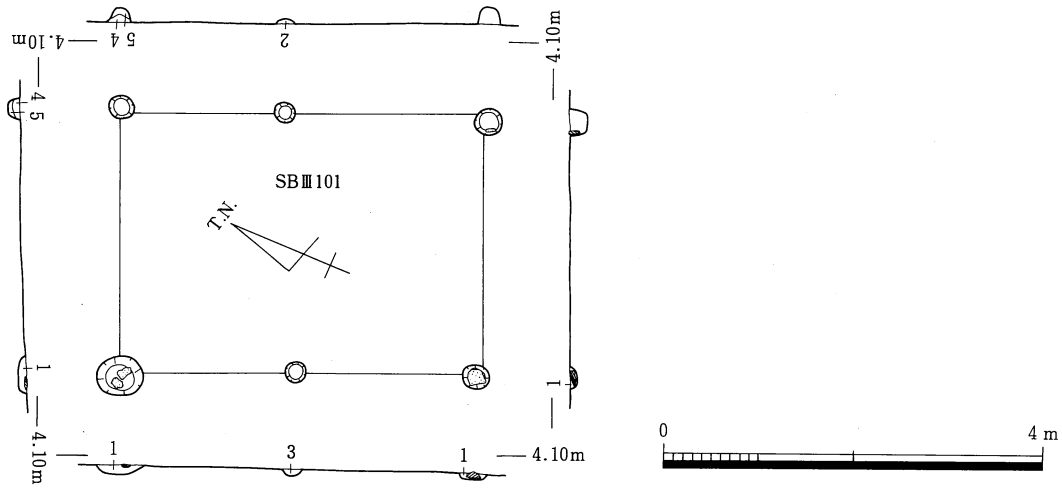


第243図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(25)



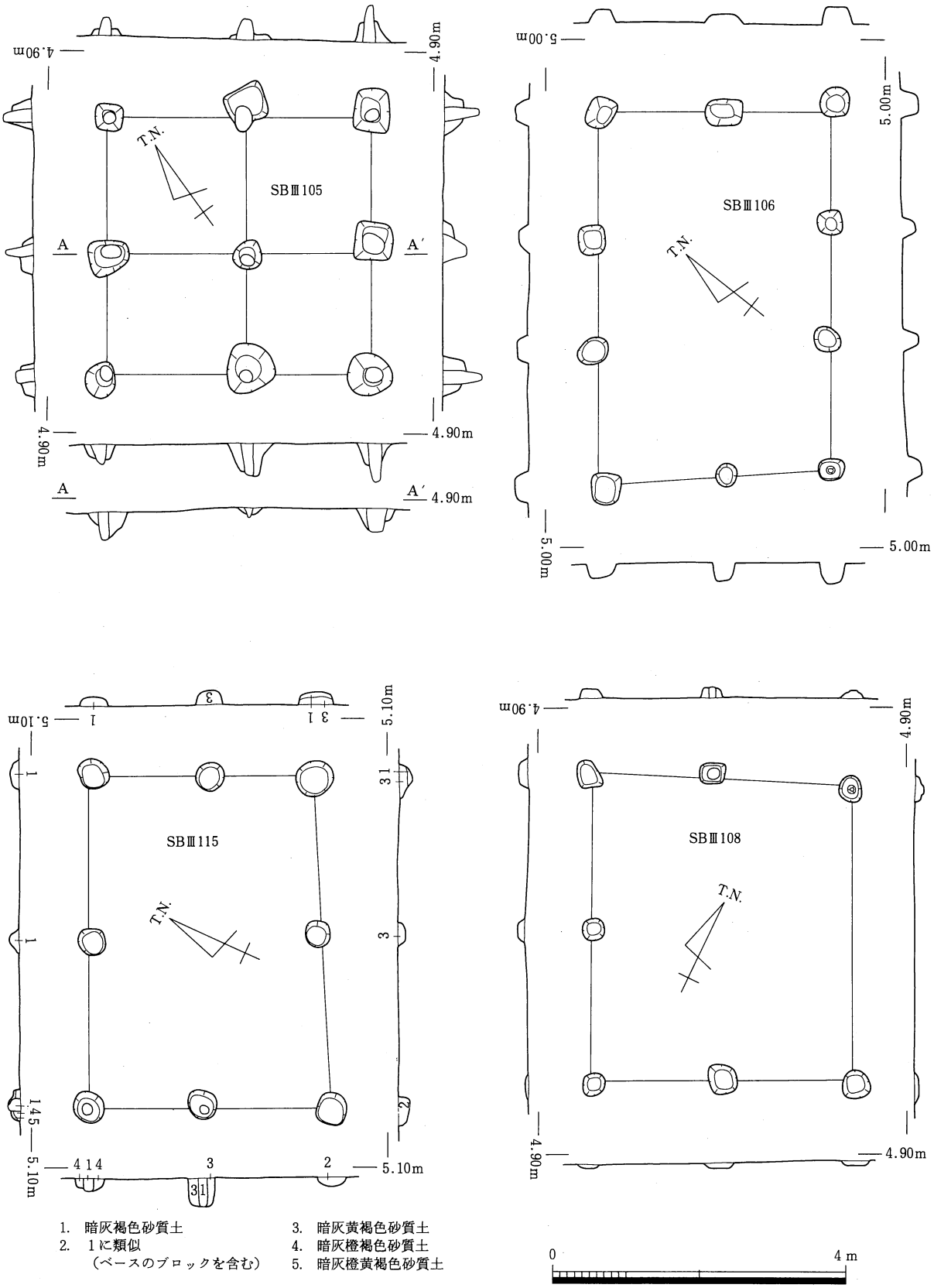
第244図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(26)



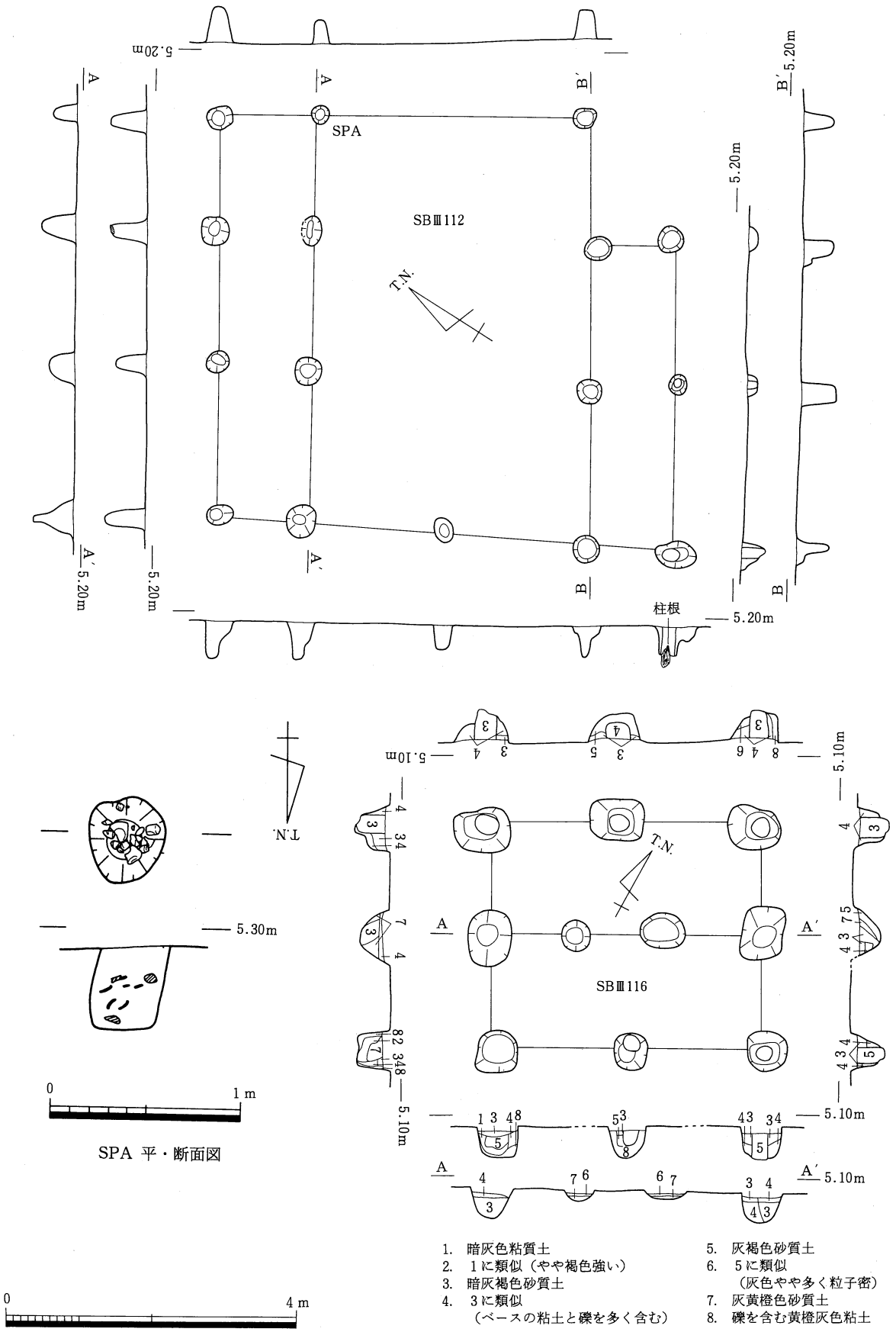


1. 灰褐色砂質土
2. 淡灰褐色砂質土
3. 灰色シルト（褐色粒及び黄褐色粒を僅かに含む）
4. 〃（褐色粒及び橙褐色粒を僅かに含む）
5. 灰色粘土

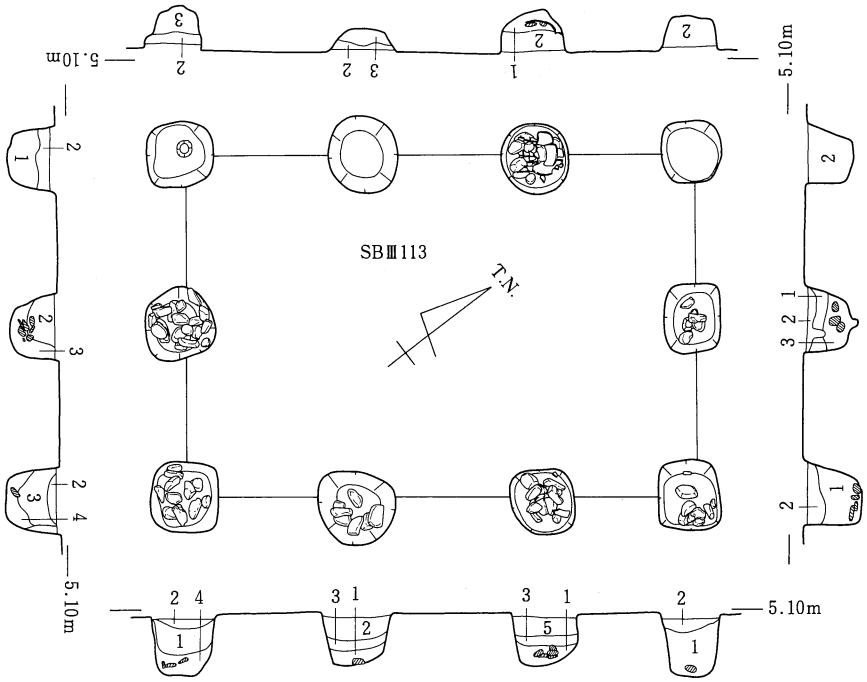
第245図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(27)



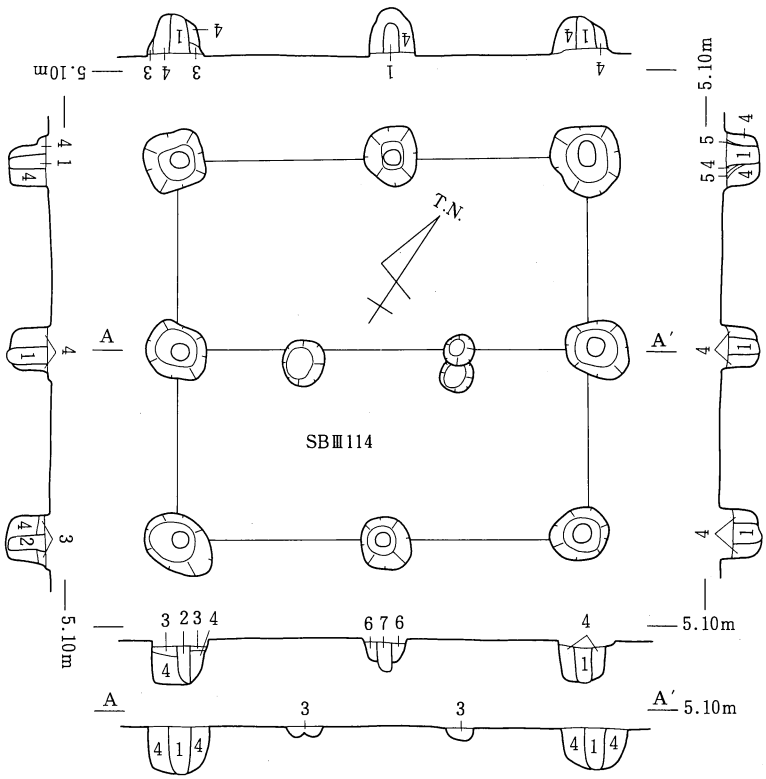
第246図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(28)



第247図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(29)



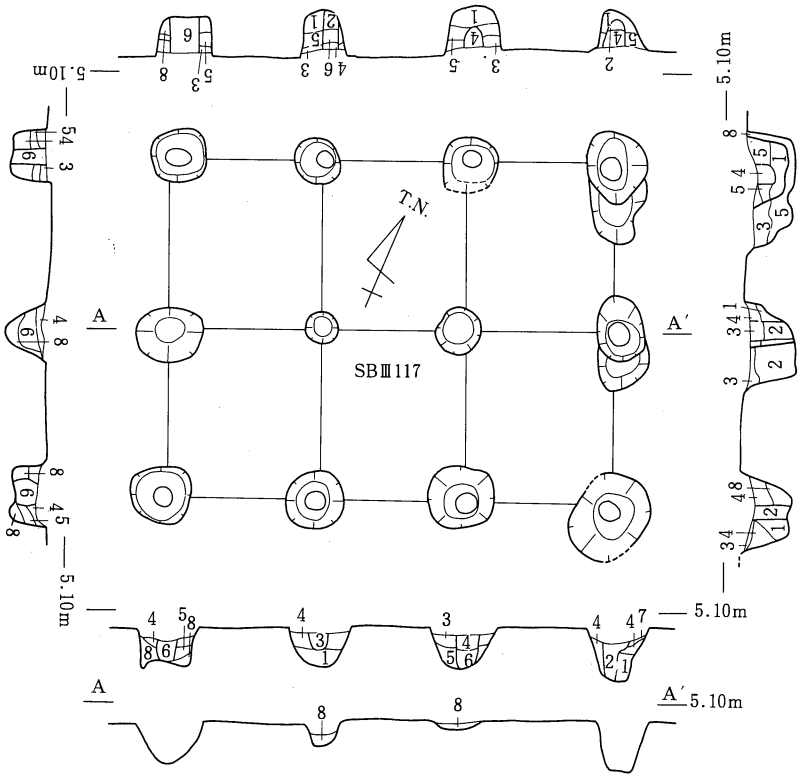
1. 暗褐灰色砂質土
2. 1に類似（ベースの黄褐色礫を含む）
3. 黄褐灰色砂質土
4. 3に類似（ベースの黄褐色礫を含む）
5. 暗灰褐色砂質土（ベースの黄褐色礫を含む）



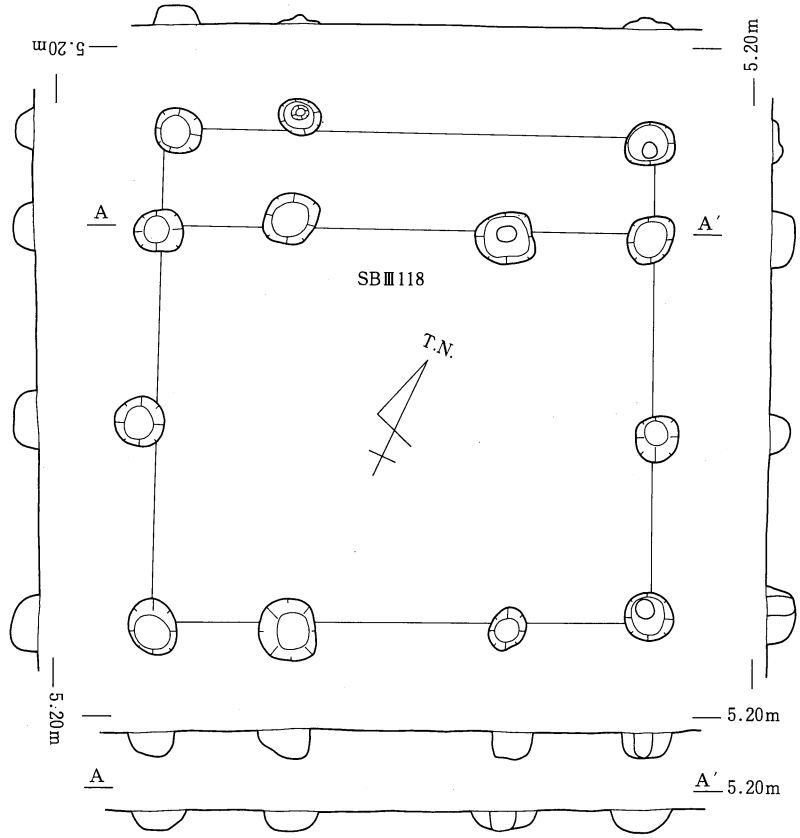
1. 暗灰褐色弱粘質土
2. 1に類似（やや明るい）
3. 暗灰褐色砂質土
（黄褐色土粒を多く含む）
4. 黒灰褐色粘質土
5. 灰色弱粘質土
6. 暗茶褐色弱粘質土
7. 6に類似（やや明るい）

0　4 m

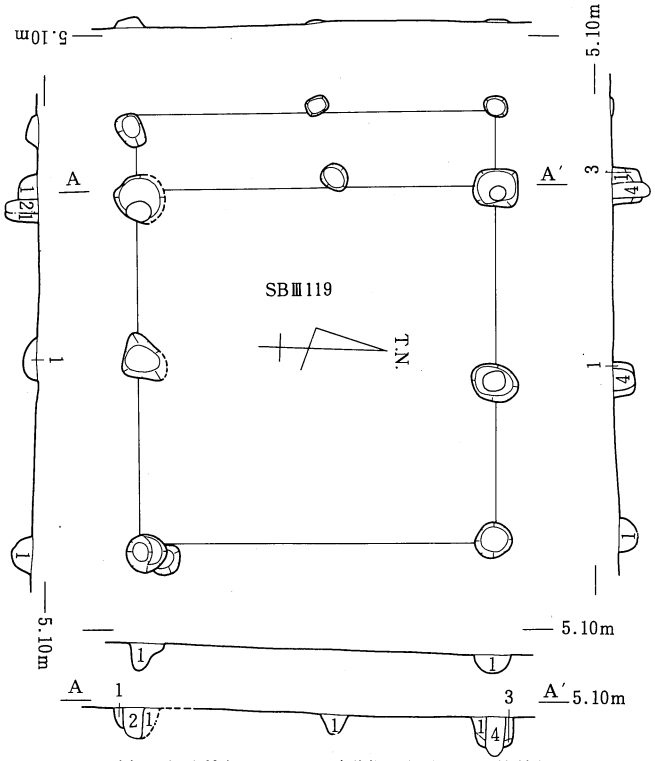
第248図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(30)

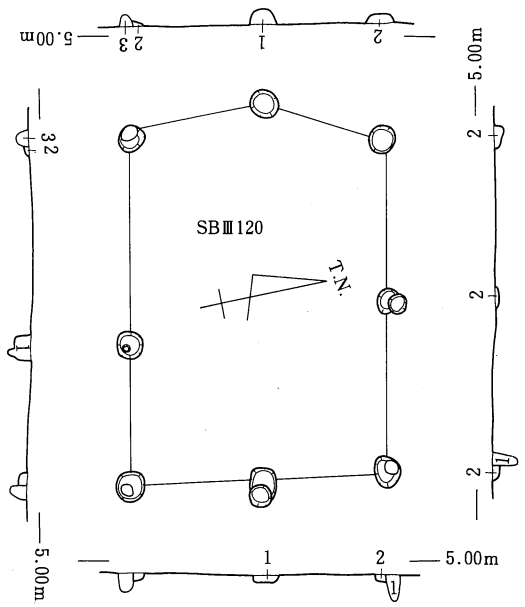


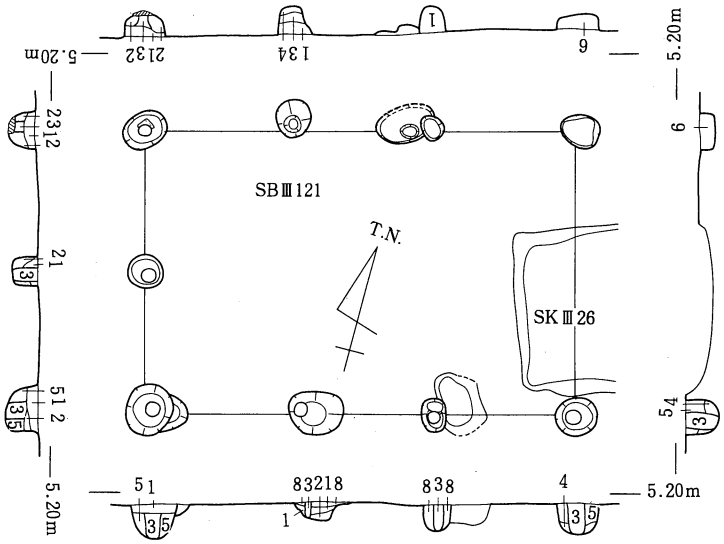
1. 暗灰色粘質土
2. 1に類似（やや褐色強い）
3. 暗灰褐色砂質土
4. 3に類似（礫を多く含む黄褐色粘土）
5. 灰褐色砂質土
6. 5に類似（灰色やや弱く緻密）
7. 灰黄橙色砂質土
8. 礫を含む黄橙灰色粘土



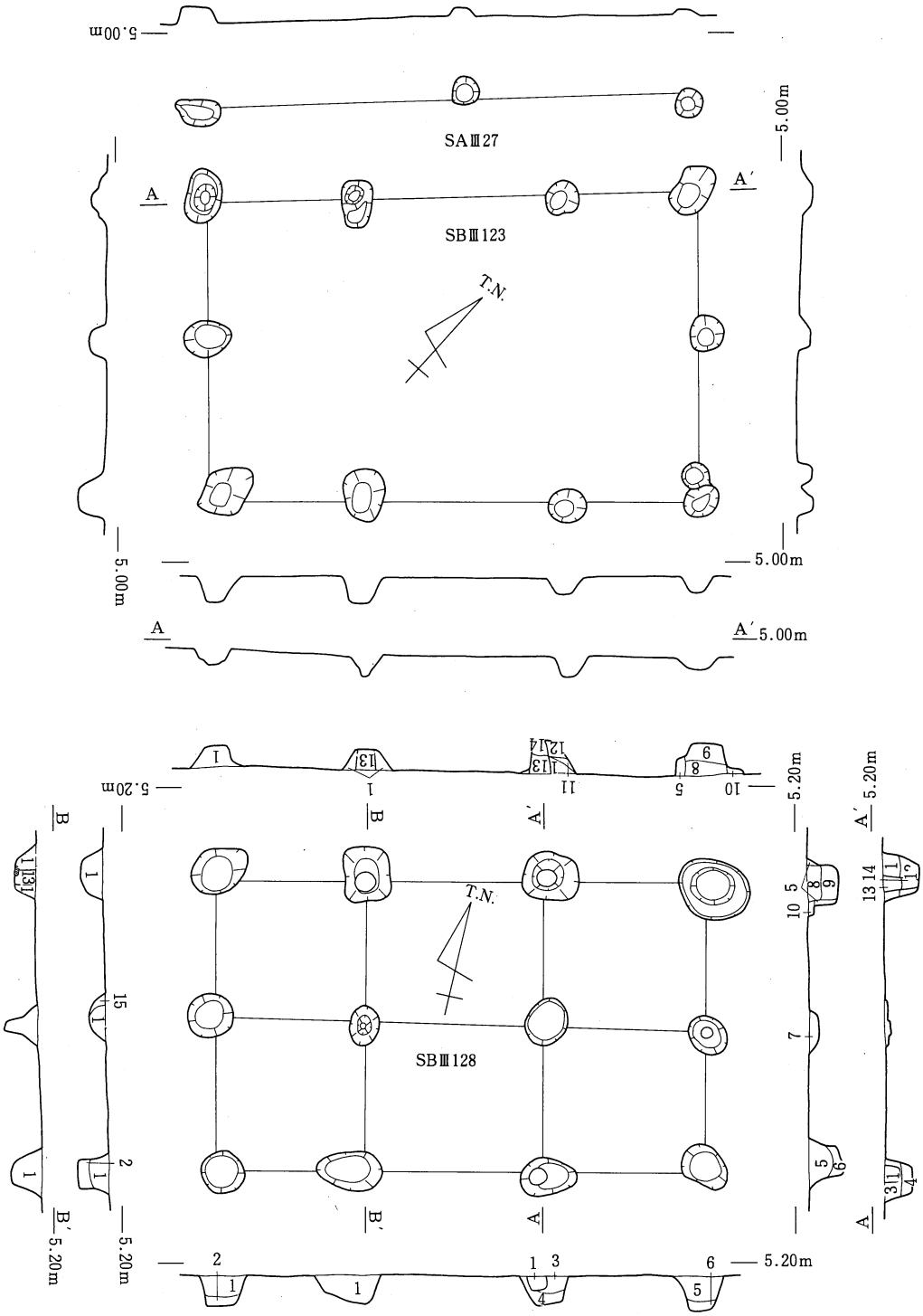
第249図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(31)







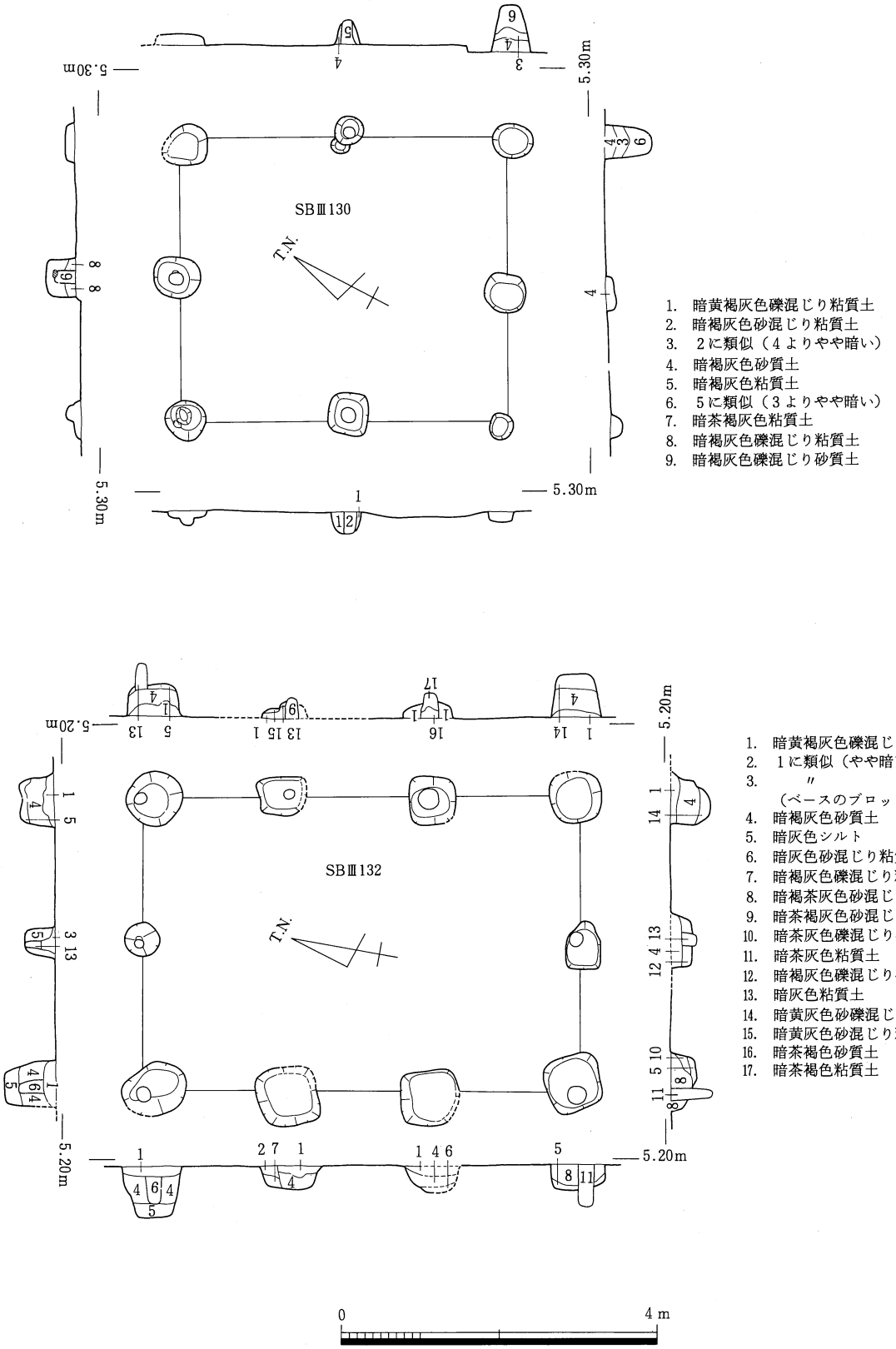
第250図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(32)



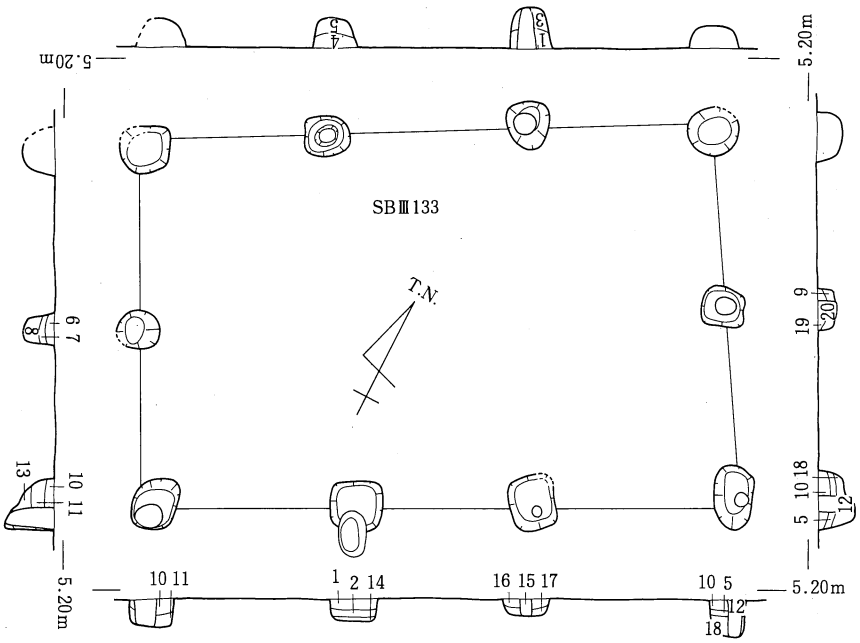
1. 暗褐灰色砂質土
2. 暗茶灰色砂質土
3. 暗褐灰色礫混じり砂質土
4. 暗茶灰色礫混じり砂質土（15cm大のベースブロックを含む）
5. 暗褐灰色砂質土（ベースブロックを含む）
6. 暗灰色粘質土
7. 暗灰黄褐色礫混じり粘質土
8. 暗茶褐灰色砂質土（10cm大のベースブロックを含む）
9. 暗茶褐灰色粘質土
10. 暗茶褐灰色砂質土
11. 暗灰色砂混じり粘質土
12. 暗灰色砂質土（ベースブロックを含む）
13. 暗褐灰色砂質土（やや明るい）
14. 暗灰色砂質土
15. 暗灰黄色礫混じり砂質土

0　4 m

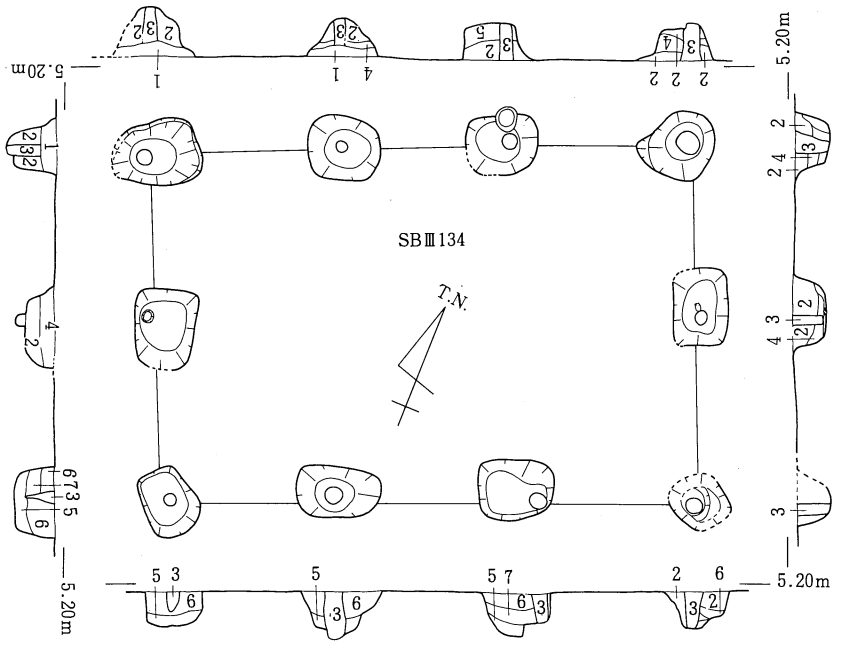
第251図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(33)



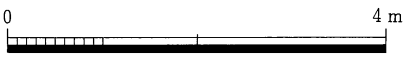
第252図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(34)



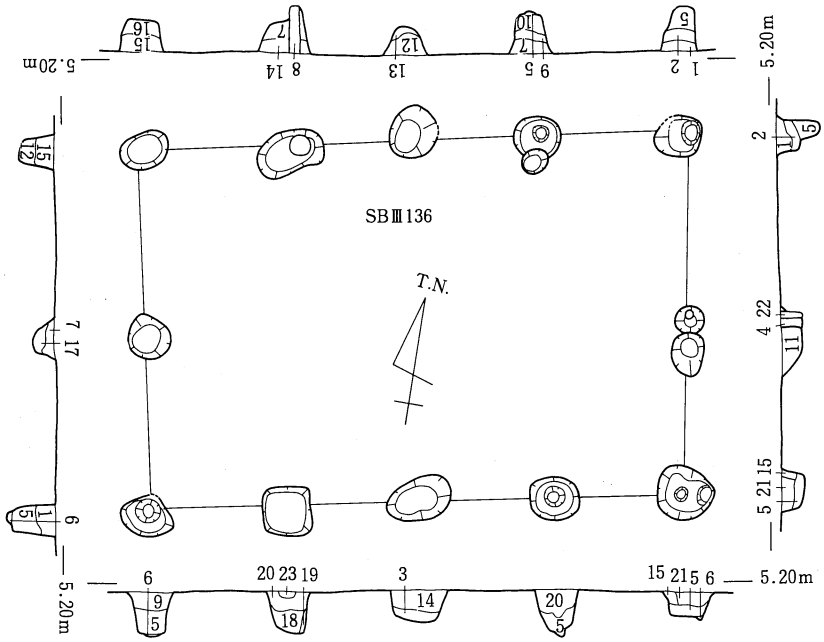
1. 暗褐灰色砂質土
2. 1に類似（1より緻密）
3. 暗黄灰色礫混じり砂質土
4. 暗褐灰色礫混じり砂質土
5. 4に類似
（4よりやや暗く，粘性がある）
6. 暗黄褐灰色砂質土
7. 暗灰色砂質土
8. 暗灰色粘質土（軟質）
9. 8に類似（やや明るい）
10. 暗黄褐灰色礫混じり砂質土
11. 暗茶灰色粘質土
12. 11に類似（軟質）
13. 暗灰色砂混じり粘質土
14. 暗褐灰色粘質土
15. 14に類似（軟質）
16. 暗褐灰色礫混じり粘質土
17. 暗黄灰色砂混じり粘質土
18. 暗褐灰色砂混じり粘質土
19. 黄褐灰色砂質土
20. 灰色砂質土



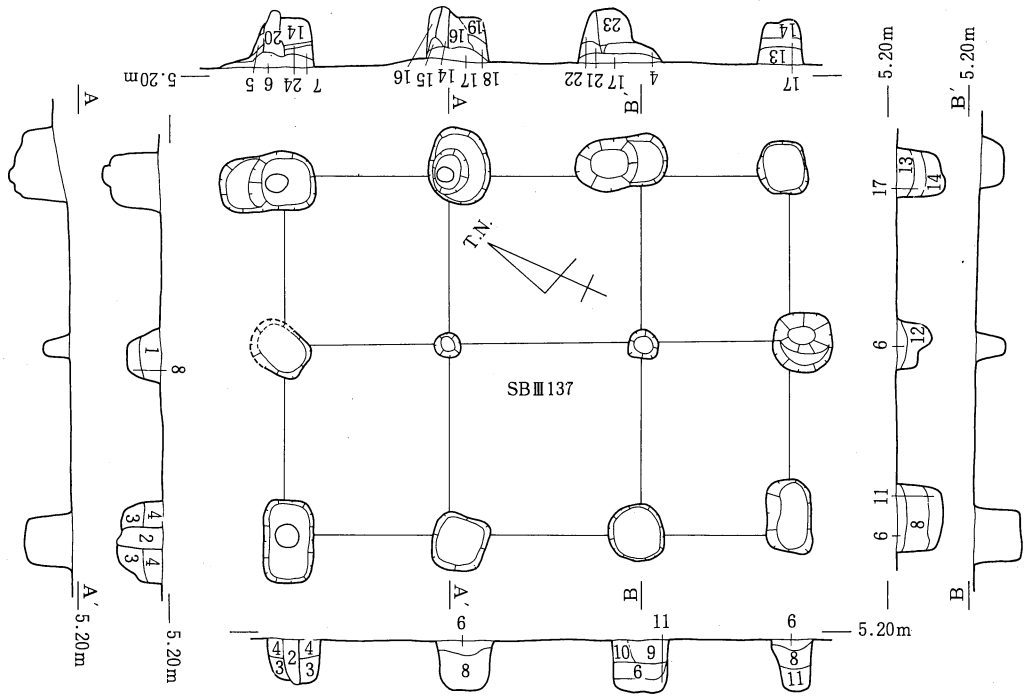
1. 灰黄褐色砂質土
2. 暗灰褐色砂質土
（ベースの土を僅かに含む）
3. 暗灰褐色砂質土
（粘質土に近い）
4. 暗黄灰色砂質土
（ベースを多く含む）
5. 暗灰色砂質土
6. 暗灰褐色砂質土
（褐色土粒を多く含む）
7. 暗灰褐色砂質土
（褐色土粒を僅かに含む）



第253図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(35)



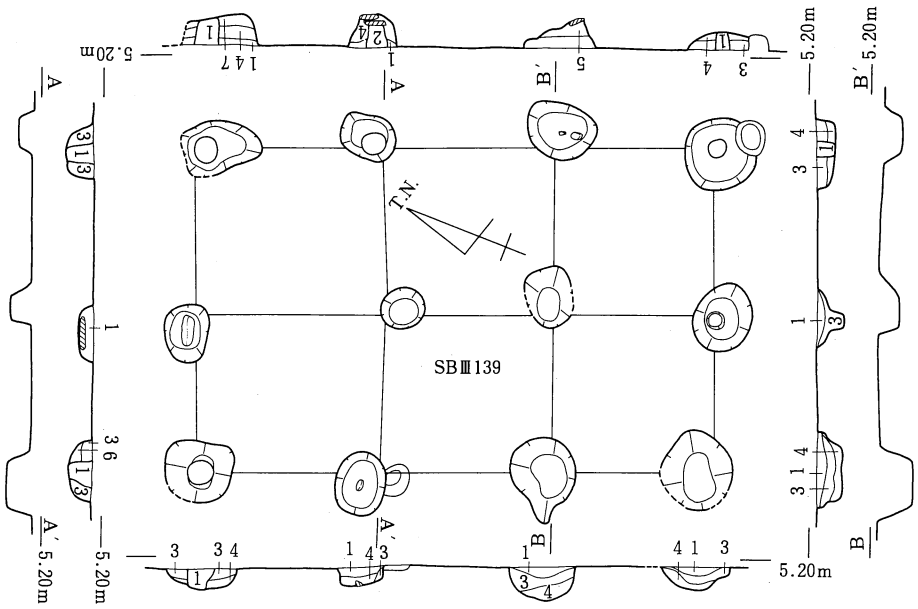
1. 暗黄灰色砂質土
2. 1に類似（やや暗い）
3. 暗灰黄色砂質土
4. 暗黄灰色礫混じり粘質土
5. 暗灰色粘質土
6. 5に類似（粘性強い）
7. 暗茶灰色砂質土
8. 7に類似（やや粘性あり）
9. 暗褐灰色砂質土
10. 9に類似（やや粘性あり）
11. 暗褐灰色礫混じり砂質土
12. 褐茶灰色砂質土
13. 暗灰色砂質土
14. 暗黄茶灰色礫混じり砂質土
15. 暗褐茶灰色礫混じり砂質土
16. 褐灰色砂
17. 暗茶灰色粘質土
18. 17に類似（暗い）
19. 〃　（やや暗い）
20. 暗茶灰色砂混じり粘質土
21. 暗茶褐灰色礫混じり砂質土
22. 暗茶褐灰色砂混じり砂質土
23. 灰色砂質土



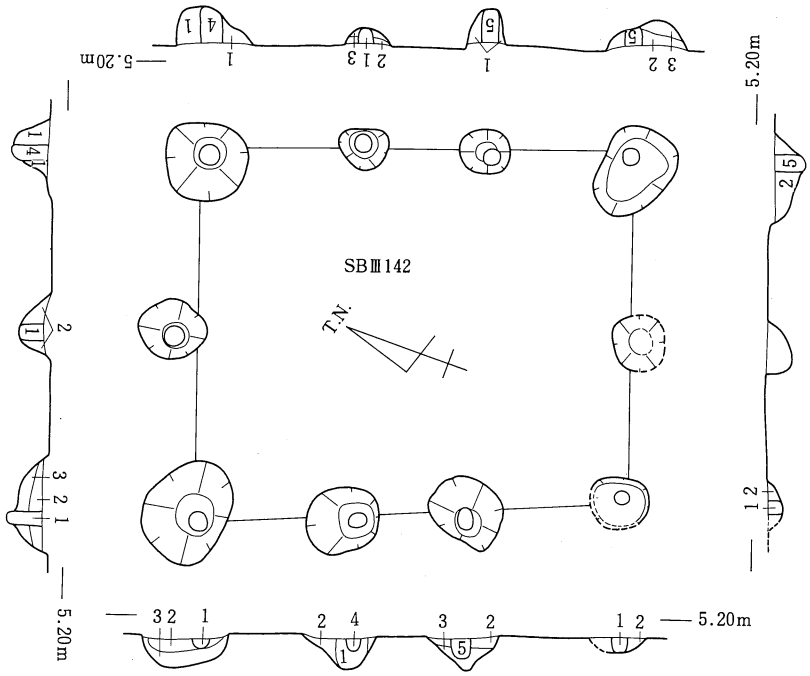
1. 暗茶褐灰色粘質土
2. 暗茶褐灰色砂混じり粘質土
3. 暗灰色砂質土
4. 暗灰色礫混じり砂質土
5. 暗灰色礫混じり砂（ベースのブロックを含む）
6. 暗茶灰色砂質土
7. 6に類似（6より暗い）
8. 暗茶灰色粘質土
9. 8に類似（軟質）
10. 暗茶灰色砂混じり粘質土
11. 灰色粘質土
12. 暗褐灰色粘質土
13. 暗褐灰色砂質土
14. 暗灰色粘質土
15. 14に類似（ベースのブロックを含む）
16. 暗灰色粘質土（14よりやや明るい）
17. 暗灰色砂混じり粘質土
18. 17に類似（17よりやや明るい）
19. 18に類似（18より砂多い）
20. 暗灰色砂混じり粘質土（暗い）
21. 暗灰色礫混じり粘質土（やや暗い）
22. 21に類似（粘性強い）
23. 〃　（やや明るい）
24. 褐灰色砂

0　4m

第254図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図㊱



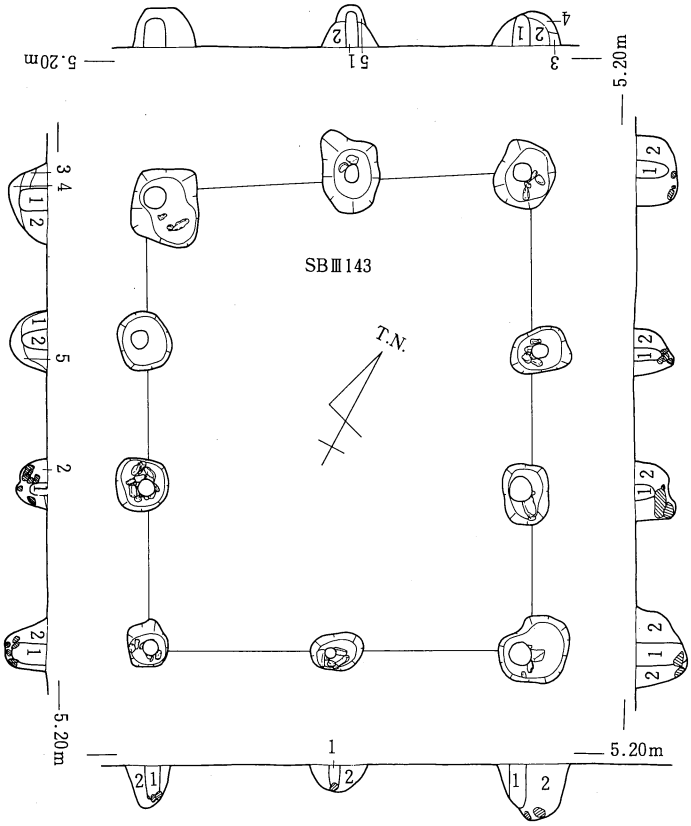
1. 暗灰褐色砂質土（砂粒を少量含む）
2. 1に類似（やや軟質，炭化物混じる）
3. 茶灰褐色砂質土（砂粒を含む）
4. 暗灰褐色弱粘質土
（1に類似，僅かに砂粒を含み，やや粘性）
5. 暗灰色弱粘質土
6. 5に類似（ベースのブロックを含む）
7. 暗灰色砂質土



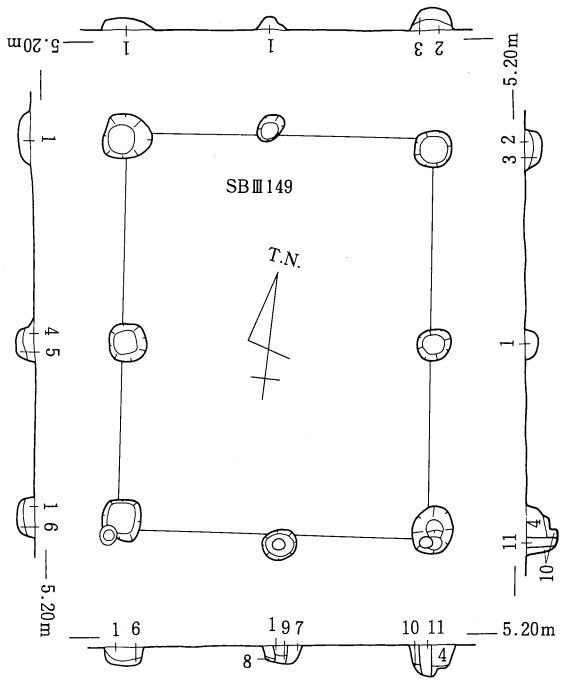
1. 暗灰黄褐色弱粘質土
2. 淡灰黄褐色弱粘質土
3. 礫混じり淡灰黄橙褐色砂質土
4. 明灰黄橙色弱粘質土
5. 黄褐色粘質土ブロック混じり淡灰色粘質土

0 4m

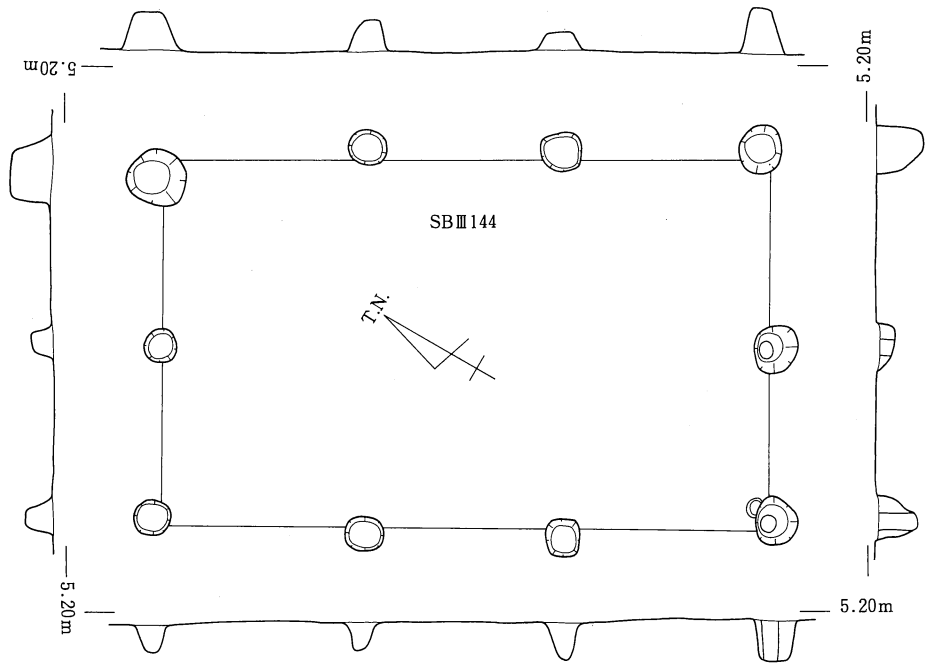
第255図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(37)



1. 暗灰黄褐色粘質土
2. 淡灰黄橙褐色弱粘質土
3. 黄橙灰色弱粘質土
4. 礫混じり黄橙灰色砂質土
5. 黄褐色砂質土

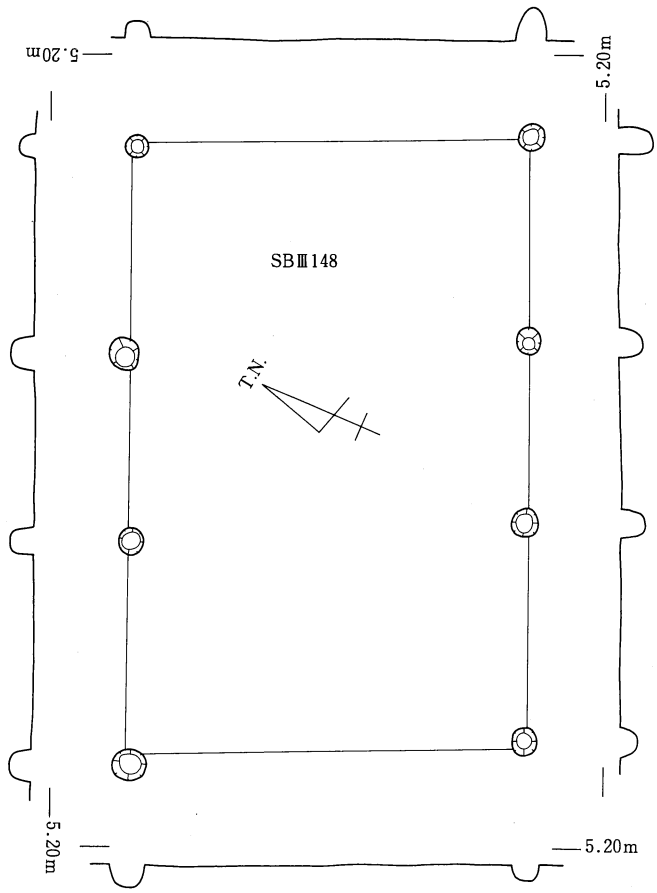


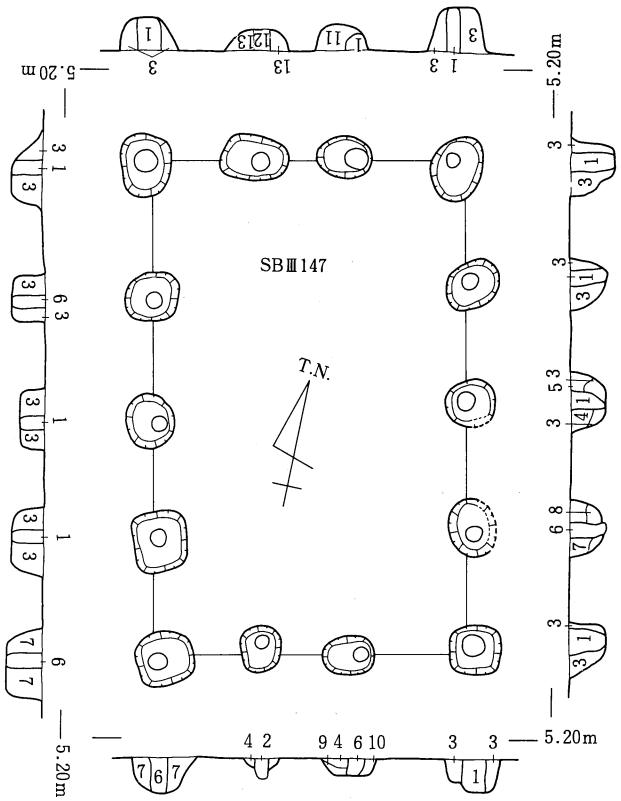
1. 暗褐灰色砂質土
2. 暗灰色砂質土
3. 2に類似（ベースを含む）
4. 暗褐灰色礫混じり砂質土
5. 暗褐灰色砂質土
6. 暗灰色シルト
7. 1に類似（やや明るい）
8. 暗灰色礫混じり粘質土
9. 暗灰色砂混じり粘質土
10. 暗灰色砂
11. 暗褐灰色砂混じり粘質土



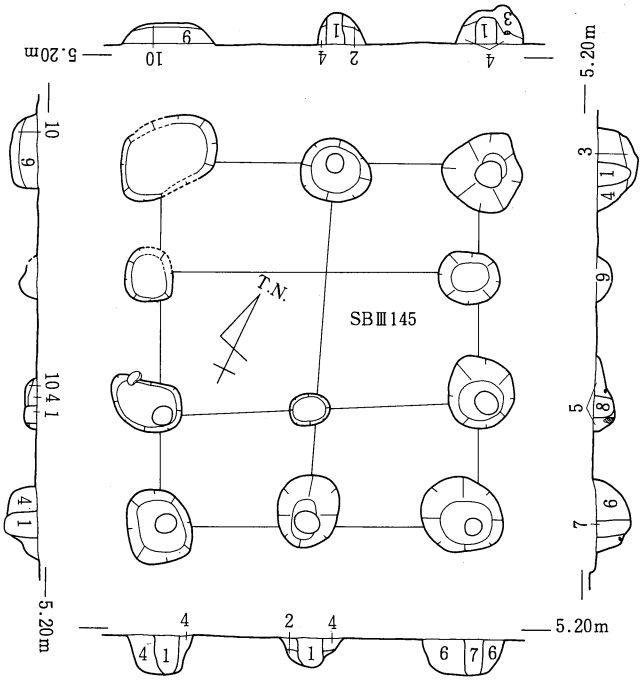
0 4 m

第256図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(38)



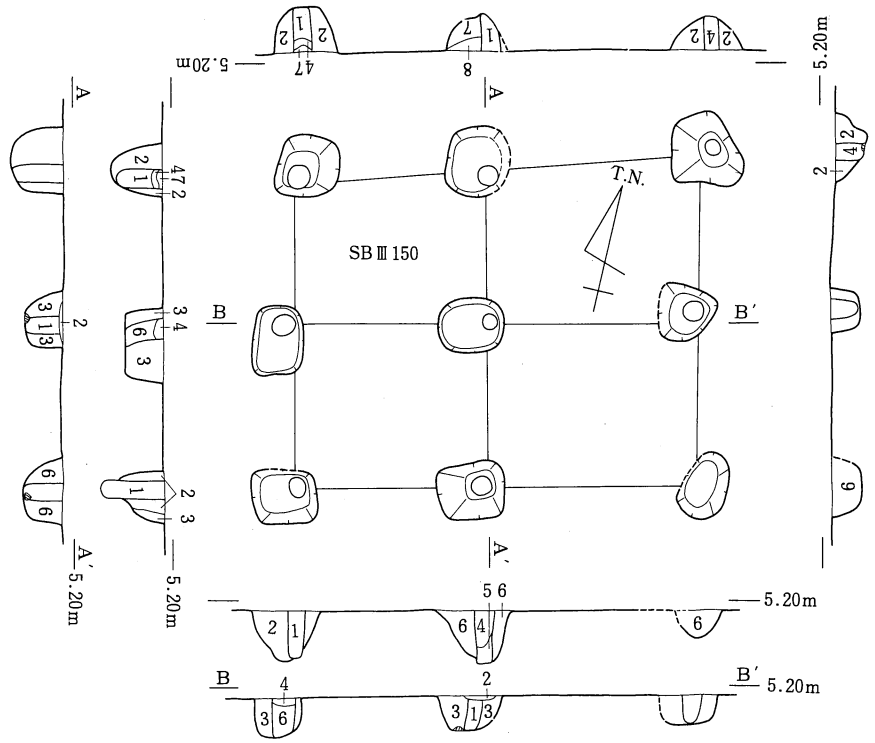


1. 暗灰褐色弱粘質土
2. 1に類似（ベースブロックを多く含む）
3. 暗灰褐色砂質土
4. 3に類似（ベースブロックを含む）
5. 3に類似（粗砂粒を多く含む）
6. 灰褐色弱粘質土
7. 黒灰褐色砂質土
8. 黒灰褐色弱粘質土
9. 黄灰色弱粘質土
10. 黄灰褐色砂質土
11. 黄灰色砂質土（小礫・粗砂を多く含む）
12. 灰褐色砂質土（ベースブロックと粗砂粒を多く含む）
13. 12に類似（やや暗い）

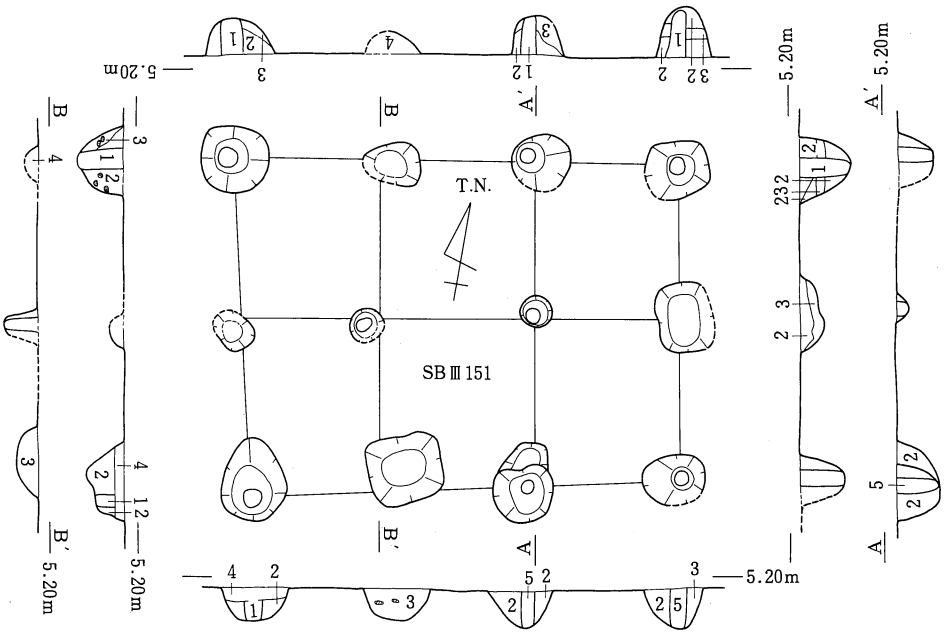


1. 暗灰茶褐色弱粘質土
2. 暗灰黄褐色砂質土
3. 2に類似（粒子が粗い）
4. 2に類似（暗灰色強く，やや粘質）
5. 4に類似
6. ベース混じり暗灰茶褐色弱粘質土
7. 6に類似（灰色が強い）
8. 暗灰茶褐色砂質土
9. 暗黄灰色粘質土
10. 淡灰橙褐色砂質土

第257図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(39)



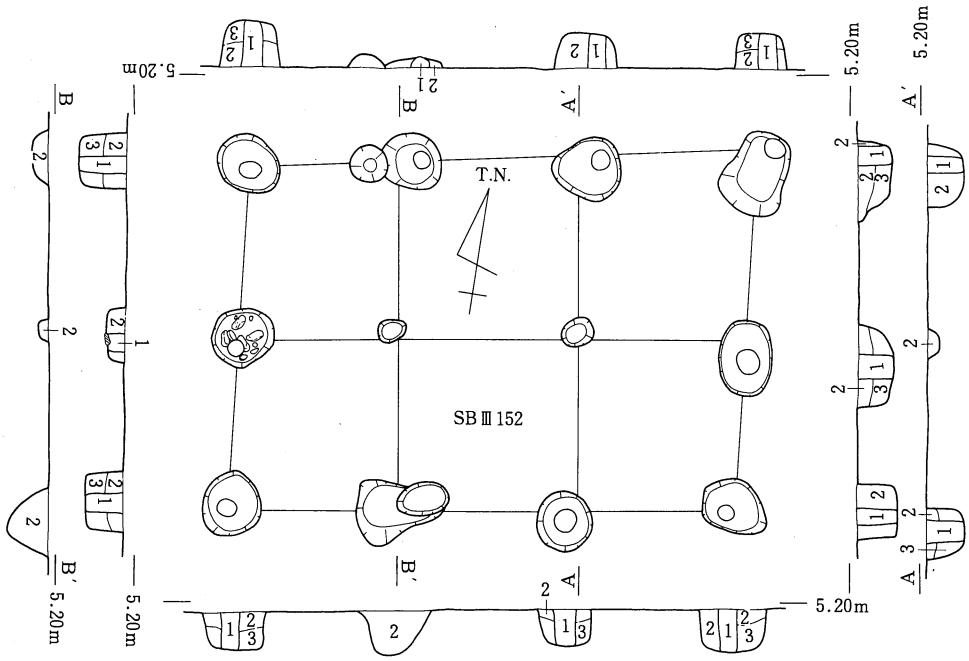
1. 暗灰橙褐色粘質土
2. 1に類似（橙褐色が強い）
3. 黄橙色弱粘質土ブロック混じり灰色粘質土
4. 明灰橙褐色粘質土
5. 4に類似（褐色が強い）
6. 黄橙褐色弱粘質土ブロック混じり暗灰色粘質土
7. 礫混じり淡灰橙褐色弱粘質土
8. 礫・淡灰色粘質土混じり橙黄褐色砂質土
9. 明灰色弱粘質土



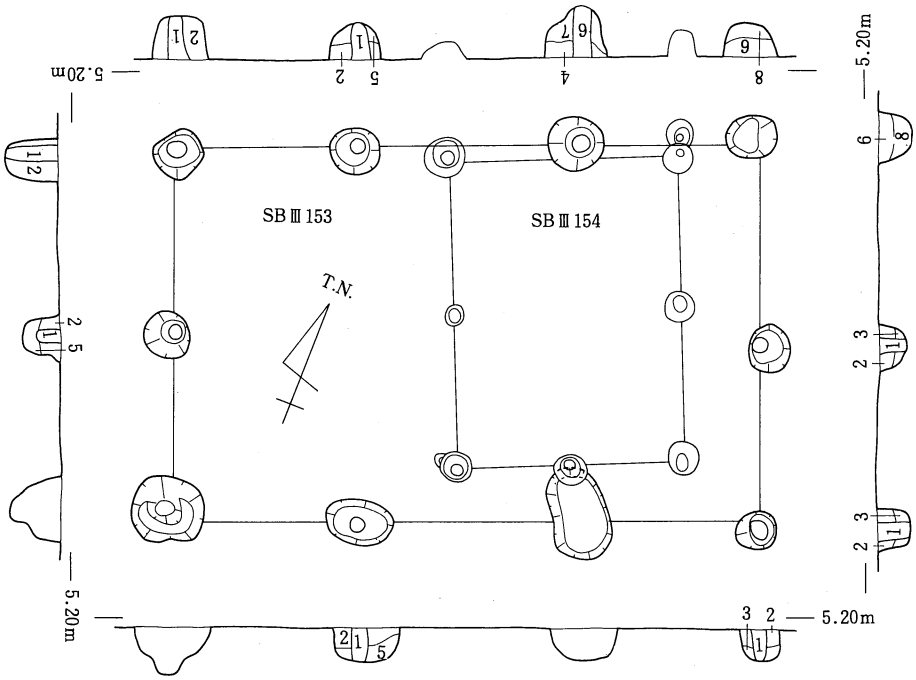
1. 暗灰茶褐色弱粘質土
2. 暗灰黄橙褐色砂質土
3. 淡灰橙褐色砂質土
4. 暗黄灰色粘質土
5. 暗灰黄褐色弱粘質土

0 4 m

第258図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(40)



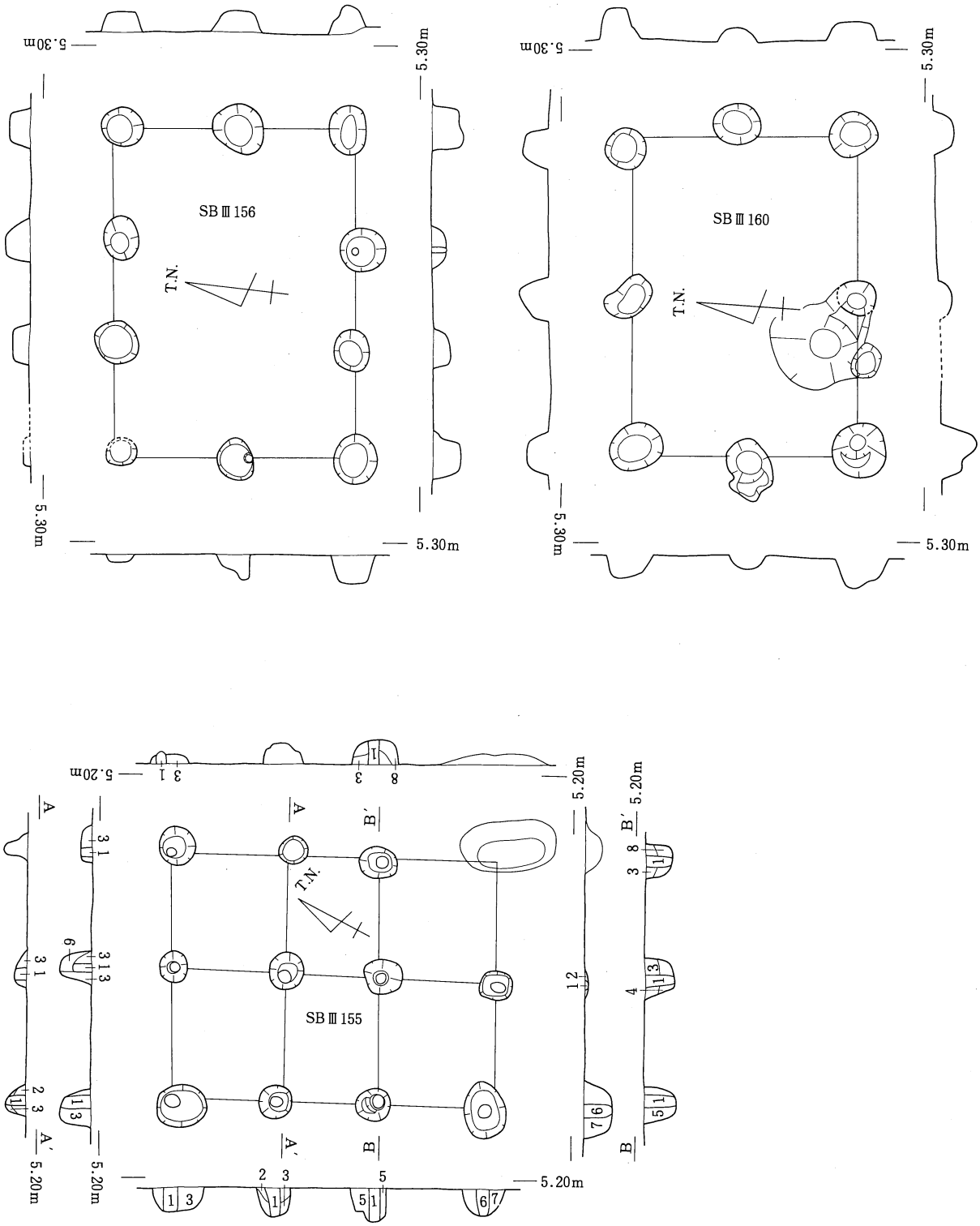
1. 暗灰褐色砂質土（褐色が強い）
2. 〃 （灰色が強い）
3. 暗灰褐色粘質土



1. 暗灰褐色砂質土
2. 1に類似（やや暗く黄灰色土を少量含む）
3. 〃 （暗黄褐色土を多く含む）
4. 〃 （暗黄褐色土・粗砂を含む）
5. 暗灰褐色弱粘質土
6. 黒灰褐色弱粘質土
7. 3に類似（やや暗い）
8. 暗黄褐色砂質土（粗砂を多く含む）

0 4 m

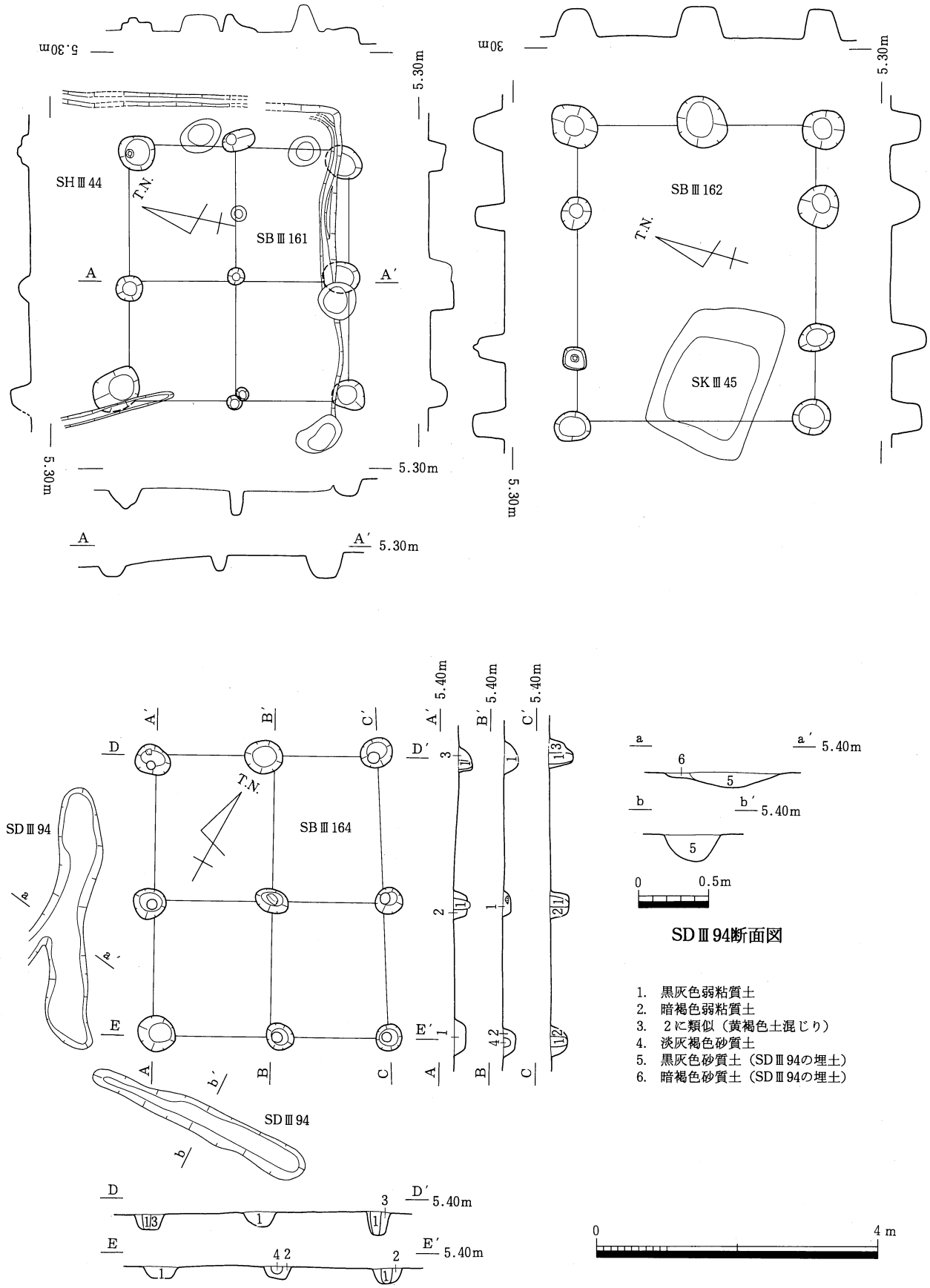
第259図 第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(41)



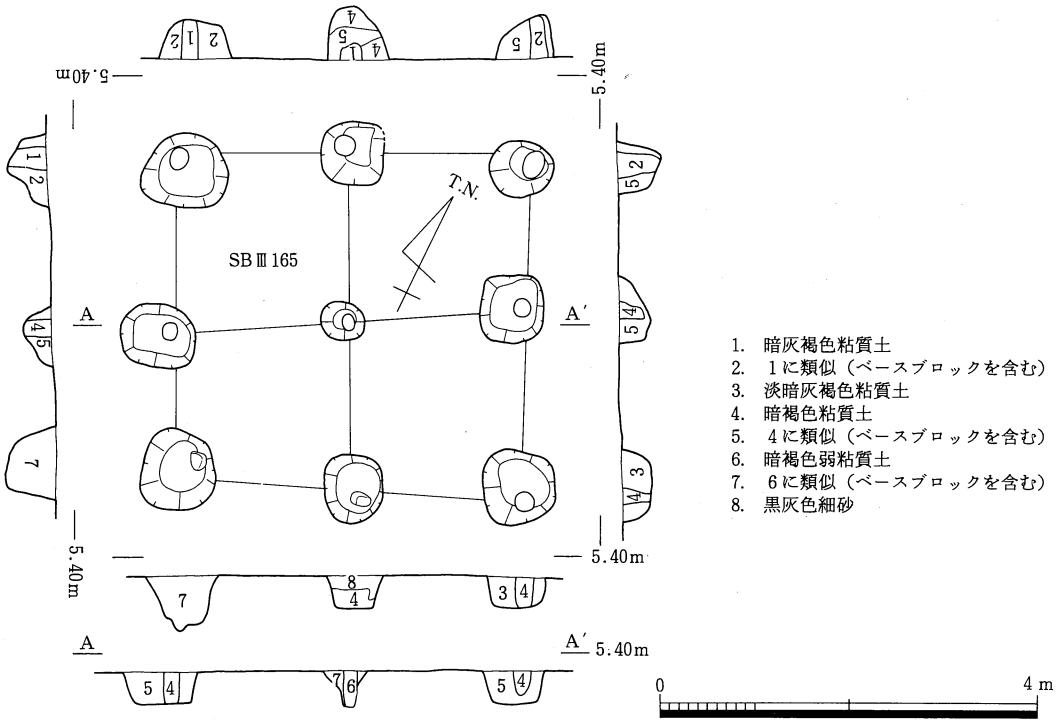
1. 灰黄褐色砂質土
2. 1に類似（やや明るく黄褐色土・粗砂を多く含む）
3. 明灰黄褐色砂質土（粗砂を多く含む）
4. 3に類似（やや暗い）
5. 〃　（黄褐色土を多く含む）
6. 灰褐色弱粘質土
7. 6に類似（やや黄褐色粒を多く含む）
8. 〃　（礫・粗砂を多く含む）

0　4 m

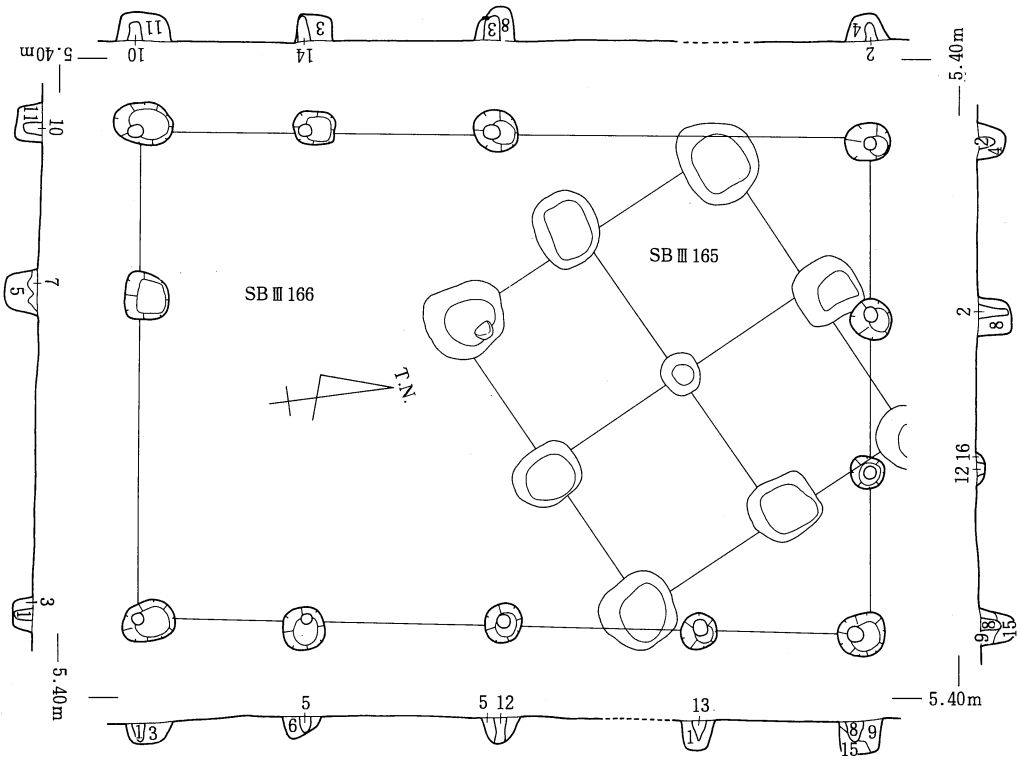
第260図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(42)



第261図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(43)

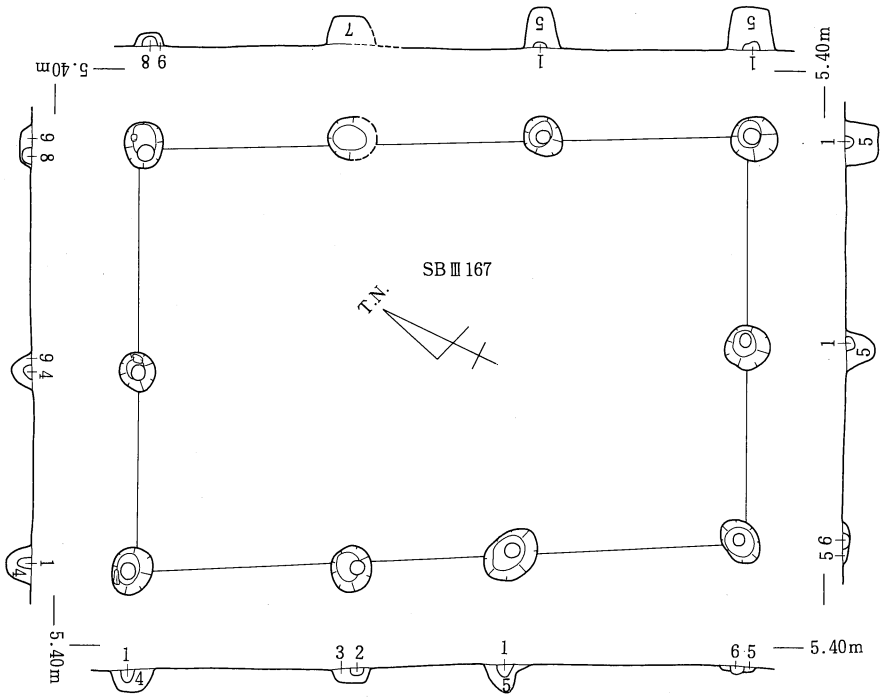


1. 暗灰褐色粘質土
2. 1に類似（ベースブロックを含む）
3. 淡暗灰褐色粘質土
4. 暗褐色粘質土
5. 4に類似（ベースブロックを含む）
6. 暗褐色弱粘質土
7. 6に類似（ベースブロックを含む）
8. 黒灰色細砂

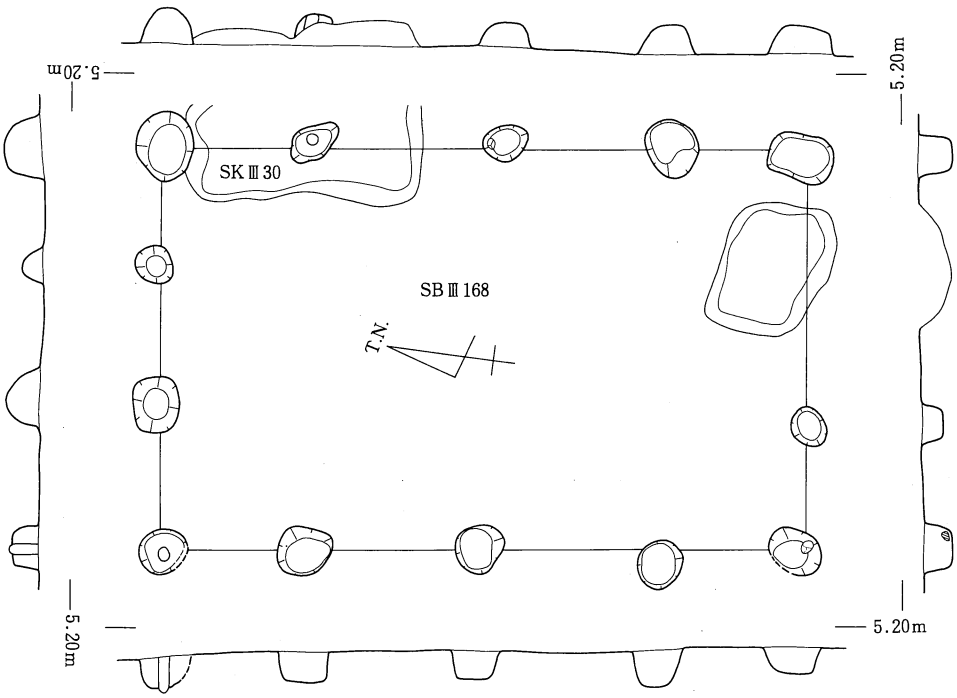


1. 黒灰色砂質土
2. 1に類似（灰黄褐色砂質土を含む）
3. 1に類似（ベースのブロックを含む）
4. 淡黄灰色砂質土
5. 黒灰色粘質土
6. 5に類似（5に比べやや淡い）
7. 5類似（黄褐色粘質土を含む）
8. 黒灰色弱粘質土
9. 8に類似（8に比べやや淡い）
10. 暗黒色粘質土
11. 10に類似（ベースのブロックを含む）
12. 灰黄褐色砂質土
13. 黄褐色弱粘質土
14. 淡黄褐色弱粘質土（黒色土少量含む）
15. 暗褐色砂質土
16. 15に類似（ベースのブロックを含む）

第262図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(44)

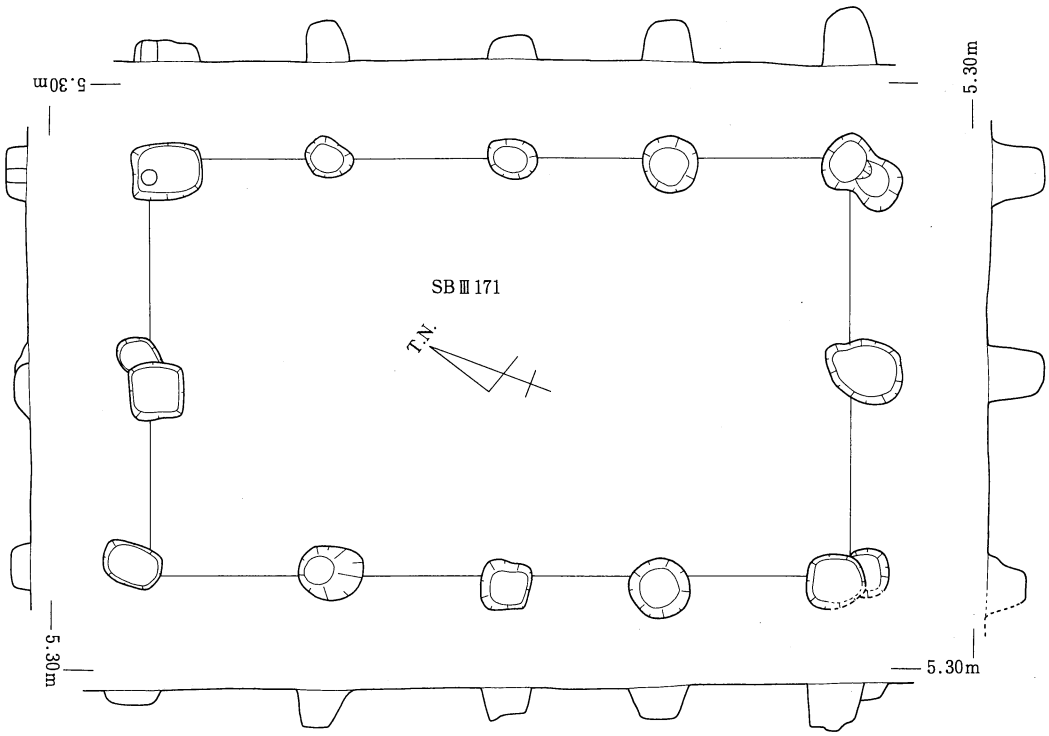


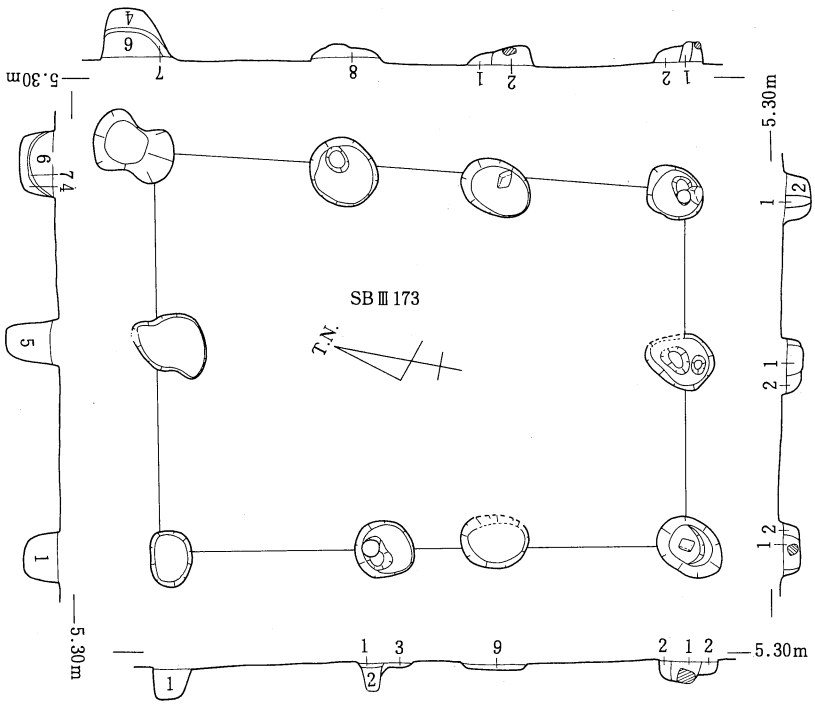
1. 暗灰褐色細砂
2. 暗灰褐色砂質土
3. 2に類似（2に比べやや暗い）
4. 暗褐色砂質土
5. 暗褐色混礫砂
6. 暗灰色砂質土
7. 暗灰褐色混礫砂
8. 暗灰褐色弱粘質土
9. 暗褐色砂礫



0 4 m

第263図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(45)

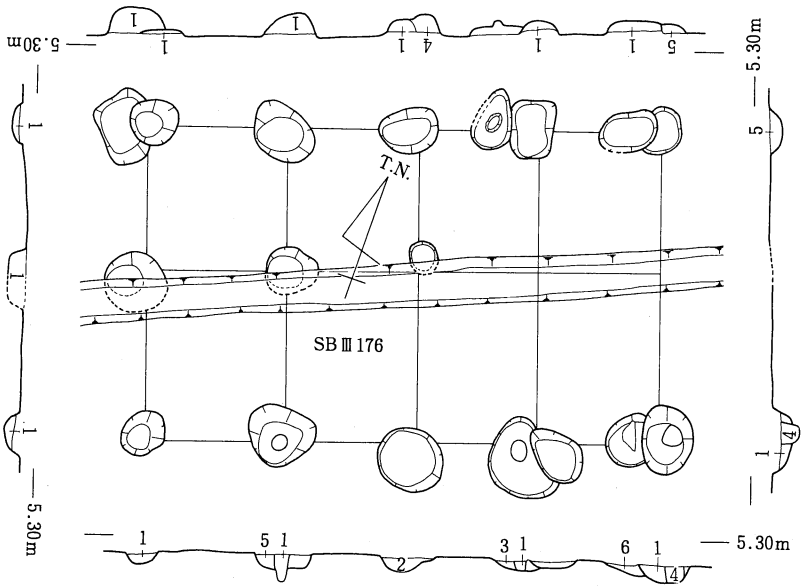




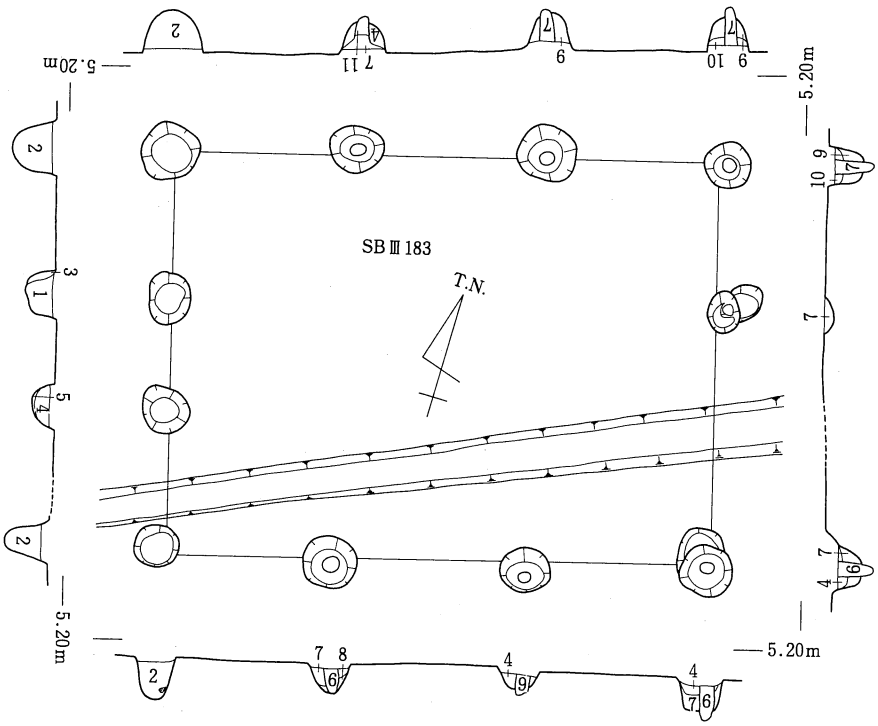
1. 暗灰褐色砂質土
2. 1に類似
3. 暗褐色砂質土
4. 暗灰黒褐色砂質土
5. 4に類似（ベースブロックを含む）
6. 4に類似（炭を含む）
7. 暗灰黒褐色砂
8. 暗灰茶褐色砂質土
9. 8に類似（砂礫を多量に含む）

0　4 m

第264図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(46)



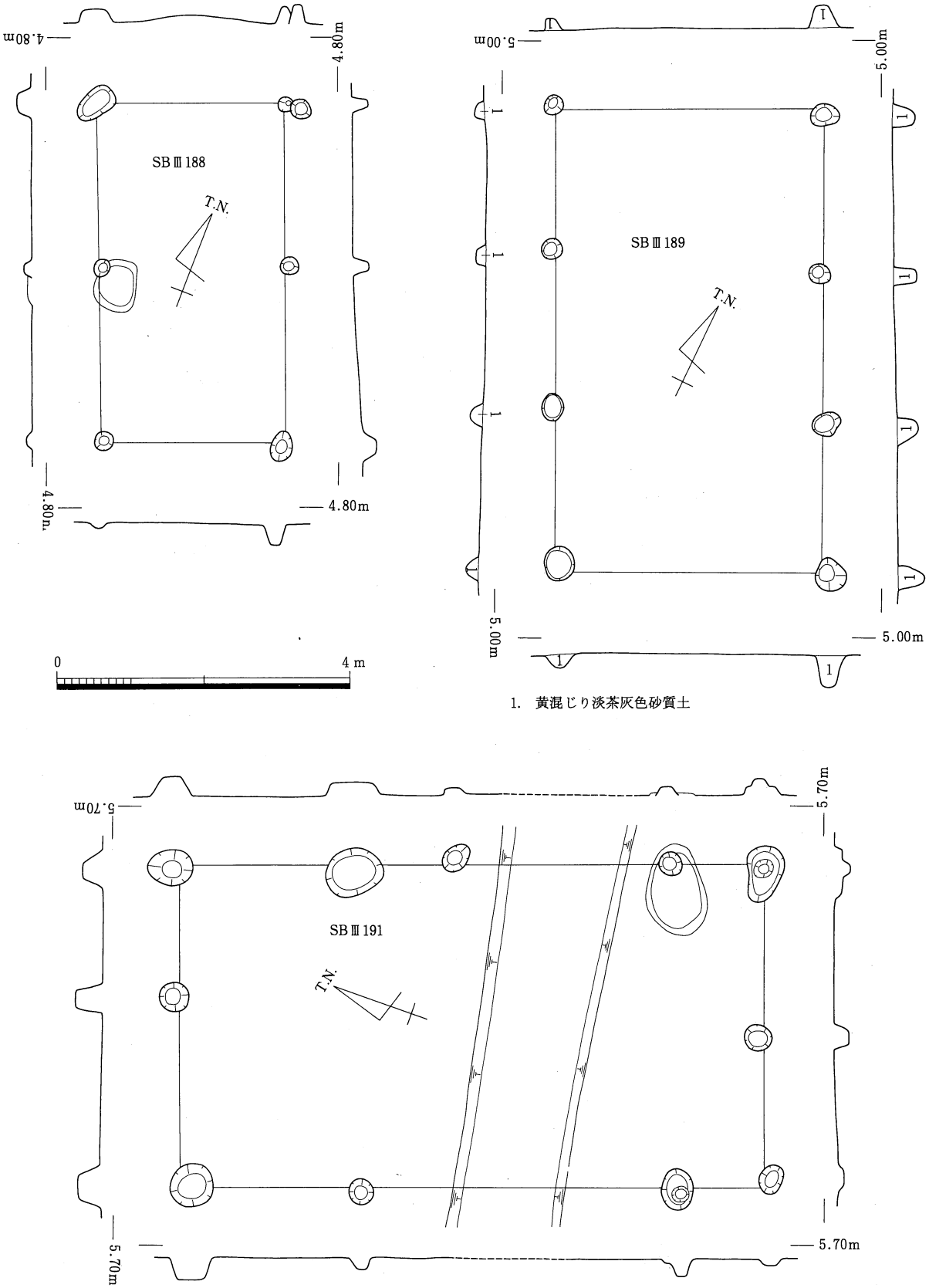
1. 暗灰褐色砂質土
2. 1に類似（黄褐色土を含む）
3. 〃　（ベースと多量の砂を含む）
4. 〃　（黄茶色ブロックを含む）
5. 暗灰黄褐色砂質土
6. 暗灰色砂質土



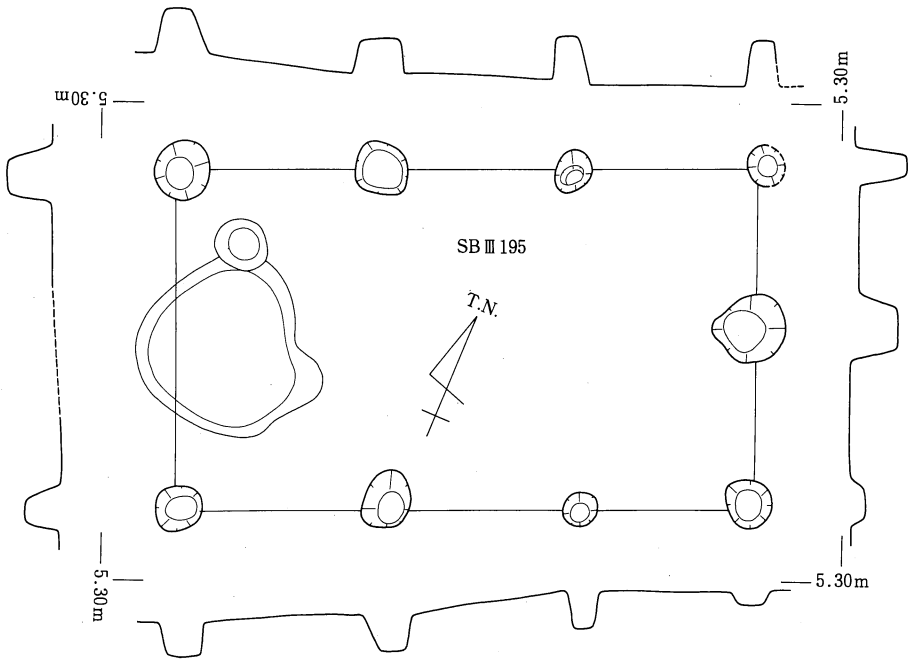
1. 暗灰褐色シルト
2. 1に類似（黒色が強い）
3. 1に類似（ベースブロックを少量含む）
4. 灰茶褐色砂質土
5. 暗灰色シルト
6. 暗灰色砂質土
7. 暗灰褐色砂質土
8. 灰色砂質土
9. 灰褐色砂質土
10. 黄灰色砂質土
11. 暗灰茶色砂質土

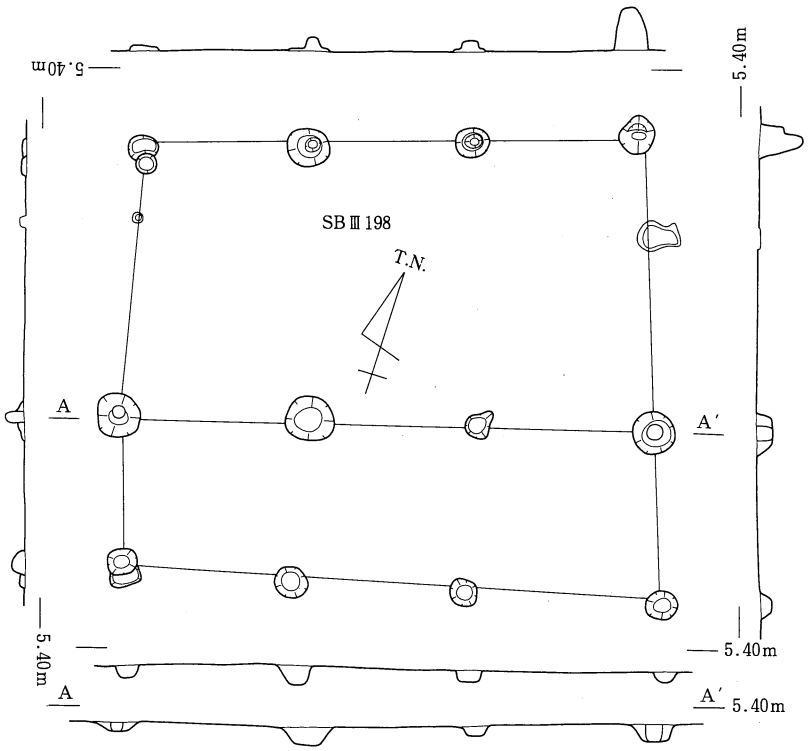
0　4 m

第265図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(47)

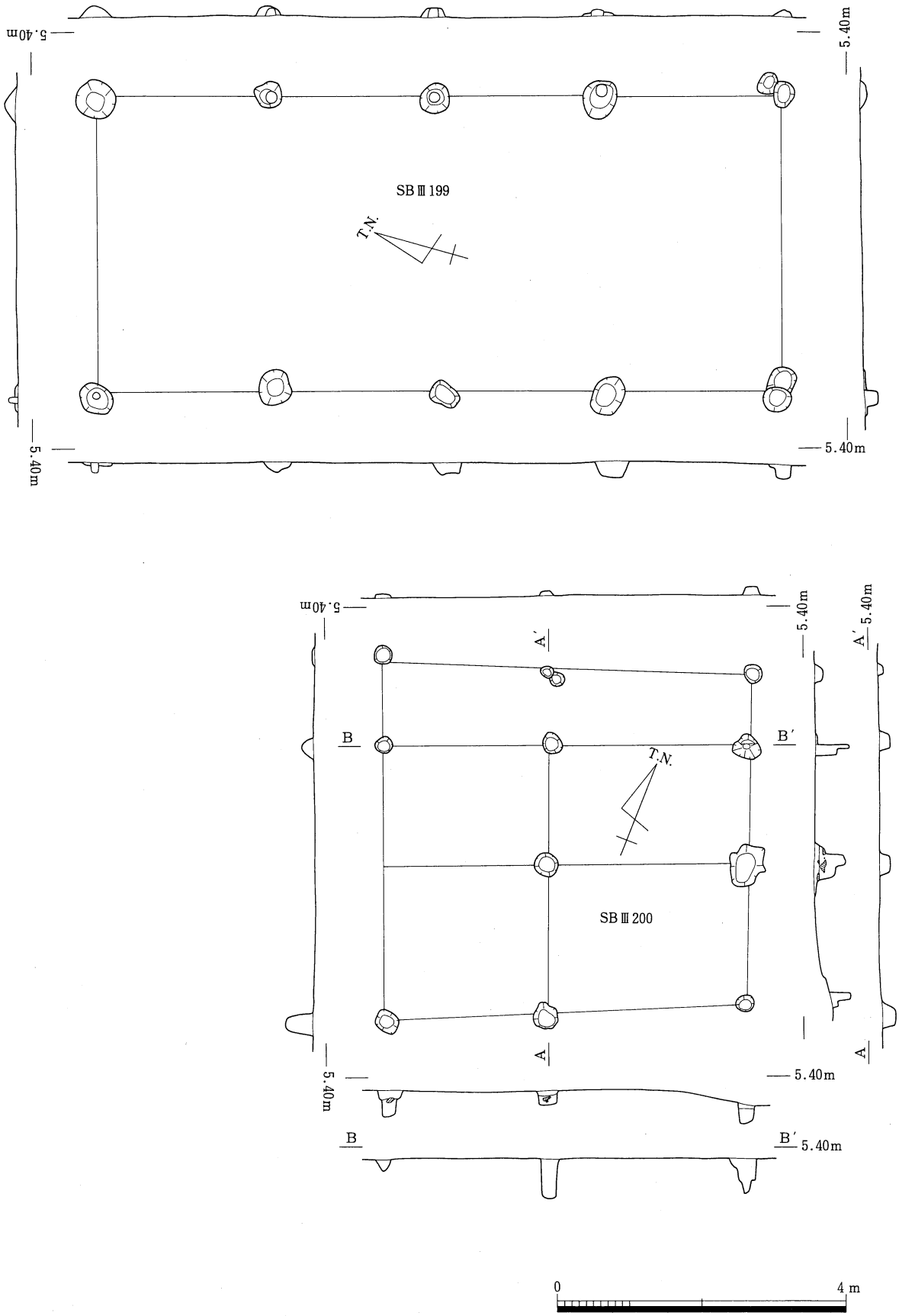


第266図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(48)

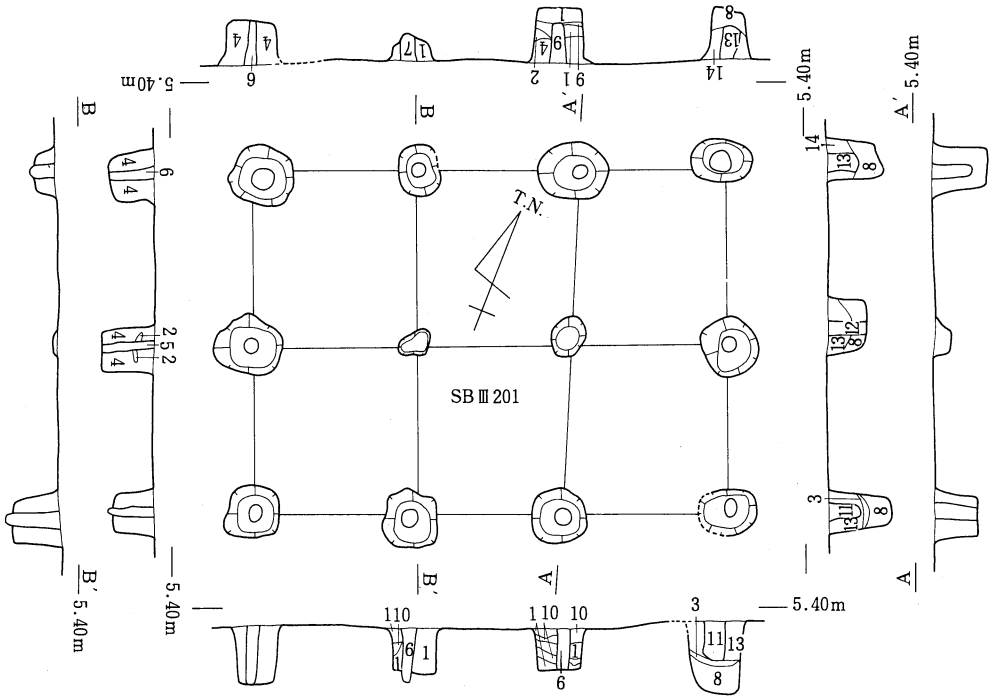




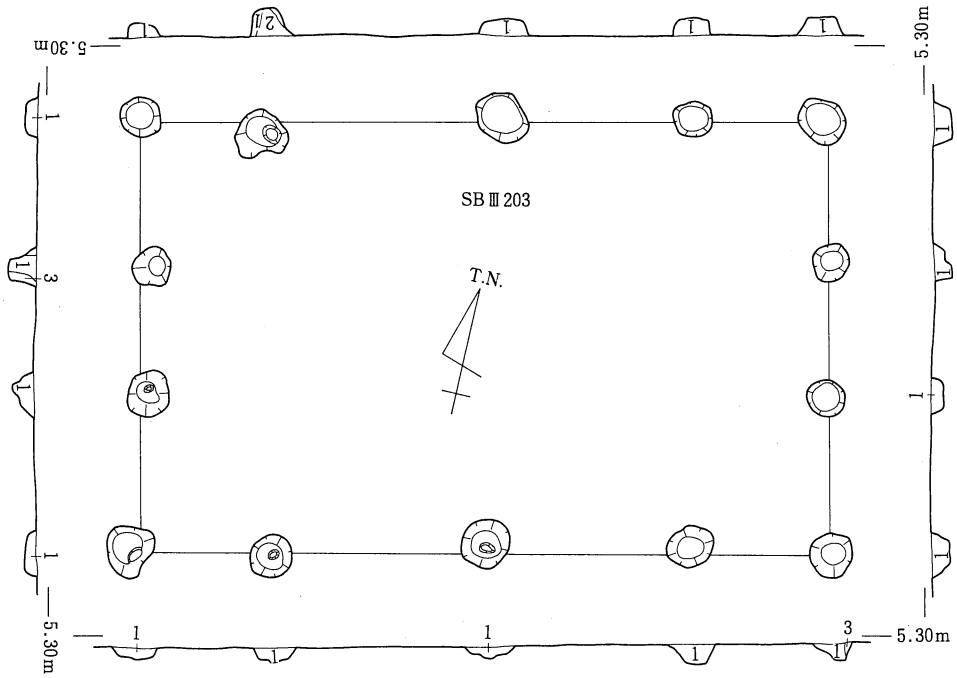
第267図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(49)



第268図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(50)



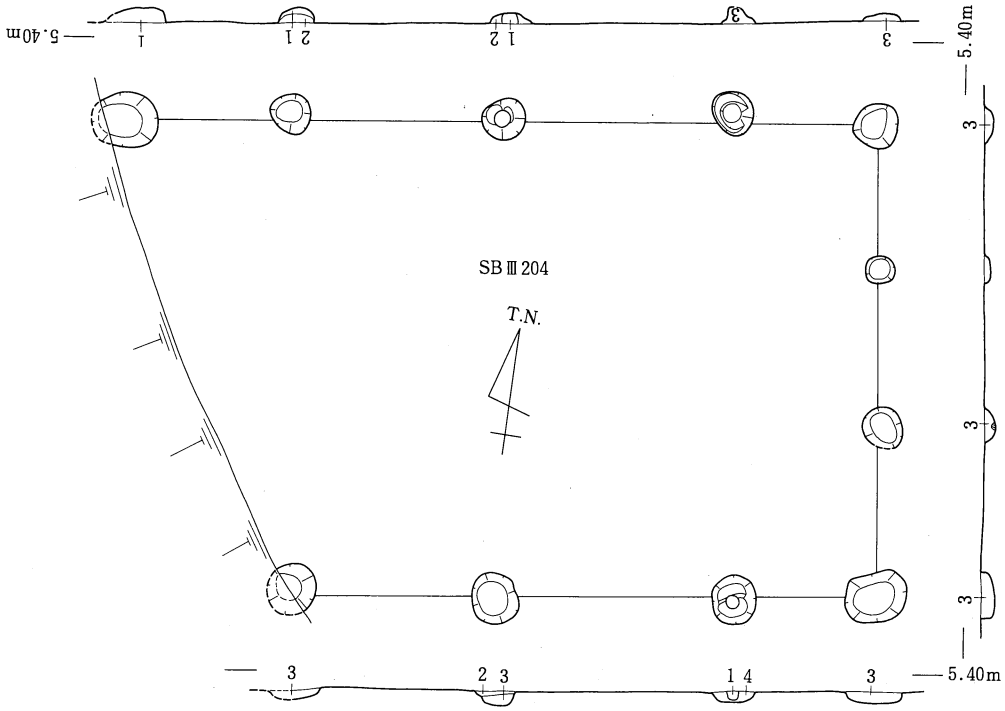
1. 黄褐色粘質土
2. 1に類似（ベースブロック）
3. 〃　（ベースに類似）
4. 暗茶褐色土
5. 茶灰色土
6. 暗茶色土
7. 暗灰色土
8. 暗灰色粘質土
9. 茶褐色土
10. 黄灰色土
11. 暗褐色粘質土
12. 11に類似（炭片含む）
13. 暗灰褐色粘質土（ベースのブロック含む）
14. 灰褐色粘質土



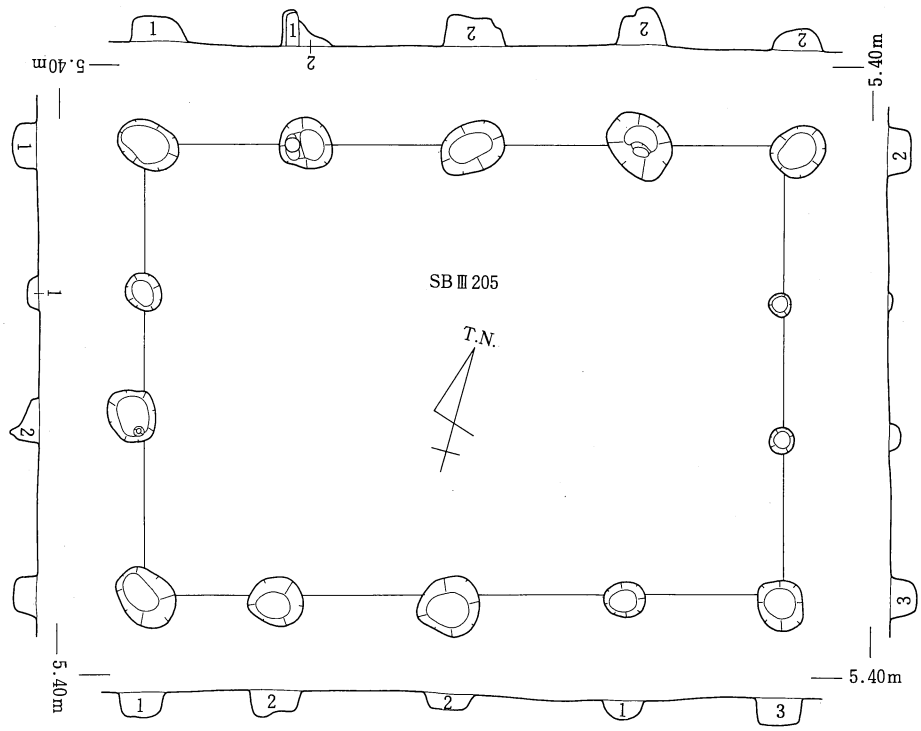
1. 黒灰色砂質土
2. 黄褐色土ブロックを含む黒灰色砂質土
3. 暗褐色砂質土（砂粒多く含む）

0　4 m

第269図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(51)



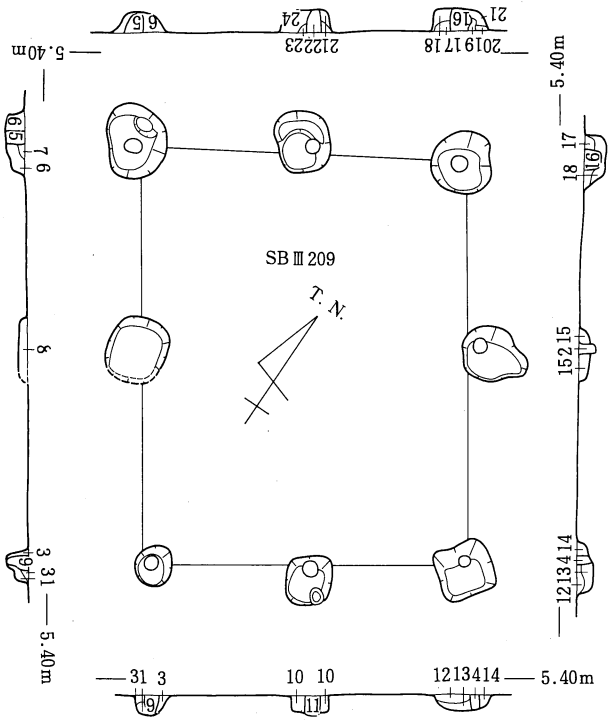
1. 黒灰色粘質土（砂礫を含む）
2. 暗褐色砂質土
3. 黒灰色砂質土
4. 暗黒色砂質土



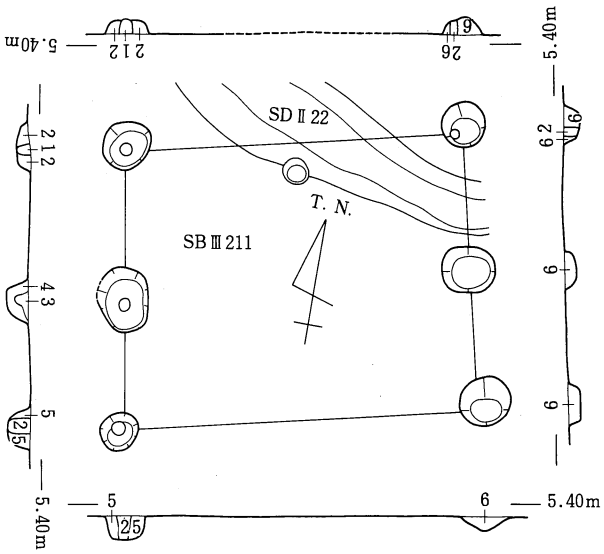
1. 黒灰色粘質土
2. 黒灰色砂質土
3. 黒褐色砂質土

0 4m

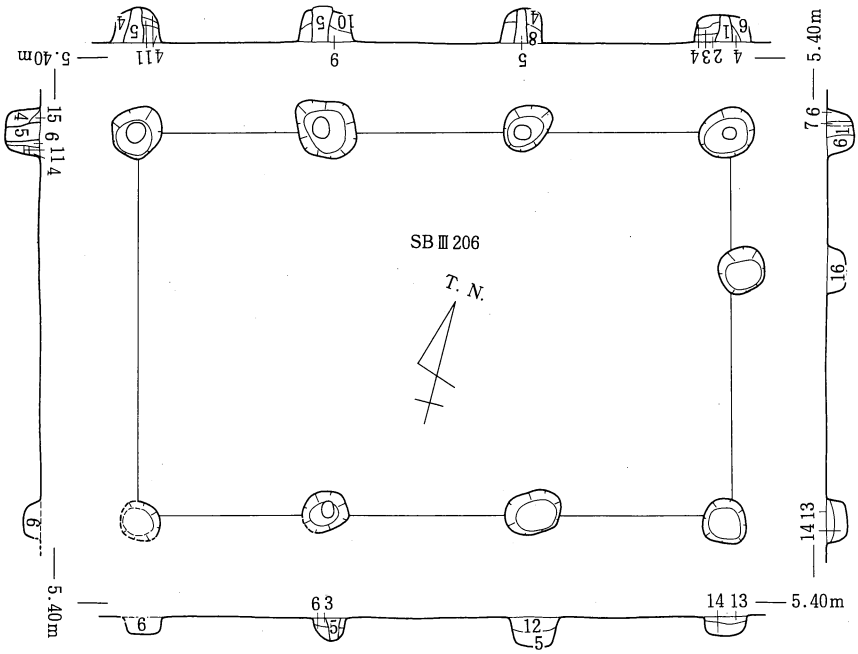
第270図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(52)



1. 淡灰色粘土
2. 灰色粘土
3. 淡灰色粘質土
4. 3に類似
5. 灰色粘質土
6～24. 5に類似

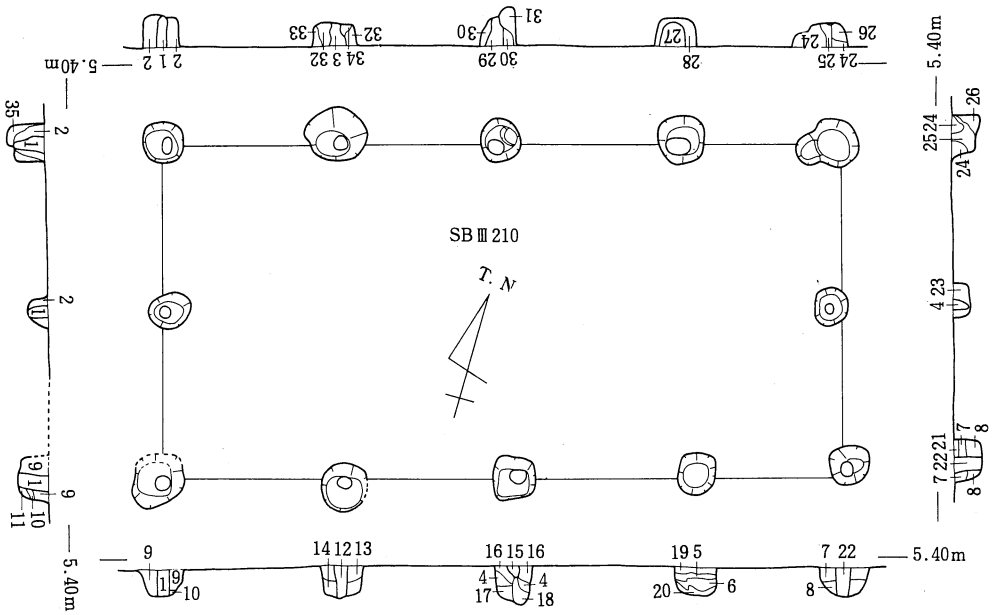


1. 淡灰色粘質土
2. 灰色粘質土
3. 2に類似（黄茶色ブロックを含む）
4. 〃 （黄茶色ブロックやや多い）
5. 〃 （黄茶色ブロックやや含む）
6. 〃 （暗灰褐色ブロック多い）

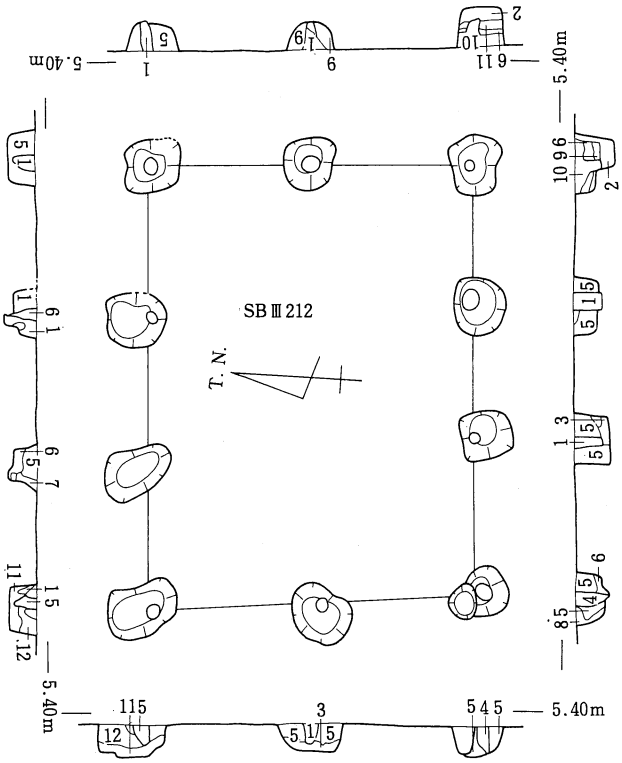


1. 灰色粘質土
（茶褐色粒・黄茶色粒を含む）
2. 1に類似
3. 灰色粘質土（黄茶色ブロックを含む）
4. 〃 （灰褐色ブロックを含む）
5. 〃
6. 5に類似（茶褐色粒を含む）
7. 灰色粘土
8. 灰色粘質土
（淡茶褐色粒・淡黄褐色粒を含む）
9. 淡灰色粘質土
（黄褐色ブロックを含む）
10. 灰色粘土（灰褐色ブロックを含む）
11. 灰色粘質土（黄褐色ブロックを含む）
12. 〃
（淡茶褐色粒・黄褐色粒を含む）
13. 灰色粘質土
（灰褐色ブロック・黄茶色ブロックを含む）
14. 灰色粘質土（淡黄褐色粒を含む）
15. 〃 （黄茶色粒を含む）
16. 淡灰色粘質土（砂質に近い，淡茶褐色粒・淡黄褐色粒を含む）

第271図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(53)



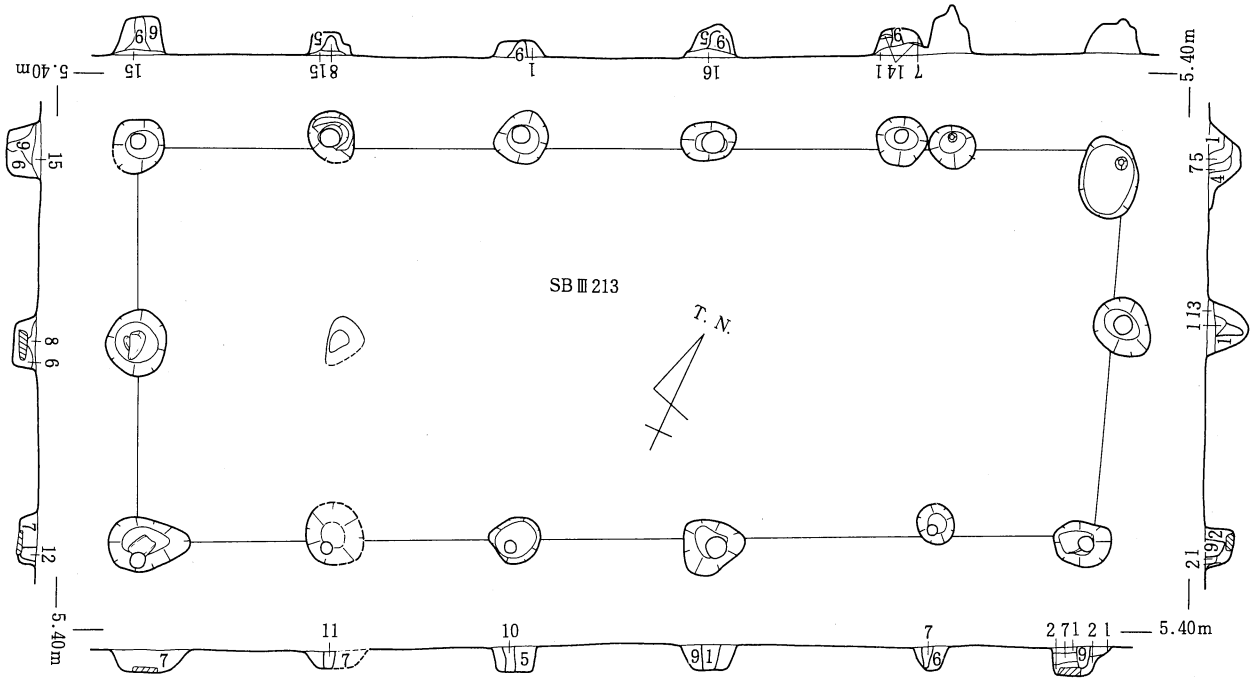
1. 灰色粘土
2. 1に類似
3. 暗灰色粘土
4. 淡灰色粘質土
5. 暗灰色粘質土
6～8. 5に類似
9. 灰色粘質土
10～35. 9に類似



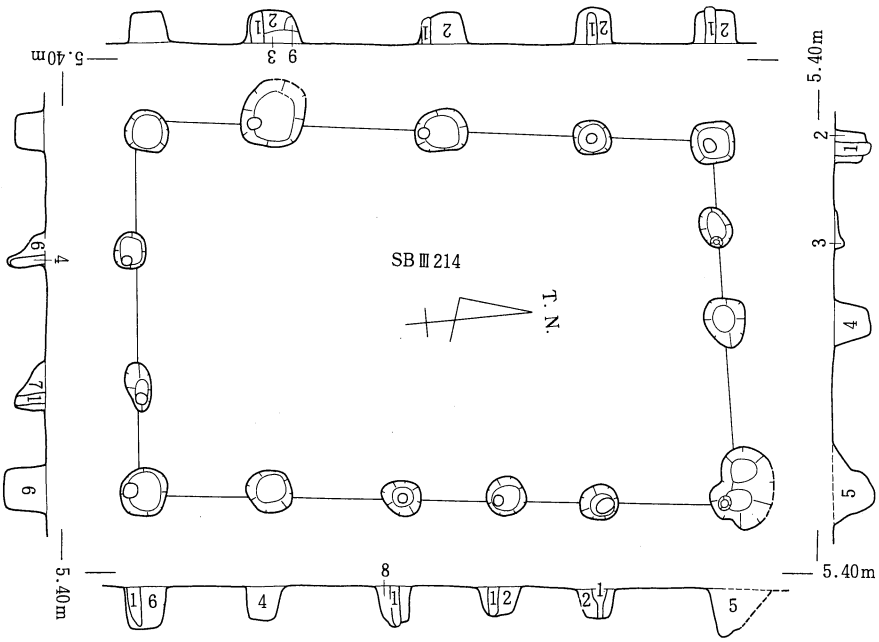
1. 灰色粘土
（黄茶色ブロック・暗灰褐色ブロックを含む）
2. 1に類似（淡黄茶色ブロックを含む）
3. 灰色粘質土
4. 3に類似（暗灰褐色ブロックやや多い）
5. 〃 （暗灰褐色ブロックを含む）
6. 〃 （黄茶色ブロックを含む）
7. 〃
（黄茶色ブロック・暗灰褐色ブロックを含む）
8. 淡灰色粘質土
9. 暗灰色粘質土（暗灰褐色ブロックを含む）
10. 9に類似（灰色ブロックを含む）
11. 暗灰色粘土
12. 11に類似（灰色ブロックを含む）

0 4 m

第272図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(54)



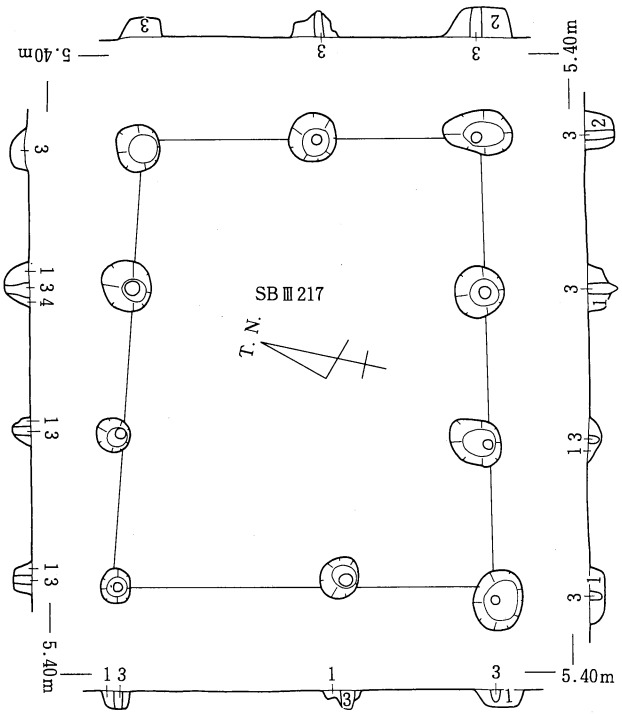
1. 暗褐色砂質土
2. 1に類似（ベースブロックを含む）
3. 〃（焼土・ベースブロックを含む）
4. 暗褐色粘質土（ベースブロックを含む）
5. 暗褐色弱粘質土
6. 〃（ベースブロックを含む）
7. 暗灰褐色弱粘質土
8. 〃（焼土を含む）
9. 暗灰褐色弱粘質土（焼土を多量に含む）
10. 〃（焼土を少量含む）
11. 〃（焼土ブロックを多量に含む）
12. 暗灰褐色砂質土（焼土を含む）
13. 〃（焼土を多量に含む）
14. 黄褐色土ブロック
15. 黒灰色弱粘質土
16. 〃（焼土を少量含む）

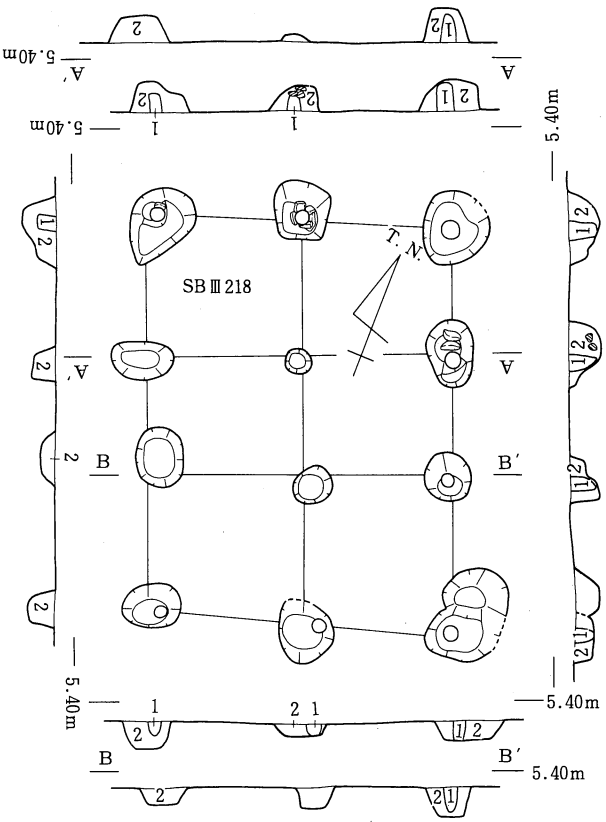


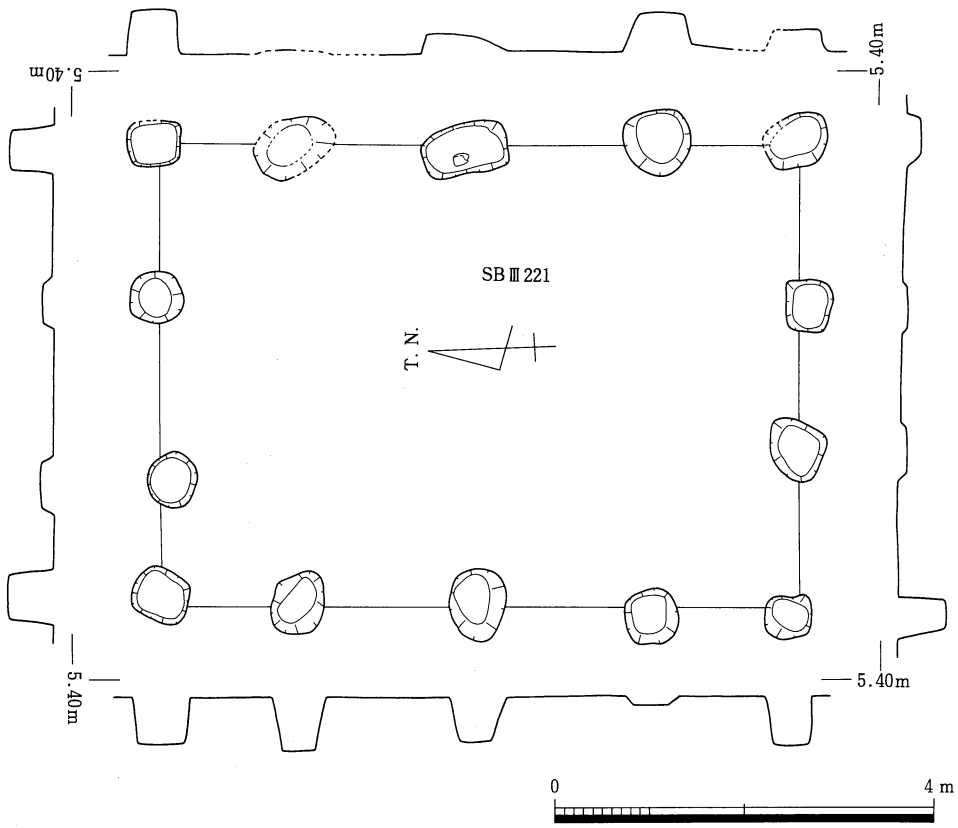
1. 黒灰色弱粘質土
2. 1に類似（ベースブロックを含む）
3. 灰褐色砂質土
4. 黒灰色砂質土
5. 4に類似（ベースブロックを含む）
6. 黒褐色砂質土
7. 黒褐色弱粘質土
8. 黒灰色土
9. ベースブロック

0　4 m

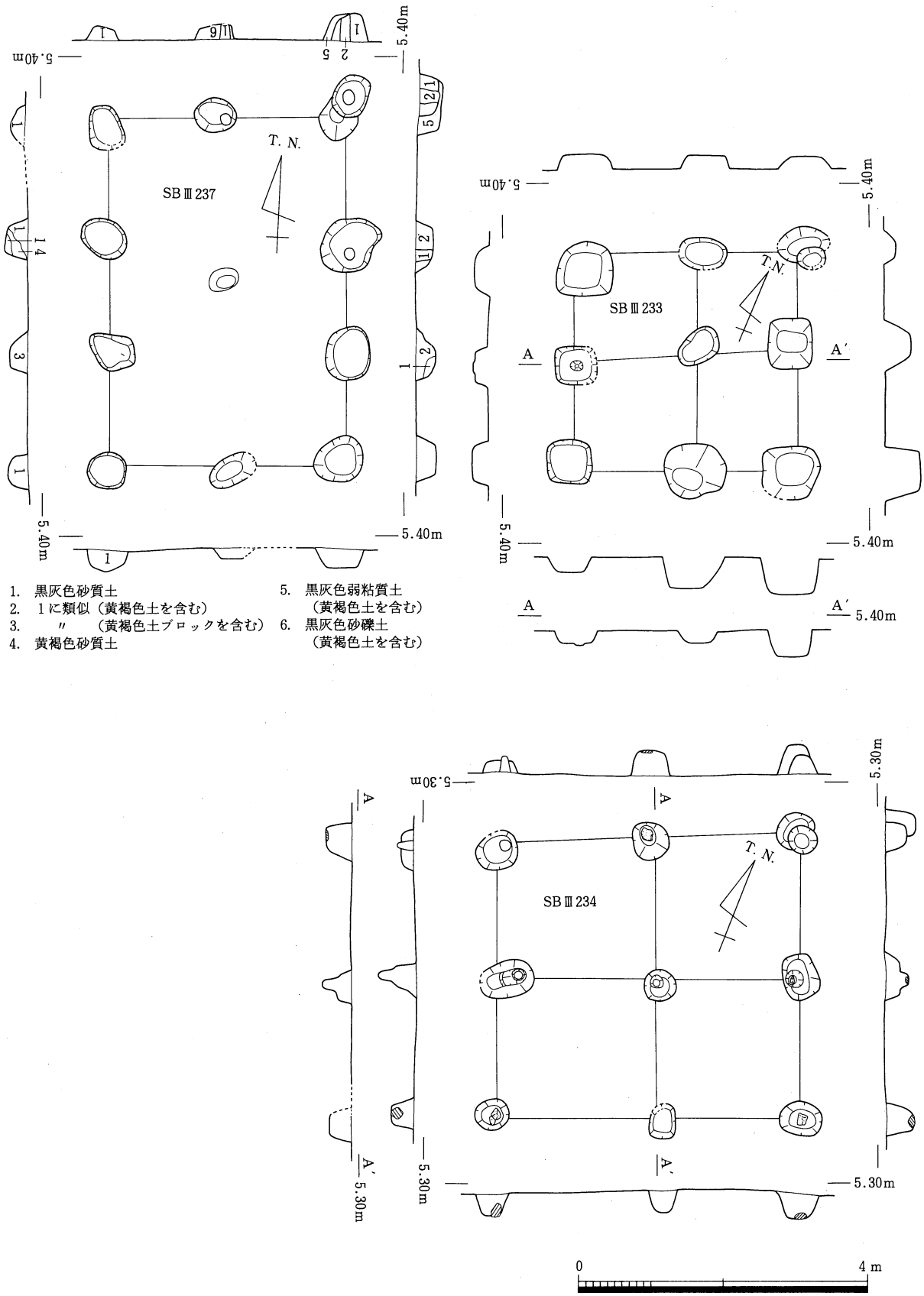
第273図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(55)





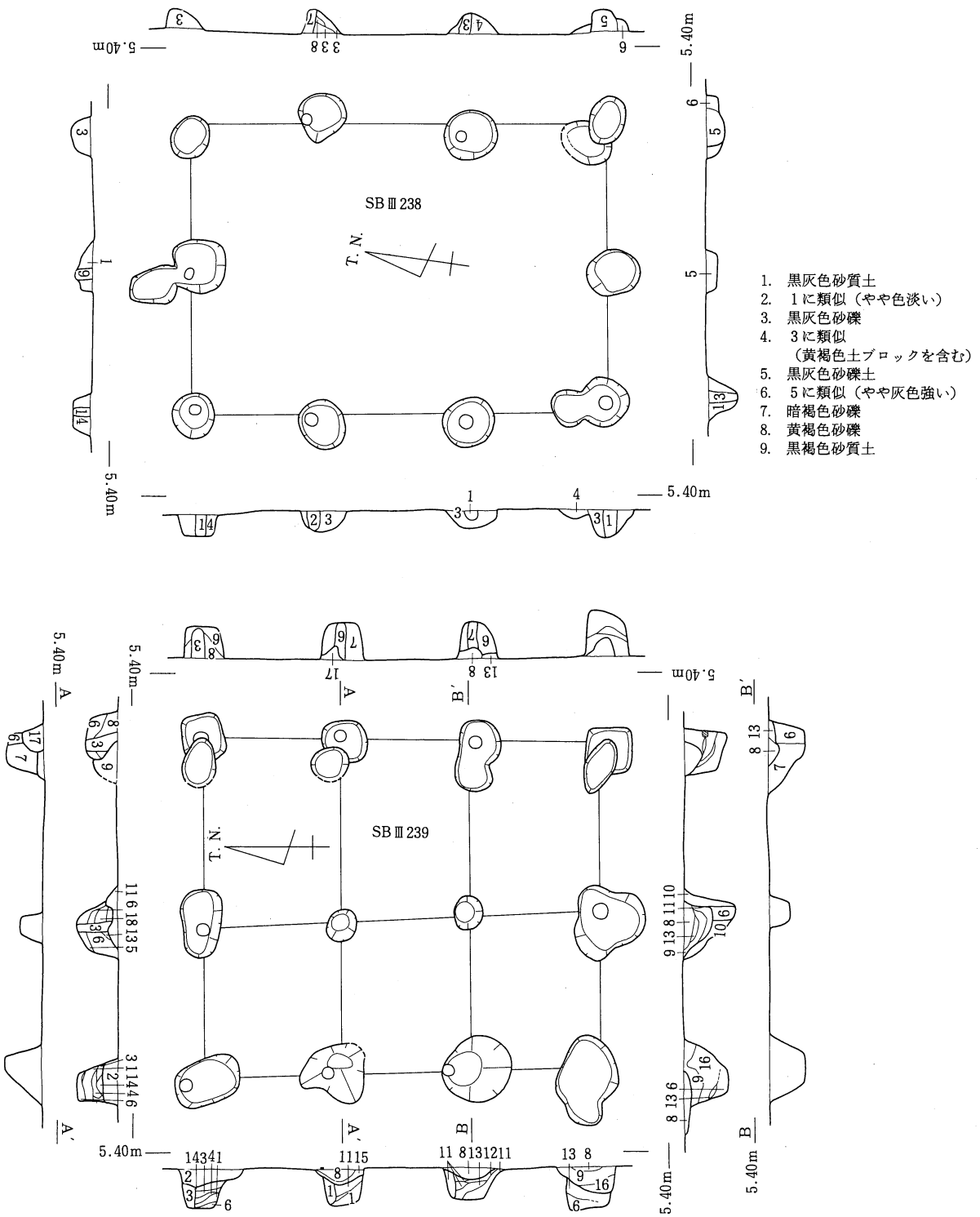


第274図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(56)

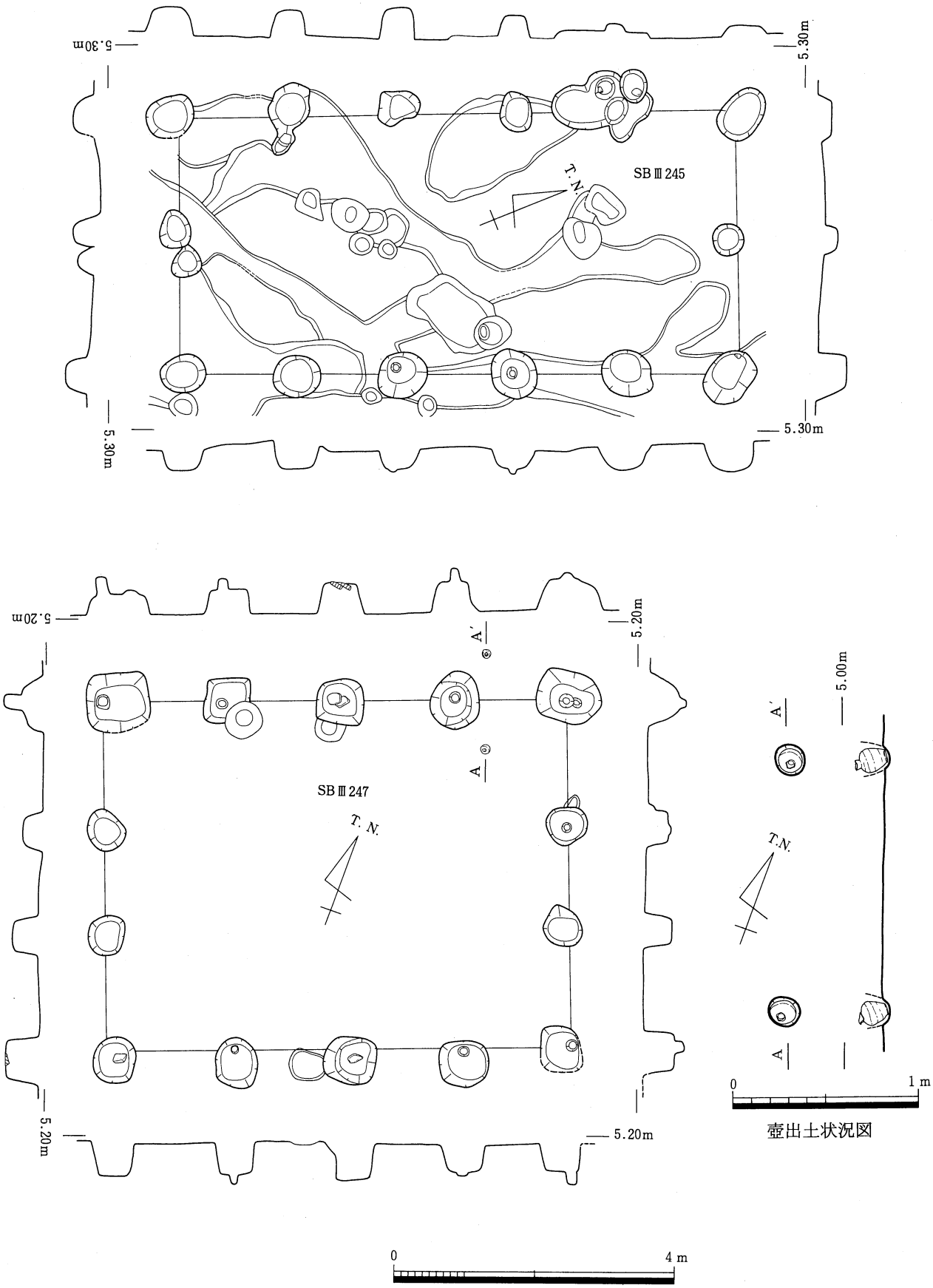


1. 黒灰色砂質土
2. 1に類似（黄褐色土を含む）
3. 〃 （黄褐色土ブロックを含む）
4. 黄褐色砂質土
5. 黒灰色弱粘質土（黄褐色土を含む）
6. 黒灰色砂礫土（黄褐色土を含む）

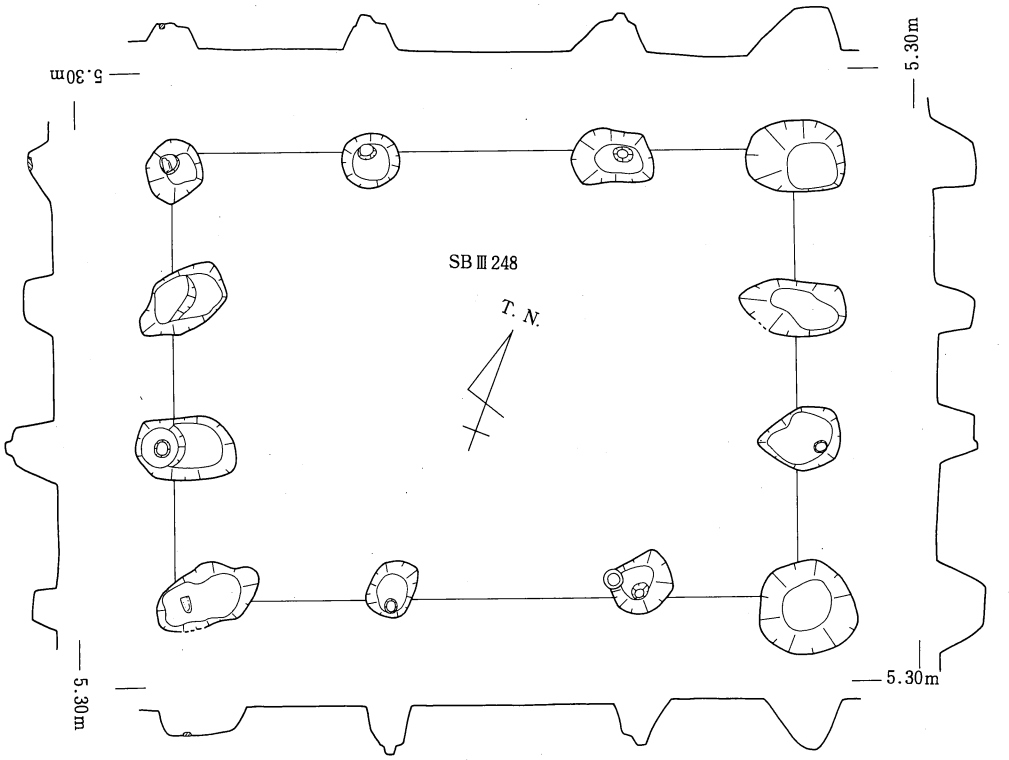
第275図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(57)

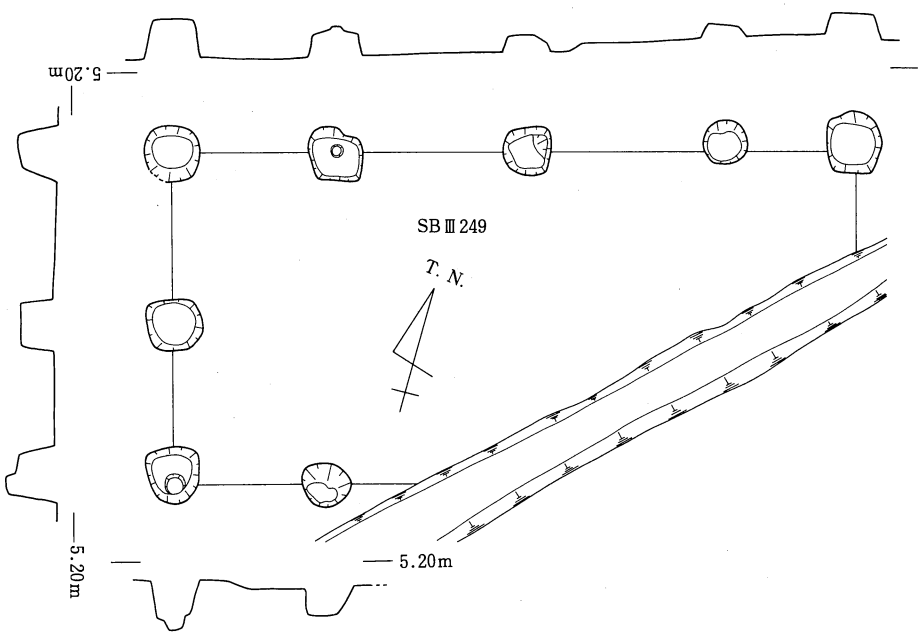


第276図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(58)

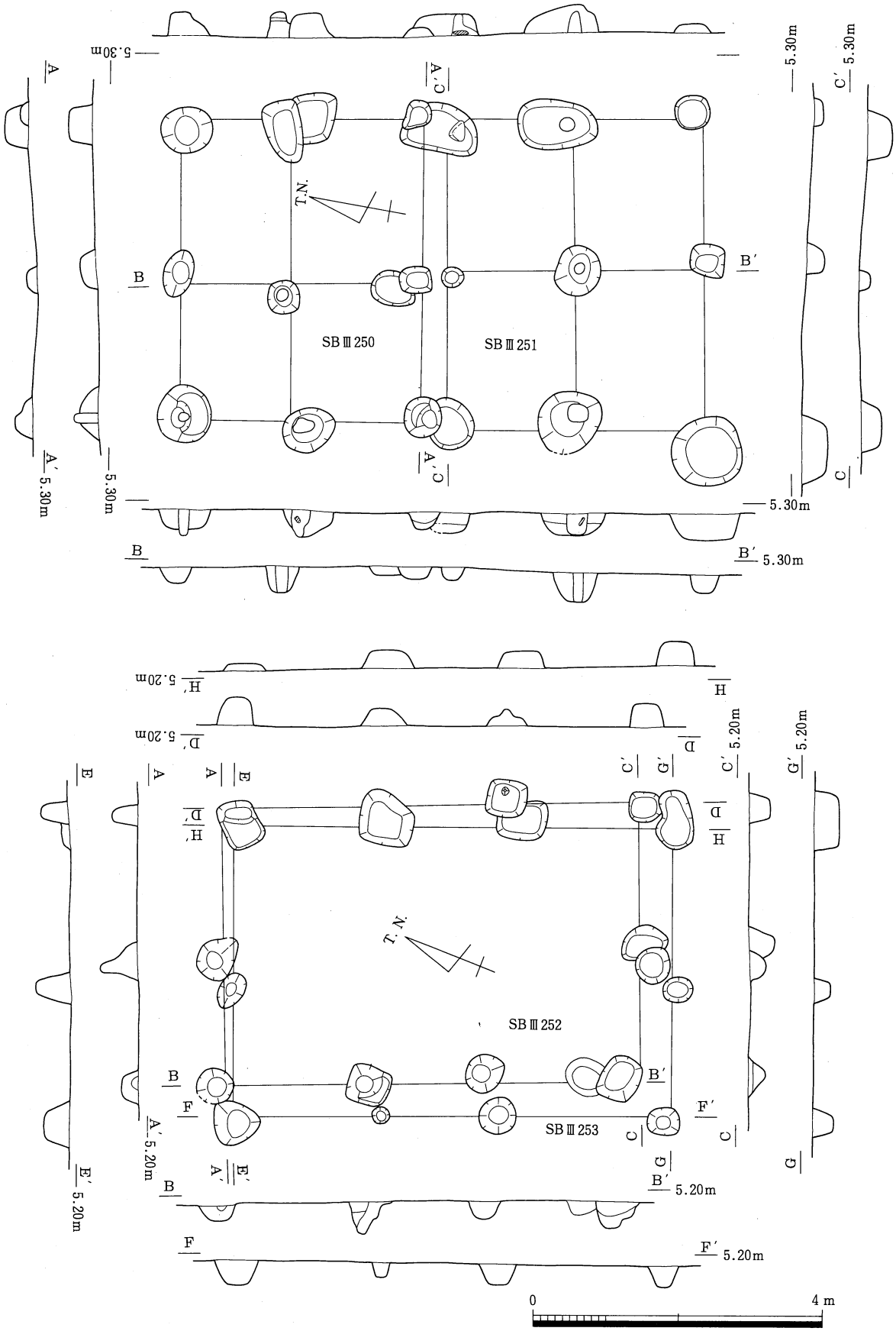


第277図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(59)

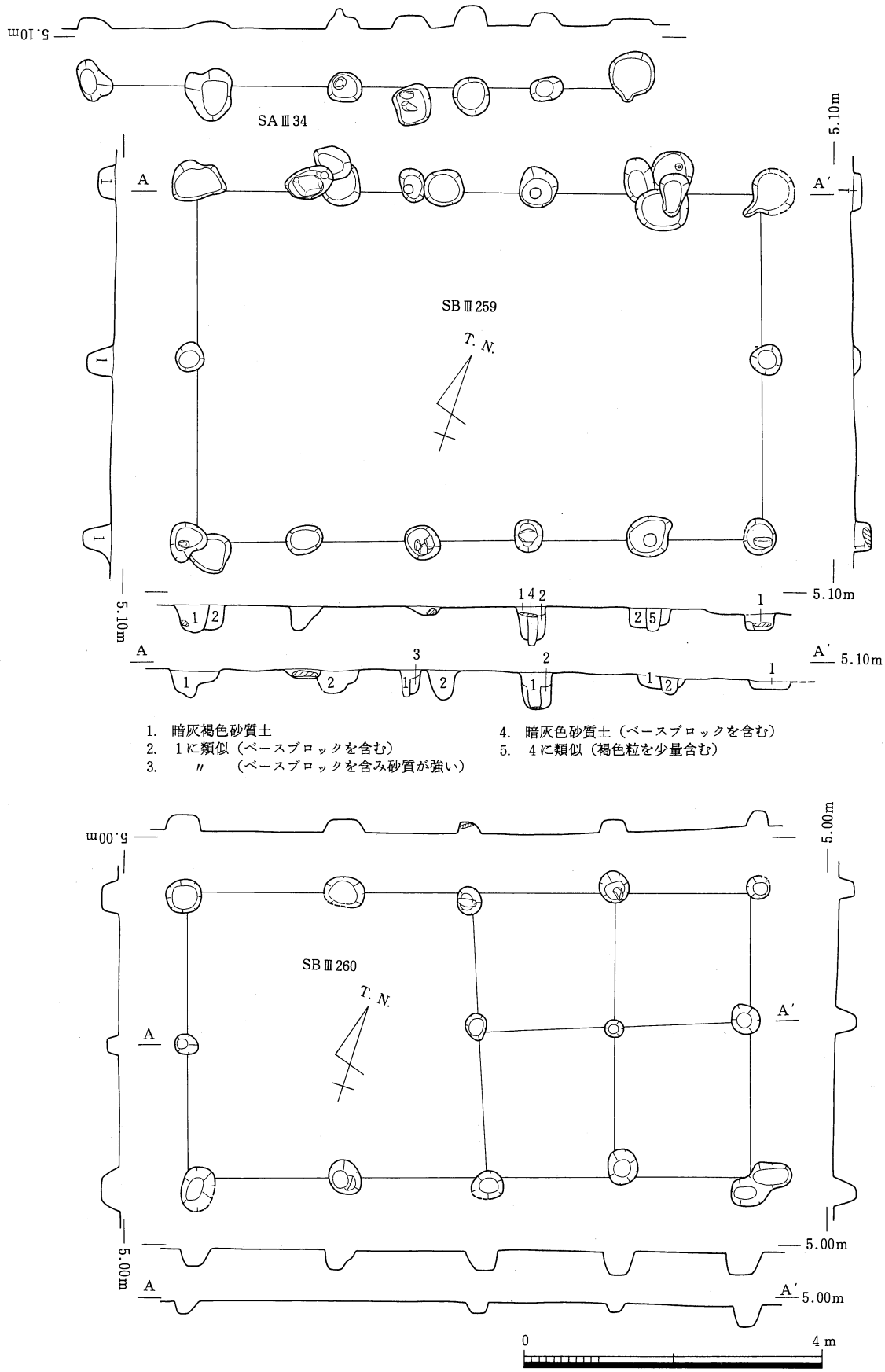




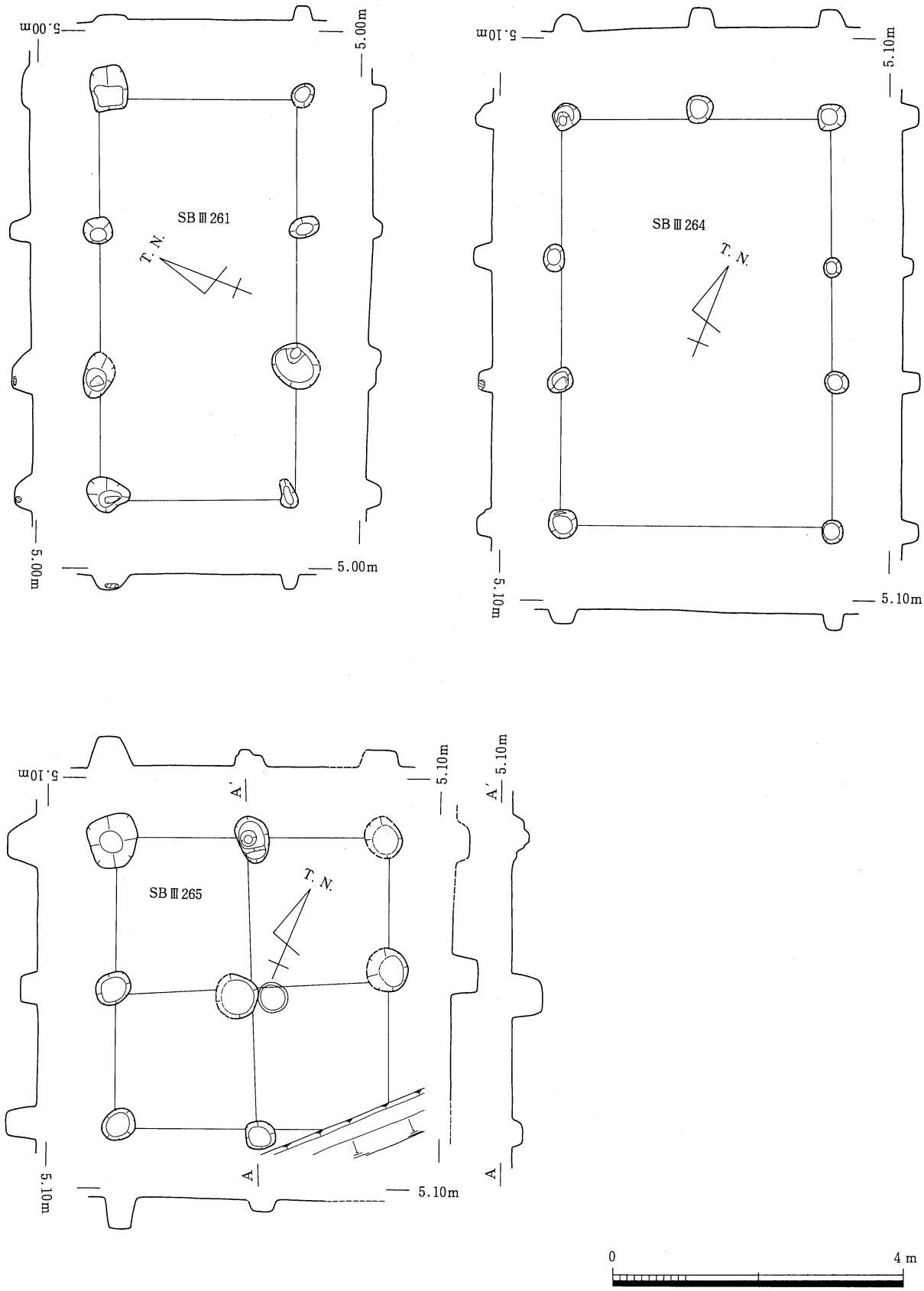
第278図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(60)



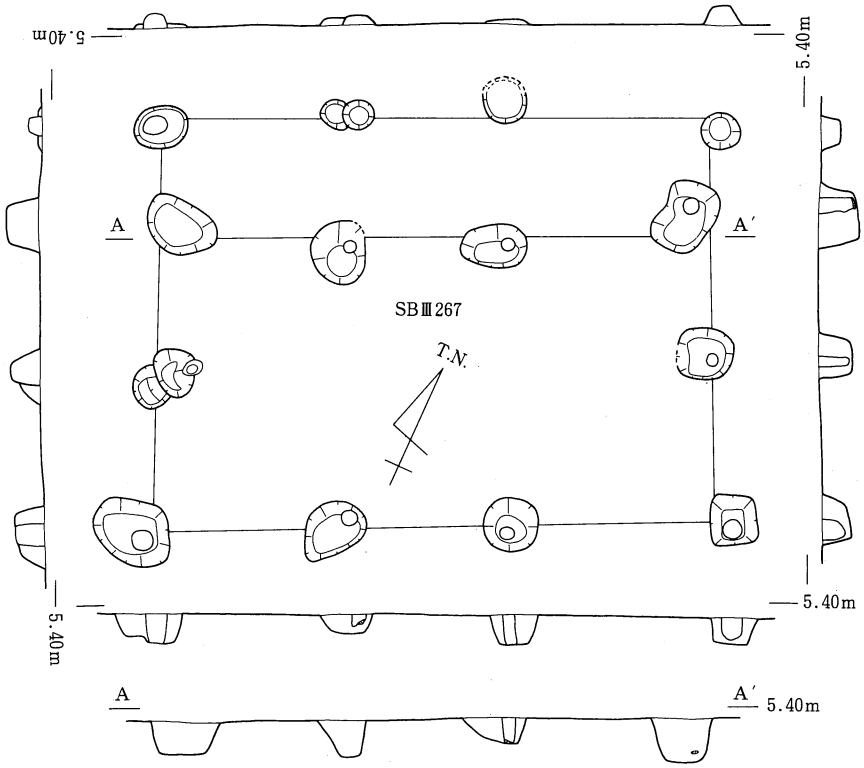
第279図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(61)

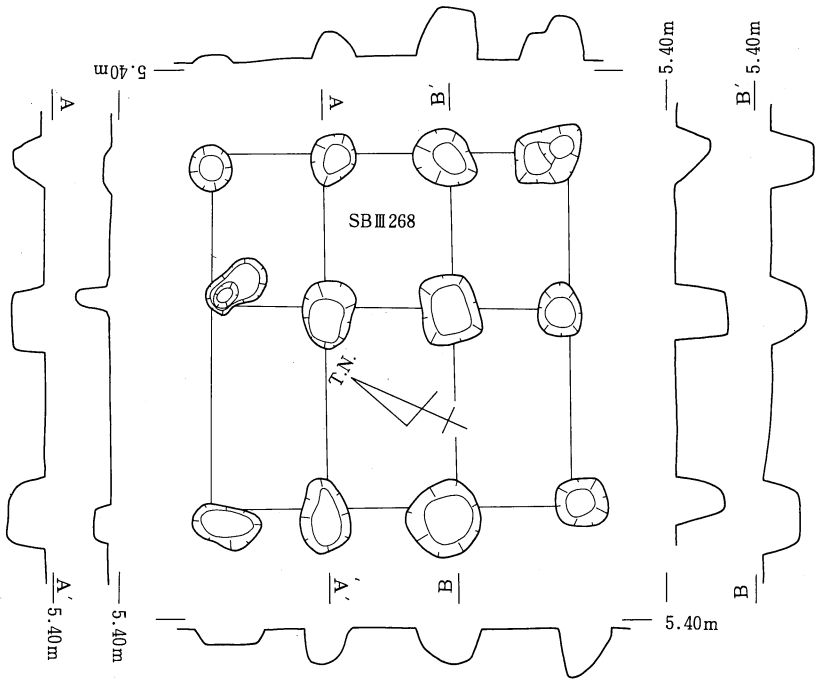


第280図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(62)

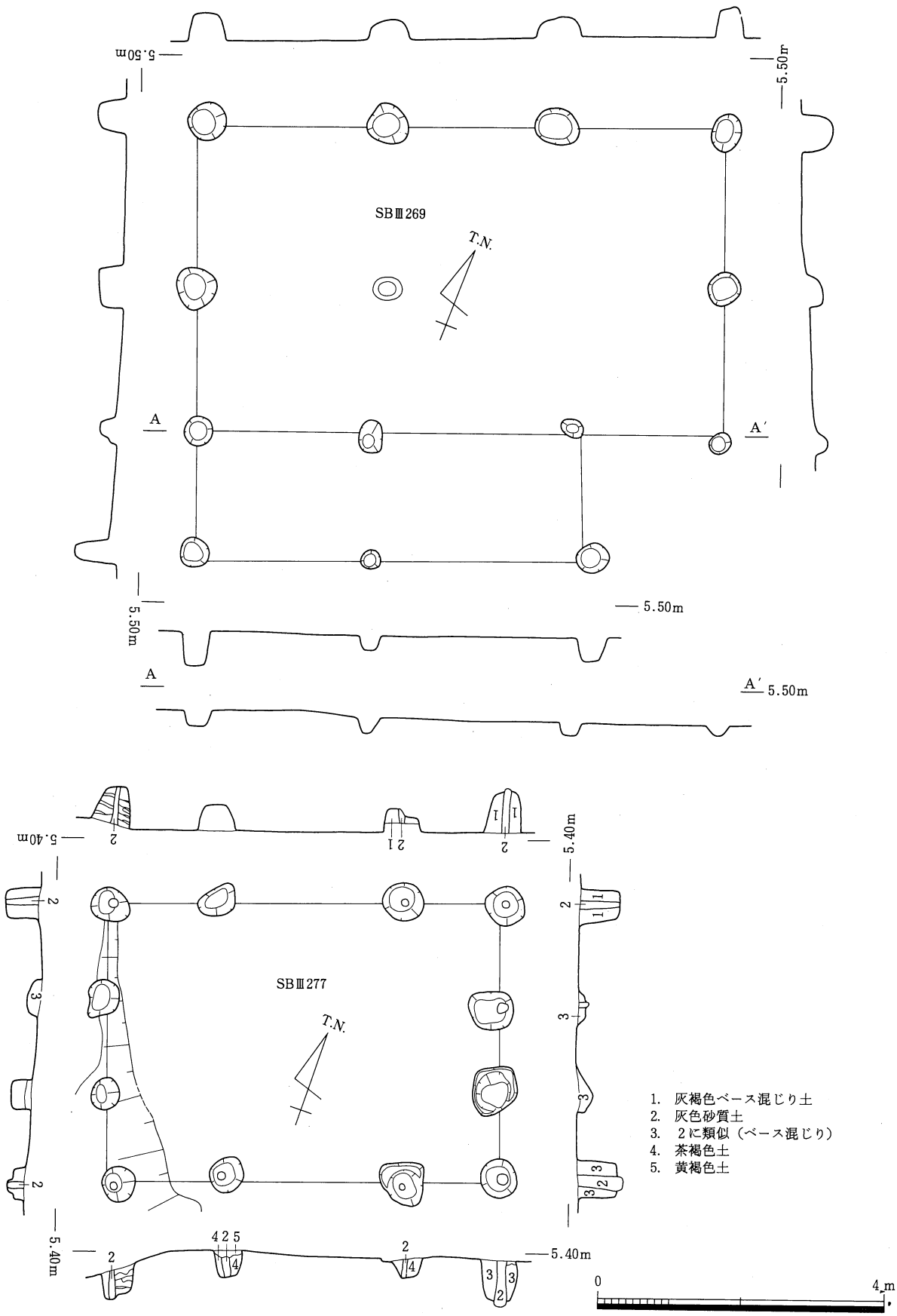


第281図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(63)

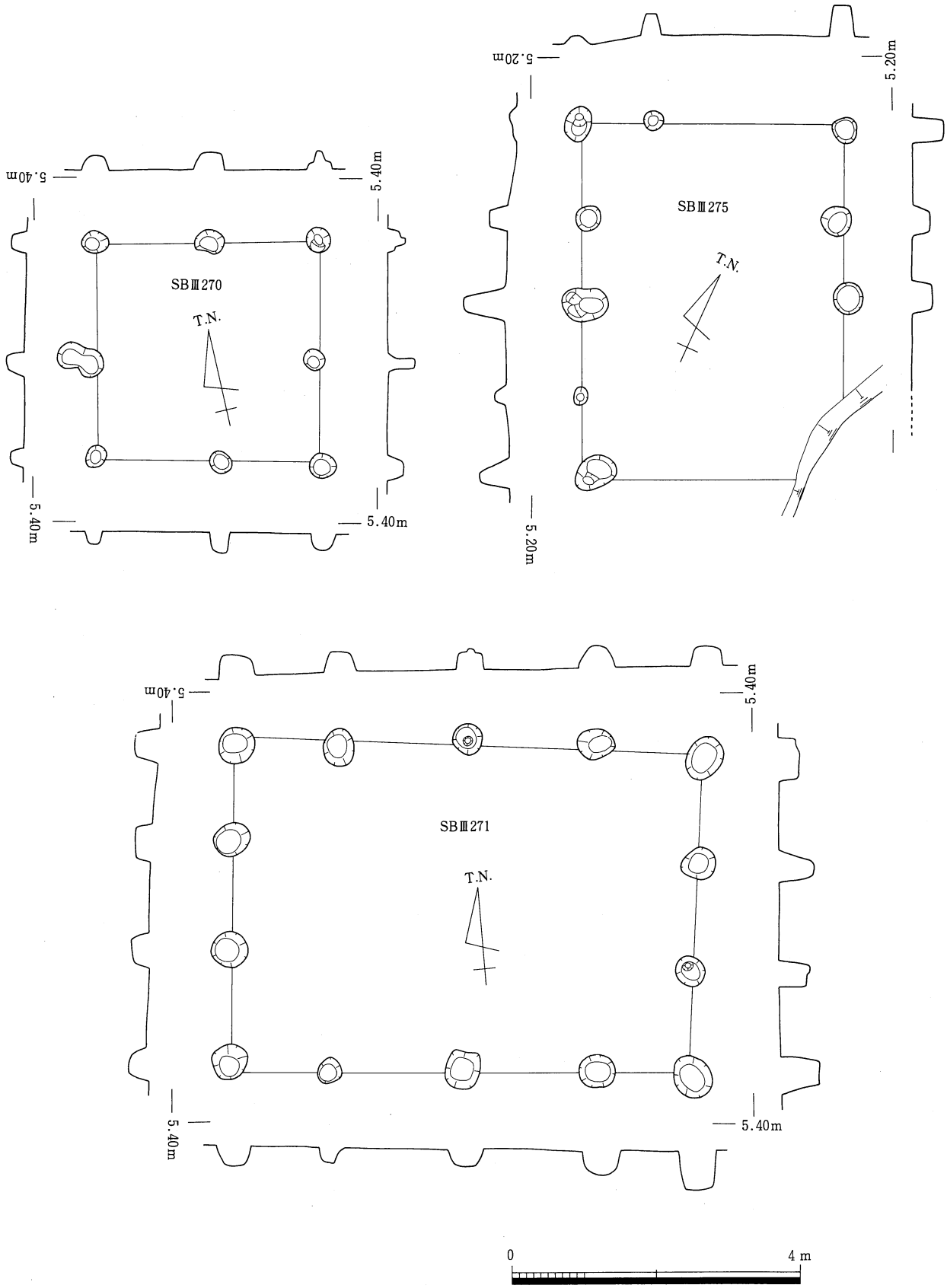




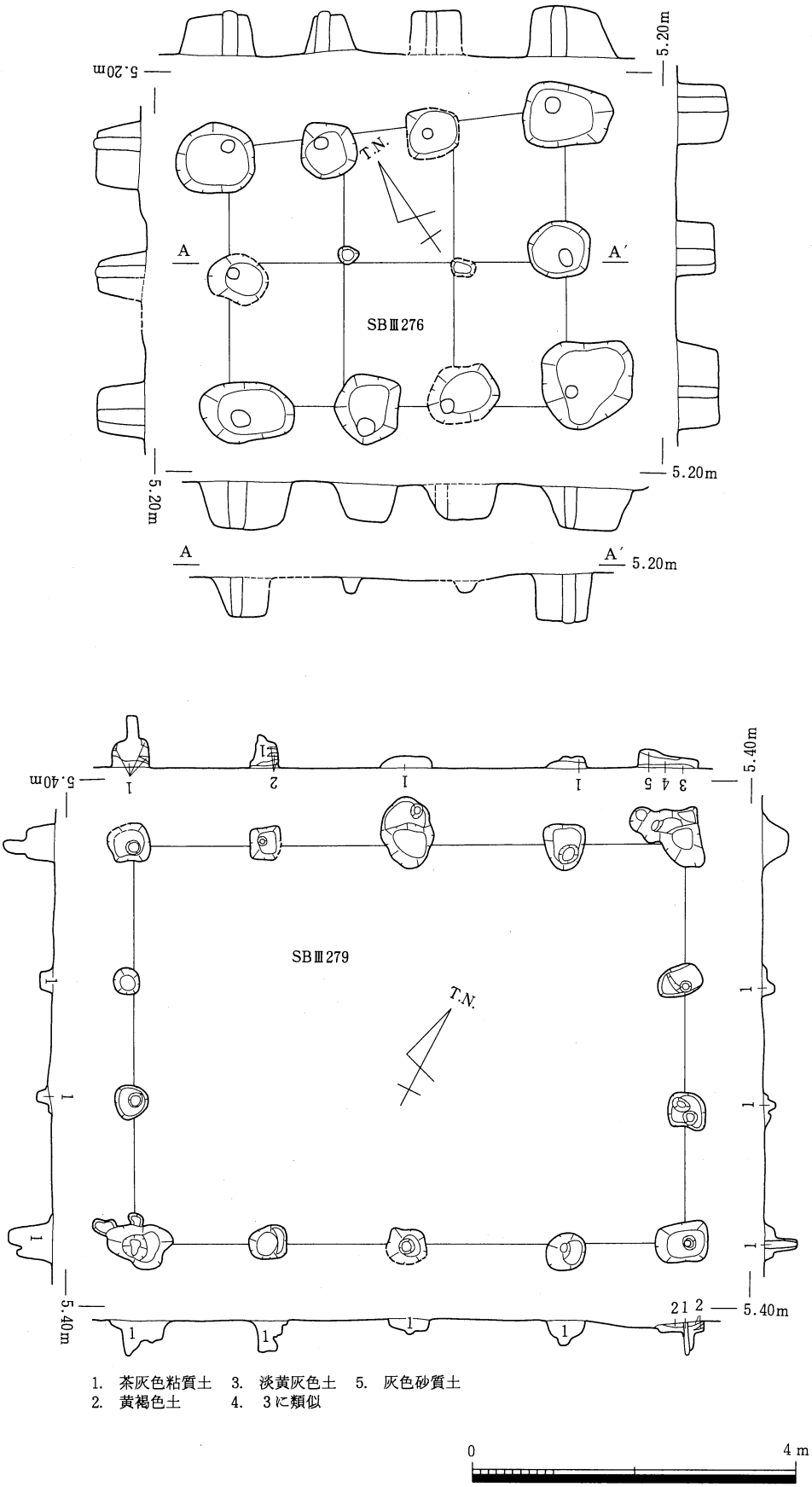
第282図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(64)



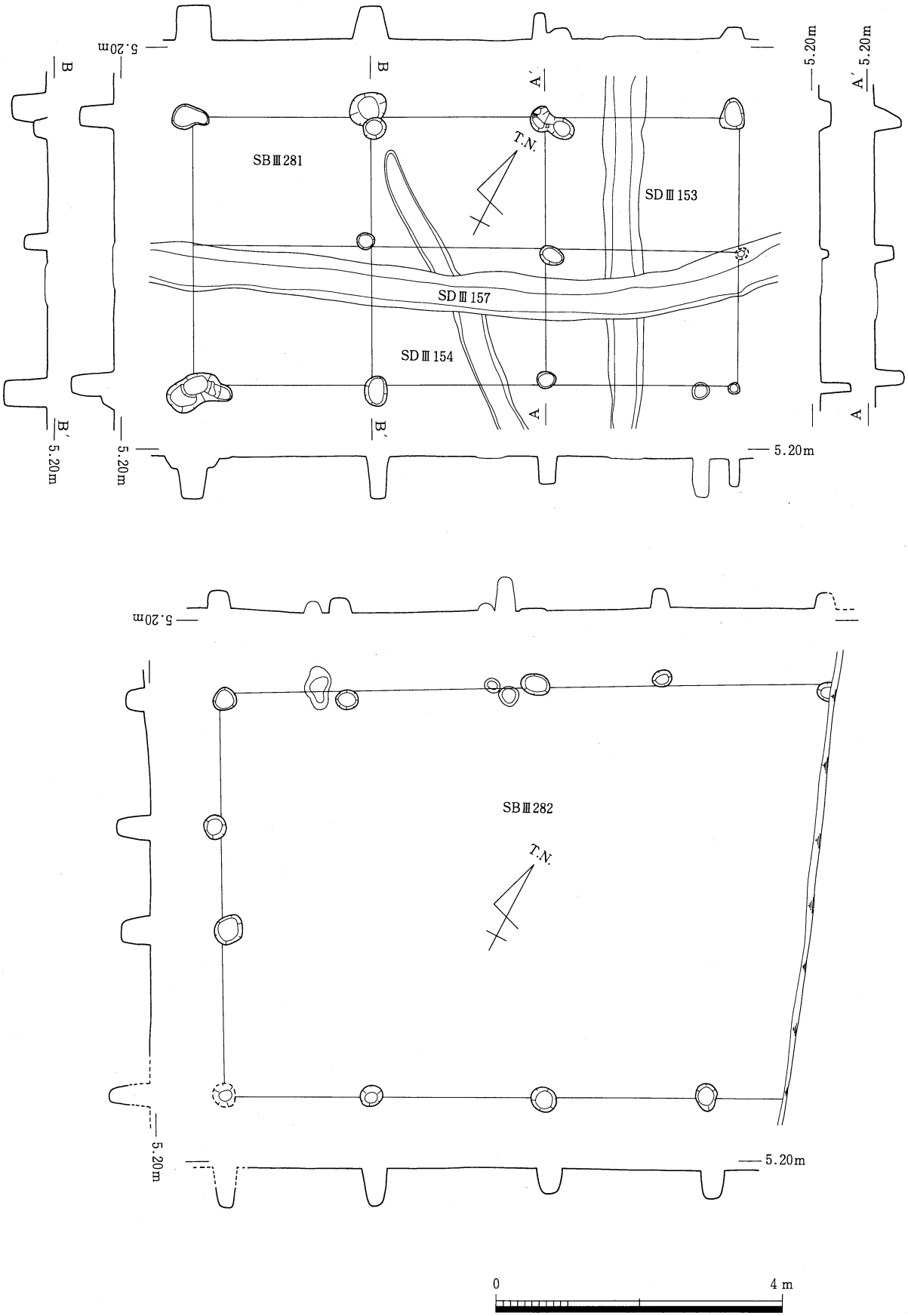
第283図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(65)



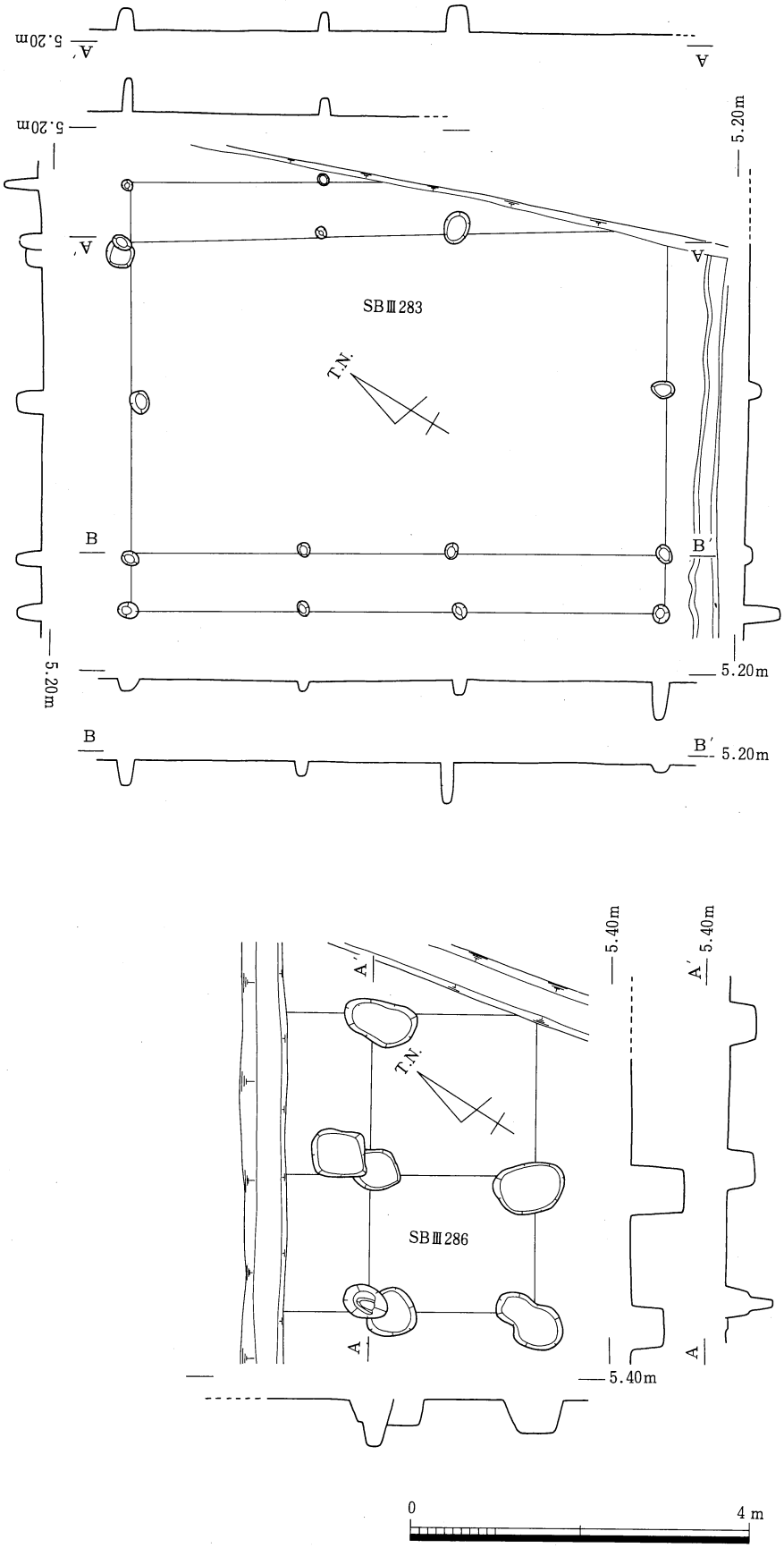
第284図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(66)



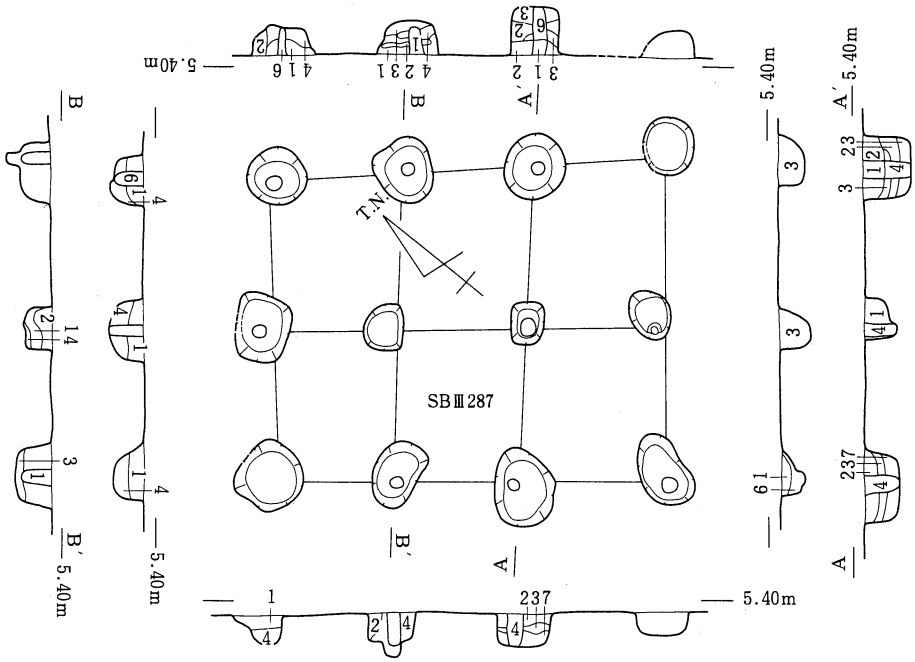
第285図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(67)



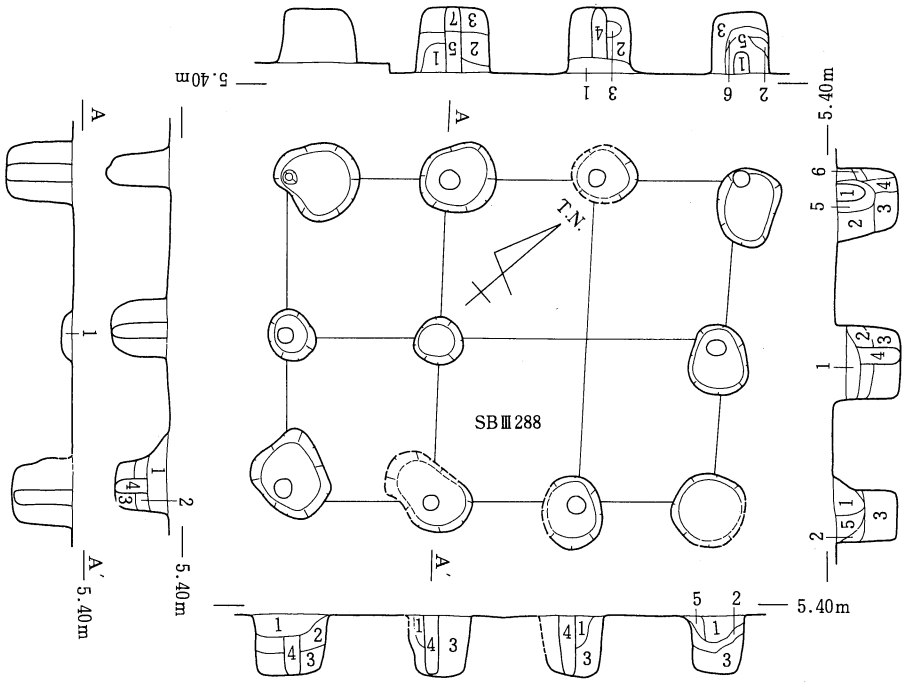
第286図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(68)



第287図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(69)



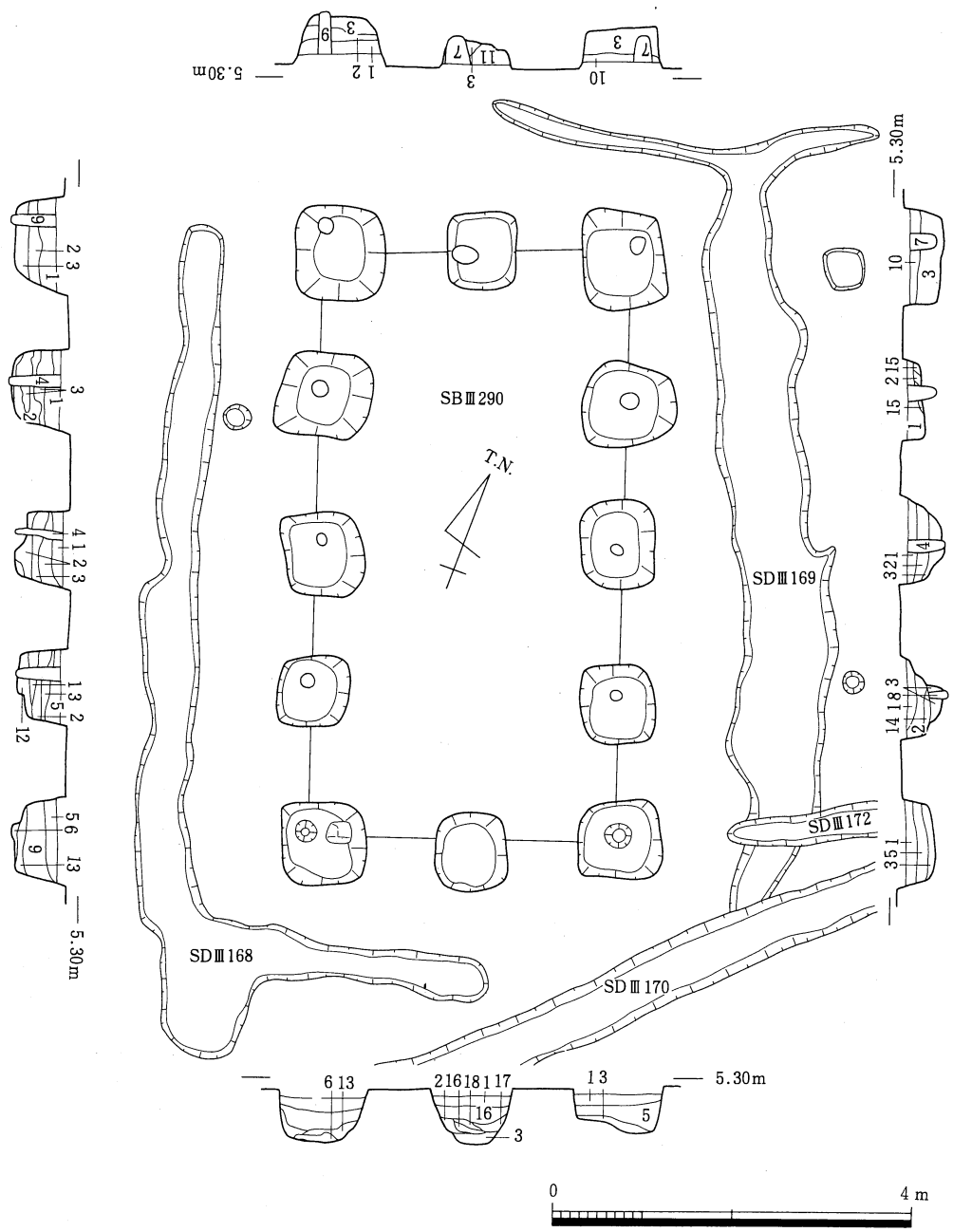
1. 淡褐灰色砂質土
（黄褐色砂質土のベースブロックを含む）
2. 灰黄褐色砂質土
3. 暗灰色粘質土
4. 3に類似
（褐色及び黄褐色のベースブロックを含む）
5. 褐灰色粘質土
6. 5に類似（さらに褐色強い）
7. 灰黄褐色粘質土



1. 褐灰色シルト（Mn小土粒を多量に含む）
2. 黄褐灰色シルト（ベースの土を多量に含む）
3. 褐灰色粘質土（ベースのブロックを含む）
4. 灰色弱粘質土
5. 1に類似（やや暗い）
6. 2に類似（ベースを多量に含む）
7. 3に類似（ベースのブロックを多量に含む）

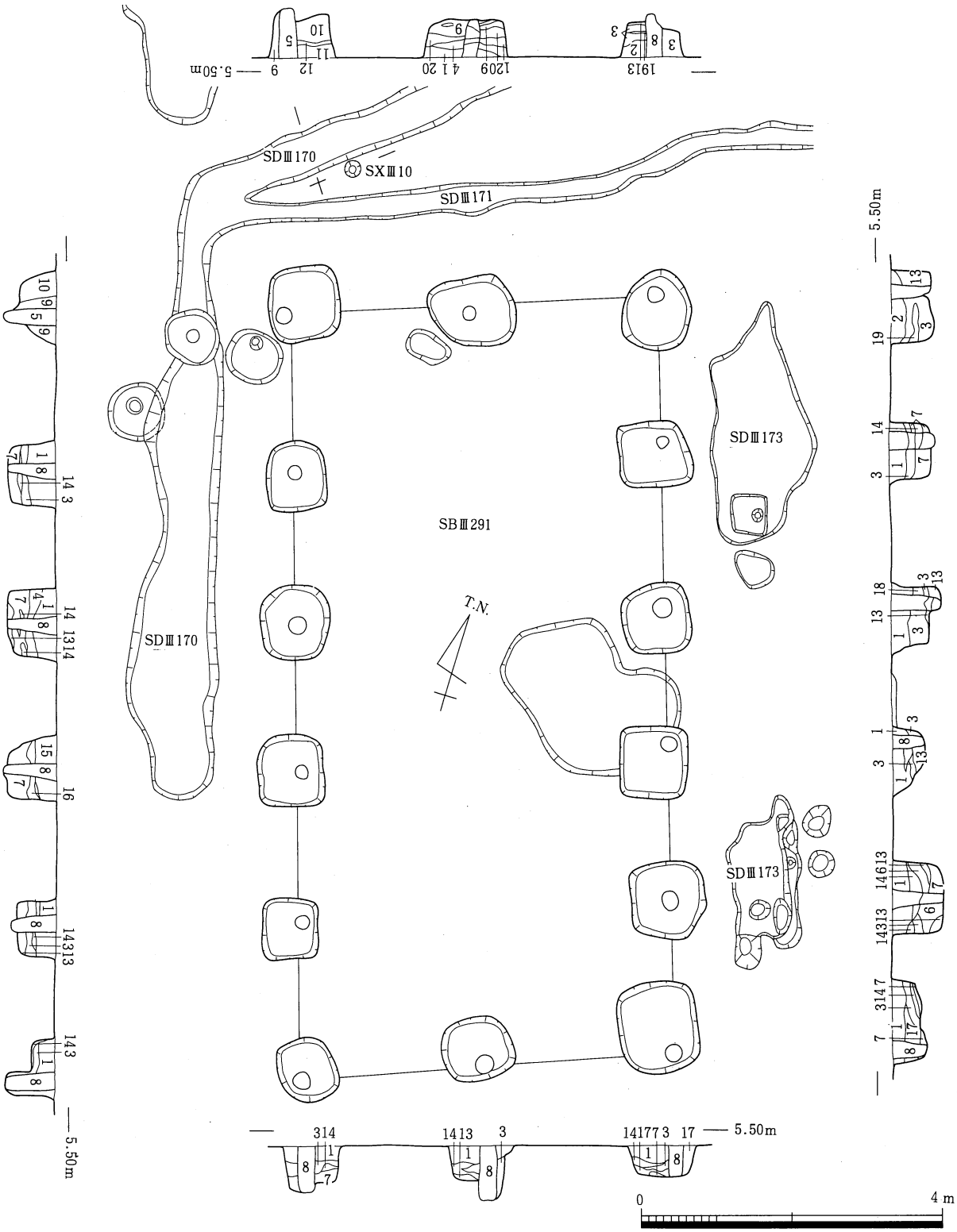
0　4 m

第288図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(70)



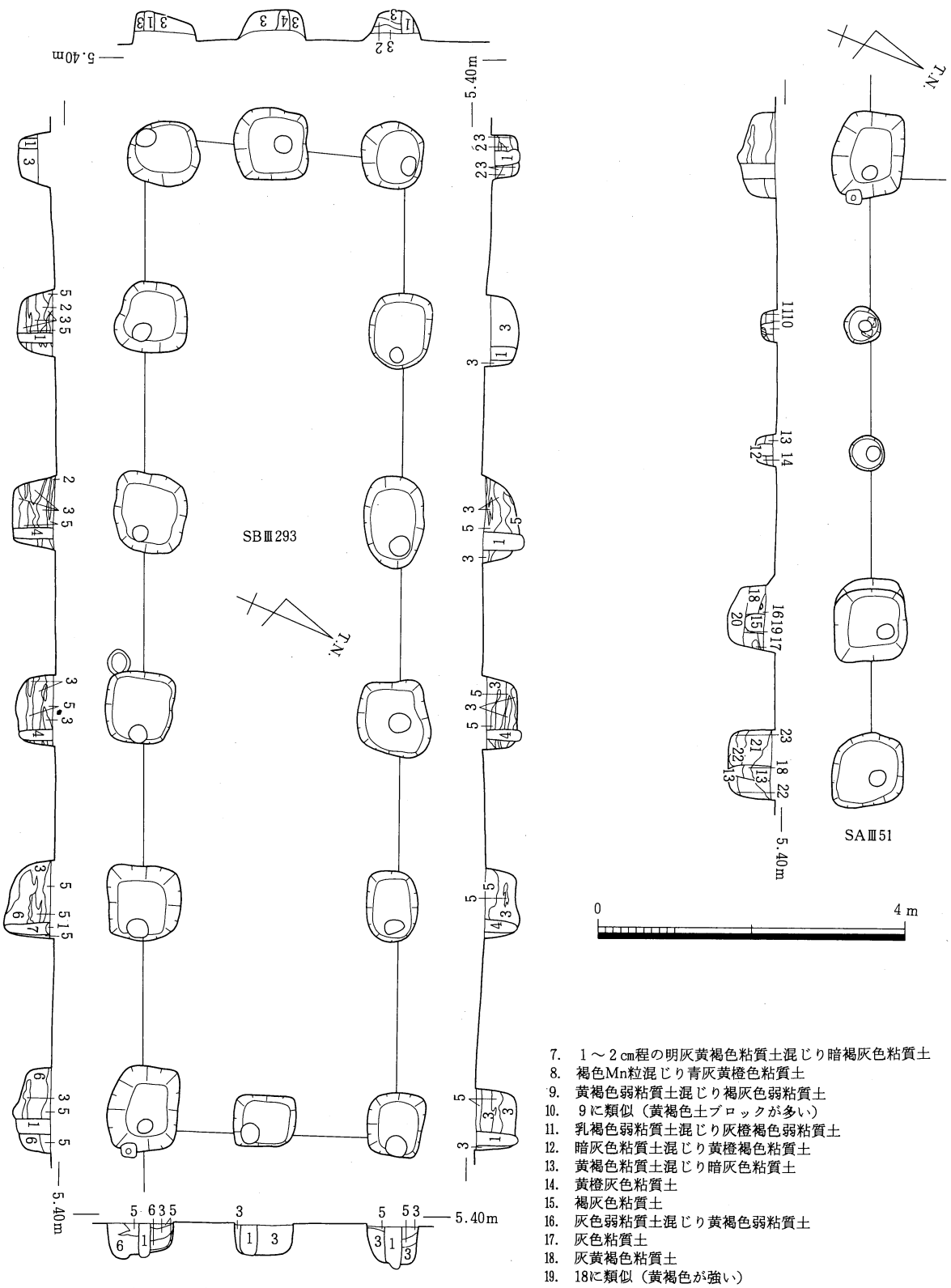
1. 明灰色粘質土混じり砂質土（ベースを若干含む）
2. 明灰色粘質土（ベースブロックを含む）
3. 明黄褐色砂混じり粘質土
（ほとんどベースのブロックで構成されている）
4. 茶褐色砂質土混じり灰色砂質土
5. 淡茶褐色粘質土混じり灰色砂質土
6. 明灰色粘土
7. 淡茶褐色砂質土混じり灰色砂質土
8. 明灰色砂質土
9～11. 1に類似
12～15. 2に類似
16～18. 3に類似

第289図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(71)



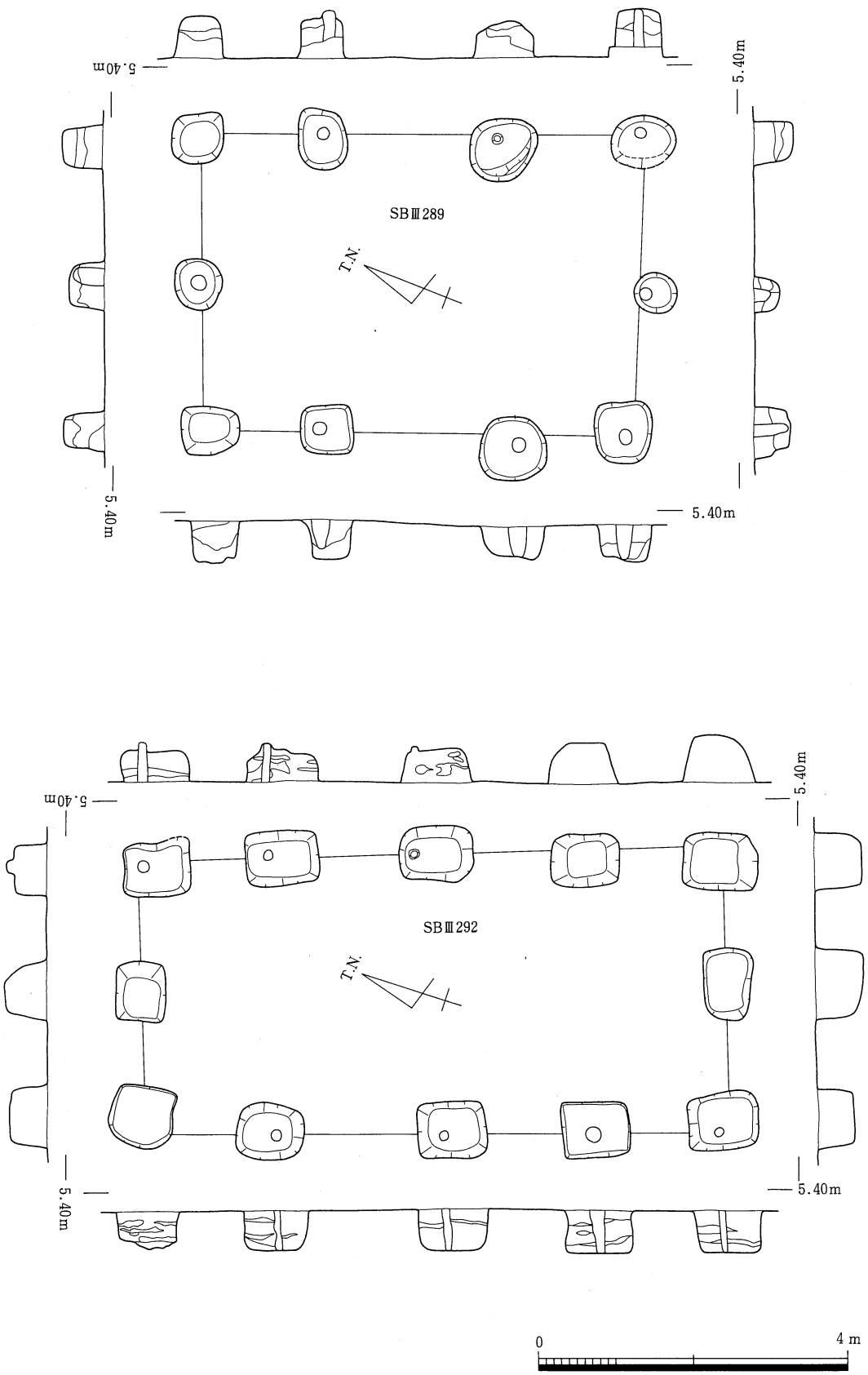
1. 淡褐色砂質土混じり灰色砂質土（ベースを少量含む）
2. 1に類似（ベースを多量に含む）
3. 明灰色砂質土（ベースブロックを含む）
4. 3に類似（ベースブロックを多量に含む）
5. 3に類似（ベースを粒状に含む）
6. 3に類似
7. 明灰色粘質土（ベースを少量含む）
8. 淡褐色砂質土混じり明灰色砂質土
9. 灰色砂質土（ベースを少量含む）
10. 9に類似
11. ベース混じり明灰色砂質土
12. ベース混じり淡黄褐色砂質土
13. 明黄褐色粘質土
14. 明黄褐色砂質土
15. 淡黄褐色砂質土
16. 15に類似
17. 淡茶褐色砂質土混じり明黄褐色砂質土
18. 淡茶褐色砂質土混じり明灰色砂質土
19. 淡黒茶褐色砂質土
20. 淡茶褐色砂質土（ベースを多量に含む）

第290図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(72)

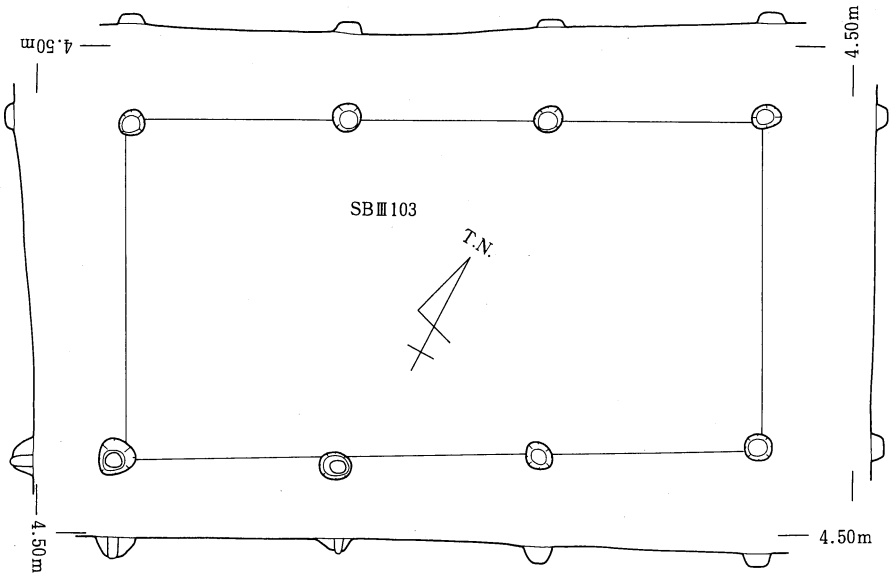


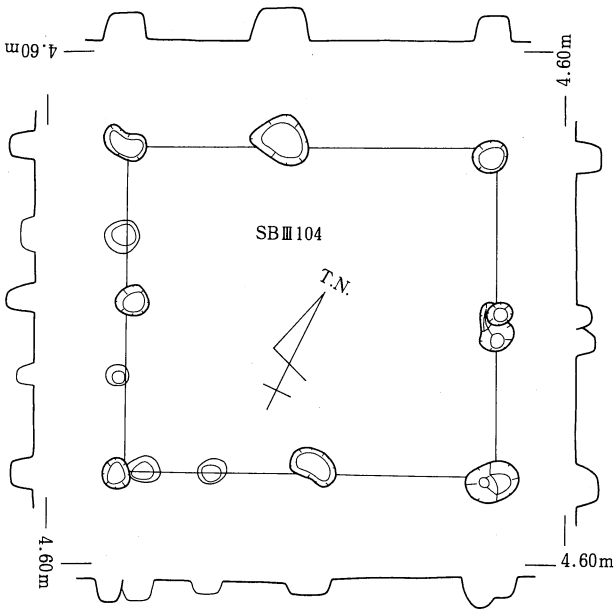
1. 1㎝程の明灰黄褐色粘質土混じり灰色粘質土
2. 1～4㎝程の明灰黄褐色粘質土混じり灰色弱粘質土
3. 明灰黄褐色弱粘質土
4. 2～3㎝程の淡黄褐色粘質土混じり灰色粘質土
5. 暗灰色粘質土混じり明灰黄褐色粘質土
6. 暗褐灰色粘土
7. 1～2㎝程の明灰黄褐色粘質土混じり暗褐灰色粘質土
8. 褐色Mn粒混じり青灰黄橙色粘質土
9. 黄褐色弱粘質土混じり褐灰色弱粘質土
10. 9に類似（黄褐色土ブロックが多い）
11. 乳褐色弱粘質土混じり灰橙褐色弱粘質土
12. 暗灰色粘質土混じり黄橙褐色粘質土
13. 黄褐色粘質土混じり暗灰色粘質土
14. 黄橙灰色粘質土
15. 褐灰色粘質土
16. 灰色弱粘質土混じり黄褐色弱粘質土
17. 灰色粘質土
18. 灰黄褐色粘質土
19. 18に類似（黄褐色が強い）
20. 灰黄褐色粘質土混じり灰色粘質土
21. 黄灰色粘質土混じり乳灰色粘質土（褐色Mn粒多い）
22. 20に類似（黄褐色土ブロックが大きく灰色が強い）
23. 明灰黄橙褐色粘質土

第291図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(73)



第292図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(74)





第293図　第Ⅲ期掘立柱建物 平・断面図(75)

4.柵

ＳＡⅢ01（第294図）

Ｈ・Ｉ29区で検出した柵列である。第１微高地の北端部で検出した。ＳＢⅢ09等と概ね平行する方位を呈する。６柱穴からなり，５間分を検出した。西部の３間は，重複するＳＡⅢ02とほぼ等しくやや狭い柱間を持ち，東部の２間分は，やや広い柱間を示す。検出長11.8m，柱間は1.9～2.8m，主軸方位はN79°Eを示す。柱穴は円形を呈し，径0.4m，深さ約0.14mを測る。（藤好）

ＳＡⅢ02（第294図）

Ｈ・Ｉ29区で検出した柵列である。ＳＡⅢ01の西部と重複し，柱穴を切ることから，ＳＡⅢ01の建て替えによるものの可能性もある。４柱穴からなり，３間分を検出した。検出長6.2m，柱間は1.7～2.6m，主軸方位はN80°Eを示す。柱穴は円形を呈し，径0.3m，深さ約0.16mを測る。（藤好）

ＳＡⅢ04（第294図）

Ｉ25区で検出した柵列である。ＳＡⅢ05を切る。東側のＳＢⅢ21の側柱列とほぼ共通した配列を有し，方位も一致することから同時併存のものである可能性が高い。また調査区の西端に位置することから，調査区外に広がる建物の一部である可能性も全くは否定できない。ただＳＨⅡ12西半部上位に，古墳後期以降の包含層が広がることからすれば，第１微高地の西端部に本遺構が位置する可能性もあり，柵列の可能性を考えた。５柱穴からなり，３間分を検出した。検出長7.9m，柱間は1.6～2.5m，主軸方位はN20°Wを示す。柱穴は円形を呈し，径0.54m，深さ約0.25mを測る。（藤好）

ＳＡⅢ05（第294図）

Ｉ25区で検出した柵列で，ＳＡⅢ04と概ね一致し，建て替えによるものであると考えられる。５柱穴からなり，４間分を検出した。検出長7.4m，柱間は1.7～1.9m，主軸方位はN20°Wを示す。柱穴は円形を呈し，径0.7m，深さ約0.50mを測る。（藤好）

ＳＡⅢ06（第294図）

G22区で検出した柵列である。ＳＢⅢ31の東側柱列の延長上にあり，付帯施設であると考えられる。２柱穴からなり，１間分を検出した。検出長1.4m，主軸方位はN34°Wを示す。柱穴は円形を呈し，径0.45m，深さ0.02～0.12mを測る。（藤好）

ＳＡⅢ07（第294図）

Ｊ21区ＳＢⅢ34の西側で検出された柵列である。４間を検出したが，北第２柱穴は溝ＳＤⅢ14に切られている。検出長6.4m，柱間は1.5～3.3m，主軸方位はN16°Wを示す。柱穴は円形を呈し，径約0.4m，深さ約0.08mを測る。この柵列は，主軸方位及び配置状の特徴よりＳＢⅢ34に伴うものと考えられる。出土遺物からは詳細な時期は判断できないが，ＳＢⅢ34とほぼ同一時期とみられ８世紀前半前後と考えられる。（西村）

ＳＡⅢ10（第294図）

G21区で検出した柵列で第１低地帯にかかる斜面に面した位置にある。ＳＢⅢ49の主軸と方位がほぼ一致し，付帯する柵列の可能性が考えられる。５柱穴からなり，４間分を検出した。検出長5.3m，柱間は1.0～1.7m，主軸方位はN22°Wを示す。柱穴は円形を呈し，北部の３穴は小型のものである。径0.14m，深さ0.07mを測る。（藤好）

ＳＡⅢ11（第294図　図版106）

Ｅ16区で検出された柵列である。４間を検出した。検出長5.7m，柱間は1.3～1.6m，主方位はN

71°Eを示す。柱穴は不整円形・不整方形を呈し一様ではない。径約0.3m，深さ約0.10mを測る。出土遺物より詳細な時期の判断は出来ないが，主軸方位より西に隣接するＳＢⅢ69の主軸方位に類似し，概ね同一時期と考えられる。（西村）

ＳＡⅢ12（第444図）

Ｆ15・16区ＳＢⅢ85の東側で検出された柵列である。３間を検出した。検出長6.9m，柱間は2.0～2.6m，主軸方位はN17°Wを示す。柱穴は円形を呈し，径0.3m，深さ約0.04mを測る。

出土遺物中で図化出来るもの１点を抽出した。（第444図１）は土師器の蛸壺である。この柵列の詳細な時期は解らないが，周辺の遺構の中には，８世紀の蛸壺を焼いたＳＫⅢ14が検出されており，この遺構との関係でこの柵列が８世紀代に属する可能性がある。（西村）

ＳＡⅢ13（第295図）

Ｆ15・16区ＳＢⅢ85の東側で検出された柵列である。９間を検出したが，北第９間の柱間は他の柱間に比べかなり短く，北第10柱穴はこの柵列に含まれない可能性がある。検出長12.0m，柱間は0.8～1.6mを測るが，先に触れたが北第９間の柱間は短く0.6mを測り，主軸方位はN24°Wを示す。柱穴は楕円形を呈し，径約0.3m，深さ約0.04mを測る。この柵列は出土遺物が少ないため，詳細な時期は不明である。（西村）

ＳＡⅢ14（第444図）

Ｆ15・16区で検出された柵列である。３間を検出した。検出長6.9m，柱間は2.2～2.4m，主軸方位はN25°Wを示す。柱穴は円形を呈し，径約0.5m，深さ約0.17mを測る。

出土遺物中で図化出来るもの１点を抽出した。（第444図２）は須恵器杯身底部である。高台部は，短く断面四角形状を呈する。この柵列は出土遺物が少なく，詳細な時期は不明である。（西村）

ＳＡⅢ15（第295図）

Ｆ15区で，ＳＡⅢ16の北端と直交して接する様に検出された柵列である。３間を検出した。検出長5.9m，柱間は1.9～2.0m，主軸方位はN67°Eを示す。柱穴は円形を呈し，径約0.2m，深さ約0.09mを測る。

この柵列の時期は，出土遺物より詳細な時期の判断がつかないが主軸方位がＳＡⅢ14と類似し，この柵列に類似した時期と考えられる。（西村）

ＳＡⅢ16（第295・444図）

Ｆ15区で，ＳＡⅢ15の東端と直交して接する様に検出された柵列である。５間を検出したが，検出長11.5m，柱間は1.5～3.4m，主軸方位はN26°Wを示す。柱穴は円形あるいは楕円形状を呈し，径約0.5m，深さ約0.19mを測る。

出土遺物中で図化出来るもの３点を抽出した。（第444図３・４）は土師器の椀である。（５）は瓦器椀の底部である。高台部は短く，端部は平坦に仕上げている。出土遺物よりこの柵列の時期は13世紀後半前後であろう。（西村）

ＳＡⅢ17（第242図）

Ｆ15区で，ＳＢⅢ90の西側柱より北え延長する形で検出された。西側柱北第１柱穴を含み２間を検出した。検出長4.4m，柱間は約2.2m，主軸方位はN27°Wを示す。柱穴は円形を呈し，径約0.4m，深さ約0.11mを測る。

なお，この柵列はＳＢⅢ90の付属施設と考えられ，時期的にも建物と同時期であろう。この柵列は，

建物に伴う塀のようなものかもしれない。（西村）

ＳＡⅢ18（第295・444図）

Ｆ15区ＳＡⅢ17の東側，ＳＢⅢ90と切り合う形で検出された柵列である。４間を検出した。検出長8.7m，柱間は不揃いで1.8～2.5m，主軸方位はＮ27°Ｗを示す。柱穴は円形を呈し，径約0.5m，深さ約0.15mを測る。

出土遺物中で図化出来るもの４点を抽出した。（第444図６）は土師器椀の口縁部である。（７～９）は瓦器椀の口縁部である。端部はいずれも丸く仕上げ，（８）の内面にはミガキが認められる。出土遺物よりこの柵列は，12・13世紀前後であろう。（西村）

ＳＡⅢ19（第295図）

Ｅ15区で検出した柵列で，ＳＢⅢ91と切り合い関係にある。方位等の共通性から，ＳＢⅢ92・93に付帯する柵列と考えられる。７柱穴からなり，６間分を検出した。検出長9.9m，柱間は1.3～2.0m，主軸方位はＮ31°Ｗを示す。柱穴は円形を呈し，径0.26m，深さ約0.10mを測る。（藤好）

ＳＡⅢ23（第444図）

Ｆ13・14区ＳＢⅢ100の東側で検出された柵列である。４間を検出した。検出長4.0m，柱間は0.9～1.2m，主軸方位はＮ30°Ｗを示す。柱穴は円形を呈し，径約0.3m，深さ約0.20mを測る。北第５柱穴には根石が検出された。

出土遺物中で図化出来るもの３点を抽出した。（第444図10）は土師器の小皿である。底部はヘラ切り後ナデを施し，平坦に仕上げる。口縁部は短く立ち上がる。（11・12）は底部を欠く瓦器椀である。体部は内湾し端部は丸く仕上げている。出土遺物よりこの柵列の時期は，13世紀前後であろう。（西村）

ＳＡⅢ27（第251図）

Ｅ10区で検出した柵列で，ＳＢⅢ123の北に位置し，付帯する柵列と考えられる。３柱穴からなり，２間分を検出した。検出長5.8m，柱間は2.7～3.1m，主軸方位はＮ46°Ｅを示す。柱穴は円形を呈し，径約0.32m，深さ約0.1mを測る。（藤好）

ＳＡⅢ28（第295図）

Ｅ９区で検出された柵列である。３間を検出した。検出長5.0m，柱間は不揃いで1.4～2.0m，主軸方位はＮ23°Ｗを示す。柱穴は円形を呈し，径約0.4m，深さ約0.27mを測る。出土遺物よりこの柵列の詳細な時期の判断が出来ないが，西側に隣接して存在するＳＢⅢ137と主軸方位が類似しこの建物の時期に近い時期が考えられ，７世紀前後に当るものと考えられる。（西村）

ＳＡⅢ29（第296図）

Ｆ９区ＳＢⅢ113・ＳＨⅢ40と切り合う形で検出された柵列である。北第３柱穴はＳＨⅢ40の壁溝を切り込んいる。５間を検出した。検出長9.4m，柱間は不揃いで1.3～2.7m，主軸方位はＮ16°Ｗを示す。柱穴は円形を呈し，径0.4m，深さ約0.19mを測る。出土遺物より詳細な時期の判断が付かないが，切り合いより少なくとも６世紀後葉以降である。（西村）

ＳＡⅢ31（第444図）

Ｆ８区ＳＨⅢ52・ＳＢⅢ24を切り込む形で検出された柵列である。４間を検出した。検出長7.0m，柱間は約1.6～1.9m，主軸方位はＮ65°Ｅを示す。柱穴は円形及び不整円形を呈し，径0.6m，深さ約0.17mを測る。

出土遺物中で図化出来るもの１点を抽出した。（第444図13）は口縁部を欠く土師器椀である。出土遺

物よりこの建物の時期は，中世以降であろう。（西村）

ＳＡⅢ33（第444図）

Ｄ８区で検出された柵列である。３間を検出したが，検出長4.3m，柱間は1.3～1.6m，主軸方位はＮ6°Ｗを示す。柱穴は円形及び隅丸方形を呈し，径約0.5m，深さ約0.20mを測る。

出土遺物中で図化出来るもの１点を抽出した。（第444図14）は鈕を欠く須恵器の杯蓋である。天井部は平坦で体部よりなだらかに口縁部に続く。出土遺物よりこの柵列の時期は，８世紀前後である。

（西村）

ＳＡⅢ34（第280・444図）

Ｄ・Ｅ８区ＳＢⅢ259の北側で検出された柵列である。ＳＢⅢ259北側柱列に概ね主軸を合わせ５間を検出した。検出長7.5m，柱間は不揃いで0.8～1.8m，主軸方位はＮ71°Ｅを示す。柱穴は円形及び不整円形を呈し，径約0.6m，深さ約0.16mを測る。

出土遺物中で図化出来るもの４点を抽出した。（第444図15）は土師器杯である。体部は内湾し口縁に続く，口縁部は尖り気味に丸く仕上げている。体部外面にミガキ，内面に放射暗紋が認められる。（16）は土師器皿の口縁部である。体部は内湾し口縁部に続く。口縁部は丸く仕上げている。外面にミガキ，内面に放射暗紋が認められる。（17）は土師器高杯の脚部である。（18）は底部を欠く須恵器の杯である。出土遺物よりこの柵列は，概ね７世紀以降であろう。（西村）

ＳＡⅢ35（第444図）

Ｄ７区で検出された柵列である。３間を検出した。検出長6.0m，柱間は1.9～2.2m，主軸方位はＮ63°Ｅを示す。柱穴は円形を呈し，径0.5m，深さ約0.29mを測る。

出土遺物中で図化出来るもの４点を抽出した。（第444図19）は土師器杯である。（20）は黒色土器椀の口縁部である。端部は丸く仕上げ，内外面にはミガキが顕著である。（21）は口縁部を欠く須恵器の杯である。底部は平坦で，体部は直線状に外上方に延びる。内面には火襷きが認められる。出土遺物よりこの柵列は，概ね10・11世紀前後であろう。（西村）

ＳＡⅢ36（第296・444図）

Ｄ７区で検出した柵列で，第４微高地の東端部の斜面に面した位置にある。４柱穴からなり，３間分を検出した。検出長7.0m，柱間は2.1～2.7m，主軸方位はＮ24°Ｗを示す。柱穴は円形を呈し，径0.55m，深さ約0.15mを測る。柱穴から，須恵器の皿，土師器杯等が出土した。（第444図22～25）時期は出土遺物より，11世紀前後に当る。（藤好）

ＳＡⅢ37（第444図）

Ｆ７区で検出した柵列である。４柱穴からなり，３間分を検出した。検出長7.5m，柱間は2.0～2.8m，主軸方位はＮ66°Ｅを示す。柱穴は円形を呈し，径0.42m・深さ約0.29mを測る。（藤好）

ＳＡⅢ39

Ｈ３～５区で検出した柵列で，ＳＢⅢ280を切る。第４微高地の南部で，平安期以降の条里坪界線上にのる溝ＳＤⅢ75の東側を，平行して延びる柵列である。33間分を検出した。検出長34.0m，柱間は平均して0.6m程で，主軸方位はＮ32°Ｗを示す。柱穴は円形を基本形として，重複もしくは抜き取りのため中央部が狭くなった長円形を呈するものが多い。遺物の出土は見られないが，ＳＤⅢ75と同時併存であることは間違いなく，建物ではＳＢⅢ281～283等と伴うと考えられる。径0.1～0.4m，深さ約0.1mを測る。（藤好）

ＳＡⅢ41（第444図）

Ｋ７・８区ＳＢⅢ190の西側柱より北へ延長する形で検出された柵列である。ＳＢⅢ190の西側柱列北第１柱穴を含めて２間を検出した。検出長6.2m，柱間は2.9～3.3m，主軸方位はＮ31°Ｗを示す。柱穴は楕円形及び不整円形を呈し，径約0.8m，深さ約0.22mを測る。なお，この柵列の配置状の特徴よりＳＢⅢ190の付属施設と考えられる。

出土遺物中で図化出来るもの１点を抽出した。（第444図29）瓦質の椀であり，西村遺跡出土のものと同質のものである。出土遺物よりこの柵列の詳細な時期は解らないが，建物の時期と同時期と考え概ね12世紀以降であろう。（西村）

ＳＡⅢ42（第444図）

Ｊ８区で検出された柵列である。３間を検出したが，検出長5.5m，柱間は1.6～2.2m，主軸方位はＮ27°Ｗを示す。柱穴は円形及び楕円形を呈し，径約0.5m，深さ約0.02mを測る。

出土遺物中で図化出来るもの１点を抽出した。（第444図30）は底部を欠く黒色土器椀である。体部は内湾し口縁部に至る。内外面にはミガキが顕著である。出土遺物よりこの柵列の時期は，概ね11世紀前後に当るであろう。（西村）

ＳＡⅢ46（第444図）

Ｉ７区ＳＢⅢ194の東側で検出された柵列である。３間を検出した。検出長7.1m，柱間は1.9～2.8m，主軸方位はＮ23°Ｗを示す。柱穴は方形を呈し，径約0.3m，深さ約0.09mを測る。

出土遺物中で図化出来るもの１点を抽出した。（第444図31）は内黒の黒色土器椀の底部である。高台部は尖り気味に延び，内面にはミガキが顕著である。出土遺物よりこの柵列の時期は，概ね12世紀前後に当るであろう。（西村）

ＳＡⅢ48（第296図）

Ｉ６区ＳＢⅢ201の西側で検出された柵列である。３間を検出した。検出長5.8m，柱間は1.8～2.0m，主軸方位はＮ25°Ｗを示す。柱穴は円形及び不整円を呈し，径約0.5m，深さ約0.10mを測る。

図化できる遺物はないが，出土遺物よりこの柵列の時期は，10・11世紀前後であろう。（西村）

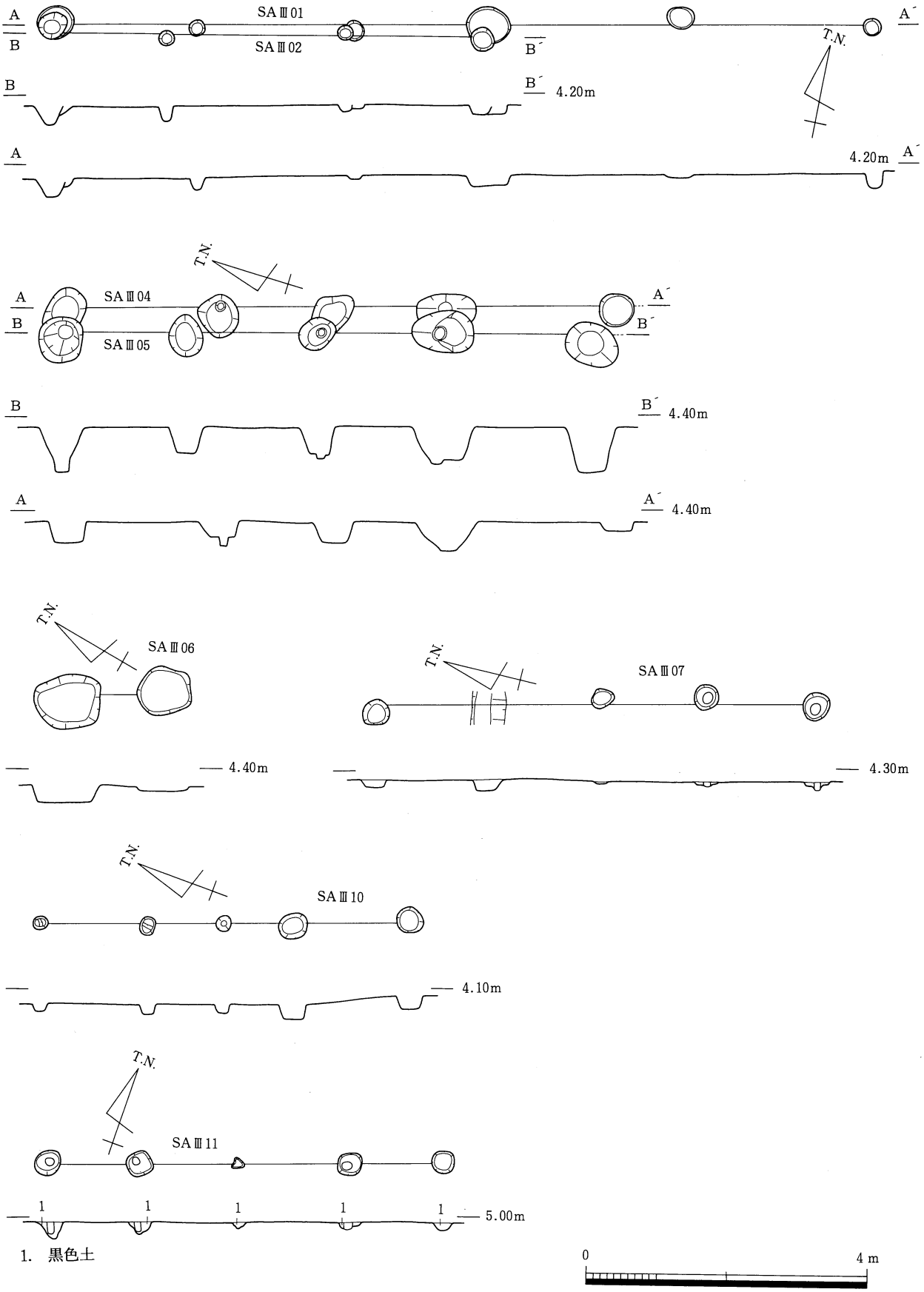
ＳＡⅢ50（第297・444･445図　図版148・198　ＳＡ8701）

Ｉ３・４区ＳＢⅢ290・291の西側で検出されたＳＢⅢ289・290・291等の建物に伴う，規模の大きな柵列である。13間を検出した。この柵列の西側には柵列に伴う，雨落溝ＳＤⅢ166を検出した。また北第８柱穴はＳＢⅢ288の柱穴を切っている。そのための柵列がＳＢⅢ288より後出することが理解できる。

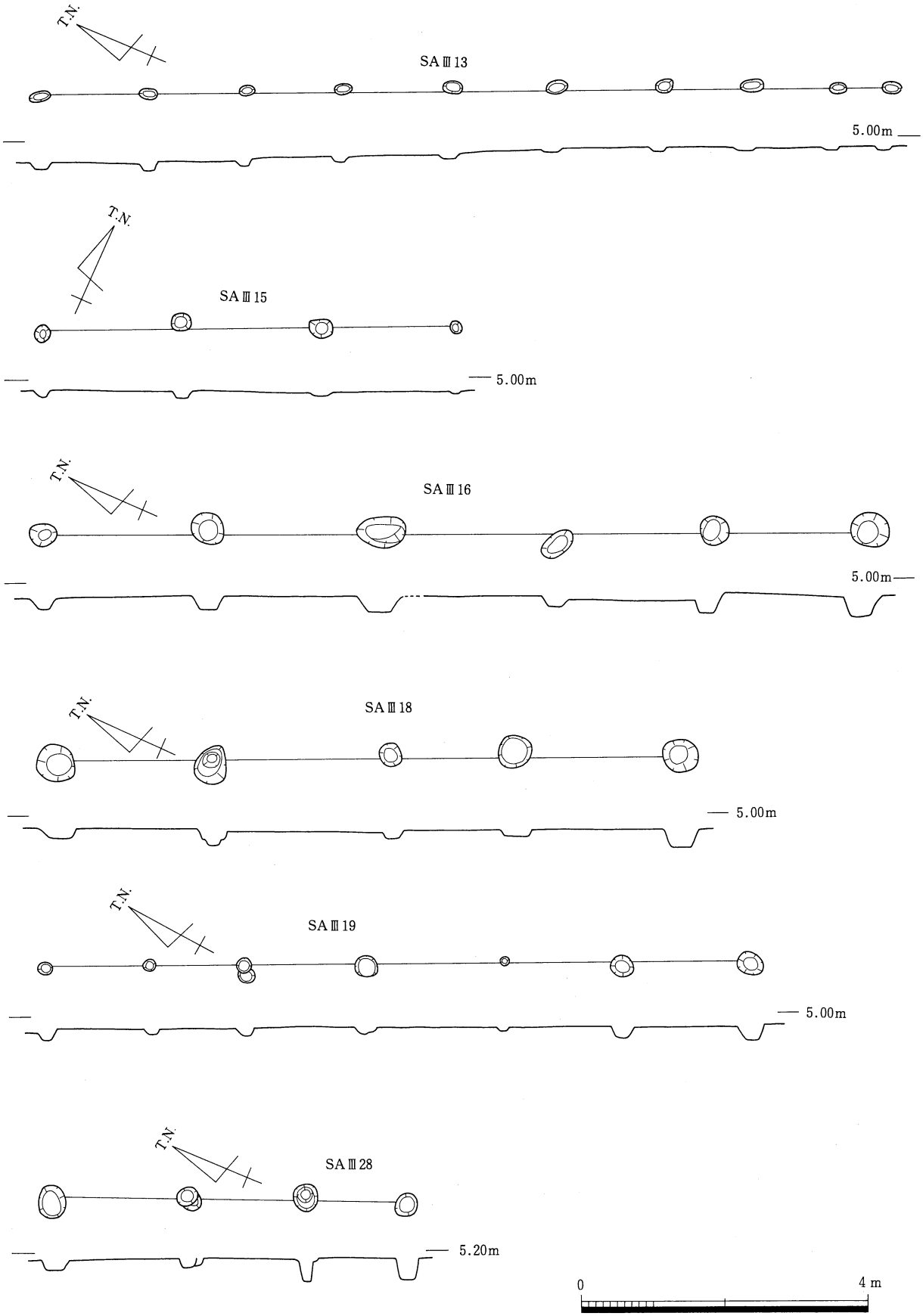
検出長31.3m，柱間は2.3～2.6m，主軸方位はＮ18°Ｗを示す。柱穴は隅丸方形を呈し，径平均0.7m・深平均0.44mを測る。柱痕は北第12柱穴を除く全ての柱穴で確認された。埋土は灰色砂質土系である。

出土遺物中で図化出来るもの３点を抽出した。（第444図32，第445図１）は土師器甕である。（32）はＳＡⅢ50より出土した土師器把手付の甕である。体部中央部に把手が付き，口縁部は外上方に延びる。（第445図２）は土師器皿である。底部は比較的歪で，体部は内湾して口縁部に至る。口縁端部は尖り気味に丸く仕上げている。内外面ともにヘラミガキが顕著である。（３）は天井部を欠く６世紀末ないし７世紀初頭の須恵器坏蓋である。

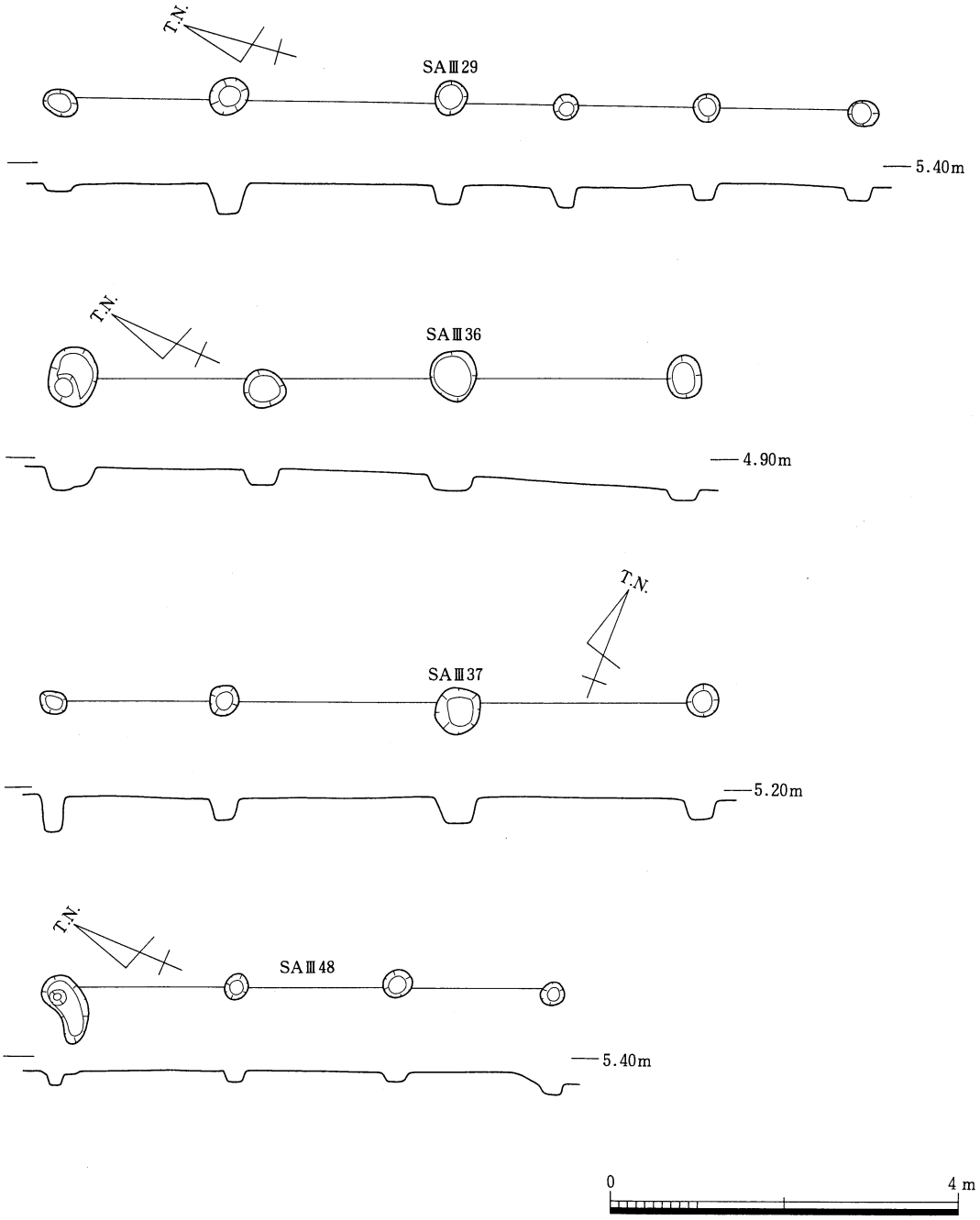
ＳＡⅢ50はＳＢⅢ290・291と主軸方位を合わせ，また，南に向っての延長線は，ＳＢⅢ293の妻柱列の軸線方向と符合する。そのためこれらの建物とＳＡⅢ50は同時併存の可能性が高く，概ね７世紀初頭前後の時期が考えられる。（西村）



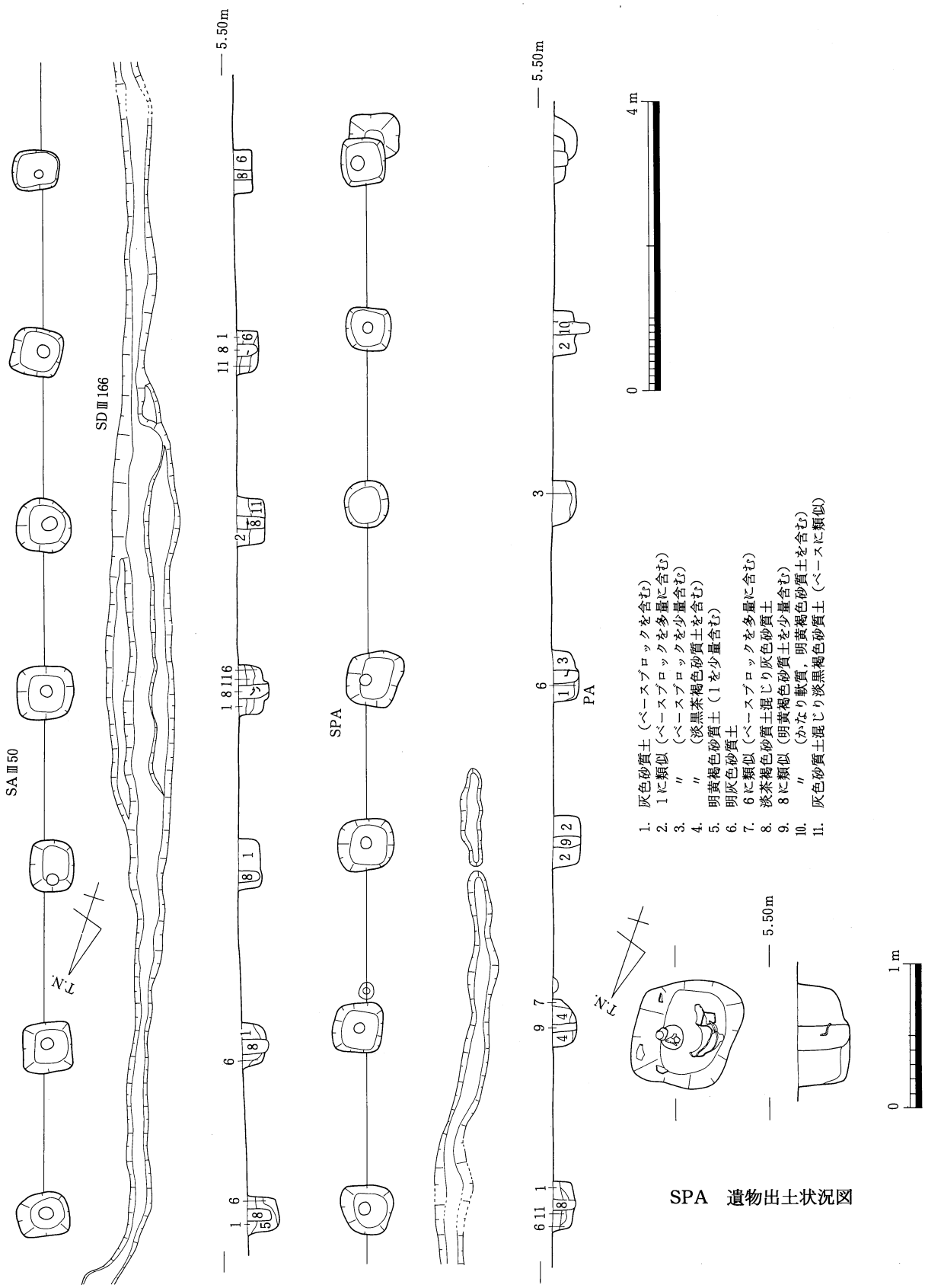
第294図　第Ⅲ期柵列 平・断面図(1)



第295図　第Ⅲ期柵列 平・断面図(2)



第296図　第Ⅲ期柵列 平・断面図(3)



SPA　遺物出土状況図

第297図　第Ⅲ期柵列 平・断面図(4)

ＳＡⅢ51（第291・445図）

Ｈ２区ＳＢⅢ293の南側柱列より東へ延長する形で検出された柵列である。ＳＢⅢ293の南側柱列東第１柱穴を含めて４間を検出した。検出長8.0m，柱間は1.6～2.2m，主軸方位はＮ67°Ｅを示す。柱穴形態は東第１・２柱穴と東第３・４柱穴とで形態・規模が異なる。東第１・２柱穴の形態及び規模はＳＢⅢ293の柱穴に類似し隅丸方形を呈し，径1.1m，深さ約0.59mを測る。東第３・４柱穴は小形の円形を呈し，径0.5m・深さ約0.23mを測る。埋土は灰褐色系の粘質土である。この柵列は，建物の付属施設であるが，柱穴の特徴より一概に柵列あるいは塀とするには躊躇する。そのため，具体的にどのような形状のものかは，今後の検討課題として残される。

出土遺物中で図化出来るもの１点を抽出した。（第445図４）は底部を欠く土師器の皿である。体部は内湾し口縁部に至る。口縁端部はわずかに外上方に捻り上げ，尖り気味に仕上げている。この柵列は，建物と同時期と考え，７世紀初頭前後に当るものと考えられる。（西村）

5.ピット

ＳＰⅢ01（第415・445図）

Ｆ10区で検出された柱穴である。周囲には掘立柱建物が隣接しＳＢⅢ132の棟持柱により切り込まれている。平面形は楕円形状を呈し，径約0.7m，深さ0.25mを測る。

ＳＰⅢ01の出土遺物中１点を抽出した。（第445図５）は８世紀後葉の須恵器杯身である。高台部は屈曲点の側に短く付き，断面四角形状である。体部は外上方に直線状に延びる。（西村）

ＳＰⅢ02（第445図）

Ｆ10区で検出された柱穴である。周囲には掘立柱建物が隣接しこのピットは，ＳＢⅢ132の柱穴を切り込んでいる。平面形は円形を呈し，径約0.5m，深さ0.32mを測る。埋土は灰褐色砂質土である。

ＳＰⅢ02の出土遺物中１点を抽出した。（第445図６）は８世紀後半の須恵器の皿である。底部はヘラ切りで平坦に仕上げ，体部は外上方に開き気味に短く延びる。（西村）

ＳＰⅢ03（第445図）

Ｅ10区で検出された柱穴である。周囲には掘立柱建物が隣接しこのピットは，ＳＢⅢ137と切り合いを持つ。平面形は円形を想定でき，径約0.6mを測る。埋土は灰褐色砂である。

ＳＰⅢ03の出土遺物中１点を抽出した。（第445図７）は底部を欠く６・７世紀代の土師器の土鍋である。体部は丸味を持ち，口縁部は外湾気味に開き端部は平坦に仕上げ，上下に肥厚する。内外面にハケが認められる。（西村）

ＳＰⅢ04（第415・445図）

Ｆ９区で検出された柱穴である。周囲には掘立柱建物が隣接しこのピットは，ＳｋⅢ27と切り合いを持つ。平面形は円形を呈し，径約0.6m，深さ0.16mを測る。

ＳＰⅢ04の出土遺物中２点を抽出した。（第445図８・９）は底部を欠く７世紀代の土師器皿である。体部は丸味を持ち，口縁端部に続く。外面にはヘラミガキが認められ，（９）の内面には放射暗紋が確認できた。（西村）

ＳＰⅢ05（第415・445図）

Ｆ８区で検出した。竪穴住居ＳＨⅢ48と重複する。平面形楕円形で約0.8×0.4mを測り，深さ0.1mで柱穴と見るには躊躇する程度の掘り込みである。ただし本地点は竪穴住居その他も著しい削平を受けて

残りが悪く，本遺構も同様に激しく削られた柱穴残欠の可能性は残る。土師器皿２，同杯１を出土した。
（大久保）

ＳＰⅢ06（第445図）

Ｉ８区で検出された柱穴である。平面形は円形を呈し，径約0.4m，深さ0.14mを測る。埋土は黄茶褐色土である。

ＳＰⅢ06の出土遺物中１点を抽出した。（第445図13）は11・12世紀前後の土師質の羽釜である。底部は丸底で，わずかに内湾し口縁端部に至る。鍔は口縁端部よりわずか下方に付く。外面には荒いハケ，内面には指ナデ及び板ナデを施している。（西村）

ＳＰⅢ07（第445図）

H7区で検出した。堀立柱建物ＳＢⅢ204内に位置し，その東列北２穴の横に接してこれとほぼ同規模を持つ。平面形は円形で径0.3m，深さ0.1mを測る小規模な柱穴である。完形の須恵器杯１を出土した。
（大久保）

ＳＰⅢ08（第445図）

Ｇ８区で検出した。堀立柱建物ＳＢⅢ221西列北２穴に接する。平面形楕円形で約0.6×0.４mを測る。平高台を持つ土師質杯１を出土した。（大久保）

ＳＰⅢ09（第445図）

Ｆ７区で検出した。平面形不整三角形を呈し長径0.9m，短径0.6m，深さ0.2mを測る。柱穴とするにはやや躊躇する程度の規模を持つ。土師器杯１を出土した。（大久保）

ＳＰⅢ10（第446図）

Ｆ８区で検出した。溝ＳＤⅢ95のすぐ南側に位置し，別の柱穴と切り合う。平面形円形で径0.4m程の比較的小規模なものである。ほぼ完形の土師質平高台杯１，同杯１その外を出土した。（大久保）

ＳＰⅢ11（第446図）

Ｆ７区で検出した。平面形円形を呈し径0.3mの小規模な柱穴である。緑釉椀小片が出土した。
（大久保）

ＳＰⅢ12（第446図）

Ｅ７区で検出された柱穴である。周囲には掘立柱建物が隣接し，このピットはＳＢⅢ262を切り込んでいる。平面形は円形を呈し，径約0.3m，深さ0.29mを測る。

ＳＰⅢ12の出土遺物中２点を抽出した。（第446図６・７）は８世紀後半の須恵器皿である。底部はヘラ切りで平坦である。体部は外上方に延びる。（西村）

ＳＰⅢ13（第446図）

Ｄ８区で検出された柱穴である。西側には隣接してＳＢⅢ259の東妻列の棟持柱がある。平面形は円形を呈し，径約0.3m，深さ0.14mを測る。埋土は黒灰褐色粘質土である。

ＳＰⅢ13の出土遺物中１点を抽出した。（第446図８）は８世紀前半の土師器皿である。体部は底部より丸味を持って続き口縁端部は玉縁状に肥厚する。外面下半部にヘラミガキ，内面には放射暗紋を施している。（西村）

ＳＰⅢ14（第446図）

Ｄ７区で検出された柱穴である。ＳＢⅢ260と切り合い関係にある。平面形は楕円形状を呈し，径約0.6m，深さ0.28mを測る。埋土は暗灰色砂質土である。

ＳＰⅢ14の出土遺物中１点を抽出した。（第446図９）は８世紀後半の須恵器皿である。底部はヘラ切りを施し平坦に仕上げる。体部は外反し端部は尖り気味に丸く仕上げる。（西村）

ＳＰⅢ15（第446図）

Ｊ６区で検出された柱穴である。ＳＢⅢ195と切り合い関係にある。平面形は円形を呈し，径約0.5mを測る。埋土は暗茶灰色砂質土である。

ＳＰⅢ15の出土遺物中１点を抽出した。（第446図10）は11世紀前後の口縁部を欠く土師質の杯である。底部はヘラ切り後ナデを施し平坦に仕上げている。体部は直線状に延びる。（西村）

ＳＰⅢ16（第446図）

Ｉ７区で検出された柱穴である。ＳＢⅢ197と切り合い関係にある。平面形は不整円形を呈し，径約0.4m，深さ0.17mを測る。埋土は茶褐色土である。

ＳＰⅢ16の出土遺物中６点を抽出した。いずれも中世の時期に当る資料である。（第446図11・12）は土師質の杯である。（12）の底部は平坦で，底部より体部に掛けては丸味を持て口縁部に至る。底部外面はヘラ切りを施す。（第446図13～16）は土師質の小皿である。底部はヘラ切りを施し平坦に仕上げる。体部は短く直線気味に延びる。（西村）

ＳＰⅢ17（第446図）

Ｉ７区で検出された柱穴である。ＳＢⅢ197と切り合い関係にある。平面形は円形を呈し，径約0.3m，深さ0.10mを測る。埋土は黄灰褐色土である。

ＳＰⅢ17の出土遺物中１点を抽出した。（第446図17）は中世の土師質の小皿である。内・外面に指頭痕を顕著に残す。（西村）

ＳＰⅢ18（第446図）

Ｇ７区で検出した。ＳＤⅢ136のすぐ南側に位置する。平面形楕円形で約0.6×0.4mを測り，別の柱穴と一部で切り合う。ほぼ完形の土師質小皿３，同杯１がまとまって出土した。（大久保）

ＳＰⅢ19（第446図）

Ｇ７区で検出した。平面形円形を呈し径0.3mの小規模な柱穴である。完形の黒色土器椀１を出土した。（大久保）

ＳＰⅢ20（第446図）

Ｆ７区で検出した，柱穴径約0.4m，深さ約0.08m前後を測る円形を呈するピットである。内部から土師質杯３点，皿２点が出土した。（藤好）

ＳＰⅢ21（第446・447図）

Ｇ７区で検出した。ＳＤⅢ135と切り合い関係にある。平面形円形を呈し径0.4mの比較的小規模な柱穴であるが，深さ0.3mを残す。完形ないしはそれに近い土師質杯５を始め鍔付甕片などまとまった資料を出土した。建物廃絶時の何らかの祭祀行為の可能性を示すと共に，該期の土器組成の一端を知りうる良好な資料である。（大久保）

ＳＰⅢ22（第447図）

Ｆ７区で検出した。平面形はほぼ円形を呈し径0.3mの小規模な柱穴である。完形の土師質椀１点を出土した。（藤好）

ＳＰⅢ23（第447図）

Ｆ６区で検出した，柱穴径約0.43m，深さ約0.26m前後を測る円形を呈するピットである。内部から

土師質土錘１点が出土した。（藤好）

ＳＰⅢ24（第447図）

Ｆ７区で検出した，柱穴径約0.22m，深さ約0.11m前後を測る円形を呈するピットである。内部から土師質皿１点が出土した。（藤好）

ＳＰⅢ25（第447図）

Ｆ７区で検出した，柱穴径約0.35m，深さ約0.03m前後を測る円形を呈するピットである。内部から土師質杯１点，瓦質の椀１点が出土した。（藤好）

ＳＰⅢ26（第447図）

Ｆ７区で検出した。平面形楕円形で約0.7×0.3mを測り溝ＳＤⅢ149に約半分切られる。完形の土師質杯１点を出土した。（藤好）

ＳＰⅢ27（第447図）

Ｆ７区で検出した，柱穴径約0.55m，深さ約0.18m前後を測る不整方形を呈するピットである。内部から土師質杯１点が出土した。（藤好）

ＳＰⅢ28（第447図）

Ｆ７区で検出した，柱穴径約0.48m，深さ約0.15m前後を測る円形を呈するピットである。内部から須恵器高杯１点が出土した。（藤好）

ＳＰⅢ29（第447図）

Ｄ７区で検出した，柱穴径約0.25m，深さ約0.18m前後を測る円形を呈するピットである。内部から須恵器皿１点が出土した。（藤好）

ＳＰⅢ30（第447図）

Ｄ７区で検出した，柱穴径約0.38m，深さ約0.09m前後を測る不整円形を呈するピットである。内部から土師質杯２点，須恵質杯１点が出土した。（藤好）

ＳＰⅢ31（第447図）

Ｉ５区で検出された柱穴である。平面形は円形を呈し，径約0.4m，深さ0.14mを測る。埋土は茶褐色土である。

ＳＰⅢ31の出土遺物中１点を抽出した。（第447図14）は中世の土師質の脚台付皿である。底部中央に穿孔が認められる。（西村）

ＳＰⅢ32（第447図）

Ｈ６区で検出した。平面形はほぼ円形を呈し径0.2mを測る小規模な柱穴である。ほぼ完形の土師質皿１点，同小皿１点を出土した。（大久保）

ＳＰⅢ33

Ｈ５区で検出した，柱穴径約0.45m，深さ約0.37m前後を測る楕円形を呈するピットである。（藤好）

ＳＰⅢ34（第447図）

Ｈ５区で検出した，柱穴径約0.20m，深さ約0.17m前後を測る円形を呈するピットである。内部から土師質小皿６点が出土した。（藤好）

ＳＰⅢ35（第447図）

Ｈ５区で検出した，柱穴径約0.35m，深さ約0.09m前後を測る円形を呈するピットである。内部から土師質杯１点が出土した。（藤好）

ＳＰⅢ36（第447図）

Ｇ６区で検出した，柱穴径約0.20m，深さ約0.30m前後を測る円形を呈するピットである。内部から土師質杯１点が出土した。（藤好）

ＳＰⅢ37（第447図）

Ｇ６区で検出した，柱穴径約0.80m，深さ約0.20m前後を測る不整楕円形を呈するピットである。内部から土師質杯１点が出土した。（藤好）

ＳＰⅢ38（第447図）

Ｇ６区で検出した，柱穴径約0.50mを測る円形を呈するピットである。内部から土師質小皿が出土した。（藤好）

ＳＰⅢ40（第447図）

Ｇ５区で検出した，柱穴径約0.20m，深さ約0.20m前後を測る円形を呈するピットである。内部から緑釉陶器皿１点が出土した。（藤好）

ＳＰⅢ41（第447図）

Ｇ５区で検出した，柱穴径約0.27m，深さ約0.37m前後を測る円形を呈するピットである。内部から瓦質甕１点が出土した。（藤好）

ＳＰⅢ42（第448図）

Ｇ５区で検出した，柱穴径約1.00m，深さ約0.41m前後を測る円形を呈するピットである。内部から瓦質椀１点が出土した。（藤好）

ＳＰⅢ43（第448図）

Ｇ６区で検出した，柱穴径約0.20m，深さ約0.17m前後を測る円形を呈するピットである。内部から土師質小皿１点が出土した。（藤好）

ＳＰⅢ44（第448図）

Ｇ６区で検出した，柱穴径約0.26m，深さ約0.13m前後を測る円形を呈するピットである。内部から土師質杯１点が出土した。（藤好）

ＳＰⅢ45（第448図）

Ｇ６区で検出した，柱穴径約0.24m，深さ約0.12m前後を測る円形を呈するピットである。内部から土師質杯１点が出土した。（藤好）

ＳＰⅢ46（第448図）

Ｇ６区で検出した，柱穴径約0.70m，深さ約0.31m前後を測る不整形な形態を呈するピットである。内部から土師質杯１点が出土した。（藤好）

ＳＰⅢ47（第448図）

Ｇ６区で検出した，柱穴径約0.38m，深さ約0.21m前後を測る楕円形を呈するピットである。内部から土師質小皿１点が出土した。（藤好）

ＳＰⅢ48（第448図）

Ｇ６区で検出した，柱穴径約0.24mを測る円形を呈するピットである。内部から土師質皿１点が出土した。（藤好）

ＳＰⅢ49（第448図）

Ｇ６区で検出した，柱穴径約0.26m，深さ約0.35m前後を測る円形を呈するピットである。内部から

土師質小皿１点が出土した。（藤好）

ＳＰⅢ50（第448図）

Ｇ６区で検出した，柱穴径約0.28mを測る円形を呈するピットである。内部から土師質杯１点，小皿２点が出土した。（藤好）

ＳＰⅢ51（第448図）

Ｇ６区で検出した，柱穴径約0.38mを測る円形を呈するピットである。内部から土師質小皿１点が出土した。（藤好）

ＳＰⅢ52（第448図）

Ｆ６区で検出した，柱穴径約0.30m，深さ約0.14m前後を測る楕円形を呈するピットである。内部から土師質杯１点が出土した。（藤好）

ＳＰⅢ53（第448図）

Ｆ６区で検出した，柱穴径約0.26m，深さ約0.29m前後を測る円形を呈するピットである。内部から土師質杯１点が出土した。（藤好）

ＳＰⅢ54（第448図）

Ｆ６区で検出した，柱穴径約0.46m，深さ約0.31m前後を測る楕円形を呈するピットである。内部から土師質杯３点が出土した。（藤好）

ＳＰⅢ55（第448図）

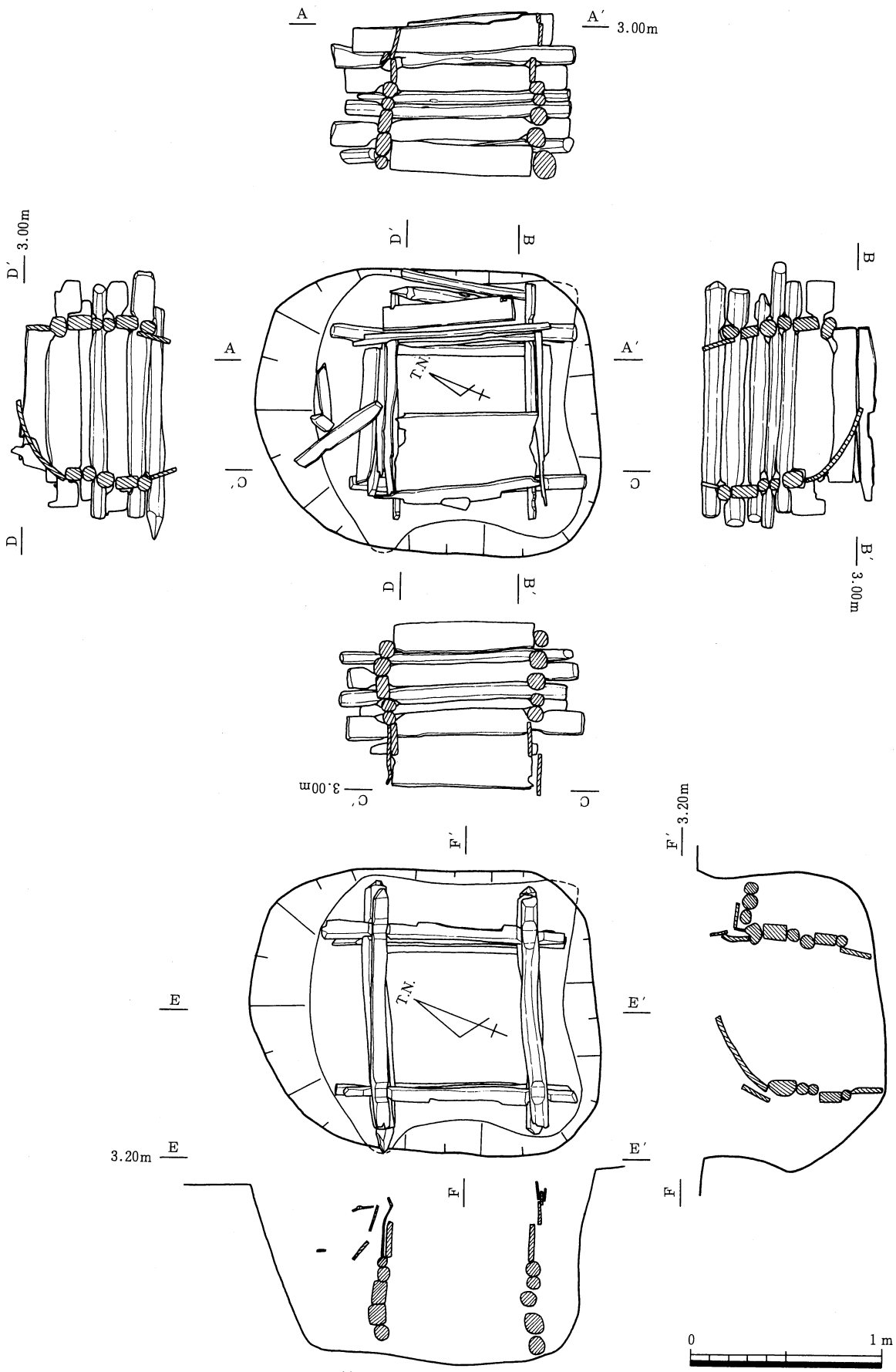
Ｆ６区で検出した，柱穴径約0.40mを測る楕円形を呈するピットである。内部から土師質小皿１点が出土した。（藤好）

6.井　戸

ＳＥⅢ01（第298・299・448図　図版114・115　ＳＥ8601）

第１低地帯流路３に面した第２微高地東端のＥ12区で検出した井戸である。本井戸は，微高地上面より一段下がった標高3.1m前後のテラス状の緩斜面部に設けられている。掘り方は隅丸方形を呈し南北約1.8m，東西約1.5m，検出面から底まで深さ１mほどを測る。井戸枠の内法は１辺0.65mほどの正方形を呈する。一段低い面に掘り込まれたためか，比較的浅い井戸である。井戸枠は正方形を呈するまさに井桁状に木材を組み上げている。枠に使用された部材は，丸材・角材・板材からなる。このうち板材は，東西面の下部内面に土留め用に枠の組み上げ後置かれたものと上部に組まれたものだけで，その間の枠本体には丸材と角材が使用された堅固な作りである。井戸枠は相対する枠面の部材を平行に設置し，その上位に直交する別の枠面の部材を積み上げ，これを交互に繰り返すことで構築される。そのため相対する枠面の部材は類似したものを使用し，校倉造り状に抉りを入れ組み上げられている。南北の面から上面の両端に抉りを入れた丸材を設置することで組み上げは始まる。北面の第１段の丸材は杭を，また東西の枠本体の第２段目には梯子材が転用されている。枠本体は北面が丸材３本・角材２本・板材２枚，南面が丸材４本・角材１本・板材２枚，東面は丸材４本・角材２本・板材１枚，西面は丸材３本・角材２本・板材１枚で構成されている。前述したがその後東西面の下部に板材が据えられている。

西面の上部には厚さ３cm，幅55cmの板材が斜めに倒れ込むように残っていたが，東面・北面にも類似した板材が存在した痕跡があり，４面とも厚手の板材が最上段に廻っていた可能性が高い。この幅55cmほどの板材からすると，井戸の掘り込み面より枠材は20cmほど少なくとも上位へ立ち上がっていたこと

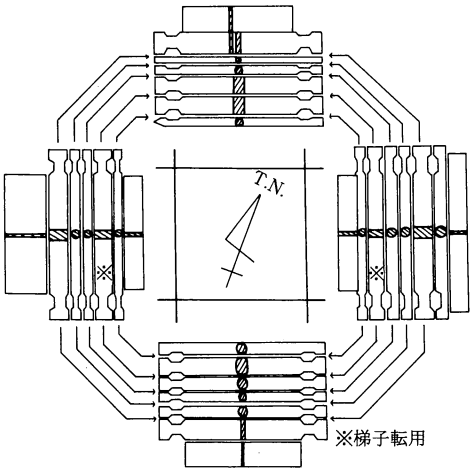


第298図　SEⅢ01 平・断面図

となる。また井戸の周囲には柱穴が確認されなかったことから覆屋等の施設はなかったか可能性が高い。また井戸内からは廃絶に伴う供献土器等は検出されなかった。　（藤好）

ＳＥⅢ02（第300・448図　図版202・203　ＳＥ8704）

Ｅ９区で検出された切り合った２基の井戸の内ＳＥⅢ03に切られている井戸である。約二分の一ＳＥⅢ03により破壊されており全体の状況は摑めなかったが，掘り方平面形は不整形な円形を呈し上面径は約2.3m，深さ1.4mを測る。切り込み面から約0.8m下には，三日月状のテラス面が検出された。また，テラス面からは上位は比較的緩やかだが，下位は傾斜が急になる。井戸枠は曲物からなり，底にＳＥⅢ03により約半分破壊されていたが，一段分残っていた。曲物の内径は約0.36mを測る。



第299図　SEⅢ01 枠組概念図

なお，ＳＥⅢ02は当初ＳＥⅢ03の裏込めとして掘り進めていたが，ＳＥⅢ03と切り合いが確認できたため，改めて井戸として調査したものである。そのためＳＥⅢ03の遺物中にはＳＥⅢ02の遺物が幾分含まれているものと見られる。

ＳＥⅢ02の出土遺物中５点を抽出した。（第448図21）は８世紀の土師器の皿である。底部は平底で，内側に凹む。体部は外上方に直線状に延び，口縁端部に至る。端部はわずかに肥厚し内側に稜を持つ。外面にはヘラミガキを顕著に施す。（第448図22）は土師器高杯の脚部である。外面にヘラケズリ，内面には指頭痕を施す。（第448図23）は土師器の甕口頸部である。頸部は緩く外反し口縁端部に至る。端部は平坦に仕上げる。（第448図24）は土師器羽釜の口縁部である。体部より直線状に口縁端部に至り，端部は平坦に仕上げている。鍔は口縁端部よ約２cm下方に付く。鍔は断面台形状を呈し短い。外面にハケ，内面に指頭痕とハケを施す。

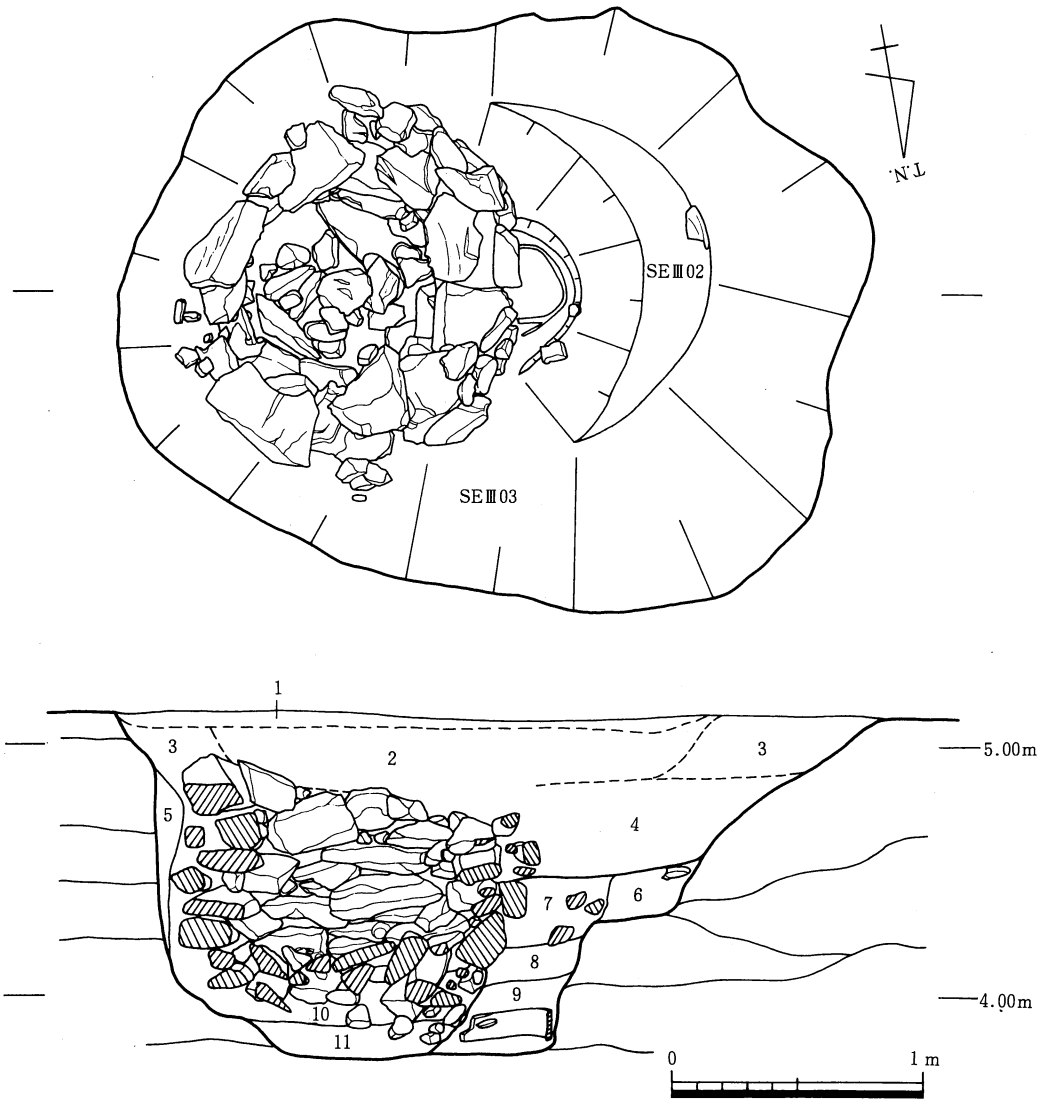
（第448図25）は曲物内より出土した，つまみのつく須恵器杯蓋である。内面には中央部を中心に研かれた痕と，黒ずんだ所が観察できることより硯として使われた可能性がある。出土遺物よりＳＥⅢ02の時期は８世紀の後葉前後である。　（西村）

ＳＥⅢ03（第300・448・449図　図版202　ＳＥ8703）

Ｅ９区で検出された切り合った２基の井戸の内ＳＥⅢ02を切り込んでいる井戸である。掘り方平面形は不整形な楕円形を呈し，上面径2.2m，深さ1.4mを測る。井戸枠は石組で構築され，内径0.8mを測る。この石組は径約0.3m前後の安山岩の角礫あるいは亜角礫を，一周10個程度で約５段程螺旋状に積み上げている。また，部分的に拳大程度の砂岩も組み込んでいる。また，井戸枠の内側には廃絶後に石組を破壊しながら埋め戻したらしく，多量の礫を落とし込んでいた。

ＳＥⅢ03からは，土師器・須恵器・緑釉陶器・曲物等が出土した。これらの中より21点を抽出した。なお，ＳＥⅢ02の報告時に触れたが，調査時の誤りでＳＥⅢ03の遺物中にはＳＥⅢ02の遺物が幾分含まれているものと見られる。

（第448図26・27）は最下層より出土した土器である。（26）は口縁部と底部を欠く須恵器の壺である。肩部は丸味を持ち頸部に続く，頸部はラッパ状に外反する。（27）は緑釉陶器椀の底部である。高台部は突出し内側に凹む。



1. 暗褐灰色砂質土
2. 暗褐茶灰色砂質土
3. 礫混じり暗褐茶灰色砂質土
4. 暗褐灰色粘質土
5. 暗黒灰色砂混じり粘土
6. 暗褐灰色礫混じり砂質土
（7より暗く，粘性強い，SEⅢ02埋土）
7. 6に類似（粘性強い，SEⅢ02埋土）
8. 5に類似（　　〃　　）
9. 暗灰色砂混じり粘土
（泥土，やや緑色を帯びる，SEⅢ02埋土）
10. 暗黒灰色粘土
11. 暗灰色砂

第300図　SEⅢ02･03 平・断面図

（第449図１～17）は上位層より出土した土器である。（１～３）は土師器の杯である。（２）は平底で体部は外上方に直線状に延び，口縁端部に至る。端部は丸く仕上げる。（３）は底部である。底部はわずかに突出し平坦に仕上げる。（４）は土師器椀の高台部である。（５・６）は土師器皿である。（５）は底部に高台部を持つ。高台部は屈曲点より内側に付き短く突出する。体部は外上方に延び口縁端部は平坦に仕上げる。（７）は土師器の羽釜の鍔である。

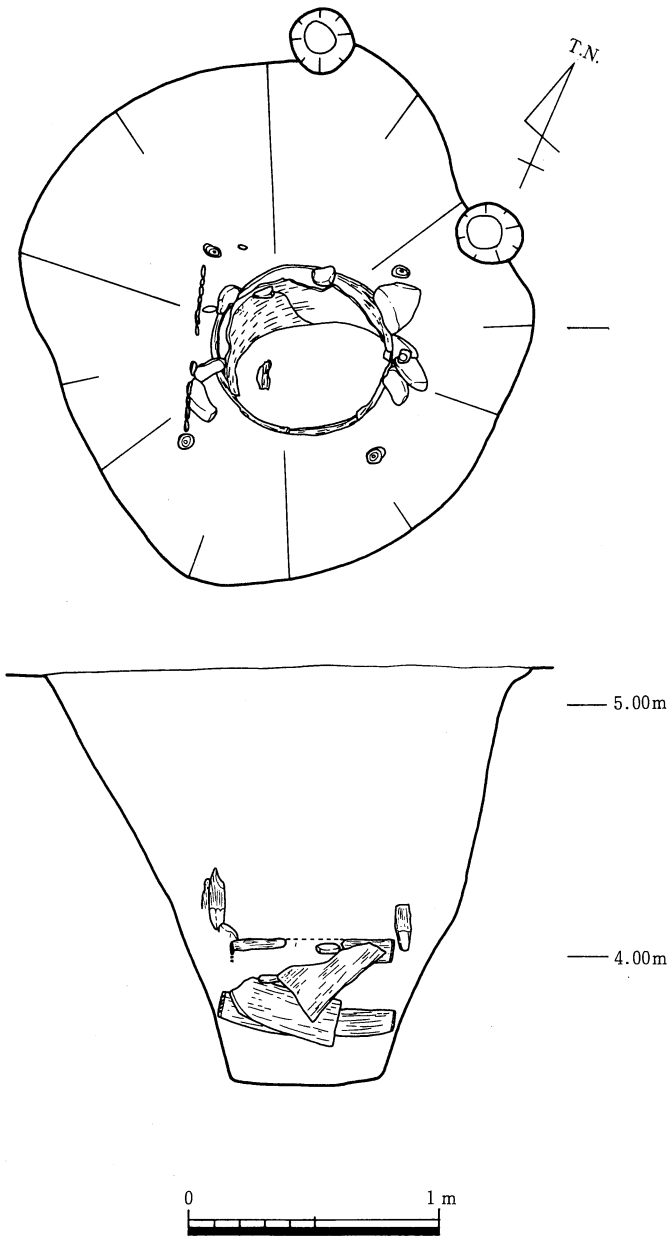
（８～11）は須恵器の杯である。底部は平坦で体部は外上方に，直線状に口縁端部に至り，端部は丸く仕上げる。（８・９・11）には内・外面火襷きが認められる。（12・13）は須恵器の皿である。底部はヘラ切りの後ナデを施し平坦に仕上げる。体部は外上方に短く延び口縁端部に至る。（17）は高台の付須恵器の皿である。（14）は須恵器杯の高台部である。（15・16）は須恵器の壺底部である。両者とも底部に高台が付く。

（第449図18・19）は裏ごめより出土した土器である。（18・19）は須恵器の皿である。底部はヘラ切りを施し平坦に仕上げている。体部は外上方に短く延び，口縁端部に至る。端部は丸く仕上げている。

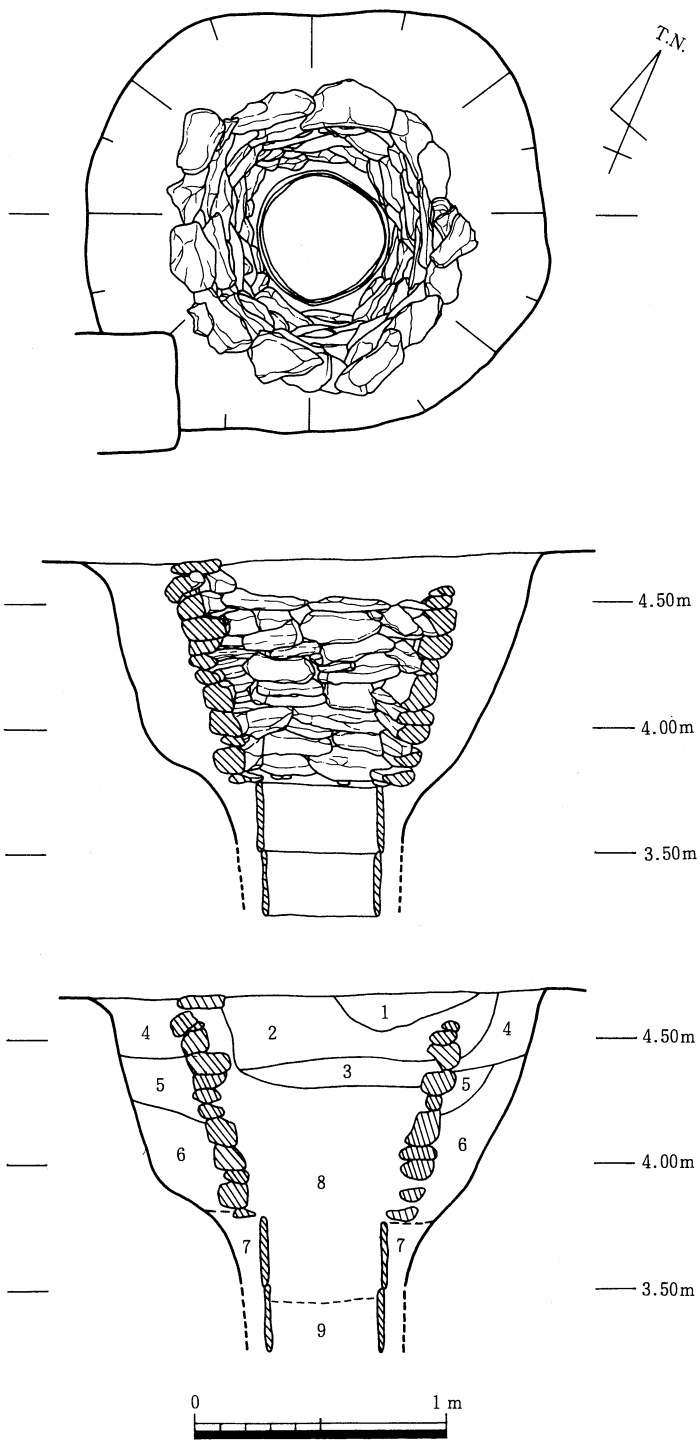
ＳＥⅢ02からの混入遺物と考えられるものを除き，ＳＥⅢ03の時期を想定すれば，９世紀後葉より10世紀初頭前後である（西村）

ＳＥⅢ04（第301・449～451図　図版204　ＳＥ8701）

第４微高地の南部，Ｅ・Ｆ７区で検出した井戸である。ＳＢⅢ247の範囲内に納まるが，時期的には本井戸が後出する。掘り方は不整円形を呈し，長軸2.1m，短軸2.0m，深さ1.7mを測る。井戸枠は，最下部に曲げ物を２段に重ね，その上部に４隅に杭状の柱を立て，西側の柱間には板材の最下部が痕跡的に残存していた。曲げ物の直径は65cm前後を測り，柱材の間隔は１辺75cmの正方形を呈する。井戸枠と掘り方の間には，裏込めとして礫が充填されていた。また井戸の上面には北東部から北に浅い不定形の溝状の窪みが北に延びる。検出状況から井戸の構造を復元すると，まず掘り方内の最下部に，曲げ物を２段に重ね，裏込めを施す。その上部，四隅に杭上の柱を打ち込み，その間に幅５～10cm前後の板材を縦に配列したもので，上部と下部では構造が

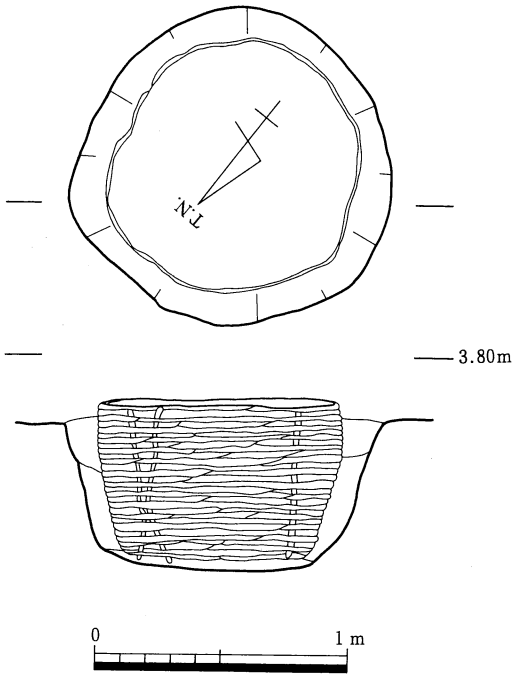


第301図　SEⅢ04 平・断面図



1. 淡灰褐色粘質土
2. 1に類似（部分的に砂礫混入，目が荒い）
3. 褐色砂（やや粘性あり）
4. 灰色弱粘質土（1～3に比べ目が細かい）
5. 灰褐色粘土
6. 砂礫混じり青灰色粘土（グライ層）
7. 淡灰褐色粗砂
8. 暗灰色粘土
9. 淡灰褐色粗砂

第302図　SEⅢ05 平・断面図



第303図　SEⅢ06 平・断面図

異なる。

また出土遺物では，廃絶後の供献土器等は認められず，また井戸が包含層の上面から掘り込まれているため，裏込めや埋土中に土器片が多数混入していた。（藤好）

ＳＥⅢ05（第302・451・452図　図版205　ＳＥ8702）

Ｈ６区で検出した。条里坪界溝ＳＤⅢ75に付属する東側張り出し部の埋没後にこれを切って作られる。掘り方平面形は略方形を呈し，二段掘りとなる。長軸1.8m，短軸1.7m，深さ1.4m以上を測る。なお本地点では検出面下0.4mで透水層（暗灰色粗砂層）に達する。本井戸はこれを1.2m以上掘り抜いている。井戸枠は曲物井筒，石組みからなる。掘り方下段に対応して径約0.48m，高さ0.27mの曲物２段を据え，その上に人頭大ないしは拳大の礫を８段以上組み上げ，現状で高さ0.95mを測る。石組背後に控え積みは見られない。本井戸は廃絶後に石組を破壊しながら埋め戻したようで，井戸枠内に多量の礫を落ち込んでいる。遺物は若干量の土師質土器・瓦質土器及び木片を井戸枠内，裏込め土双方から検出したが，著しい時期差は認め難い。僅かに瓦質土器椀の形態で裏込め土と井戸枠内とで微妙な差異が見られる程度である。使用期間は短く13世紀後半には廃絶している。

（第451図11～25）は井戸枠内下層，（第451図26～31，第452図１～４）は同上層，（５～11）は裏込め土出土資料である。

（第451図11）は土師質杯，（12～18）は土師質小皿である。小皿には（12～15）の器高が低く体部が非常に矮小化したタイプと（16～18）のようにやや高めのものがある。（20）は土師質で器台形を呈する。（21・22）は瓦質土器椀で小形化した高台を持つ。（23）は瓦質こね鉢で口縁部は弱く肥厚する。（24）は須恵質瓶，（25）は須恵質甕で亀山焼であろう。

（第451図26・27）は土師質杯，器高が低く体部は内湾気味に開く。（28）は土師質椀，（29・30）は土師質小皿である。（29）は体部の矮小化が著しい。（31）は土師質三足羽釜である。鍔の位置は低く突出度は高い。（第452図１）は瓦質土器椀で高台内側に墨書があるが欠損部が大きく判読不可。（２）は瓦質甕口縁部か。（３）は須恵質こね鉢。口縁端部は弱く摘み上げ，端面は直立する。（４）は白磁椀で黄白色の釉をかぶり口縁部は長めの玉縁状を呈する。

（第452図５・６）は土師質椀，（８）は小皿である。（７・９）は瓦質土器椀で（７）の高台形態を見るかぎりでは井戸枠内の瓦質土器椀よりも古い様相を示している。（10・11）は須恵質甕である。（大久保）

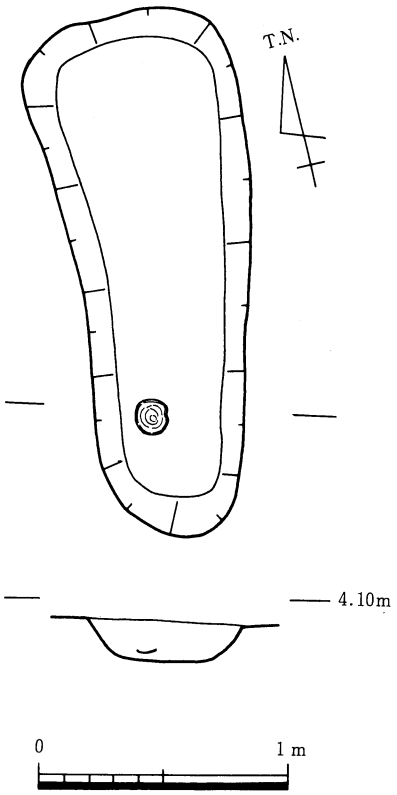
ＳＥⅢ06（第303図　ＳＥ8705）

Ｌ６区の第４低地帯で検出された井戸である。掘り方平面形は不整形な円形を呈し，上面径1.3m，深さ0.7mを測る。井戸枠は竹の編み物を使用している。内径1.0mを測る。（西村）

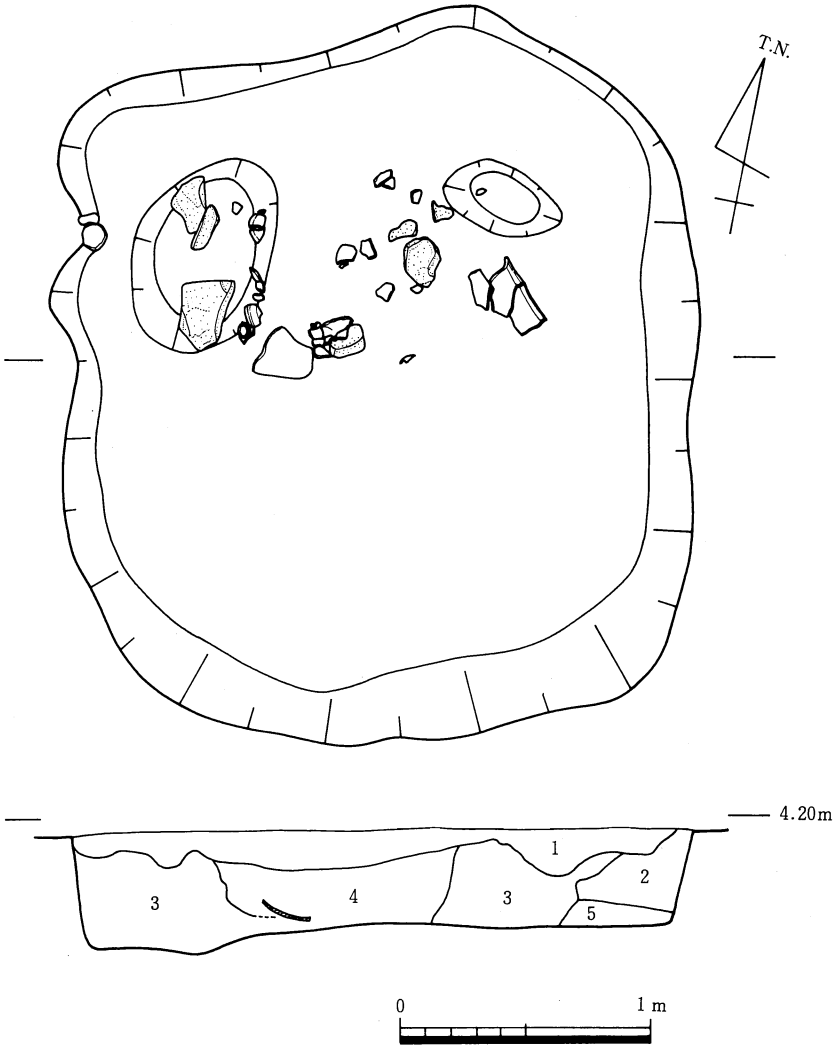
7.土　坑

ＳＫⅢ01（第304図）

Ｈ29区で検出した，長軸2.09m，短軸0.64m，深さ0.16mを測る土坑である。ＳＡⅡ01を切る。平面形は隅丸の長方形を呈し，埋土は暗褐色土である。主軸はほぼ真北を向き，南部から土師器の高台付きの皿が出土しており，８世紀代のものである。周辺に同時期の遺構は，全く検出されていない。形状等から土坑墓である可能性が高い。主軸方位は，第１微高地南部の８世紀代と考えられる土坑墓群と共通するが，地形的にみても長径が等高線と平行することから，規格性を有したものかどうか判定は困難である。（藤好）



第304図　SKⅢ01 平・断面図



1. 暗黄灰色粘土（Mn粒を含む）
2. 灰黄色粘土（ベースに類似）
3. 1に類似（Mn粒と黄色粒のブロックを含む）
4. 暗黄灰色粘質土（3に比べやや砂質）
5. 暗灰黄色粘土

第305図　SKⅢ02 平・断面図

ＳＫⅢ02（第305・452図　図版72）

Ｋ23区で検出された，長軸2.8m，短軸2.4m，深さ0.63mを測る土坑である。平面形は不整楕円形断面形は不整逆台形状を呈する。壁面は急な傾斜で底部に到り，底部は比較的平坦であるが，二か所で浅い落ち込みが検出できた。埋土は５層に分かれ，いずれも混在する状況で見出された。そのため人為的に埋め戻されたものと考えられる。

ＳＫⅢ02の出土遺物中図化できる土器及び土製品12点を抽出した。（第452図12～14）は土師質の椀である。器壁は比較的厚く，体部は内湾し口縁部に至る。口縁端部は丸く仕上げるものと，平坦で内傾するものとがある。（15）は底部を欠く土師質の土鍋である。体部は内湾し口縁部は「く」の字状に外反する。口縁端部は丸く仕上げる。外面下半にミガキ，上半部に指頭痕が顕著である。内面下半で指撫で，上半部で板ナデが認められる。（16～19）は土師質の土錘である。（20）は瓦器椀の口縁部である。内外面ともにミガキが認められる。（21）は須恵器杯蓋の口縁部であり，混入品である。（22）は須恵器脚台付き壺の底部である。（23）は白磁の皿底部である。出土遺物よりこの土坑の時期は，概ね12世紀頃であ

ろう。（西村）

ＳＫⅢ05（第306・453図　ＳＸＳＡ07）

Ｉ22区で検出した，長軸2.30m，短軸1.81m，深さ約0.3mを測る土坑である。平面形は隅丸方形を呈する。中央東寄りの部分が１段深くなっており，そこを中心として，焼土が広がる。内部からは飯蛸用の蛸壺の破片が多数出土した。完形の蛸壺がほとんど認められない点からすれば，蛸壺を焼き上げた窯である可能性が高い。他にもＳＫⅢ08・14等，同様の遺構は第１・２微高地で検出している。出土した遺物からすれば８世紀代のものである。（藤好）

ＳＫⅢ06（第307・453図）

H21区で検出した。北端が不明瞭であるが，平面形長楕円形，断面形は浅いレンズ状を呈する長軸3.7m以上，短軸1.2m，深さ0.2mの土坑である。隣接する溝ＳＤⅢとほぼ並行して真北に近い向きを持つ。埋土は２層に分れる。少量の須恵器を出土した。

（第453図12）は須恵器杯蓋，（13・14）は須恵器杯身で共に７世紀後葉に位置付け得る。（15）は須恵器高杯脚部である。（大久保）

ＳＫⅢ08（第306・453・454図　図版73　ＳＫ8601）

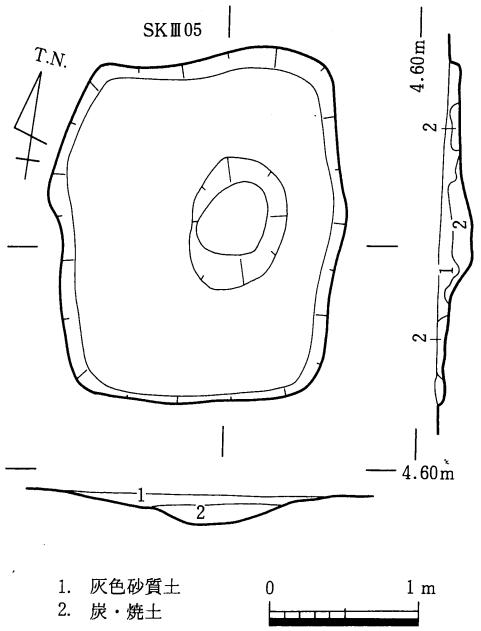
Ｉ21区で検出した。飯蛸壺焼成土坑である。ほぼ真北を向く溝ＳＤⅢ25の西肩を切り込み，これと並行する主軸方向を取る。平面形はやや同張りの長方形，断面形箱形を呈し，長軸1.6m，短軸1.2m，深さ0.24mを測る。四周の壁面に厚さ0.05m程度の粘土を貼り付け，炉壁としている。東壁を中心に半ば崩落しているが，残存部は著しく赤変する。底面は中心部に向かって僅かに窪むが，ほぼ平坦と云える。直上に厚く炭・灰が堆積するが底面自体は壁面のように赤変していない。土坑内では20個体以上の破損した飯蛸壺を検出した。土坑の形状・伴出遺物から飯蛸壺の焼成施設と推定した。また規模から判断して一度に大量の蛸壺を焼成することは困難であろう。数十個程度のほぼ一回の使用単位程度が限界と考えられる。

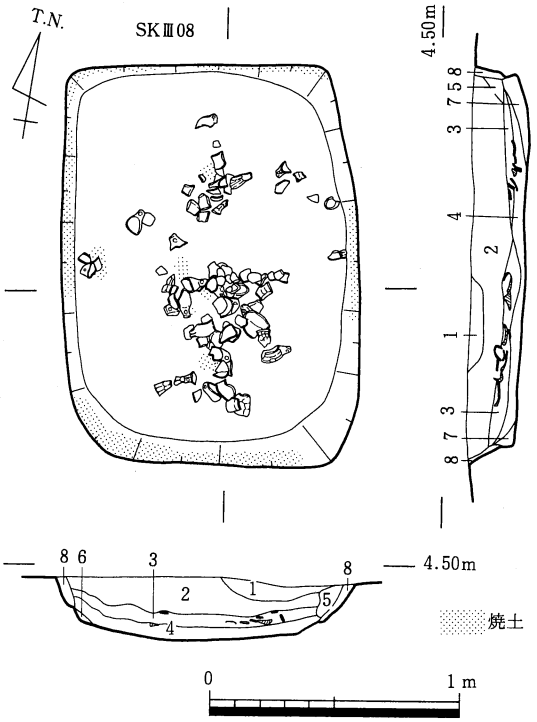
（第453図16）は本土坑内で検出した唯一の須恵器片である。須恵器杯身であろう。飯蛸壺は形態から二群に分けることが出来る。（第453図19～21・23・24）は吊り手部がやや扁平で体部との境が不明瞭である。また体部の指押さえによる凹凸が著しい。（第453図22・第454図１～12）は吊り手部が方柱状を呈し体部との境が比較的明瞭である。また体部に残された指押さえも前者ほど顕著ではなく口縁端部は肥厚気味に仕上げる。なお（第454図10・12）にはヘラ記号が認められる。溝ＳＤⅢ25との切り合いから本土坑の上限は８世紀前半と考えられる。また飯蛸壺の存続期間から考えて９世紀までは下らないであろう。（大久保）

ＳＫⅢ10（第306・454図　図版73）

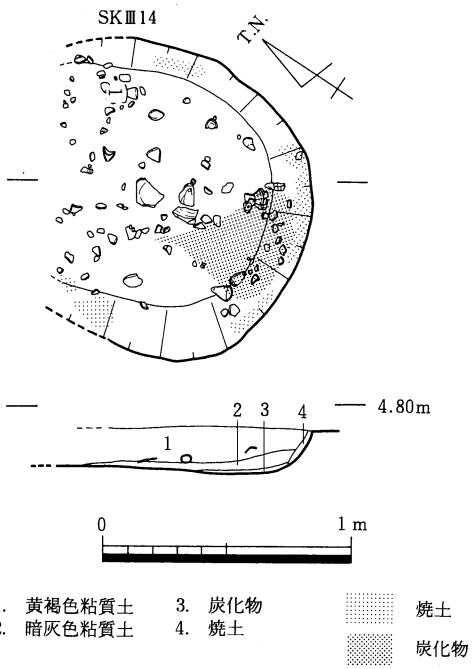
Ｉ20区で検出した。削平された飯蛸壺焼成土坑の残部である。壁面のすべてを失い，わずかに長軸1.6m，短軸1.2mの範囲に赤変した底面の一部をとどめるにすぎない。残存部から判断して，本土坑では焼成土坑ＳＫⅢ08と異なり，底面に薄く粘土を貼っていたらしい。またこの部分が強く焼けている点も異なる。直上に飯蛸壺小片若干量が残っていた。

（第454図13～15）は何れも飯蛸壺体部片である。体部には指押さえを加え，口縁部は肥厚気味に仕上げている。これら自体から時期は決し得ないが周辺の蛸壺焼成土坑の年代観から判断して８世紀代に位置付け得る。（大久保）

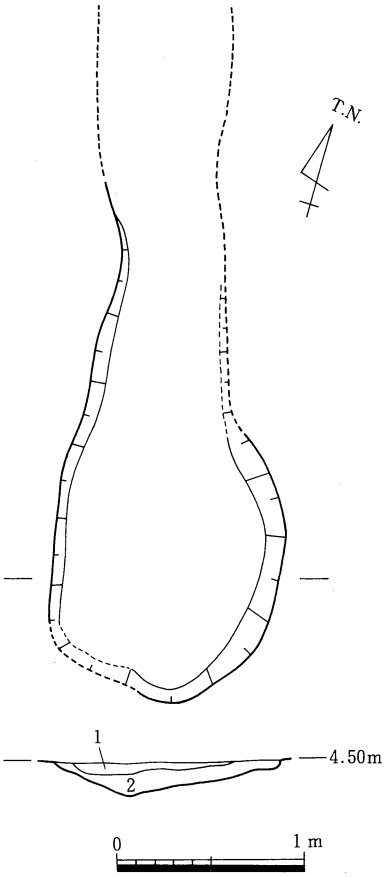




1. 暗灰褐色粘質土（炭細片を少量含む）
2. 暗黄褐色砂質土（Mn粒を含む）
3. 暗灰色粘質土
（炭片・焼土ブロックを多量に含む，上面にかけて蛸壺を包含）
4. 暗灰色炭（炭片が主，上面にかけて蛸壺を包含）
5. 焼土・炭ブロック
6. 暗灰色粘質土（3に類似，焼土ブロックを含む）
7. 暗黄褐色細砂
8. 焼土

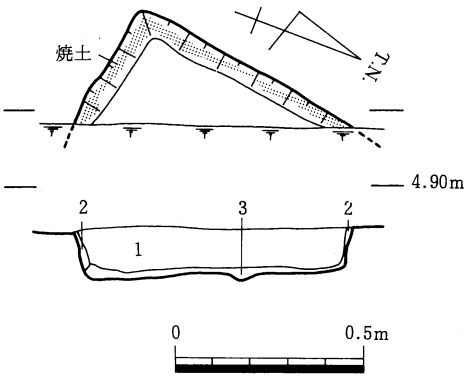


第306図　SKⅢ05・08・10・14 平・断面図



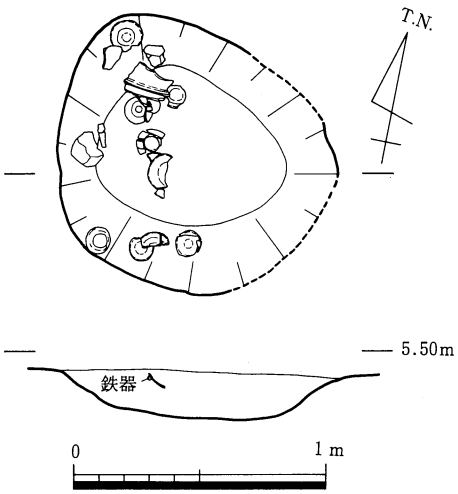
1.灰色粘質土(少量の灰・黄褐色粒含む)
2.灰色粘質土(茶褐色・黄褐色粒含む)

第307図　SKⅢ07 平・断面図

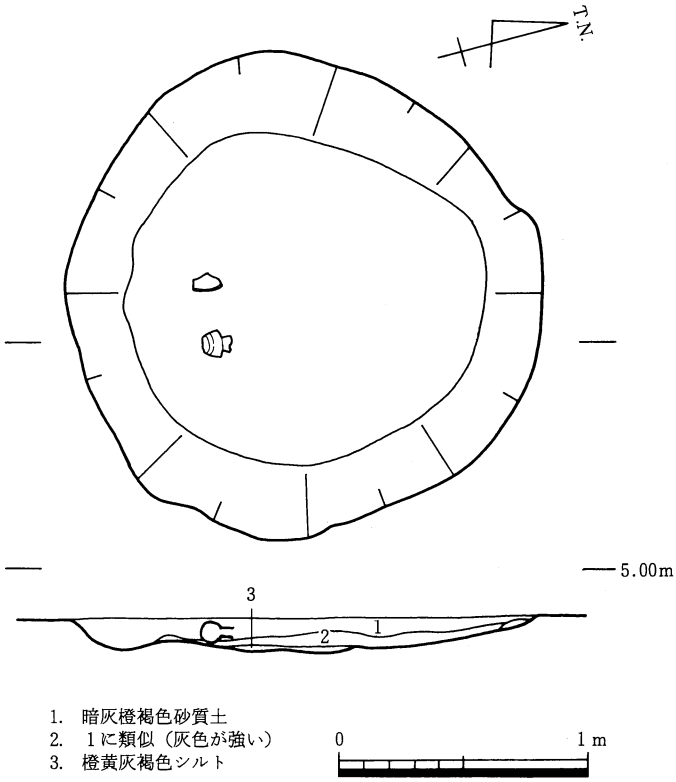


1. 黄灰色砂質土（Mn粒を含む）
2. 焼土
3. 炭（焼土を少量含む）

第309図　SKⅢ17 平・断面図



第308図　SKⅢ15 平・断面図



1. 暗灰橙褐色砂質土
2. 1に類似（灰色が強い）
3. 橙黄灰褐色シルト

第310図　SKⅢ19 平・断面図

ＳＫⅢ13（第454図）

Ｄ15区で検出した，長軸1.8ｍ，短軸1.6ｍ，深さ約0.86ｍを測る土坑である。平面形は円形を呈する。Ⅲ期より後出するものである可能性もある。（藤好）

ＳＫⅢ14（第306・454･455図　図版116　ＳＫ8603）

Ｈ14区で検出した土坑で，北部はＳＤⅢ60に切られ，全体の形状が明確ではない。残存長軸1.26ｍ，短軸1.00ｍ，深さ0.40ｍほどを測る土坑である。平面形は隅丸方形もしくは不整円形，土坑の底付近は炭化物を多量に含み焼土も検出した。出土遺物には多量の蛸壺片があり，ＳＫⅢ05・08と同様に，飯蛸壺を焼いた窯と考えられる。（藤好）

ＳＫⅢ15（第308図）

Ｊ13区で検出された，長軸1.1ｍ，短軸1.0ｍ，深さ0.18ｍを測る土坑である。平面形は円形，断面形は皿状を呈する。時期が解るような遺物がないため，詳細な点は不明であるが，概ね中世の範囲内のいずれかの時期に当るものであろう。（西村）

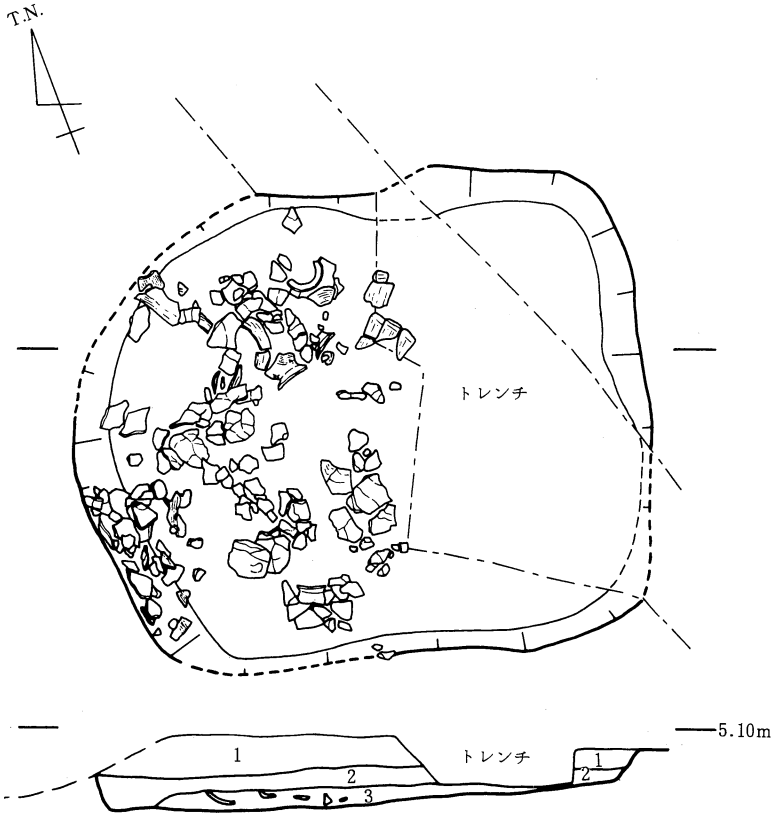
ＳＫⅢ16（第190図　図版124）

Ｃ12区，第３微高地の西端に並ぶ竪穴住居群中のＳＨⅢ23内で検出した土坑である。ＳＨⅢ23報文中で記載したため省略する。（藤好）

ＳＫⅢ17（第309図）

Ｅ11区で検出された，長軸0.6ｍ以上，短軸0.4ｍ以上，深さ0.12ｍを測る土坑である。約半分欠いているため全体の状況は解らないが，平面形は方形を呈するものと思われる。断面形は幅広な逆台形状を呈する。土坑底部は平坦である。土坑内で火を焚いたものとみえ，壁面は焼土化し，底部からは炭化物及び５㎜大の焼土ブロックが多量に検出できた。

時期が解るような遺物がないため，詳細な点は不明であるが，　炭化物及び焼土ブロックを多量に含む７世紀頃の土坑が，この土坑の他第４微高地上で数基見出せるため，そのため，この土坑は概ねこの時期に近い可能性が高い。（西村）



第311図　SKⅢ21 平・断面図

ＳＫⅢ19（第310・455図　図版206）

Ｅ11区で検出された土坑である。土坑西辺はＳＤⅢ83を切り込んでいる。上半部が削平を受けたものとみえかなり浅い。長軸2.0ｍ，短軸1.9ｍ，深さ

0.14mを測る。平面形は不整円形，断面形は浅い皿状を呈する。埋土は暗灰色系の砂質土である。

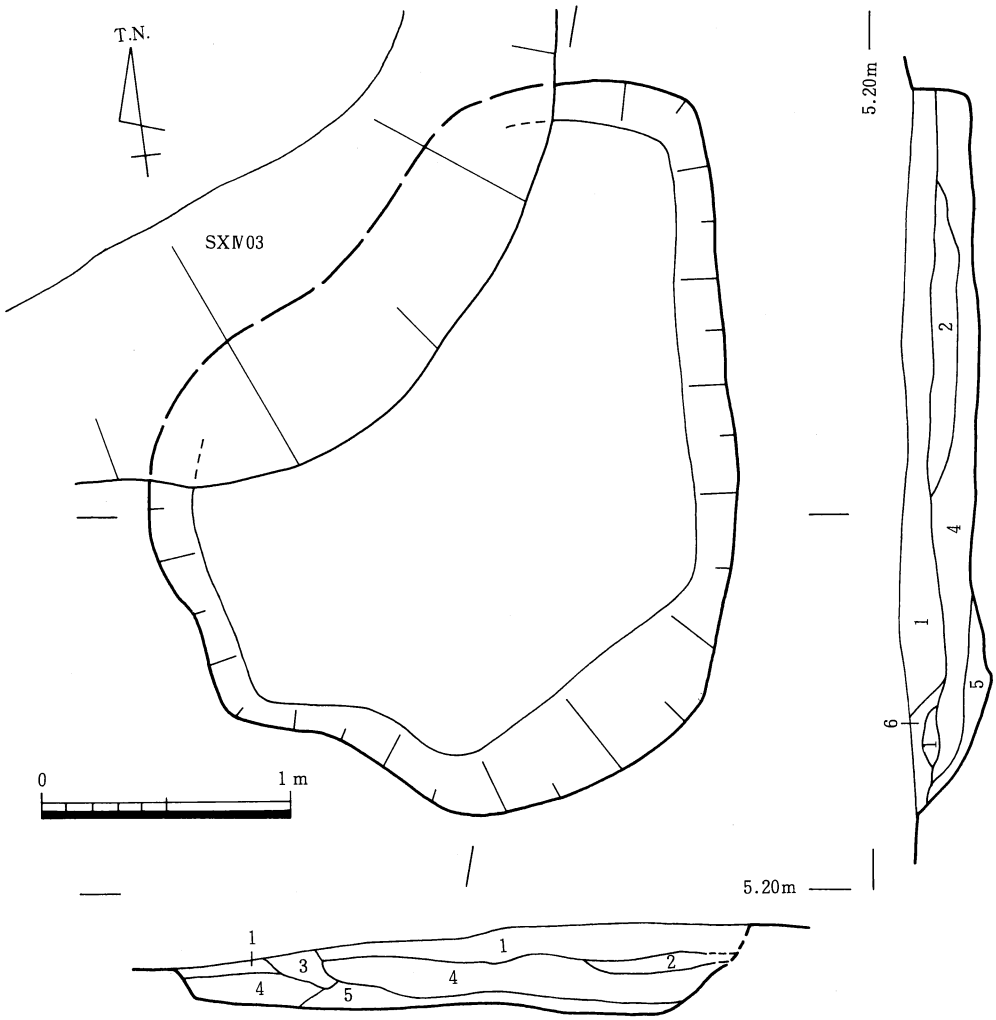
ＳＫⅢ19の出土遺物中図化できる土器１点を抽出した。（第455図７）は口縁部を欠く６世紀後葉の須恵器の甕である。体部は球形を呈し，外面にはヘラケズリを顕著に施している。体部中央に円孔をいれている。（西村）

ＳＫⅢ21（第311・455・456図　図版206）

Ｈ10区で検出した，長軸2.20m，短軸1.93m，深さ0.29mを測る土坑で，ＳＤⅢ86の西側に，ＳＫⅢ22と並列して並ぶ。南部はＳＸⅣ03に切られる。平面形は方形を呈する。埋土は暗褐色系の土で，最下層は炭化物と焼土を多量に含む。土師器片が多量に出土した。土師器用の窯である可能性が考えられる（藤好）

ＳＫⅢ22（第321・456図）

Ｈ10区で検出した，長軸約2.9m，短軸約2.4m，深さ約0.31mを測る土坑で，北部はＳＸⅣ03に切ら



1. 黄褐色砂質土（Mn粒を含む硬質）
2. 暗黄褐色砂質土
3. 明茶白灰色細砂混じり砂質土
（Mn粒を含むものと否なものがラミナ状を呈する）
4. 淡黒褐色砂質土
5. 黄褐色シルト混じり砂質土（炭化物　黒土を少量含む）
6. 暗黒褐色シルト混じり粘質土（炭化物を含む）

第312図　SKⅢ22 平・断面図

れる。ＳＫⅢ21の南に並列して位置し，両者は同時併存である可能性が高い。平面形は隅丸方形を呈すると考えられる。（藤好）

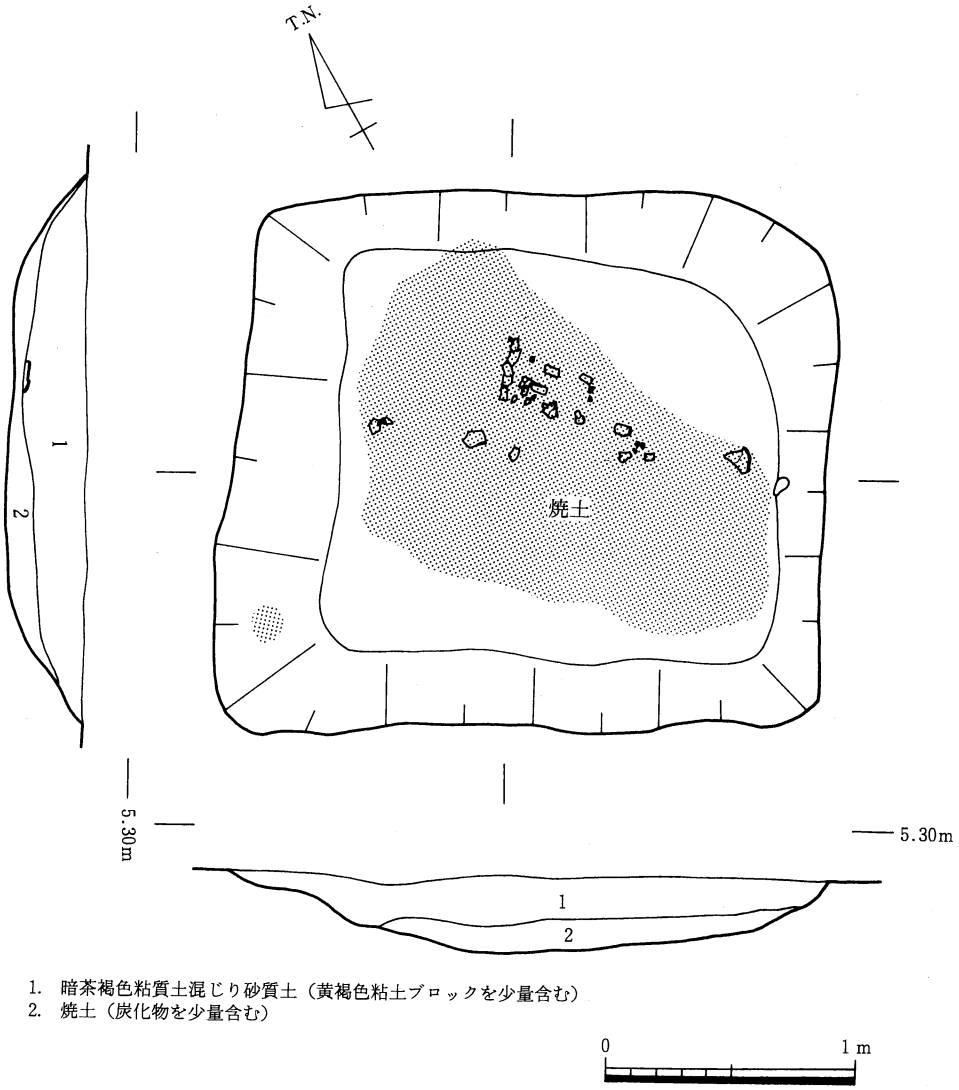
ＳＫⅢ23（第313・456図　図版207）

Ｈ９区で検出した土坑で，ＳＨⅢ32を切る。長軸2.35m，短軸2.13m，深さ0.3mほどを測る。平面形は隅丸方形を呈する。埋土は暗褐色系の土である。他の方形の土坑と同じく最下層は焼土層からなり，炭化物と小量の土器片を含む。本土坑は主軸方位が概ねＳＤⅢ86と平行しており，地形に影響されているものである可能性が高い。（藤好）

ＳＫⅢ24（第456図）

Ｆ10区で検出された，長軸1.3m，短軸1.1m，深さ0.20mを測る土坑である。平面形は横に長い楕円形状，断面形は幅広Ｕ字状を呈する。

ＳＫⅢ24の出土遺物中図化できるもの１点を抽出した。（第456図15）は７世紀頃の土師器皿ないし杯の口縁部である。底部より内湾し口縁部に至る。端部は丸く仕上げる。外面にミガキ内面に暗紋が認められる。（西村）



第313図　SKⅢ23 平・断面図

ＳＫⅢ25（第314・456図　図版207）

Ｅ10区で検出された，長軸1.3m，短軸0.8m，深さ0.11mを測る土坑である。平面形は楕円形，断面形は幅広Ｕ字状を呈する。埋土は暗灰黄茶色細砂質土からなる。なお形状よりこの土坑は墓になる可能性がある。

ＳＫⅢ25の出土遺物中図化できるもの３点を抽出した。（第456図16）は土師器鉢である。内外面ともに指ナデが認められる。（17・18）は６世紀後葉ないし７世紀初頭の須恵器の杯身である。たちあがりは短く，内側に内傾する。底部はヘラ切り後ナデを施している。この土坑は，出土遺物より概ね６世紀後葉ないし７世紀初頭前後の時期が考えられる。（西村）

ＳＫⅢ26（第315・456図　図版208）

Ｅ10区で検出された土坑である。上半部が削平を受けたものとみえかなり浅い。長軸2.0m，短軸1.8m，深さ0.18mを測る土坑である。平面形は不整方形，断面形は不整形な皿状を呈する。埋土は暗灰褐色砂質土である。

ＳＫⅢ26の出土遺物中図化できるもの４点を抽出した。（第456図19）は土師器の杯である。底部は平坦で外面にハケを施す。体部は屈曲し外上方に延び口縁部に至る。なお，底部との境にはヘラケズリを施している。口縁端部内側は浅く凹み一条の稜をなす。（20）は底部を欠く土師器の甕である。口縁部はくの字状に外上方に延び，端部は上方に摘み上げている。体部外面はハケ，内面には指ナデが施されている。（21・22）は須恵器杯である。（21）の底部は平坦，体部は外上方に直線状に延び，口縁に至る。底部はヘラ切り後ナデを施している。（22）は高台が付く坏である。高台部は底部・体部との境の屈曲点に付き断面四角形状で短い。体部は直線状に外上方に延び，口縁端部に至る。出土遺物よりこの土坑の時期は，概ね９世紀頃である。（西村）

ＳＫⅢ27（第457図）

Ｆ９区で検出された土坑である。ＳＢⅢ144・145と切り合い関係にありＳＫⅢ27は両者に切られている。上半部が削平を受けたものとみえかなり浅く，長軸2.2m，短軸1.7m，深さ0.20mを測る。平面形は不整楕円形状，断面形は浅い皿状を呈する。

ＳＫⅢ27の出土遺物中図化できるもの６点を抽出した。（第457図１・２）は土師器の皿である。体部は内湾し口縁部に至る。外面にはミガキを施す。（３）は土師器高杯の杯部である。小さな皿状の杯部で，内面は暗紋，外面にはミガキ認められる。（４～６）は土師器甕である。（６）は底部を欠く土師器甕である。体部は丸味を持ち，口縁は垂直気味に外上方に延び，端部に至る。外面は指頭痕の後ハケ，内面には指頭痕が認められる。出土遺物よりこの土坑の時期は，概ね７世紀前葉頃であろう。（西村）

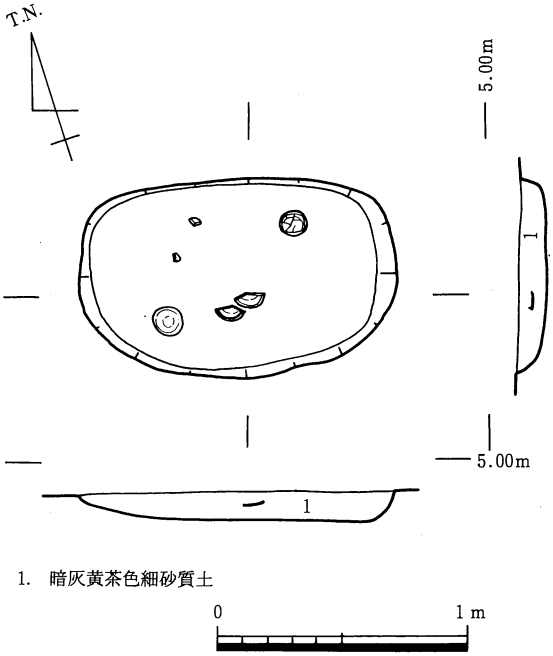
ＳＫⅢ28（第457図）

Ｆ９区で検出された，長軸2.1m，短軸1.4m，深さ0.10mを測る土坑である。ＳＢⅢ151と切り合い関係にあり，ＳＢⅢ151を切っている。平面形は不整長方形状，断面形は幅広Ｕ字状を呈する。

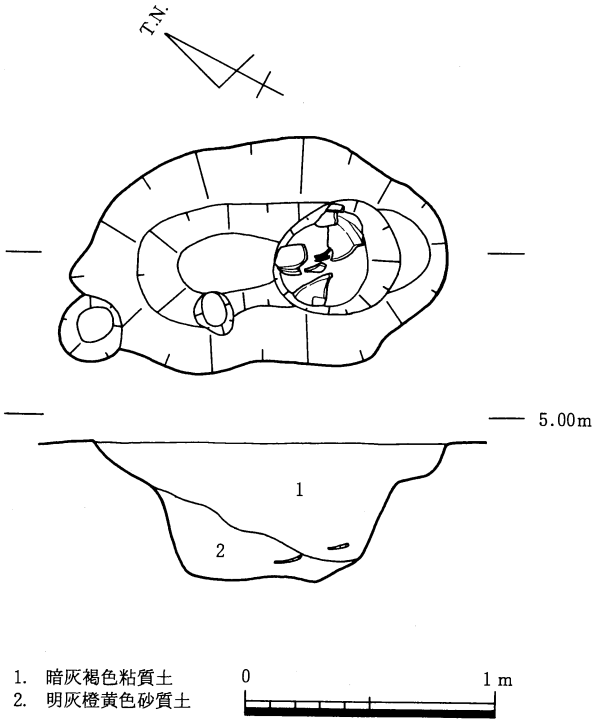
ＳＫⅢ28の出土遺物中図化できるもの１点を抽出した。（第457図７）は７世紀頃の底部を欠く須恵器坏である。（西村）

ＳＫⅢ29（第316・457図　図版208）

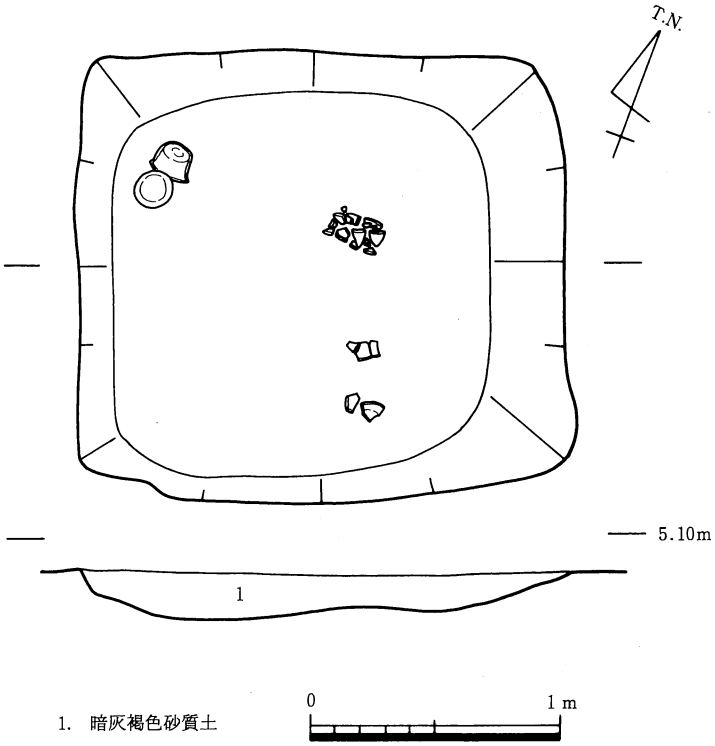
Ｅ９区で検出された，長軸1.4m，短軸0.9m，深さ0.54mを測る土坑である。平面形は不整楕円形状，断面形は不整逆台形状を呈する。壁面は途中屈曲し底部に到り，底部は丸底気味で比較的狭い。埋土は上位層より暗灰褐色の粘質土及び明灰燈黄色砂質土からなる。



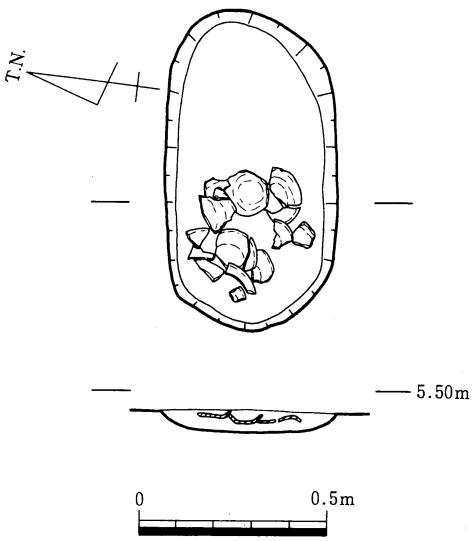
第314図　SKⅢ25 平・断面図



第316図　SKⅢ29 平・断面図



第315図　SKⅢ26 平・断面図



第317図　SKⅢ38 平・断面図

ＳＫⅢ29の出土遺物中図化できるもの５点を抽出した。（第457図８・９）は土師器の長甕である。（８）は体部上半部を欠く。底部は丸底で外面にハケ，内面には指撫での後ハケが施されている。口縁部は外上方に延び，端部はわづかに上下に肥厚する。(10) は土師器の土鍋である。底部より体部にかけ丸味を持ち，口縁部は，水平気味に折れる。口縁端部は上下に肥厚する。体部外面にはハケ及び指頭痕，内面には板ナデを施す。(12) は須恵器坏蓋の天井部である。外面は，ヘラケズリを施す。出土遺物よりこの土坑の時期は，６世紀後葉～７世紀前葉頃に当るであろう。（西村）

ＳＫⅢ31（第457図）

Ｄ９区で検出された，長軸1.3m，短軸0.8m，深さ0.10mを測る土坑である。平面形は不整楕円形状，断面形は幅広Ｕ字状を呈する。

ＳＫⅢ31の出土遺物中図化できるもの2点を抽出した。(第457図13) は土師器の甑である。(14) は天井部を欠く，8世紀頃の鈕付きの須恵器坏蓋である。（西村）

ＳＫⅢ38（第317図　図版209）

Ｊ７区で検出された土坑である。上半部が削平を受けたものとみえかなり浅い。長軸0.9m，短軸0.5m，深さ0.06mを測る平面形は縦長の楕円形状，断面形は浅い皿状を呈する。なお形状よりこの土坑は墓になる可能性がある。時期が判断できる資料がないため，詳細な点は解らないが，概ね中世前後であろう。（西村）

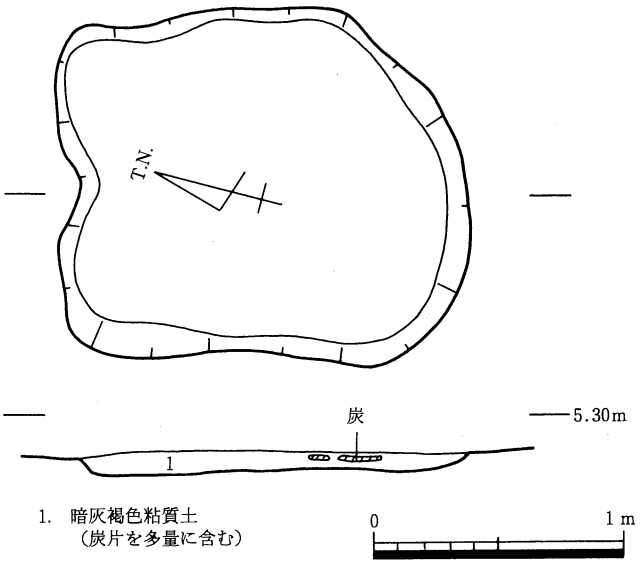
ＳＫⅢ40（第457図）

Ｊ・Ｉ７区で検出された，長軸2.0m，短軸1.3m，深さ0.40mを測る土坑である。ＳＢⅢ196と切り合い関係関係にある。平面形は不整楕円形状，断面形は逆台形状を呈する。

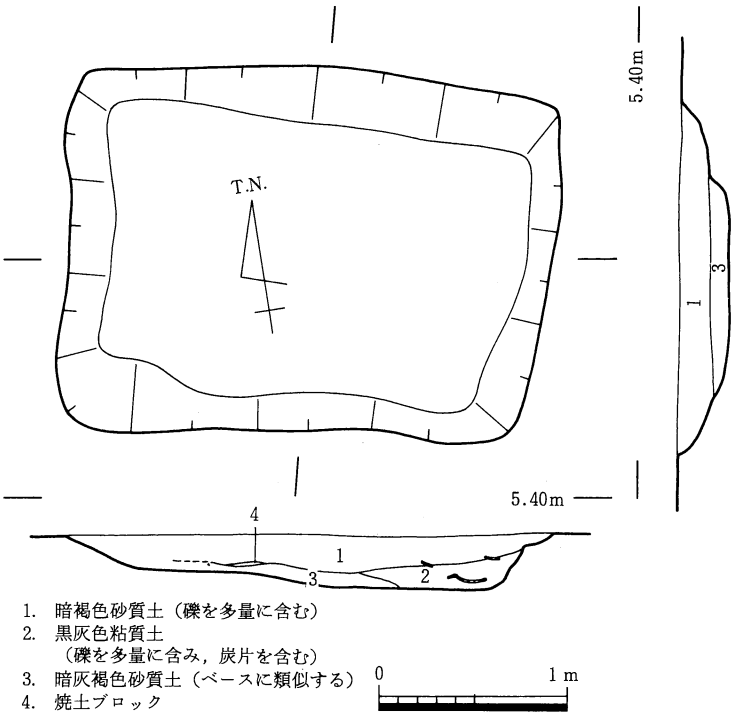
ＳＫⅢ40の出土遺物中図化できるもの１点を抽出した。（第457図15）は７世紀頃の須恵器の杯である。底部は平底で，体部は内湾して口縁部に至る。（西村）

ＳＫⅢ41（第318・458図）

Ｈ７・８区で検出した。平面形略方形を呈し長軸1.6m，短軸1.4mを測るが，著しい削平を受けて深さは僅かにわずかに0.10mを残すに留まる。底面はほぼ平坦で僅かに赤変している。またそれより



第318図　SKⅢ41 平・断面図



第319図　SKⅢ42 平・断面図

僅かに浮いた部分で炭・灰の薄層が認められる。底面の状況および堆積物から判断して，中で火を用いた可能性が高い。遺存状態は極めて悪いが，ＳＫⅢ42・54等に類似しそれと同様の性格を持つ土坑と推定できる。土師器長胴甕一個体および須恵器小片を出土している。

（第458図１）は土師器長胴甕で，口縁部は強く折れて直線的に開く。体部外面ハケ調整，内面下半はヘラ削りを加える。（２）は須恵器杯蓋片であろう。（２）が本土坑の時期を示すとすれば６世紀末葉から７世紀前葉に位置付け得る。（大久保）

ＳＫⅢ42（第319・458・459図）

Ｇ７・８区で検出した。平面形長方形を呈し長軸2.6m，短軸1.9mを測るが，削平を受けて深さは僅かにわずかに0.27mを残すに留まる。底面はほぼ平坦で中央部が僅かに赤変している。また僅かに浮いた部分で炭・灰および焼土ブロックの薄層が認められる。遺存状態は極めて悪いが，本土坑もＳＫⅢ41・54等に類似しそれと同様の性格を持つ土坑と推定できる。土師器では杯・高杯・小形球形甕・長胴甕・土鍋等多様な器種を17個体を出土しているが，須恵器は僅かの小片を得たに留まる。

（第458図３・４）は土師器杯で浅いボール状を呈し口縁端部を小さく外へ摘み出す。３は内面に放射暗文が認められる。５は土師器高杯である。（７～11）は小形球形甕である。法量はかなり近似するが調整などで微妙な差異が認められる。（12～15）は長胴甕である。（第459図１～３）は土鍋である。調整・形態に差異が見られる。以上の土師器は必ずしも十分に復元できなかったが大部分が完形ないしはそれに近い程度に復元しうるほどの破片が土坑中に残されていた。これに比して（第459図４）の製塩土器，（５）の須恵器直口壺は僅かな部位の小片にすぎない。「混入品」的な在り方である。６世紀末葉から７世紀前葉に位置付け得る。（大久保）

ＳＫⅢ43（第320・459図）

Ｇ８区で検出した。溝ＳＤⅢ93と重複しているため検出に手間取り，ややいびつになってしまったが，本来は平面形長方形を呈すると考えられる。長軸2.5m，短軸1.9mを測り，断面形は台形状で深さ0.69mに達する。底面は小さいがほぼ平坦で中央部が僅かに赤変している。また少し浮いた部分で炭・灰の薄層が認められる。本土坑もＳＫⅢ41・42等に類似しそれらと同様の性格を持つ土坑と推定できる。伴出遺物は若干の混入の可能性が高い須恵器小片を除けば，土鍋など土師器片ばかりであるが，この種の土坑としては量は多くない。

（第459図６）は土師器杯で，口縁部は小さく外へ摘み出す。（７）は土鍋で体部外面ハケ調整，内面はナデ調整で仕上げる。（８）は須恵器杯蓋である。６世紀末葉から７世紀前葉に比定できる。（大久保）

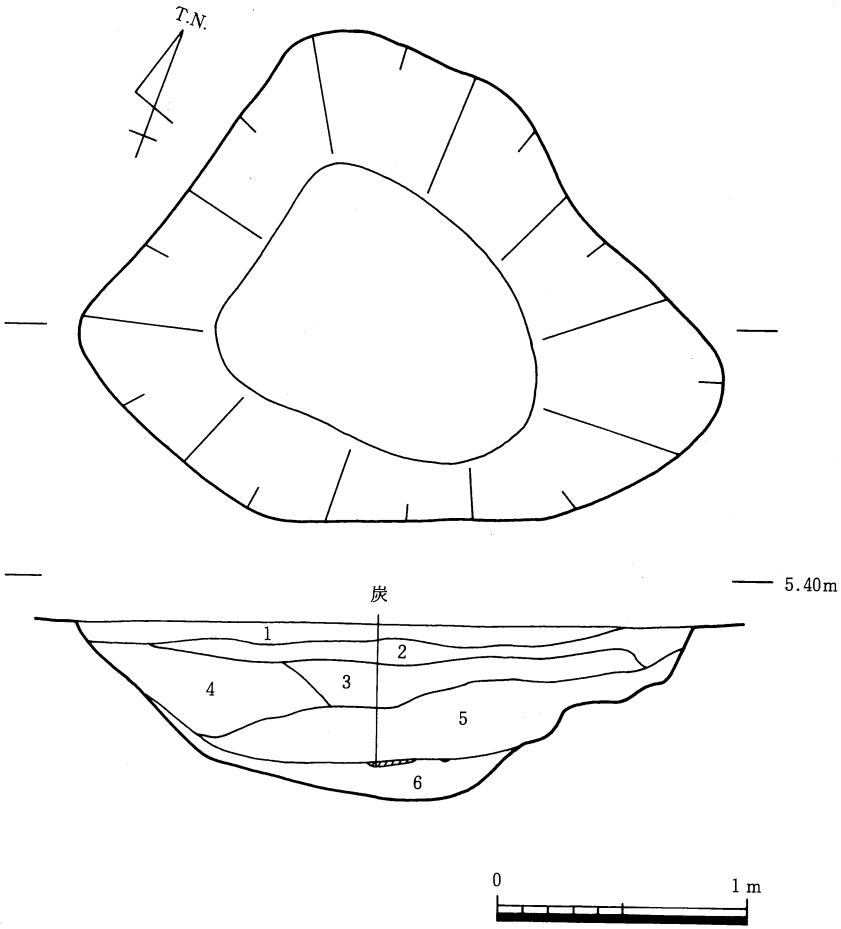
ＳＫⅢ44（第459図）

Ｇ８区で検出した。竪穴住居ＳＨⅢ45と溝ＳＤⅢ93の間に位置する。平面形は円形に近く，かなり浅い土坑である。長軸1.5m，短軸1.4m，深さ0.1mを測る。若干量の須恵器・土師器を検出している。

（第459図９）は土師器皿で外面ヘラ磨き，内面には放射暗文が認められる。（10）は土師器大形甕類の口縁部（11）は小形球形甕である。（12・13）は須恵器蓋杯。立上り部が比較的高い。（９）の土師器皿と（13）の須恵器杯身とで若干の時期差が感じられるが，大雑把に見て６世紀後葉から７世紀前葉に位置付けられる。（大久保）

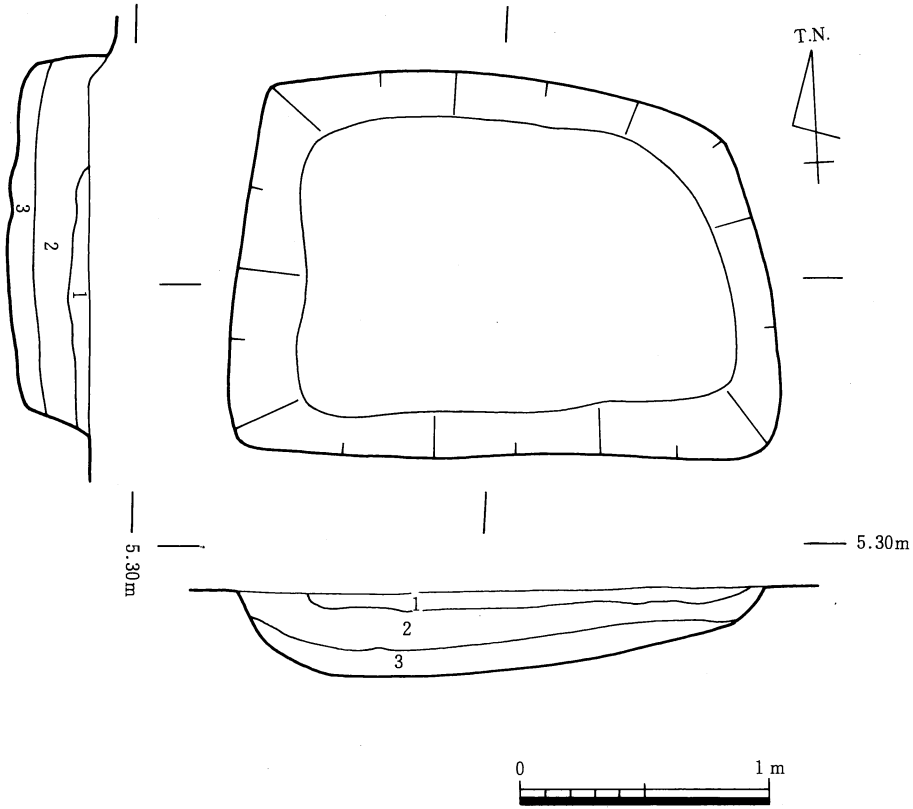
ＳＫⅢ45（第321・459図）

Ｇ９・10区で検出した。竪穴住居ＳＨⅢ162を切って穿たれる。平面形は比較的整った長方形を呈し長軸2.1m，短軸1.5m，断面形は台形状で深さ0.32mを測る。底面は中央部に向かって緩く窪む。底面



1. 暗灰褐色弱粘質土
（2～5㎝大の礫と炭小片を含む）
2. 黄褐色砂質土ブロックを含む暗灰褐色粘質土
（炭小片を含む）
3. 黒灰色弱粘質土
4. 黄褐色ブロックを含む暗灰褐色粘質土（2に比べ黄褐色ブロック土を多量に含む）
5. 4に類似（砂礫土ブロックを含む）
6. 黒灰色細砂質土（5との間に薄い炭層が存在する）

第320図　SKⅢ43 平・断面図



1. 黒灰色粘質土（炭片を多量に含む）
2. 暗褐色砂礫土
3. 1に類似

第321図　SKⅢ45 平・断面図

中心が僅かに赤変している。また少し浮いた部分で炭・灰の薄層が認められる。伴出遺物は若干の混入の可能性が高い須恵器小片を除けば，土鍋など土師器片が多い。形状・内容物の点で本土坑もＳＫⅢ41・42等に類似しそれと同様の性格を持つ土坑と推定できる。

（第460図１～３）は土師器杯，（４）は片口鉢である。（５・６）は土師器土鍋，（８）は竈庇であろう。図化しうる程度の須恵器は検出していない。竪穴住居との切り合いから６世紀末葉以降と考えられる。（大久保）

ＳＫⅢ46（第322・460図　ＳＫ8703）

Ｇ８区で検出した。平面形はややいびつな長方形を呈し，長軸2.6m，短軸2.0m，断面形は箱形で深さ0.42mを測る。底面はほぼ平坦で北半部が弱く赤変している。埋土下層に炭・灰を多く含む。底面直上でまとまった量の土師器を検出している。やはり須恵器は小片が認められるにすぎない。本土坑は形状・内容物，および土師器を伴う点でＳＫⅢ41・42等に類似する。同様の性格を持つ土坑と推定できる。

（第460図９）は土師器杯で内外面にミガキ調整が認められる。（10・11）は土師器台付皿脚部であろう。（12）は長胴甕である。（13～16）は小形球形甕で法量・形態・調整ともにかなり似通っている。（17）は弥生後期製塩土器脚部で明らかに混入品である。（18）は土師質の棒状有孔土錘である。（19）は須恵器杯蓋，（20）は瓶口縁部である。６世紀末葉から７世紀前葉に比定できる。（大久保）

ＳＫⅢ47（第461図）

Ｇ８区で検出した。溝ＳＤⅢ95のすぐ南側に位置する。平面形楕円形で断面はボール状を呈し，長軸約1.0m，短軸約0.9m，深さ0.13mを測る。埋土は淡黒色で，比較的多くの土器小片を含む。

（第461図１）は土師質杯で全体に薄手であるが，体部に比べ底部がやや厚い。体部は僅かに内湾気味に開く。（２）は土師質杯で平高台を持つ。（大久保）

ＳＫⅢ49（第323・461図　ＳＫ8705）

Ｆ８区で検出した。平面形は略方形を呈し，長軸1.0m，短軸1.0m，深さ0.14mを測る。底面西半部に柱沈み痕状の凹みが見られるので大形の柱穴の可能性もある。埋土中位から石製鍔帯，越州窯製青磁椀等を出土した。

（第461図３・４）は土師質杯，薄手で体部は直線的に開く。（５）は越州窯系青磁椀で蛇の目高台。（大久保）

ＳＫⅢ50（第324図　ＳＫ8705）

Ｆ８区で検出した。平面形は円形を呈し，長軸0.5m，短軸0.4m，深さ0.20mを測る。形状・規模から見て柱穴の可能性もある。板状不明鉄製品２個が出土した。（大久保）

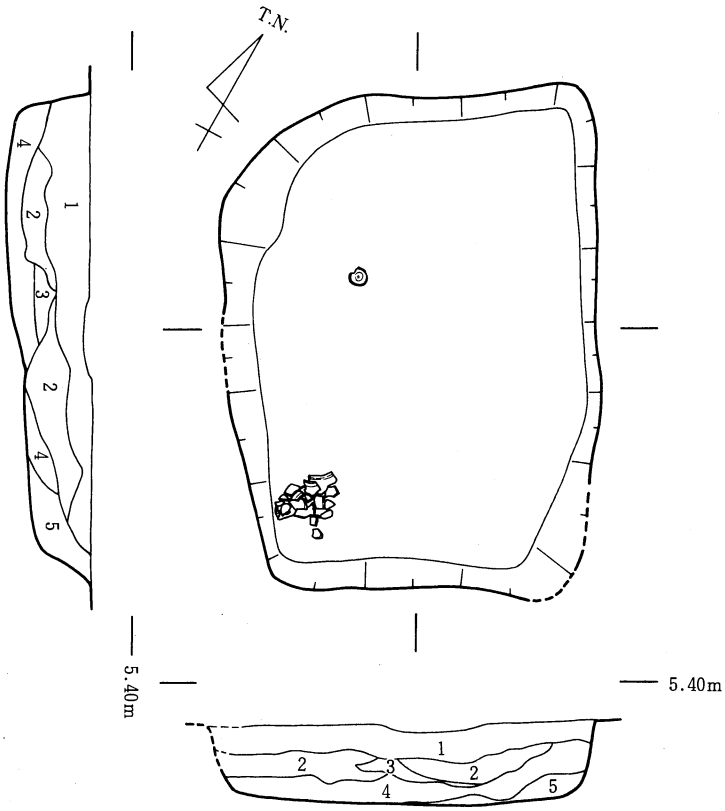
ＳＫⅢ51（第461図）

Ｆ８区で検出した。竪穴住居ＳＨⅢ239の東側に位置する。ややいびつな長方形を呈する浅い土坑で長軸3.6m以上，短軸約1.2m以上，深さ0.2mを測る。小片を中心に若干量の須恵器・土師器を出土した。

（第461図９）は土師器杯，（10）は高杯である。（11～15）は土師器甕類口縁部である。（17～19）の須恵器杯身は何れも立上り部が小形化している。（22）は深めの台付椀であろう。以上の資料から見て６世紀末葉ないしは７世紀前葉に比定できる。（大久保）

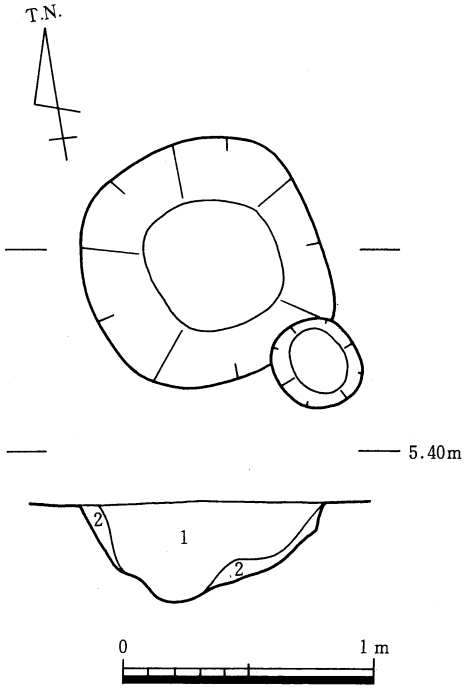
ＳＫⅢ52（第325・461図）

Ｅ・Ｆ８区で検出された，長軸2.4m，短軸2.1m，深さ0.43mを測る土坑である。平面形は不整長方



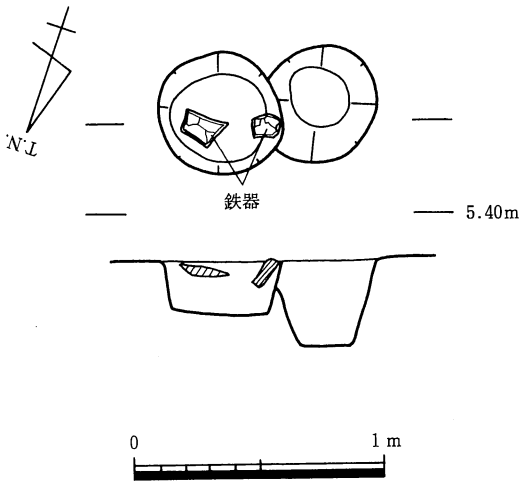
1. 暗褐色砂質土
2. 黄褐色砂質土
3. 黒灰色弱粘質土
4. 3に類似（炭を多量に含む）
5. 黒灰色砂質土

第322図　SKⅢ46 平・断面図

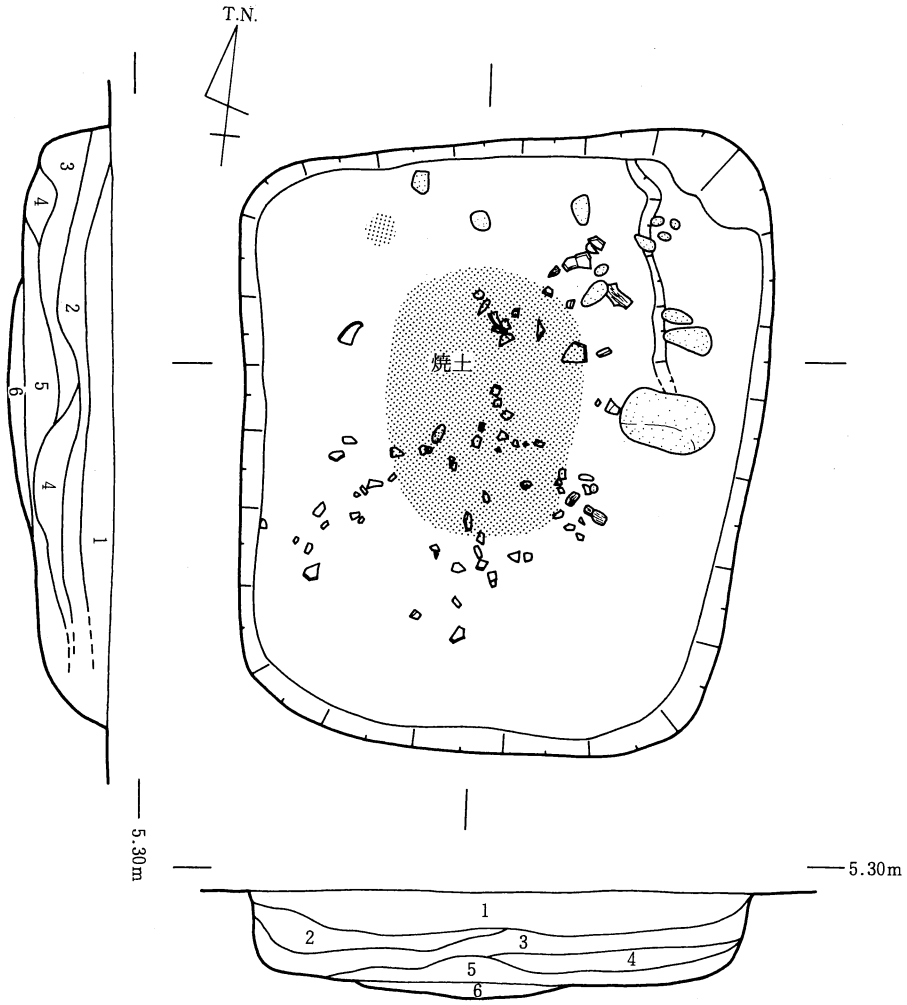


1. 黒灰色砂質土（炭片含む）
2. 黄褐色土混じり黒灰色砂質土

第323図　SKⅢ49 平・断面図



第324図　SKⅢ50 平・断面図



1. 暗灰褐色砂質土（1～5㎜の砂粒を多く含む）
2. 〃（1～5㎜の砂粒を含む）
3. 暗灰黒色砂質土
4. 暗灰褐色砂質土（2～3㎜のベースブロックを含む）
5. 3に類似（炭片を含む）
6. 赤茶色砂礫土（焼土化）

0　1m

第325図　SKⅢ52 平・断面図

形，断面形は隅丸の不整台形状を呈する。壁面は急な傾斜で底部に到り，底部は比較的平坦である。土坑内で火を焚いたものとみえ底部は焼土化し，炭化物がみられた。埋土は6層に分かれ，レンズ状に堆積していた。なお，この土坑はＳＨⅢ51・52を切り込んでいる。

ＳＫⅢ52の出土遺物中図化できるもの10点を抽出した。（第461図25・26）は土師器の椀である。（27・28）は底部を欠く土師器の鉢である。（28）の外面にはヘラケズリを施している。（30～34）は6世紀末の須恵器杯である。（30～32）は杯蓋（33・34）は杯身である。出土遺物及び切り合いより，概ねこの土坑の時期は，7世紀前半頃に当るものと考えられる。（西村）

ＳＫⅢ54（第462図）

Ｇ7区で検出した。平面形はややいびつな長方形を呈し，長軸1.8m，短軸1.3m，断面形は箱形で深さ0.12mを測る。底面はほぼ平坦で中央部が弱く赤変している。埋土下層に炭・灰を多く含む。須恵器片は全く含まず，土師器片ばかりを出土した。本土坑は形状・内容物，および土師器を伴う点でＳＫⅢ41・42等に類似する。同様の性格を持つ土坑と推定できる。

本土坑で検出した土師器では杯類が多く，また大形の煮沸形態を含まない点が同種の他礼とはやや異

なる。（第462図１～４）は土師器杯で口縁端部を小さく外へ摘み出す例が多い。（４）は内面に放射暗文が認められる。（６）は強く内傾した椀である。（10・11）の須恵器杯身は立上り部がかなり小形化している。これらの資料から６世紀末葉ないし７世紀前葉に比定できる。（大久保）

ＳＫⅢ55（第462図）

Ｇ７区で検出した。ＳＫⅢ54の南側に位置する。長楕円形を呈する浅い土坑で長軸1.3m，短軸約0.8m，深さ0.2mを測る。少量の土器小片を出土した。

（第462図12）は唯一図化し得た資料で，小片のため断定し難いが直線的に開く土師質杯であろう。（大久保）

ＳＫⅢ56（第462図）

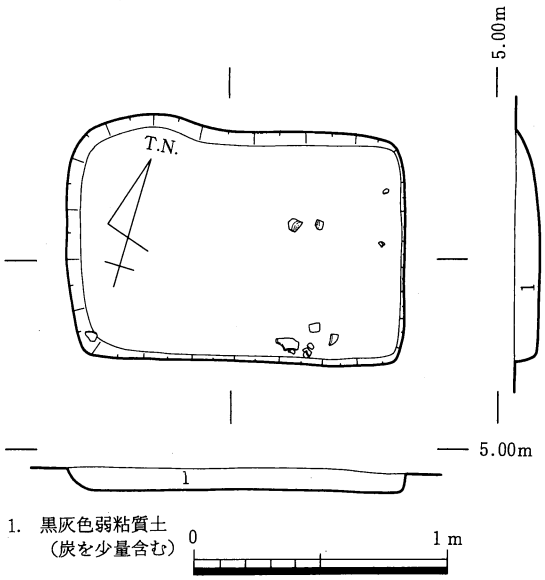
Ｅ７区で検出された，長軸1.0m，短軸0.6m，深さ0.10mを測る土坑である。平面形は不整楕円形状，断面形は幅広Ｕ字状を呈する。

ＳＫⅢ56の出土遺物中図化できるもの２点を抽出した。（第462図13）は土師器甕口頸部である。頸部より外湾気味に口縁端部に至り，端部は上方につまみあげている。内外面ともにハケを施す。（14）須恵器壺口縁部である。端部は内側に湾曲している。時期が判断できる資料がないため，詳細な点は解らないが，概ね６・７世紀前後であろう。（西村）

ＳＫⅢ57（第326・462図　ＳＫ8701）

Ｅ７区で検出された土坑である。上半部が削平を受けたものとみえかなり浅い。長軸1.3m，短軸0.9m，深さ0.10mを測る。平面形は不整長方形，底部は平坦である。埋土は炭を小量含む黒灰色弱粘質土である。

ＳＫⅢ56の出土遺物中図化できるもの３点を抽出した。（第462図15・17）は土師器杯である。（15）は口縁部のみ（17）は底部のみの資料である。（16）は底部を欠く土師器椀である。（西村）



第326図　SKⅢ57 平・断面図

ＳＫⅢ58（第462図）

Ｇ７区で検出した。ややいびつな楕円形を呈する浅い土坑で長軸2.2m，短軸約1.0m，深さ0.3mを測る。極少量の土器を伴う。

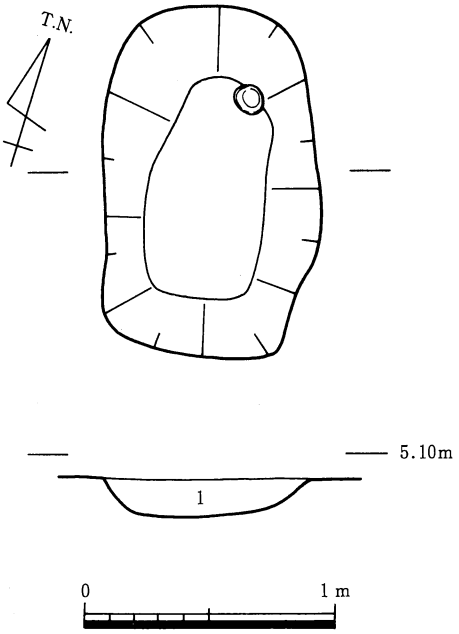
（第462図18）は土師器甕類の口縁部片，（19）は甑であろう。（20）の須恵器杯身は後継が小形化し，立上り部の矮小化も進行しており６世紀末葉ないし７世紀初頭に比定できる資料である。（大久保）

ＳＫⅢ60（第327・462図　図版209）

Ｅ７区で検出した竪穴住居ＳＨⅢ55を切る土坑で，長軸約1.4m，短軸約0.9m，深さ約0.15mを測る。平面形は不整円形を呈し，ＳＤⅢ125の南への延長上に位置することから，溜り状のものである可能性が高い。埋土は灰褐色系の砂質土である。（藤好）

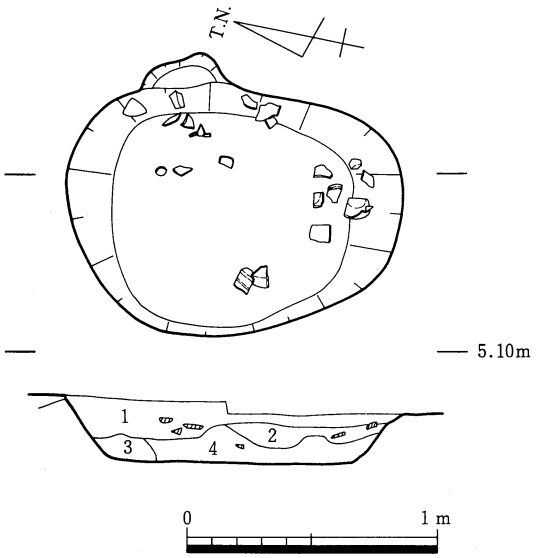
ＳＫⅢ61（第328・462図）

Ｅ７区で検出した隅丸方形もしくは不整円形を呈する土坑で，長軸約1.3m，短軸約1.0m，深さ約0.24mを測る。埋土は黒灰色系の砂質土である。（藤好）



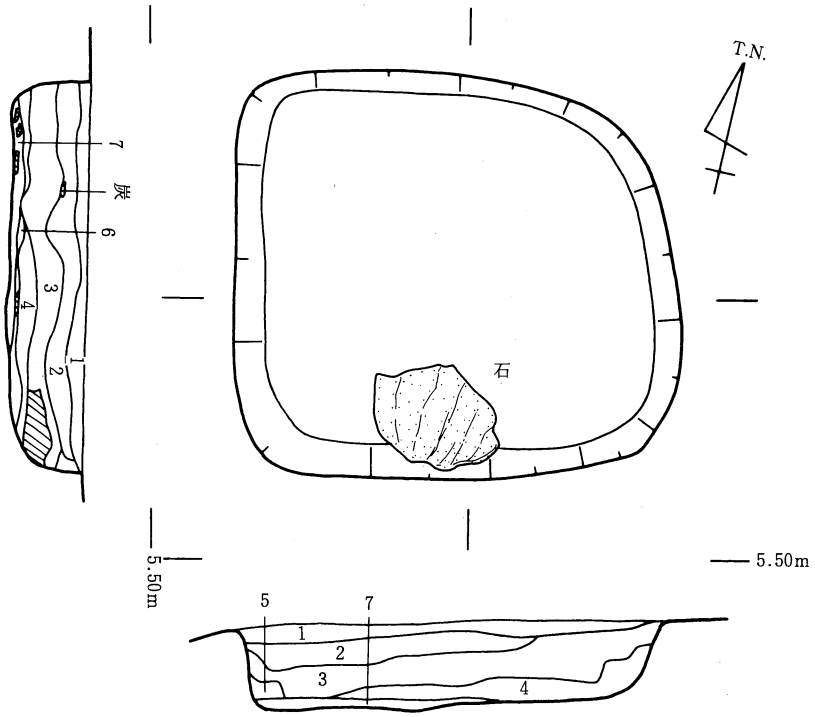
1. 暗灰褐色砂質土

第327図　SKⅢ60 平・断面図



1. 黒灰色砂質土
2. 1に類似（黄褐色土ブロックを含む）
3. 2に類似（2より黄色が強い）
4. 黄褐色土ブロック

第328図　SKⅢ61 平・断面図



1. 灰色粘土（茶褐色粒を少量含む）
2. 〃　（茶褐色粒・黄茶褐色ブロックを含む）
3. 暗灰色粘土（茶褐色粒・黄茶色ブロックを含み，炭片を少量含む）
4. 〃　（茶褐色粒を含み，炭片を少量含む）
5. 淡灰色粘土
6. 灰色粘質土（黄茶色ブロックを含む）
7. 暗灰色粘土（茶褐色粒・炭片を含む）

0　1 m

第329図　SKⅢ63 平・断面図

ＳＫⅢ63（第329図）

Ｈ６区で検出した。平面形はややいびつな方形を呈し，長軸1.8m，短軸1.6m，断面形は箱形で深さ0.34mを測る。底面はほぼ平坦で僅かに赤変している。埋土下層に炭・灰を含む。埋土下位から人頭大の平石１と土師器長胴甕大形片を出土したが，やはり須恵器の大形片は含まない。本土坑も形状・内容物の点でＳＫⅢ41・42等に類似する。同様の性格を持つ土坑と推定できる。（大久保）

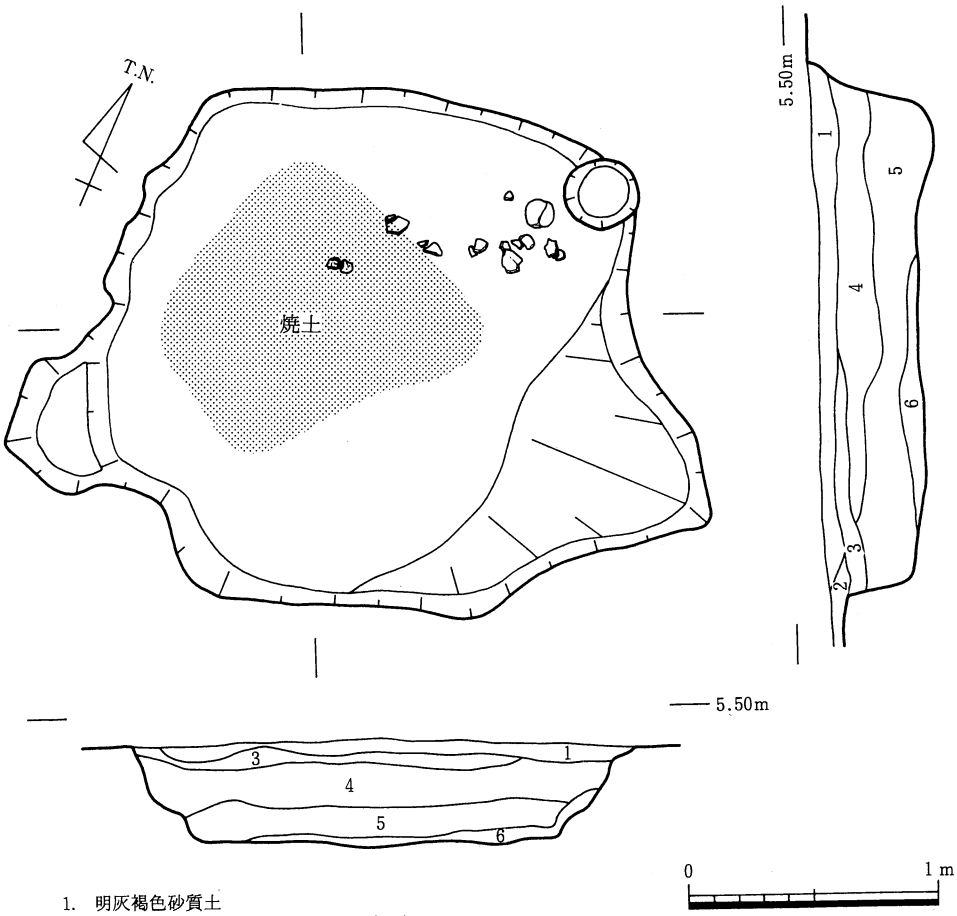
ＳＫⅢ64（第462図）

Ｉ５区で検出された，長軸1.7m，短軸1.3m，深さ0.10mを測る土坑である。西辺で溝と切り合うが前後関係は摑めなかった。断面形は幅広Ｕ字状を呈する。

ＳＫⅢ64の出土遺物中図化できるもの２点を抽出した。（第462図32・33）は６世紀末前後の須恵器杯である。（32）が杯蓋口縁部で（33）は杯身である。（西村）

ＳＫⅢ65

Ｊ４区で検出された，長軸2.7m，短軸1.0m，深さ0.12mを測る土坑である。平面形は縦に長い楕円形，断面形は浅い皿状を呈する。埋土は２層からなる。なお，この土坑は，形状より，土壙墓になる可能性がある。（西村）



1. 明灰褐色砂質土
2. １に類似（明灰黄褐色のベースを含む）
3. 〃　（ベースブロックを多量に含む）
4. 暗灰褐色シルト
5. ４に類似（ベースブロックを含む）
6. 暗灰褐色粘質シルト（炭片と下部に焼土を含む）

第330図　SKⅢ66 平・断面図

ＳＫⅢ66（第211・330・463図　図版210　ＳＫ8704）

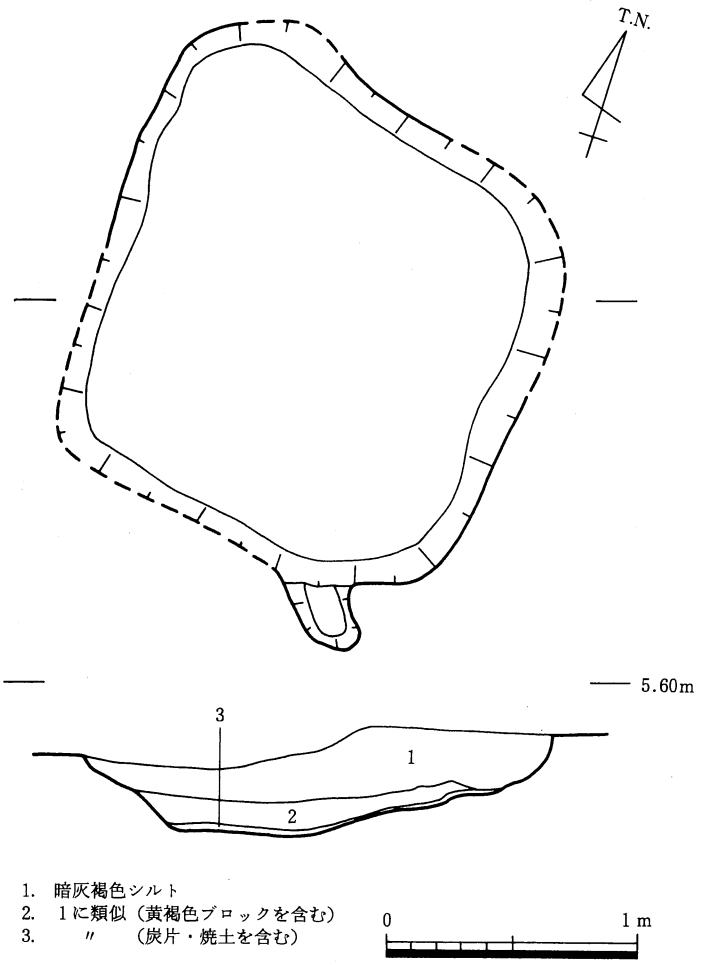
Ｈ１・２区で検出された土坑である。ＳＨⅢ58と切り合い関係にある。残りが悪く前後関係は摑みずらいがＳＨⅢ58が切り込んでいる可能性が高い。長軸2.1m，短軸2.0m，深さ0.43mを測る平面形は不整形，断面形は不整逆台形状を呈する。壁面は凹凸を持ちながら底部に到り，底部は比較的平坦である。土坑内で火を焚いたものとみえ底部は焼土化し，炭化物がみられた。埋土は７層に分かれ，レンズ状に堆積していた。

ＳＫⅢ66の出土遺物中図化できるもの５点を抽出した。（第463図１）は土師器椀である。形態はボール状を呈し，内面には暗紋が認められる。（２・３）はボール状の形態を呈する土師器の鉢である。（３）は口縁端部は外側に肥厚させ，外面にはヘラミガキを施す。（４・５）は甕の口縁部である。出土遺物及び切り合いより，この土坑は７世紀初頭前後に当るものと考えられる。　（西村）

ＳＫⅢ67（第331・463図　図版211）

Ｈ１区で検出された土坑である。ＳＫⅢ66の南に位置しＳＤⅢ190・191に切られている。長軸2.2m，短軸1.9m，深さ0.33mを測る。平面形は不整方形，断面形は凹凸をもった不整形な形態である。土坑内で火を焚いたものとみえ底部は焼土化し，炭化物がみられた。埋土は暗灰褐色系のシルトである。

ＳＫⅢ67の出土遺物中図化できるもの６点を抽出した。（第463図６・７）は底部を欠く土師器の椀である。（８）は土師器甕の口縁部である。（９）は６・７世紀代の製塩土器の口縁部である。（10・11）は６世紀末ないし７世紀初頭の須恵器杯である。（10）は杯蓋の口縁部（11）は杯身の口縁部で，たちあがりは短く内傾する。出土遺物より，この土坑はＳＫⅢ66とほぼ同時期で，６世紀末ないし７世紀初頭前後に当るものと考えられる。　（西村）



第331図　SKⅢ67 平・断面図

8.墓

ＳＴⅢ01（第332・463図　図版74・75）

Ｊ21区で検出した。平面形はいびつな長方形で北辺がやや広い。長軸1.1m，短軸0.7m，現状で深さ0.13mの墓壙を持つ。主軸はＮ20°Ｅを測る。棺痕跡は確認していないが墓壙形状から箱形木棺の使用を推定しても構わないであろう。人骨は半ば土壌化した骨片少量を中央部で検出したにすぎない。墓壙北東隅からは完形の瓦器椀一点を出土した。恐らく副葬品であろう。墓壙の規模・形態から屈葬を想定できる。また瓦器椀の出土位置から北頭位の可能性が高い。

（第463図12）は墓壙内出土の瓦器椀である。口縁部は強く開き器高は低い。高台は著しく矮小化している。外面に既に暗文は施されず，内面のそれも確実に簡略化が窺える。以上の点から13世紀後半以降に位置付け得るであろう。なお周囲に同時期の埋葬址は確認していない。第一微高地唯一の中世墓である。（大久保）

ＳＴⅢ02（第333・463図　図版76）

Ｈ20・21区で検出した。溝ＳＤⅢ31の西肩を僅かに切って穿たれ，ＳＴⅢ03に隣接する。平面形はややいびつな長方形で北辺が少し広がる。壁面立ち上がりは急で断面形はほぼ箱形を呈する。長軸1.7m，短軸0.8m，現状で深さ0.34mを測る。主軸方向はＮ６°Ｅとほぼ真北を向く。棺痕跡・人骨などは一切確認できなかったが土壙形状から墓の可能性を考えている。なお周辺にこのほか該期の同様の形態・規模を持つ土壙が集中し，ほぼ主軸方向を等しくしている。少量の土器小片を出土した。

（第463図13）は須恵器杯蓋。口縁部は小さく折れる。７世紀後葉から８世紀代に位置付けられ，本土坑がＳＤⅢ24に揃えて真北を向くことと矛盾しない。（大久保）

ＳＴⅢ03（第334・463図）

Ｈ20・21区で検出した。同様のＳＴⅢ02に隣接する。平面形は概ね長方形を呈するが，北端は丸く納める。壁面立ち上がりは急で断面形はほぼ箱形を呈する。長軸2.1m，短軸0.8m，現状で深さ0.30mを測る。主軸方向はＮ17°Ｅと真北に近い。棺痕跡・人骨などは一切確認できなかったがＳＴⅢ02同様土壙形状から墓の可能性を考えている。少量の土器小片を出土した。

（第463図14）は須恵器杯である。杯蓋と見成して図化したが，薄手で頂部付近まで器厚が変わらないこと等から無台の杯身の可能性もある。杯蓋であれば７世紀前葉以前であるが杯身であれば７世紀代に位置付け得る。（大久保）

ＳＴⅢ04（第335・463図　図版76）

Ｈ20区で検出した。ＳＴⅢ05・06の横に並び，主軸延長方向南にＳＴⅢ08が位置する。平面形は長楕円形を呈する。壁面立ち上がりは急で断面形はほぼ箱形に近い。長軸2.6m，短軸0.9m，現状で深さ0.40mを測る。主軸方向はＮ12°Ｅと真北に近い。棺痕跡・人骨などは一切確認できなかったがＳＴⅢ02同様土壙形状から墓の可能性を考えている。少量の土器小片を出土した。

（第463図15）は土師器杯であろう。（16）は甕口縁部片である。断定はし難いが（15）の杯がひどく薄手の作りで端部をかすかに曲げることから８世紀代に位置付け得る可能性がある。（大久保）

ＳＴⅢ05（第336図）

Ｈ20区で検出した。溝ＳＤⅢ32を切って穿たれ，ＳＴⅢ04・06の横に並ぶ。平面形は長楕円形を呈する。長軸2.0m，短軸0.6mを測る。著しい削平を受け，深さは0.07mを残すにすぎない。主軸方向はＮ12°Ｅと真北に近い。棺痕跡・人骨などは一切確認できなかったがＳＴⅢ02同様土壙形状から墓の可能性を考えている。（大久保）

ＳＴⅢ07（第337図）

Ｈ20区で検出した。ＳＢⅢ53と重複する。平面形は概ね長方形を呈するが，北端は丸く納める。長軸2.0m，短軸0.8mを測る。著しい削平を受け，深さは0.08mを残すにすぎない。主軸方向はＮ９°Ｅとほぼ真北を向く。棺痕跡・人骨などは一切確認できなかったがＳＴⅢ02同様土壙形状から墓の可能性を考えている。（大久保）

ＳＴⅢ08（第338・463図　図版76）

Ｈ20区で検出した。主軸延長方向北にＳＴⅢ04が位置する。平面形は長方形を呈する。壁面立ち上がりは急で断面形はほぼ箱形に近い。長軸2.4m，短軸0.8m，現状で深さ0.30mを測る。主軸方向はＮ13°Ｅと真北に近い。棺痕跡・人骨などは一切確認できなかったがＳＴⅢ02同様土壙形状から墓の可能性を考えている。少量の土器小片を出土した。

（第463図18）は土師器杯ないしは椀の口縁部。（19）は須恵器杯である。小片のため時期比定が困難であるが７世紀以降に位置付けられる。（大久保）

ＳＴⅢ09（第339図　図版118・119）

Ｆ14区で検出された。東側には隣接してＳＴⅢ10が所在する。上半部は削平により失われている。墓壙の平面形は長軸が比較的短い長方形で長軸1.2m，短軸0.9m，深さ0.12m，主軸方位Ｎ26°Ｅを測る。断面は幅広な逆台形状を呈する。棺床として0.3～0.7mの板状の石材を20数点平坦に敷いている。敷石は中央部を除く外周に２段に積み上げ，周囲を若干高くしている。埋土は比較的軟質な，暗灰色砂質土である。墓壙内から副葬品は検出できなかった。人骨は四肢骨及び頭骨の一部が等が検出された。埋葬姿勢は人骨の遺存位置・墓壙規模から，北頭位の屈葬と復元できる。歯の鑑定所見から被葬者は女性で，年令は40歳代の後半と推定されている。

出土遺物が少なく詳細な時期は判断できないが，概ね中世に当るだろう。（西村）

ＳＴⅢ10（第340図　図版117・118）

Ｆ14区で検出された中世の塚である。西側には隣接してＳＴⅢ09，北側にはＳＤⅢ68が所在する。墳丘は後世の開発により周囲を削平されていて，本来の形状を保っていない。現状での墳丘の平面形は不整形な台形状を呈し長軸3.7m，短軸3.5m，高さ0.7mを測る。墳丘は数層に別れるが，本来の盛り土は下位層の４・５層だけで，上位層は後世に土盛されている。墳丘上には凝灰岩製の五輪塔が崩れた状態で検出された。この五輪塔はいずれかの時点で据え直されたものと考えられる。なお，この塚に隣接するＳＴⅢ09は，位置的な点でこの塚の主体部に当る可能性が高い。

ＳＴⅢ10からの出土遺物としては４・５層中より瓦器椀の小片及び宋代の青磁片が出土したのみであり，詳細な時期は判断できないが，概ね中世だろう。（西村）

ＳＴⅢ11（第341・463図　図版212　ＳＴ8705）

Ｇ９区で検出した。平面形長楕円形を呈し，長軸1.7m，短軸0.5m，現状で深さ0.17mの墓壙を持ち，主軸はＮ57°Ｗを測る。棺痕跡は確認できなかったが墓壙の両端に土師器長胴甕を内側に向けて横倒しに据えていた。遺体の頭部・足端部をこれで覆っていたと思われる。東側の甕内では頭骨を検出した。半ば土壌化していたが歯は殆どすべて原位置で検出し得た。なお遺体の他の部位は残存していなかった。埋葬姿勢は人骨遺存位置・墓壙規模から，東頭位で顔面を北に向けた伸展葬と復元できる。歯鑑定所見から被葬者は30代女性と推定されている。副葬品は確認していない。

（第463図20）は足端部を，（21）は頭部を覆っていた長胴甕である。前者は口縁部が直線的に開き体部には粗い縦ハケを施す。後者は口径の割には器高が低い。全体に薄手で体部外面にはやや細かい縦ハけを加える。口縁端部は摘み上げる。10～11世紀代に位置付け得る。（大久保）

ＳＴⅢ12（第342・464図　図版213　ＳＴ8704）

Ｇ７区で検出した。平面形長楕円形を呈し，長軸1.3m，短軸0.5m，現状で深さ0.10mの墓壙を持ち，主軸はＮ８°Ｅを測る。棺痕跡は確認できなかったが墓壙の両端に土師器長胴甕の大形片を検出し

た。著しい削平の結果，墓壙のみならずこの土器も半ば以上失われているが出土位置から，ＳＴⅢ11同様に遺体の両端を覆うように据えられたと推定出来る。削平にもかかわらず，頭骨・四肢骨の一部を検出し得た。また左半部の歯列をほぼ原位置で確認した。埋葬姿勢は人骨遺存位置・墓壙規模から，北頭位で顔面を東に向けた屈葬と復元できる。歯鑑定所見から被葬者は30代女性と推定されている。副葬品は確認していない。

共に下半部を欠損するが（第464図１）は足部を，（２）は頭部を覆っていた甕である。（１）はやや長めで僅かに内湾する厚手の口縁部を持ち，体部は指押さえを顕著に残す。（２）も同様にやや長めで内湾気味の口縁部を持つが細かいハケ調整を加える。11～12世紀代に位置付けられる。　（大久保）

ＳＴⅢ13（第343図　図版214　ＳＴ8705）

Ｆ・Ｇ７区で検出した。この地点では多数の柱穴が密集しているが，本遺構はその重複するすべてを切って穿たれている。平面形は非常に整った長方形で長軸1.7m，短軸0.6mを測る。ただし著しい削平を被り，深さは，現状で0.09mをとどめるにすぎない。主軸はＮ65°Ｗを測る。棺痕跡は確認できなかったが墓壙形状から推定して内部に箱形木棺を納めていたと考えられる。人骨にまで削平は及んでいたが，ほぼ埋葬姿勢を知りうる程度には残存していた。また一部の歯列も原位置で確認した。埋葬姿勢は人骨遺存位置から，西頭位で顔面を北に向けた伸展葬と復元できる。歯の鑑定所見から被葬者は30代男性と推定されている。副葬品は認められなかった。　（大久保）

ＳＴⅢ14（第344・464図　図版215）

Ｄ７区で検出した墓で，東部低地帯に面した斜面部に位置する。内部に棺材とかんがえられる板材が残存する。長軸1.0m，短軸0.5m，深さ約0.10m前後を測る。平面形は小口部分が広がった隅丸の長方形を呈する。主軸方位は，Ｎ24°Ｗ前後を測り，第４微高地南部に展開する墓群と共通した方位を持つ。内部から成人骨を検出した。頭位は北向きで，大腿骨の状況から，屈葬されたものと考えられる。副葬品としては頭部の西側に土師器杯・皿・青磁皿等が出土した。　（藤好）

ＳＴⅢ15（第345図　図版216　ＳＴ8706）

Ｊ６区で検出された。上半部は削平により失われているため比較的残りが悪い。墓壙の平面形は不整形な楕円形で長軸0.8m，短軸0.6m，深さ0.10m，主軸方位Ｎ71°Ｗを測る。断面は幅広な逆台形状を呈する。埋土は単層で，灰黒色土である。人骨の遺存状態は悪く頭骨片の一部を残すのみである。副葬品として墓壙内の東側で，完形の和鏡及び刀子状の鉄器が検出された。和鏡は鏡面を上に向け，周囲を布で覆っていたものか，痕跡が残っていた。頭骨片はその和鏡の上で検出された。

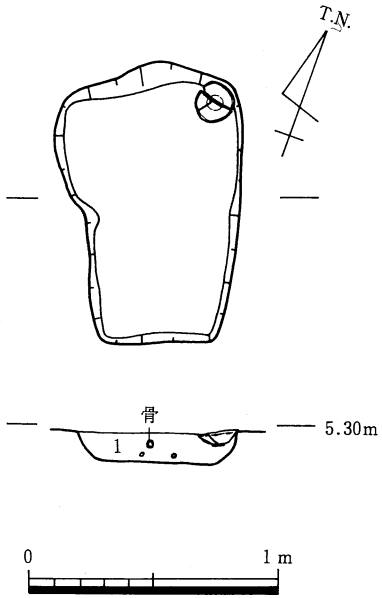
出土遺物が少なく詳細な時期は判断できないが，概ね中世に当るだろう。　（西村）

ＳＴⅢ17（第346図　図版217　ＳＴ8701）

Ｈ７区で検出した。平面形長方形で長軸1.5m，短軸1.0m，現状で深さ0.15mの墓壙を持つ。削平により残りは良くない。主軸はＮ29°Ｅを測る。棺痕跡は確認できなかったが墓壙形状から推定して内部に箱形木棺を納めていたと考えられる。人骨の遺存状態は良くないが頭骨・四肢骨の一部を検出した。埋葬姿勢は人骨遺存位置・墓壙規模から，北頭位で顔面を西に向けた屈葬と復元できる。墓壙北辺頭部側に主軸と直交して刀子１を，西辺中央に主軸方向に短刀１を副葬している。　（大久保）

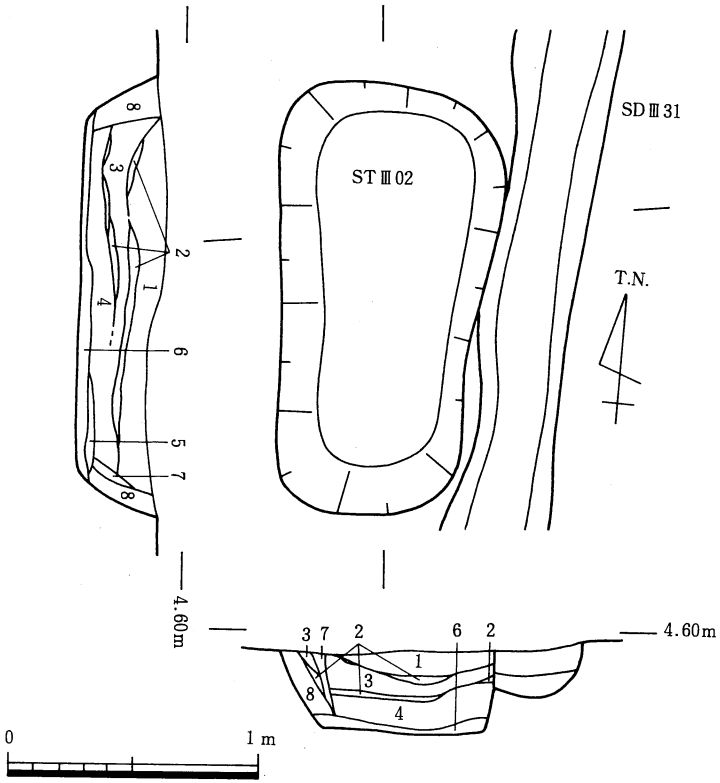
ＳＴⅢ18（第347図　図版217　ＳＴ8703）

Ｈ６区で検出した。平面形略方形で長軸0.8m，短軸0.7m，現状で深さ0.17mの墓壙を持つ。条里坪界溝ＳＤⅢ153の東側張り出し部に上半を削られている。人骨自体のの遺存状態は比較的良好だが削平



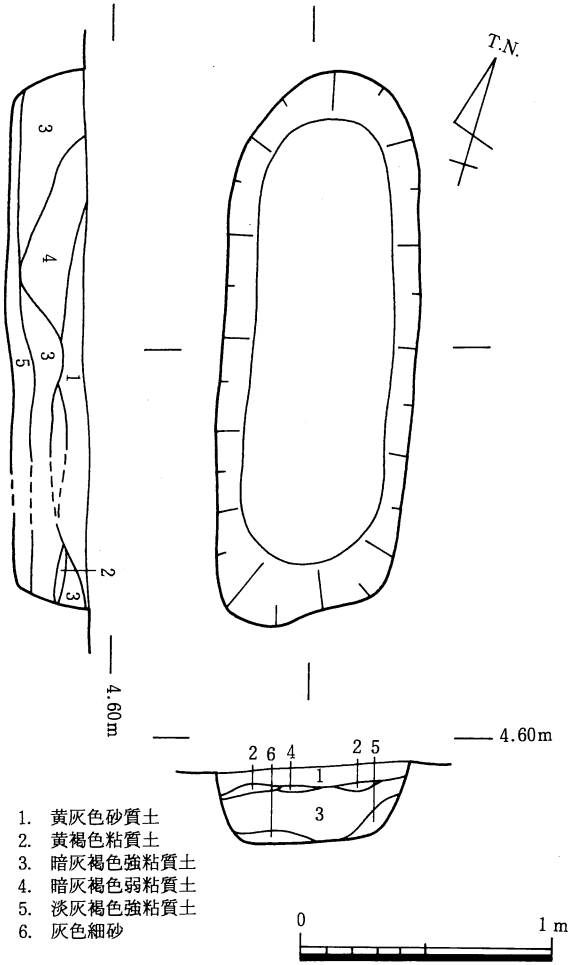
1. 暗灰褐色粘質土

第332図　STⅢ01 平・断面図



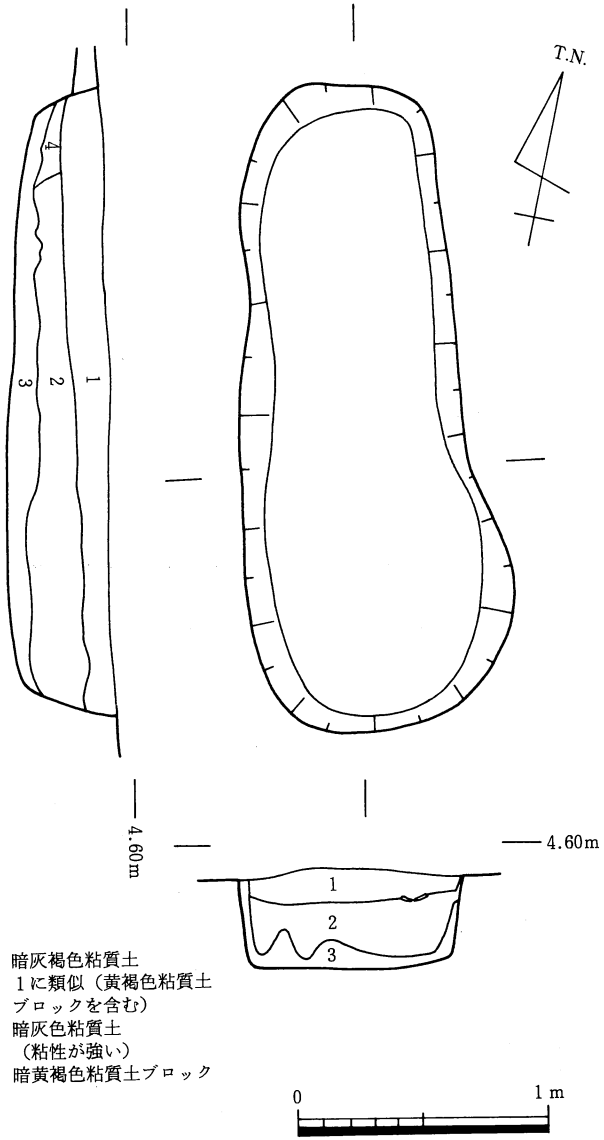
1. 暗黄褐色砂質土（粗砂を多量に含む）
2. 黄褐色土ブロック
3. 暗灰褐色粘質土
4. 黒灰色粘質土
5. 暗黄褐色土ブロック
6. 暗灰色細砂
7. 灰色細砂
8. 暗黒色粘質土

第333図　STⅢ02 平・断面図



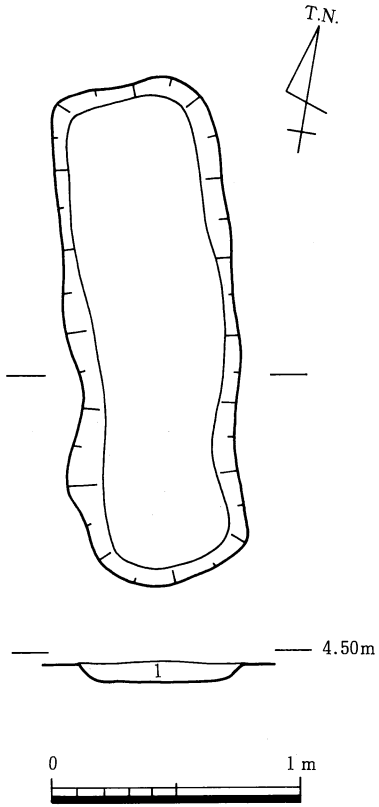
1. 黄灰色砂質土
2. 黄褐色粘質土
3. 暗灰褐色強粘質土
4. 暗灰褐色弱粘質土
5. 淡灰褐色強粘質土
6. 灰色細砂

第334図　STⅢ03 平・断面図



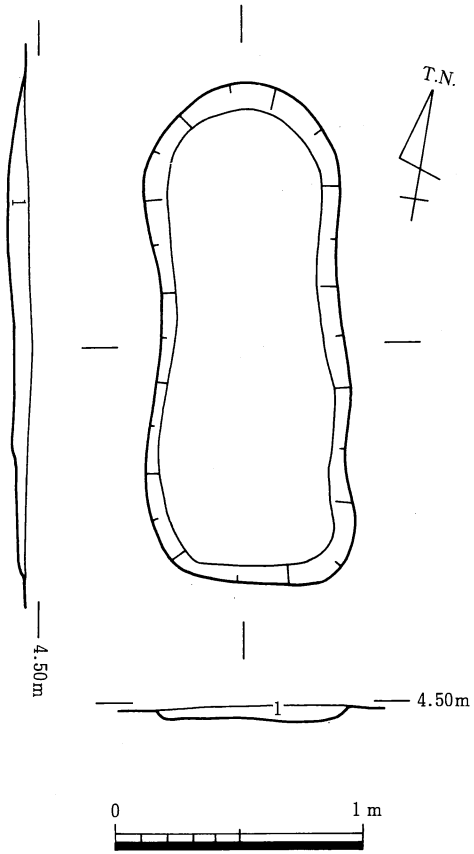
1. 暗灰褐色粘質土
2. 1に類似（黄褐色粘質土ブロックを含む）
3. 暗灰色粘質土（粘性が強い）
4. 暗黄褐色粘質土ブロック

第335図　STⅢ04 平・断面図



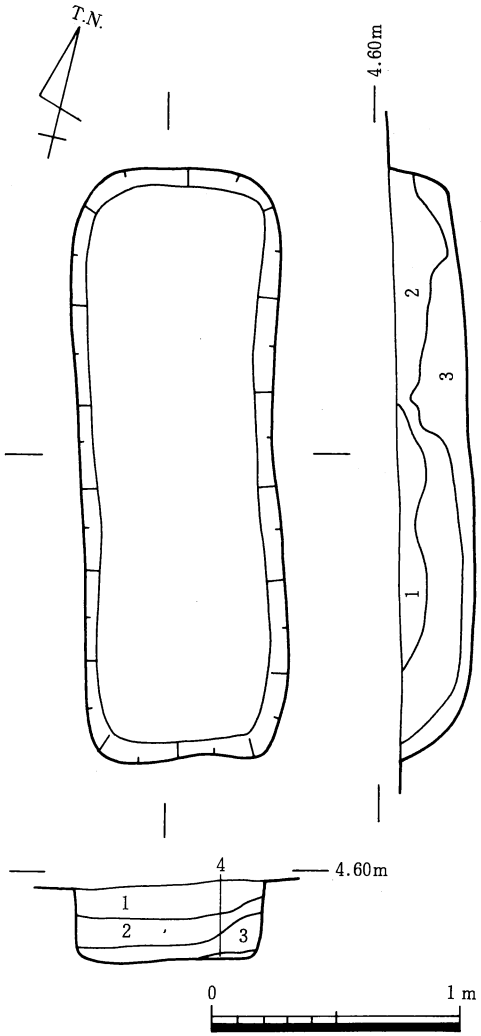
1. 灰色粘質土（茶褐色粒を含む）

第336図　STⅢ05 平・断面図



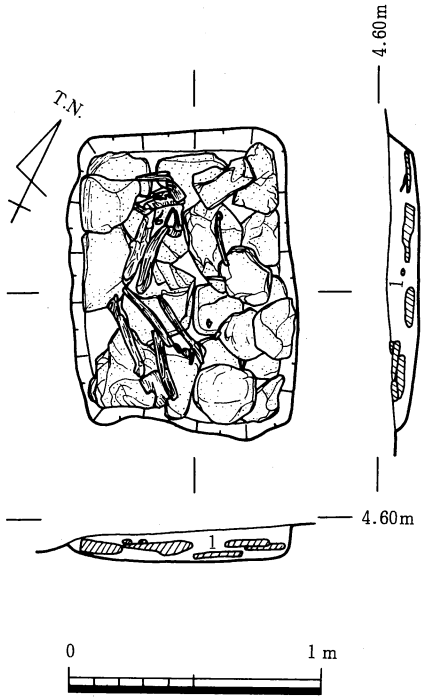
1. 灰色粘質土（多量の茶褐色粒と少量の黄褐色粒を含む）

第337図　STⅢ07 平・断面図



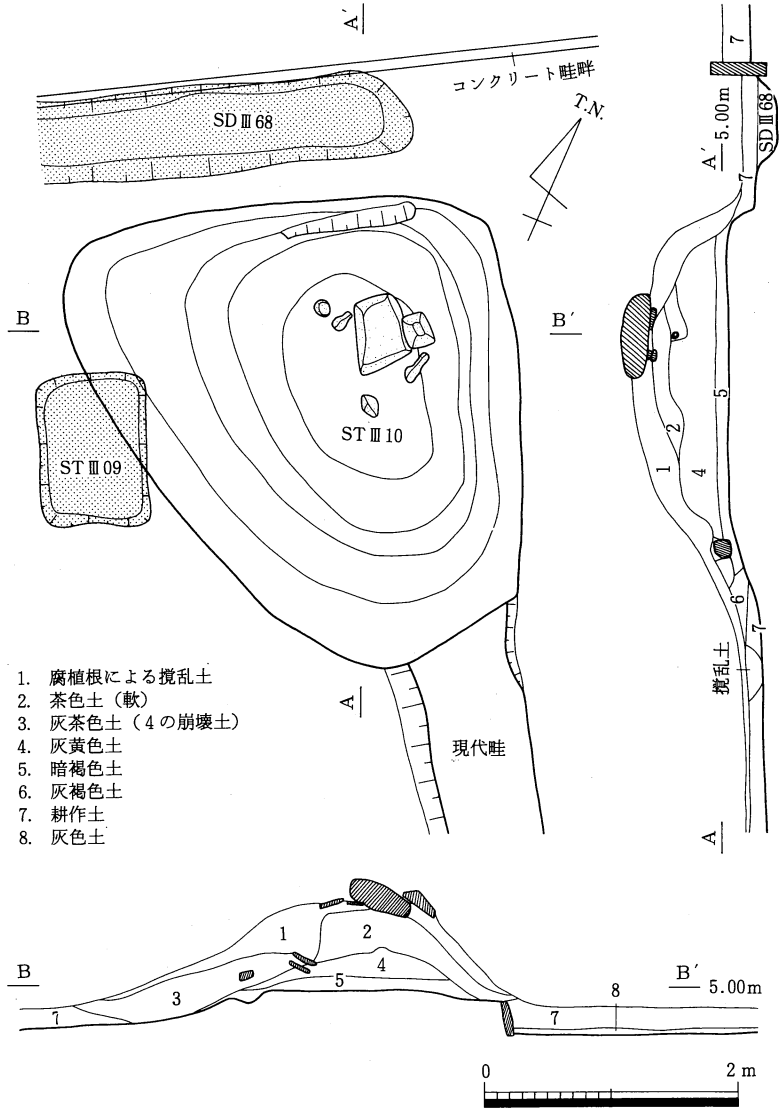
1. 暗褐色弱粘質土（黄褐色粘質ブロックを含む）
2. 〃　（砂粒を少量含む）
3. 暗灰褐色粘質土（黄褐色粘質ブロックを少量含む）
4. 暗灰色粘質土（粘性強い）

第338図　STⅢ08 平・断面図

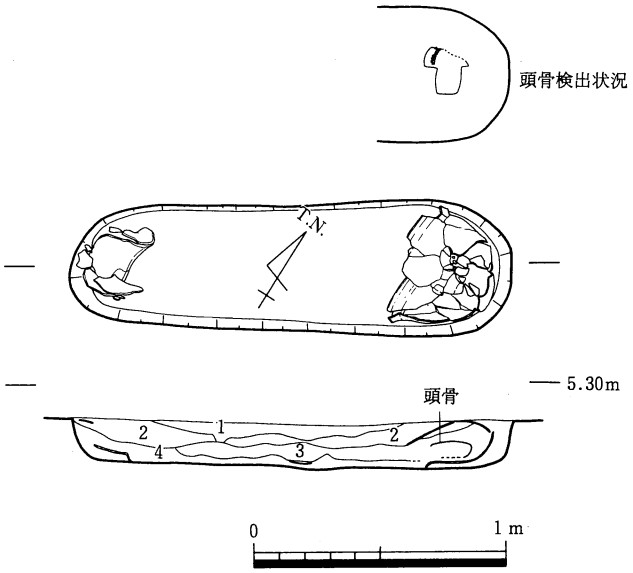


1. 暗灰色砂質土（ベースブロックを含む）

第339図　STⅢ09 平・断面図

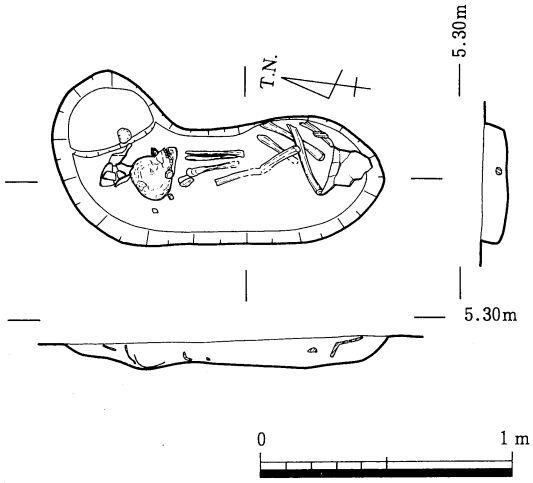


第340図　STⅢ10 平・断面図

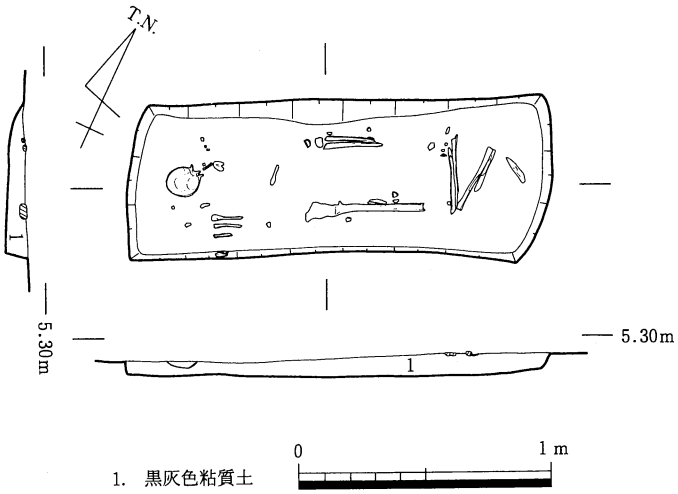


1. 黄灰色砂質土
2. 暗黄灰色砂質土
3. 淡灰褐色細砂（やや粘性あり）
4. 灰褐色粘質土（3より粘性強く，骨片を含む）

第341図　STⅢ11 平・断面図

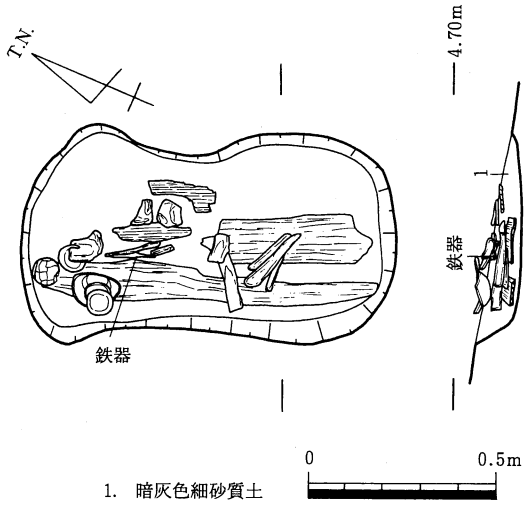


第342図　STⅢ12 平・断面図



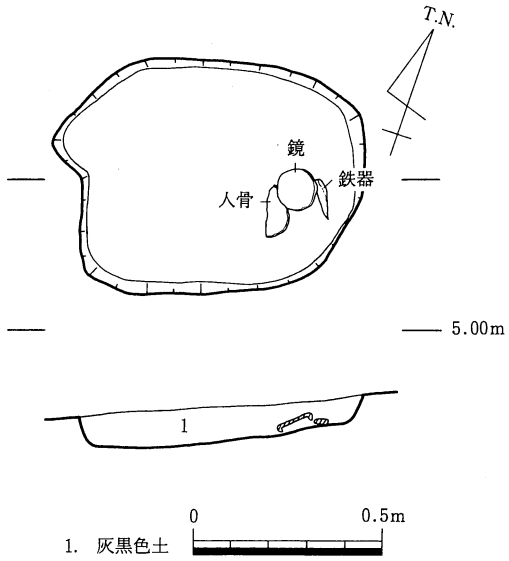
1. 黒灰色粘質土

第343図　STⅢ13 平・断面図



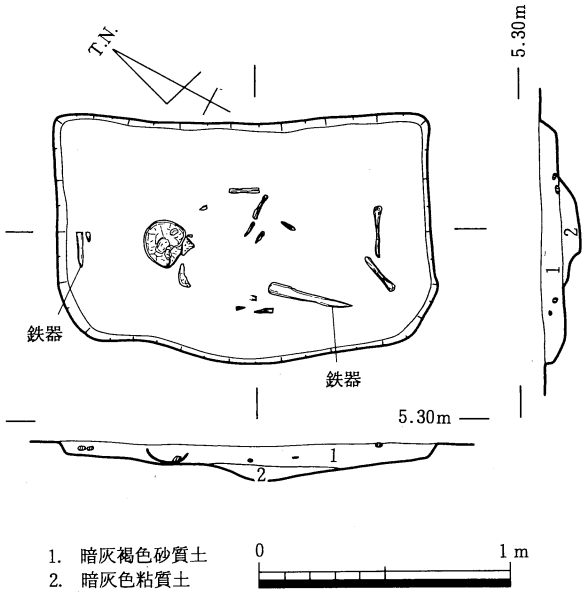
1. 暗灰色細砂質土

第344図　STⅢ14 平・断面図

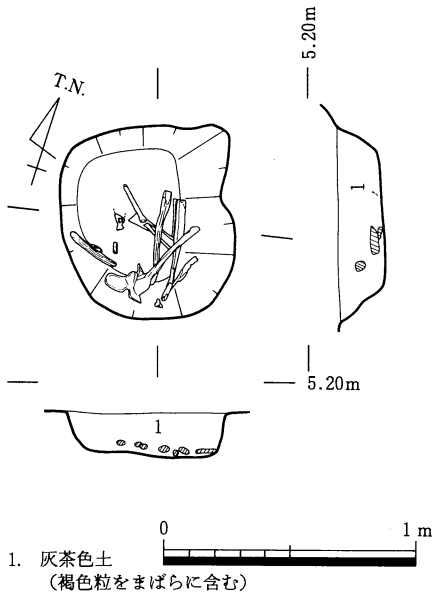


1. 灰黒色土

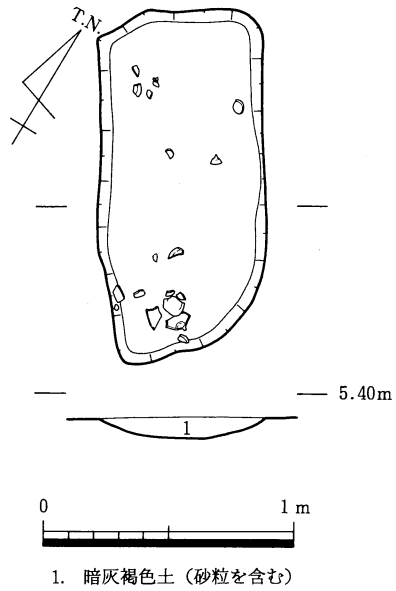
第345図　STⅢ15 平・断面図



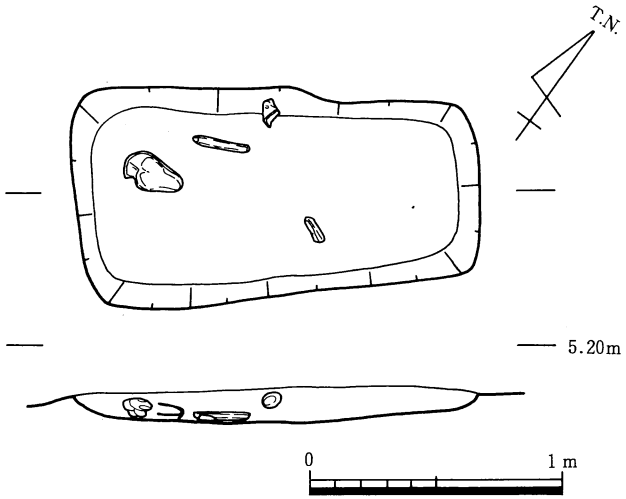
第346図　STⅢ17 平・断面図



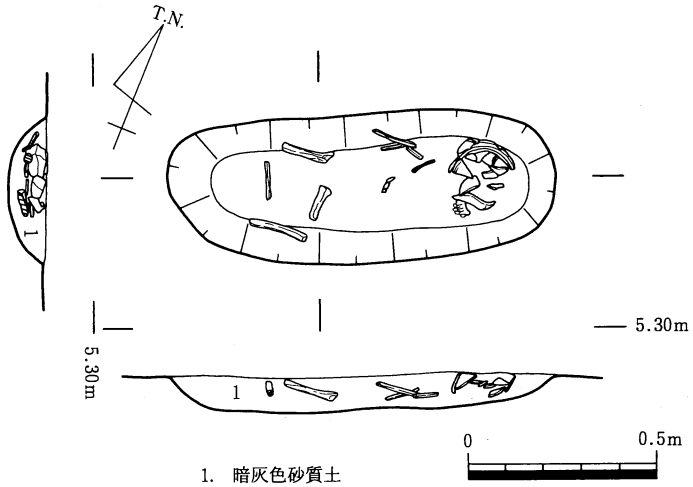
第347図　STⅢ18 平・断面図



第348図　STⅢ20 平・断面図



第349図　STⅢ21　平・断面図



第350図　STⅢ22 平・断面図

によるものか，頭骨その外を欠き，四肢骨・肋骨の一部を検出したにすぎない。埋葬姿勢は墓壙形状・規模から座葬と復元できる。副葬品は確認していない。ＳＤⅢ153東側張り出し部との切り合い関係から，本遺構はおおよそ12Ｃ以前に比定できる。（大久保）

ＳＴⅢ20（第348図）

Ｇ６区で検出した墓と考えられる遺構で，ＳＢⅢ272と切り合い関係にある。長軸1.4m，短軸0.7m，深さ0.1m前後を測る。平面形は南部がやや変形した長方形を呈し，主軸方位はＮ32°Ｅ前後を測る。内部から白磁・同安窯系の青磁椀，土師器皿片等が出土したが，ただ遺構上部が削平を受けたためか，残存状況が悪い。遺物の出土は南部に集中する傾向が認められる。頭位は，不明である。（藤好）

ＳＴⅢ21（第349図　図版218）

Ｇ６区で検出した墓で，ＳＤⅢ147・148に切られる。長軸1.6m，短軸0.8m，深さ0.1m前後を測る。平面形は長方形を呈し，主軸方位はＮ54°Ｗ前後を測り，東西方向を向く。西部で頭骨が出土し，頭位は西を向く。やや浮いた状況ではあるが，飯蛸壺が出土している。（藤好）

ＳＴⅢ22（第350図　図版218）

Ｆ６区で検出した墓である。長軸1.0m，短軸0.4m，深さ0.1m前後を測る。平面形は長円形を呈し，主軸方位はＮ68°Ｗ前後を測る。人骨は東部から頭骨が，西部から大腿骨が出土している。頭位周辺には土師器の甕が伏せられた状況で出土している。（藤好）

9.不明遺構

ＳＸⅢ01（第351・352図）

Ｇ29・30区で検出した遺構で，ＳＤⅡ01の東端に一部重複するように検出した。長軸4.0m，短軸3.0m，深さ0.6m前後を測る。検出した平面形は半円形を呈し，東半部は調査区外へ延びる。内部の堆積土はグライ化したシルトと砂である。シルト中には砂がラミナ状に堆積する層もあり，有機物の沈殿がほとんど検出されなかったことからすれば，流水下での堆積が考えられる。また南部には杭を２本打ち込んであり，土留めを目的としたものと考えられる。時期は明確ではないが，ほぼ同時期と考えられるＳＤⅡ01の上位から８～９世紀代の遺物が出土していることと，ＳＤⅡ01の上位には平安～鎌倉期の遺構がのる砂質土層が堆積していることから，その間の時期の所産である。（藤好）

ＳＸⅢ02（第352・464図）

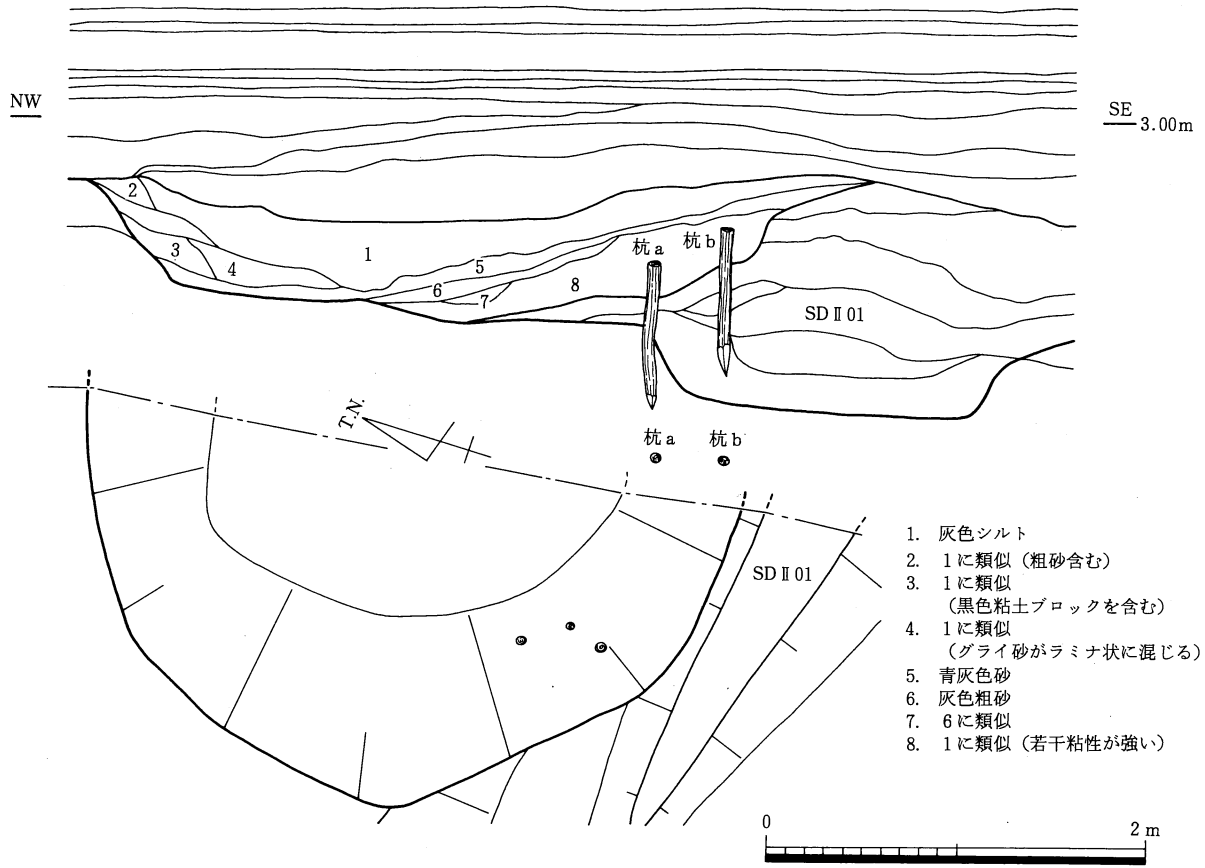
Ｈ・Ｉ28区で検出した遺構で，ＳＨⅡ03を切り，東側はＳＨⅢ01に連なる。長軸2.0m，短軸1.3m，深さ0.3m前後を測る。平面形は長円形を呈する。方位的には，ＳＢⅢ04・05等の11世紀代の建物群と共通する。ＳＤⅢ01は本遺構からの排水溝と考えられ東部低地帯へ延びる。（藤好）

ＳＸⅢ03（第464図）

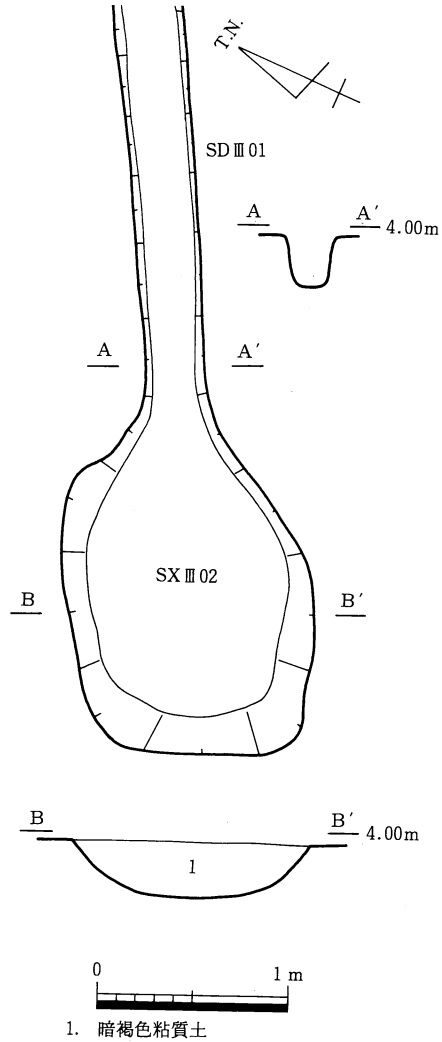
Ｉ22区で検出した鈎状に延びる溝で構成された遺構である。溝はＳＫⅢ05を囲んでおり，両者は関連する可能性が高い。（藤好）

ＳＸⅢ04（第353・465図　図版120　ＳＸ8607）

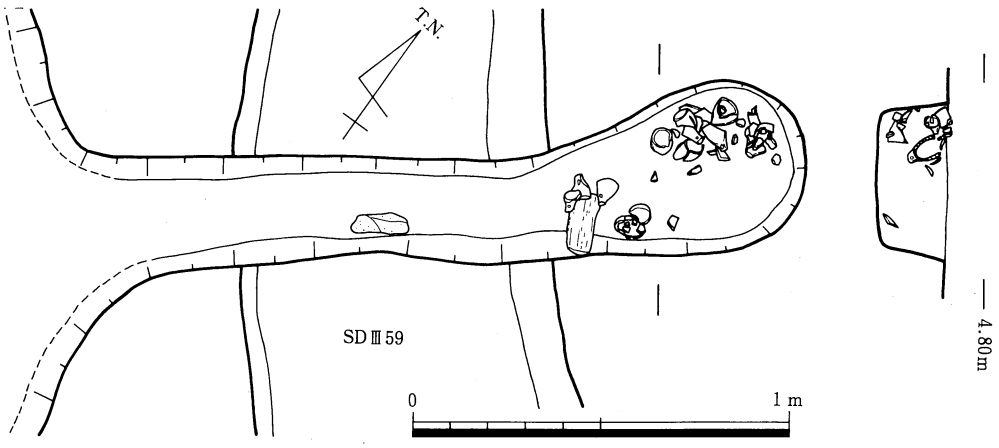
Ｈ15区で検出した遺構である。東部が胃袋状に脹らみ，西部の溝に連なる。溝は第１微高地と第２微高地を隔てる第２低地帯へ延びる。本遺構内からは，東部の脹らんだ個所から飯蛸壺が多量に出土したほか土師器の皿等が出土している。近くには同様の篦記号を持つ蛸壺を焼いたＳＫⅢ14があり，関連が考えられる。規模は溝部を含め概ね長さ約1.9m，幅約0.6m，深さ0.4m前後を測る。（藤好）



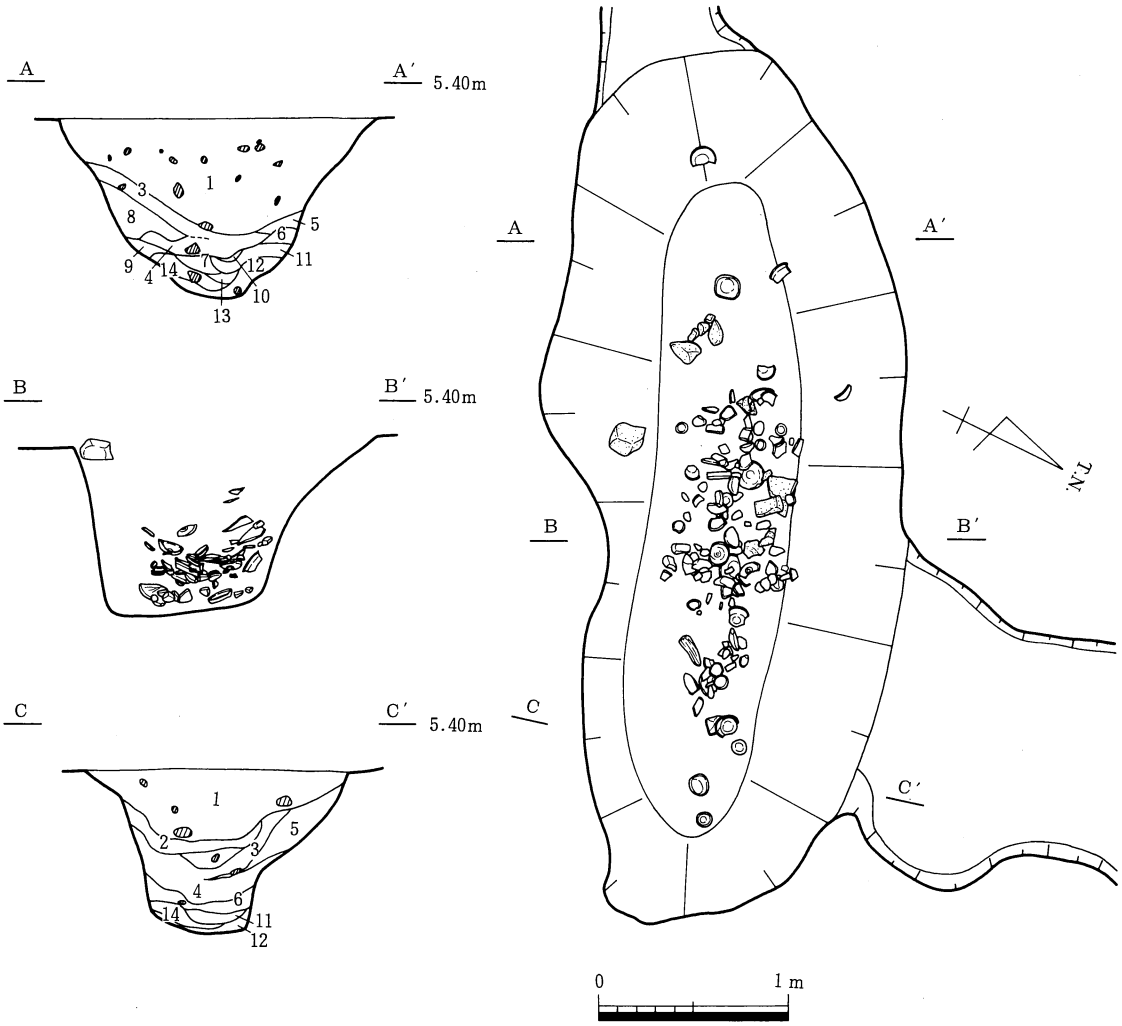
第351図　SXⅢ01 平・断面図



第352図　SXⅢ02，SDⅢ01 平・断面図

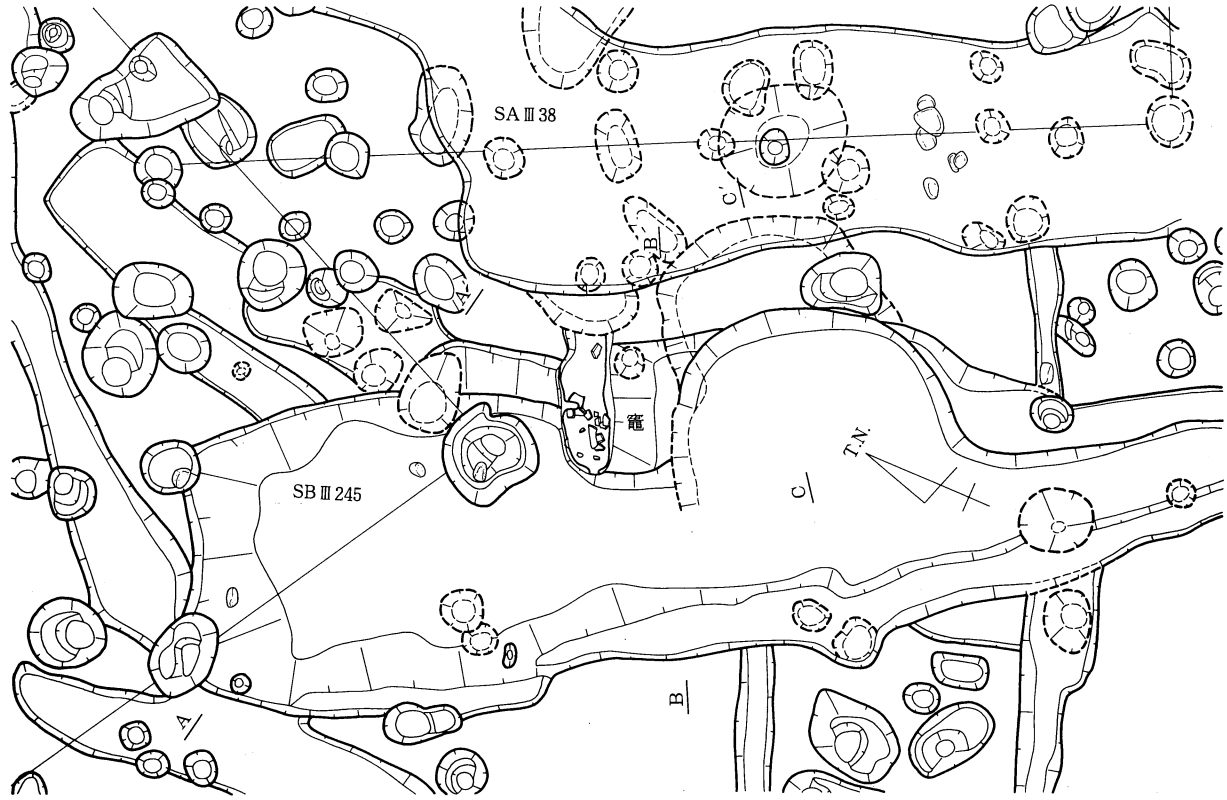


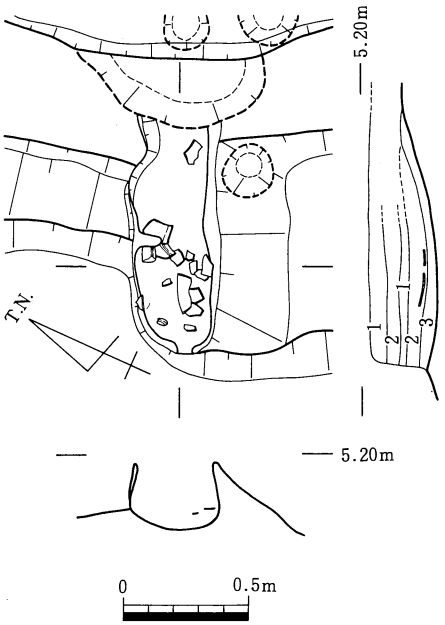
第353図　SXⅢ04 平・断面図



1. 暗赤褐色砂質土（礫を含む）
2. 暗赤褐色砂質土
3. 暗灰色粘土
4. 3に類似
5. 暗灰色粘土（礫が混ざる暗赤褐色砂質土を含む）
6. 暗赤褐色多砂質土
7. 5に類似
8. 6に類似
9. 暗赤褐色多砂質土（暗灰色粘土を少量含む）
10. 6に類似
11. 3に類似
12. 9に類似
13. 6に類似
14. 9に類似

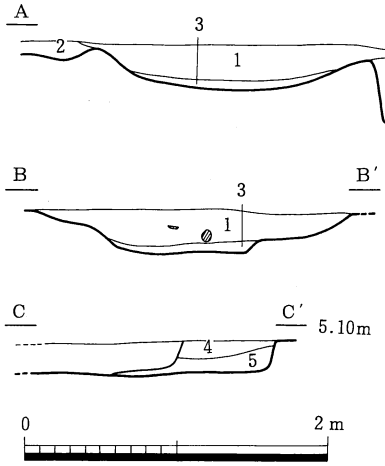
第354図　SXⅢ08 平・断面図





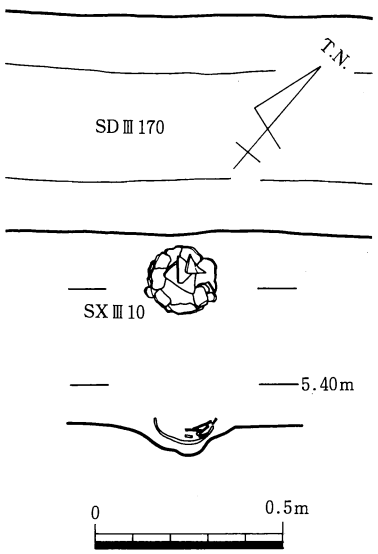
1. 暗灰褐色細砂質土混じり黄灰褐色シルト
2. 暗灰褐色細砂質土
3. 黒灰色炭化物

竈　平・断面図



1. 暗灰色砂質土
2. 黄褐色土混じり暗褐色弱粘質土
3. 暗灰色細砂質土
4. 黄褐色砂質土混じり暗灰褐色砂質土
5. 暗灰褐色多砂質土

第355図　SXⅢ09 平・断面図



第356図　SXⅢ10 平・断面図

ＳＸⅢ05（第382図）

G13区で検出した遺構で，ＳＤⅢ71の溝底への階段状の遺構である。３段ほどに石を上面に平坦面をそろえ，配置している。特に最下段の部分は明瞭に配石している。北側には隣接してＳＢⅢ99があり，本遺構と同時併存のものと考えられる。（藤好）

ＳＸⅢ08（第354図　図版219）

Ｇ６区で検出した遺構である。長軸4.6m，短軸1.6m，深さ1.0m前後を測る。平面形は長円形を呈し，内部の堆積層は井戸の埋土と類似するものであり，井戸状に水が溜まっていた可能性が高い。砂礫層中に掘り込んでおり，湧水点には達している。しかしほぼ同時期と考えられるＳＥⅢ05が近接することから機能的には，不明瞭なものである。中位から讃岐産の瓦器椀・畿内産の瓦器椀・土師器杯・皿・青磁椀・白磁椀等が出土している。土師器皿には糸切り底のものを含む。（藤好）

ＳＸⅢ09（第355・465図）

Ｆ６・７区で検出した。ＳＤⅢ149には溜り状に脹らむ個所が数個所認められ，その内ＳＸⅢ09は，南北に長軸を向ける長方形を呈し，長軸５ｍ前後，短軸2.1mほど，最深部で深さ0.3m前後の規模を測る。内部からは讃岐産の瓦器椀・土師器杯・皿が出土しており，皿の中には糸切り底のものを含んでいる。またその東部には竈状の遺構を検出した。内部からは炭化物等に混在して，土師器羽釜片・土錘等が出土している。竈状の遺構は，中央部で南東壁体の上部が内側に迫り出しており，出土遺物も壁体の迫り出しより西に集中する。また遺構の底面は東側で徐々に浅くなる。こうした点からすると，竈としては北側壁体の下部が薄すぎる難点はあるが，長方形の落ち込みと同時併存の竈である可能性が高い。周辺には組み合わせ不明な柱穴群も多く，覆い屋的なものが存在していた可能性もある。（藤好）

ＳＸⅢ10（第356・465図）

Ｉ４区の南端部，ＳＤⅢ170・171の合流地点の周辺で検出された。土師器甕の埋納遺構である。上半部は削平を受け下半部しか残っていない。切り込み面はＩ３区周辺に拡がる，整地層上面より切り込んでいる。掘り方は土器の規格に合わせ，ほぼ同一規模で掘り込んでいる。

（第465図24）は６・７世紀の肩部を欠く土師器の甕である。体部は球体状で，外面ハケ，内面指ナデが顕著である。口頸部は垂直気味に端部に至る。端部はわずかに肥厚して丸い。外面下半部は指頭痕及びハケ，内面には横方向のハケを施す。この土器は概ね，６・７世紀のものであろう。（西村）

10.溝

ＳＤⅢ01（第352・466図）

H28区で検出した，ＳＸⅢ02から東に延びる溝である。ＳＨⅡ03を切る。検出長約５ｍ，幅約0.4m，深さ約0.3mを測る。断面形は長方形を呈する非常に明確な形状の溝である。東部は第１低地帯に注ぎ込むが，途中土坑状の落ち込みと交わる。内部から緑釉陶器片が出土し，11世紀代のものと考えられる。（藤好）

ＳＤⅢ02（第357・466図　図版77）

Ｊ28区からH28区にかけて検出した東西方向に延びる溝である。検出長約32m，幅約0.8ｍ，深さ約0.4mを測る。断面形はＵ字形を呈する。第１微高地北部に集中する平安時代後半期の建物群の南限を画する溝である。方位的には概ねいわゆる条里方向と平行し，北部のＳＢⅢ04・05等と共通した方位を呈する。東部ではＳＤⅢ03と合流するが，合流部付近で南に方位を振るが，第１微高地の縁辺部のラインと直交することから，地形的な影響下で等高線と直交した結果の方位とすることができよう。本溝と

ＳＤⅢ03との合流部は，テラス状の溜りを形成する。やや方向が異なるがＳＤⅢ05と概ね平行し，ＳＤⅢ03を介して両者が同時併存であることは確実であり，ほぼ１町の間隔を持つ点は注目される。(藤好)

ＳＤⅢ03（第358・467～469図　図版77　ＳＤＮＡ01）

第１微高地の北半部で検出した溝で，南北方向の方位を持つ。H23～H28にかけて検出し，途中現国道の下部の未調査部を含む。北部では第１低地帯に面した第１微高地の東縁辺部を走る。検出長は未調査部を含み約100m，幅約1.2m，深さ約0.3mを測る。断面形は上面の広いＵ字形を呈する。北部ではＳＤⅢ02と交わり，南部ではＳＤⅢ05と合流する。中央部のH26区ではＳＤⅢ04と重複するが，ＳＤⅢ04の東部が現代の用水路で攪乱を受けており，先後関係は明瞭ではない。（藤好）

ＳＤⅢ04（第359・469図　図版78）

H26からＩ26区にかけて検出した溝で，南に現代の水路が平行して走り，南側の上場が攪乱を受けている。検出長約25m，上面幅約10m，深さ約1.4mを測る規模の大きな溝である。本遺構は，西部ではやや幅が広くなっており，第４低地帯に面して幅広くなった感を受ける。また市道を挟み西側に設定したトレンチの状況でも，第４低地帯の流路９との切り合いは確認できず，同時併存である可能性が高い。東部の第１低地帯と西部の第４低地帯を結ぶ排水もしくは用水等の機能を持つものと考えられる。本溝の溝底と東部の第１低地帯の最下部と比較すると，ＳＤⅢ04が標高2.7m前後と約２m前後浅くなり，低地帯がかなり埋没して時点で設けられた溝と考えられる。埋土がグライ化した砂と粘質土を基本としており，流水下の堆積であることを窺わせる。また本溝が，第１微高地の幅がもっとも狭くなった地点，つまり第１低地帯と第４低地帯のもっとも近接した個所に設置されていることも，用排水的な機能との関連を窺わせる。（藤好）

ＳＤⅢ05（第360・470図　ＳＤＳＡ01）

H21区の西北部からＩ23区にかけて，概ね東西方向に延びる溝である。Ｊ23区の東半は，市道の下部となり調査をすることができなかったため，Ｉ・Ｊ23区の溝との連続性については厳密には明らかではない。Ｉ・Ｊ区が削平を受け，一段低くなっているため，残存状況が悪いＳＤⅢ06との関連も考えられるが，Ｉ・Ｊ23区のＳＤⅢ07が本溝の西部である可能性もある。検出長は市道より東で60m前後，幅約1.2m，深さ約0.4mを測る。断面形は上面幅の広いＵ字形を呈する。Ｉ23区の南東隅で北にＳＤⅢ03が分岐するが，分岐する個所は溜り状を呈する。本溝の南には隣接してＳＤⅢ07がほぼ同一方向で走る。ＳＤⅢ07から分岐したＳＤⅢ08を本溝が切る。後述するＳＤⅢ07と共に，本溝が走るG22～K23にかけては，遺構の分布が比較的希薄な地区であり，ＳＸⅢ01・02のように弥生時代前期の包含層が溜り状に残る地区であることからすれば地形的には凹地状を呈していた可能性が高い。

また第１微高地北部のＳＤⅢ02と概ね平行して走る点は注目される。（藤好）

ＳＤⅢ06（第361・470図）

K23区よりＪ23区にかけて検出した，東西方向に延びる細い溝である。検出長約11.0m，幅約0.4m，深さ約0.2mを測る。断面形は浅いＵ字形を呈する。埋土は上位が灰黄色系の粘質土，下位が灰茶色系の砂質土である。

ＳＤⅢ06の出土遺物中図化出来るもの１点を抽出した。（第470図27）は内黒の黒色土器椀の底部である。高台部は外下方に延び，端部は尖り気味に丸く仕上げている。

出土遺物が少ないため，この溝の詳細な時期は判断できないが，概ね12・13世紀前後であろう。（西村）

ＳＤⅢ07（第362・471図　図版78　ＳＤＳＡ03・ＳＤ8601）

Ｈ22区からＫ23区にかけて，概ね東西方向に延びる溝である。長さは未調査の市道下部を含め70mほど，幅約1.0m，深さ0.1～0.4mを測る。断面形は上面幅の広いＵ字形を呈する。Ｈ22区でＳＤⅢ08が分岐する。本溝はＳＤⅢ05と平行して走り，その先行する溝である。Ｊ・Ｋ23区の本溝とした部分は，途中の市道部で隔てられており，厳密には本溝と同一溝と断定はできず，ＳＤⅢの05との関連も考えられる。（藤好）

ＳＤⅢ08（第363・471図　ＳＸＳＡ02）

Ｈ22～23区にかけて検出した南西から北東方向に延びる溝である。検出長約25m，幅約0.6m，深さ約0.2mを測る。断面形はＵ字形を呈する。途中でＳＤⅢ09が分岐し東方へ延びる。ＳＤⅢ08の東端部は第１低地帯と交わる。本ＳＤⅢ08は，ＳＤⅢ07がＳＤⅢ05に移行する時点で，ＳＤⅢ03となる可能性が考えられる。（藤好）

ＳＤⅢ09（第364・472図　ＳＸＳＡ01）

Ｇ・Ｈ23区検出した溝で，ＳＤⅢ08から分岐し東へ延び，ＳＢⅢ30を切る。東端部は第１低地帯と交わるが，合流部は滝壺状に脹らむ。検出長約14m，幅約0.7m，深さ約0.2mを測る。本溝は概ね先行するＳＢⅢ30と共通した方位を呈し，後出するＳＤⅢ03の方向性へと変化していく点は注目される。（藤好）

ＳＤⅢ10（第365・472図　ＳＤＳＡ06）

Ｈ・Ｉ22区で検出した概ね東西方向に延びる溝である。検出長約17m，幅約0.5m，深さ約0.1mを測る。断面形は浅く，上面幅の広いＵ字形を呈する。報公的には南部に位置するＳＢⅢ36等の７世紀代の掘立柱建物群と共通した方位を呈する。また時期的な先後関係からすれば，後出する溝ほど北に移動する傾向が認められ，凹地であった可能性が高いＧ22～Ｋ23にかけての地区が取り込まれていく状況が浮かび上がる。（藤好）

ＳＤⅢ11・12（第366・472図　ＳＤＳＡ02・ＳＤＳＡ07）

Ｇ23区で検出した２条の溝である。両溝とも，第１低地帯が埋没し，第１微高地より１段低い現状とほぼ変わらなくなった時期に，微高地の縁辺に沿って低地帯の埋土上を切って走る。検出長両溝とも25m前後を測る。幅は東側のＳＤⅢ12の方が広く約1.0m，ＳＤⅢ11は幅約0.5mほどを測る。深さは，両溝とも0.2m以下で，断面形は上面幅の広いＵ字形を呈する。（藤好）

ＳＤⅢ13（第367・472図）

Ｋ23区の東端よりＫ22区に向けて，南北方向に延びる短くて浅い溝である。北端部ではＳＫⅢ02により切られている。検出長約7.0m，幅約0.5m，深さ約0.2mを測る。断面形は浅いＵ字状を呈する。埋土は単層で灰茶色系の粘質土である。

ＳＤⅢ06の出土遺物中図化出来るもの７点を抽出した。（第472図20）は瓦器椀の底部で混入品である。（21～24）は土師器の甕の口頸部である。（25・26）は須恵器の杯である。（25）は６世紀後葉の杯蓋口縁部である。（26）は７・８世紀の杯身の底部片である。

図化資料とその他の資料を含めた出土遺物より，この溝の時期は８世紀前半頃に当る。（西村）

ＳＤⅢ14（第368・472図　ＳＤＳＡ04）

Ｇ22区からＫ22区にかけて，東西方向に延びる小規模な溝である。本溝はⅢ期としたが，現代の地割り線と一致することからかなり後出するものである可能性が高い。市道下の未調査区を含め，検出長約85m，幅約0.4m，深さ約0.3mを測る。断面形は上面幅の狭い台形状を呈する。（藤好）

ＳＤⅢ15（第369・472・473図　図版79　ＳＤ8602）

第１微高地の西縁辺部Ｊ21区より22区に向けて検出された，南北方向に延びる溝である。ＳＤⅢ14・16と切り合い関係にあり，両者に切られている。北端部より南へ約13m間はＳＤⅢ16に上位を切られ両者は同一方向に延びる。南端部は第４低地帯に続く。検出長約23.0m，幅約1.0m，深さ約0.3mを測る。断面形は幅広なＵ字形を呈する。埋土は下位層が灰茶褐色系の砂質土，上位層が灰白色系の粘土である。

ＳＤⅢ15の出土遺物中には混入品と考えられるものが多数あり，出土遺物は数時期に分かれる。これらの中より最大図化出来るもの34点を抽出した。

（第472図34～37，第473図１～６）は土師器の杯である。奈良時代のものと平安時代のもとに別れる。（第472図34～37）は８世紀頃の資料である。（第473図１～６）は平安時代の資料である。底部はわずかに突出し，平坦に仕上げる。体部は直線状に外上方に延びる。（第472図38・39，第473図８）は土師器皿である。（第473図８）は高台付きの皿である。高台部は短く下方に延びる。（第473図７）は土師器椀の高台部である。（第473図９～10）は土師器甕の口縁部である。（第473図11）は羽釜の上半部である。口縁部は外上方に延び端部は上方に肥厚する。口縁よりわずか下方で鍔が付く。（第473図12）は高台部を欠く内黒の黒色土器椀である。内面にはヘラミガキが認められる。（第473図13・14）は６世紀後葉の須恵器杯蓋の口縁部である。（第473図15～24）は７・８世紀の須恵器杯の資料である。（15～19）は８世紀前後の杯蓋である。（20～24）は８・９世紀前後の杯身である。（第473図25・26）は須恵器高杯の脚部である。（第473図28）は体部下半を欠く大形の須恵器の鉢である。

混入遺物を除いた出土遺物よりこの溝の時期は，概ね11・12世紀前後であろう。　（西村）

ＳＤⅢ16（第369図　図版79）

Ｊ21区で検出された。北半部ではＳＤⅢ15の上位層を切り込んで同一方向に流れるが，途中二股に分かれ，微高地の縁辺部に沿う形で概ね南北方向より東に向けて延びる溝である。検出長約25.0m，幅約0.6m，深さ約0.1mを測る。断面形は浅い幅広なＵ字形を呈する。埋土は単層で青灰色シルトである。なお，ＳＤⅢ16は途中未調査区があるため摑めないが，南に所在するＳＤⅢ17に続く可能性がある。

図化できる資料はなく詳細な時期は摑めないが，概ねＳＤⅢ15の時期に前後する時期が考えられ，11・12世紀前後に当るものと考えられる。　（西村）

ＳＤⅢ17（第473図　図版80）

西部の第４低地帯の流路２に面するＪ21区で，滝壺状を呈する落ち込みを囲むように走り，南部から落ち込み内に流れ込む溝である。東側の市道下部が未調査のため，ＳＤⅢ16との関連は不明瞭であるが，同一溝の可能性はある。検出長約８m，幅は広い個所で約1.3m，深さ約0.1mを測る。　（藤好）

ＳＤⅢ18（第370・474図　図版80）

第４低地帯に面した第１微高地の西端部をＪ18区からＪ19区にかけて，南北方向に，概ねいわゆる条里方向と平行して走る溝である。検出長約32m，幅約0.8m，深さ約0.2mを測る。断面形は上面幅の広いＵ字形を呈する。南端部は西に曲がり，後世の井戸に切られる。また南のＳＤⅢ19と概ね同一直線状にのり，関連が考えられる。　（藤好）

ＳＤⅢ19（第371・474図）

Ｉ14区の北西部からＪ18区にかけて，概ね南北方向に延びる溝である。南部は，西側の第４低地帯の流路３と平行し，途中で概ねいわゆる条里方向と平行して北上する。南部は第２低地帯の埋土を切る。南端部付近のＪ14区では，西に支流が分岐し，第４低地帯流路１に注ぎ込む。検出長約90m，幅約1.4

m，深さ約0.5mを測る。断面形は上面幅が広い台形状を呈する。（藤好）

ＳＤⅢ20・21

ＳＤⅢ20は，Ｊ14区の中央部からＫ16区にかけて，第１微高地の西側の縁辺に沿って走る溝で，ＳＤⅢ21はＪ15区でやや北寄りに分岐する。両溝とも埋土が類似し同時併存である可能性が高い。西北端部は第４低地帯流路４付近で不明瞭となり，消滅する。遺物の出土を見ず，時期の否定が困難であるが埋土的にはＳＤⅢ19に近い。検出長45m前後を測り，幅は両溝とも約0.4m，深さ0.2mほどを測る。（藤好）

ＳＤⅢ24

Ｈ21区で検出した東西に延びる小溝である。西延長方向に位置するＳＤⅢ23と本来同一の溝の可能性がある。検出長約５m，幅約0.4m，深さ0.1mを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は単層で灰褐色粘質土である。（大久保）

ＳＤⅢ25（第372・475・476図　図版81　ＳＤ8603）

Ｉ20区からＨ21区で検出したほぼ真北に向かって直線的に延びる溝である。検出長は約28mで南北延長部分は削平され確認できなかった。幅約1.0m，深さ0.2mを測り，断面形は「Ｕ」字形を呈する。埋土は２層に分割できるが大差無くほぼ暗褐色を呈する砂質土である。本溝はほぼ直交する流路方向を持つＳＤⅢ07・10・27とともに第一微高地中部西半の大形建物群を取り囲み，南北約63m，東西35m以上の屋敷地を区画する。

溝からは土師器・須恵器の供膳形態を中心に主要器種を揃えた比較的多量の遺物を出土している。また円面硯片を伴う点が注目できる。（第475図１，第476図１・２）は土師器杯である。口縁端部は細く尖らせるか僅かに内側に突出し（第476図１）では内面に暗文を持つ。（第475図３～５，第476図３）は土師器皿である。緩やかに湾曲して短く直立する口縁部を持ち，内面には暗文を施す。（第475図２）は台付皿脚部である。（第476図４）は小形の球形甕，（第476図５・６）は長胴甕ないしは大形の球形甕であろう。（第476図７）は体部片の湾曲具合から見て把手付甕である。（第475図６）は大形の土鍋である。（第475図７）は大形甕の口縁部直下に突出度の高い鍔を付した羽釜で，本遺跡では該期に類例は全く無い。（第475図８）は甑口縁部。（第475図９）は竈である。筒形の体部の両側に把手を付し，全面を大きく切り取り，突出度の高い庇を付ける。体中位には低い突帯が巡る。

（第475図10～12，第476図11・12）は須恵器杯蓋である。（第476図11）はやや低めの宝珠つまみを持ち，内面に返りを付す。他の杯蓋よりも明らかに古い様相である。他はほぼ扁平で口縁部は小さく折れ，扁平なボタン状のつまみを持つ。（第476図９・10）は杯蓋ないしは無台の杯身である。杯蓋ならば６世紀代に上り得る。（第475図13～15，第476図13～15）は杯身である。（第475図13）が７世紀中葉に上る他はほぼ７世紀後葉に比定出来る。（第476図15）は見込みにへら記号がある。（第475図15）は薄手で小片のため断定し難いが皿かも知れない。そうであれば８世紀代に下る可能性がある。（第475図16）は円面硯脚部。隅丸方形ないしは楕円形の透かしを穿つ。（第476図16・17・19）は甕，（18）は壺肩部であろう。

以上の資料は概ね７世紀後葉を中心とする時期に比定出来るが，一部に７世紀中葉以前に上りあるいは８世紀に下る例も含まれる。ほぼ本溝及び関連溝によって区画される範囲の建物群の年代観と矛盾しない。（大久保）

ＳＤⅢ26（第81・476図）

第１微高地上のＩ19・20区で検出した。ＳＢⅢ44・45の東側，二つの建物に主軸を合わせ南北方向に延びる不整形な溝である。位置関係よりＳＢⅢ44・45何れかの雨落ち溝の可能性が高い。検出長約9.5

m，幅約0.9m，深さ約0.2mを測る。断面形は浅いレンズ状を呈する。埋土は単層で黒褐色土である。

（西村）

ＳＤⅢ27（第373・476図　図版81　ＳＤ8606）

Ｉ19区で検出したほぼ真北に直交した方向に配される小溝である。検出長約９ｍで検出部分西端は現代水路により破壊される。後述するＳＤⅢ25との関係から見て，検出部分東端付近で北に折れる可能性がある。幅平均0.7m，深さ0.4mを測る。第一微高地西半の大形建物群の丁度南限部分に位置し，ＳＤⅢ25とほぼ直交する方向にあることからこれとセットないしは同一の溝として建物群を区画すると考えている。

（第476図20）は，須恵器杯蓋でボタン状のつまみを付し口径は大きい。（21）は無台の杯で体部はかなり丸みを帯びる。（22）は比較的高台が張る。何れも７世紀中葉から後半の特徴を示し，ＳＤⅢ25の年代観と矛盾しない。（大久保）

ＳＤⅢ28（第476図）

Ｈ21区で検出した北西に延びる小溝である。検出長約４ｍで南端をＳＫⅣ06に切られる。幅約0.5m，深さ0.1mを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は単層で灰褐色粘質土である。少量の須恵器杯類を出土している。

（第476図23）は土師器甕，外面は剝離しているが内面にはナデ調整を認める。（第476図24）は須恵器杯蓋，口径は小さく，頂部はヘラ切りのままである。（第476図25）は杯蓋で内面に返りを持つ。（第476図26）は小形の須恵器甕口径部，外面口径直下に低い突帯を持ち，明らかに他の土器類より古い様相を示す。混入品か。（大久保）

ＳＤⅢ29（第374・477図　ＳＤ8604）

Ｇ・Ｈ21区で検出したかなり直線的に東西に延びる小溝である。長約21.4mを検出した。東端付近でＳＤⅡ04を切る。幅0.9～1.1m，深さ0.2mを測り，断面形は浅い皿状を呈する。埋土は単層で黒褐色土である。本溝は周囲に弥生後期の遺構が集中しており，その時期の遺物が多量に混入している。

（第477図１～９）は弥生後期後葉の土器で混入品である。（10～13）は須恵器杯身。立ち上がりはやや小形化しているが底部には回転へら削りを加える。（14）は口縁部に内傾する端面を持つ。杯では古すぎるので壺蓋の可能性が高い。（15）は大形の脚台で透かしを穿つ。台付壺であろう。以上の資料から６世紀後葉ないしは末葉に比定出来る。（大久保）

ＳＤⅢ30（第375図　ＳＤ8604）

Ｈ20・21区で検出した比較的直線的にほぼ真北に流れる溝である。約4m前後の間隔を保ってＳＤⅢ25と並行する。長約12mを検出した。南端でＳＫⅢ09に，北端でＳＤⅣ01に切られる。幅0.4m，深さ0.1mを測り，断面形は浅い皿状を呈する。埋土は単層で黒灰色砂質土である。遺物は伴わない。（大久保）

ＳＤⅢ31（第376・477図）

Ｈ20・21，Ｇ21区で検出した。南から約15m程は真北に近似した方向を持ち，その北側で大きく湾曲して東に抜ける。南半部では約３ｍの間隔をもってほぼＳＤⅢ30に並行する。検出長は約36mに達する。幅0.3～0.4m，深さ0.1mを測り，断面形は浅い皿状を呈する。埋土は単層で暗灰色砂質土である。本溝も周囲に多くの弥生後期の遺構があり，大部分はそれに関わる混入資料である。

（第477図16～19）は弥生時代後期後葉の土器で混入品である。本溝の時期を示す資料は（20）の杯小片など僅かな須恵器片にすぎない。（大久保）

ＳＤⅢ32（第377・477・478図　ＳＤ8610）

Ｆ～Ｉ20区で検出した。大きく二箇所で折れて，折れ線状に走る溝である。東端で第一低地帯に注ぎ込む。西端は本来的に南から延びるＳＤⅢ33に連続した可能性が高い。検出長は約52ｍに達する。幅0.6ｍ，深さ0.1～0.4ｍを測り，断面形は「Ｕ」字状を呈する。東半部の方が残りが相対的に良好である。埋土は単層で黒灰色粘質土である。出土遺物の大半が弥生後期土器であるが，東半部の溝底で須恵器蓋杯等を出土した。

（第477図21～31）は弥生後期後葉の土器で混入品である。本溝の時期を示すのは（第478図１～８）の須恵器であろう。ただしこれらは（１・２）のように５世紀代に上る可能性の高い杯蓋から（７）の７世紀後葉以降の杯蓋までかなり時期幅がある。なお（１・２）のように５世紀代に上る資料は第一低地帯流路２周辺で僅かに確認されているが，本溝周辺を含め該期の遺構は未検出である。　（大久保）

ＳＤⅢ33（第478図　図版81）

Ｉ18・19区で検出された。南・北方向に延びる溝である。この溝の北にはＳＤⅢ30・31・32等の溝があり，いずれかの溝に続くものとみられる。かなり削平を受けているため，残りが悪い。検出長約39.0ｍ，幅約0.6ｍ，深さ約0.2ｍを測る。埋土は単層で赤褐色の砂質土である。

ＳＤⅢ33の出土遺物は混入品と考えられるものが大半である。これらの中より図化出来るもの２点を抽出した。（第478図９）は甕ないし壺の口縁部である。(10) は壺の底部である。いずれも弥生時代後期のもので混入品である。

出土遺物より溝の時期を推定する事は出来ないが，この溝が，北に位置するＳＤⅢ30・31・32等の溝の中でいずれかの溝に繋がっていた可能性が高いため，これらの溝とほぼ同一時期の６世紀後葉前後に当るものと考えたい。　（西村）

ＳＤⅢ36（第478図）

Ｇ21区よりＦ21区にかけて検出した，東西方向に延びる細い溝である。ＳＤⅣ05，ＳＤⅢ35と切り合い関係にあり，ＳＤⅢ35を切りＳＤⅣ05に切られている。なお，中間点でＳＤⅢ37が南に派生する。検出長約13.0ｍ,幅約0.4ｍ,深さ約0.1ｍを測る。断面形はＵ字形を呈する。埋土は単層で黒褐色土である。

出土遺物の中で図化出来るもの１点を抽出した。（第478図11）は６世紀末ないし７世紀初頭の須恵器の杯身である。底部はヘラ切り後ナデを施し，内湾して口縁部に至る。口縁部のたちあがりは短く内傾している。出土遺物よりこの溝の時期は，６世紀末ないし７世紀初頭前後であろう。　（西村）

ＳＤⅢ39（第378図　ＳＤ8616）

第２微高地の西縁辺を，第２低地帯に沿うように走る溝である。Ｈ16区からＧ17区にかけて検出した。ＳＨⅡ30・31を切る。北端部で第２低地帯に注ぎ込む。第２微高地南部で，同様に微高地の西縁辺をめぐるＳＤⅢ40・41のいずれかと同一溝であると考えられ，規模や方向からすればＳＤⅢ41の可能性が高い。検出長約40ｍ，幅約0.6ｍ，深さ約0.1ｍを測る。断面形は浅い台形状を呈する。良好な遺物は出土していず，時期比定が困難であるが，仮にＳＤⅢ41と同一溝であれば，ＳＤⅢ41は第２微高地の掘立柱建物建物群との関連が強く，ＳＢⅢ78・80等と同一時期の可能性が高い。また上限としてはＳＸⅢ04・ＳＫⅢ14に切られる。　（藤好）

ＳＤⅢ40（第478図　ＳＤ8617）

本溝は，ＳＤⅢ41と共に第２微高地の西南部を第２低地帯に沿うようにめぐる溝で，南部でＳＤⅢ41・60に切られる。南部は第３微高地の流路と交わり，北端はＨ15区の北部で不明瞭となる。Ｇ13区から

H15区にかけて検出した。約60m弱を検出し，幅約1.5m，深さ約0.1mを測る。本溝は，後出するＳＤⅢ41と比較すれば，より地形に影響された廻り方をしている点とより微高地の西縁寄りを走ることに特徴がある。（藤好）

ＳＤⅢ42（第478図　図版121）

G13区からH14区にかけて，東西方向に延びる溝である。検出長約20m，幅約0.8m，深さ約0.1mを測る。断面形は上面幅の広いU字形を呈する。ＳＤⅢ41から分岐する溝である。（藤好）

ＳＤⅢ44（第479図）

第２微高地上のＦ17区で検出した。ＳＢⅢ59と主軸を合わせ南北方向に延びる溝である。位置関係よりＳＢⅢ59の雨落ち溝の可能性が高い。検出長約5.8m，幅約0.9m，深さ約0.1mを測る。断面形はU字形を呈する。埋土は単層で黒褐色土である。

出土遺物の中で詳細な時期の解るものは少なく，図化出来るもの１点を抽出した。（第479図１）は青磁椀の体部片である。出土遺物よりこの溝の時期は概ね中世頃であろう。（西村）

ＳＤⅢ46（第379図）

G15・16区で検出した南北方向に延びる溝で，ＳＤⅣ11に切られる。検出長約10m，幅約0.5m，深さ約0.1mを測る。断面形は上面幅の広いU字形を呈する。方向は第２微高地の中心的な総柱建物であるＳＢⅢ65等の建物群と共通する。（藤好）

ＳＤⅢ47（第380・479図）

G15・16区で検出した溝である。検出長約28m，幅約0.7m，深さ約0.1mを測る。方向的には微高地西縁を走るＳＤⅢ41や微高地中央部のＳＤⅢ46と共通した方位を持つ。（藤好）

ＳＤⅢ49（第238図）

H15で検出した東西方向の溝で，ＳＢⅢ72の雨落ち溝と考えられる。検出長約５m，幅約0.4m，深さ約0.1mを測る。断面形は上面幅の広いU字形を呈する。（藤好）

ＳＤⅢ51（第187図）

G15区で検出した溝でＳＨⅢ19の周溝と考えられる。検出長約６m，幅約0.3m，深さ約0.1mを測る。（藤好）

ＳＤⅢ52（第187図）

G15で検出した溝で，ＳＤⅢ51と共にＳＨⅢ19の周溝と考えられる。ＳＤⅢ50に連なる。検出長約８m，幅約0.3m，深さ約0.1mを測る。本溝から排水溝と考えられるＳＤⅢ50が南西方向に延び，ＳＤⅢ50は２間×２間の建物ＳＢⅢ75に切られる。ＳＢⅢ75がＳＢⅢ65等と共通した方位を呈することから，ＳＨⅢ19は第２微高地の掘立柱建物群より先行すると考えられる。（藤好）

ＳＤⅢ54（第479図）

H14・15区で検出した南北方向の溝で，ＳＢⅢ75の西側の雨落ち溝と考えられる。ＳＨⅢ75の排水溝ＳＤⅢ50やＳＢⅢ77と関連の可能性が高いＳＤⅢ55を切る。H14区からH15区にかけて，概ね南北方向に延びる溝である。検出長約７m，幅約0.5m，深さ約0.1mを測る。（藤好）

ＳＤⅢ55（第480図）

G・H15区で検出した溝で，ＳＢⅢ75・76に切られる。ＳＢⅢ77・78と共通した方位を呈し，時期的には近接したものであろう。検出長15mほど，幅約0.5m，深さ約0.1mを測る。（藤好）

ＳＤⅢ58（第480図）

Ｇ15区からＨ14区にかけて，北東から南西方向に延びる溝である。検出長20mほど，幅約0.5m，深さ約0.1mを測る。ＳＤⅢ55と重複し，先後関係が考えられるが，埋土の類似から切り合いは不明である。（藤好）

ＳＤⅢ60（第381・480図　図版121　ＳＤ8619）

Ｈ14区からＩ14区にかけて，東西方向に延びる溝である。東部は，落ち込み状を呈し南部は第２低地帯に注ぐ。ＳＤⅢ40・41・57～59等を切る。検出長約30m，幅約2.5m，深さ約0.4mを測る。（藤好）

ＳＤⅢ61（第480図　図版121）

Ｉ14区の第２低地帯の堆積層上面で検出した溝で，ＳＤⅢ60から分岐し低地帯の流路と一致した方向を持つ。検出長約10m，幅約0.5m，深さ約0.1mを測る。（藤好）

ＳＤⅢ62（第480図）

Ｈ14区で検出した第２低地帯に流れ込む溝である。検出長約９m，幅約0.5m，深さ約0.2mを測る。（藤好）

ＳＤⅢ71（第382・383・481～487図　図版222～225　ＳＤ8706）

第２微高地と第３微高地の間に位置する第３低地帯の埋没後に設けられた溝である。東西方向を呈し，第１低地帯と第４低地帯流路７を結ぶ。本溝は，条里坪界線と一致するＳＤⅢ75と概ね直交する同時併存のものである。Ｄ14区からL12区にかけて検出した。東部は第１低地帯に注ぎ，また西部は第４低地帯の流路１を切り，第４低地帯の流路７に注ぐ。検出長約160m，幅４mほど，深さ約1.2mを測る。断面形はＶ字形を呈する。本溝には概ね一致して現代の水路が走り，残存状況が悪い個所も存在した。ＳＤⅢ75の合流部以西は，ＳＤⅢ75の方位と概ね直交するが，合流部以東では，第３低地帯内を走る制約上，やや北方向にずれる。ただ合流部付近では第３低地帯の北岸に位置するのに対して東端では南岸寄りに流路を持つなど，地形的な制約下で条里方向に合わせようとの意図が窺われる。本溝は第４低地帯流路１と第３低地帯最上層を覆う洪水砂層堆積後に営まれた溝である。Ｉ2I以西第４低地帯にのる西部と，Ｆ13以東の東部，その間の中央部の３地区に分け遺物を掲載した。（藤好）

ＳＤⅢ72（第382図）

Ｅ13区からＤ14区にかけて，南西から北東方向に延びる溝で，ＳＤⅢ71から分岐した溝である。検出長約25m，幅約２m，深さ約0.4mを測る。（藤好）

ＳＤⅢ73（第487図）

Ｄ・Ｅ13区で検出した溝で，ＳＤⅢ72同様ＳＤⅢ71から分岐した溝である。検出長約20mほど，幅約1.2mを測る。（藤好）

ＳＤⅢ75（第384・487～490図　ＳＤ8708）

調査区の南端から第４微高地の北まで，微高地の中央部を条里の坪界線とほぼ一致して南北に走る溝で，平安期以降の下川津遺跡の方位決定の基準となると考えられる。調査対象地内を南北に走る市道に沿う現水路とＳＤⅢ75は概ね一致する。Ｇ１区からＩ12区にかけて検出した。確認長210mほど，また幅は現水路との重複等で確認が困難であるが約３m前後，深さ約1.3mを測る。断面形は上面幅の広いＵ字形を呈する。本溝の南部は調査区外へ延び，北端部はＳＤⅢ71と合流する。本溝はＳＤⅢ71以北へも延びるが，合流部以北の大半が市道と現水路と重なり，調査を実施できなかったことと，合流部付近が現在の東西水路の交差部と重複するため遺構の残存状況が悪く，延長時期を特定するデータは得られな

かった。

また本溝とは多くの東西方向の溝が交わるが，その代表的なものには南部からＧ１区ＳＤⅢ78，Ｈ５区ＳＤⅢ143・144，Ｉ６区ＳＤⅢ76等がある。このうち，ＳＤⅢ143・144との合流部で，本溝ＳＤⅢ75は西に向き，ＳＤⅢ76との合流部で向きを本来の方位に戻し，Ｉ８区北部でまた東寄りに振り12mほど走った後，本来の方向に向く。またH10区北部で東寄りに振り，その後西に湾曲しながらＳＤⅢ71と合流する。本遺構は必ずしも直線的に走るだけではなく途中数個所で折れ曲がる。ＳＤⅢ143・144以北の西部への拡張区では，本来の延長線上に細い溝が走り基準線は厳然として存在することが分かる。

（藤好）

ＳＤⅢ76（第385・490図）

Ｉ６区のほぼ中央部で，ＳＤⅢ75より西に向けて短く派生する溝である。西端部ではＳＤⅢ161を切っている。検出長約11.0m，幅約2.3m，深さ約0.4mを測る。断面形は幅の広い逆台形状を呈する。埋土は上位層が黄灰色砂質土で，下位層が淡灰色粗砂層である。

出土遺物の中で図化出来るもの３点を抽出した。（第490図10）は土師質の杯である。底部は平坦で，内湾気味に口縁部に至る。底部外面にはヘラミガキが認められる。（11）は土師質甕の上半部である。体部は垂直気味に口縁部に至り，口縁部はくの字状に折れ曲がり口縁部に至る。口縁部は上方につまみあげている。外面には縦ハケ，内面には横ハケ及び板ナデを施している。（12）は須恵質椀の底部である。

出土遺物よりこの溝の時期は，概ね12世紀前後であろう。（西村）

ＳＤⅢ80（第386図）

Ｂ13区で検出した。第３微高地北端部にあって東西に流れる。検出したのは４ｍ程度である。幅1.5ｍ，深さ0.4mを測り，断面形は「V」字状を呈する。第１低地帯上面を越えて，中世大溝ＳＤⅢ70もしくはそれに関わる枝溝に連続する可能性が高い。底面直上から土師質椀を出土した。ほぼ13世紀代に比定できる。（大久保）

ＳＤⅢ82（第387図）

Ｅ11区よりＦ12区にかけて，途中北に屈曲し第３低地帯に続く溝である。北端部ではＳＤⅢ81を切り込んでいる。検出長約28.0m，幅約1.1m，深さ約0.5mを測る。断面形は幅広なＵ字状を呈する。埋土は灰黄色系の粘質土あるいは砂質土である。

図化出来る資料が見出せないため，出土遺物より詳細な時期を判断する事は出来ないが，この溝は６世紀後葉～７世紀代の可能性が高い。（西村）

ＳＤⅢ83（第388・490～492図　図版230・231）

第４微高地の東縁辺部のＥ10区周辺を画する形で検出された溝である。ＳＤⅢ83の主軸は，概ね南北・北西・北東３方向に分かれ，東側からみて不整台形状に配されている。そのためＳＤⅢ83は，北・南・西の三方向を溝で，東を第１低地帯で画した一空間(面積592.6)を形成している。また，ＳＤⅢ84と切り合い関係にあり，その溝を切っている。ＳＤⅢ84はＳＤⅢ83とほぼ同一配置で切り合う溝である。検出長約67.0m,幅約0.5m,深さ約0.2mを測る。断面形は幅広な逆台形状あるいは幅広なＵ字状を呈する。

なお，この溝に画された空間にはＳＢⅢ123・124，ＳＡⅢ27等の遺構があり，そのためこれらを画する目的で配された溝の可能性が高い。

出土遺物の中にはＳＤⅢ84からの混入と考えられる。６世紀代の資料を多量に含む。これらの中より図化出来るもの24点を抽出した。（第490図13）は土師器の台付皿の高台部である。（第490図14～18）は

土師器甕である。口縁部は短く垂直気味に立ち上がるものと，「く」の字状に折れ曲がるものとがある。（18）は後者の部類で底部は丸底で，体部は丸味を帯びるが不整形である。口縁端部は玉状に肥厚する。（19・20）は土師器甕の把手部である。（第491図１～10）は須恵器杯である。（１～６・８・10）は６世紀後葉の杯である。（７）はつまみの付く須恵器蓋である。（11）は須恵器高杯の脚部である。（12）は底部を欠く須恵器長頸壺である。体部は球体化し，一条の沈線を持つ。頸部は直線気味に延び，外面中央部に一条の沈線を施している。（13～15）は須恵器の甕である。体部は球体化し，口縁部は外上方に比較的長く延びる物（13・14）と，短く折れ曲がるもの（15）とがある。（16）は体部下半部と口縁部を欠く須恵器鉢ないし甕である。肩は張り外面には二条の沈線を施している。

６世紀後葉の資料が混入するため，時期を決定するのは比較的難しいが，８世紀中葉～９世紀前葉前後であろう。（西村）

ＳＤⅢ84（第388・491・492図　図版230）

ＳＤⅢ83と同様　第４微高地の東縁辺部のＥ10区周辺を画する形で検出された，ＳＤⅢ83に先行する区画溝である。ＳＤⅢ83と切り合い関係にあり，ＳＤⅢ83に切られている。流路方向はＳＤⅢ83とほぼ同様に配されているが検出されている。検出長約44.0m，幅約0.6m，深さ約0.2mを測る。断面形は幅広なＵ字形を呈する。

出土遺物の中で図化出来るもの４点を抽出した。（第491図17）は土師器の甑である。体部は外傾し口縁部は平坦に仕上げている。外面縦ハケ，内面下半部はヘラケズリ上半部は横ハケを施す。（18）は製塩土器である。底部は尖り気味の丸底で，体部は丸味を帯ている。口縁部は直立し端部は丸い。体部外面は指頭痕，口縁部外面にはタタキを施している。（第492図１）は６世紀後葉ないし７世紀初頭の須恵器杯身である。底部は平坦で，体部は直線気味に外上方に延び，口縁部に至る。口縁部のたちあがりは短くわずかに内傾する。（２）は須恵器の大甕の口頸部である。

（第492図３～17）はＳＤⅢ83・84から出土した遺物であることは確実なのだが，いずれの溝に属するものかものか区別が出来ない資料である。

ＳＤⅢ84の時期は須恵器の資料より６世紀後葉ないし７世紀初頭に当るであろう。（西村）

ＳＤⅢ87（第492図）

ＳＤⅢ86より派生し，Ｈ11区よりＧ11区に向け第３低地帯沿いに北東方向に延びる溝である。ＳＤⅢ101と切り合い関係にあり，切られている。検出長約30.0m，幅約0.5～2.0m，深さ約0.2mを測る。断面　形はＵ字形を呈する。埋土は黒褐色系の粘土である。

ＳＤⅢ84の出土遺物中の図化出来るもの５点を抽出した。（第492図18）は土師器甕の口縁部である。（19・20）は須恵器杯である。（19）は６世紀後葉ないし７世紀初頭の杯蓋である。天井部はヘラ切りを施し平坦である。体部は丸味を持ち口縁部に至る。（20）は杯蓋の可能性が高い。（21・22）は須恵器甕の口頸部である。口縁部は外反し端部は折り返し肥厚させている。

ＳＤⅢ87の時期は須恵器の資料より６世紀後葉ないし７世紀初頭に当るであろう。（西村）

ＳＤⅢ89（第389・473図　ＳＤ8705）

ＳＤⅢ86より東へ派生し，Ｈ10区よりＧ10区へ東西方向に延びる細い溝である。ＳＤⅢ109と切り合い関係にあり，その溝を切っている。なお，東端部ではＳＤⅢ90と接続する。検出長約14.0m，幅約0.6m，深さ約0.2mを測る。断面形はＵ字形を呈する。埋土は黒褐色土である。

出土遺物の中で図化出来るもの10点を抽出した。（第493図１・２）は土師器甕である。（１）は甕の口

縁部である。（2）は口縁部を欠く把手付きの甕である。体部は楕円形状を呈し，外面には縦ハケを施す。（4～10）は6世紀末ないし7世紀初頭の須恵器杯である。（4・5）は天井部を欠く須恵器杯蓋である。体部は丸味を持って口縁部に至る。（4）は口縁部内面に一条の段を有する。（6～10）は須恵器杯身である。（8）の杯身はたちあがりも高く，他の資料に比べて幾分古い様相を示す。

ＳＤⅢ89の時期は須恵器の資料より6世紀末ないし7世紀初頭に当るであろう。（西村）

ＳＤⅢ90（第389図　図版232）

G10区で検出された。東に向け内湾気味に湾曲しながら延びる細い溝である。なお，ＳＤⅢ89と接続している。この2つの溝は切り合いも無く，本来一つのものであろう。ＳＢⅢ116・117と切り合い関係にあり，両者に切られている。検出長約26.0m，幅約0.6m，深さ約0.2mを測る。断面形は幅広なU字状を呈する。

図化出来る資料がないため，出土遺物より詳細な時期を判断する事は出来ないが，この溝と6世紀後葉のＳＤⅢ89はほぼ同時期と考えられるため6世紀後葉の可能性が高い。（西村）

ＳＤⅢ93（第390・493～496図　図版233・234　ＳＤ8704）

Ｈ8区からＧ9区にかけて，東西方向に延びる溝である。西部でＳＤⅢ113等に切られる。検出長約40m，幅約1.0m，深さ約0.4mを測る。断面形はV字形を呈する。東端部で大きく北に回り込みＳＨⅢ47に切られる。本溝と竪穴住居ＳＨⅢ30～36・43・45は概ね方向的に共通し，近似した時期の所産である可能性が高い。（藤好）

ＳＤⅢ94（第496図）

Ｆ8区で検出した。断続的に弧を描く3本の小溝である。西側の溝は長2m，中央では1.5m，東では4.5mをそれぞれ検出した。何れも幅0.3m前後，深さ0.2m前後を測り，断面形は「U」字状を呈する。連続する同一の溝の可能性もあるが，むしろ異なる堀立柱建物の雨落ち溝の可能性が高い。即ち西端の溝はＳＢⅢ164に，中央のそれはＳＢⅢ166に，東はＳＢⅢ165にそれぞれ伴うと見ることが出来る。何れも埋土は単層で黒灰色粘質土である。

本溝に伴う遺物のうち図化しうるのは（第496図15）の小形球形甕のみである。やや粗雑な作りで多少厚手である。（大久保）

ＳＤⅢ95（第391図　ＳＤ8620）

Ｆ・Ｇ8区で検出した。ＳＤⅢ93の東延長部分に位置し，同様にほぼ真北に直交する方向に直線的に流れる。約28m検出し得た。東端は複数の溝と重複して不明瞭になる。幅0.6～0.8m，深さ0.2mを測り，断面形は浅い皿状を呈する。埋土は単層で黒灰色粘質土である。本来ＳＤⅢ93と同一の溝であった可能性が高い。（大久保）

ＳＤⅢ96（第496図）

H10区で検出したＳＤⅢ86に注ぎ込む小規模な溝で，検出長約1m，幅約0.2m，深さ約0.3mを測る。（藤好）

ＳＤⅢ97（第392図　図版235）

H11区で検出した東西方向の溝で西端部は第4低地帯流路1に，中央部はＳＤⅢ98に，東端部は現水路に切られる。検出長5m弱，幅約0.5m，深さ約0.2mを測る。（藤好）

ＳＤⅢ98（第496図）

H10・11区で検出し南北方向の溝でＳＤⅢ98を切る。検出長約10m，幅約0.5m，深さ約0.2mを測る。

（藤好）

ＳＤⅢ99（第496図）

Ｉ９・10区で検出した南北方向の溝で，検出長約20m弱，幅約0.3m，深さ約0.2mを測る。北端は第４低地帯流路１に切られる。掘立柱建物ＳＢⅢ109を切る。（藤好）

ＳＤⅢ100（第497図）

Ｉ９・10で検出した溝でＳＤⅢ99と平行して走り，北端部は第４低地帯流路１に切られる。検出長約23m，幅約0.5m，深さ約0.2mを測る。断面形は幅広Ｕ字状を呈する。（藤好）

ＳＤⅢ102（第497図）

Ｆ10区よりＦ11区にかけて検出された，北西方向に延びる溝である。検出長約13.0m，幅約0.4～2.0m，深さ約0.1mを測る。断面形はレンズ状を呈する。なお，この溝は南に位置する８世紀代のＳＤⅢ110・111・114等の溝と含めで微高地上を区画する溝の可能性が高い。

図化出来るような資料は見出せないため，出土遺物より詳細な時期を判断する事は出来ないが，この溝と８世紀代のＳＤⅢ110・111・114はほぼ同時期と考えられるため８世紀代の可能性が高い。（西村）

ＳＤⅢ103（第497図）

Ｆ10区で検出された，北西方向に延びる細い溝である。ＳＢⅢ118，ＳＤⅢ105・106と切り合い関係にあり，これらを切っている。検出長約17.0m，幅約0.3m，深さ約0.1mを測る。断面形はＵ字形を呈する。

出土遺物の中で図化出来るもの１点を抽出した。（第497図４）は土師器皿の高台部である。高台は低くわずかに外側に開く。

出土遺物よりこの溝の時期は，概ね８・９世紀前後であろう。（西村）

ＳＤⅢ104（第497図）

Ｆ10区で検出された溝である。西端部より東へ約6.0m間は東西方向に延び，途中南へ短く折れる。ＳＤⅢ103，ＳＫⅢ24と切り合い関係にあり，これに切られている。検出長約9.0m，幅約0.4m，深さ約0.1mを測る。断面形はＵ字形を呈する。

出土遺物の中で図化出来るもの４点を抽出した。（第497図５）は土師器の皿の口縁部である。端部は丸く仕上げ，内面には暗紋が認められる。（６）は土師器鉢の上半部である。体部は外上方に直線状に延び，端部は丸く仕上げている。（７）は土師器甕の口縁部である。（８）は底部を欠く須恵器杯である。体部は内湾気味に外上方に延び口縁部に至る。口縁端部は丸く仕上げる。

出土遺物よりこの溝の時期は，概ね７世紀前半前後であろう。（西村）

ＳＤⅢ108（第393図）

Ｇ10区よりＥ10区に向け，概ね東西方向に延びる細い直線状の溝である。検出長約44.5m，幅約0.3m，深さ約0.1m，方位はＮ67°Ｅを測る。遺構の切り込み面は，第３低地帯周辺域に拡がる厚さ約0.3m前後の灰色砂質土からなる，包含層上面より切り込んでいる。なお，この方位は現在の地割り方向に類似する。断面形は幅広なＵ字状を呈する。埋土は灰白色砂質土である。

出土遺物の中で，この溝の詳細な時期を判断する資料はないが，概ね中世以降である。（西村）

ＳＤⅢ110（第394・497　ＳＤ8721）

Ｇ・Ｆ９区で検出した。周辺の条里地割方向にほぼ適合する方向に東西に直線的に流れる溝である。約50m検出した。概ね２m程度の間隔を保ってＳＤⅢ113と並行する。東端で二股に別れ，西端近くでは直交して北に延びる溝が分流する。全域に亙って削平を受け，断面形は浅い皿状を呈している。幅0.5

m，深さ0.1mを測る。埋土は単層で暗灰色粘質土である。

（第497図９～11）は土師器杯である。（10・11）は比較的薄手で口縁端部を内側に小さく巻き込む。８世紀代に下る資料である。（12）は弥生後期の広口壺の可能性が高い。混入品であろう。（13～16）は土師器甕類口縁部である。（18）は須恵器杯蓋で６世紀代に上る。（19・20）の杯蓋および（21～23）の杯身は７世紀後葉以降に下るであろう。（24～25）は須恵器甕である。以上の資料は中心が７世紀後葉で一部に８世紀代に下るものを含む。（大久保）

ＳＤⅢ112（第497図）

第４微高地上のＦ９区で検出された。ＳＤⅢ110より分岐して北東方向に延びる細い溝である。なお，この溝は，ＳＨⅢ40を切り込んでいる。検出長約10.0m，幅約0.4m，深さ約0.1mを測る。断面形は幅広なＵ字状を呈する。

出土遺物の中で，この溝の詳細な時期を判断する資料はないが１点抽出した。（第497図27）は６世紀後葉の須恵器杯身である。なお，この溝の時期は，概ね８世紀前後であろう。（西村）

ＳＤⅢ113（第395・498図）

Ｇ・Ｆ９区で検出した。いわゆる条里地割方向に沿って東西に直線的に走る溝である。断続的に90m以上延びるのを確認している。概ね２m程度の間隔を保ってＳＤⅢ110と並行する。西端で南北溝ＳＤⅢ140に切られ，東端付近では直交する南北溝ＳＤⅢ114と合流する。東端で二股に別れ，西端近くでは直交して北に延びる溝が分流する。断面形は浅い皿状を呈し，幅0.4m，深さ0.1mを測る。埋土は単層で暗灰色粘質土である。

（第498図１・２）は土師器甕である。（３・４）は把手付甕，（３）は体部の張りが弱い。（５～７）は須恵器杯で立上り部の形状から６世紀後葉に位置付けられる。以上の資料は何れも６世紀後葉代と見て矛盾は無い。ただし本溝が６世紀代の竪穴住居など多くの遺構を切って穿たれていることや，７・８世紀代の溝ＳＤⅢ110と一貫して並行することなどを考えると直ちにこれが本溝の時期を示すとは断定し難い。むしろ混入資料でＳＤⅢ110と同時期の溝と考えたい。（大久保）

ＳＤⅢ117・118（第498図）

第４微高地の東縁辺部Ｅ８区で検出された，短くて不定形な溝である。隣接して複数の湾曲する短い溝があり，それらの溝との境は判然としない。深さ約0.1m，断面形は幅広なＵ字形を呈する。

ＳＤⅢ117・118の出土遺物の中で図化出来るもの４点を抽出した。（第498図８）はＳＤⅢ117より出土した，天井部を欠く６世紀後葉の須恵器杯蓋である。体部は丸味を帯びて口縁部に至り，口縁端部は丸く仕上げる。（第498図９～11）はＳＤⅢ118より出土した土器である。

ＳＤⅢ117・118は，出土遺物が少なく，時期を推定するには困難であるが，須恵器の資料より概ね６世紀後葉前後に当るであろう。（西村）

ＳＤⅢ121（第498図）

第４微高地の東縁辺部Ｄ・Ｅ８区で検出された，短くて不定形な溝である。西端部はＳＤⅢ120より分かれ東では不整形に肥厚する。深さ約0.1m，断面形は幅広なレンズ状を呈する。

出土遺物の中で図化出来るもの３点を抽出した。（第498図12）は土師器甕の口縁部である。（13・14）は須恵器杯である。（14）の杯高台部は屈曲点よりわずか内側に付き，外下方に短く延びる。体部は外上方に直線状に延び，端部は丸く仕上げる。

ＳＤⅢ121は，出土遺物が少なく時期を推定するには困難であるが，須恵器の資料より７世紀後葉～８

世紀前葉頃に当るであろう。　（西村）

ＳＤⅢ123（第498図）

Ｅ７区よりＥ８区に向けて検出された，南北方向に直線状に延びる細い溝である。南端部でＳＤⅢ12等の数条の溝と交わるが，その切り合いは判然としない。検出長約19.0m，幅約0.4m，深さ約0.1mを測る。断面形は幅広なＵ字形を呈する。

出土遺物の中で図化出来るもの２点を抽出した。（第498図15）は須恵器甕の口縁部である。口縁部は外反し端部は丸く肥厚する。（16）は天井部を欠く６世紀後葉の須恵器杯蓋である。

ＳＤⅢ123は資料が少なく時期を推定するには困難であるが，須恵器の資料より６世紀後葉頃に当るであろう。　（西村）

ＳＤⅢ128（第207・498図　ＳＤ8715）

Ｅ７・８区よりＤ７・８区に向けて検出され，ＳＨⅢ53を中心とし円形にめぐる溝である。その配置よりＳＨⅢ53の周溝と考えられる。東端部では，ＳＤⅢ128よりＳＤⅢ129が分岐し第１低地帯方向に延びている。ＳＤⅢ128の周辺には，多数の掘立柱建物及び柱穴等の諸遺構が見られ，これらとの間に切り合い関係が生じている。検出長約35.5m，幅約0.4m，深さ約0.2mを測る。断面形は逆台形状あるいは幅広なＵ字形を呈する。埋土は暗灰色系の砂質土である。

出土遺物の中で図化出来るもの４点を抽出した。（第498図17）は土師器甕の口縁部である。外上方に外反し端部は平坦である。（18）は土師質の蛸壺である。（19）は６世紀後葉の須恵器杯蓋の口縁部である。口縁端部は尖り気味に仕上げる。（20）は須恵器高杯ないし杯の体部である。

出土遺物とＳＨⅢ53の時期よりこの溝の時期は，６世紀末～７世紀初頭前後であろう。　（西村）

ＳＤⅢ129（第499図）

Ｄ７区で検出された。ＳＤⅢ128より分岐し第１低地帯方向に続く溝である。検出長約8.5m・幅約0.3m・深さ約0.2mを測る。断面形Ｕ字状を呈する。

出土遺物の中で図化出来るもの１点を抽出した。（第499図１）は土師質の杯ないし椀である。体部は内湾気味に口縁部に至り，端部は丸く仕上げる。内面には横ハケが認められる。なお，この資料は混入品であろう。

出土遺物より詳細な時期を推定する事は出来ないが，この溝がＳＤⅢ128より分岐しほぼ同時期に当るため，概ね６世紀後葉～７世紀初頭前後であろう。　（西村）

ＳＤⅢ130（第499図　図版235）

Ｄ７区で検出された。ＳＸⅢ01より分岐し第１低地帯方向に続く溝である。検出長約8.5m・幅約0.6m・深さ約0.1mを測る。断面形Ｕ字状を呈する。

出土遺物の中で図化出来るもの１点を抽出した。（第499図２）は同安窯産の青磁椀の口縁部である。

出土遺物より詳細な時期を判断できないが，この溝の時期は概ね，平安時代後半以降に当るであろう。

（西村）

ＳＤⅢ135（第396・499図）

Ｇ７区で検出した。南北方向に走る小溝である。削平を受け分断されているが，北延長方向に位置するＳＤⅢ134と本来同一の溝である。また南半部で東西溝ＳＤⅢ136が分岐する。流路方向はいわゆる条里地割方向に近似する。断面形は浅い皿状を呈し，幅0.3m，深さ0.1mを測る。埋土は単層で黒灰色粘質土である共伴遺物は極僅かである。

（第499図３）は土師質杯で（４）の須恵器と良く似て薄手の作りである。　（大久保）

ＳＤⅢ136（第397図）

Ｇ７区で検出した。東西方向に走る小溝で，南北溝ＳＤⅢ135から分岐する。流路方向はいわゆる条里地割方向に近似する。断面形は浅い皿状を呈し，幅0.3m，深さ0.1mを測る。埋土は単層で黒灰色粘質土である。袋状鉄斧などを出土した。　（大久保）

ＳＤⅢ140（第398・499図）

Ｈ６～８区で検出した。南北方向に走る小溝である。条里坪界溝ＳＤⅢ75と密接に関わる。即ち同溝はＩ６～８区にかけての約65m間，クランク状に凡そ10m程西に折れ曲がるが，その部分で本溝が本来の坪界線上をＳＤⅢ75と10mの間隔を保ち並行して走る。断面形は浅い皿状ないしは逆台形状を呈し，幅0.3m，深さ0.1mを測る。埋土は単層で淡灰色微砂質土である。

（第499図５）は土師質杯で体部の外傾が著しい。（６～８）は土師質椀である。（６）は高台がかなり高く他例よりも古相を呈する。（９・10）は土師質小皿である。（11）は土師質長胴甕で分厚く作られた口縁部が特徴的である。（12・13）は瓦質土器椀である。（12）は断面台形の良く張った高台を付す。

（大久保）

ＳＤⅢ142（第399・499図）

Ｉ５区よりＩ６区にかけて検出された不整形な溝である。北端部より南へ直線状に約6.0m延び，そこから東にＳＤⅢ143・144沿いに湾曲して延びる。東端部では１条の溝が分岐している。ＳＤⅢ143・144周辺の帯状の浅い落ち込みの突出部と重複し切られているようである。幅約0.4～1.5m，深さ約0.2mを測る。断面形は幅広なＵ字形を呈する。なお，溝の底部には土師質の坏・皿合わせて５個体が，溝の主軸に合わせて人為的に配されていた。

ＳＤⅢ142からは先に触れた土器５点を図化した。（第499図14～17）は土師質の杯である。底部はヘラ切り後ナデを施し平坦に仕上げ，体部は内湾気味に口縁端部に至る。口縁端部は丸く仕上ている。（18）は土師質の皿である。底部はヘラ切り後ナデを施し平坦に仕上げている。口縁は短く上方に延びる。

出土遺物よりこの溝の時期は，12世紀前後であろう。　（西村）

ＳＤⅢ143・144（第400～402・499～502図　図版236・237　ＳＤ8707）

Ｇ５・６区からＩ５区にかけて検出した東西方向に延びる溝である。検出長55mほど，幅約0.5～2.0m，深さ約0.4mを測る。ＳＤⅢ143をＳＤⅢ144が切る。ＳＤⅢ75以東では，部分的な重複であるが，ＳＤⅢ75の西では重複が顕著である。両溝は複雑に入り組み非常に理解が困難な溝である。ＳＤⅢ143はＧ６区の１辺４m前後の方形の浅い落ち込みから始まり，直線的に西に延びる。この部分では断面台形状の細いが明確な溝である。ＳＤⅢ75との合流部で幅が広がり，西に延びる。ＳＤⅢ140・144等が溜まり状の落ち込みで合流し，西に流れる。ただし埋土の類似から同時併存としたが，流路の形状からすると溜り状の部分だけ別の遺構の可能性もある。また重複が顕著なＳＤⅢ75より西では，先行するＳＤⅢ143内に礫が集中し，礫積みの護岸がなされていた可能性が可能性が高い。

両溝とＳＤⅢ75との関係は，第１段階としてＳＤⅢ75が単独で存在する時期があり，埋土の類似とＳＤⅢ143・144がＳＤⅢ75に面して急に深くなることから，第２段階としてＳＤⅢ143が，第３段階として144が各々ＳＤⅢ75と同時併存したと考えられる。両溝は西端で第４低地帯に流れ込む。また両溝とＳＤⅢ75の合流部の西北部で集石を検出した。ＳＤⅢ144の流路からすれば北に寄ることから，ＳＤⅢ144の東部で検出した落ち込みと類似する遺構内に礫が集中するものと考えられる。　（藤好）

ＳＤⅢ147（第403・502図）

Ｆ６区からＧ６区にかけて検出した東西方向の溝で，ＳＤⅢ148・149に切られる。またＳＴⅢ21を切る。西端は浅くなり他の溝とは連続しない。検出長約28m，幅約0.6m，深さ約0.2mを測る。（藤好）

ＳＤⅢ149

Ｆ６区検出した溝の一部が溜まり状に脹らむ遺構である。ＳＸⅢ09の南部で検出した。ＳＸⅢ３から派生する溝とＳＸⅢ03の東に位置する溜まり状のものから派生する溝が合流し新たに溜まり状に脹らむ遺構を形成し，ＳＤⅢ147を切る。検出長は落ち込み状の個所で南北約６ｍ，幅約２ｍほどを測る。

（藤好）

ＳＤⅢ159（第404・502図）

Ｊ６区よりＪ７区に向けて検出され，概ね南北方向に延びる細い直線状の溝である。検出長約29.0ｍ，幅約0.3m，深さ約0.1m，方位はN26°Wを測る。なお，この方位は現在の地割り方向に類似する。ＳＤⅢ160～163と切り合い関係にあり，これらの溝に切られている。断面形は浅いU字形を呈する。埋土は単層で茶灰色土である。

出土遺物の中で図化出来るもの２点を抽出した。（第502図６）は土師質の杯である。底部は平底で，体部は直線状に外上方に延び，端部は丸く仕上げる。（７）は口縁・底部を欠く青磁の皿である。出土遺物より概ねこの溝の時期は，平安時代後半以降である。（西村）

ＳＤⅢ160（第405図）

Ｉ６区よりＪ６区に向けて検出された，概ね東西方向に延びる溝である。ＳＤⅢ159・161と切り合い関係にあり，両者に切られている。検出長約25.0m，幅約0.3m，深さ約0.1mを測る。断面形はU字形を呈する。埋土は黄茶褐色土である。

詳細な時期を判断できる遺物は無いが，配置状より概ねＳＤⅢ161に類似する時期に当るものと考えられる。（西村）

ＳＤⅢ161（第406・502図）

Ｉ６区よりＪ６区に向けて検出された，概ね東西方向に延びる溝である。ＳＤⅢ159・160と切り合い関係にあり，ＳＤⅢ159に切られ，ＳＤⅢ160を切っている。検出長約17.0m，幅約0.3m，深さ約0.2mを測る。断面形はU字形を呈する。埋土は単層で暗灰色土である。

出土遺物の中で図化出来るもの１点を抽出した。（第502図８）は須恵器甕の口頸部である。口頸部は外反し端部は下方に折り曲げ，肥厚させている。口縁端部外面には二条の幅広な沈線を施す。

出土遺物が少ないため，詳細な時期の判断は付かないが，概ね６世紀後葉前後であろう。（西村）

ＳＤⅢ162（第407・502図　図版238）

Ｊ６区検出された，南北方向に延びる短い溝である。ＳＤⅢ159・163と切り合い関係にあり，ＳＤⅢ163を切り，ＳＤⅢ159に切られている。検出長約6.5m，幅約0.6m，深さ約0.2mを測る。断面形は幅広なU字形を呈する。埋土は茶灰色粘質土が基調になる。

出土遺物の中で図化出来るもの３点を抽出した。（第502図９・10）は土師器甕口頸部である。（９）の口縁部は大きく外反し端部は丸い。おそらく長胴甕の部類であろう。（10）の口縁部は垂直気味に端部に至り，端部は内側にわずかに肥厚する。体部はおそらく球形を呈するものと思われる。（11）は６世紀後葉の，頸部を欠く須恵器短頸壺である。底部外面にはヘラケズリ，体部中央に一条の沈線を施す。

出土遺物よりこの溝の時期は，概ね６世紀後葉に当るものと考えられる。（西村）

ＳＤⅢ166（第408・502図　図版238）

Ｉ３区よりＩ４区に向けて検出され，概ね南北方向に直線的に延びるＳＡⅢ50の雨落ち溝である。上半部は削平を受け残りが悪い。主要部分はＳＡⅢ50の西側を，柵列に沿う形で延びるが，北端部は肥厚し，浅い幅広な落ち込み状を呈する。切り込み面はＩ３区周辺に所在する整地層の上位より切り込んでいる。ＳＢⅢ288と切り合い関係があり，この建物を切っている。検出長約32.5m，幅約0.3～0.9m，深さ約0.2m，方位Ｎ18°Ｗを測る。断面形は浅いレンズ状を呈する。埋土は灰色系の砂質土である。

ＳＤⅢ166の出土遺物中４点を抽出した。（第502図12）は土師質の椀である。形態はボウル状を呈し口縁端部は尖り気味に仕上げる。外面には板ナデが認められる。（13）は土師器甕の上半部である。体部は丸く口縁部は外反し，端部に至る。端部は上方にわずかに摘み上げ，平坦に仕上げている。外面ハケ内面板ナデが認められる。（14）は６世紀末の須恵器杯蓋である。

資料が少ないためＳＤⅢ166の時期を推定するのは難しいが，６世紀末ないし７世紀初頭前後であろう。（西村）

ＳＤⅢ168（第409・502図）

Ｉ４区のＳＢⅢ290の西側で検出された，ＳＢⅢ290の西側の雨落ち溝である。上半部は削平を受け残りが悪い。主要部分はＳＢⅢ290の西側を，建物に沿う形で概ね南北方向に延びるが，南端部は東に短く屈曲する。切り込み面はＩ３区周辺に所在する整地層の上位より切り込んでいる。検出長約13.0m，幅約0.6m，深さ約0.1mを測る。断面形は浅いレンズ状を呈する。埋土は灰色系の砂質土である。

出土遺物の中で１点を抽出した。（第502図15）はかなり小形の須恵器杯身である。底部は欠く。たちあがりは短く，内傾している。

出土遺物よりこの溝の時期は，７世紀初頭前後に当る。（西村）

ＳＤⅢ169（第409図）

Ｉ４区のＳＢⅢ290の東側で検出された，ＳＢⅢ290の東側の雨落ち溝である。上半部は削平を受け残りが悪い。主要部分はＳＢⅢ290の東側を，建物に沿いながら概ね南北方向に延びるが，北端部は東西に短く屈曲しT字状を呈する。南端部では，ＳＤⅢ170・172と接するがその切り合いは不明瞭ながらこれらの溝に切られている。切り込み面はＩ３区周辺に所在する整地層の上位より切り込んでいる。検出長約13.0m，幅約0.9m，深さ約0.1mを測る。断面形は浅いレンズ状を呈する。埋土は黄灰色系の砂質土であるが，ＳＤⅢ168の埋土に類似する。

出土遺物が少ないため詳細なこの溝の時期を推定する事は出来ないが，ＳＢⅢ290との関係で，７世紀初頭前後に当るであろう。（西村）

ＳＤⅢ170（第410・502図）

Ｉ３区のＳＢⅢ291の西側で検出された，ＳＢⅢ291の西側の雨落ち溝である。上半部は削平を受け残りが悪い。Ｉ３区ではＳＢⅢ291の西側を，建物に沿いながら概ね南北方向に延びるが，ＳＢⅢ291の北西端部付近で屈曲し北東方向に延びる。南端部では，ＳＤⅢ169・172と接するがその切り合いは不明瞭ながらこれらの溝を切っている。切り込み面はＩ３区周辺に所在する整地層の上位より切り込んでいる。検出長約21.5m，幅約0.8m，深さ約0.1mを測る。断面形は浅いレンズ状を呈する。

ＳＤⅢ170の出土遺物中２点を抽出した。（第502図16・17）は土師器甕である。（16）は口頸部で口縁は外反し端部は平坦に仕上げている。（17）底部を欠く甕で，体部は丸く口縁部は内湾気味に上方に延びる。端部はわずかに上方に摘み上げる。外面ハケ，内面ヘラケズリが顕著である。

資料が少ないためこの溝の時期を推定するのは難しいが，概ね７世紀初頭前後であろう。　（西村）

ＳＤⅢ173（第411図）

Ｉ３区のＳＢⅢ291の東側で検出された，ＳＢⅢ291の東側の雨落ち溝である。上半部は削平を受けかなり残りが悪く断片的に残っているだけであり，本来は隣接するＳＤⅢ171・172等の溝状遺構に続いていたものと考えられる。切り込み面はＩ３区周辺に所在する整地層の上位より切り込んでいる。幅約1.5m，深さ約0.1mを測る。断面形は浅いレンズ状を呈する。

この溝の時期は，本来続いていたＳＤⅢ171・172等の溝と，ほぼ同時期と考えられる。　（西村）

ＳＤⅢ176（第412図）

Ｇ３区よりＪ４区にかけて検出された，途中南に屈曲しながらも東西方向に延びる溝である。東端部より南西方向に約32.0m延びその地点より北西方向に屈曲し，途中部分的に途切れる個所もあるが，第４低地帯方向に延びる。ＳＡⅢ50，ＳＤⅢ75・167・175と切り合い関係にあり，両者に切られている。切り込み面はＩ３区周辺に所在する整地層を除去したベース層上面より切り込んでいる。検出長約60.0m，幅約0.5m，深さ約0.1mを測る。断面形は幅広なＵ字形あるいは底部に凹凸を持つ不整形な形態を呈する。　（西村）

ＳＤⅢ177（第413・503～505図　図版239）

Ｇ２区よりＪ４区にかけて検出された，ＳＤⅢ176の南側に位置しＳＤⅢ176と，ほぼ同一方向に延びる溝である。東端部より南西方向に約22.0m延びその地点より北西方向に屈曲し，第４低地帯方向に延びる。ＳＡⅢ50，ＳＤⅢ167と切り合い関係にあり，両者に切られている。切り込み面はＩ３区周辺に所在する整地層を除去したベース層上面より切り込んでいる。検出長約68.0m，幅約0.7m，深さ約0.3mを測る。断面形はＵ字状を呈する。

ＳＤⅢ177からの出土遺物としては６世紀後葉～６世紀末頃の土師器・須恵器の各種土器類及び第４低地帯に隣接する西端のＪ４区からは圭頭柄頭，東端のＧ２区からは勾玉等の資料が出土した。遺物の出土傾向としては西に向うに連れて出土量は減少する。図化可能なもの38点を抽出した。

（第503図１～３）は土師器高杯の脚部である。（第503図４・５）は土師器鉢である。形態はボウル状を呈し口縁部は短く摘み出す。なお，（４）は片口鉢である。（第503図６・７）は土師器の壺である。（６）は口頸部を欠く小形の壺である。体部は横に長い球体状を呈し，外面ヘラミガキ内面指ナデが顕著である。（７）は大形壺の上半部である。体部は球形を呈し，口縁部は垂直気味に外上方に延びる。端部は丸く肥厚する。（第503図８～12）は土師器の甕である。大きさで大・中・小の三種類に分けられる。（12）は大形甕の上半部である。（８～10）は中形の甕に当る。体部は球体化するもの（８）と，縦に長い楕円形状を呈するもの（９・10）とがある。（８）の口縁部は「く」の字状に外反し，（９・10）の口縁部は垂直気味に外反する。端部は丸く仕上げている。（11）は小形の甕に当る。体部は球体化し，口縁部はゆるく外反し，端部は平坦に仕上げている。体部外面にハケ，内面にヘラケズリが顕著である。（第503図13）は把手付甕の上半部である。（第503図14）は土師質の飯蛸壺である。（第504図１）は土師質の竈である。

（第504図２～14）は６世紀後葉～末の須恵器杯である。（２～５）は須恵器杯蓋である。天井部の調整の違いで形状が異なる。（２・４）はヘラケズリ，（３・５）はヘラ切りである。（６～14）は杯身である。底部の調整法は三種類ある。（６・８・９・10・11・14）はヘラケズリのみで調整する。（12・13）はヘラ切り（７）は底部中央をヘラ切り，その外周にヘラケズリを施している。（第504図15～19）は須

恵器高杯である。短脚のもの（15・16）と，長脚（17～19）のものとに別れる。(18）には二段の透孔を施している。(19）は残りが悪いが，おそらく二段の透孔になるものとみられる。(第505図１・２）は須恵器の平瓶である。体部は丸味をもち，器壁は厚い。（２）の外面にはカキ目を施している。　（西村）

ＳＤⅢ179（第69・505図）

Ｉ３区よりＪ３区に向けて検出された，ＳＤⅢ86より派生し北西方向に延び，第４低地帯に続く溝である。切り込み面はＩ３区周辺に所在する整地層を除去したベース層上面より切り込んでいる。検出長約27.0m，幅約0.9m，深さ約0.1mを測る。断面形は幅広なＵ字形を呈する。

この溝はＳＤⅢ86より分岐する点より，この溝とほぼ同一時期６世紀後葉前後の時期に当るものと考えられる。　（西村）

ＳＤⅢ183（第69・210図　図版240）

Ｉ２区周辺で検出され，ＳＨⅢ57を中心とし円形にめぐる溝である。その配置よりＳＨⅢ57の周溝と考えられる。北端部では，ＳＤⅢ183よりＳＤⅢ184が分岐しＳＨⅢ58方向に延びる。ＳＤⅢ86・188と切り合い関係があり，ＳＤⅢ86を切り込み，ＳＤⅢ188に切られている。切り込み面はＩ３区周辺に所在する整地層を除去したベース層上面より切り込んでいる。検出長約34.0m，幅約0.3m，深さ約0.1mを測る。断面形は逆台形状あるいは幅広なＵ字形を呈する。埋土は上位層が暗灰褐色砂質土で下位層が黄褐色の細砂層である。

図化出来るような遺物がなく詳細な時期は解らないが，この溝がＳＨⅢ57の周溝である点より住居址と同時期とみて，７世紀初頭前後の時期が考えられる。　（西村）

ＳＤⅢ184（第211図　版241）

Ｈ２区で検出され，ＳＨⅢ57の周溝であるＳＤⅢ183の北端部より分岐し概ね東に延び途中，ＳＨⅢ58を囲むように南東方向に屈曲する溝である。なお，隣接地にはＳＨⅢ58の東辺のを囲うＳＤⅢ186が所在する。切り合い関係は，ＳＤⅢ186と認められ，不明瞭ながらＳＤⅢ186をＳＤⅢ184が切り込んでいる。切り込み面はＩ３区周辺に所在する整地層を除去したベース層上面より切り込んでいる。検出長約18.0m，幅約0.7m，深さ約0.2mを測る。断面形はＵ字状を呈する。埋土は上位層が暗褐灰色砂質土で下位層が暗灰褐色の砂質土である。

ＳＤⅢ184は，その位置関係より先のＳＤⅢ183同様，竪穴住居址の外部施設の溝と考えられるが，ＳＨⅢ58の東辺を囲む溝であるＳＤⅢ186をＳＤⅢ184が不明瞭ながら切り込んでいる。そのため次の考え方が出来る。ＳＨⅢ57・ＳＨⅢ58は本来時期差があり，ＳＨⅢ58が先行して形成され，周囲にＳＤⅢ186を西端とする周溝を形成する。その後ＳＨⅢ57が形成される際には，この周溝の延長線上に更に溝を追加して，ＳＨⅢ57の周溝を設定した。そしてＳＤⅢ186とＳＤⅢ184切り合いは，先行する周溝を改修する際に生じたものと考えられる。　（西村）

ＳＤⅢ186（第211・505図）

Ｈ２区周辺で検出され，南北方向に延び，ＳＨⅢ58の東辺を囲う溝である。ＳＤⅢ184と切り合い関係があり，不明瞭ながらＳＤⅢ184に切られている。切り込み面はＩ３区周辺に所在する整地層を除去したベース層上面より切り込んでいる。検出長約5.0m，幅約0.2m，深さ約0.03mを測る。断面形はＵ字状を呈する。埋土は暗灰褐色砂質土である。

なお，先に触れたようにこの溝はＳＤⅢ184に切られているが，本来ＳＨⅢ58の外周を巡っていた可能性が高い。この溝の時期もＳＨⅢ58と同一時期の７世紀初頭前後と考えられる。　（西村）

ＳＤⅢ188（第69・414図）

Ｈ１区よりＩ２区にかけて検出された，概ね東西方向に延びる溝である。ＳＤⅢ86・186・190と切り合い関係にあり，ＳＤⅢ86・186を切り込み，ＳＤⅢ190に切られている。検出長約19.5m，幅約0.3m，深さ約0.1mを測る。断面形は幅広なＵ字形を呈する。埋土は灰青色シルト及び暗褐灰色砂質土等からなる。

出土遺物より詳細な時期の判断は付かないが，この溝が７世紀初頭前後のＳＤⅢ183とＳＨⅢ58を切り込んでいるため，少なくともその時期より以降に当る。（西村）

ＳＤⅢ190（第414図）

Ｈ１区よりＩ２区にかけて検出された，概ね東西方向に延びる溝である。ＳＤⅢ188・191と切り合い関係にあり，ＳＤⅢ188を切り込み，ＳＤⅢ191に切られている。検出長約6.5m，幅約0.6m，深さ約0.1mを測る。断面形は幅広なＵ字形を呈する。埋土は砂混じりの灰青色シルトである。

出土遺物より詳細な時期の判断は付かないが，この溝が７世紀初頭前後のＳＨⅢ59を切り込んでいるため，少なくともその時期より以降に当る。（西村）

ＳＤⅢ194

調査区域北端の独立した調査区Ｉ32区で検出した小溝である。検出長17m，幅0.5m，深さ0.2mを測る。西側延長部分はやや不明瞭であるが，二又に別れた浅い落ち込みが認められる。本溝の続きかも知れない。土師質椀小片を出土している。ほぼ12世紀代と見て良い資料である。（大久保）

ＳＤⅢ195

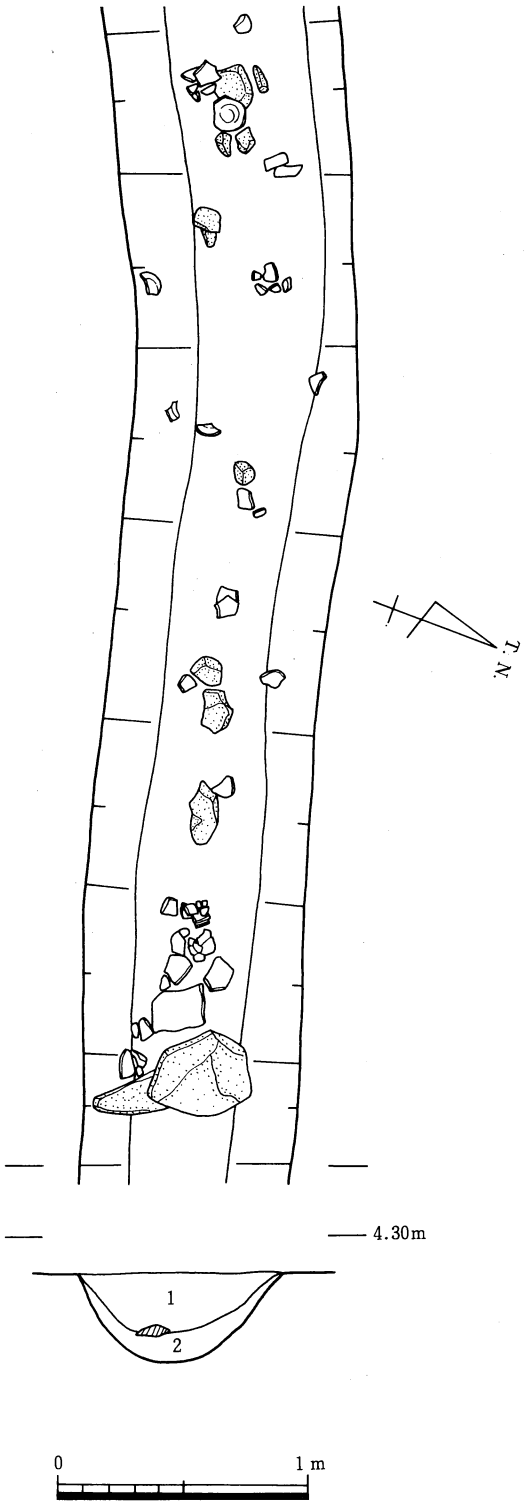
調査区域北端の独立した調査区Ｉ31区で検出した小溝である。検出長11m，幅0.4m，深さ0.2mを測る。ＳＤⅢ194と約９mの間隔を保って並行に走る。（大久保）

11.ピット列

ピット列Ⅲ01～05（第415図）

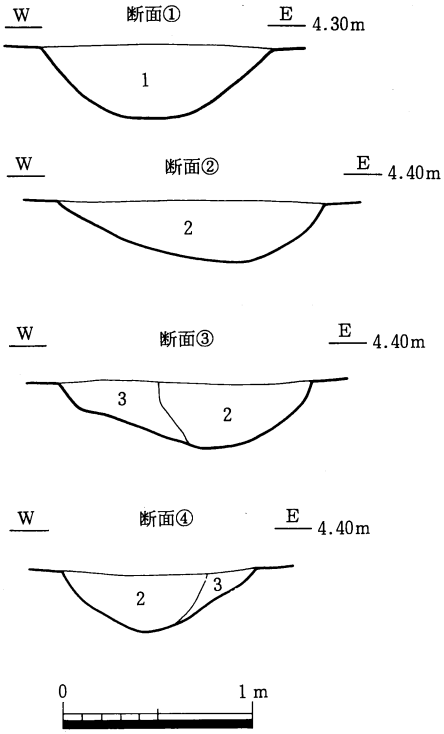
Ｅ・Ｆ 11区で検出された。ピット列とは，不整形な楕円形状の小穴が小間隔で帯状に並ぶ遺構を指し，第４微高地上では合計５遺構確認したが，不明瞭なものを含めれば2，3追加できる。ピット列Ⅲ01～05は一部互いに切り合いながら，概ねＦ12区の第３低地帯方面よりＥ11区方面に延びる。ピット列Ⅲ04・05は，Ｅ11区においてＳＤⅢ83を切り込み，ＳＫⅢ18に切られている。平面形態断面形態供に様々な形態を取り一様でない。径約0.2～1.3m　深さ0.10～0.38mを測る。ピット間の間隔は広いもので約0.5m，狭いもので約0.2mを測る。

出土遺物としては須恵器及び土師器の細片が出土しているのみで，詳細な時期は解らないが，少なくとも６世紀以降に当る事は確かだ。（西村）



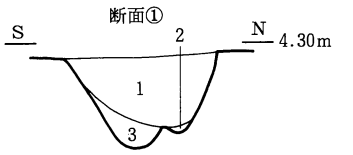
1. 暗灰褐色弱粘質土
2. 1に類似（黄色粘質ブロックを少量含む）

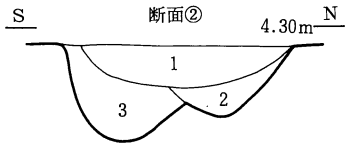
第357図　SDⅢ02 平・断面図

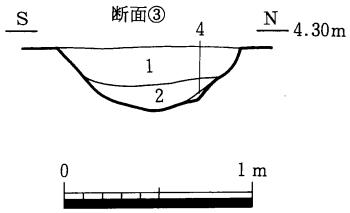


1. 淡茶褐色粘質土
2. 黒灰褐色砂質土
3. 黄灰褐色砂質土

第358図　SDⅢ03 断面図

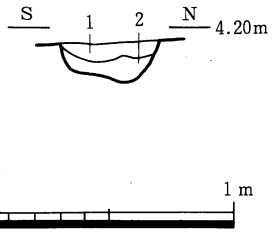






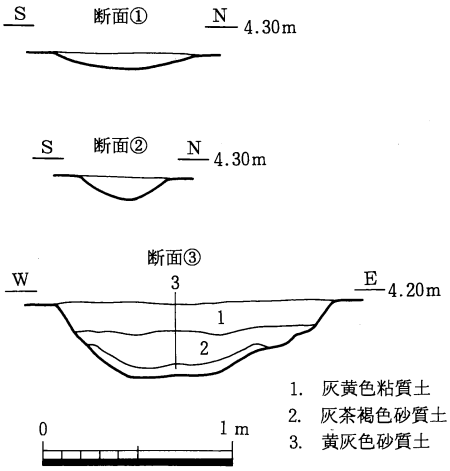
1. 黄灰褐色砂質土
2. 濁茶褐色砂質土
3. 濁茶灰褐色粘質土
4. 暗褐色砂質土

第360図　SDⅢ05 断面図



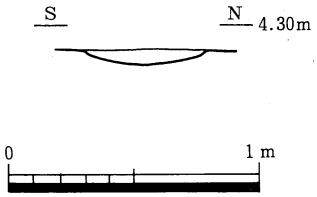
1. 灰黄色粘質土
2. 灰茶褐色砂質土

第361図　SDⅢ06 断面図

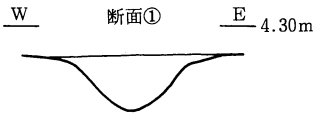


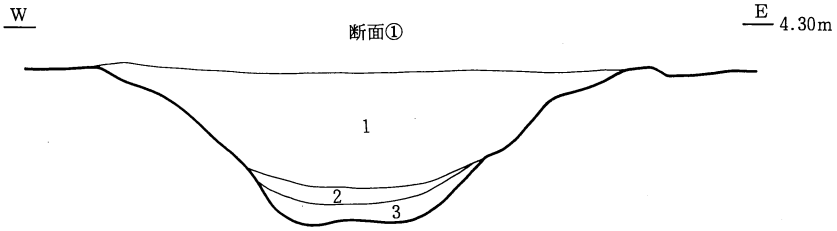
1. 灰黄色粘質土
2. 灰茶褐色砂質土
3. 黄灰色砂質土

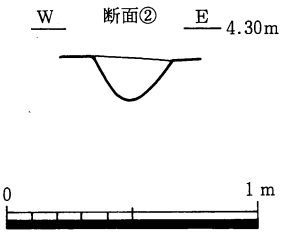
第362図　SDⅢ07 断面図



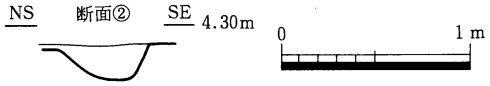
第365図　SDⅢ10 断面図





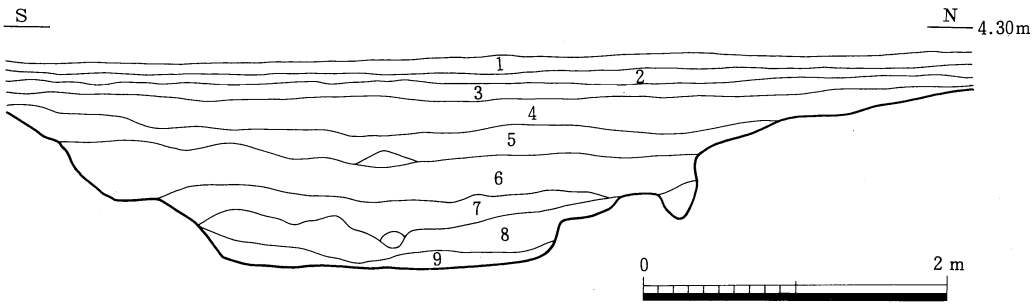


第363図　SDⅢ08 断面図



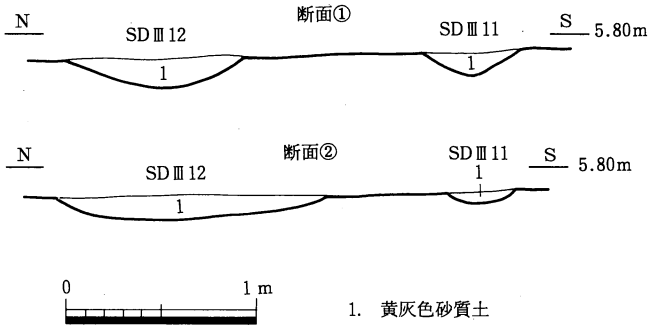
1. 灰茶褐色砂質土
2. 茶灰色粘質土
3. 青灰色粗砂

第364図　SDⅢ09 断面図

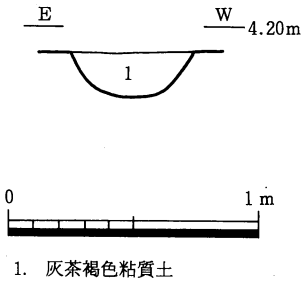


1. 弱暗褐色砂質土
2. 黄褐色砂質土
3. 暗褐色砂質土（Mn粒を多く含む）
4. 灰褐色砂質土
5. 砂礫粒混じり灰褐色砂質土
6. 砂混じり灰褐色粘質土
7. 砂礫粒混じり灰褐色砂質土
8. 暗灰色粘質土
9. 青灰色粘質土
10. 6に類似（砂を多く含む）

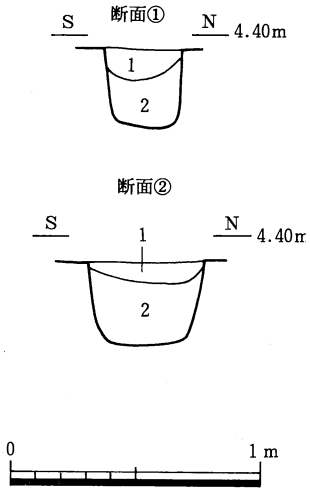
第359図　SDⅢ04 断面図



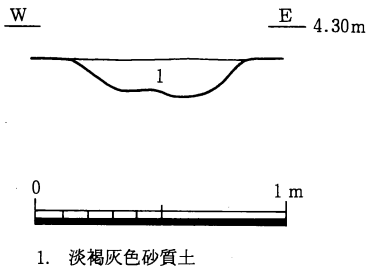
第366図　SDⅢ11・12 断面図



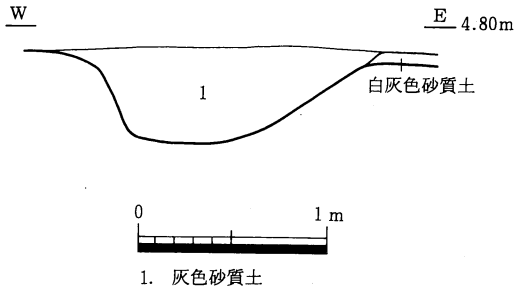
第367図　SDⅢ13 断面図



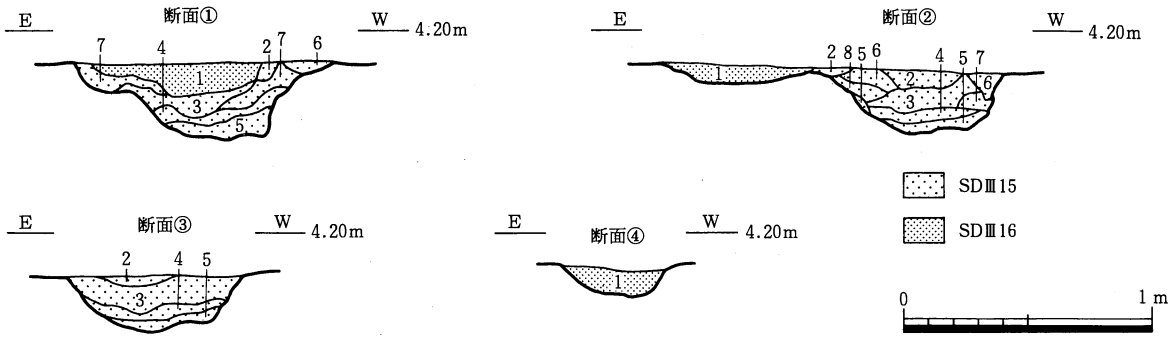
第368図　SDⅢ14 断面図



第370図　SDⅢ18 断面図

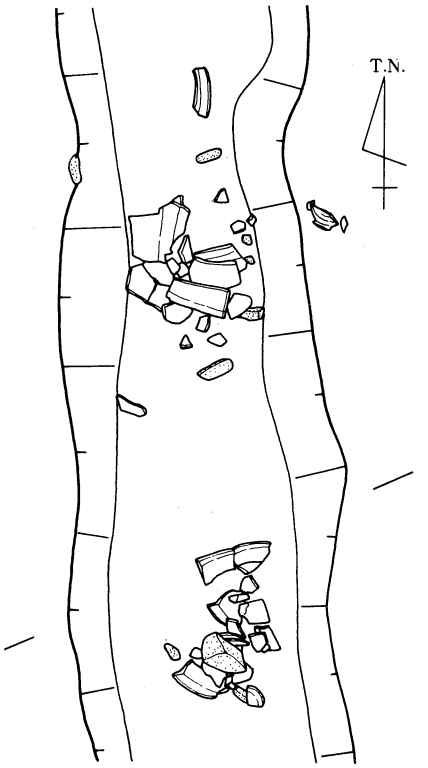


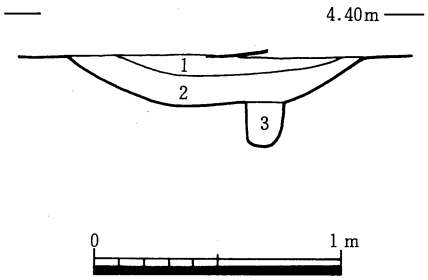
第371図　SDⅢ19 断面図



1. 黄灰色シルト（SDⅢ16）
2. 灰白色粘土（SDⅢ15）
3. 灰茶褐色砂質土（SDⅢ15）
4. 砂混じり淡黄灰色砂質土（SDⅢ15）
5. 淡灰色砂質土（SDⅢ15）
6. 灰黄色砂質土（SDⅢ15）
7. 灰暗褐色砂質土（SDⅢ15）
8. 3に類似（3より黄色強）（SDⅢ15）

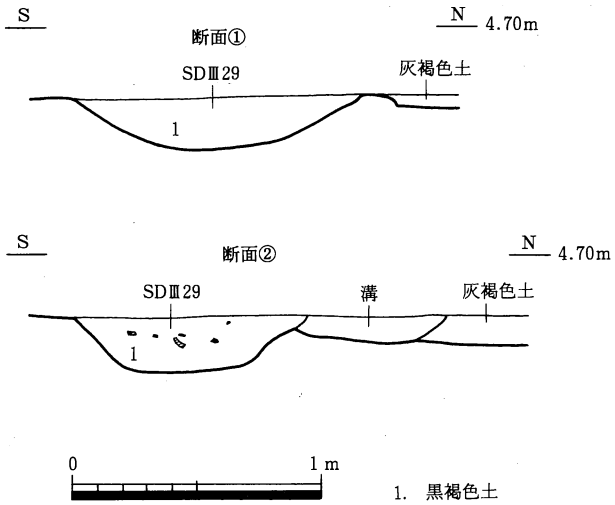
第369図　SDⅢ15・16 断面図





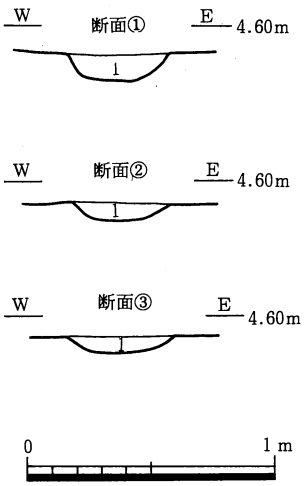
1. 暗灰色砂質土
（褐色粒の混入が少ない）
2. 暗灰色砂質土
3. 暗灰色弱粘質土

第372図　SDⅢ25 平・断面図



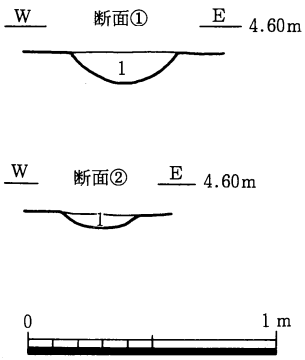
1. 黒褐色土

第374図　SDⅢ29 断面図



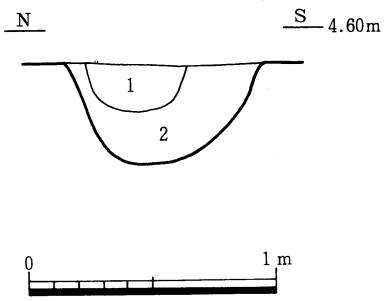
1. 黒灰色砂質土

第375図　SDⅢ30 断面図



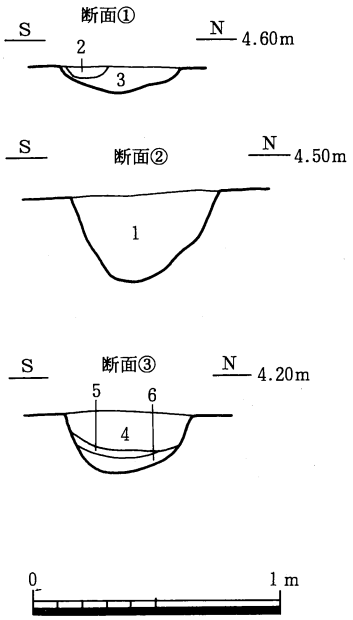
1. 暗灰色粘質土

第376図　SDⅢ31 断面図



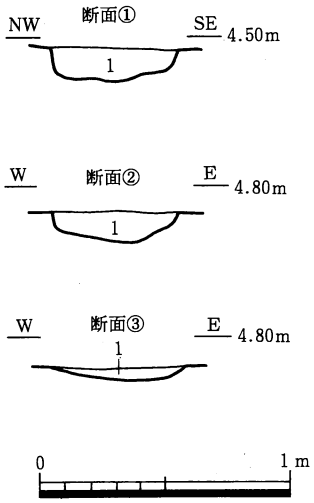
1. 暗灰茶褐色土
2. 暗黒茶色粘質土

第373図　SDⅢ27 断面図



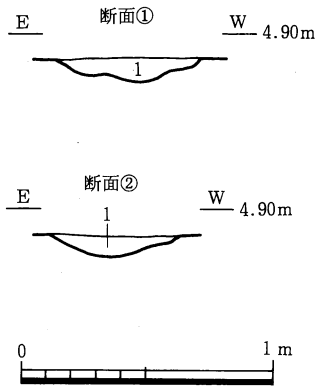
1. 黒色粘質土
2. 灰色粘質土（淡茶褐色粒・砂粒を含む）
3. 〃　（黄褐色粘土粒を含む）
4. 暗茶褐色土
5. 暗黄茶褐色土
6. 暗灰茶褐色土（粗砂を多く含む）

第377図　SDⅢ32 断面図



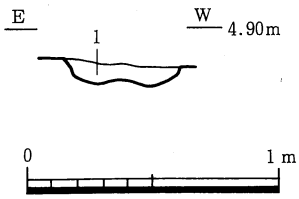
1. 暗褐色粘質土

第378図　SDⅢ39 断面図



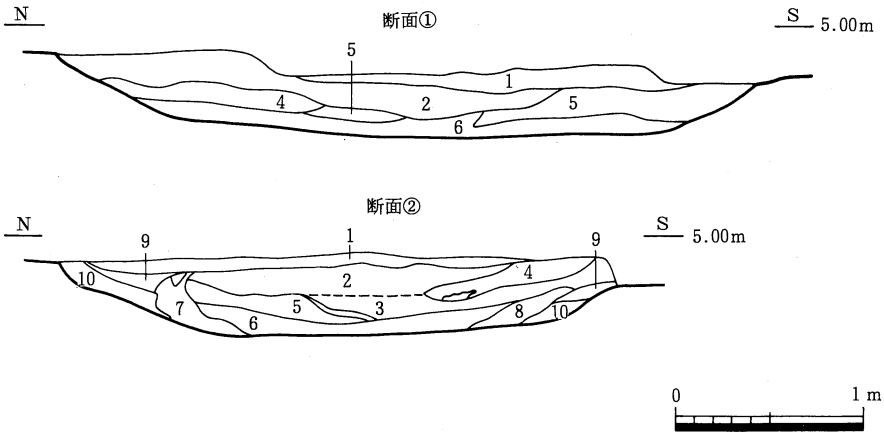
1. 黄灰色土

第379図　SDⅢ46 断面図



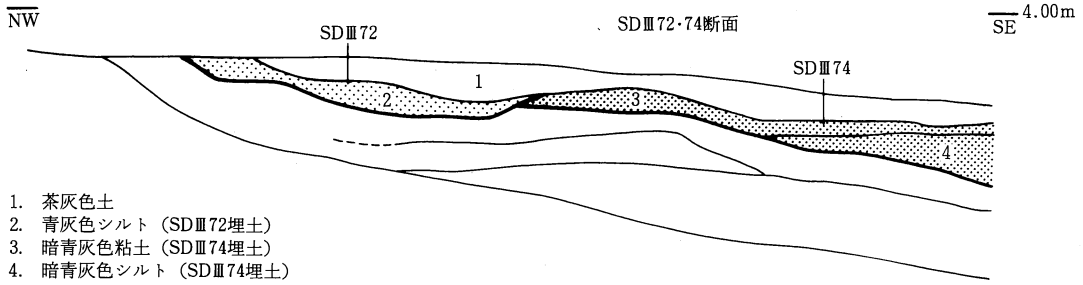
1. 黒褐色粘質土
（ベースブロックを含む）

第380図　SDⅢ47 断面図

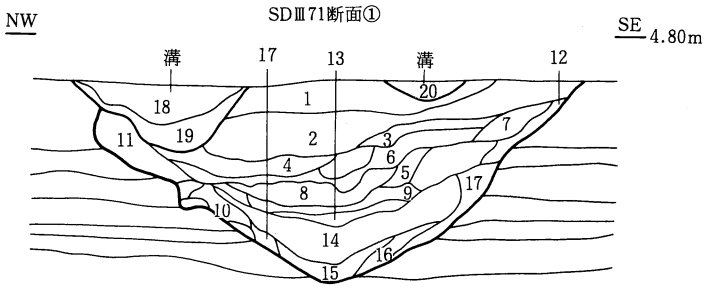


1. 明黄灰色砂質土
2. 灰色砂質土（褐色粒を多く含む）
3. 〃　（2より褐色粒が多い）
4. 灰白色砂質土
5. 灰白色粘質土（褐色粒・砂を多く含む）
6. 暗灰色粘土
7. 灰色砂質土
8. 暗灰色砂（褐色粒を多く含む）
9. 黄茶灰色砂質土（褐色粒を含む）
10. 茶灰色砂質土（褐色粒を含む）

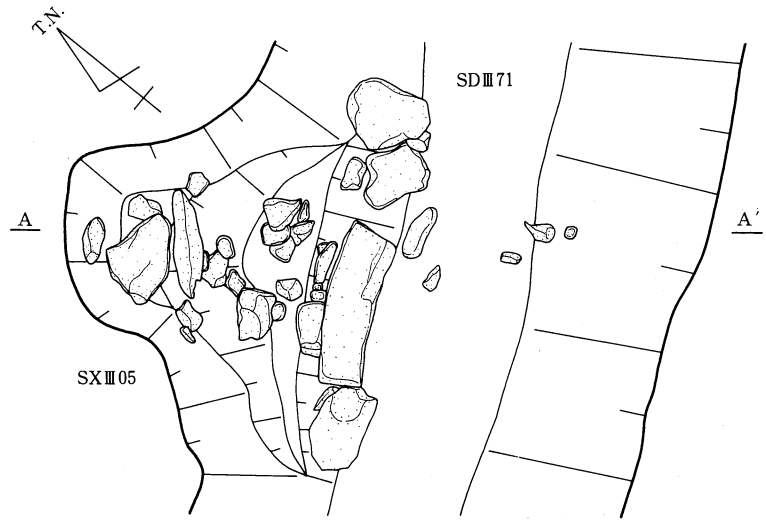
第381図　SDⅢ60 断面図

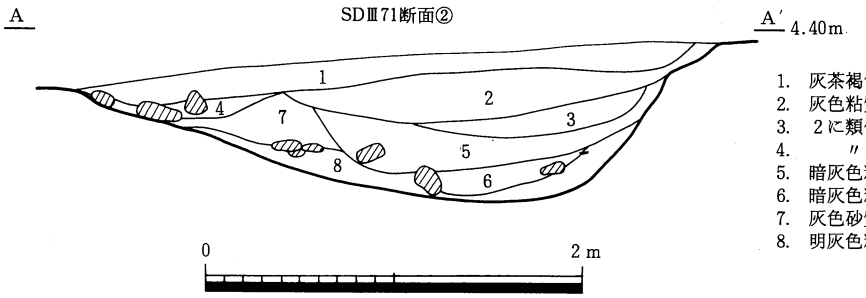


1. 茶灰色土
2. 青灰色シルト（SDⅢ72埋土）
3. 暗青灰色粘土（SDⅢ74埋土）
4. 暗青灰色シルト（SDⅢ74埋土）



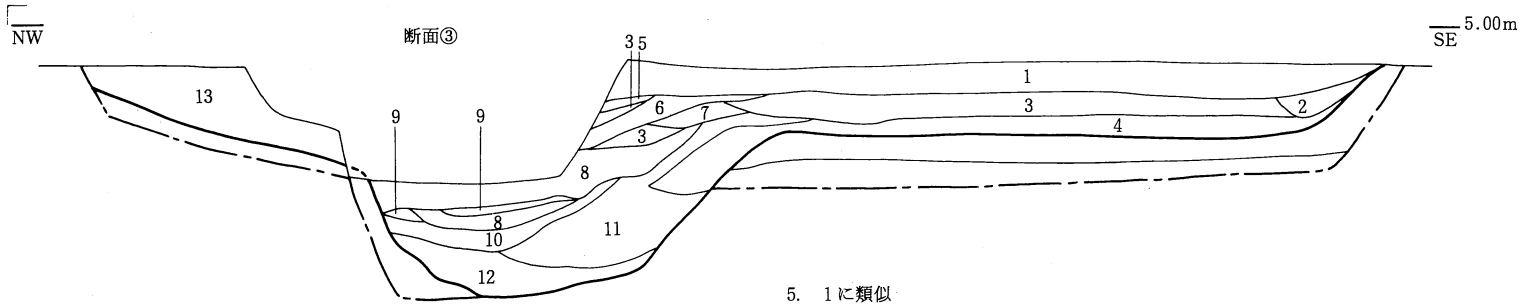
1. 黄灰色砂質土（褐色粒を多く含む）
2. 〃　（1より砂質で褐色粒の粒子大）
3. 2に類似（2より黄色弱）
4. 2に6が混ざる
5. 明灰色シルト
6. 濁灰茶黄色シルト
7. 灰褐色砂質土
8. 明黄茶灰色シルト
9. 15に類似
10. 灰色微砂
11. 黄灰色細砂に4が混ざる
12. 黄灰色細砂に7が混ざる
13. 淡黄灰色シルト
14. 灰色粘土（植物遺体を多く含む）
15. 暗青灰色粘土（植物遺体を多く含む）
16. 15に微砂が混入
17. 黄茶青灰色粘土に15が混ざる
18. 暗青黄灰色粘土
19. 青黄灰色砂質土
20. 灰白色砂質土



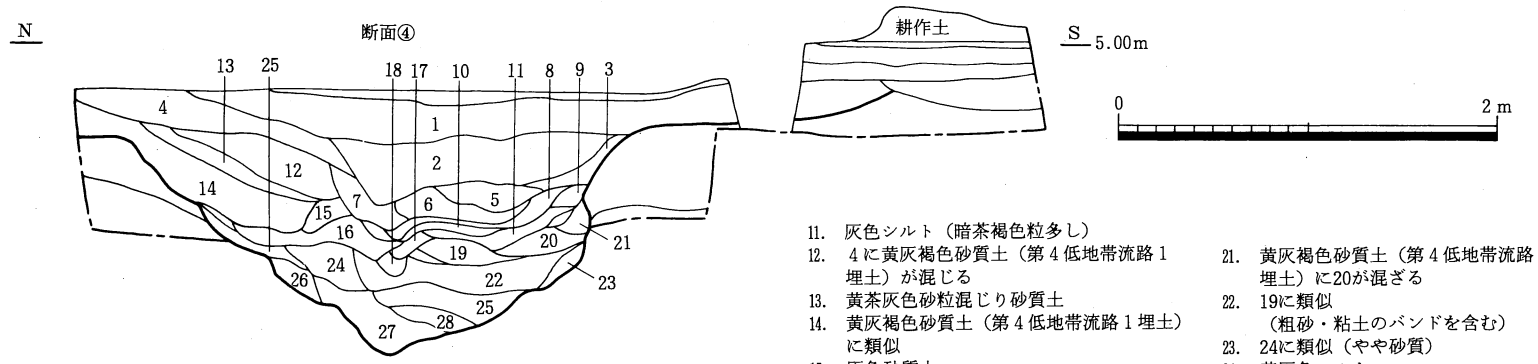


1. 灰茶褐色粘質土（Mn粒を多く含む）
2. 灰色粘質土
3. 2に類似（Mn粒を多く含む，やや硬質）
4. 〃　（Mn粒を多く含む）
5. 暗灰色粘土と明灰色砂の互層
6. 暗灰色粘土（動物・植物遺体を多量に含む）
7. 灰色砂質土（Mn粒を多く含む）
8. 明灰色粘質砂

第382図　SDⅢ71・72・74，SXⅢ05 平・断面図

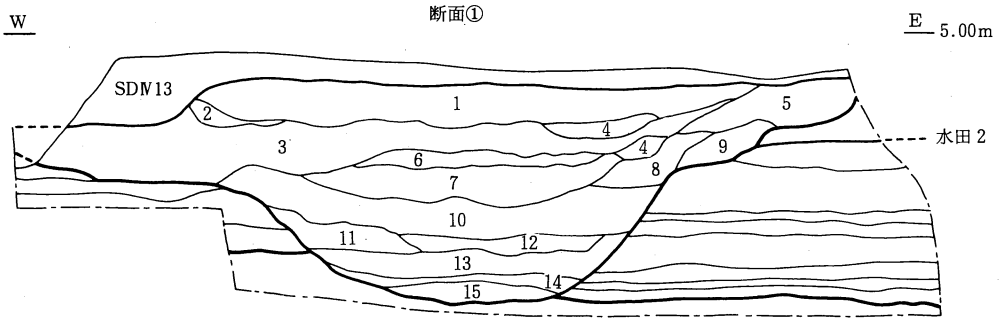


1. 淡灰褐色砂質土
2. 1に類似（1より砂が粗く，硬質）
3. 1に類似（1より灰色が強く細かい）
4. 明灰褐色砂質土
5. 1に類似
6. 1に類似（3より砂質が強い）
7. 1に類似（褐色が強い）
8. 暗灰色シルト及び淡灰茶色砂質土のラミナ
9. 淡灰茶色砂質土（微砂）
10. 暗灰茶色シルト
11. 灰茶色シルト（灰青色土ブロックを含む）
12. 灰茶色粘質土（暗灰青色土を多量に含む）
13. 灰褐色砂質土

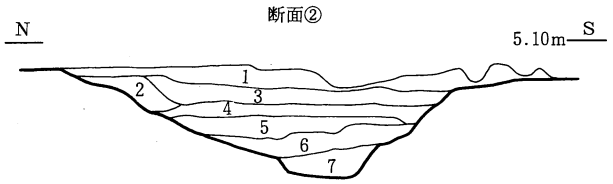


1. 暗茶灰色砂質土
2. 1に類似（1より緻密）
3. 2に黄灰褐色砂質土
（第4低地帯流路1埋土）が混ざる
4. 暗茶灰色粗砂質土
5. 暗茶灰褐色砂質土
6. 明黄灰色砂（褐色粒を少量含む）
7. 灰色砂質土（　　〃　　）
8. 暗茶灰褐色砂質土
9. 8に類似（やや粘質）
10. 橙色シルト
11. 灰色シルト（暗茶褐色粒多し）
12. 4に黄灰褐色砂質土（第4低地帯流路1埋土）が混じる
13. 黄茶灰色砂粒混じり砂質土
14. 黄灰褐色砂質土（第4低地帯流路1埋土）に類似
15. 灰色砂質土
（粗砂粒多し，褐色の汚れあり）
16. 黄灰褐色砂質土（暗茶褐色粒を含む）
17. 16に19が混ざる
18. 22に類似（褐色粒を多く含む）
19. 暗灰色シルト
20. 灰褐色シルト（暗茶褐色粒を多く含む）
21. 黄灰褐色砂質土（第4低地帯流路1埋土）に20が混ざる
22. 19に類似
（粗砂・粘土のバンドを含む）
23. 24に類似（やや砂質）
24. 黄灰色シルト
（暗茶褐色粒を多く含む）
25. 黄灰褐色砂質土（第4低地帯流路1埋土）に24が混ざる
26. 27に24が混ざる
27. 濁暗青灰色シルト
28. 礫層ブロック

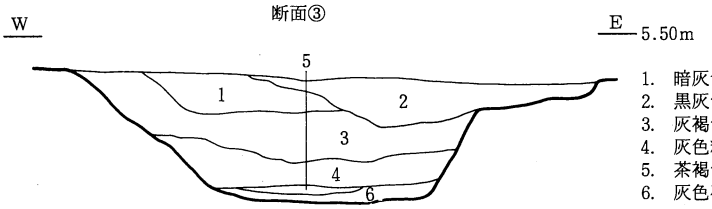
第383図　SDⅢ71 断面図



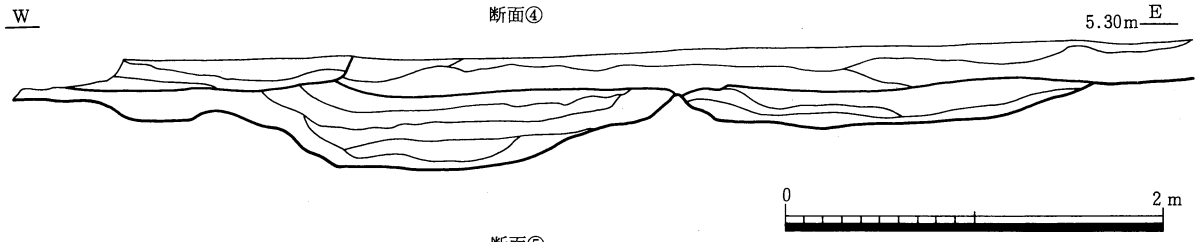
1. 黄褐色砂質土（5㎝大の礫を若干含む）
2. 黄褐色砂質土（1よりは黄褐色が強くMn粒の沈着が多い）
3. 黄灰褐色砂質土（4～5㎝大の礫を少量含む）
4. 灰白色砂質土（細砂を少量含む）
5. 明黄褐色細砂（洪水砂層と思われる）
6. 淡黄茶褐色砂質土
7. 淡灰黒色砂質土（3～4㎝大の礫を含む）
8. 淡灰茶褐色砂質土
9. 茶褐色砂質土
10. 灰黒色砂混じり粘質土
11. 暗青灰色シルト
12. 青黒色粘土（自然木を含む）
13. 暗青灰色シルトと黄茶褐色砂とのラミナ
14. 青灰色シルト（少し砂ぼい）
15. 黄茶褐色砂と青灰色砂とのラミナ

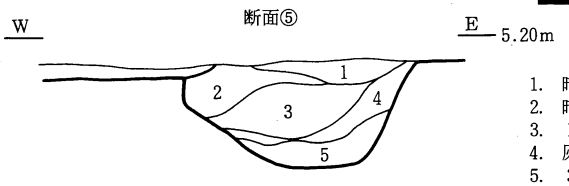


1. 茶褐灰色砂質土
2. 茶褐色砂質土混じり細砂
3. 茶褐色砂質土
4. 暗灰褐色粘質土
5. 暗灰褐色砂混じり粘質土
6. 灰茶褐色中粒砂（鉄及びMn粒を多量に含有する）
7. 青灰色シルト混じり砂質土



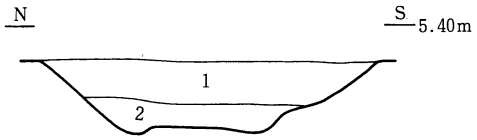
1. 暗灰色砂質土（土器片を多く含む）
2. 黒灰色砂質土（遺物と炭片を多量に含む）
3. 灰褐色砂質土（ベースの粗砂ブロックを含む）
4. 灰色粗砂（ベースの粗砂ブロックを含む）
5. 茶褐色粗砂
6. 灰色砂





1. 暗灰色粘土
2. 暗褐色粒を含む暗灰褐色粘質土
3. 1に類似（粘性強）
4. 灰色砂質土
5. 3に類似（黒褐色粒をやや多く含む）

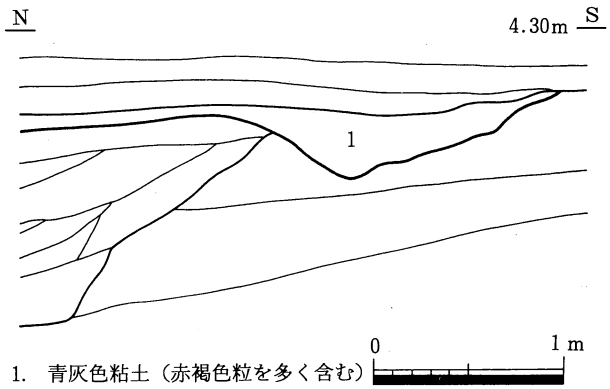
第384図　SDⅢ75 断面図



1. 黄灰色砂質土
2. 淡灰色粗砂土
（褐色粒を含む）

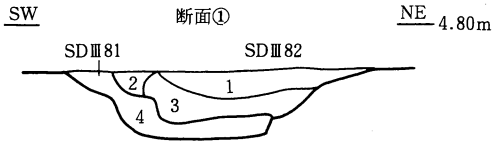
0　1 m

第385図　SDⅢ76 断面図

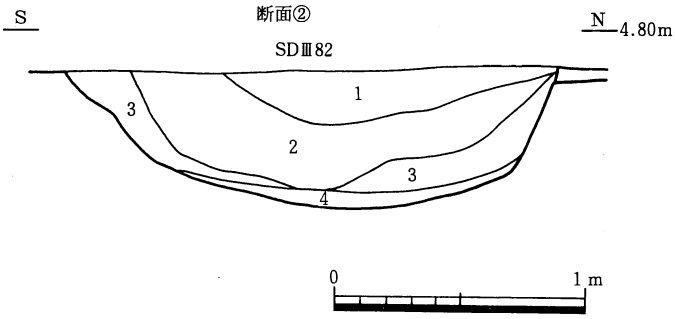


1. 青灰色粘土（赤褐色粒を多く含む）

第386図　SDⅢ80 断面図

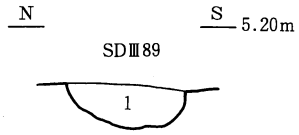


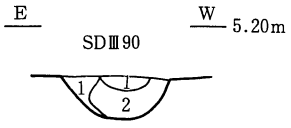
1. 淡灰黄褐色砂質土（まだら状にMn粒を含む）
2. 灰黄褐色砂質土
3. 黄褐色砂質土（灰色がやや強い）
4. 2に類似（Mn粒・黄褐色粒まだら状に含む，SDⅢ81埋土）

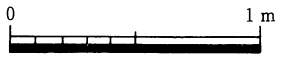


1. 灰黄茶色砂質土
2. 黄灰色弱粘質土（暗茶褐色粒を含む）
3. 黄灰色砂質土（2に類似するが，暗茶褐色粒は少ない）
4. 灰黄色粘質土（ベースに類似する）

第387図　SDⅢ81・82 断面図

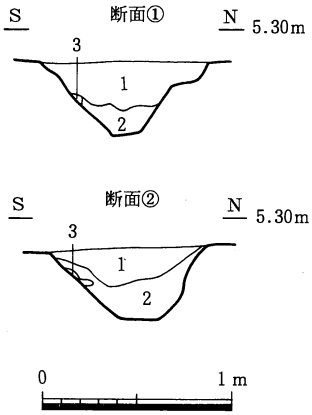






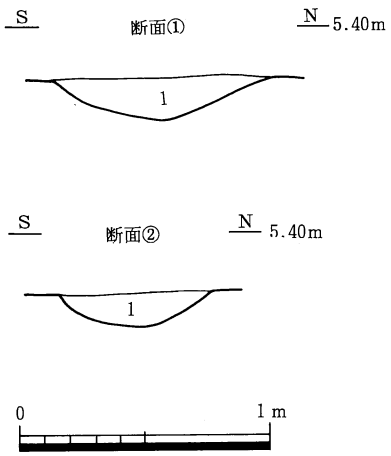
1. 暗灰褐色砂質土
2. 1に類似
（灰色のシミ込みあり）

第389図　SDⅢ89・90 断面図



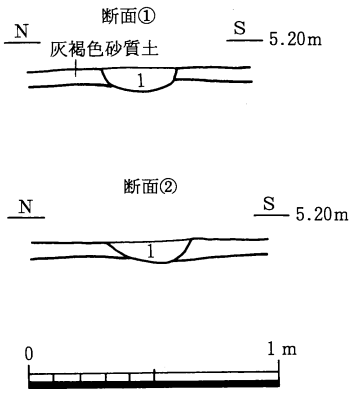
1. 暗褐色砂質土（炭片多く含む）
2. 黒灰色砂質土
3. 黄褐色砂質土
（黄褐色粘土ブロックを含む）

第390図　SDⅢ93 断面図



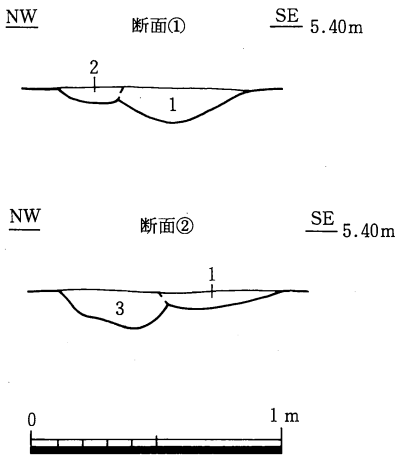
1. 黒灰色砂質土（粗砂を多量に含む）

第391図　SDⅢ95 断面図



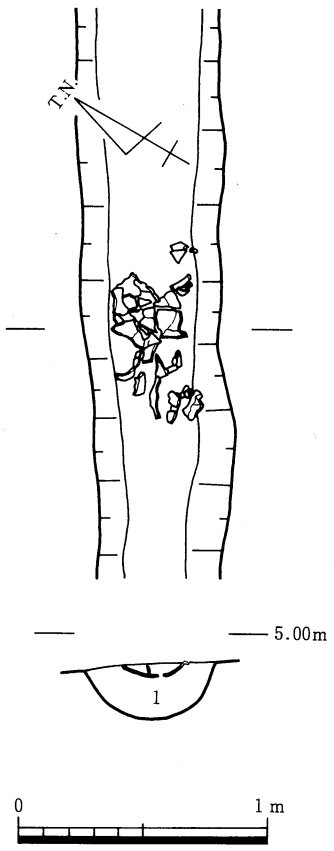
1. 灰白色砂質土

第393図　SDⅢ108 断面図



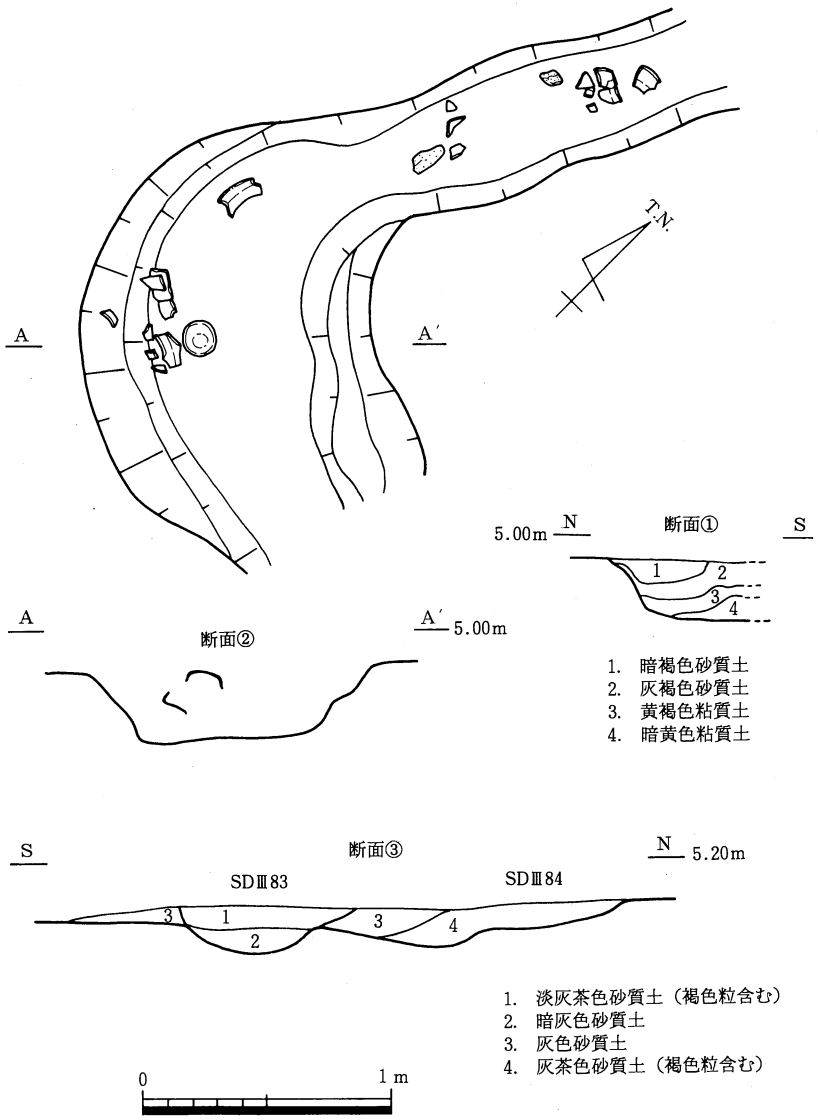
1. 灰褐色砂質土
2. 淡灰褐色砂質土
3. 暗灰褐色砂質土

第394図　SDⅢ110 断面図



1. 淡茶黒色粘質土

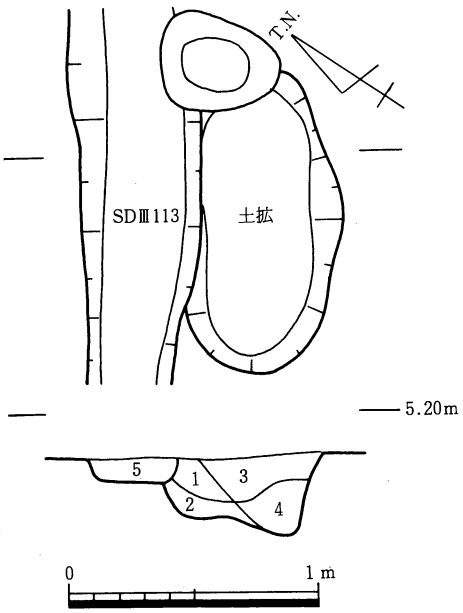
第392図　SDⅢ97 平・断面図



1. 暗褐色砂質土
2. 灰褐色砂質土
3. 黄褐色粘質土
4. 暗黄色粘質土

1. 淡灰茶色砂質土（褐色粒含む）
2. 暗灰色砂質土
3. 灰色砂質土
4. 灰茶色砂質土（褐色粒含む）

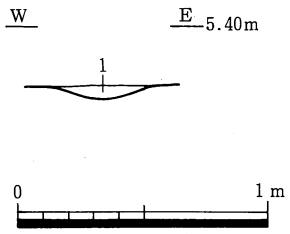
第388図　SDⅢ83·84 平・断面図



1. 灰色粘質土
2. 灰色砂質土（軟質）
3. 1に類似（軟質）
4. 暗灰色砂質土
5. 暗灰色粘質土

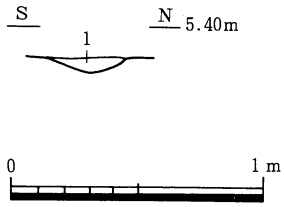
（1～5ともに暗茶色のMn粒と小さなベースのブロックを含む）

第395図　SDⅢ113 平・断面図



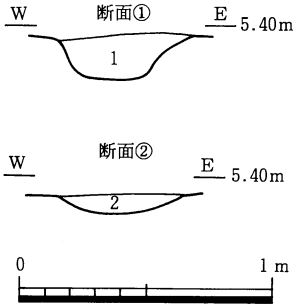
1. 黒灰色砂質土

第396図　SDⅢ135 断面図



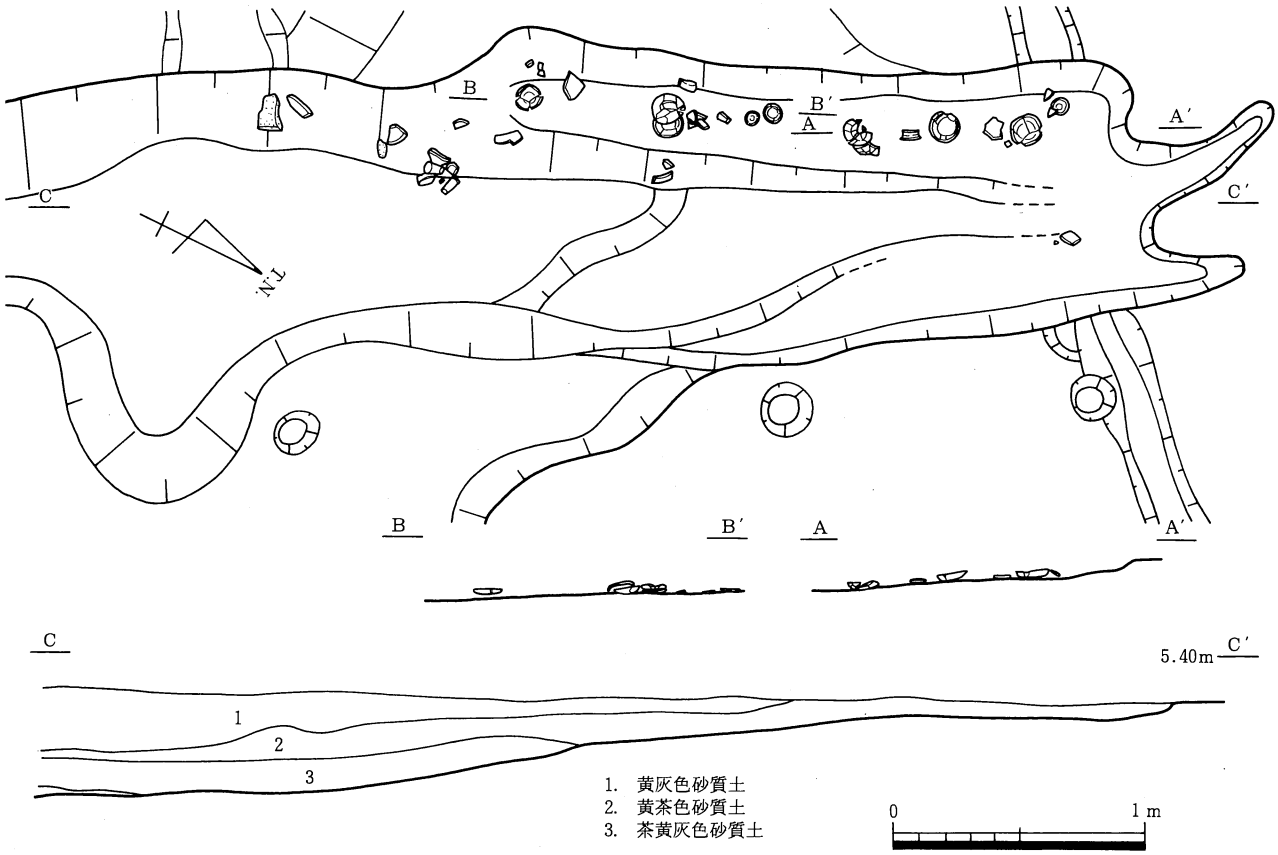
1. 黒灰色砂質土

第397図　SDⅢ136 断面図



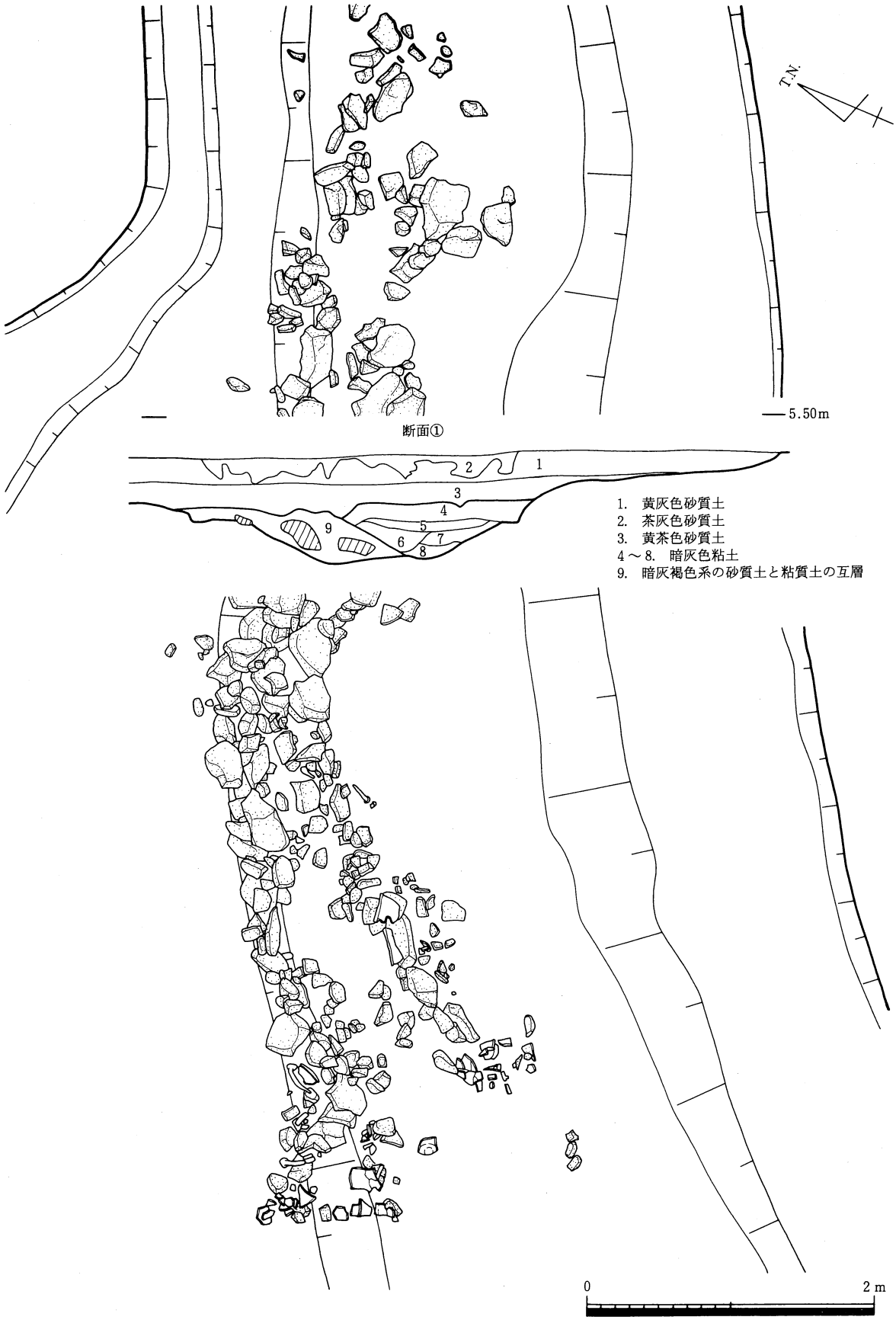
1. 灰色粘質土
（茶褐色粒・黄褐色粒・砂粒を含む）
2. 灰色粘土
（茶褐色粒・砂粒を含む）

第398図　SDⅢ140 断面図

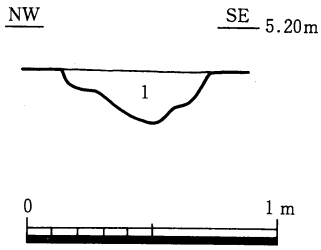


1. 黄灰色砂質土
2. 黄茶色砂質土
3. 茶黄灰色砂質土

第399図　SDⅢ142 平・断面図

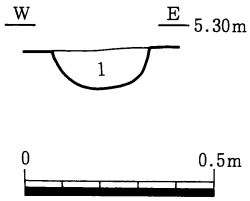


第400図　SDⅢ143・144 平・断面図(1)



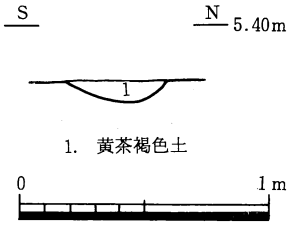
1. 淡黒褐色粘質土

第403図　SDⅢ147 断面図



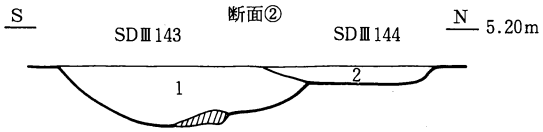
1. 茶灰色土（褐色粒混じり）

第404図　SDⅢ159 断面図

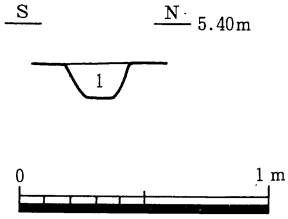


1. 黄茶褐色土

第405図　SDⅢ160 断面図

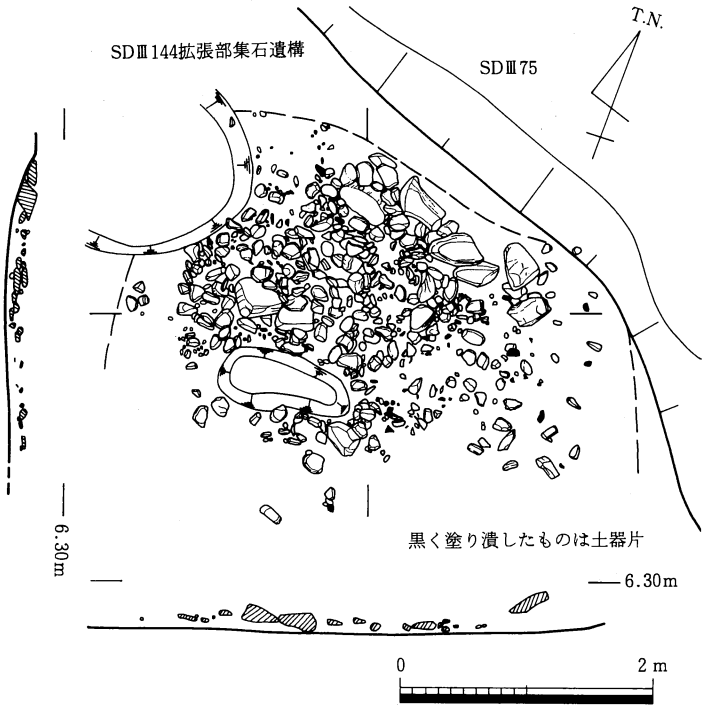


1. 灰褐色シルト（SDⅢ143埋土）
2. 灰色シルト（SDⅢ144埋土）

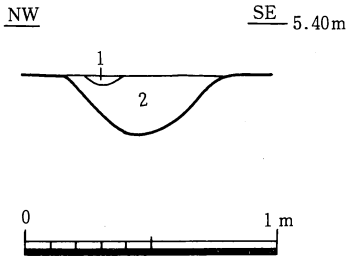


1. 暗灰色土

第406図　SDⅢ161 断面図

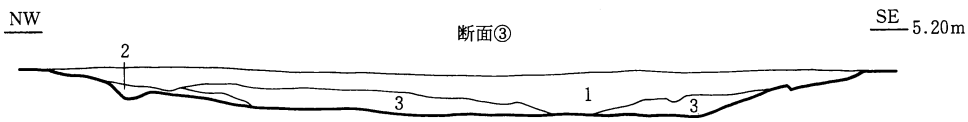


第401図　SDⅢ143・144 平・断面図(2)

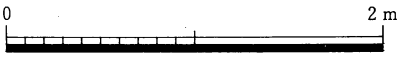


1. 黒灰色砂質土
2. 茶灰色粘質土

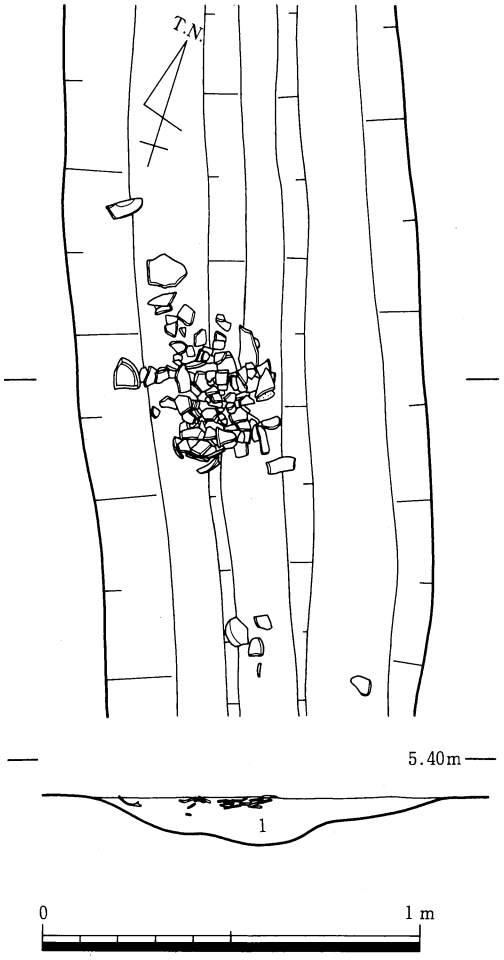
第407図　SDⅢ162 断面図



1. 灰褐色細砂質土（黄褐色土ブロックを含む）
2. 黒灰色細砂質土（　　〃　　）
3. 1，2の混在

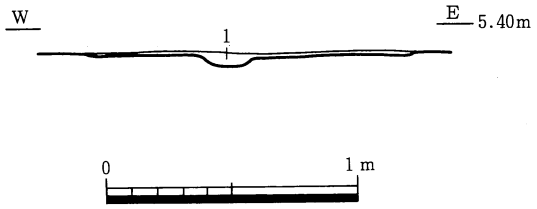


第402図　SDⅢ143 断面図



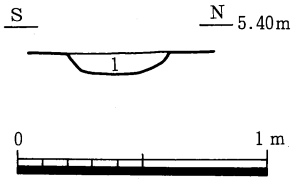
1. 明灰色砂質土（ベースの極小ブロックを含む）

第408図　SDⅢ166 平・断面図



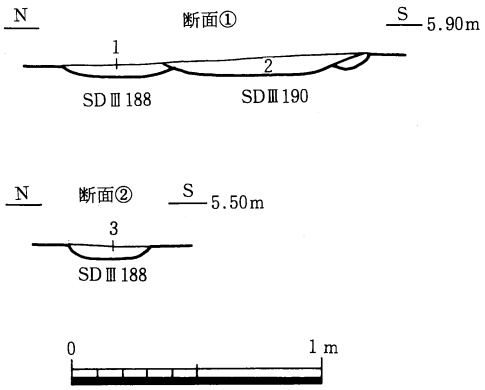
1. 黄褐明灰色砂質土（細かい褐色粒を含む）

第411図　SDⅢ173 断面図



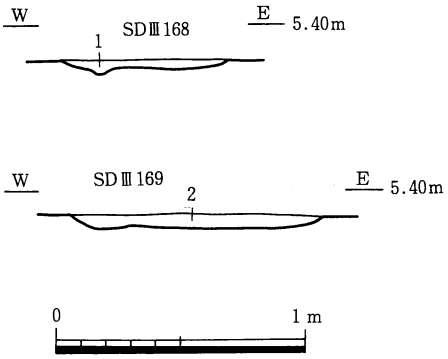
1. 暗褐灰色砂質土
（黄褐色のベース粒子僅かに含む）

第412図　SDⅢ176 断面図



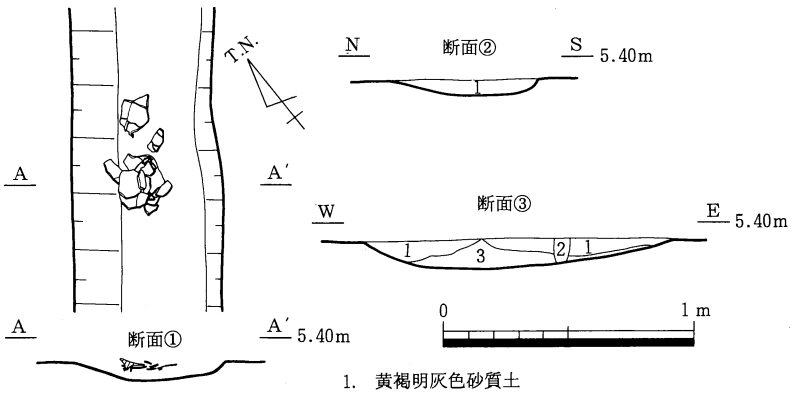
1. 灰青色シルト
2. 弱砂混灰青色シルト
3. 暗褐灰色砂質土
（ベースのブロックを少量含む）

第414図　SDⅢ188・190 断面図



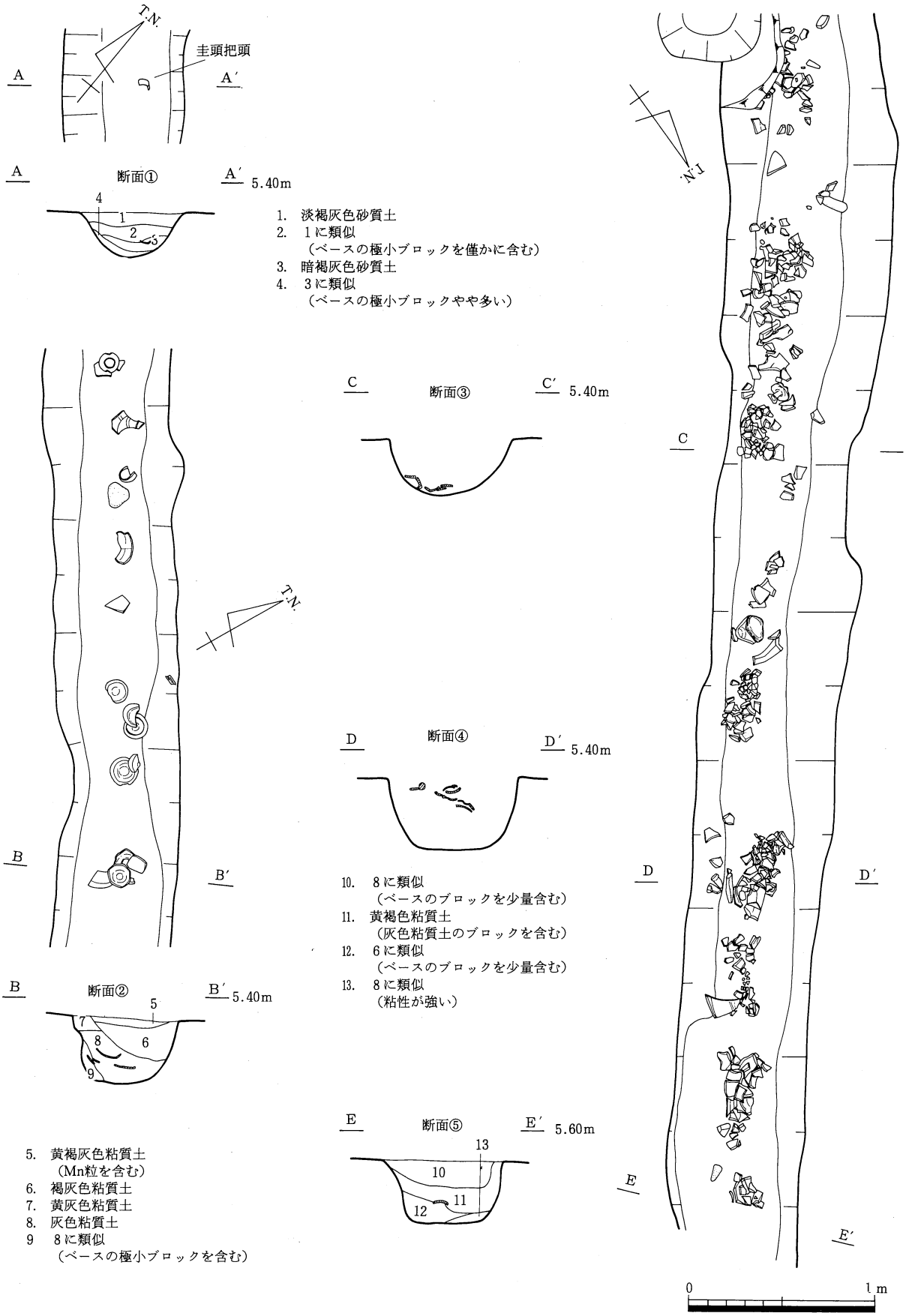
1. 明灰色砂質土（ベースを含む）
2. 黄褐暗灰色砂質土

第409図　SDⅢ168・169 断面図

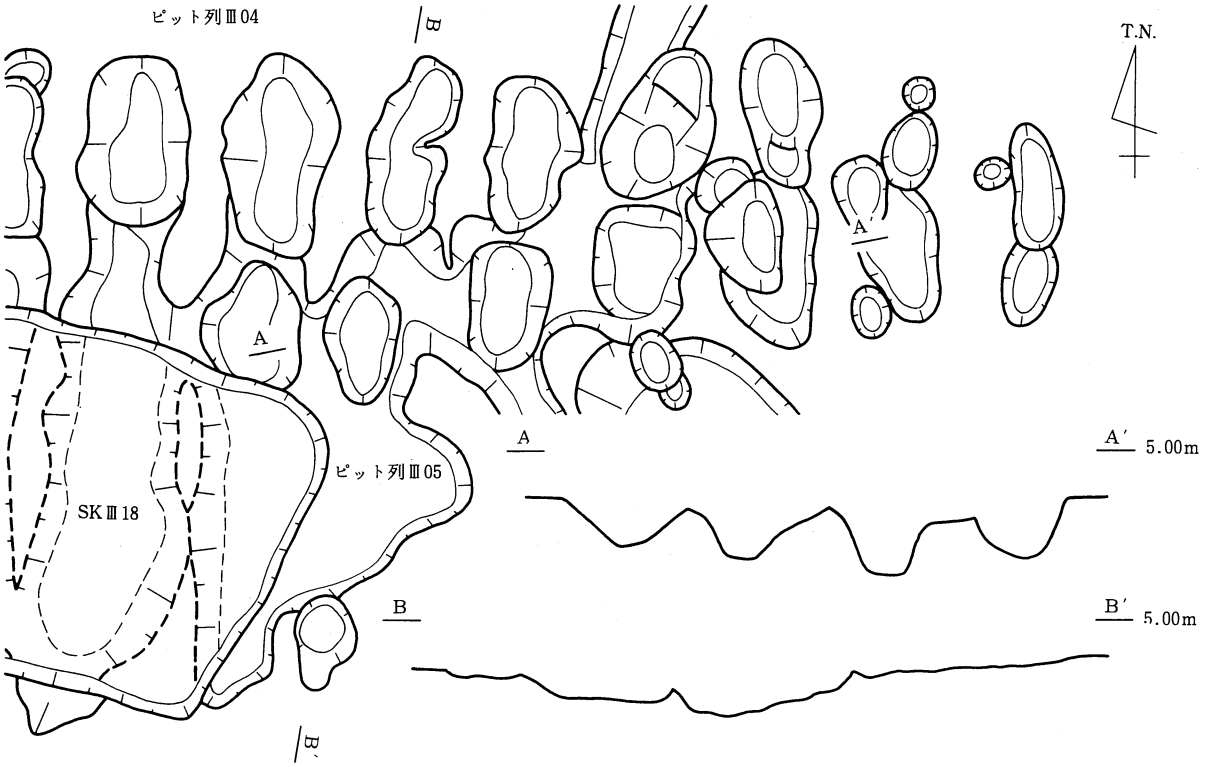


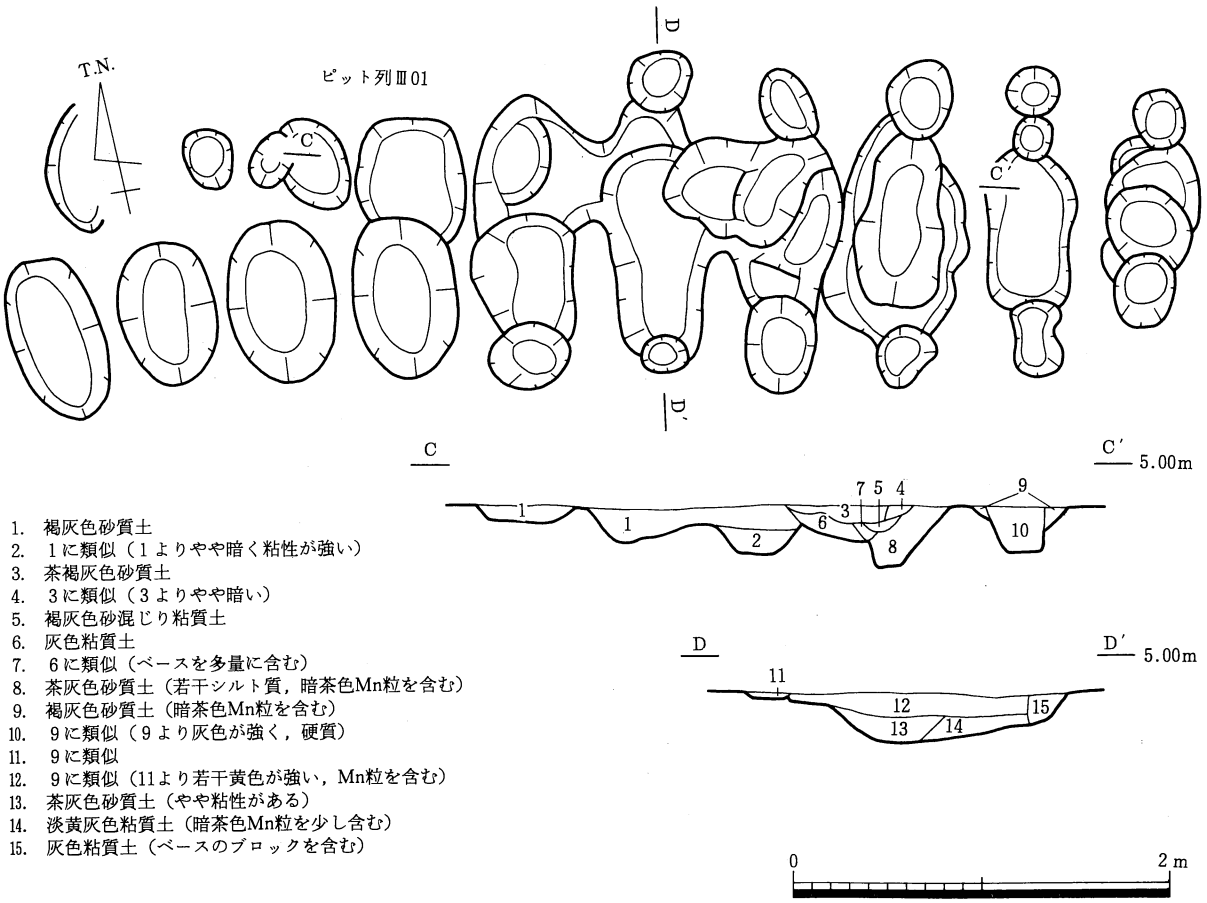
1. 黄褐明灰色砂質土
2. 明褐灰色シルト
3. 褐色粒子混明灰黄褐色砂質土

第410図　SDⅢ170 平・断面図



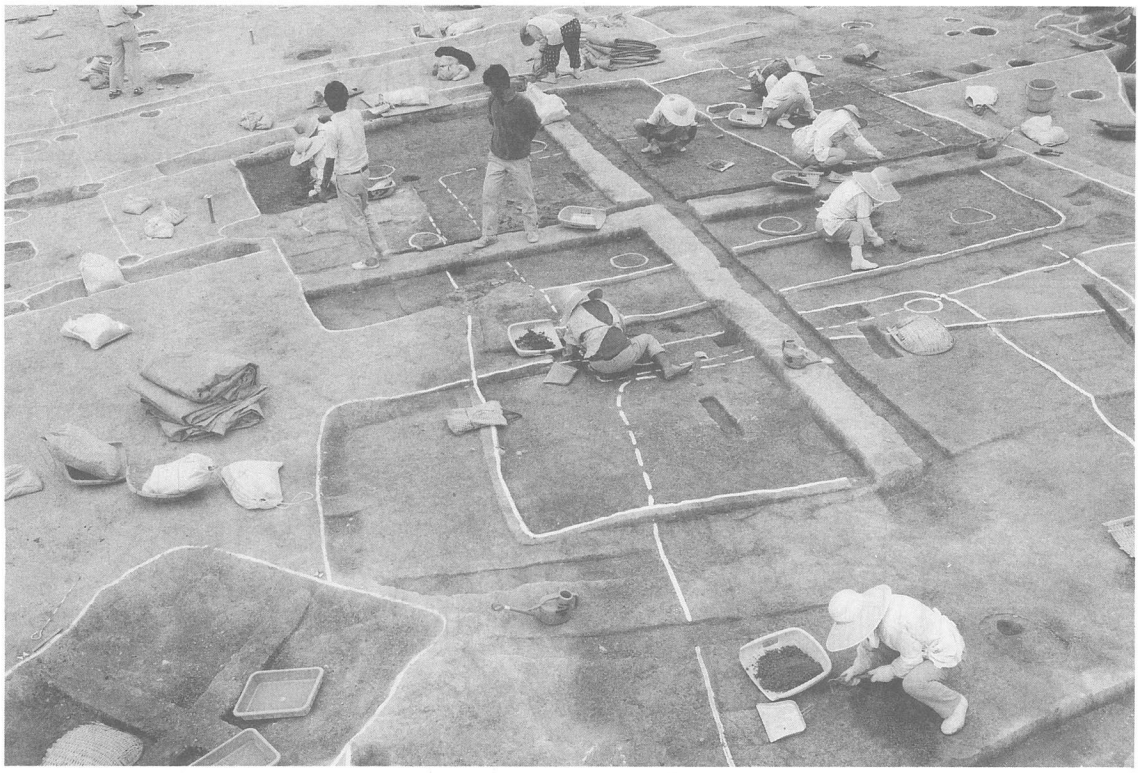
第413図　SDⅢ177 平・断面図



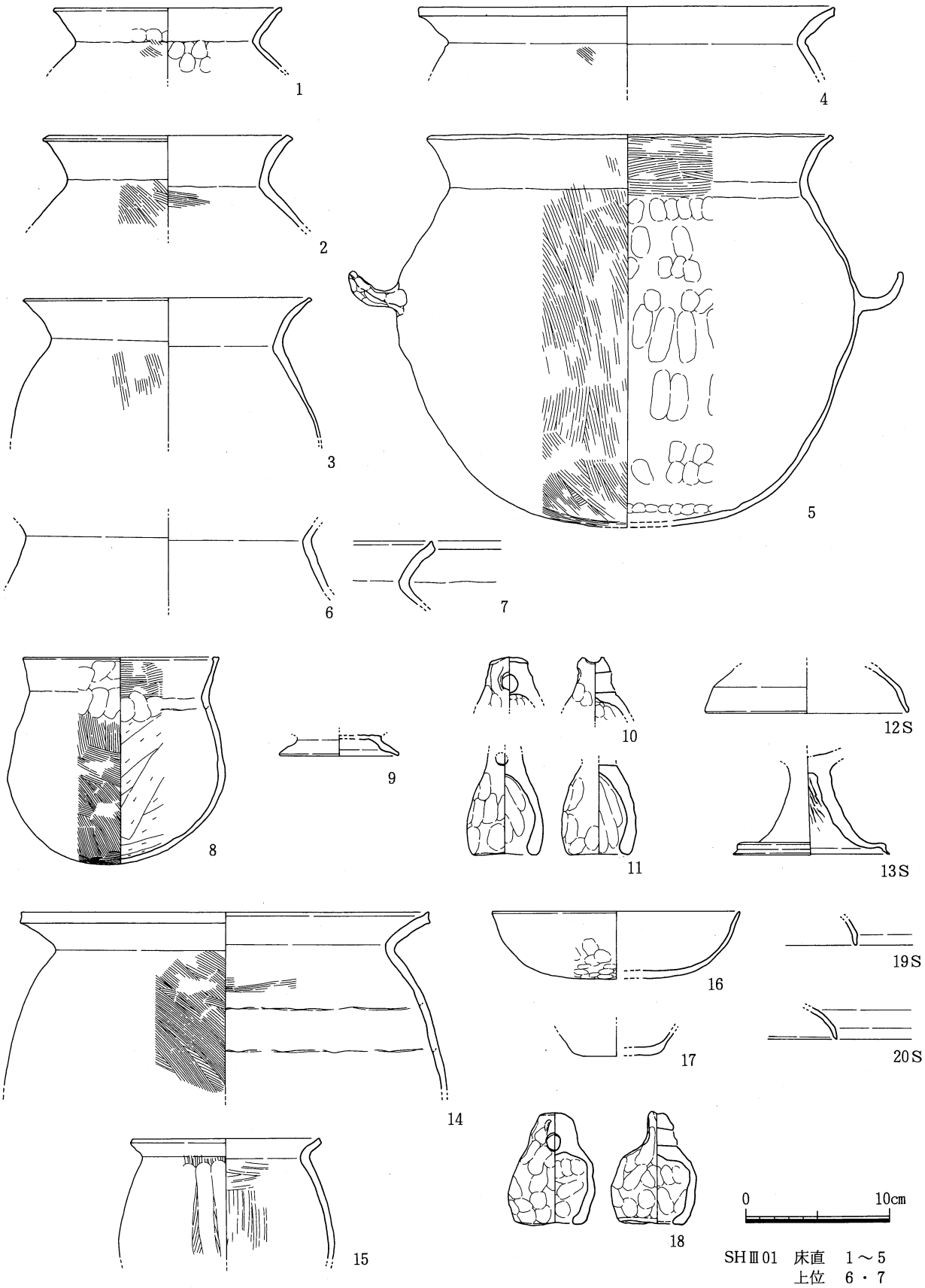


第415図　ピット列Ⅲ01・04・05 平・断面図

SHⅡ31・32 調査風景

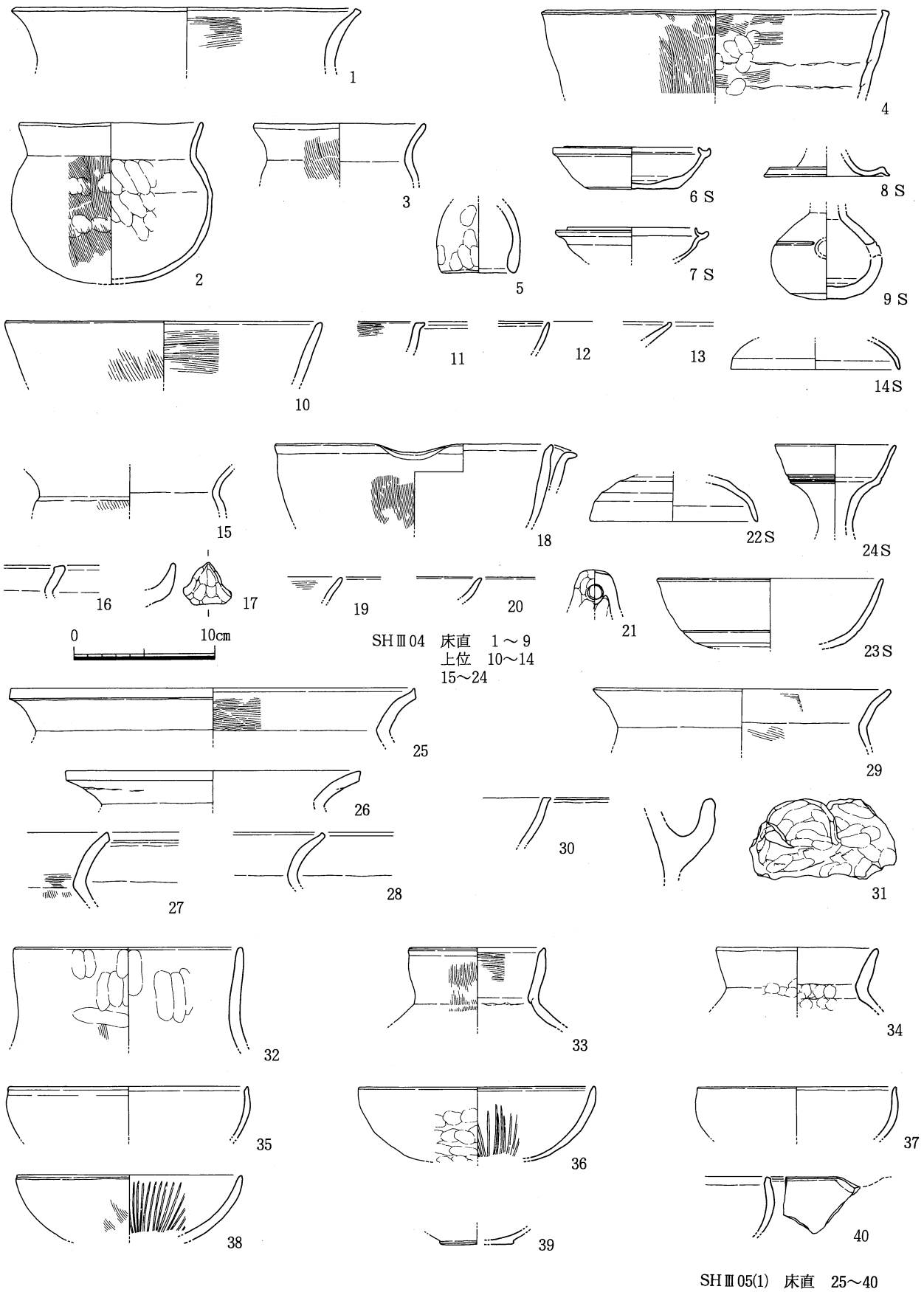


SHⅢ30～37 調査風景

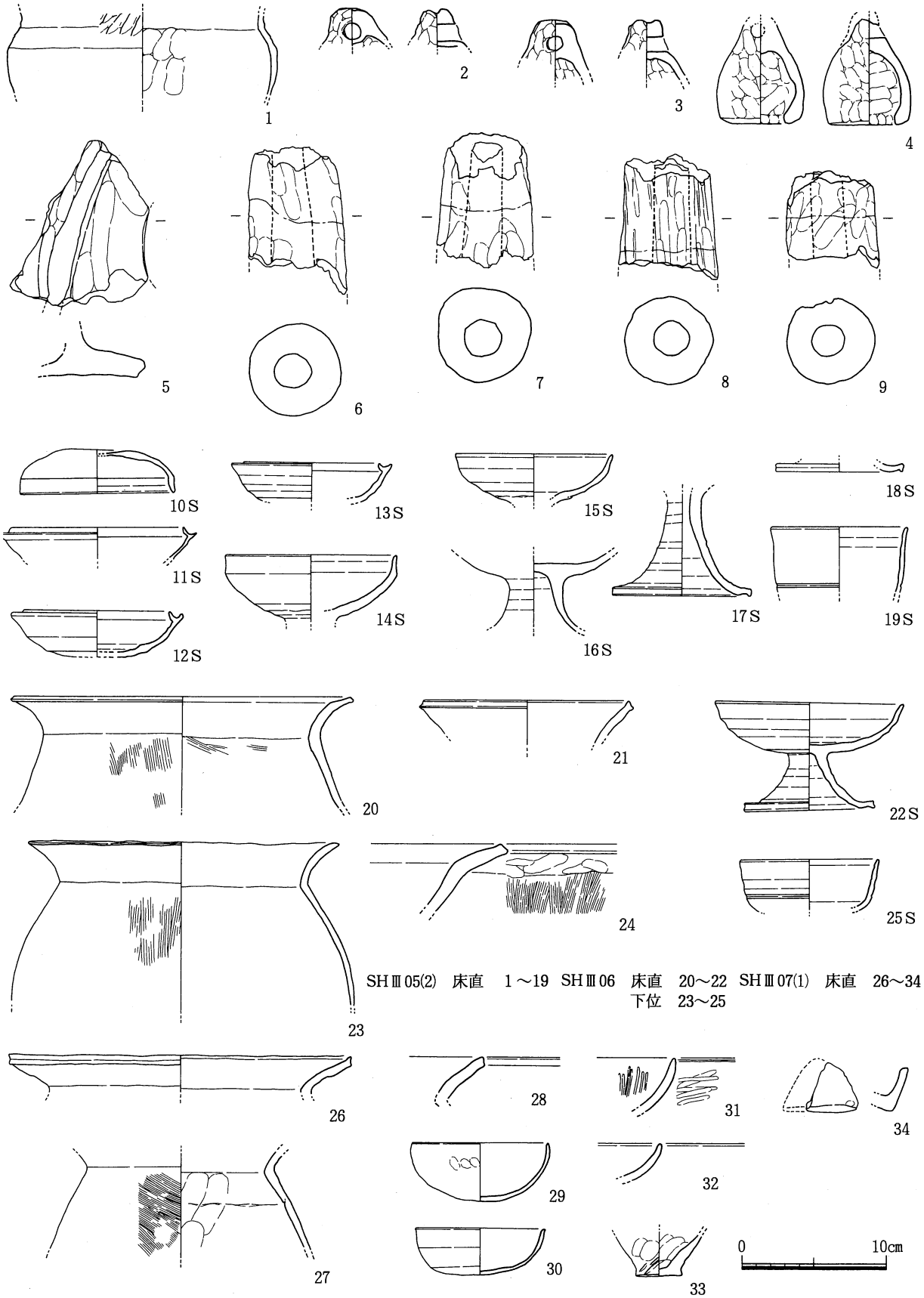


SHⅢ01　床直　1～5
　　上位　6・7
SHⅢ02　床直　8～13
SHⅢ03　床直　14～20

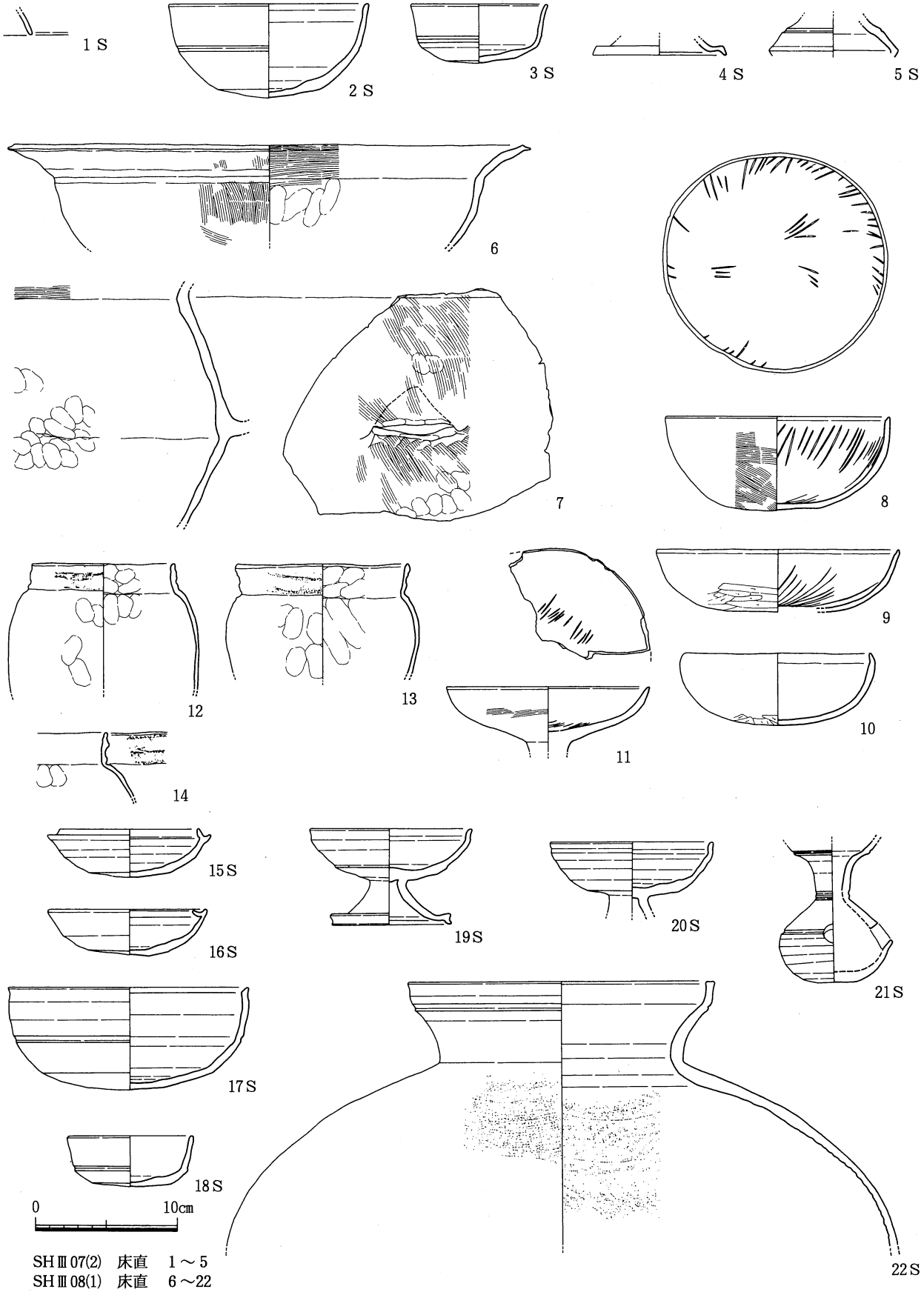
第416図　Ⅲ期竪穴住居 出土土器1



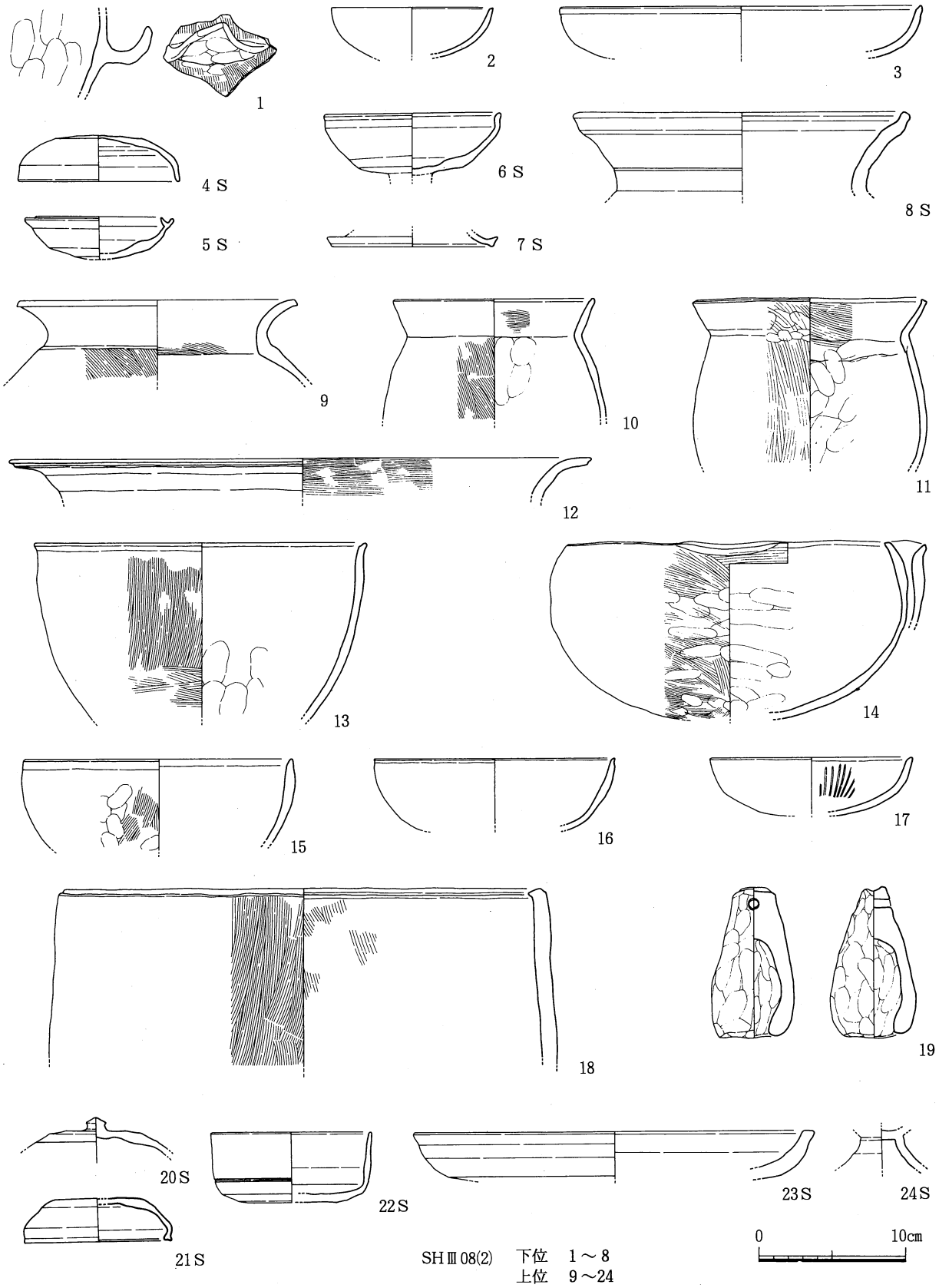
第417図 Ⅲ期竪穴住居 出土土器 2



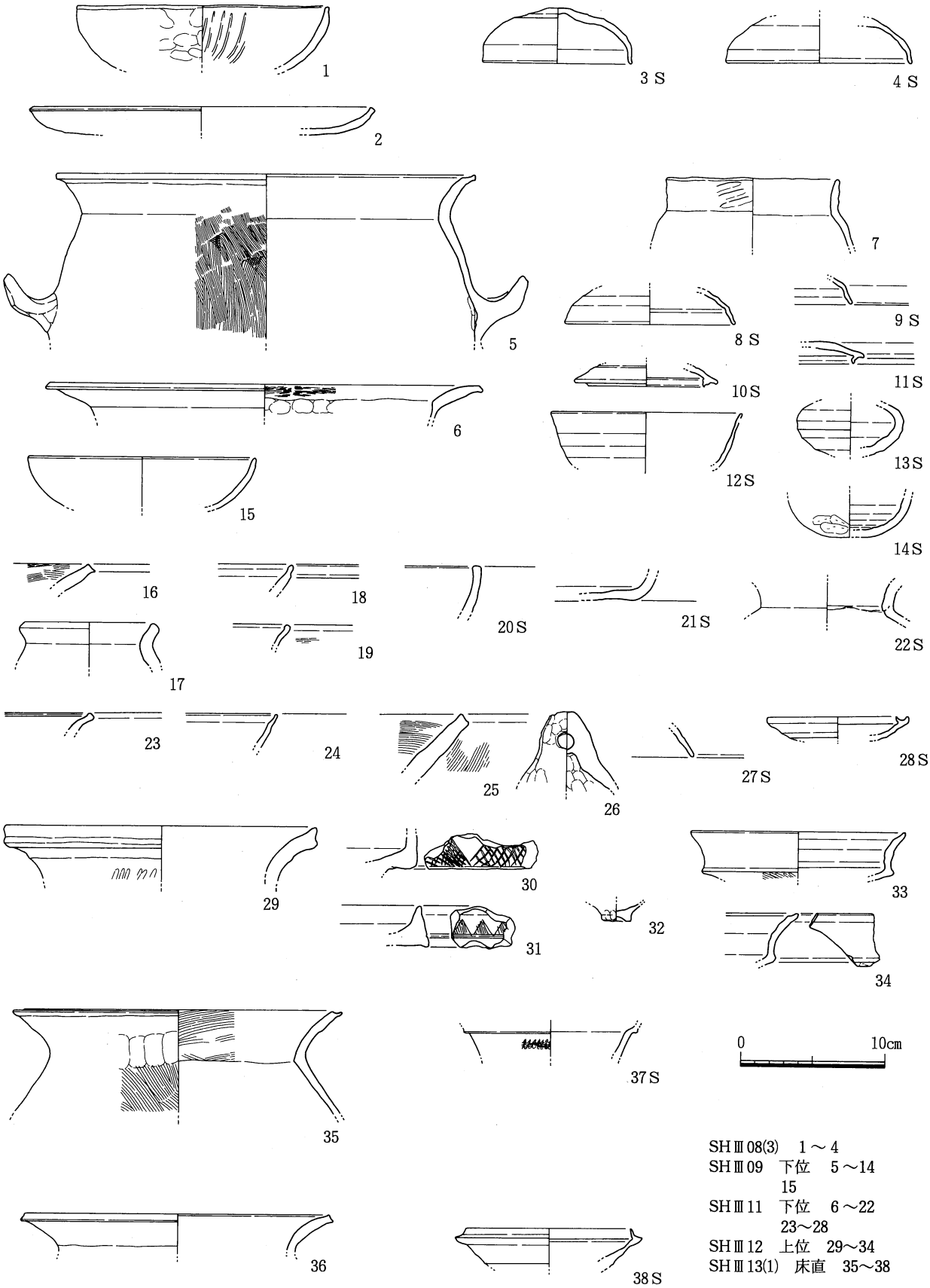
第418図 Ⅲ期竪穴住居 出土土器 3



第419図　Ⅲ期竪穴住居 出土土器 4

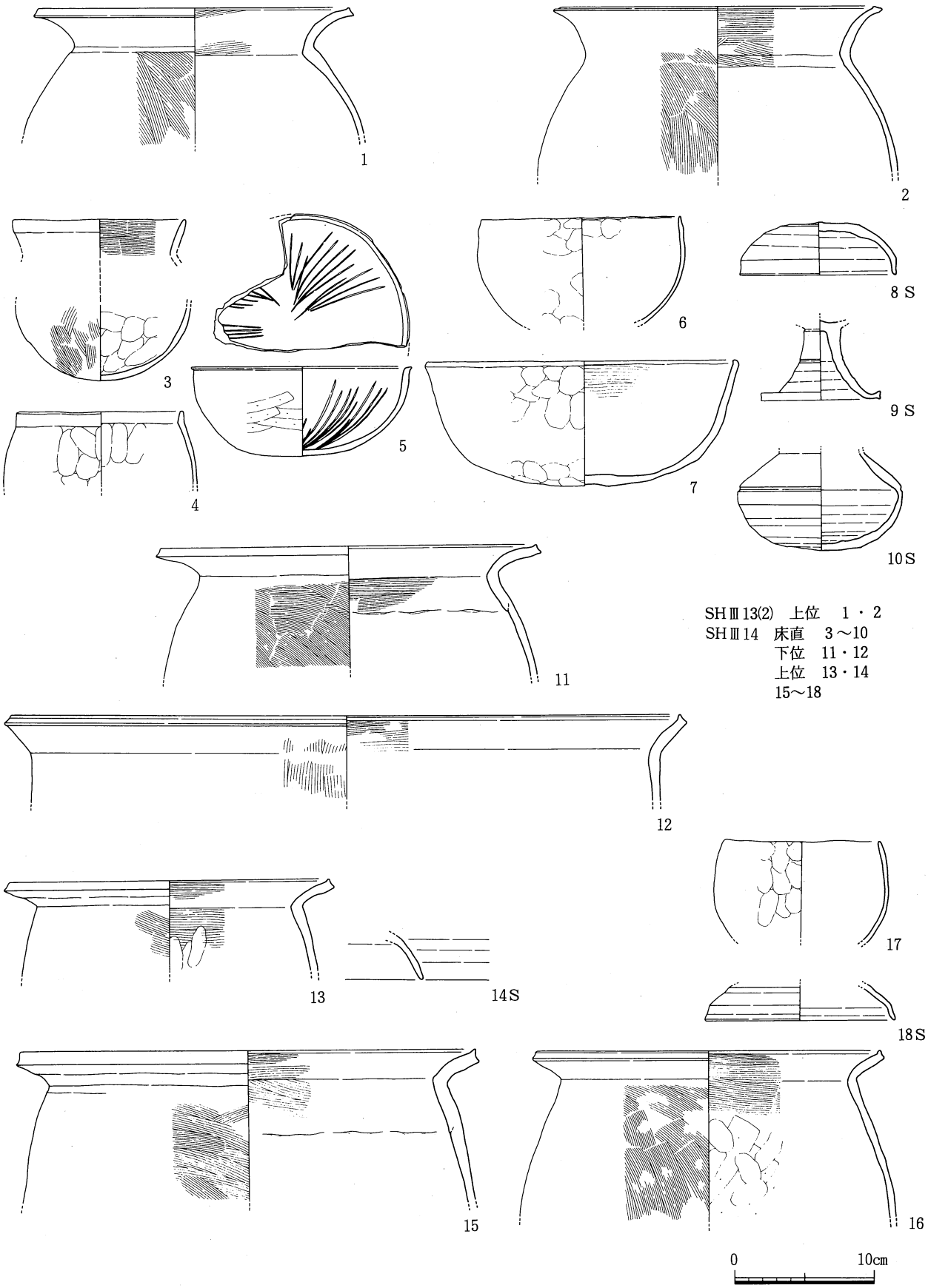


第420図　Ⅲ期竪穴住居 出土土器 5

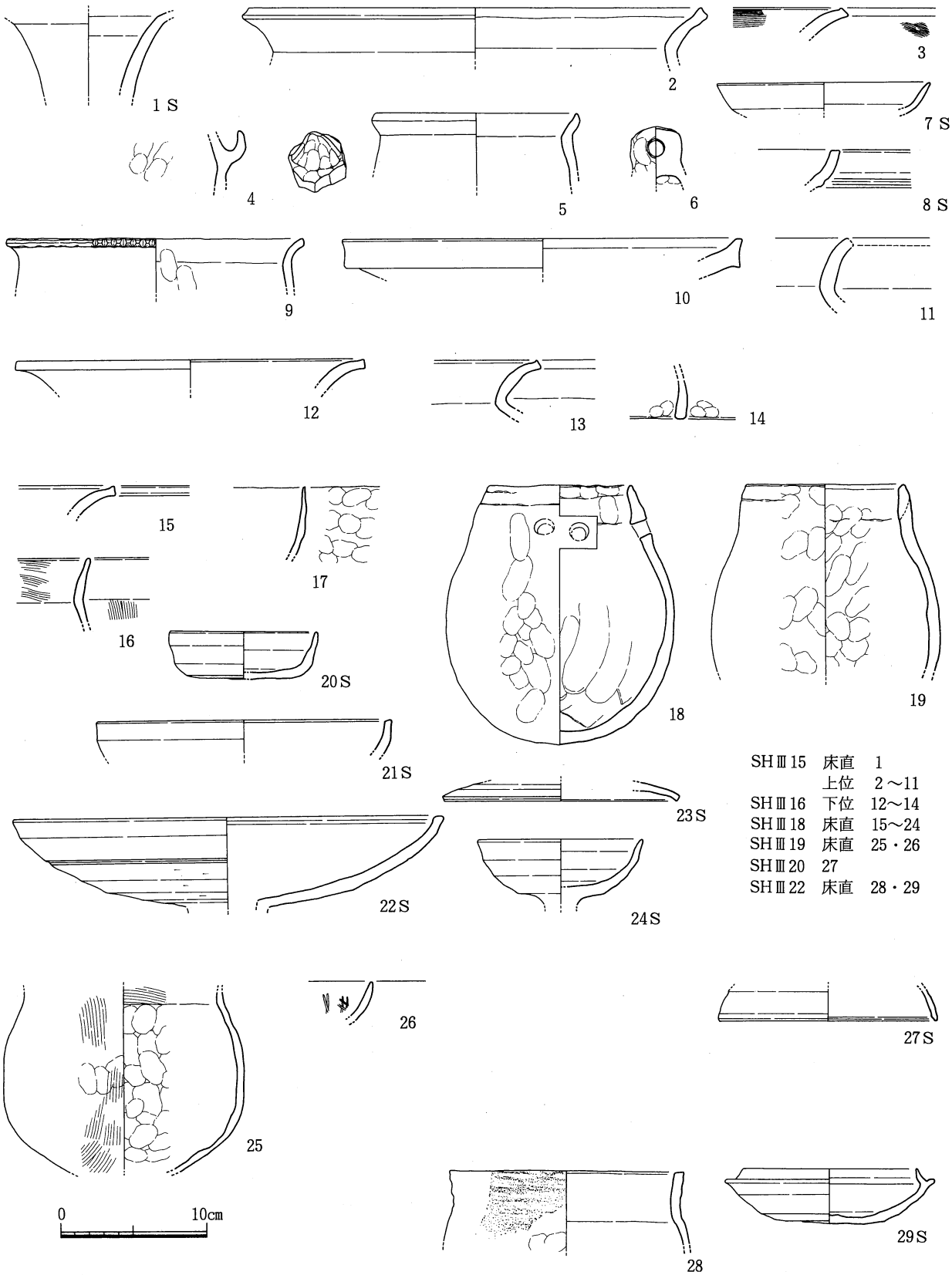


SHⅢ08(3)　1～4
SHⅢ09　下位　5～14
15
SHⅢ11　下位　6～22
23～28
SHⅢ12　上位　29～34
SHⅢ13(1)　床直　35～38

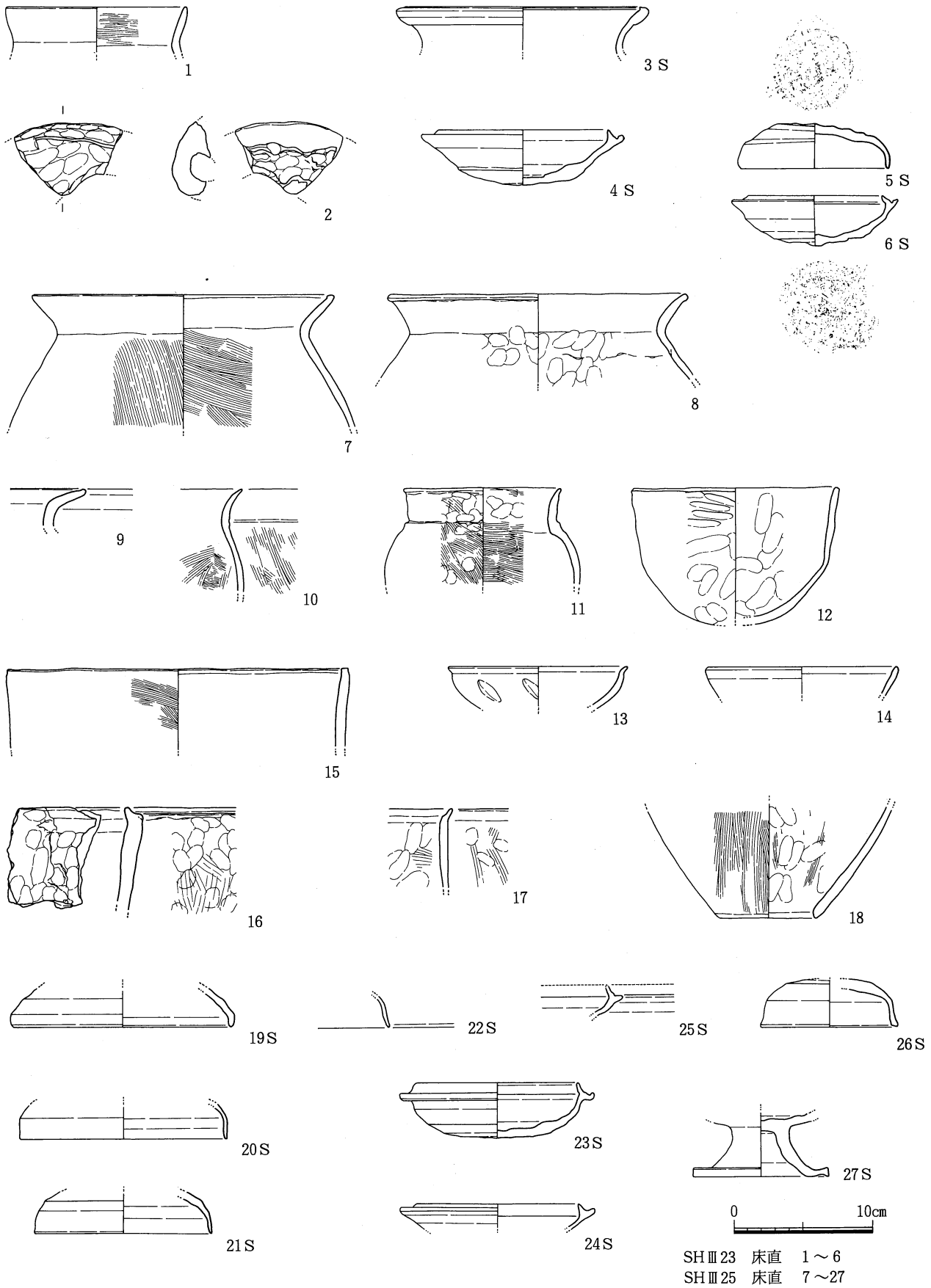
第421図　Ⅲ期竪穴住居 出土土器 6



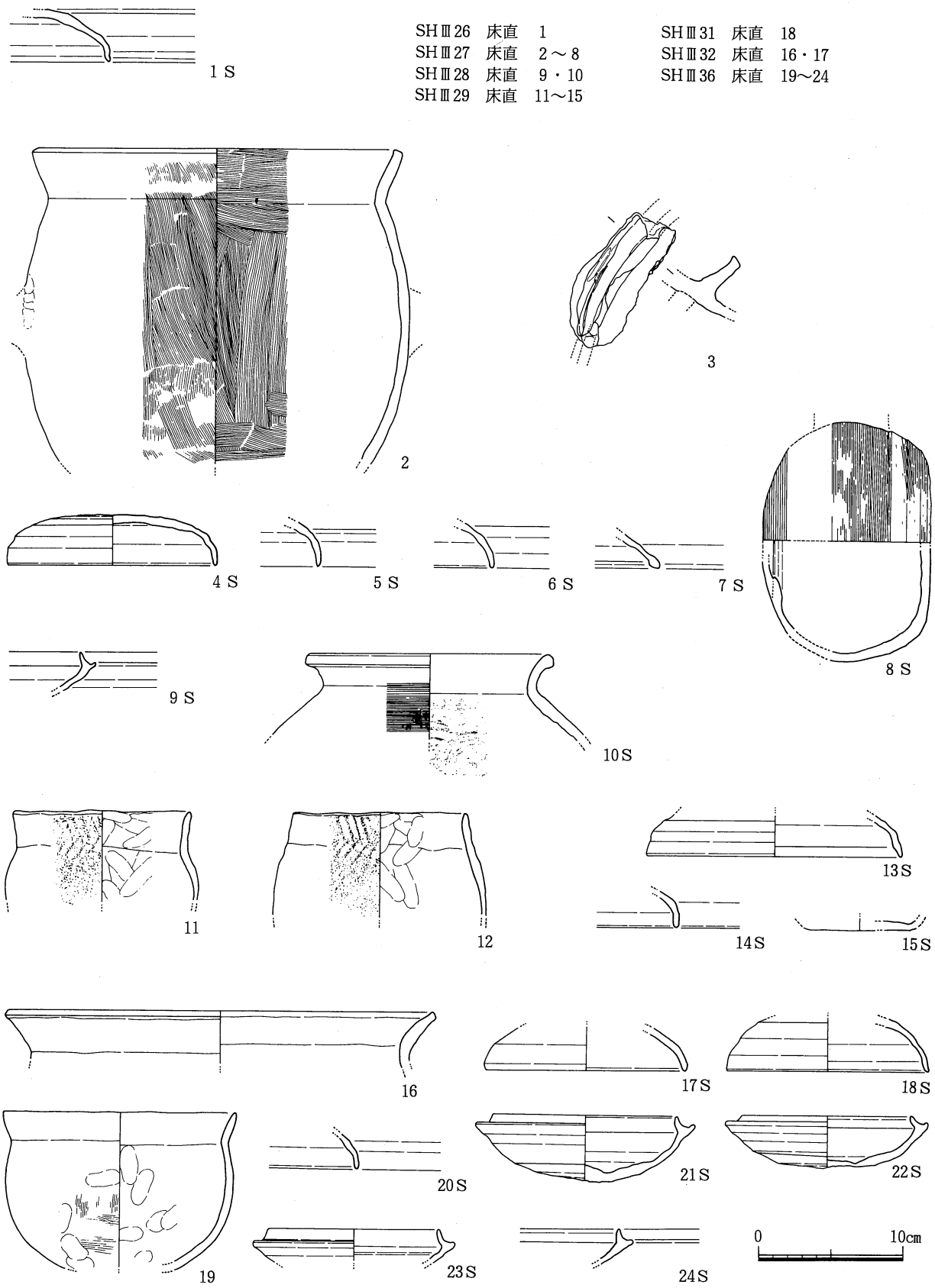
第422図　Ⅲ期竪穴住居 出土土器 7



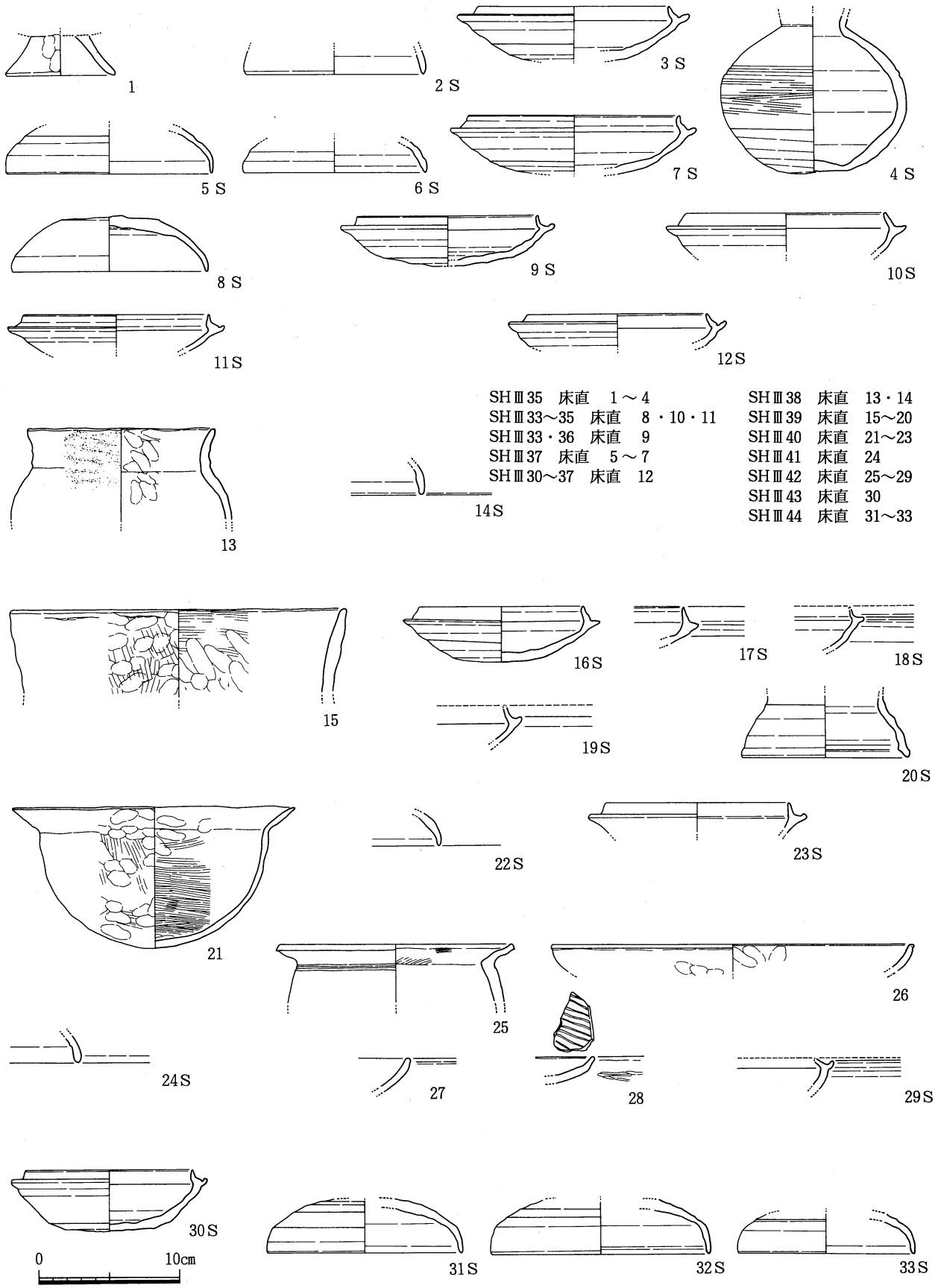
第423図　Ⅲ期竪穴住居 出土土器 8



第424図　Ⅲ期竪穴住居 出土土器 9



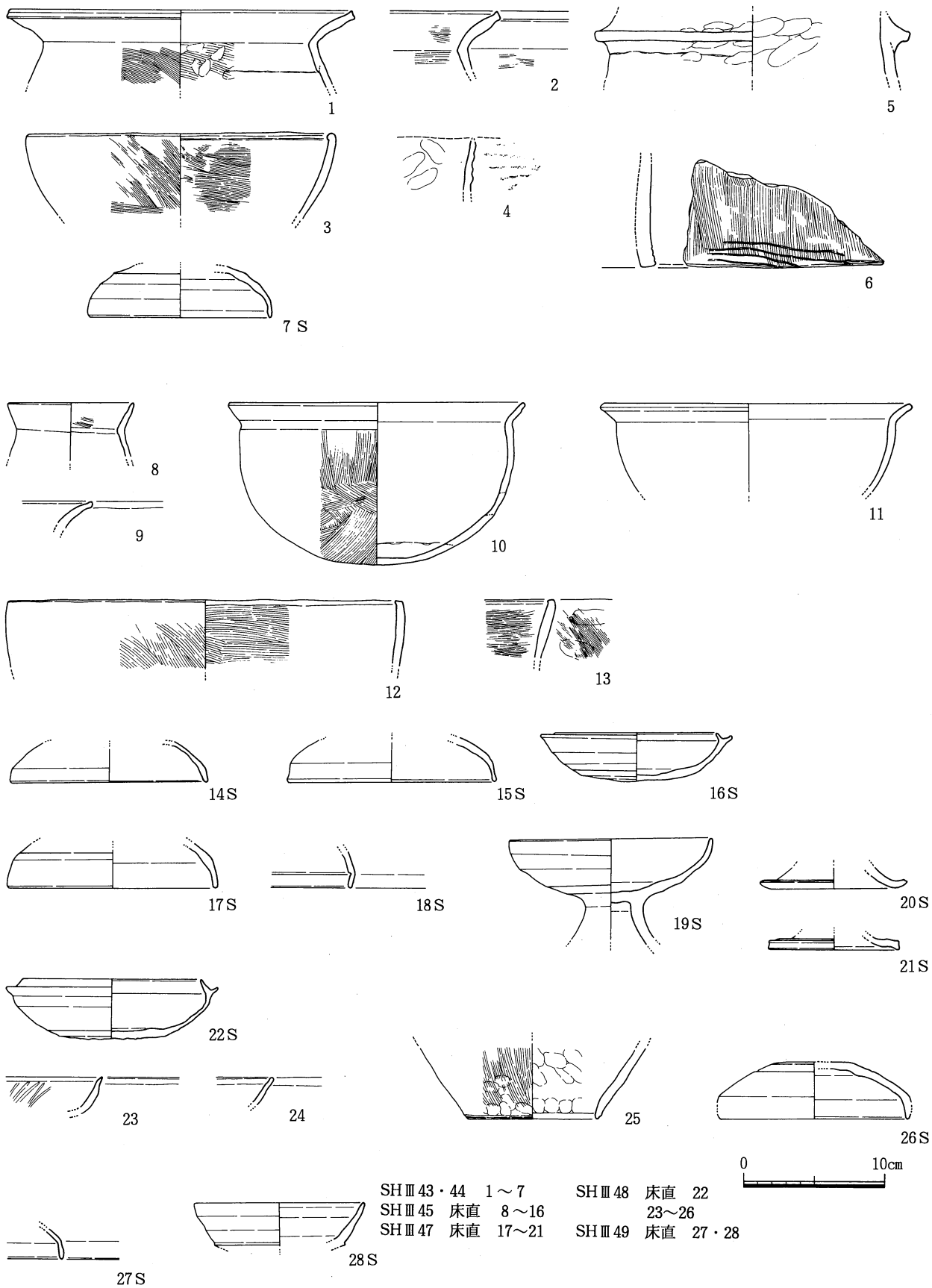
第425図　Ⅲ期竪穴住居 出土土器10



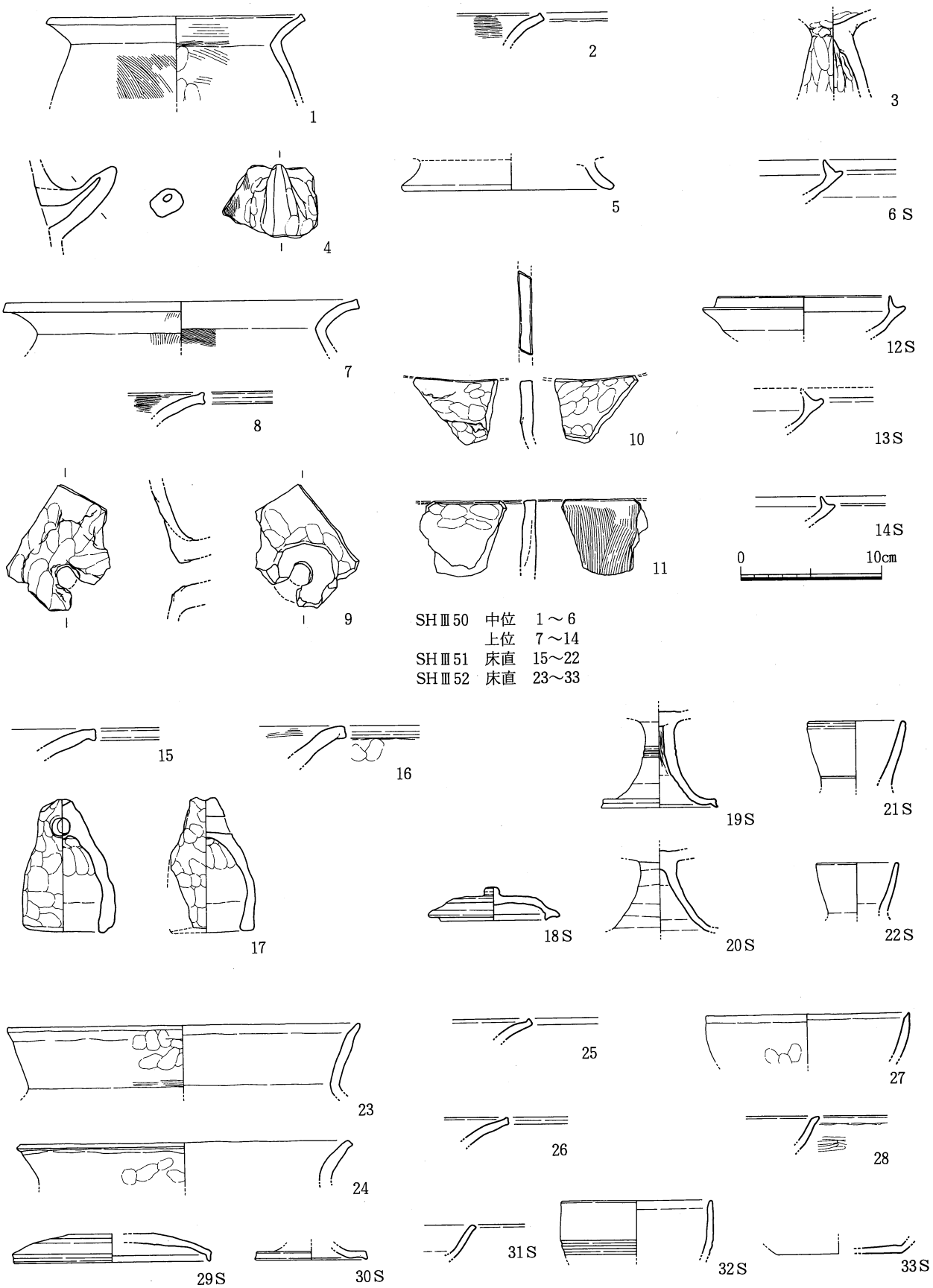
SHⅢ35　床直　1～4
SHⅢ33～35　床直　8・10・11
SHⅢ33・36　床直　9
SHⅢ37　床直　5～7
SHⅢ30～37　床直　12

SHⅢ38　床直　13・14
SHⅢ39　床直　15～20
SHⅢ40　床直　21～23
SHⅢ41　床直　24
SHⅢ42　床直　25～29
SHⅢ43　床直　30
SHⅢ44　床直　31～33

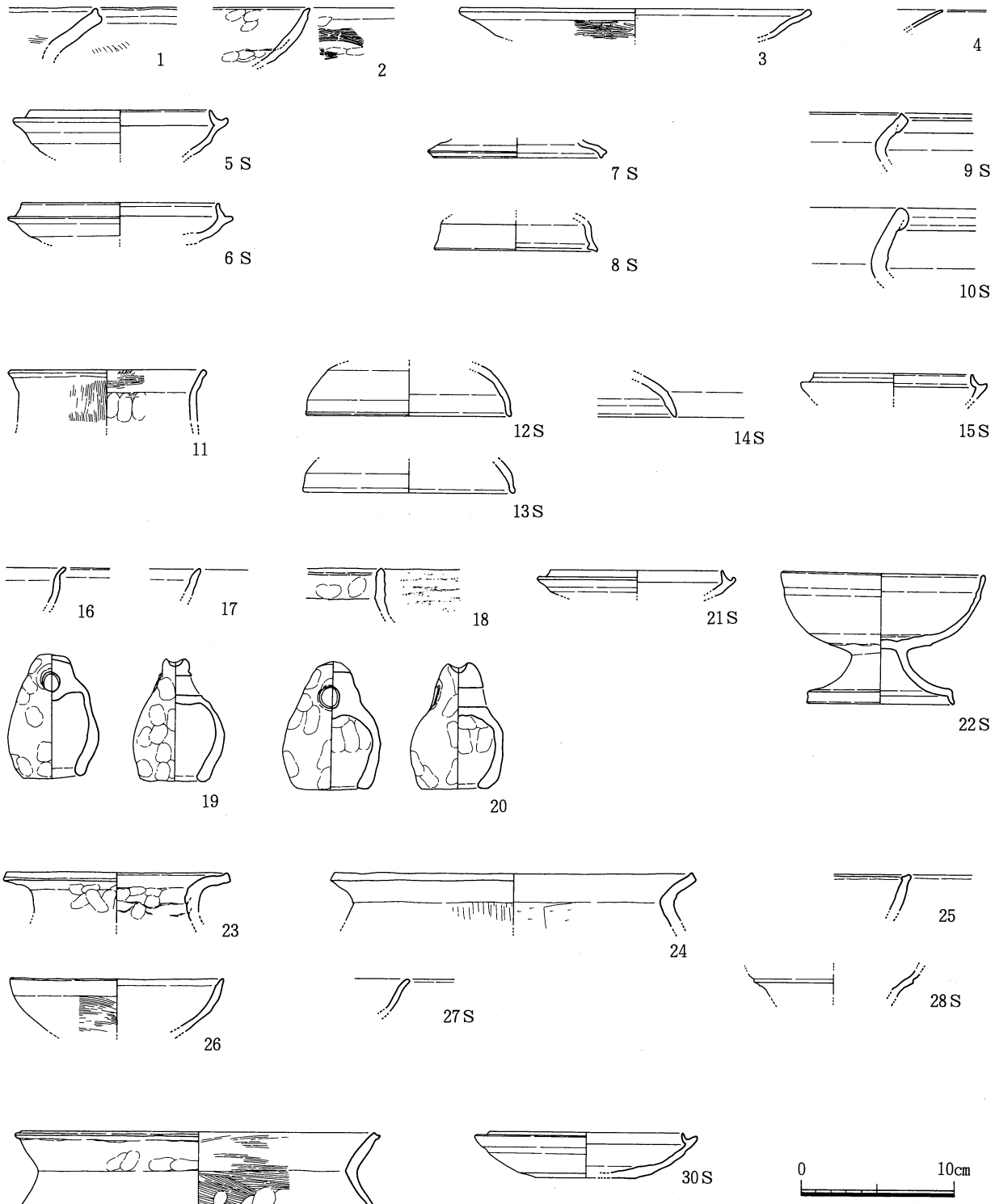
第426図　Ⅲ期竪穴住居 出土土器11



第427図　Ⅲ期竪穴住居 出土土器12

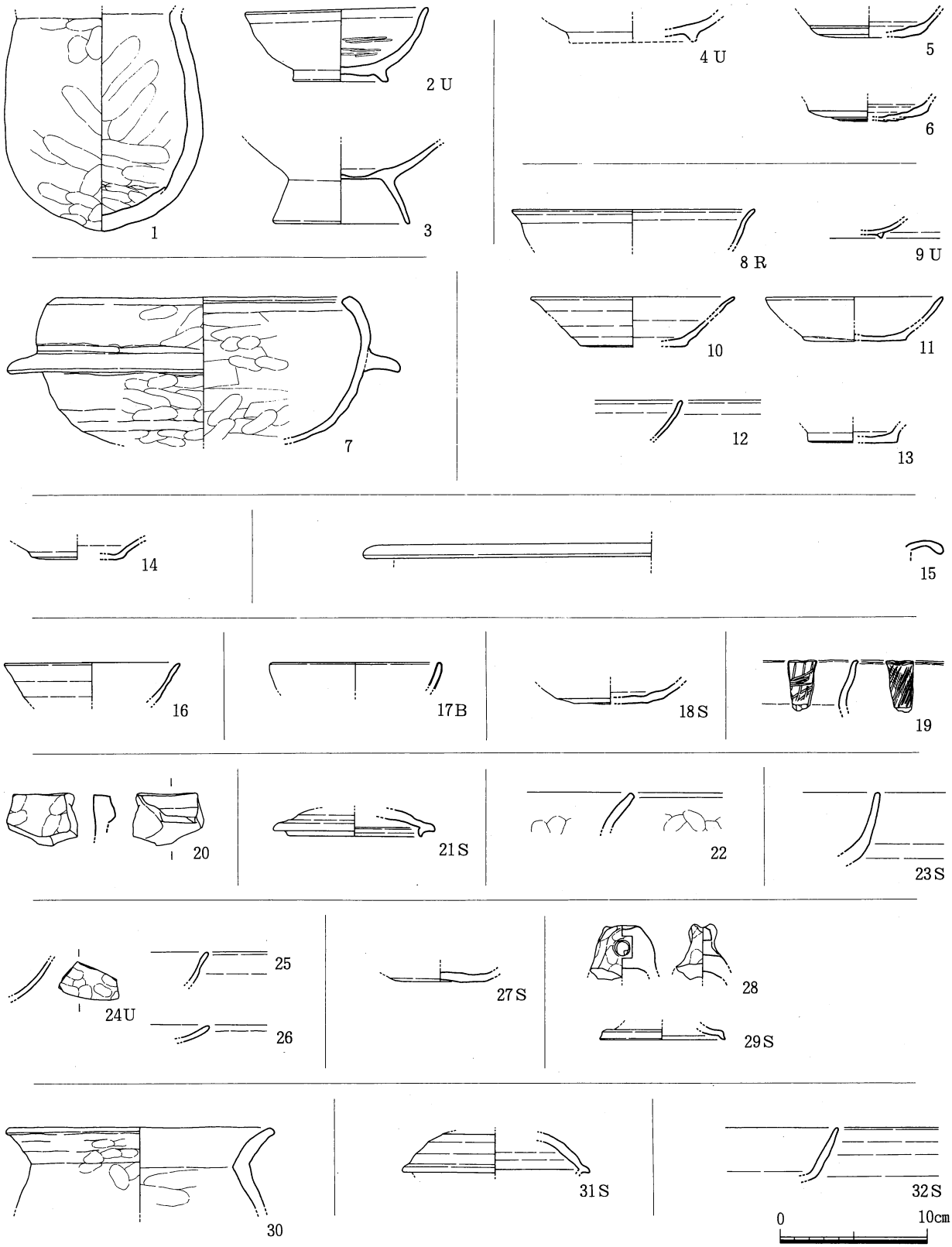


第428図 Ⅲ期竪穴住居 出土土器13



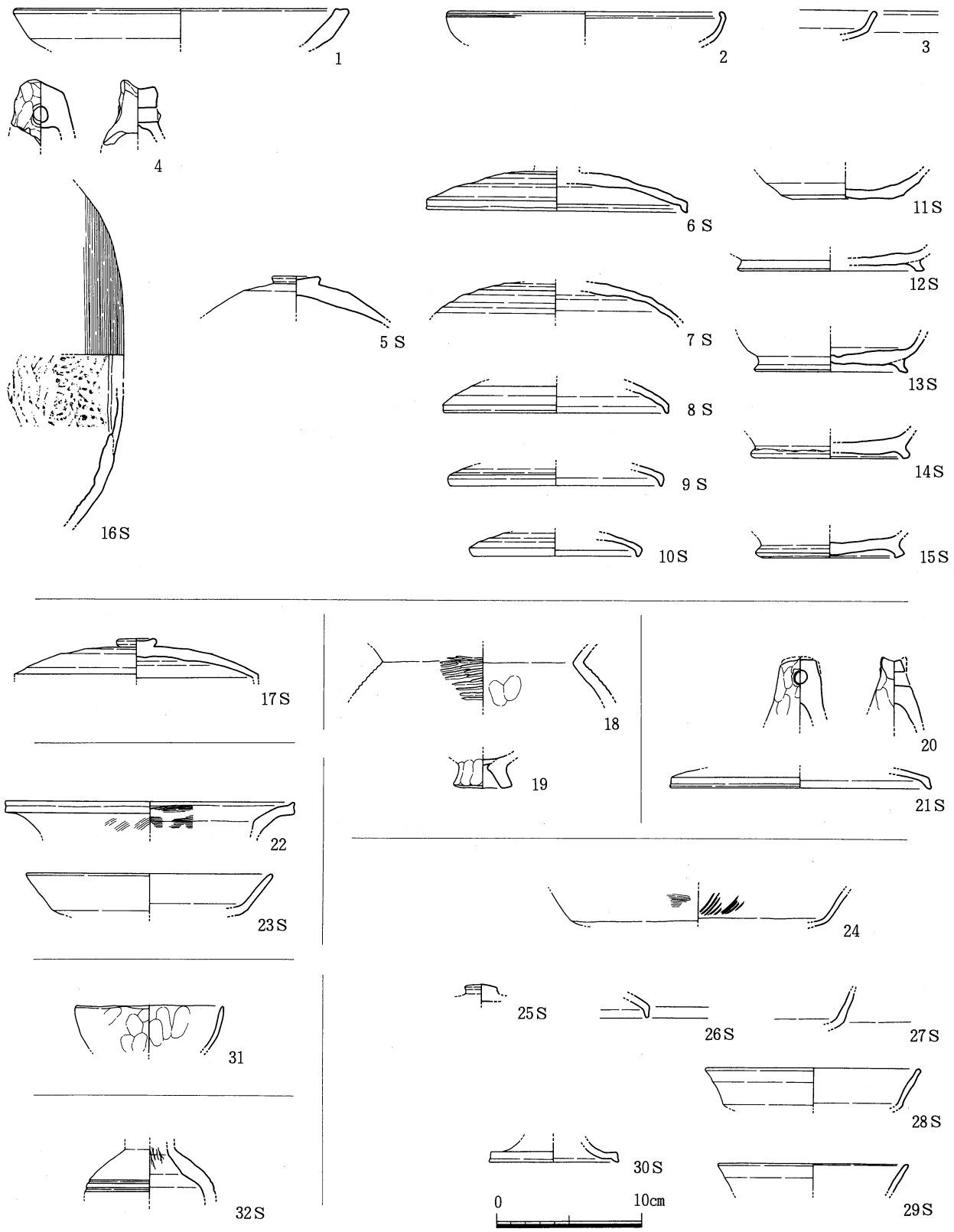
SHⅢ53　床直　1～10
SHⅢ54　床直　11～15
SHⅢ55　16～22
SHⅢ56　23～28
SHⅢ58　床直　29・30

第429図　Ⅲ期竪穴住居 出土土器14



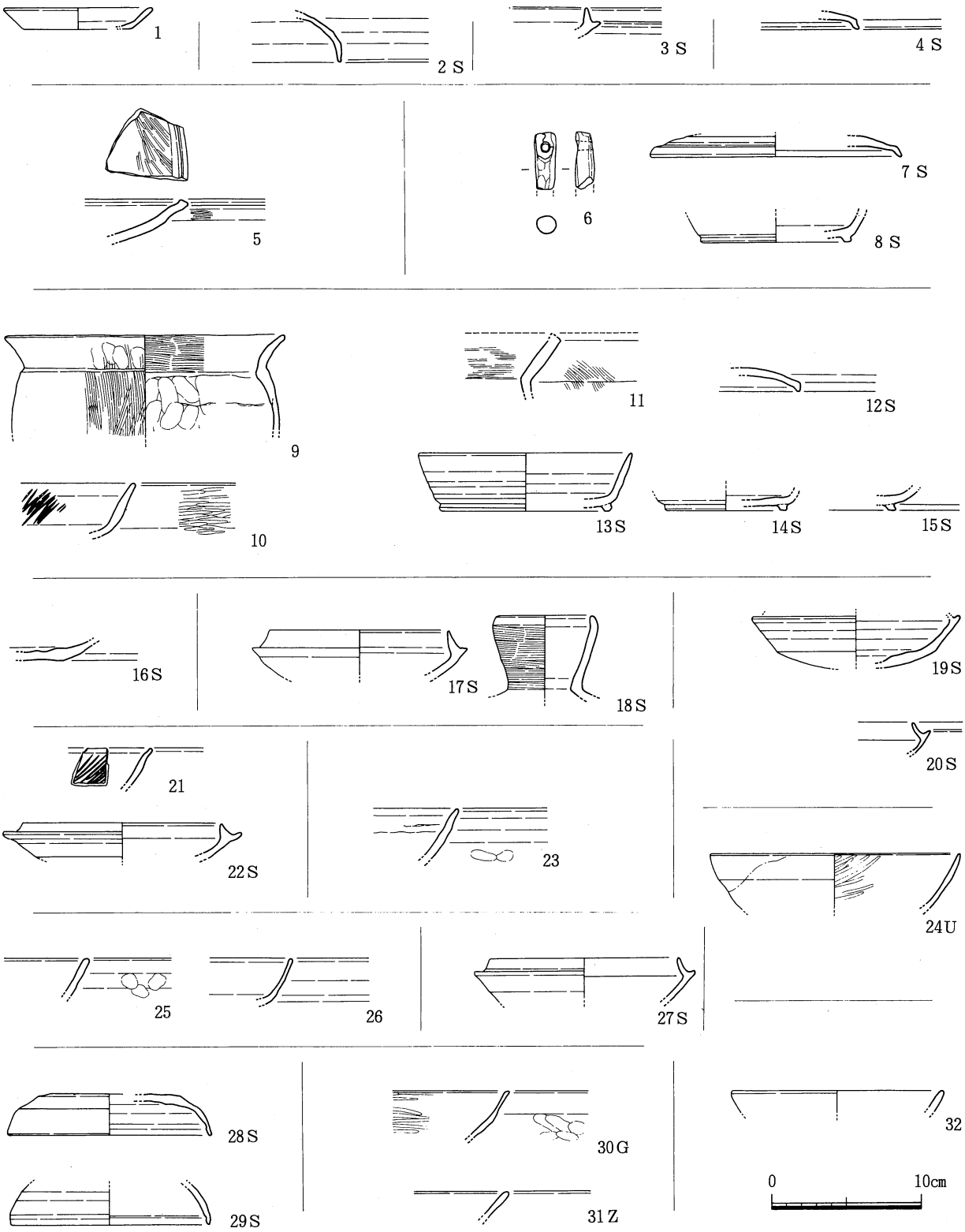
SBⅢ03	1～3	SBⅢ06	8～13	SBⅢ11	16	SBⅢ14	19	SBⅢ20	22	SBⅢ25	27	SBⅢ31	31
SBⅢ04	4～6	SBⅢ09	14	SBⅢ12	17	SBⅢ17	20	SBⅢ21	23	SBⅢ26	28・29	SBⅢ33	32
SBⅢ05	7	SBⅢ10	15	SBⅢ13	18	SBⅢ18	21	SBⅢ22	24～26	SBⅢ30	30		

第430図　Ⅲ期掘立柱建物 出土土器 1



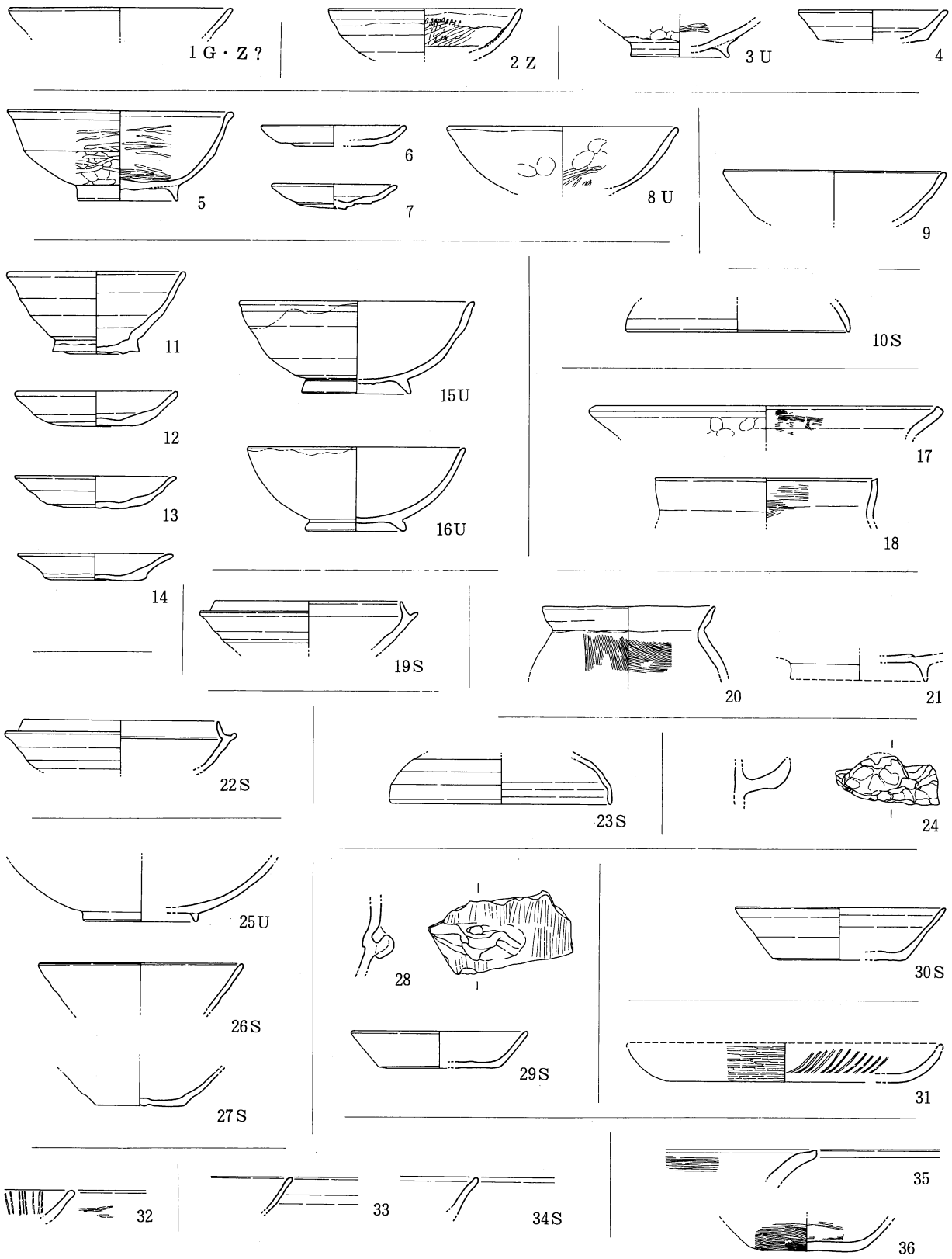
SBⅢ34　1～16　SBⅢ39　18・19　SBⅢ41　22・23　SBⅢ45　31
SBⅢ36　17　SBⅢ40　20・21　SBⅢ42　24～30　SBⅢ52　32

第431図　Ⅲ期掘立柱建物 出土土器 2



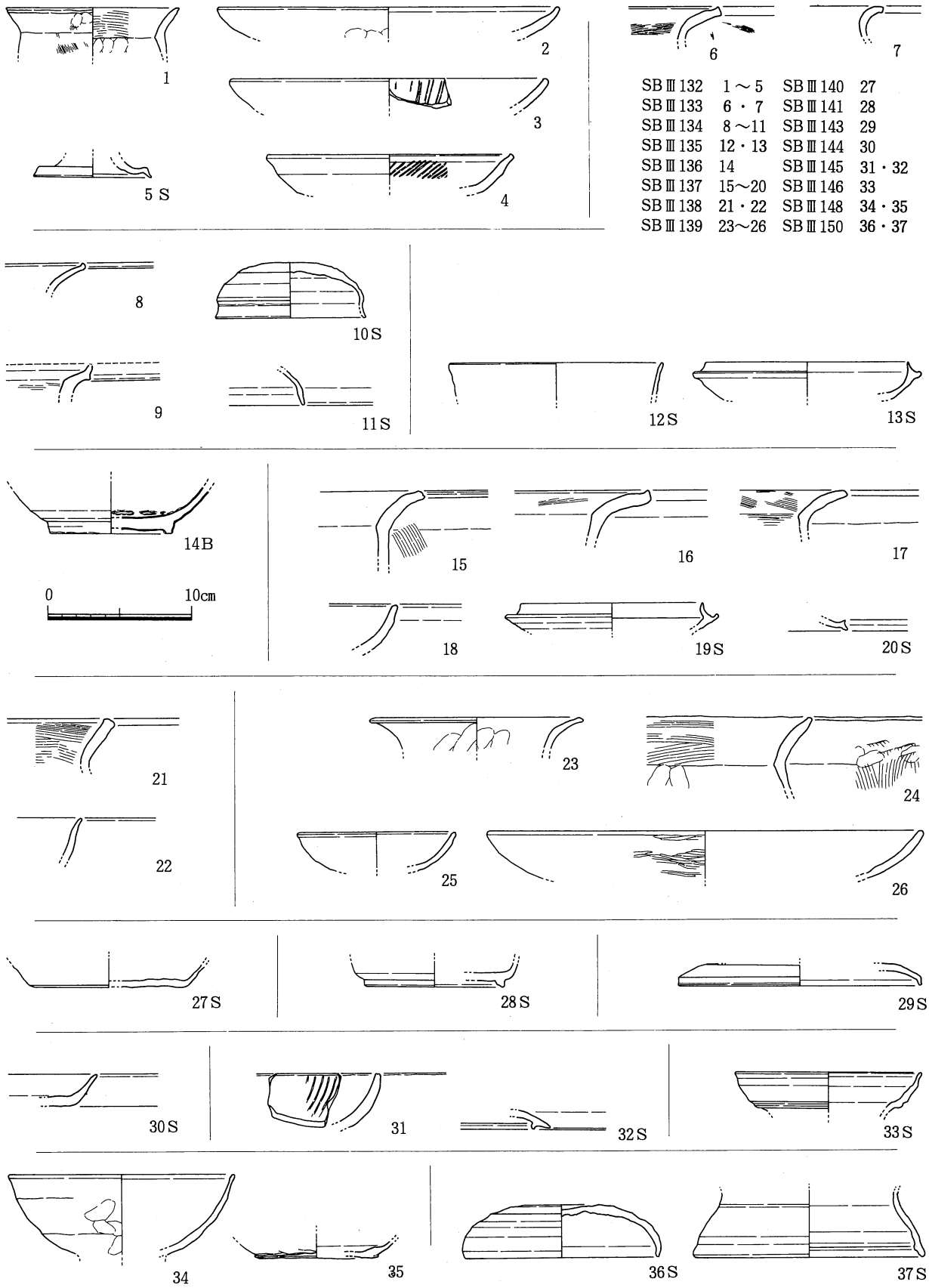
SBⅢ63	1	SBⅢ74	5	SBⅢ82	16	SBⅢ90	23	SBⅢ96	28・29
SBⅢ65	2	SBⅢ79	6～8	SBⅢ84	17・18	SBⅢ93	24	SBⅢ99	30・31
SBⅢ71	3	SBⅢ80	9・10・12・13・15	SBⅢ85	19・20	SBⅢ94	25・26	SBⅢ100	32
SBⅢ73	4	SBⅢ81	11・14	SBⅢ86	21：22	SBⅢ95	27		

第432図　Ⅲ期掘立柱建物 出土土器 3



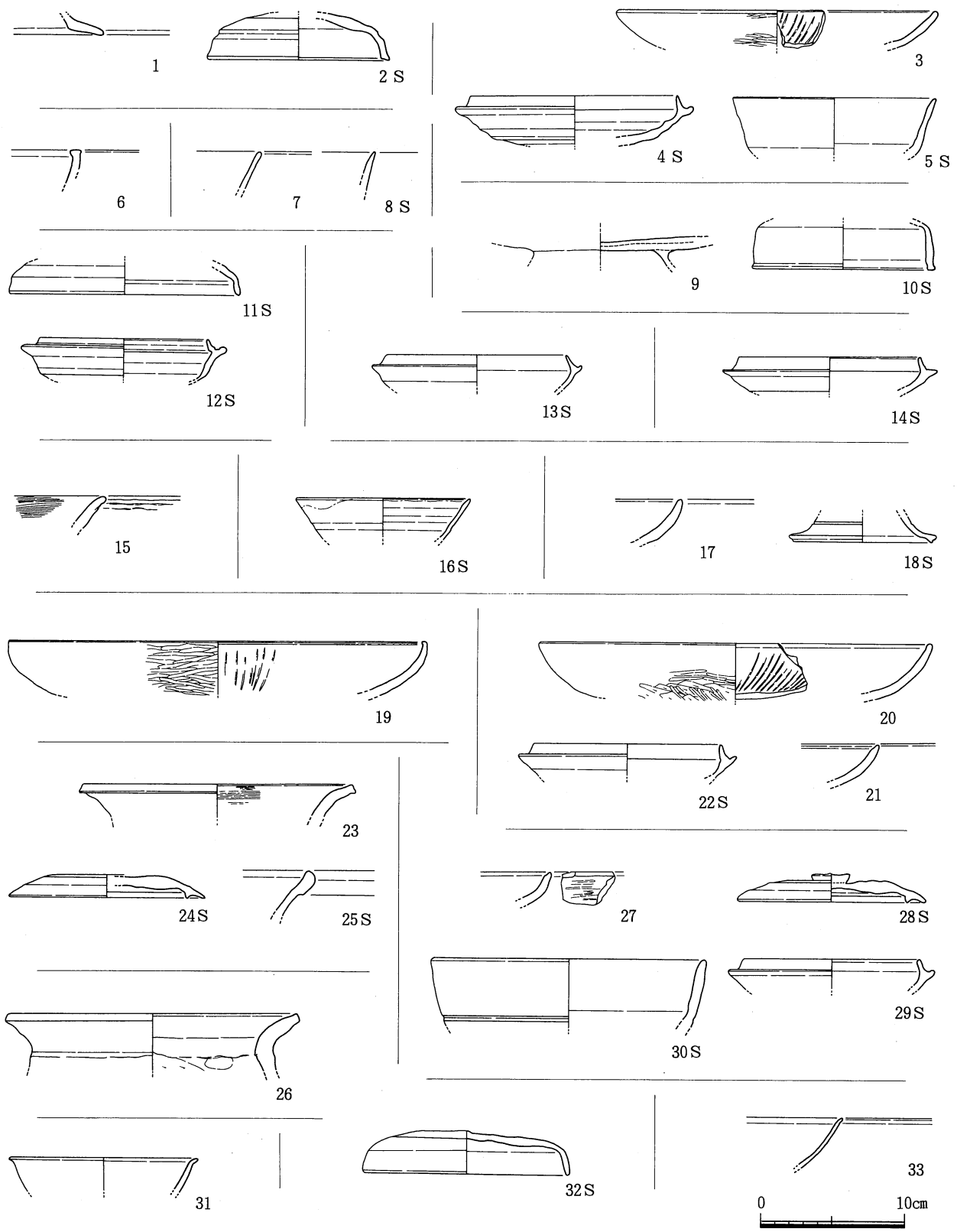
SB Ⅲ 101	1	SB Ⅲ 105	9	SB Ⅲ 116	19	SB Ⅲ 121	24	SB Ⅲ 128	31
SB Ⅲ 102	2	SB Ⅲ 107	10	SB Ⅲ 117	20・21	SB Ⅲ 124	25～27	SB Ⅲ 129	32
SB Ⅲ 103	3・4	SB Ⅲ 112	11～16	SB Ⅲ 119	22	SB Ⅲ 125	28・29	SB Ⅲ 130	33・34
SB Ⅲ 104	5～8	SB Ⅲ 113	17・18	SB Ⅲ 120	23	SB Ⅲ 126	30	SB Ⅲ 131	35・36

第433図　Ⅲ期掘立柱建物 出土土器 4



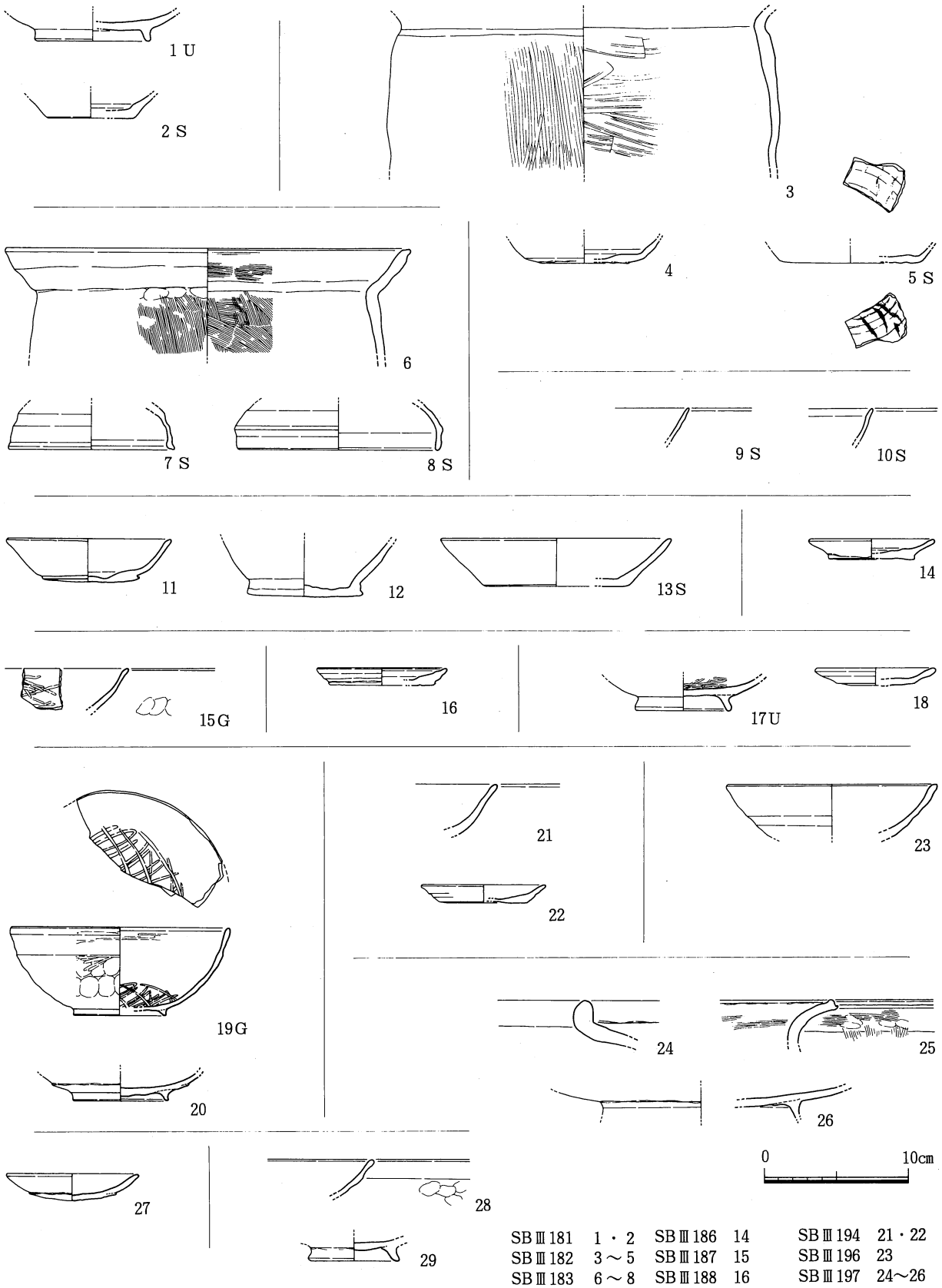
SBⅢ132	1～5	SBⅢ140	27
SBⅢ133	6・7	SBⅢ141	28
SBⅢ134	8～11	SBⅢ143	29
SBⅢ135	12・13	SBⅢ144	30
SBⅢ136	14	SBⅢ145	31・32
SBⅢ137	15～20	SBⅢ146	33
SBⅢ138	21・22	SBⅢ148	34・35
SBⅢ139	23～26	SBⅢ150	36・37

第434図　Ⅲ期掘立柱建物 出土土器 5



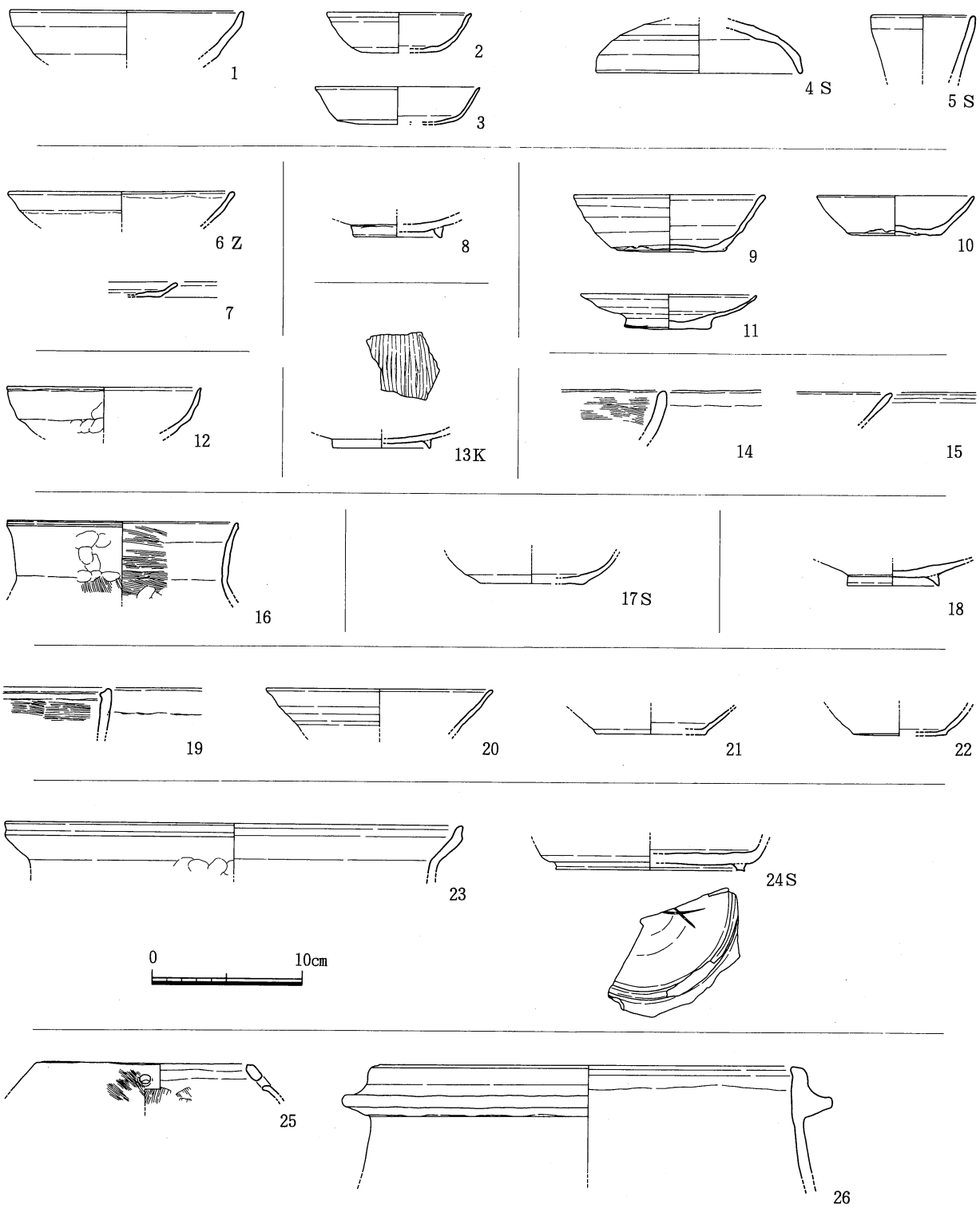
SBⅢ151	1・2	SBⅢ156	9・10	SBⅢ163	15	SBⅢ172	20～22	SBⅢ177	31
SBⅢ152	3～5	SBⅢ158	11・12	SBⅢ167	16	SBⅢ173	23～25	SBⅢ178	32
SBⅢ154	6	SBⅢ160	13	SBⅢ169	17・18	SBⅢ174	26	SBⅢ180	33
SBⅢ155	7・8	SBⅢ162	14	SBⅢ171	19	SBⅢ176	27～30		

第435図　Ⅲ期掘立柱建物 出土土器 6



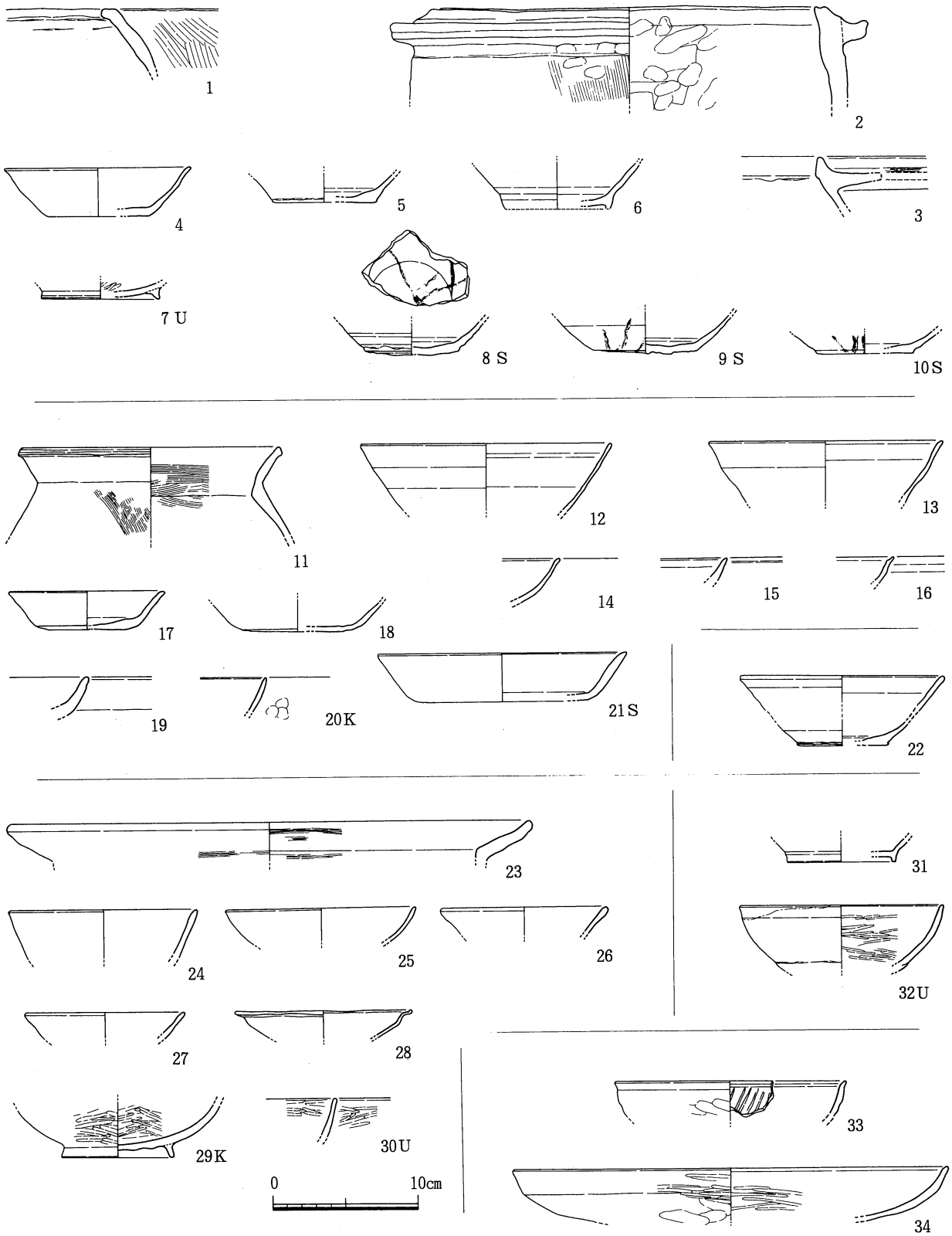
SBⅢ181	1・2	SBⅢ186	14	SBⅢ194	21・22
SBⅢ182	3～5	SBⅢ187	15	SBⅢ196	23
SBⅢ183	6～8	SBⅢ188	16	SBⅢ197	24～26
SBⅢ184	9・10	SBⅢ191	17・18	SBⅢ198	27
SBⅢ185	11～13	SBⅢ192	19・20	SBⅢ199	28・29

第436図　Ⅲ期掘立柱建物 出土土器7



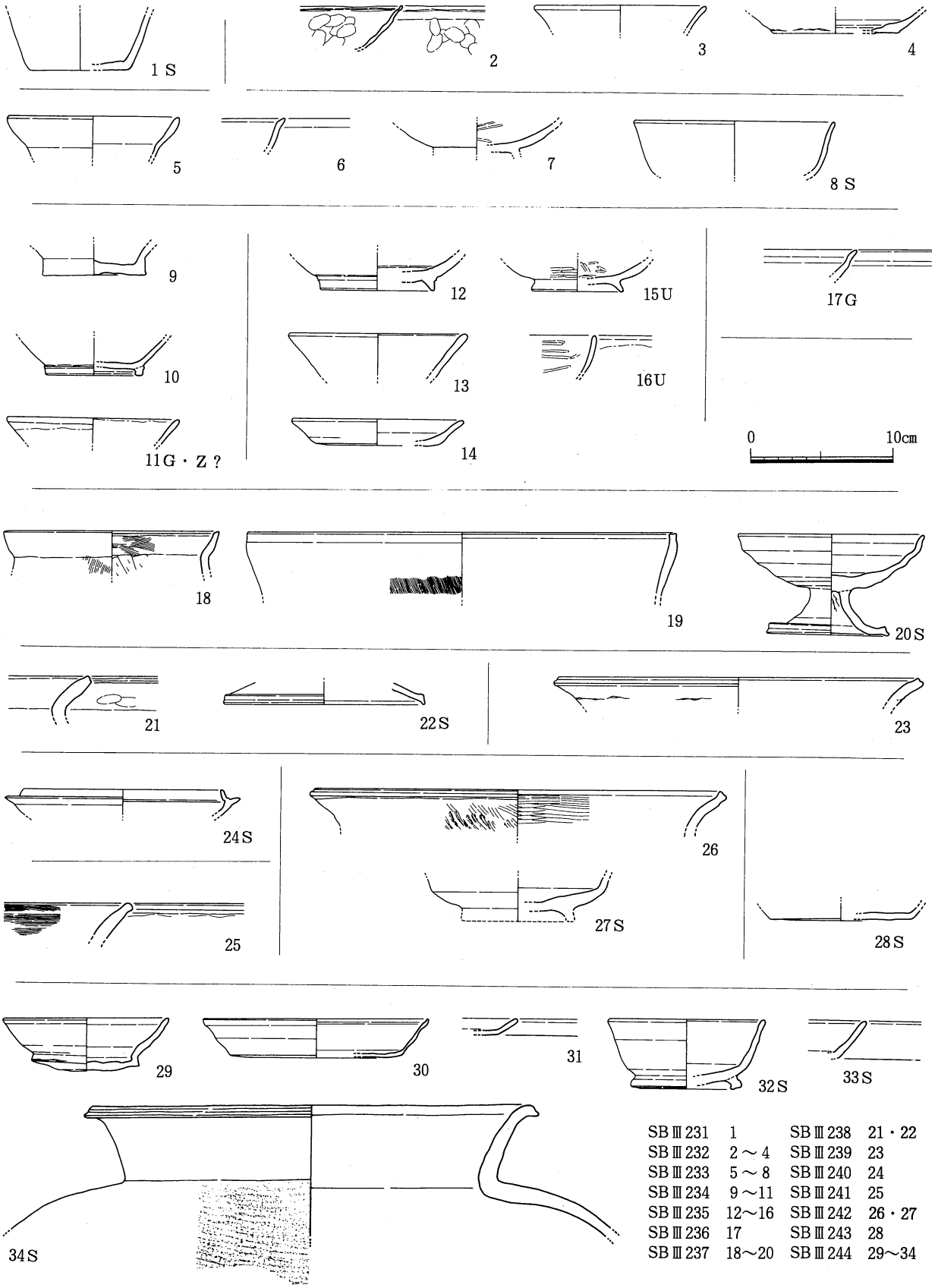
SBⅢ201	1～5	SBⅢ215	13	SBⅢ221	19～22
SBⅢ208	6・7	SBⅢ216	14・15	SBⅢ223	23・24
SBⅢ210	8	SBⅢ218	16	SBⅢ224	25・26
SBⅢ213	9～11	SBⅢ219	17		
SBⅢ214	12	SBⅢ220	18		

第437図　Ⅲ期掘立柱建物 出土土器 8



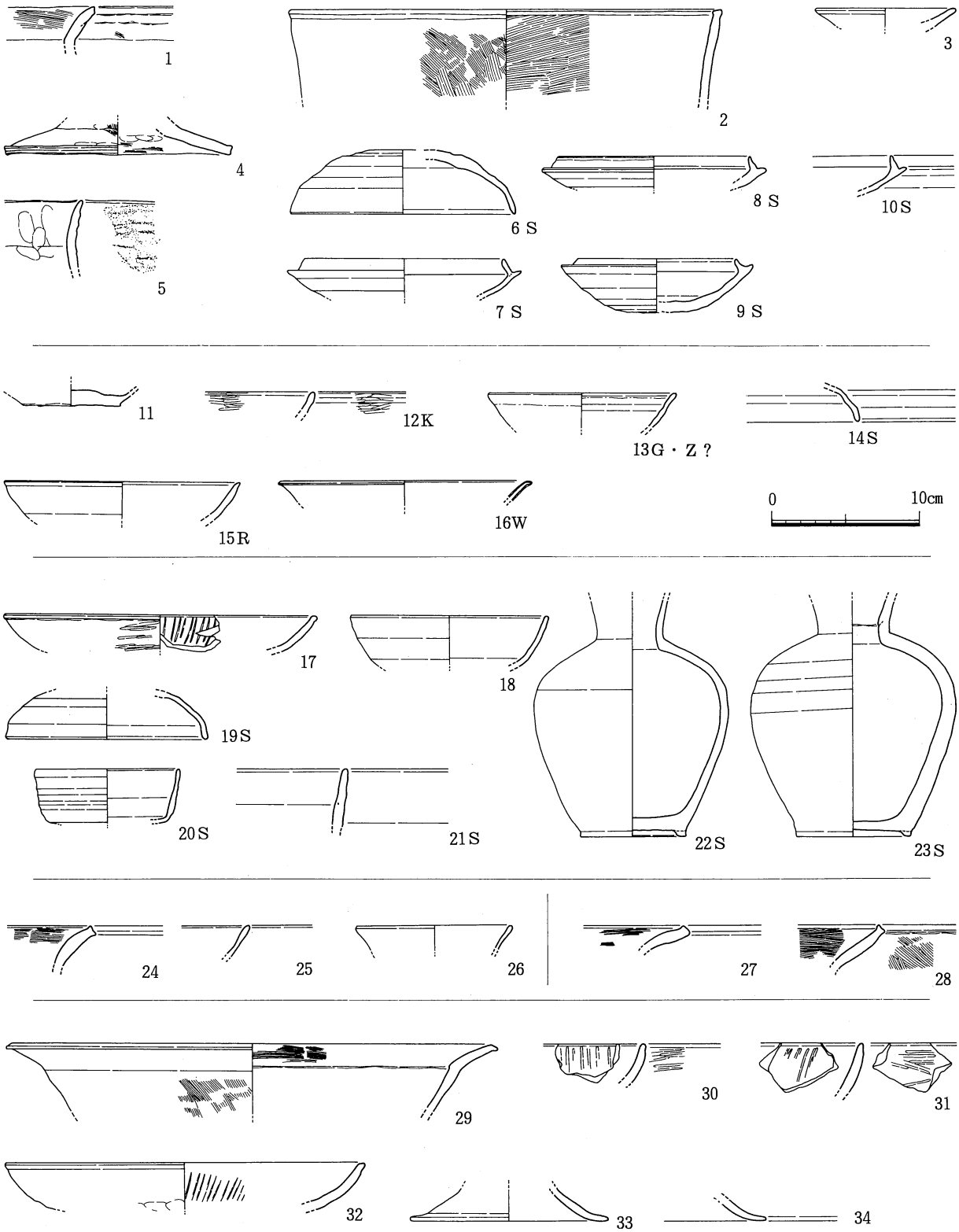
SBⅢ225　1～10　SBⅢ228　23～30
SBⅢ226　11～21　SBⅢ229　31・32
SBⅢ227　22　SBⅢ230　33・34

第438図　Ⅲ期掘立柱建物 出土土器 9



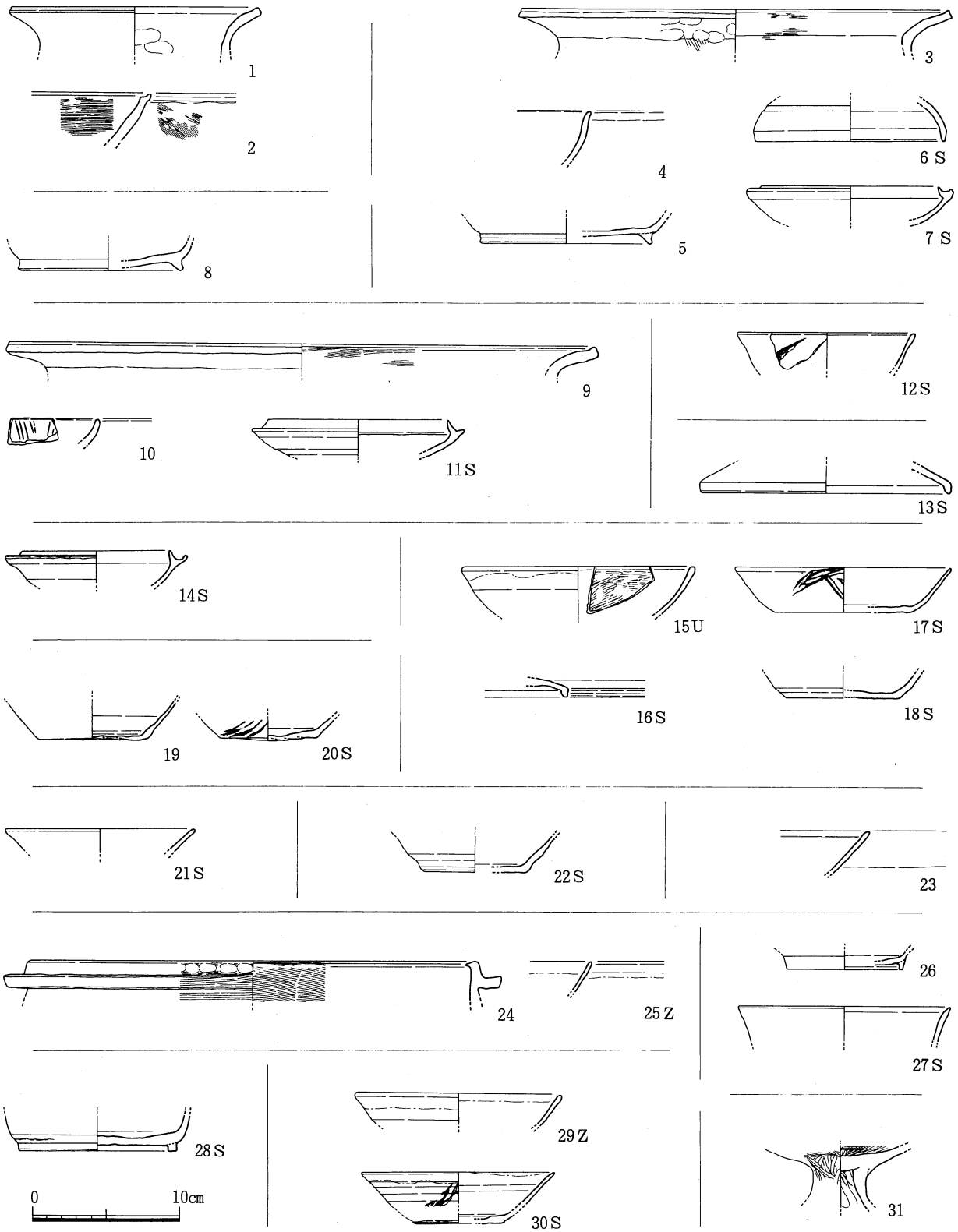
SBⅢ231	1	SBⅢ238	21・22
SBⅢ232	2～4	SBⅢ239	23
SBⅢ233	5～8	SBⅢ240	24
SBⅢ234	9～11	SBⅢ241	25
SBⅢ235	12～16	SBⅢ242	26・27
SBⅢ236	17	SBⅢ243	28
SBⅢ237	18～20	SBⅢ244	29～34

第439図　Ⅲ期掘立柱建物 出土土器10



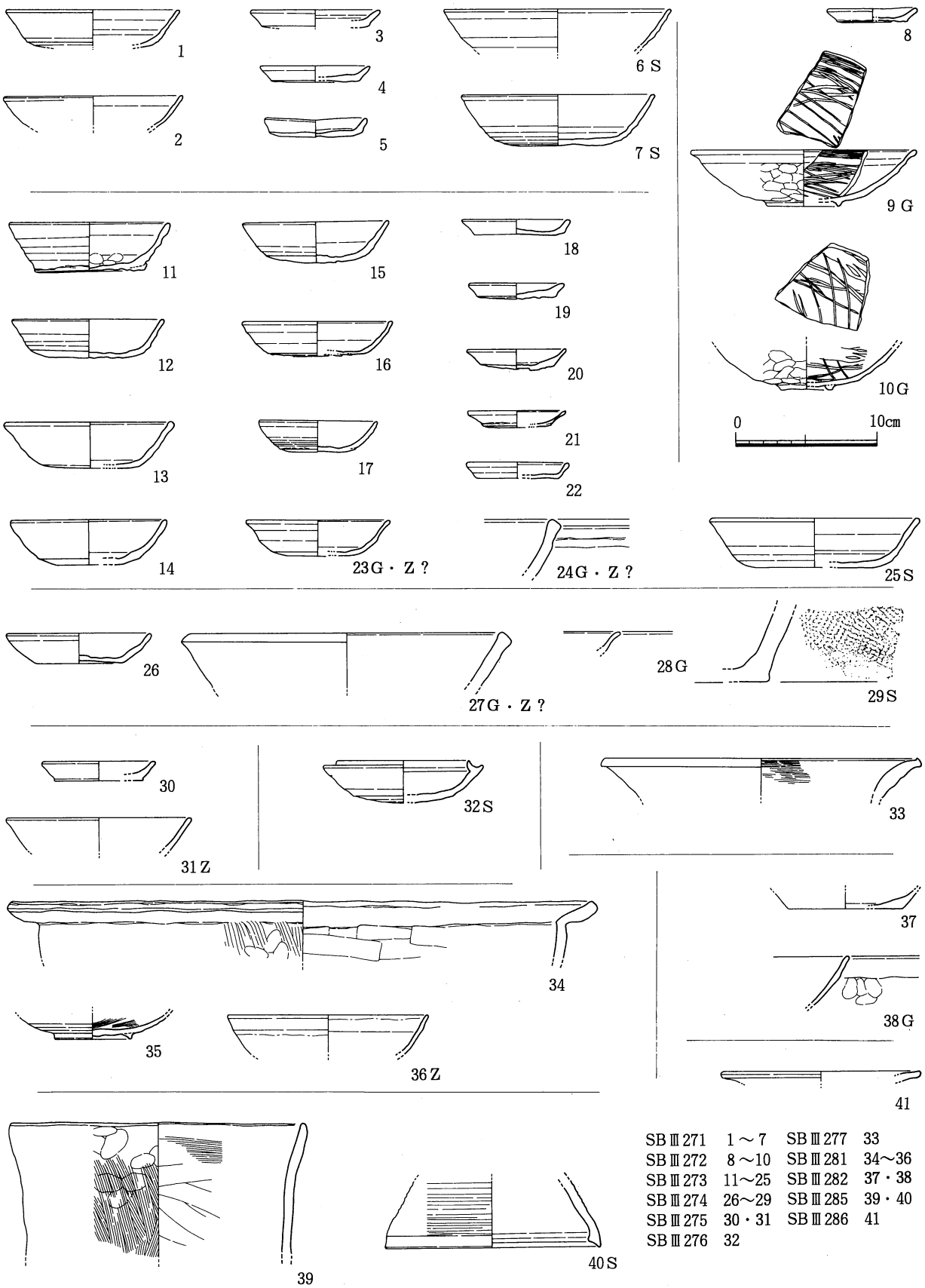
SBⅢ245　1～10　SBⅢ247　17～23　SBⅢ249　27・28
SBⅢ246　11～16　SBⅢ248　24～26　SBⅢ250　29～34

第440図　Ⅲ期掘立柱建物 出土土器11



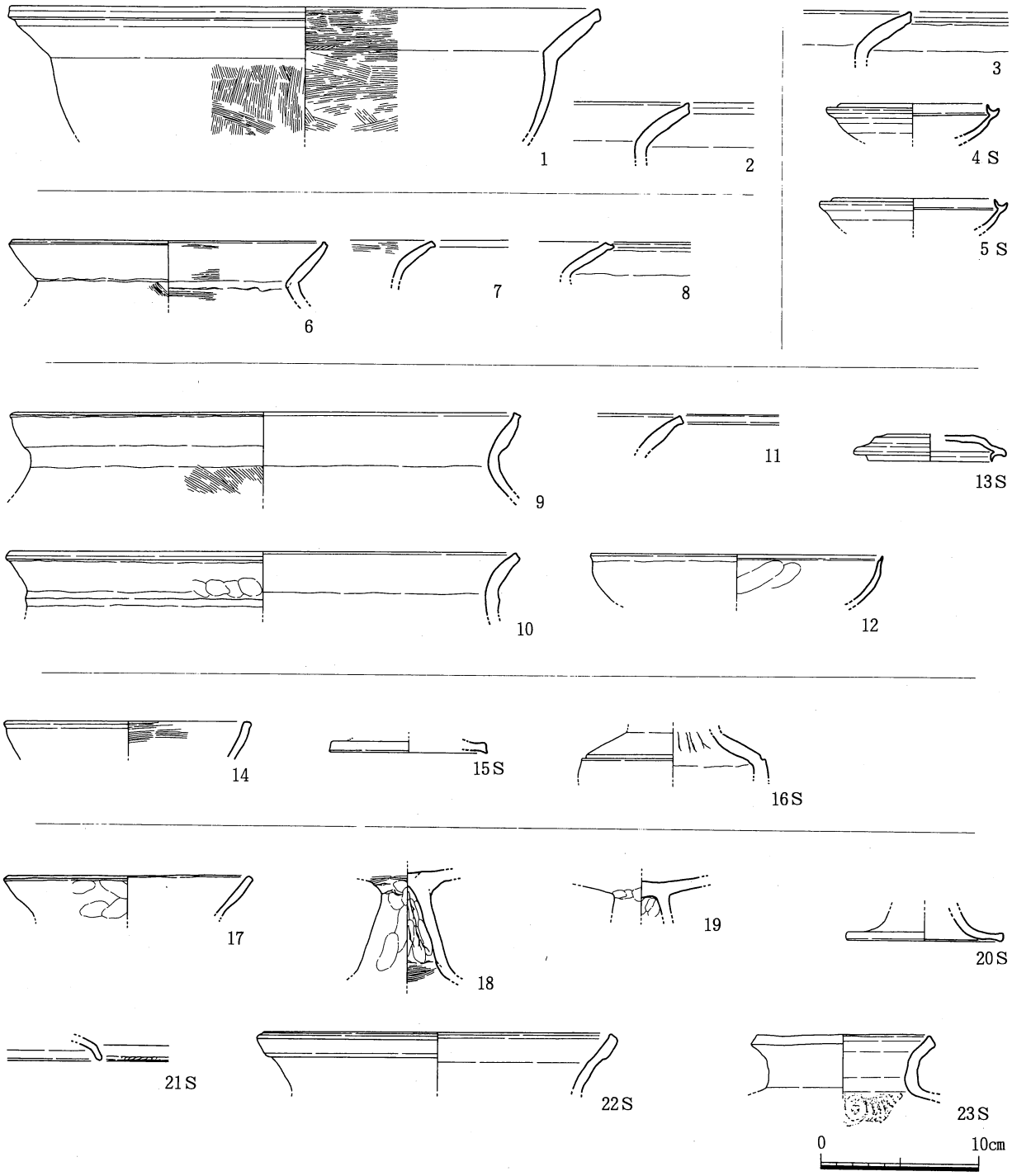
SBⅢ251	1・2	SBⅢ255	12	SBⅢ261	19・20	SBⅢ265	24・25	SBⅢ270	31
SBⅢ252	3～7	SBⅢ257	13	SBⅢ262	21	SBⅢ267	26・27		
SBⅢ253	8	SBⅢ258	14	SBⅢ263	22	SBⅢ268	28		
SBⅢ254	9～11	SBⅢ259	15～18	SBⅢ264	23	SBⅢ269	29・30		

第441図　Ⅲ期掘立柱建物 出土土器12



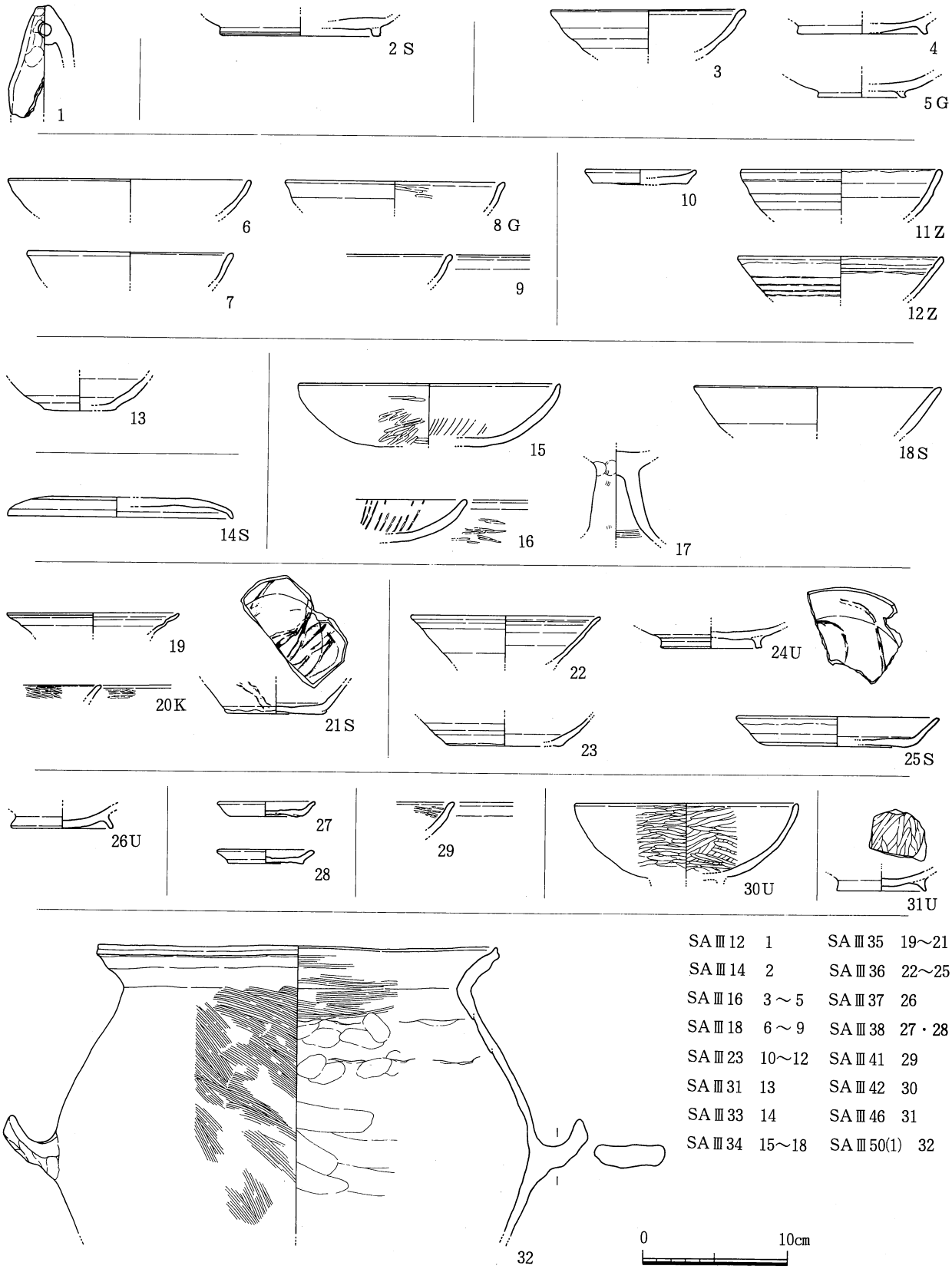
SBⅢ271	1～7	SBⅢ277	33
SBⅢ272	8～10	SBⅢ281	34～36
SBⅢ273	11～25	SBⅢ282	37・38
SBⅢ274	26～29	SBⅢ285	39・40
SBⅢ275	30・31	SBⅢ286	41
SBⅢ276	32		

第442図　Ⅲ期掘立柱建物 出土土器13



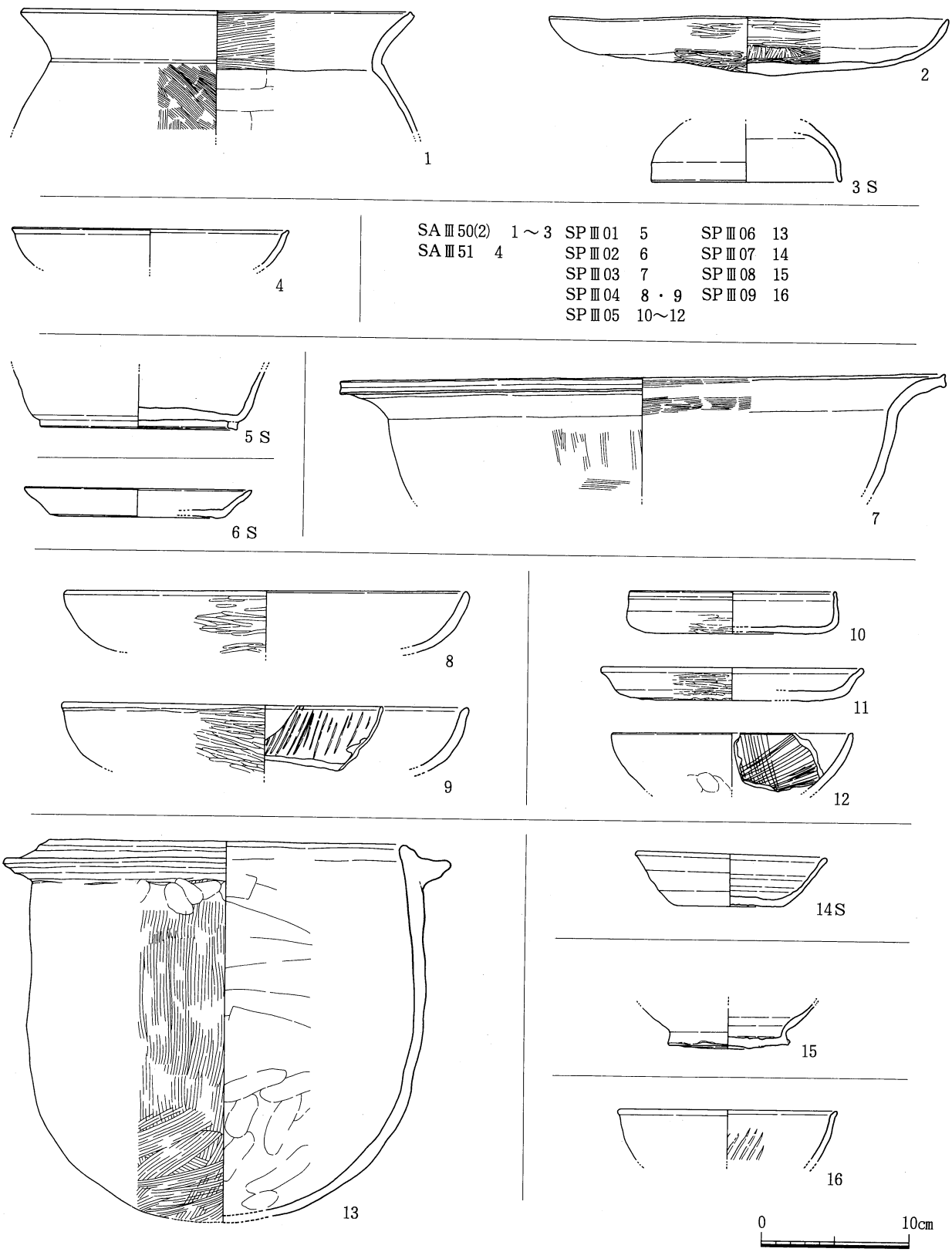
SBⅢ287　1・2　SBⅢ290　6～8　SBⅢ292　14～16
SBⅢ289　3～5　SBⅢ291　9～13　SBⅢ293　17～23

第443図　Ⅲ期掘立柱建物 出土土器14

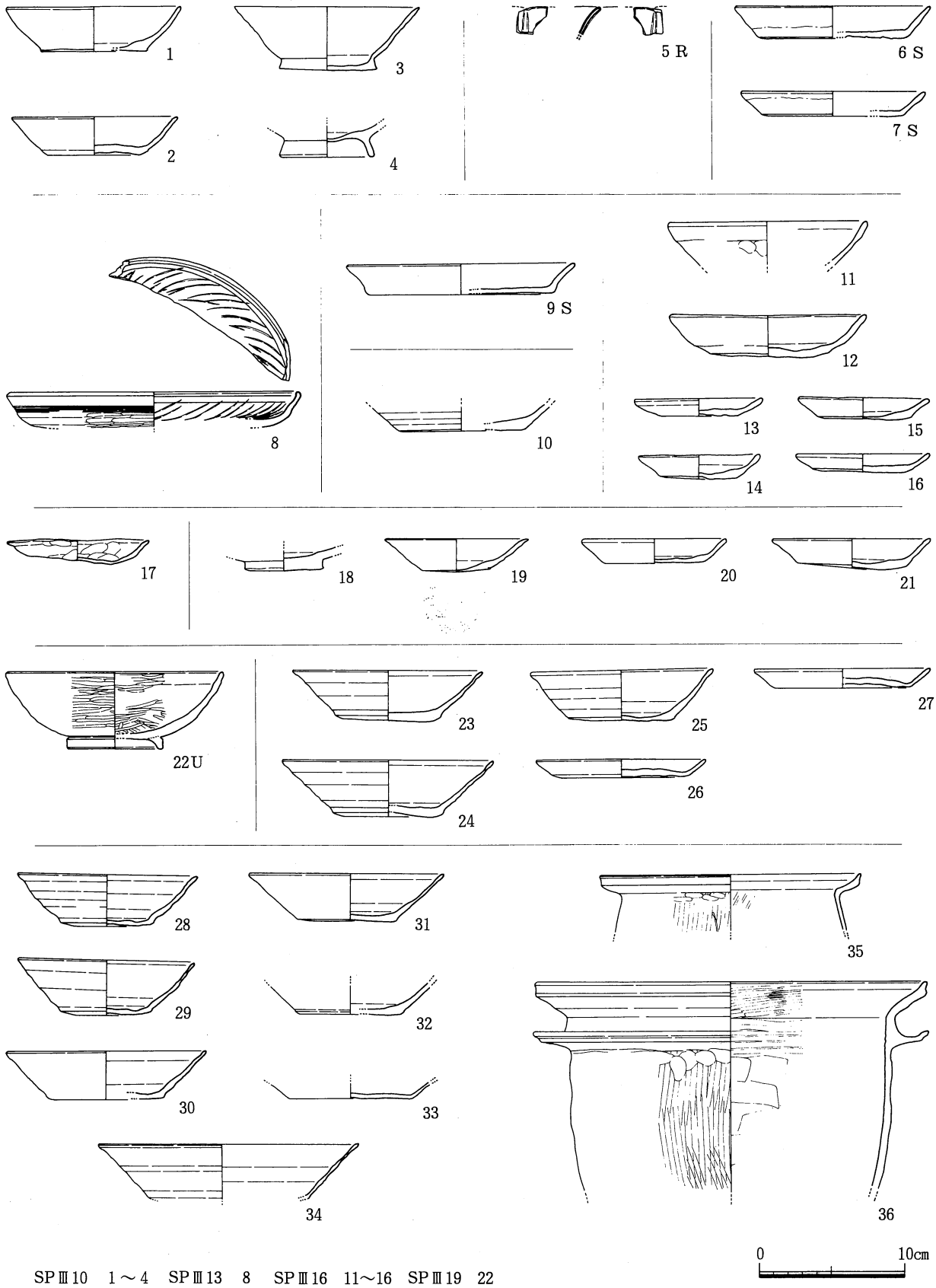


SAⅢ12	1	SAⅢ35	19～21
SAⅢ14	2	SAⅢ36	22～25
SAⅢ16	3～5	SAⅢ37	26
SAⅢ18	6～9	SAⅢ38	27・28
SAⅢ23	10～12	SAⅢ41	29
SAⅢ31	13	SAⅢ42	30
SAⅢ33	14	SAⅢ46	31
SAⅢ34	15～18	SAⅢ50(1)	32

第444図　Ⅲ期柵 出土土器 1

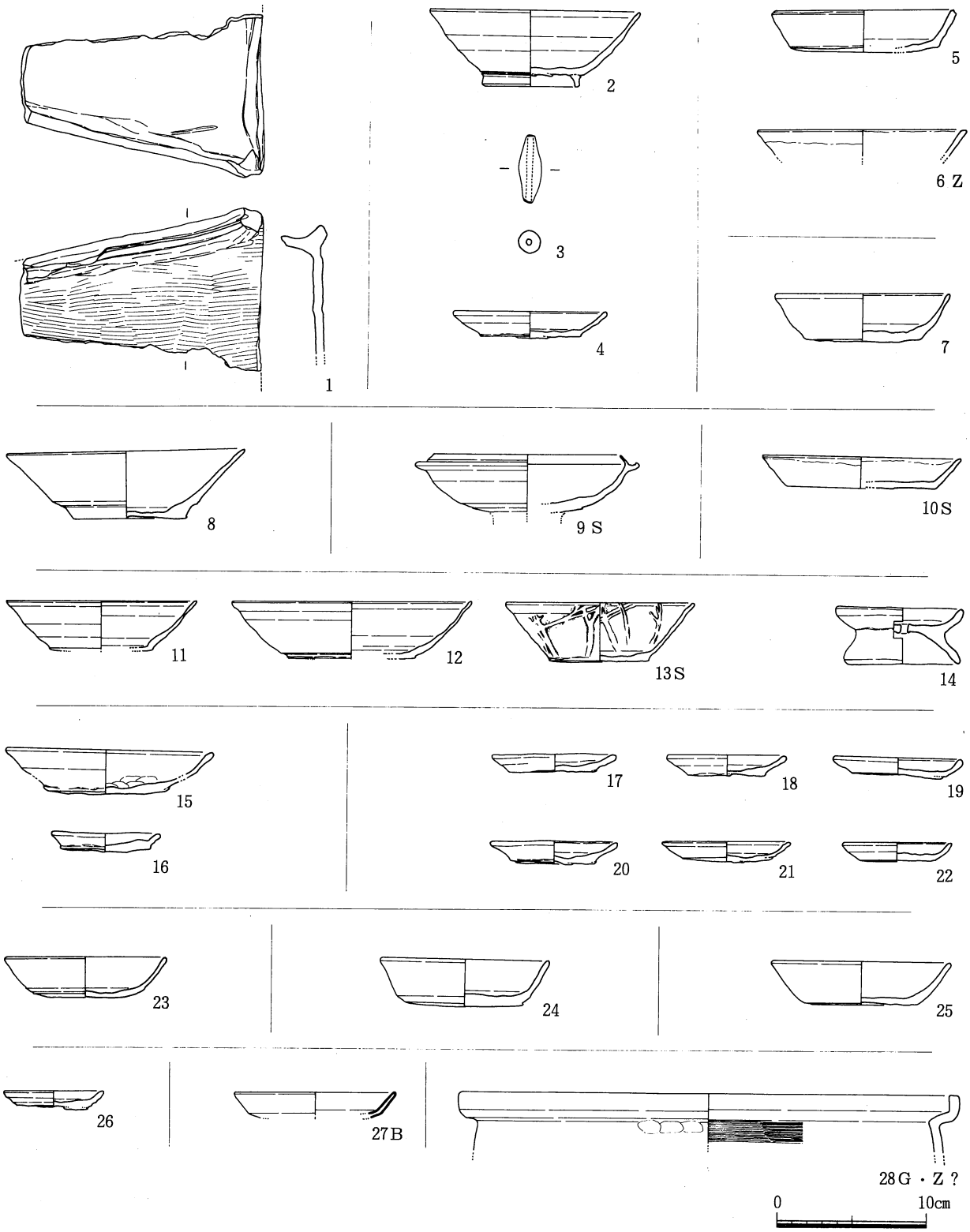


第445図　Ⅲ期柵 出土土器２，ピット 出土土器１



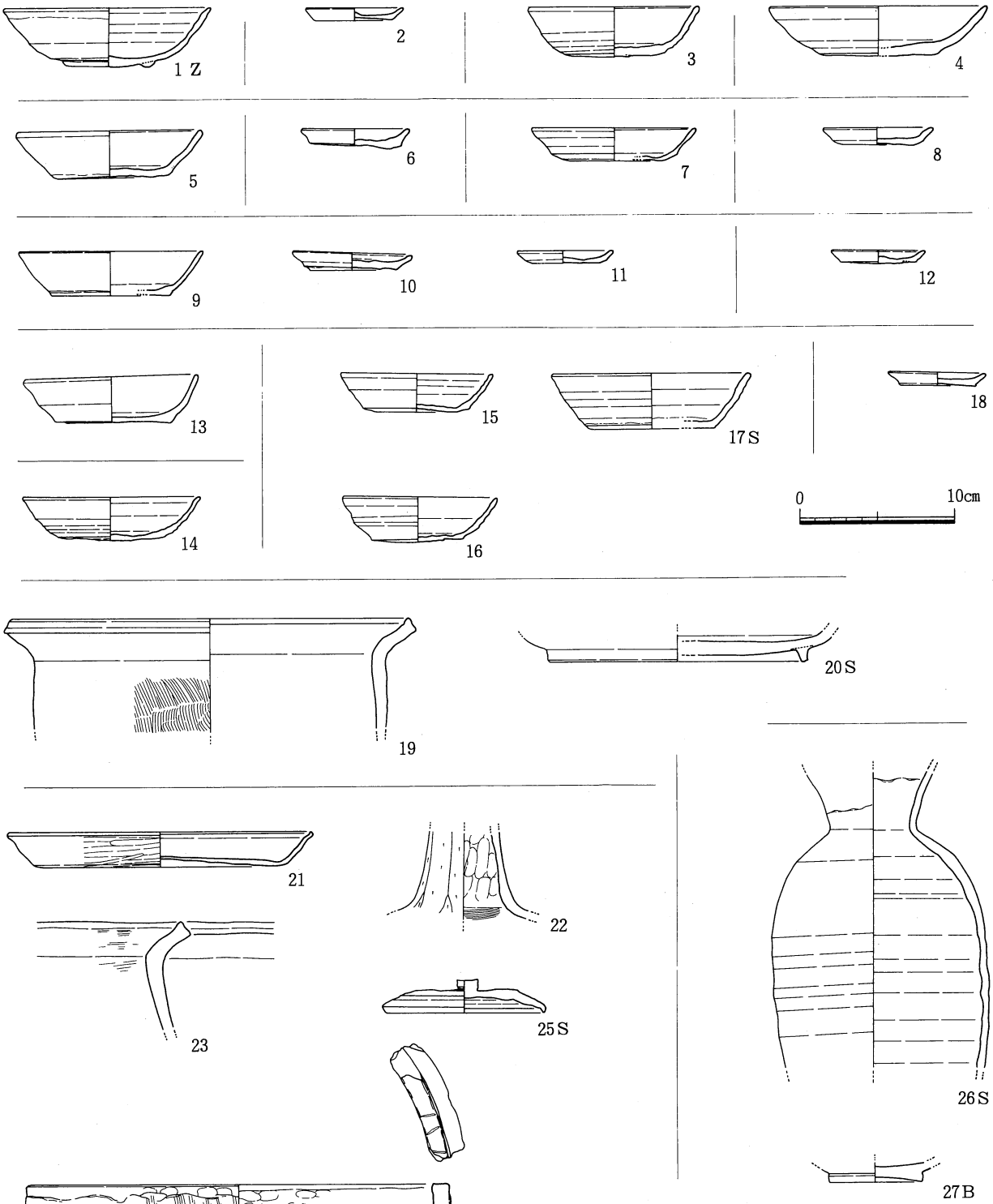
SPⅢ10	1～4	SPⅢ13	8	SPⅢ16	11～16	SPⅢ19	22
SPⅢ11	5	SPⅢ14	9	SPⅢ17	17	SPⅢ20	23～27
SPⅢ12	6・7	SPⅢ15	10	SPⅢ18	18～21	SPⅢ21(1)	28～36

第446図　Ⅲ期ピット 出土土器 2



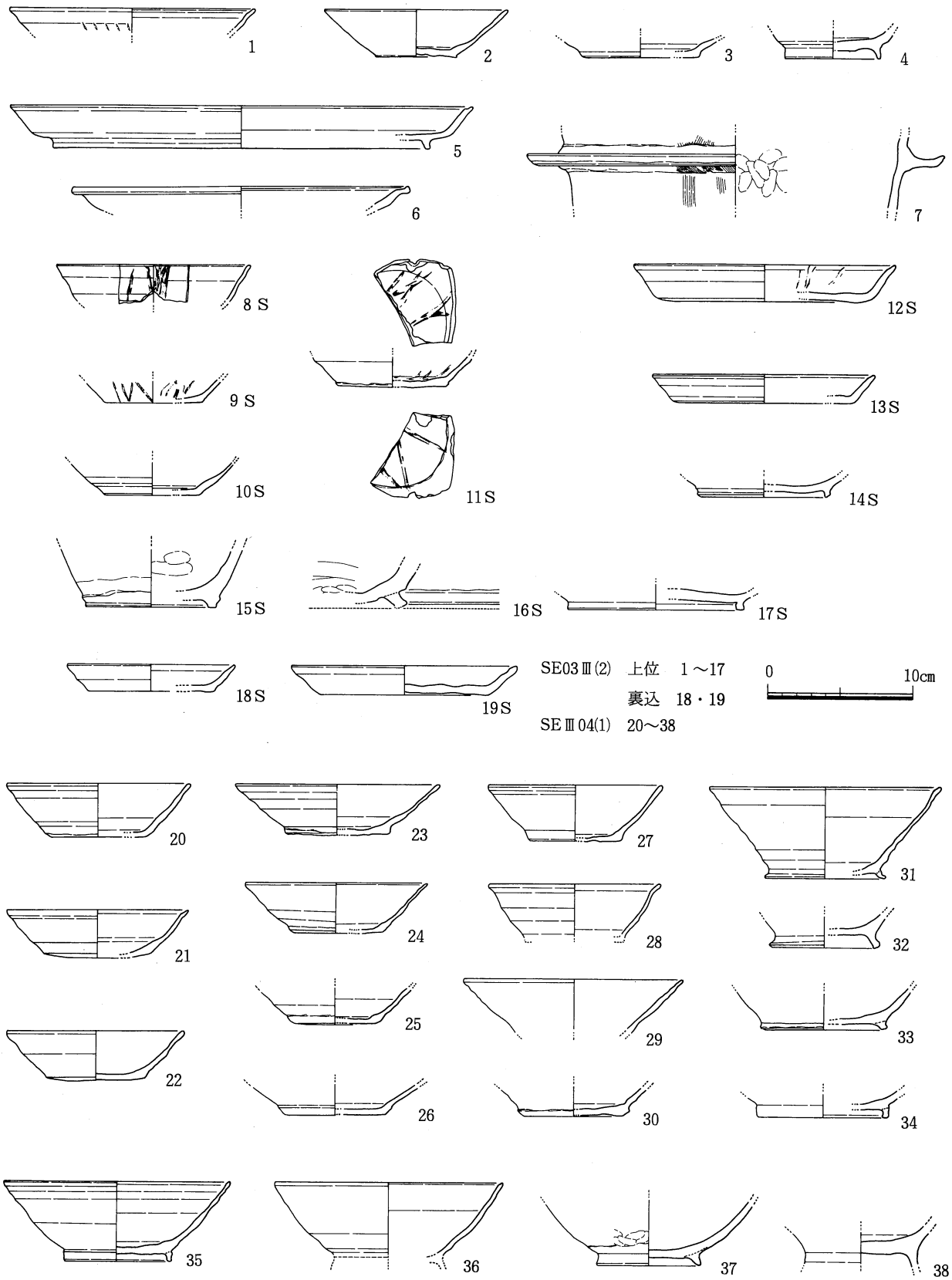
SPⅢ21(2)	1	SPⅢ25	5・6	SPⅢ29	10	SPⅢ34	17～22	SPⅢ38	26
SPⅢ22	2	SPⅢ26	7	SPⅢ30	11～23	SPⅢ35	23	SPⅢ40	27
SPⅢ23	3	SPⅢ27	8	SPⅢ31	14	SPⅢ36	24	SPⅢ41	28
SPⅢ24	4	SPⅢ28	9	SPⅢ32	15・16	SPⅢ37	25		

第447図　Ⅲ期ピット　出土土器3

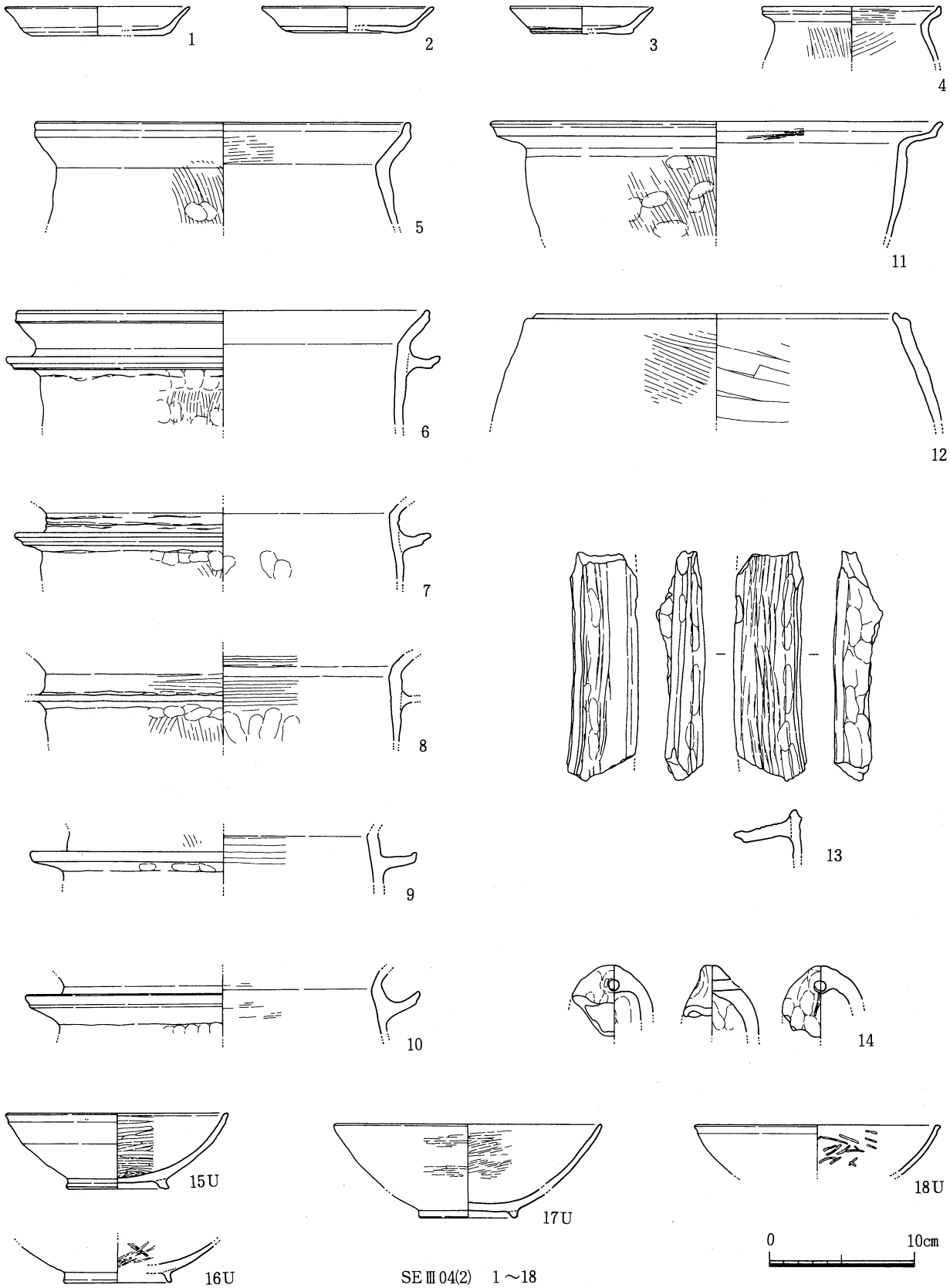


SPⅢ42	1	SPⅢ49	8	SEⅢ01	19・20
SPⅢ43	2	SPⅢ50	9～11	SEⅢ02	21～25
SPⅢ44	3	SPⅢ51	12	SEⅢ03(1)	最下位　26・27
SPⅢ45	4	SPⅢ52	13		
SPⅢ46	5	SPⅢ53	14		
SPⅢ47	6	SPⅢ54	15～17		
SPⅢ48	7	SPⅢ55	18		

第448図　Ⅲ期ピット 出土土器４，井戸 出土土器１

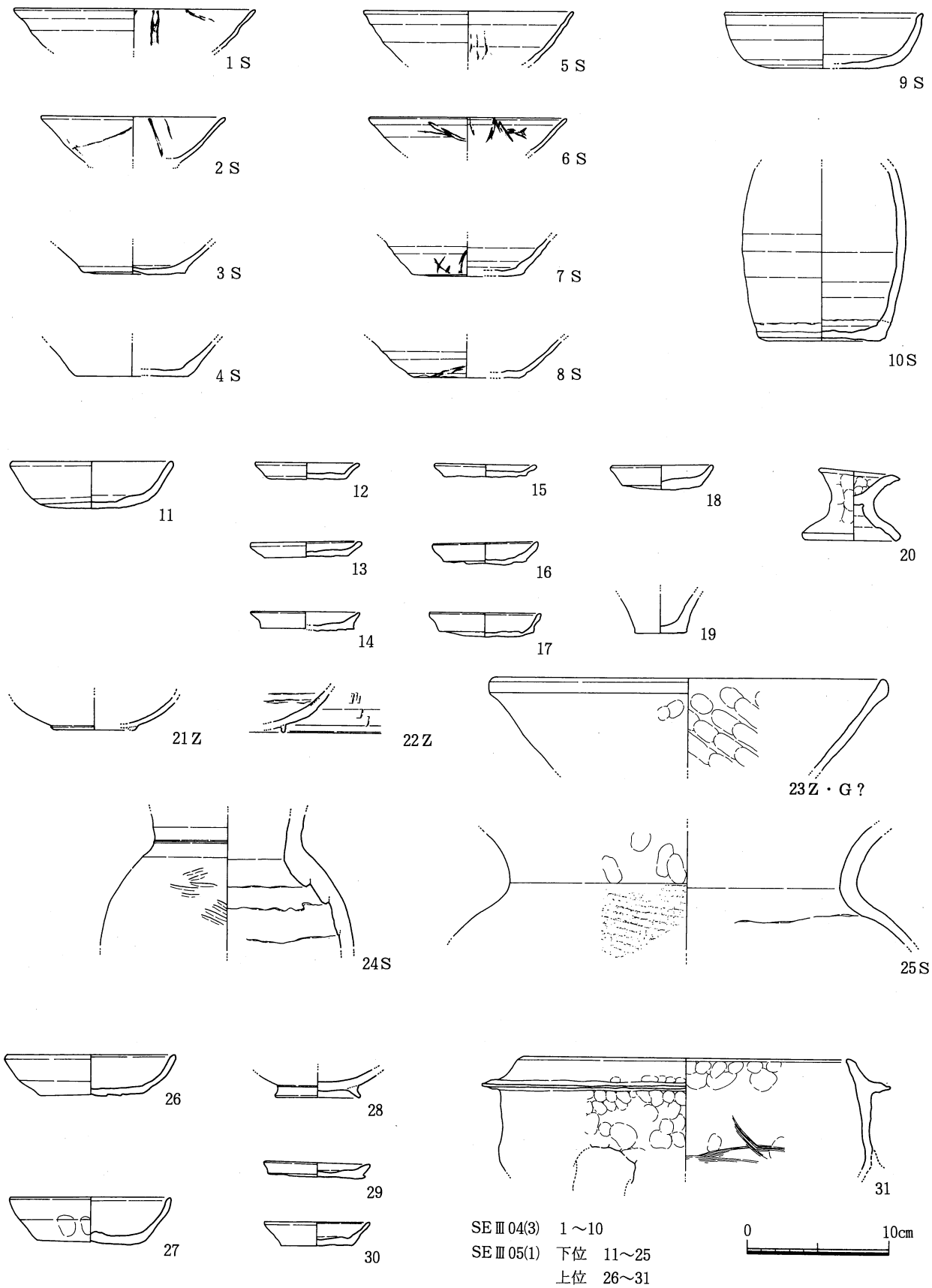


第449図　Ⅲ期井戸 出土土器 2

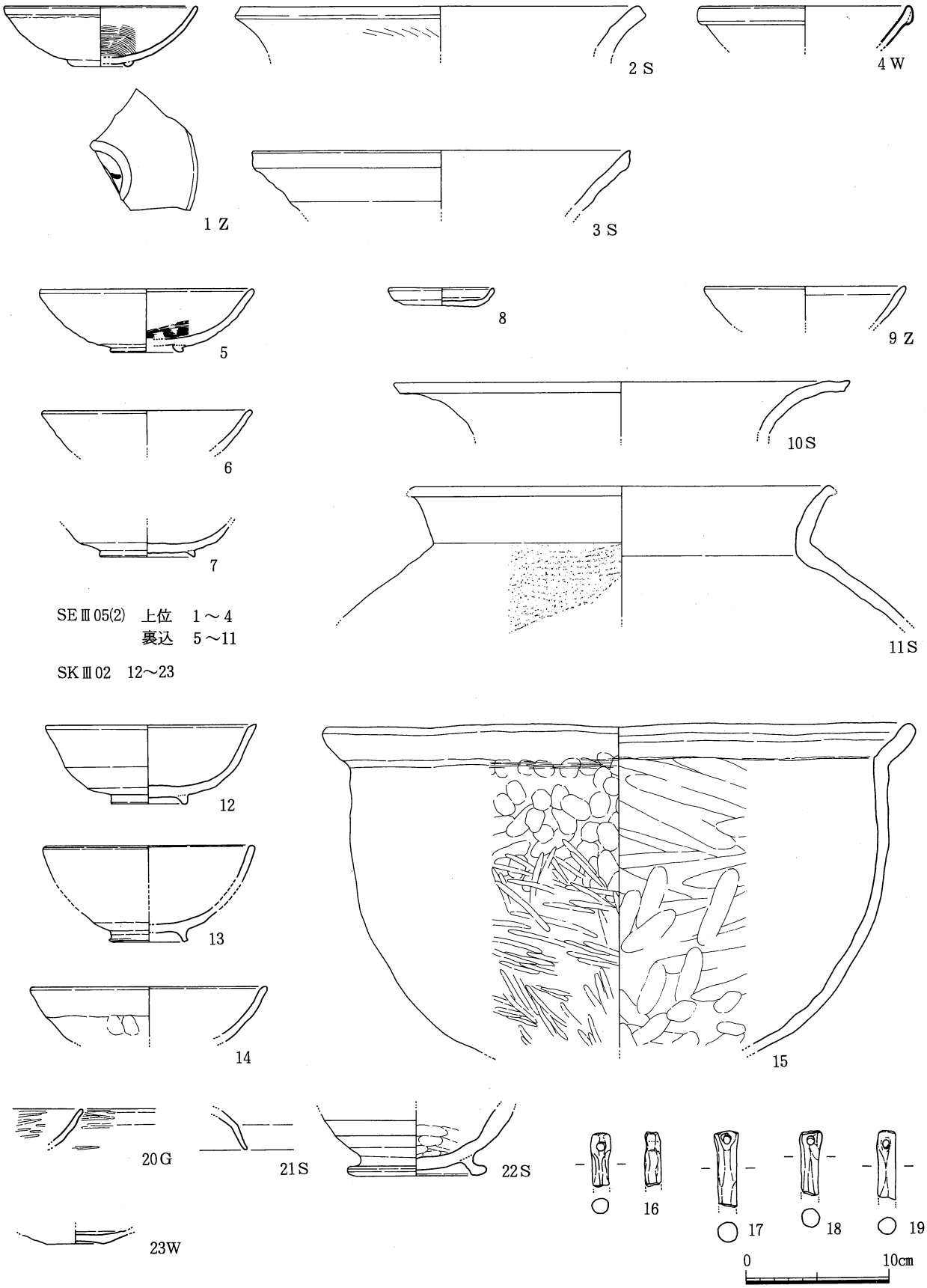


SE Ⅲ04(2)　1～18

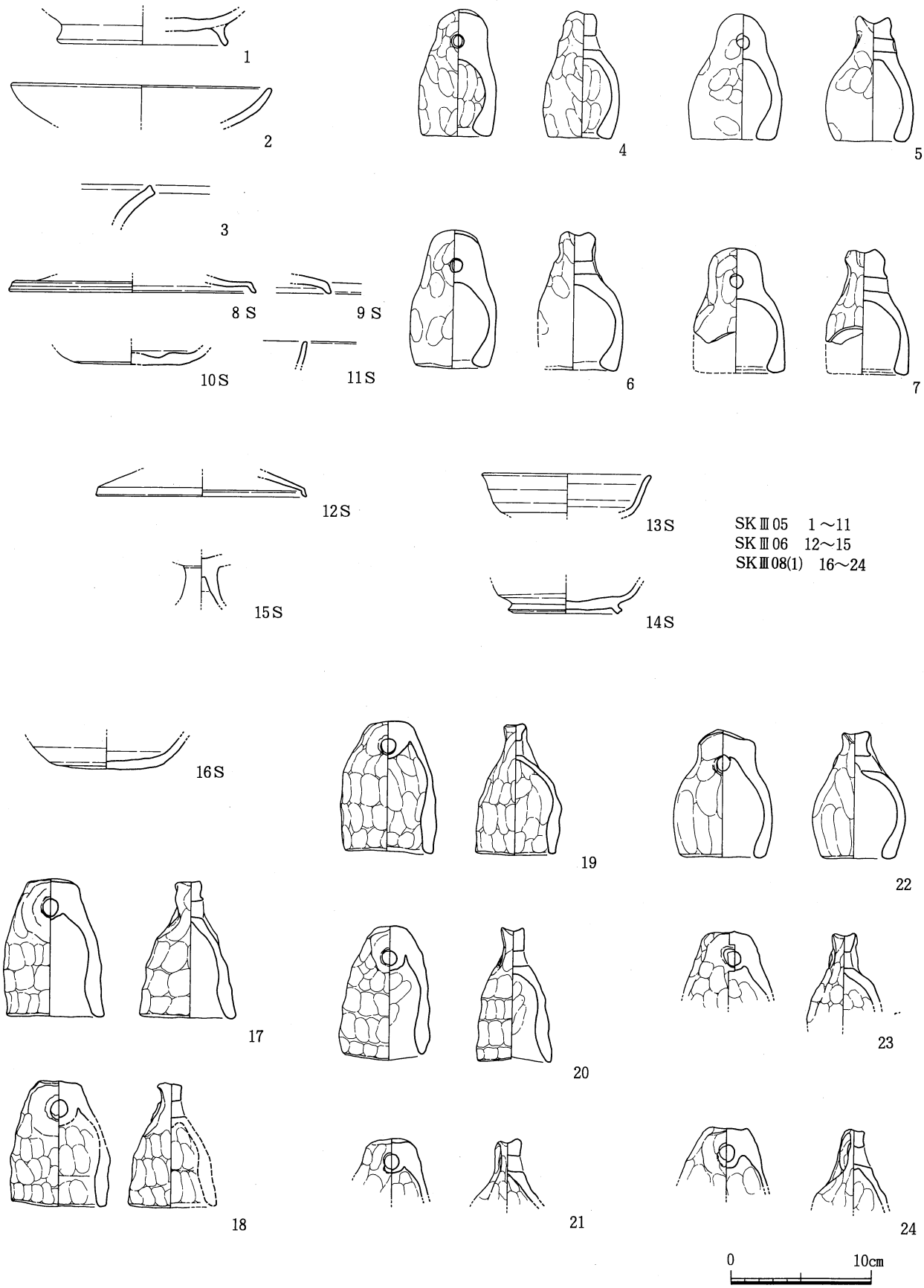
第450図　Ⅲ期井戸 出土土器 3



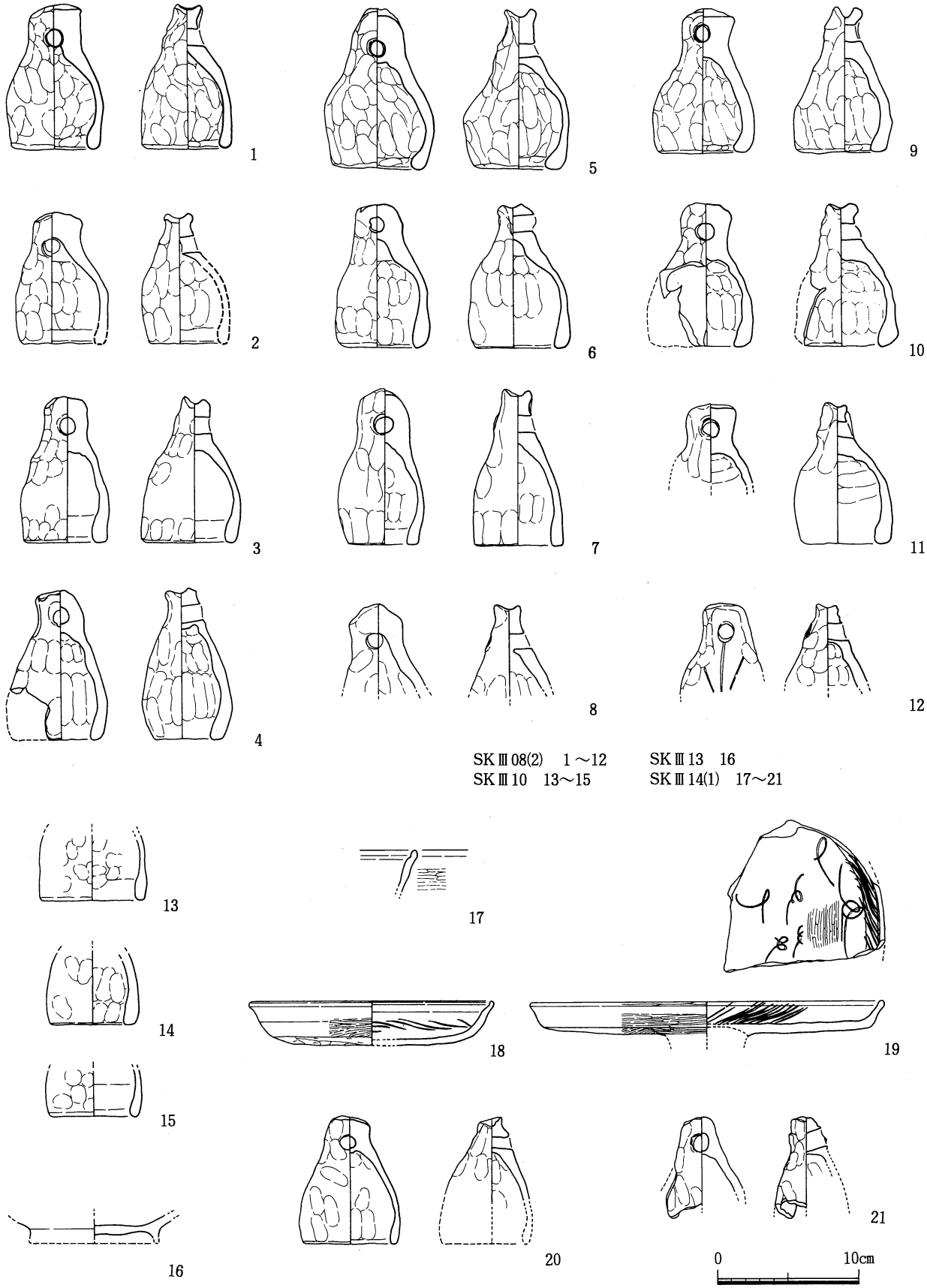
第451図　Ⅲ期井戸 出土土器 4



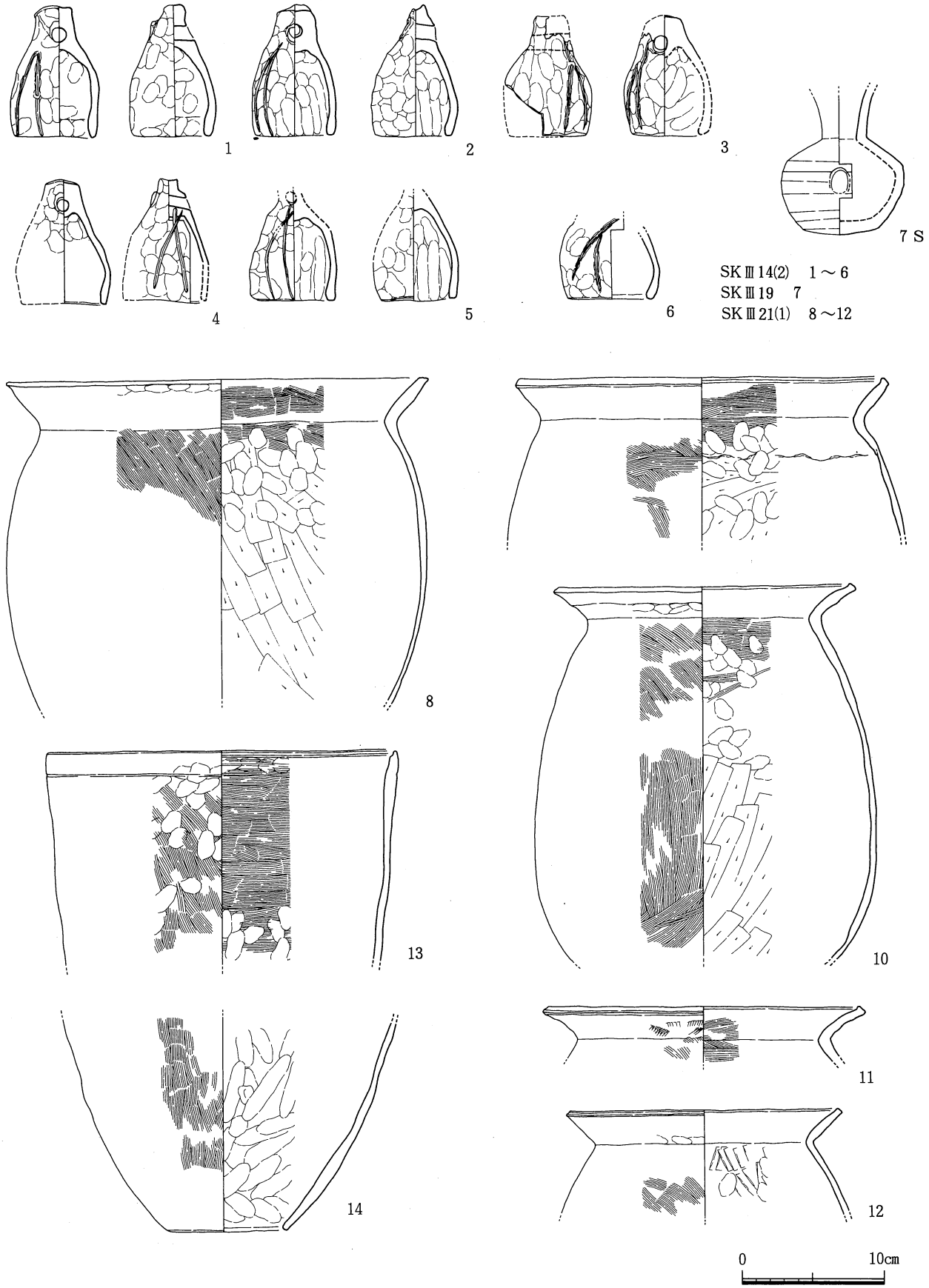
第452図 Ⅲ期井戸 出土土器5，土坑 出土土器1



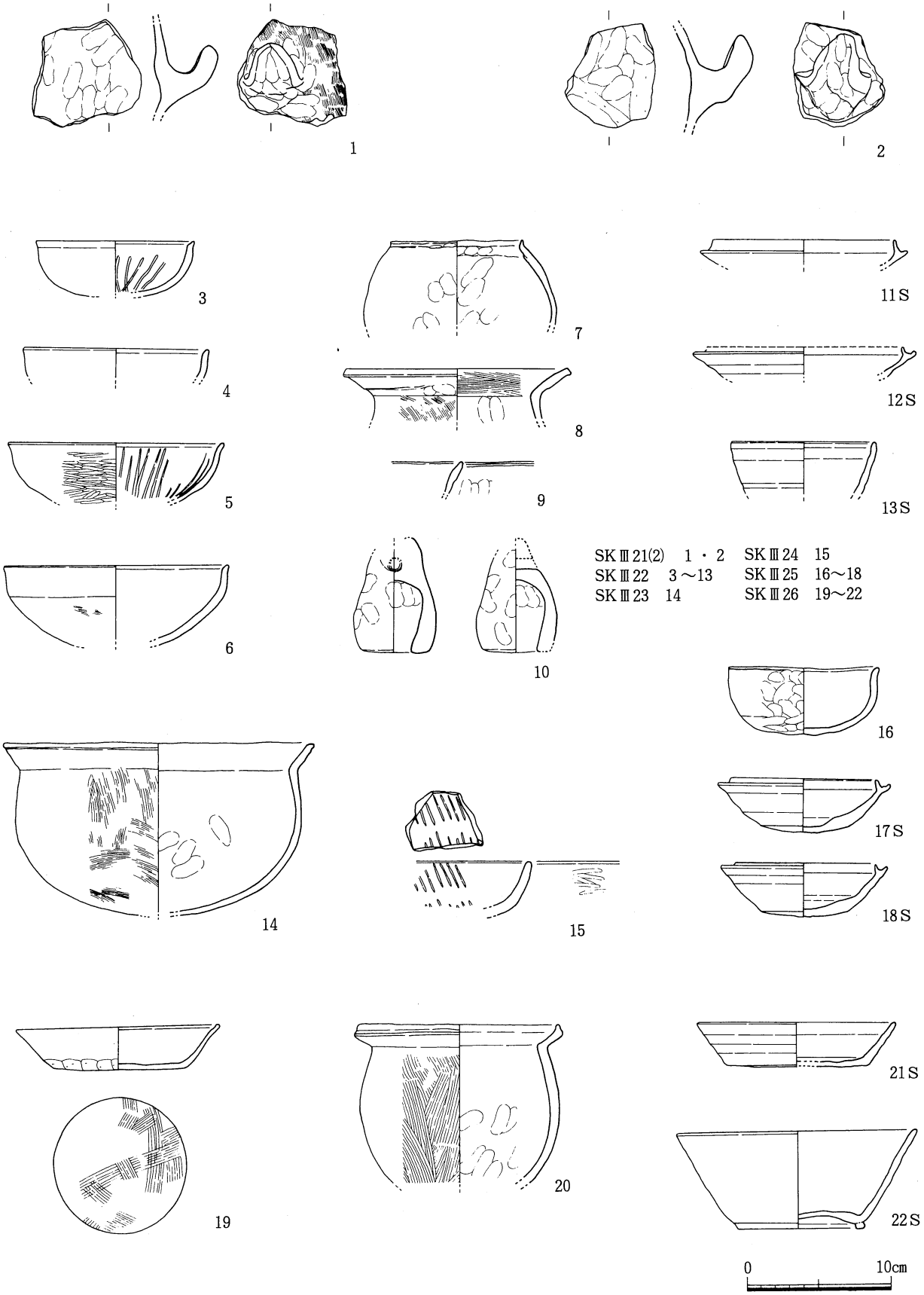
第453図　Ⅲ期土坑 出土土器 2



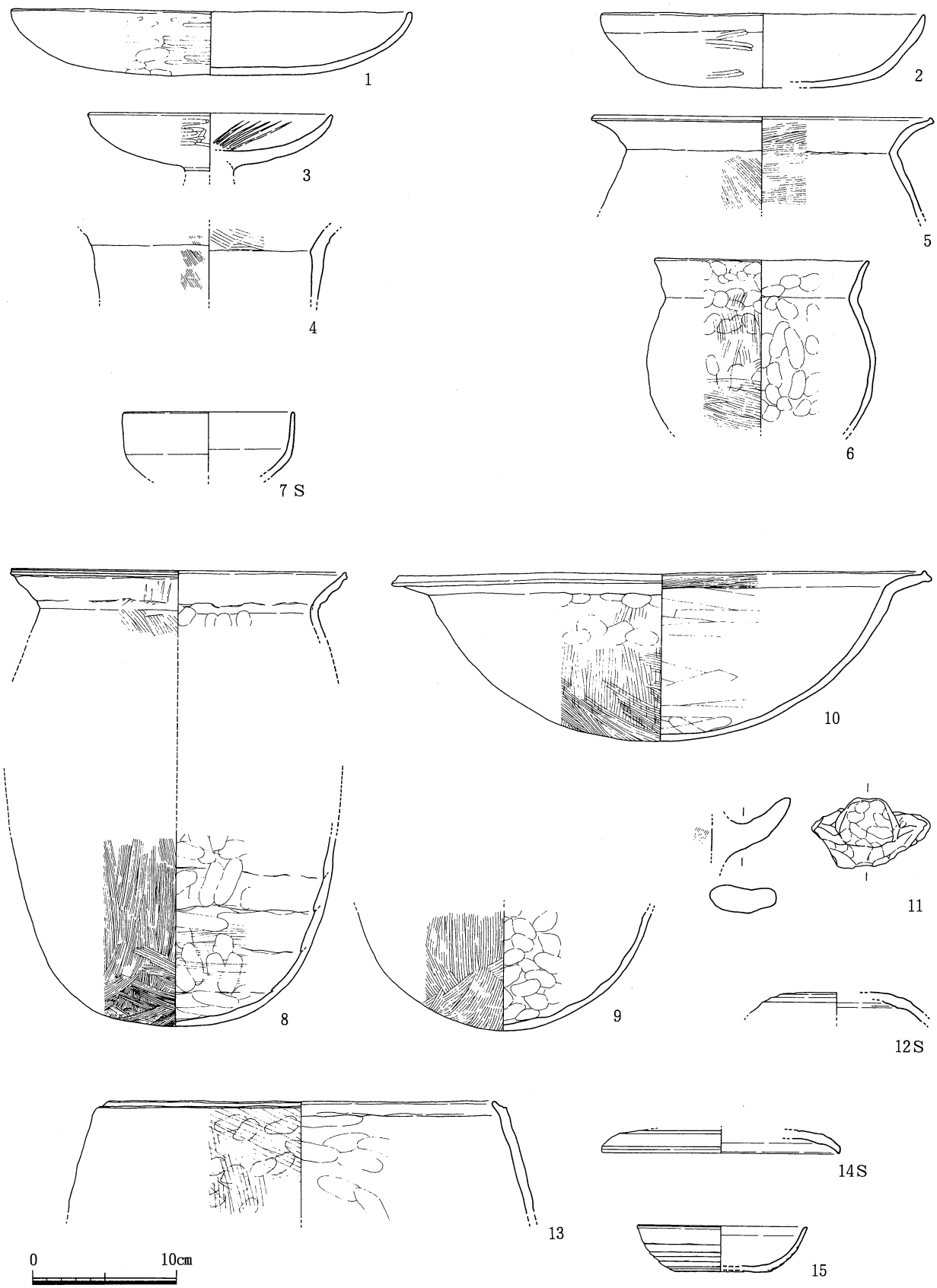
第454図　Ⅲ期土坑 出土土器 3



第455図　Ⅲ期土坑 出土土器 4

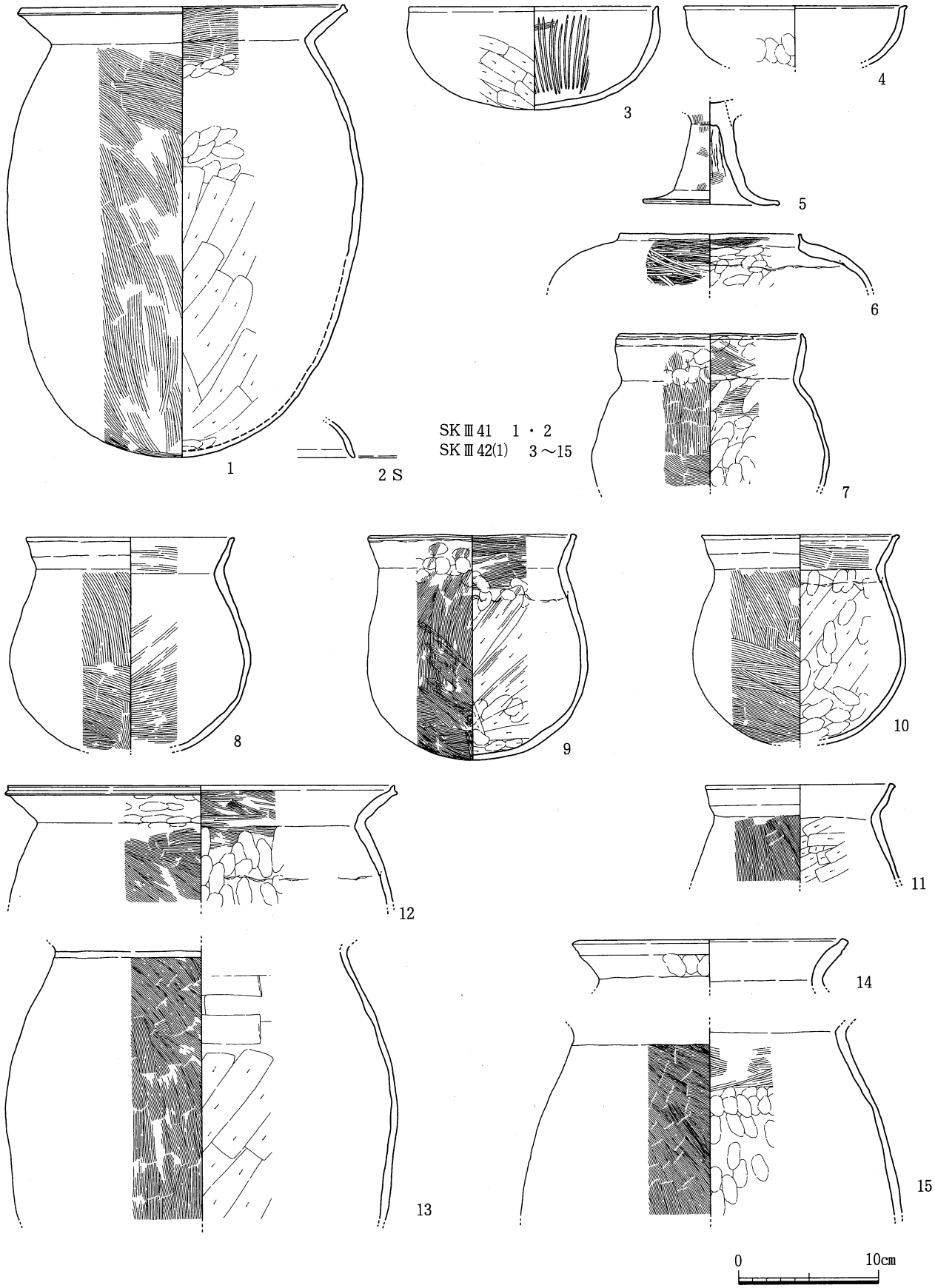


第456図　Ⅲ期土坑 出土土器5

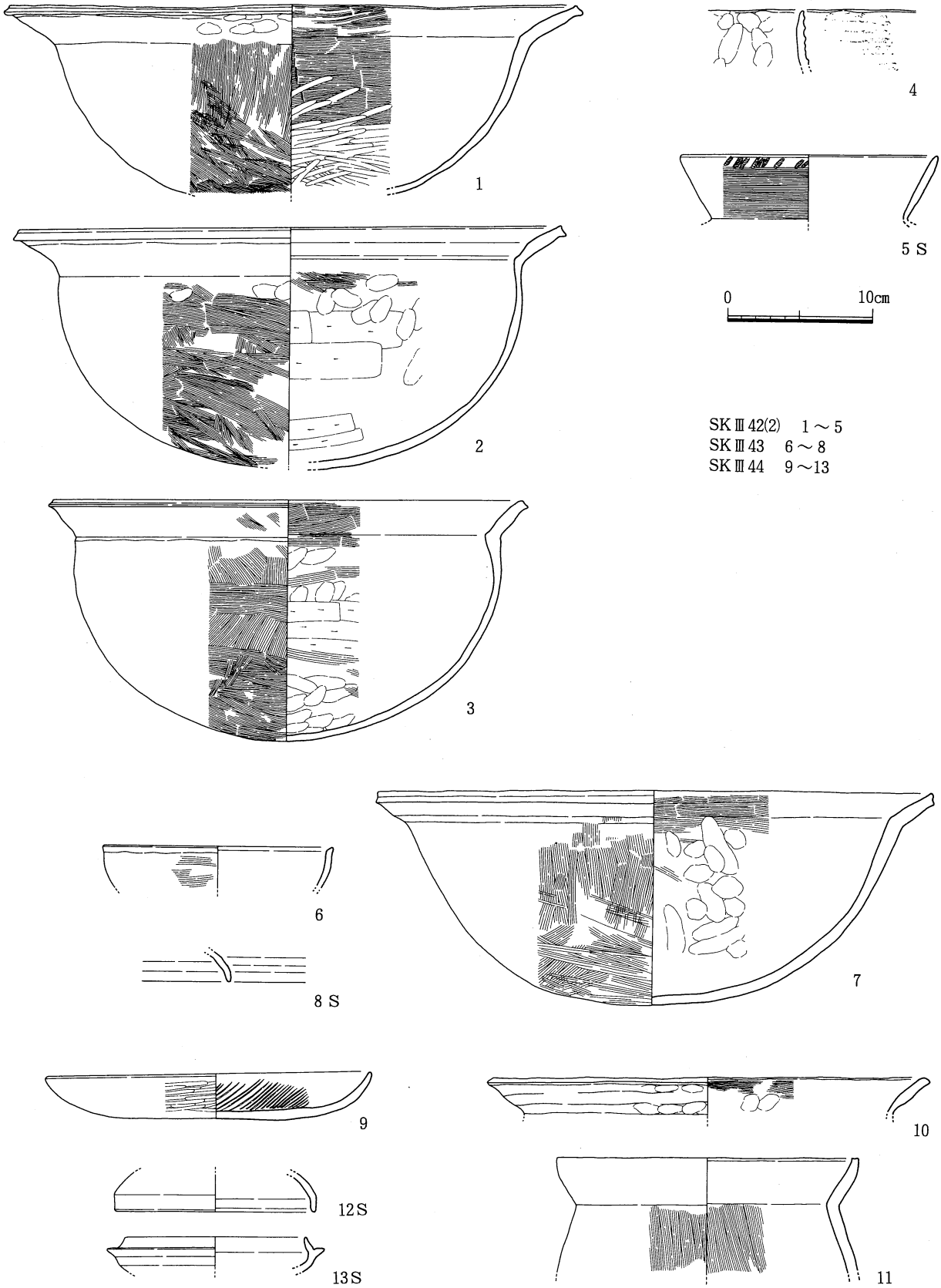


SKⅢ27　1～6　　SKⅢ29　8～12　　SKⅢ40　15
SKⅢ28　7　　SKⅢ31　13・14

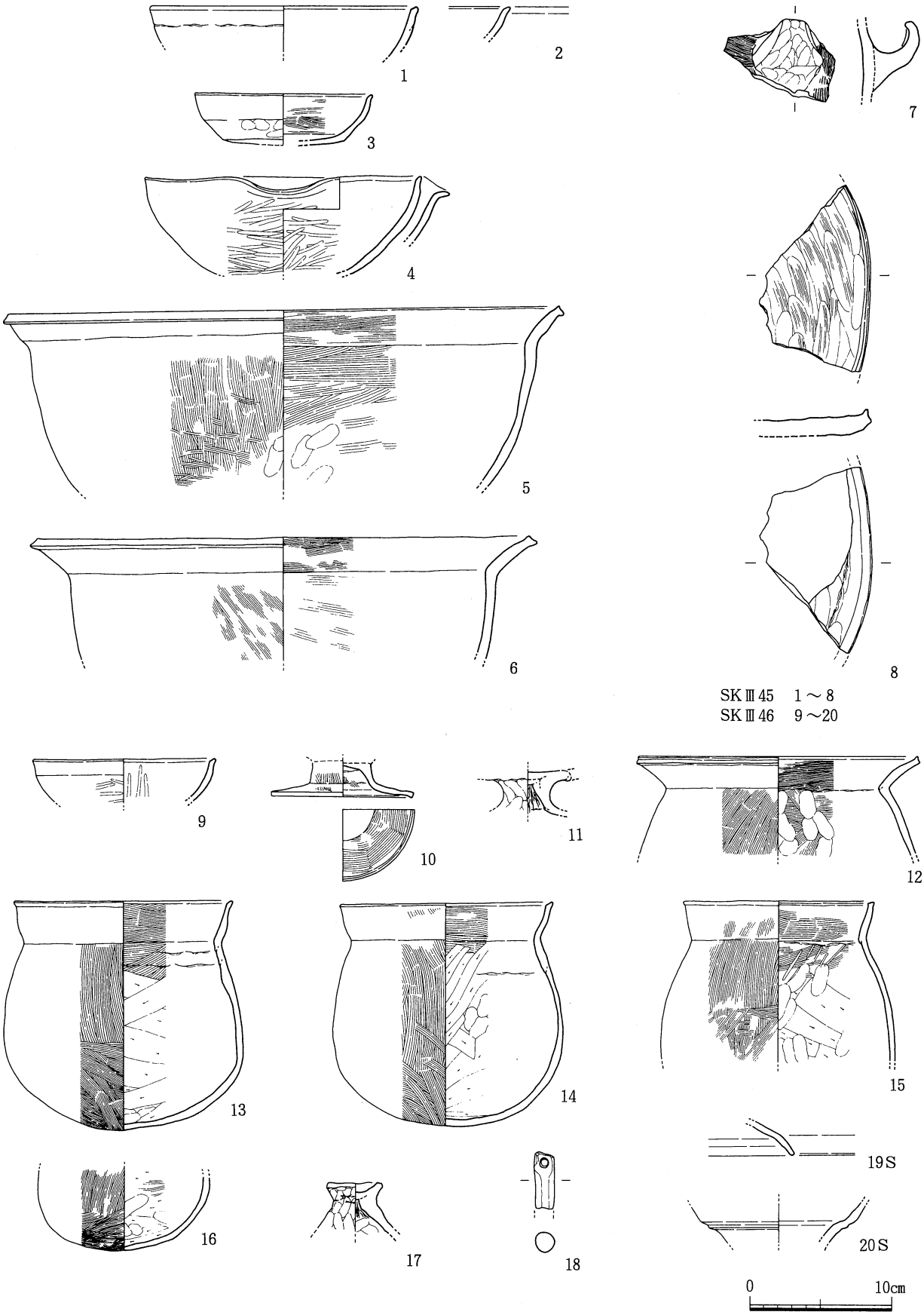
第457図　Ⅲ期土坑 出土土器 6



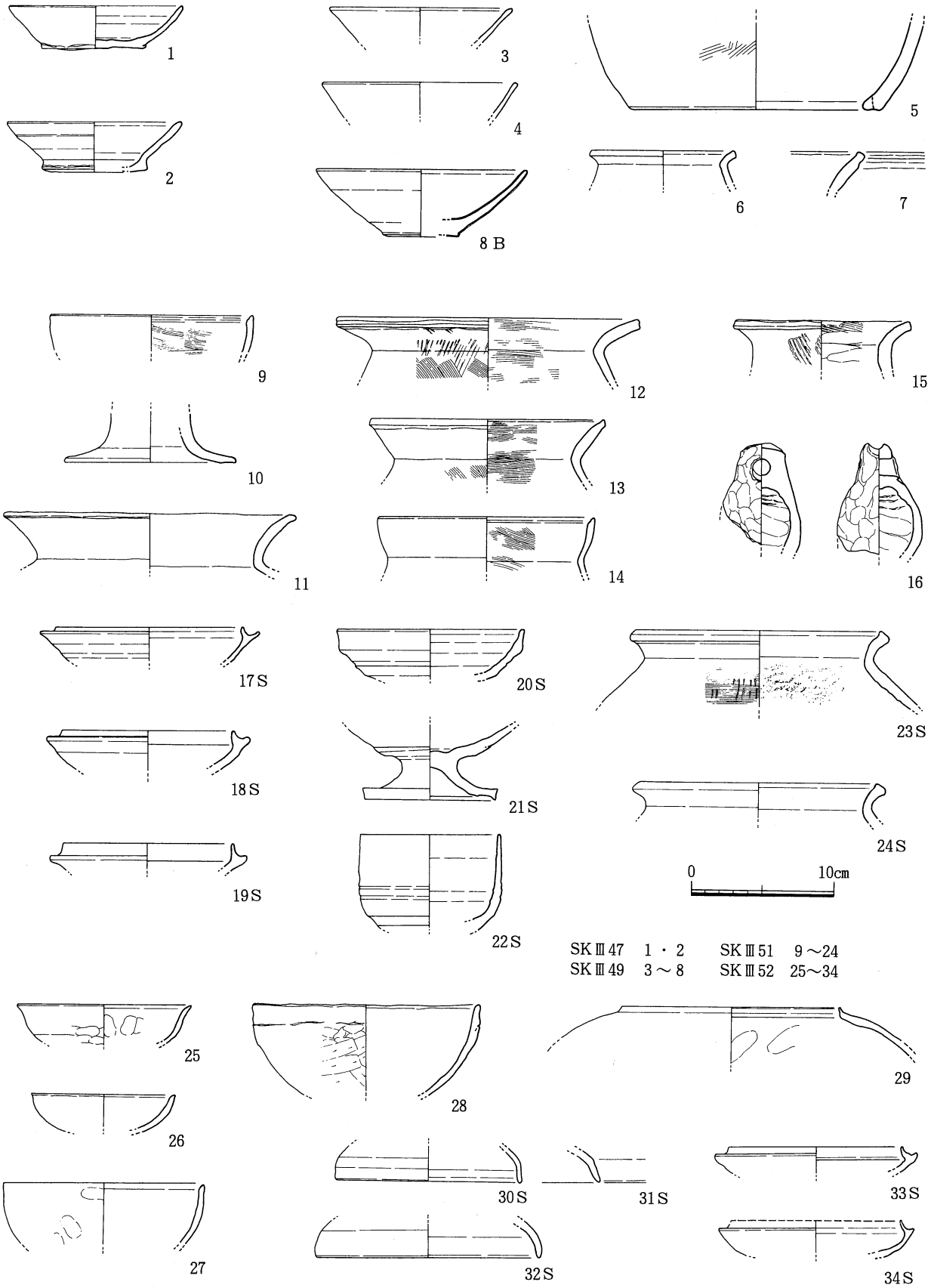
第458図　Ⅲ期土坑 出土土器 7



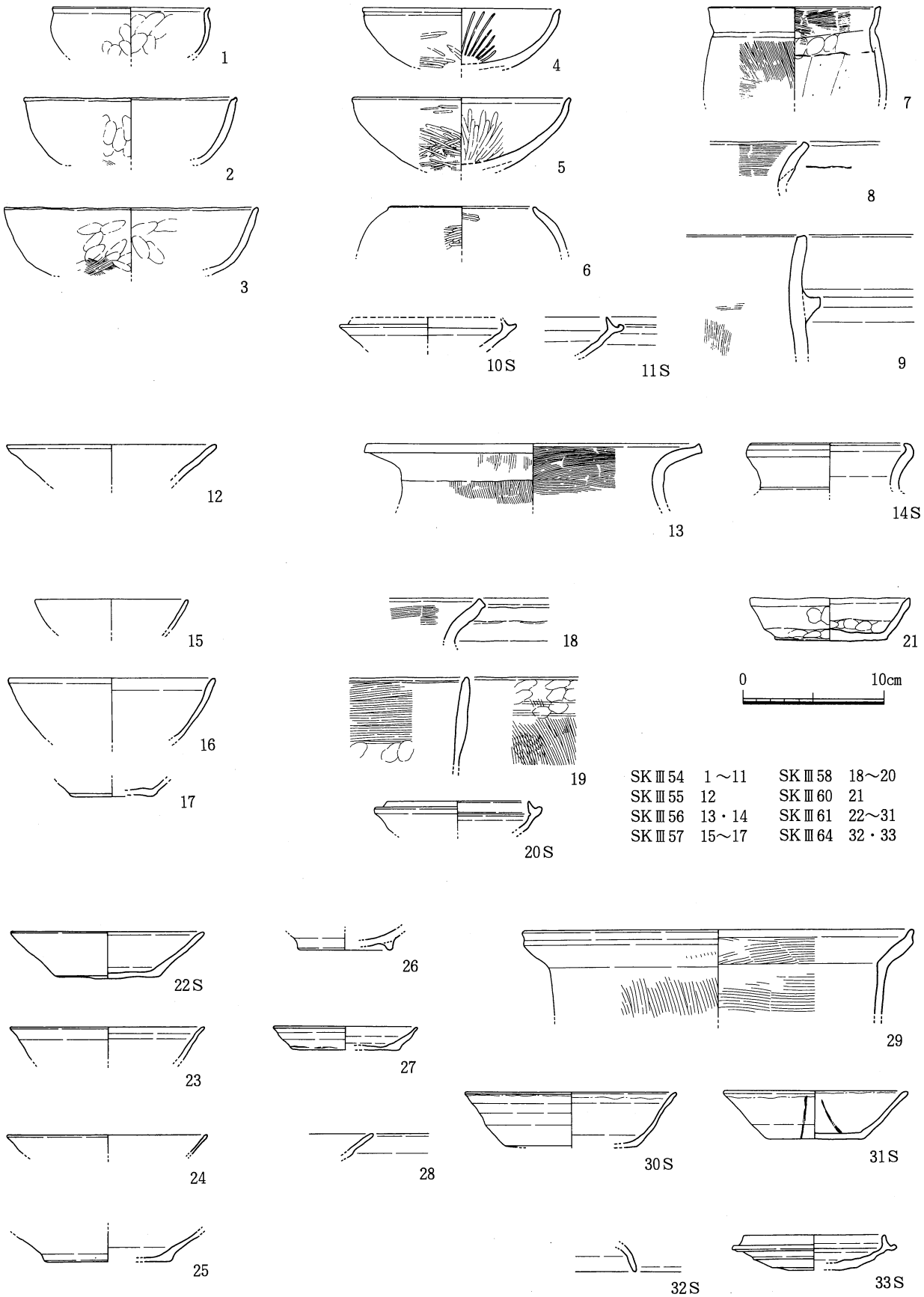
第459図　Ⅲ期土坑 出土土器 8



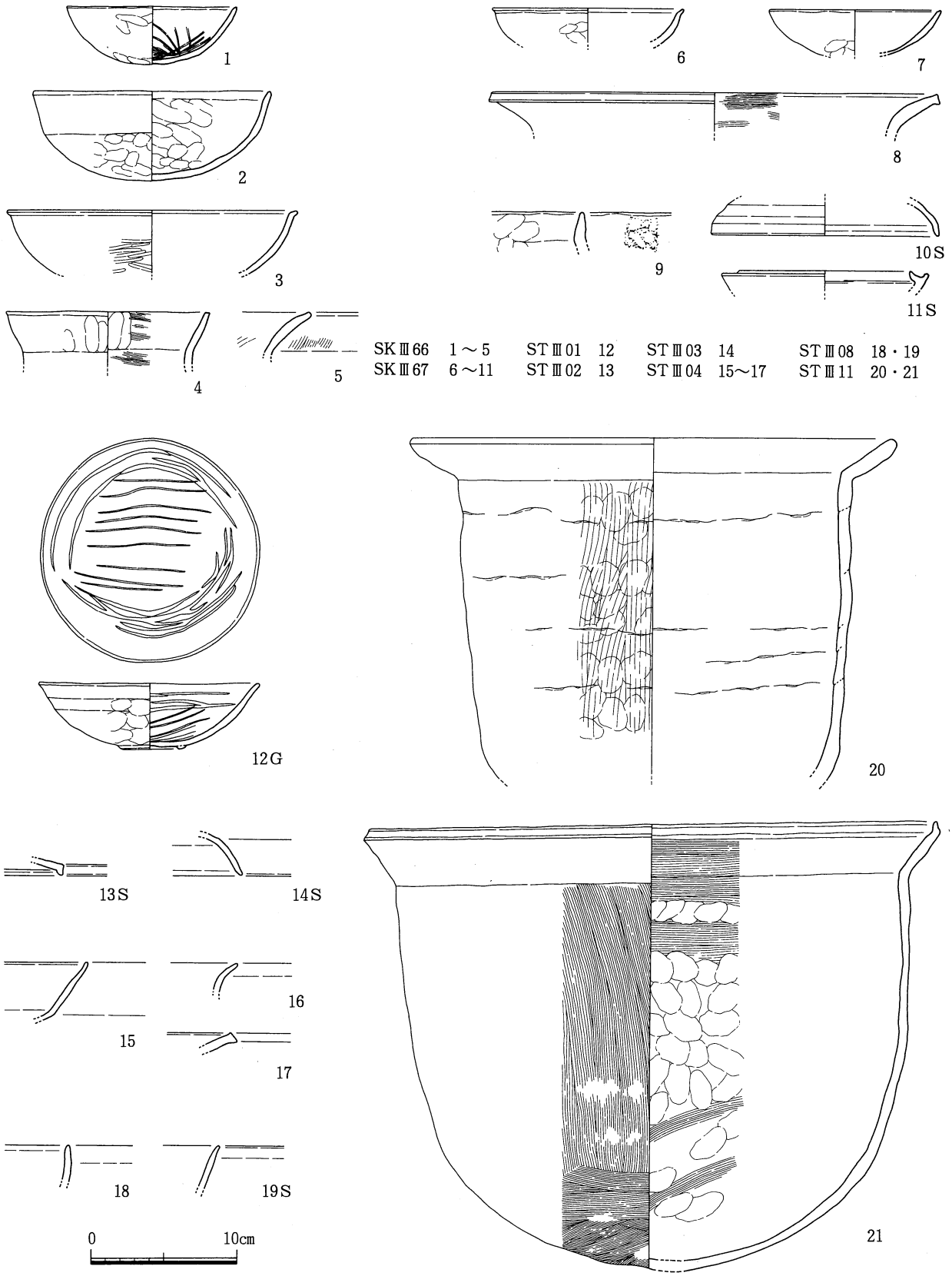
第460図　Ⅲ期土坑 出土土器 9



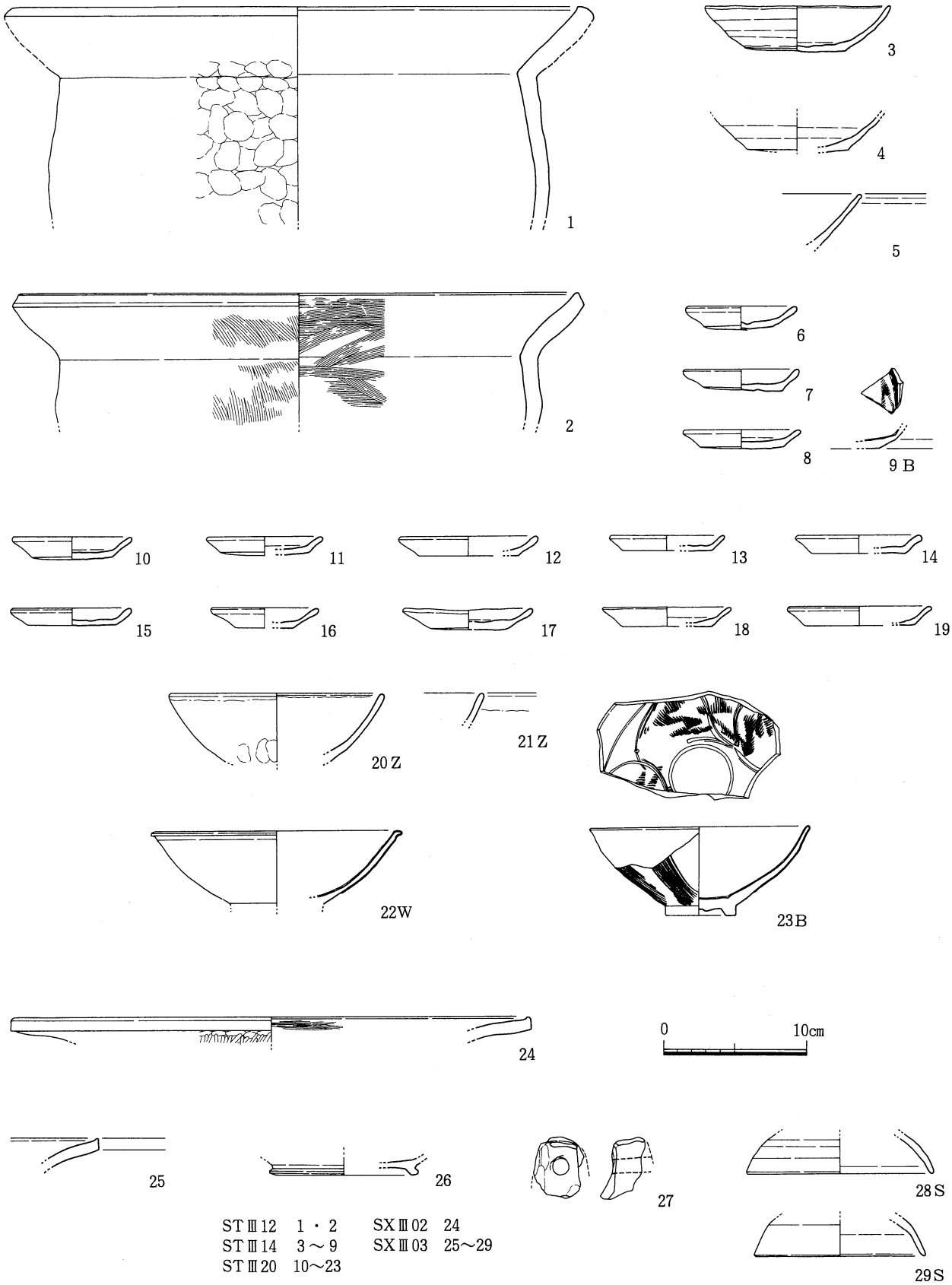
第461図　Ⅲ期土坑 出土土器10



第462図　Ⅲ期土坑 出土土器11

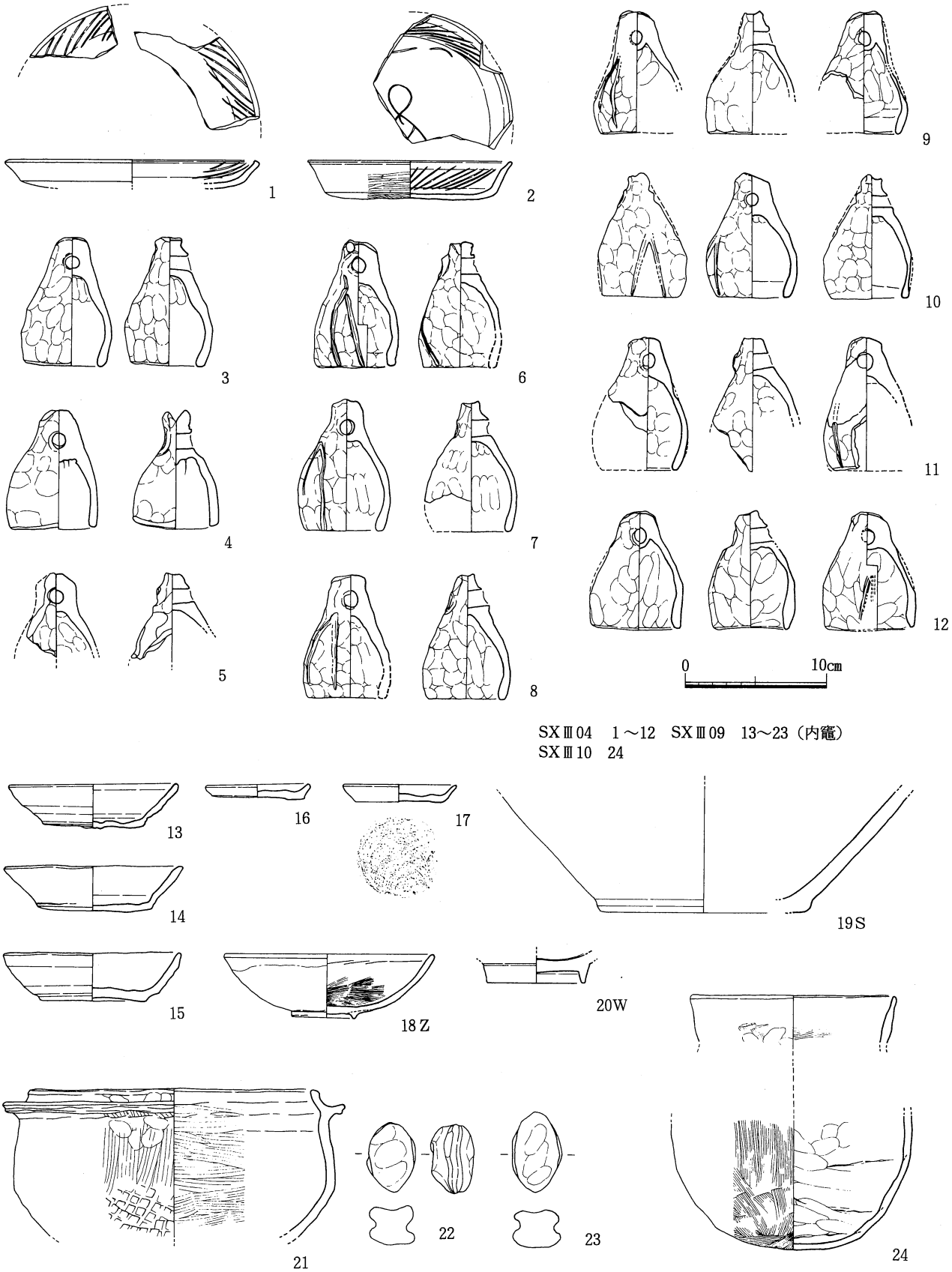


第463図　Ⅲ期土坑 出土土器12，墓 出土土器1



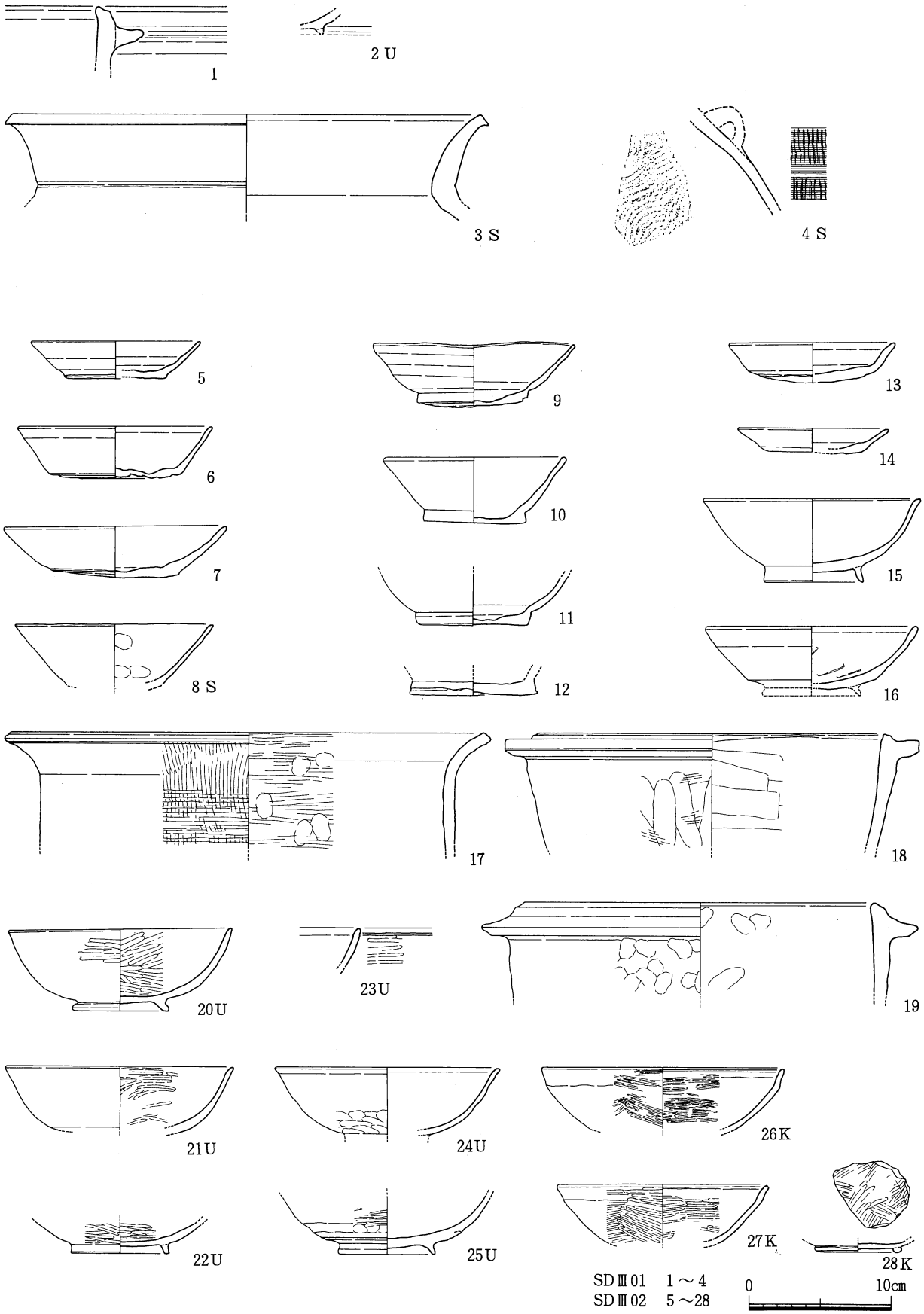
ST Ⅲ12　1・2　　SX Ⅲ02　24
ST Ⅲ14　3～9　　SX Ⅲ03　25～29
ST Ⅲ20　10～23

第464図　Ⅲ期墓 出土土器2，不明遺構 出土土器1

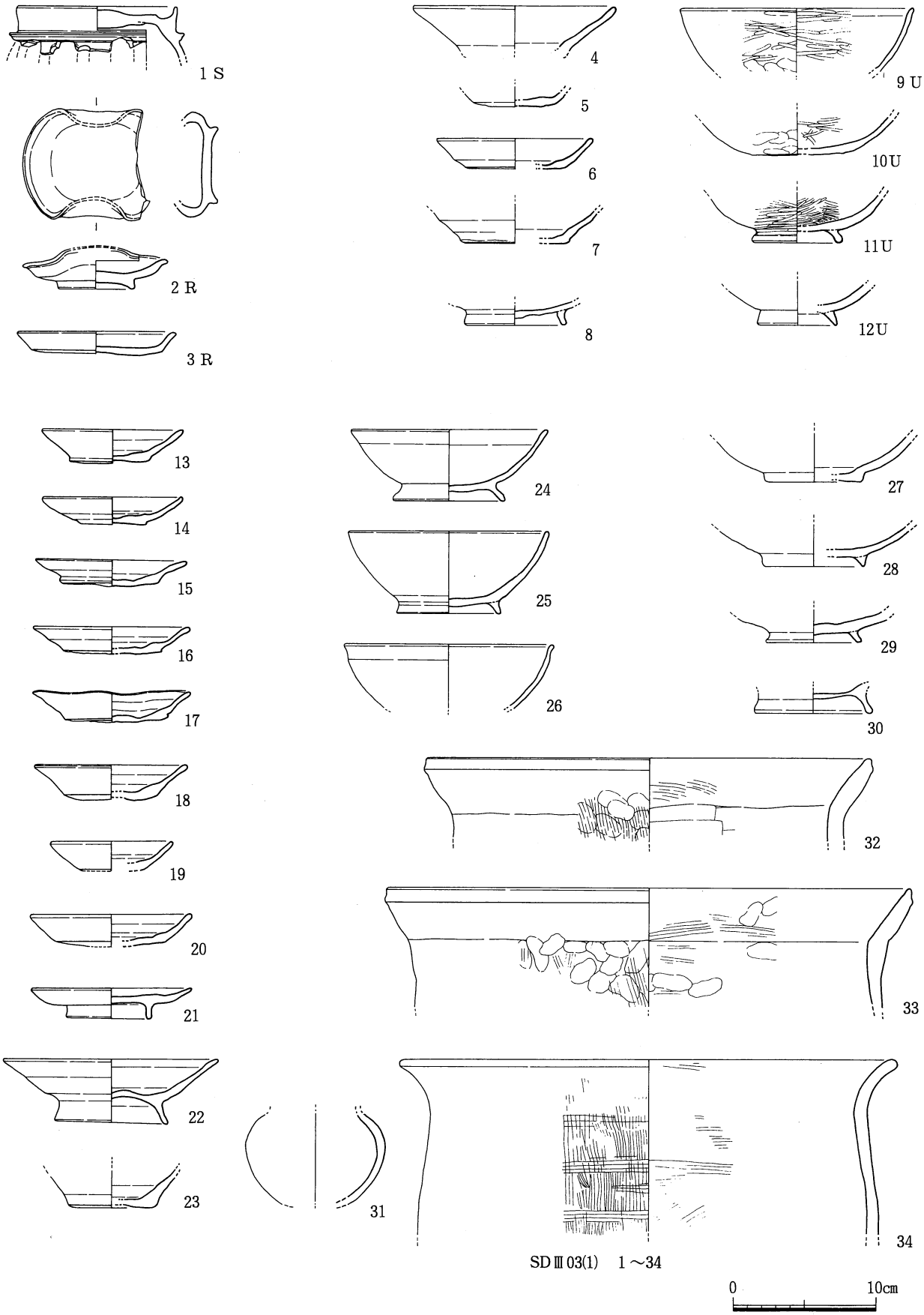


SXⅢ04　1～12　SXⅢ09　13～23（内竈）
SXⅢ10　24

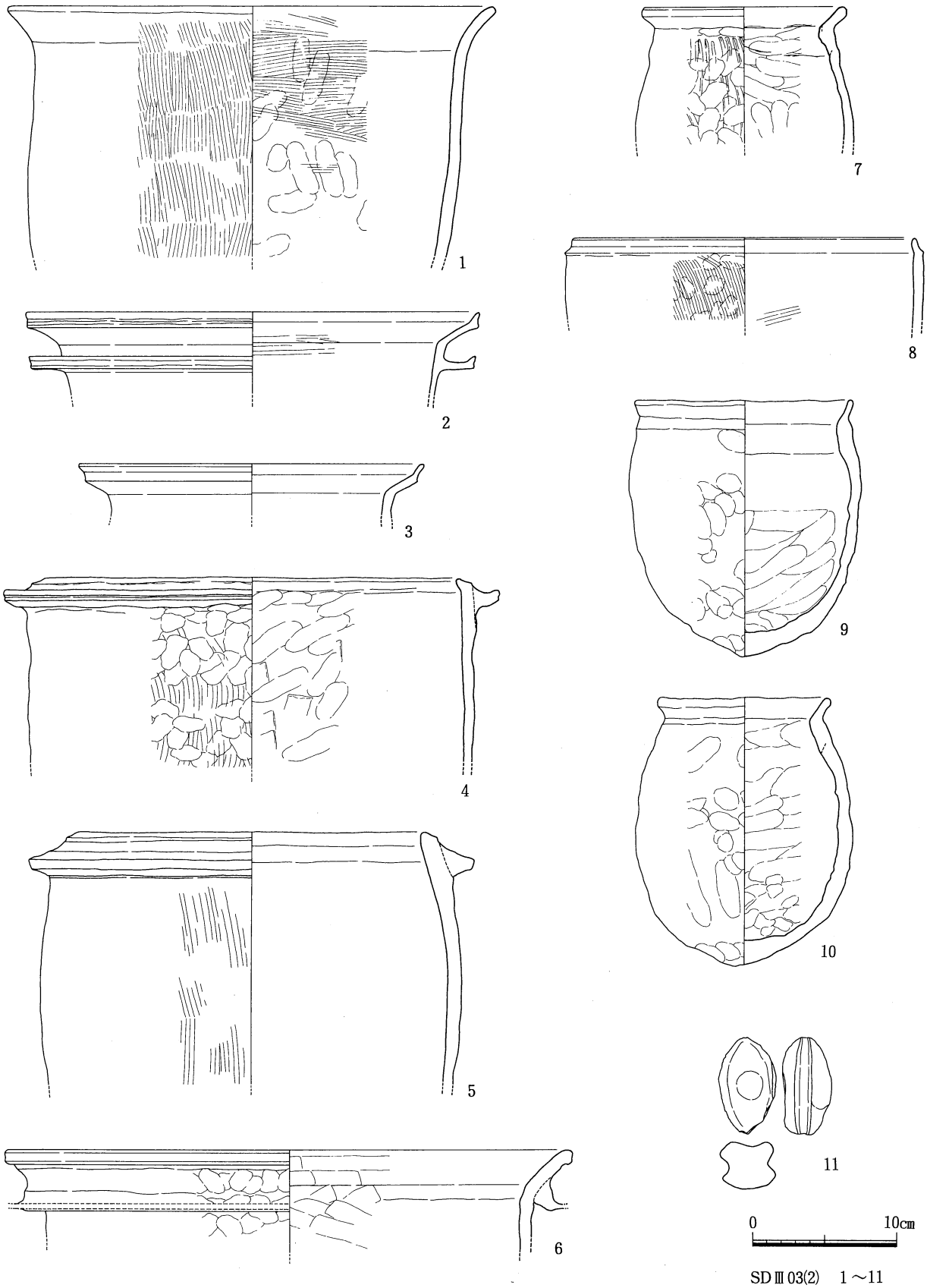
第465図　Ⅲ期不明遺構 出土土器 2



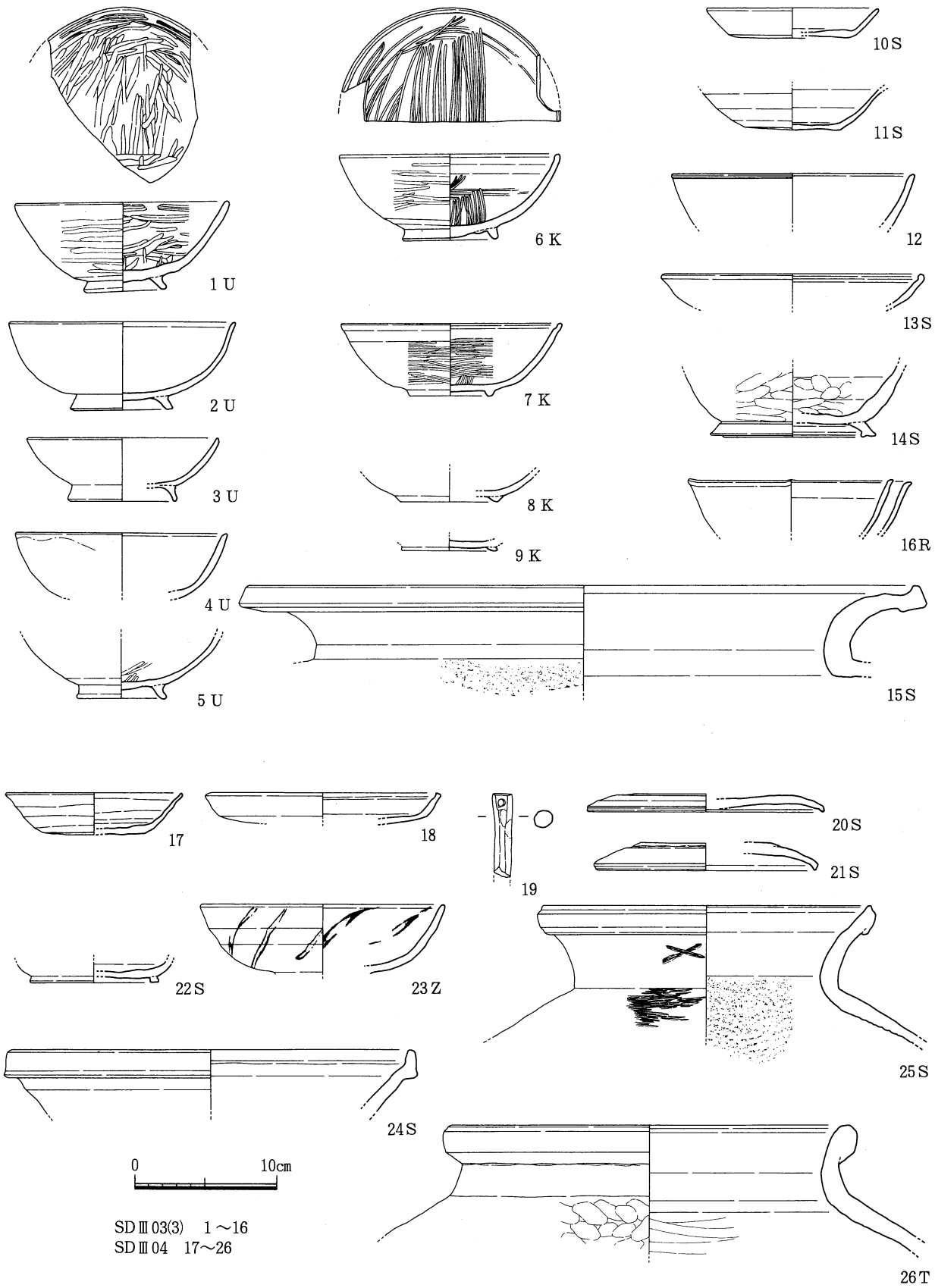
第466図　Ⅲ期溝 出土土器 1



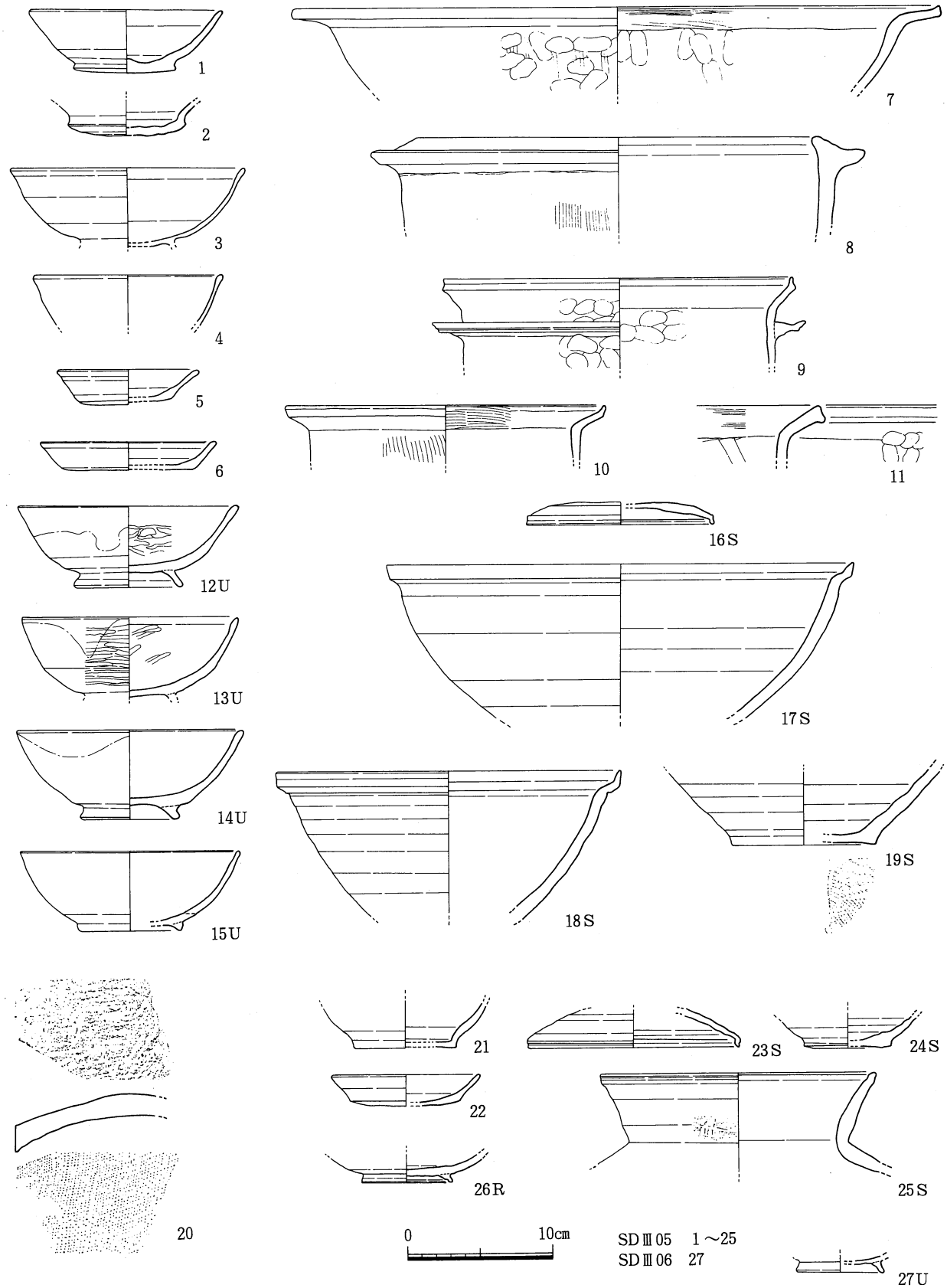
第467図　Ⅲ期溝 出土土器 2



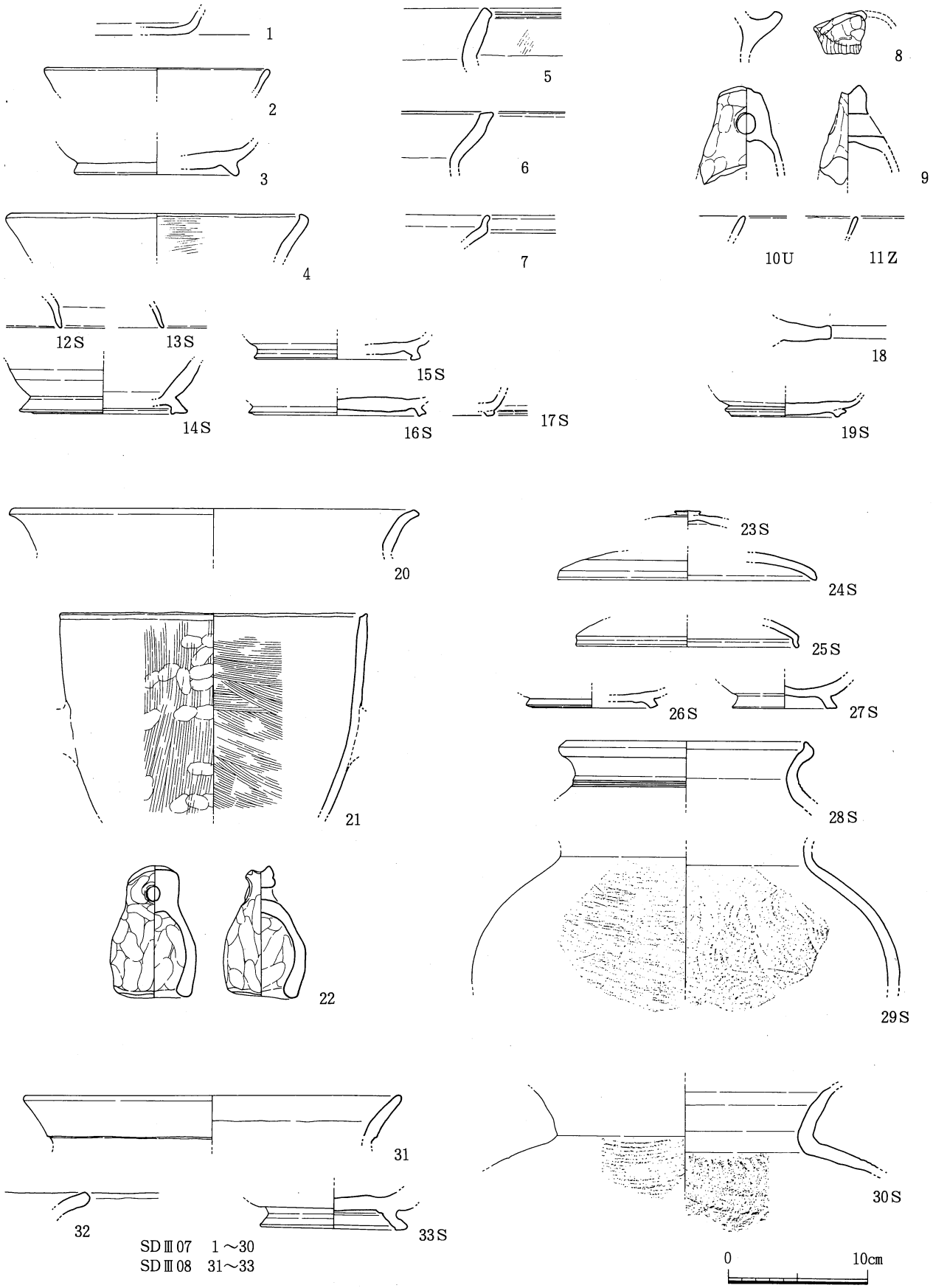
第468図　Ⅲ期溝 出土土器 3



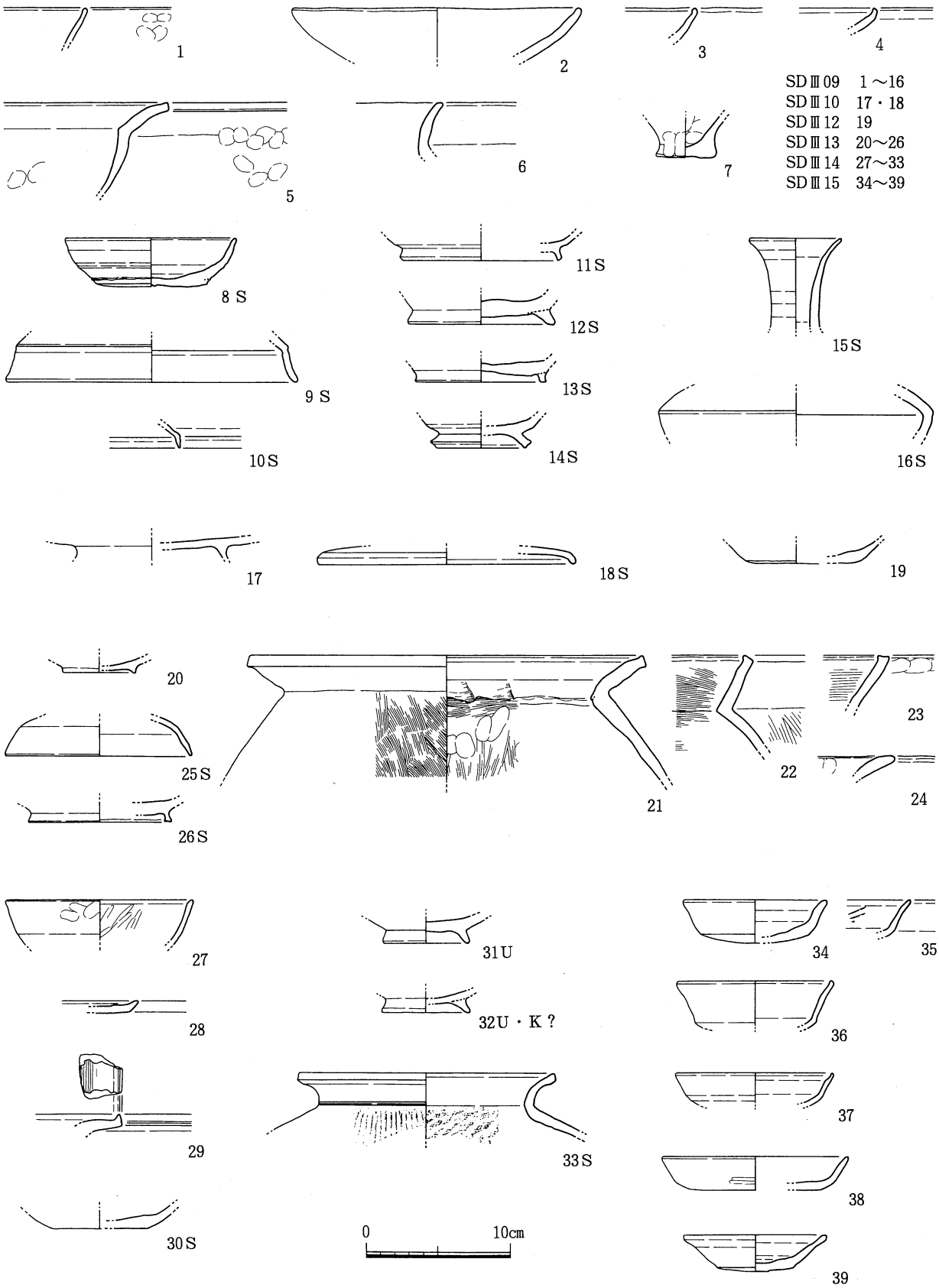
第469図　Ⅲ期溝 出土土器 4



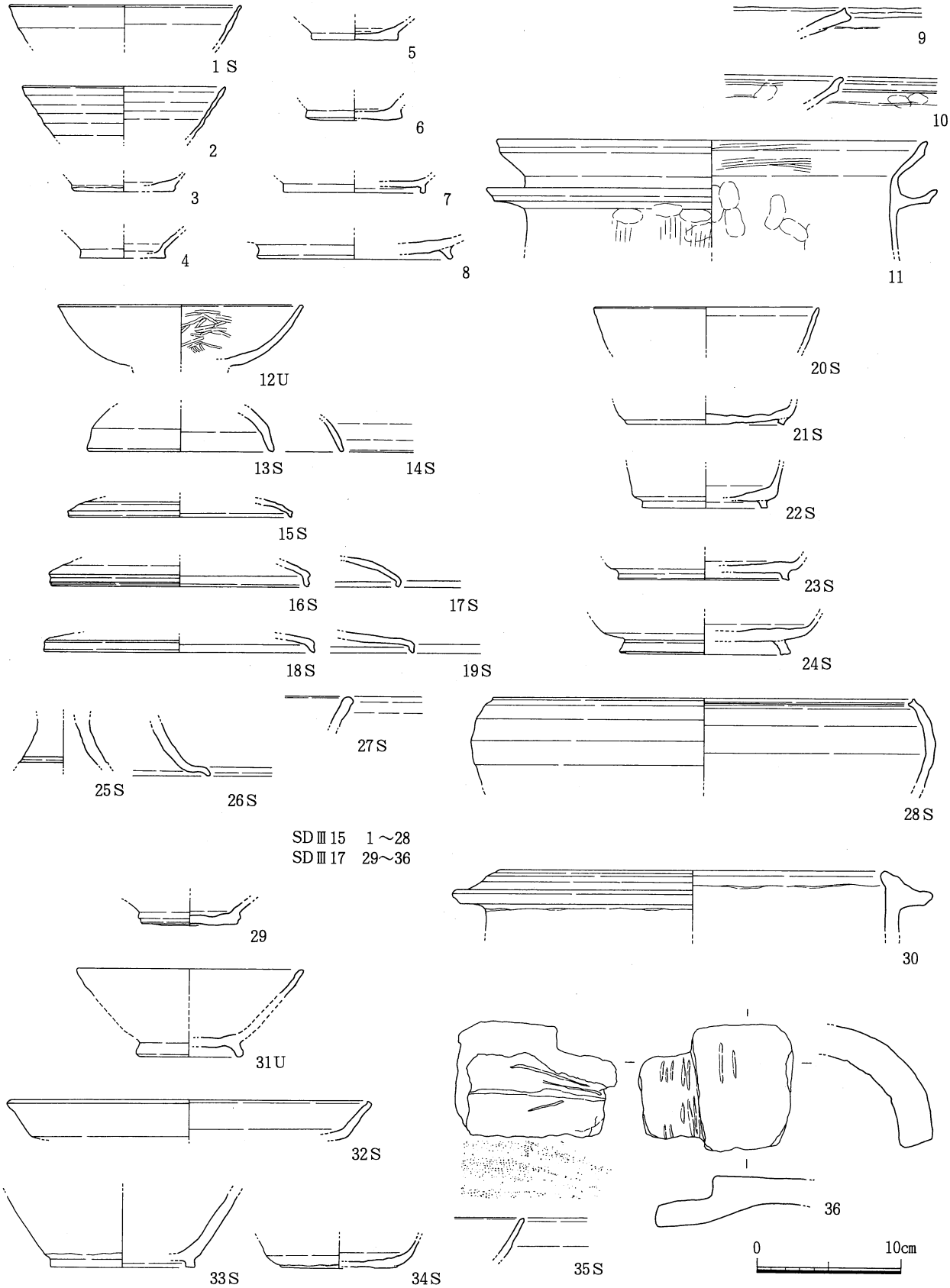
第470図　Ⅲ期溝 出土土器5



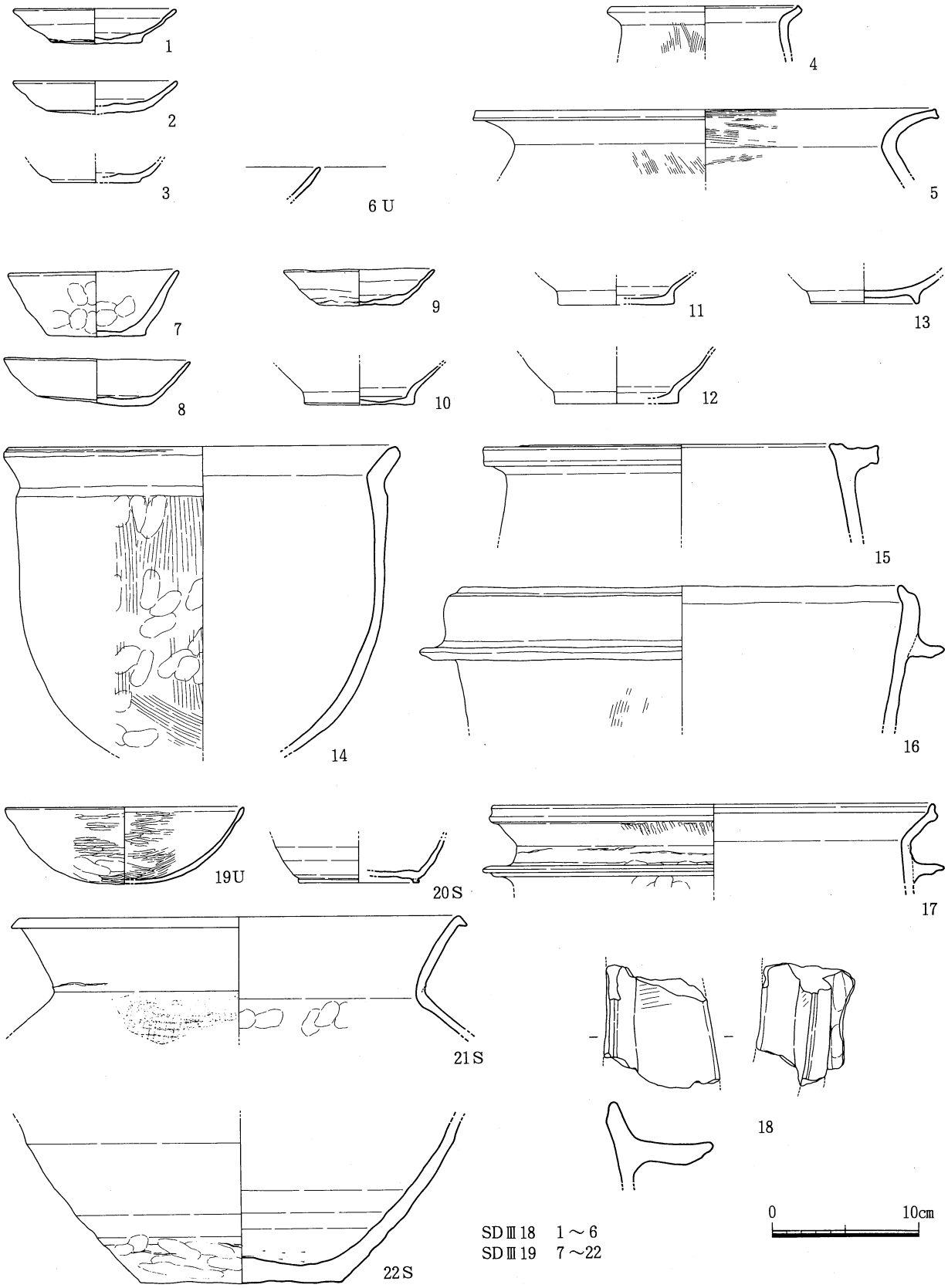
第471図　Ⅲ期溝 出土土器 6



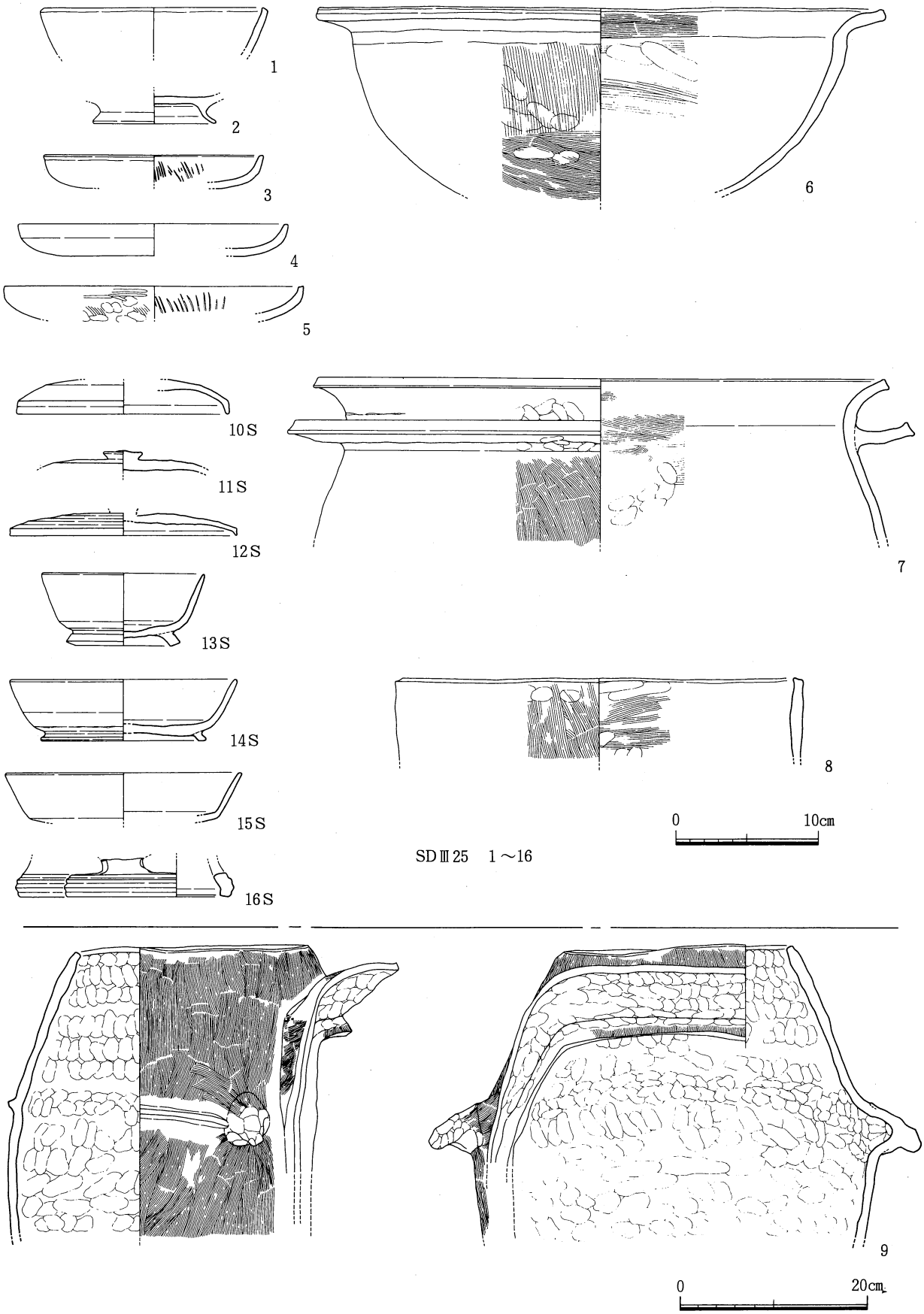
第472図　Ⅲ期溝 出土土器7



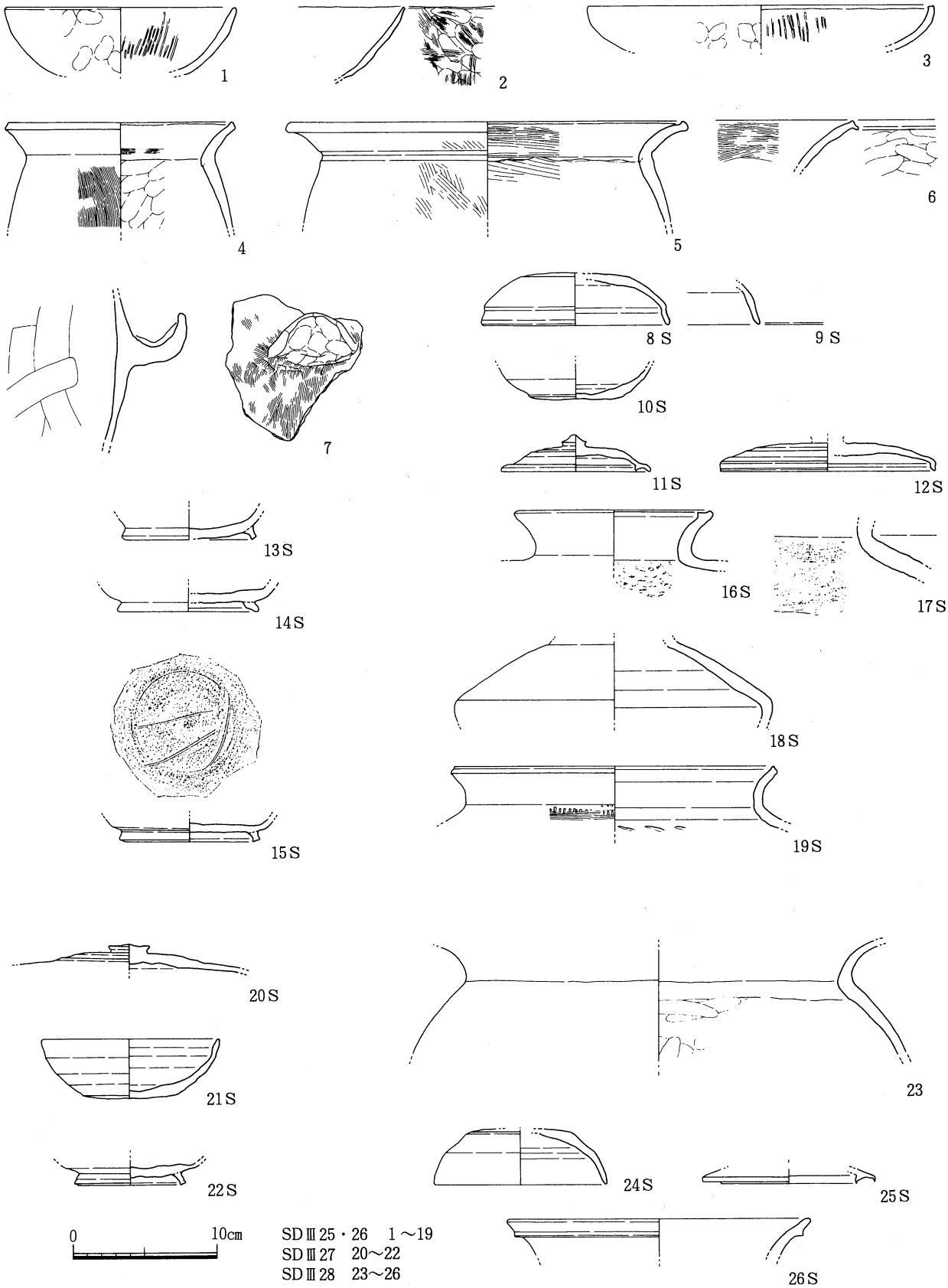
第473図　Ⅲ期溝 出土土器 8



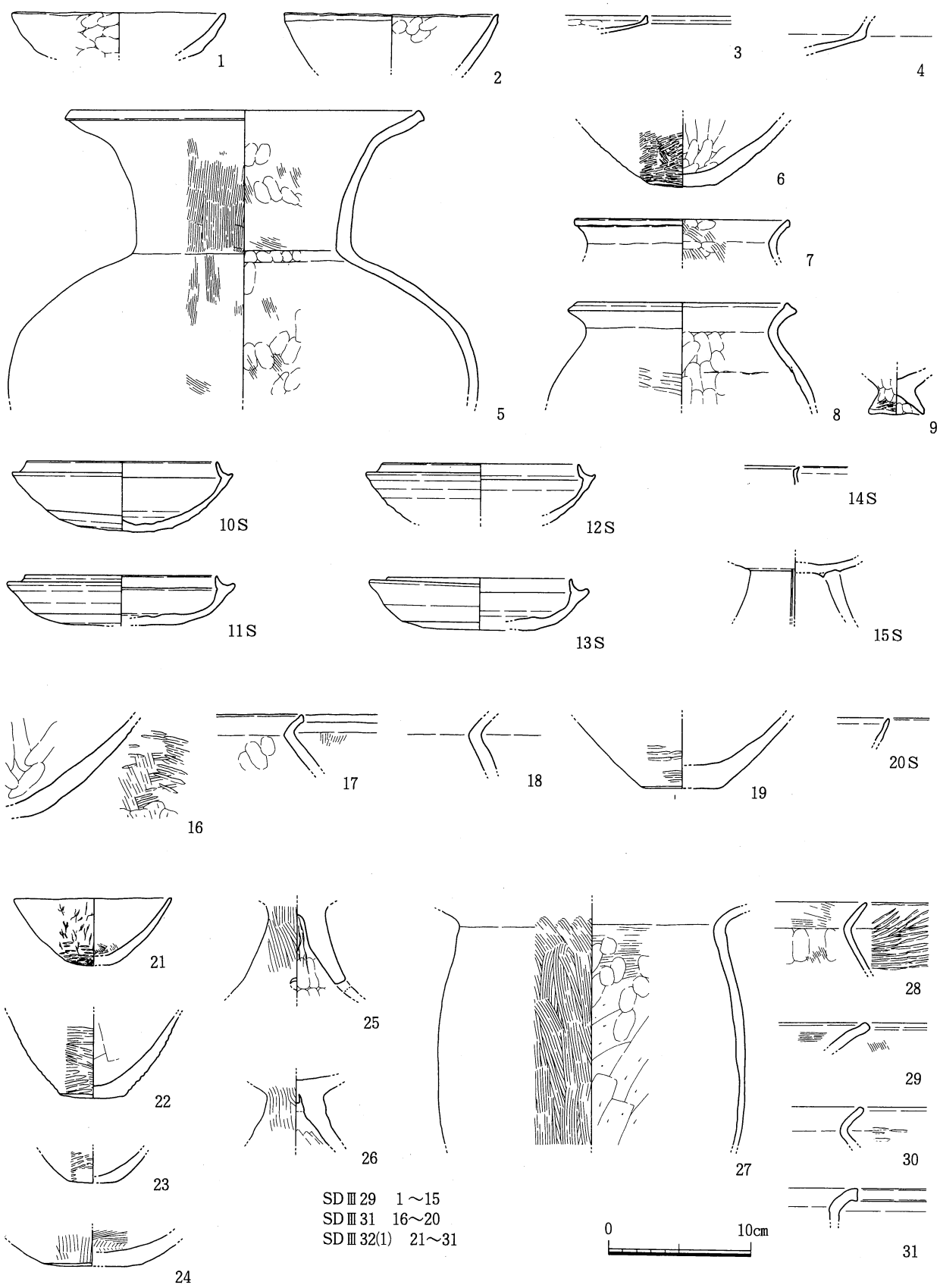
第474図　Ⅲ期溝 出土土器 9



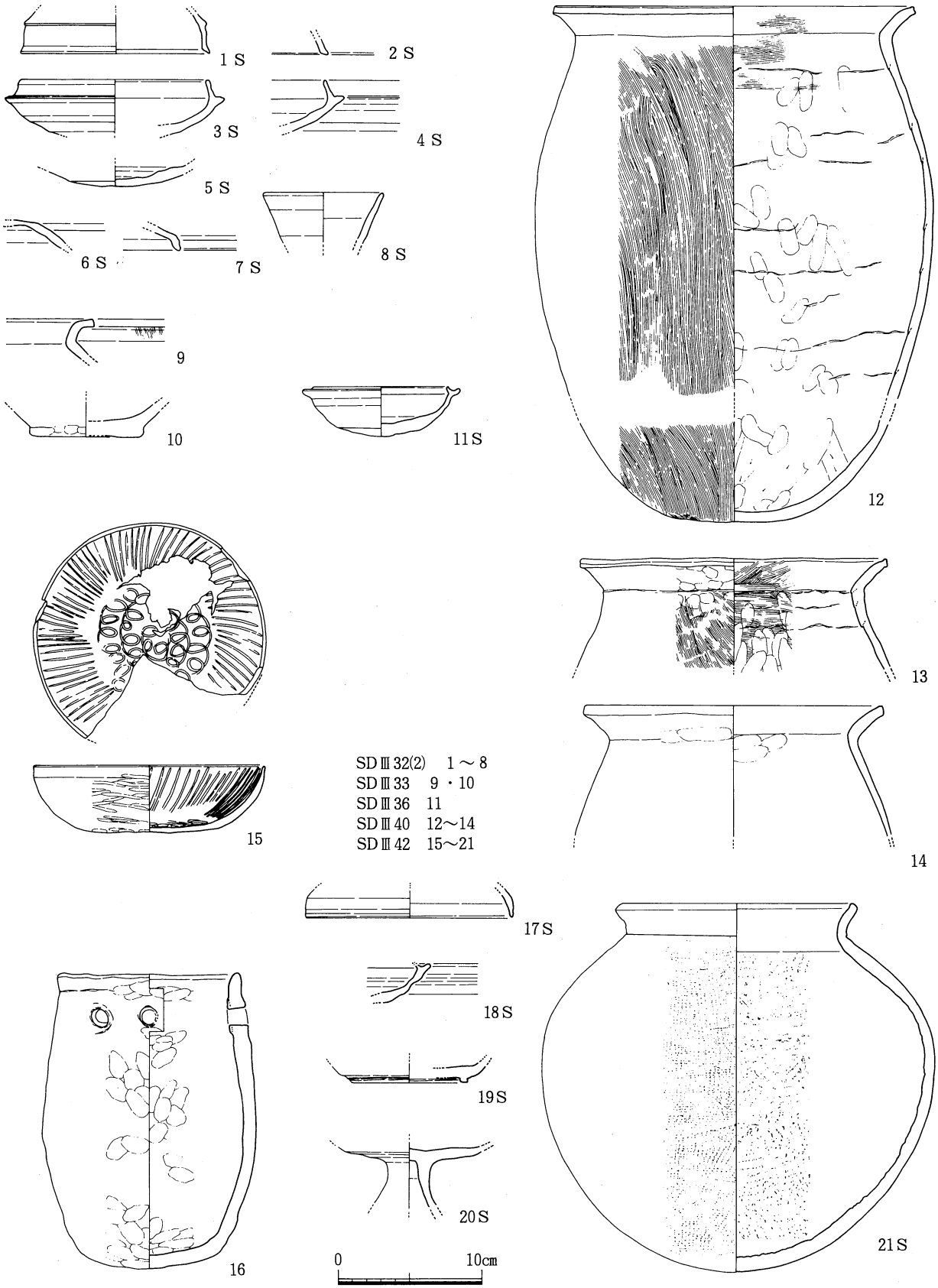
第475図　Ⅲ期溝 出土土器10



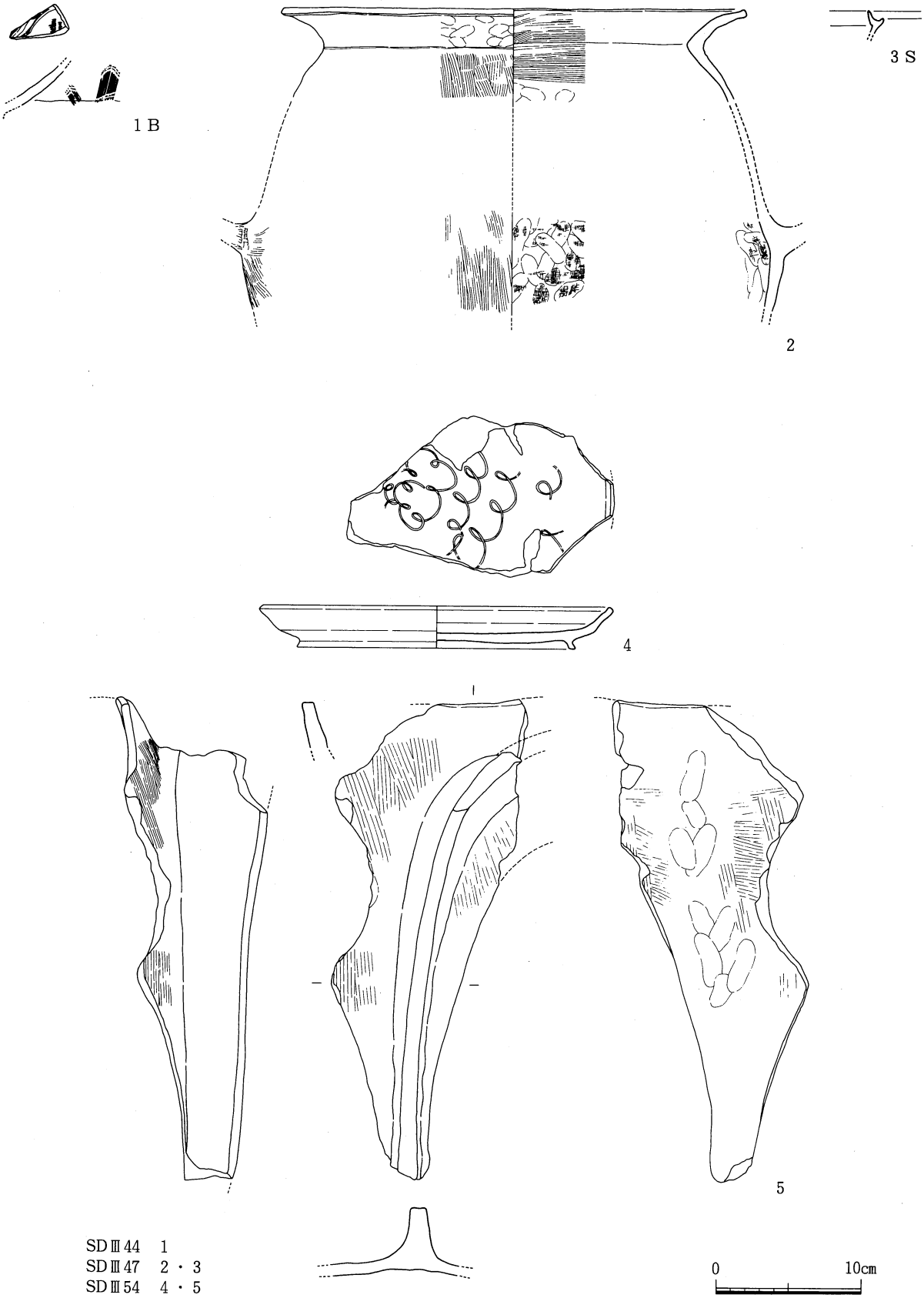
第476図　Ⅲ期溝 出土土器11



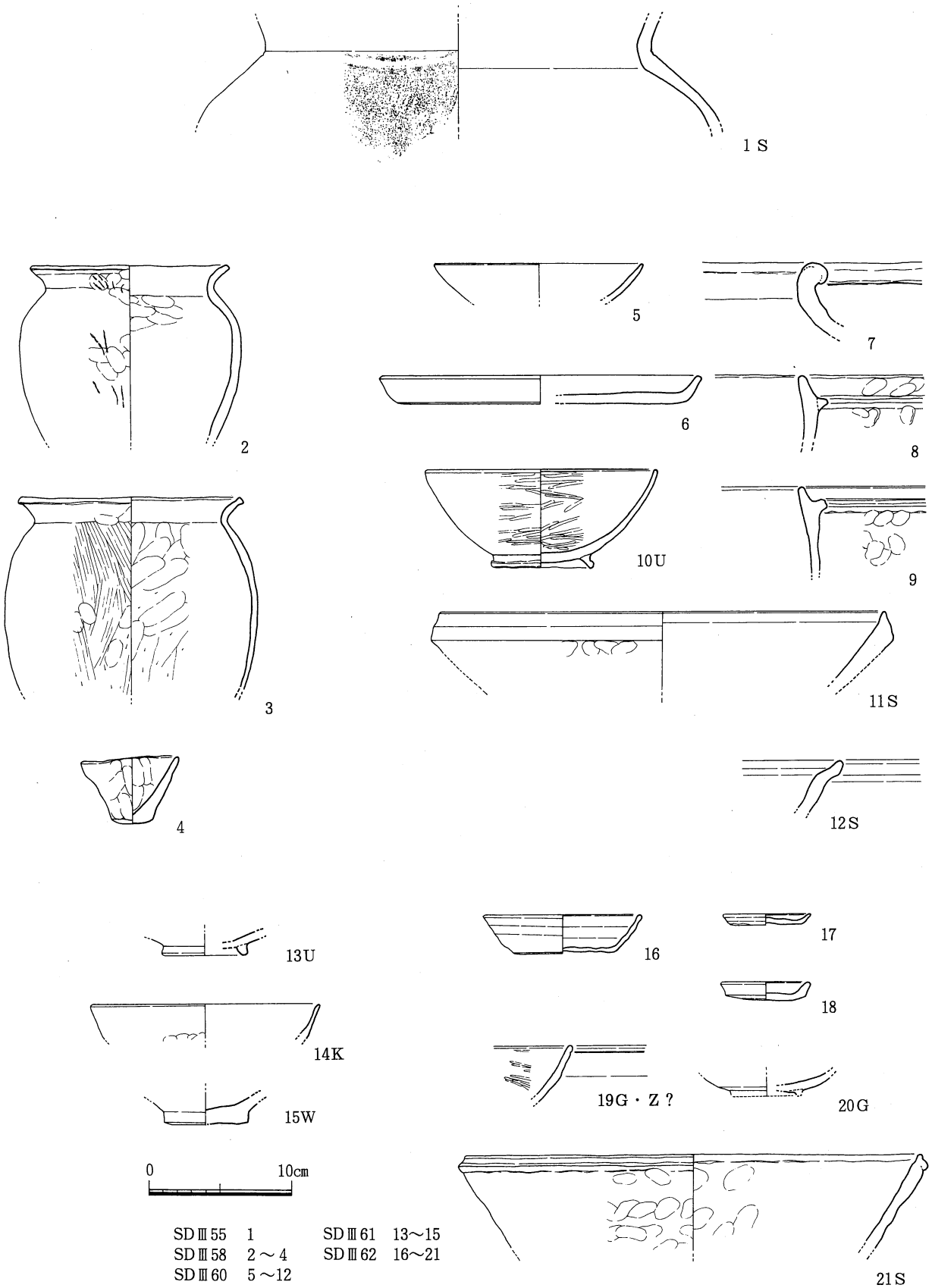
第477図　Ⅲ期溝 出土土器12



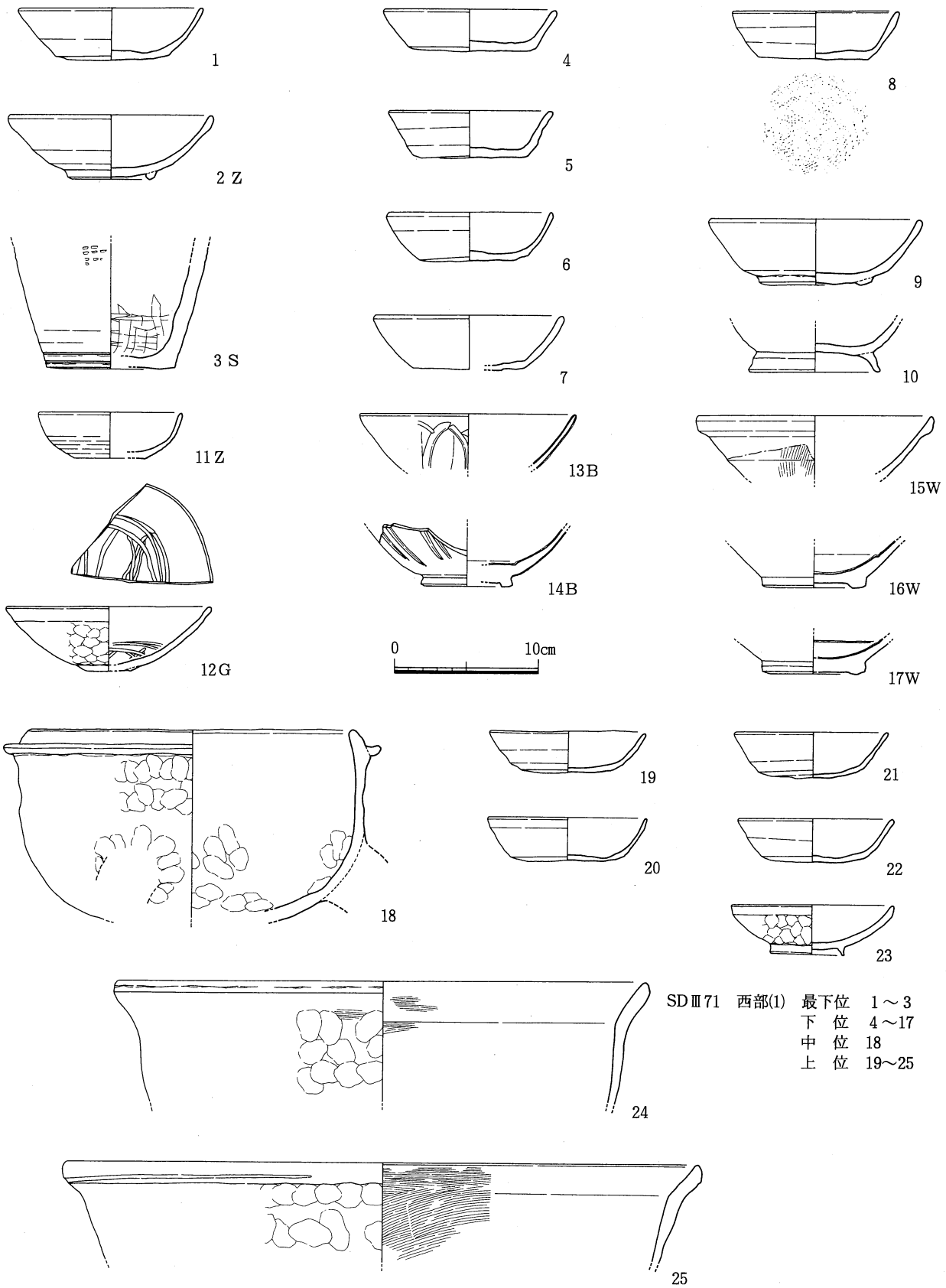
第478図　Ⅲ期溝 出土土器13



第479図　Ⅲ期溝 出土土器14

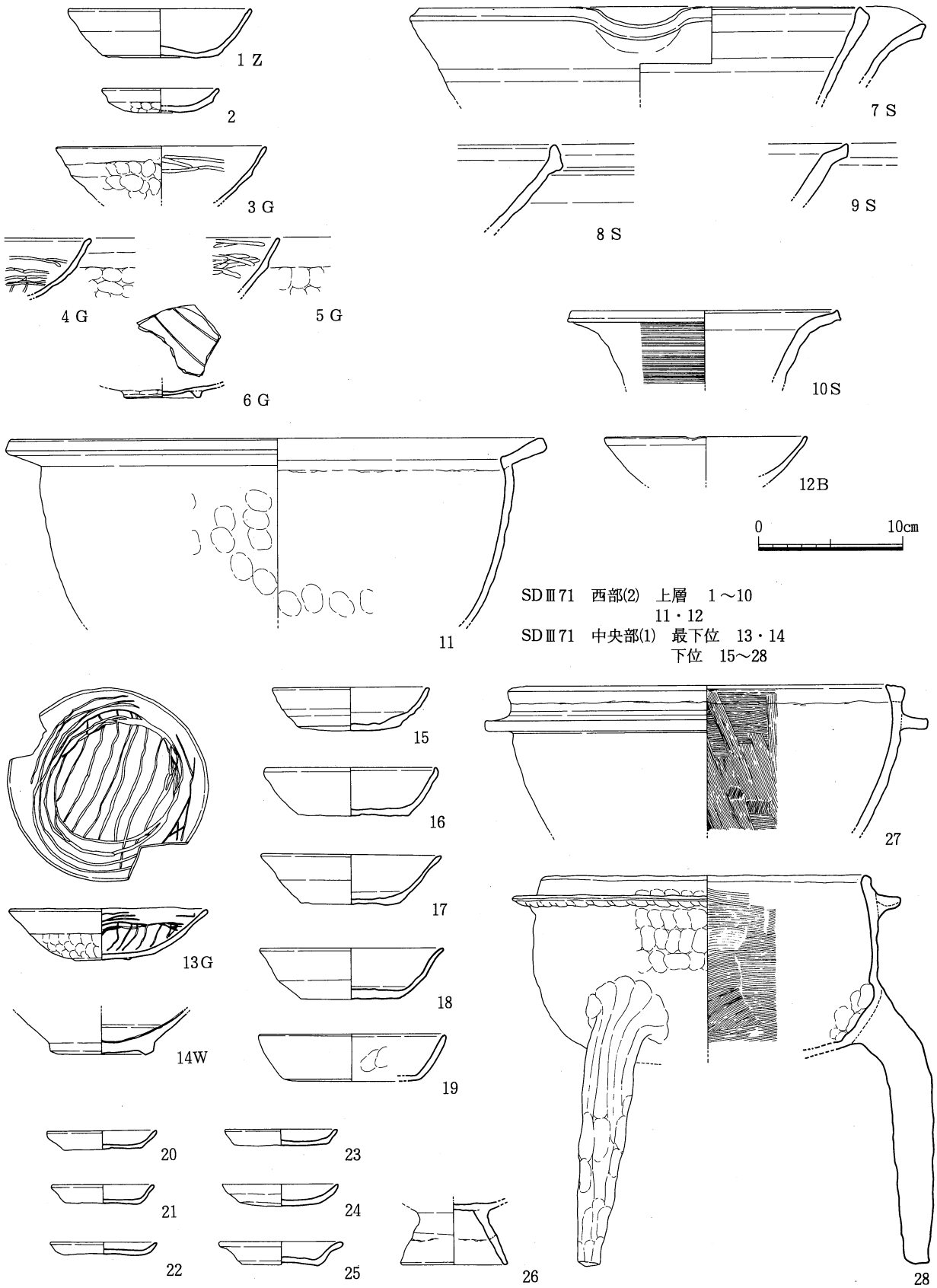


第480図　Ⅲ期溝 出土土器15

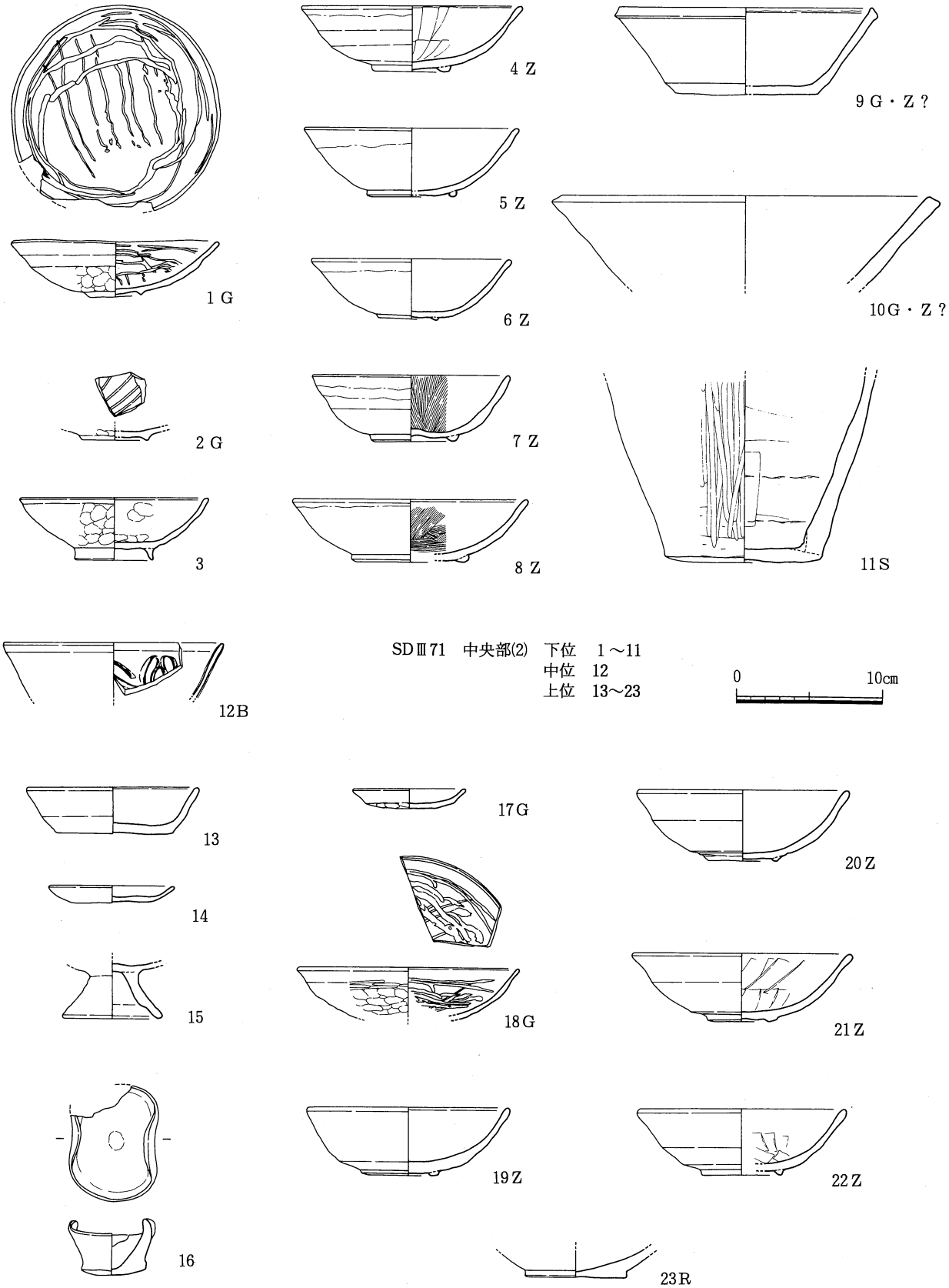


SDⅢ71　西部(1)　最下位　1～3
下　位　4～17
中　位　18
上　位　19～25

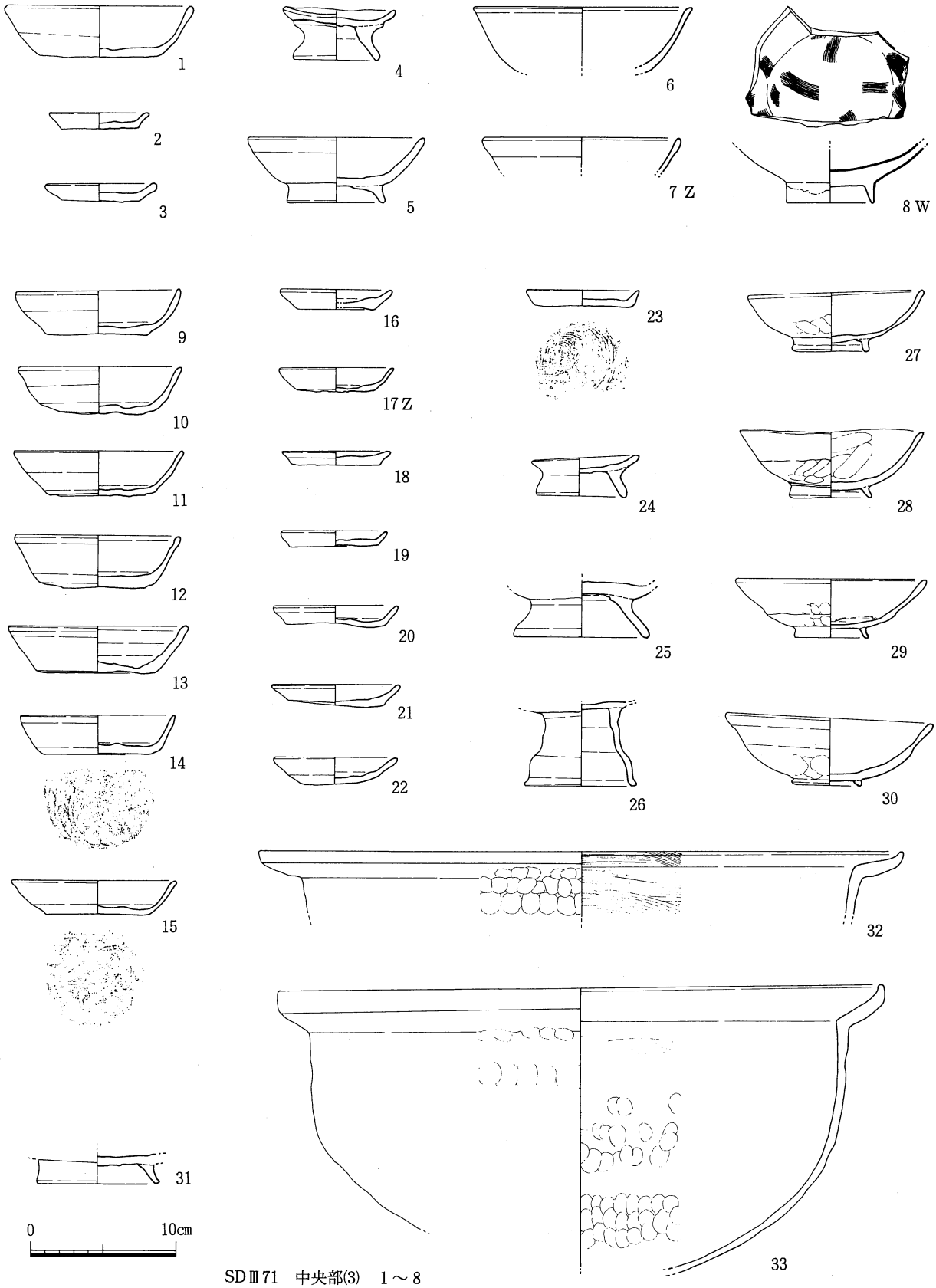
第481図　Ⅲ期溝 出土土器16



第482図　Ⅲ期溝 出土土器17

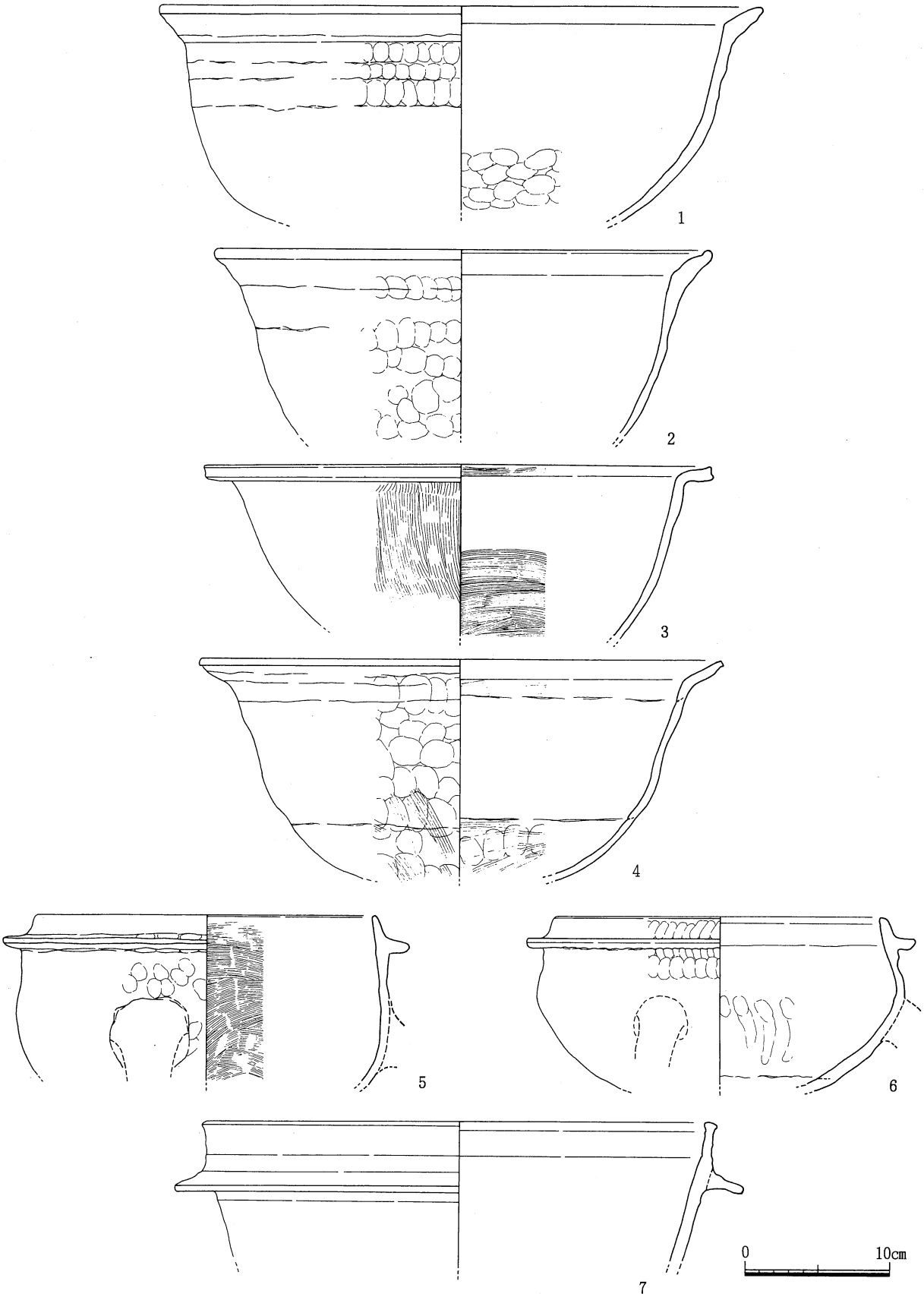


第483図　Ⅲ期溝 出土土器18



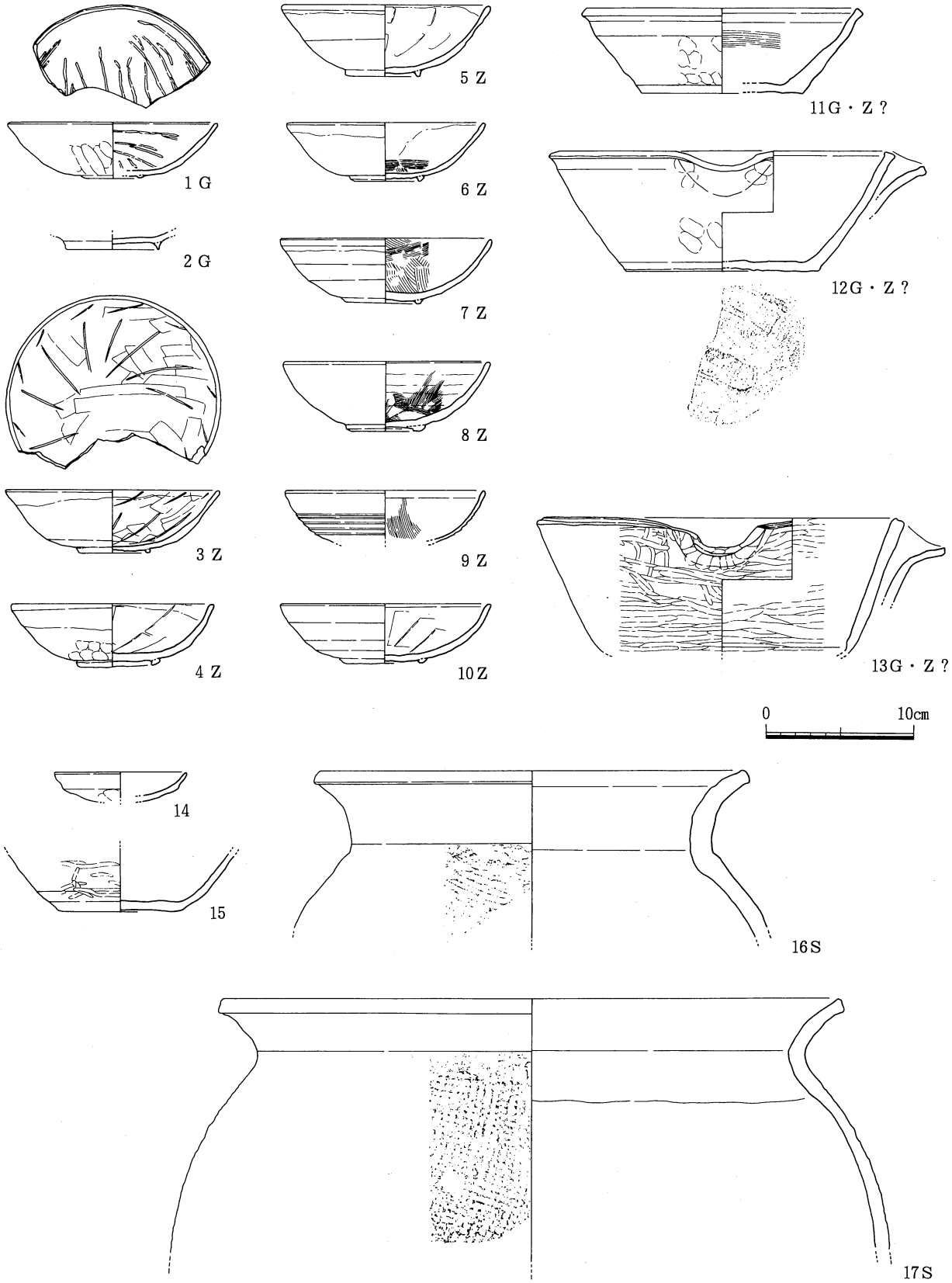
SDⅢ71　中央部(3)　1～8
　　東　部(1)　9～33

第484図　Ⅲ期溝 出土土器19



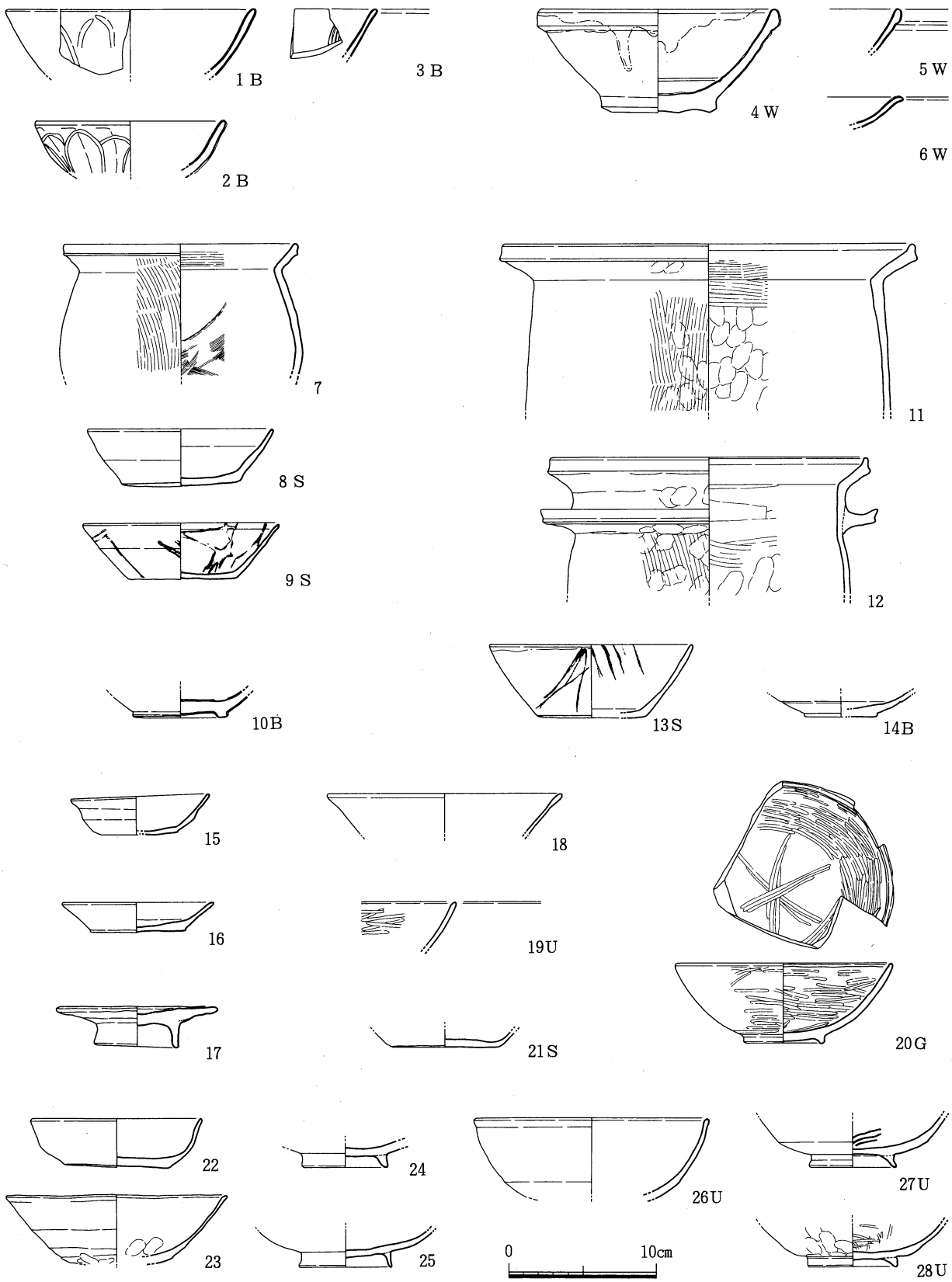
SDⅢ71　東部(2)　1～7

第485図　Ⅲ期溝 出土土器20



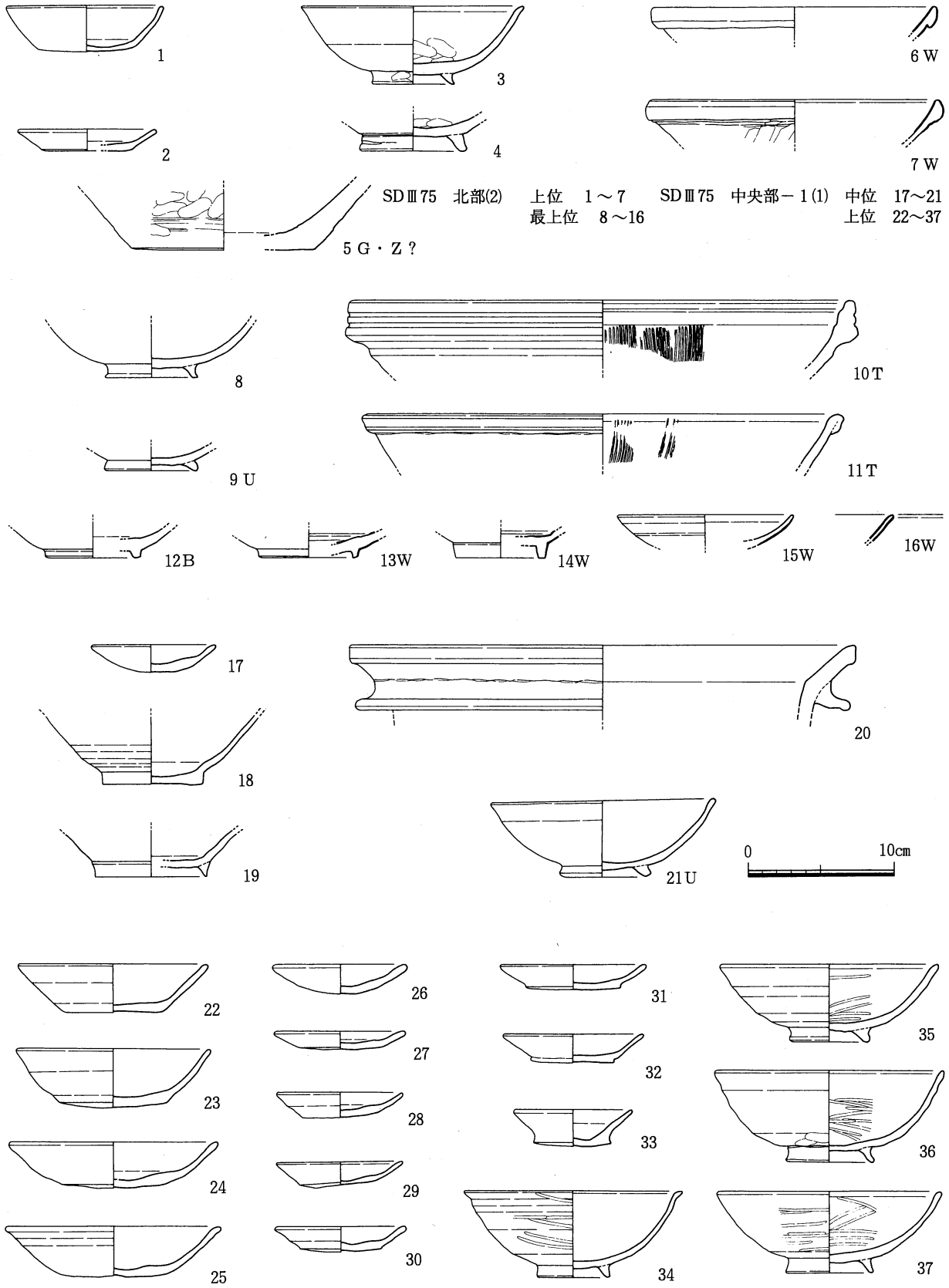
SDⅢ71　東部(3)　1～17

第486図　Ⅲ期溝 出土土器21

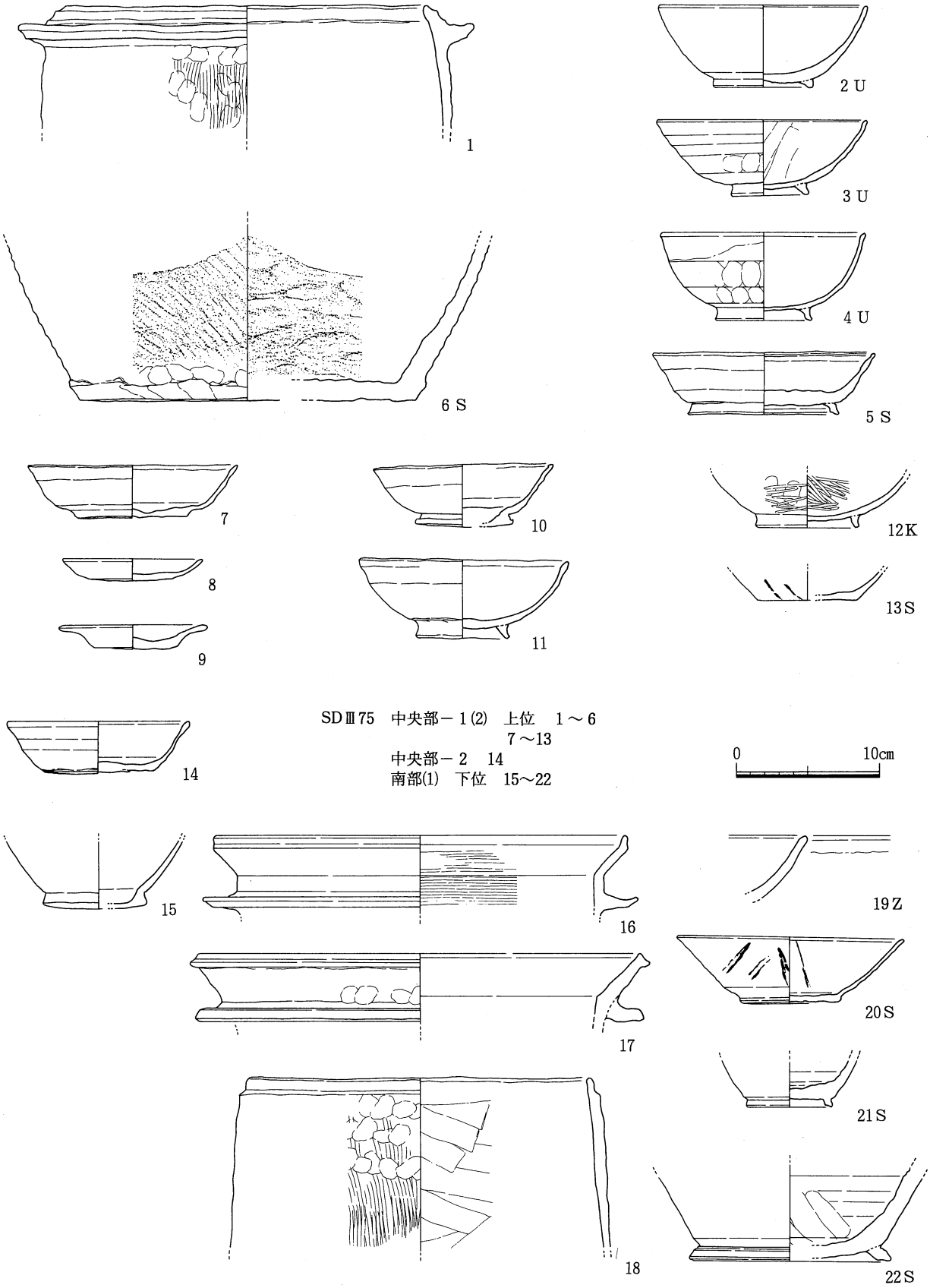


SDⅢ71　東部(4)　1～6　　SDⅢ73　10　　SDⅢ75　北部(1)　下位　15～21
SDⅢ72　7～9　　SDⅢ71～74　11～14　　中位　22～28

第487図　Ⅲ期溝 出土土器22

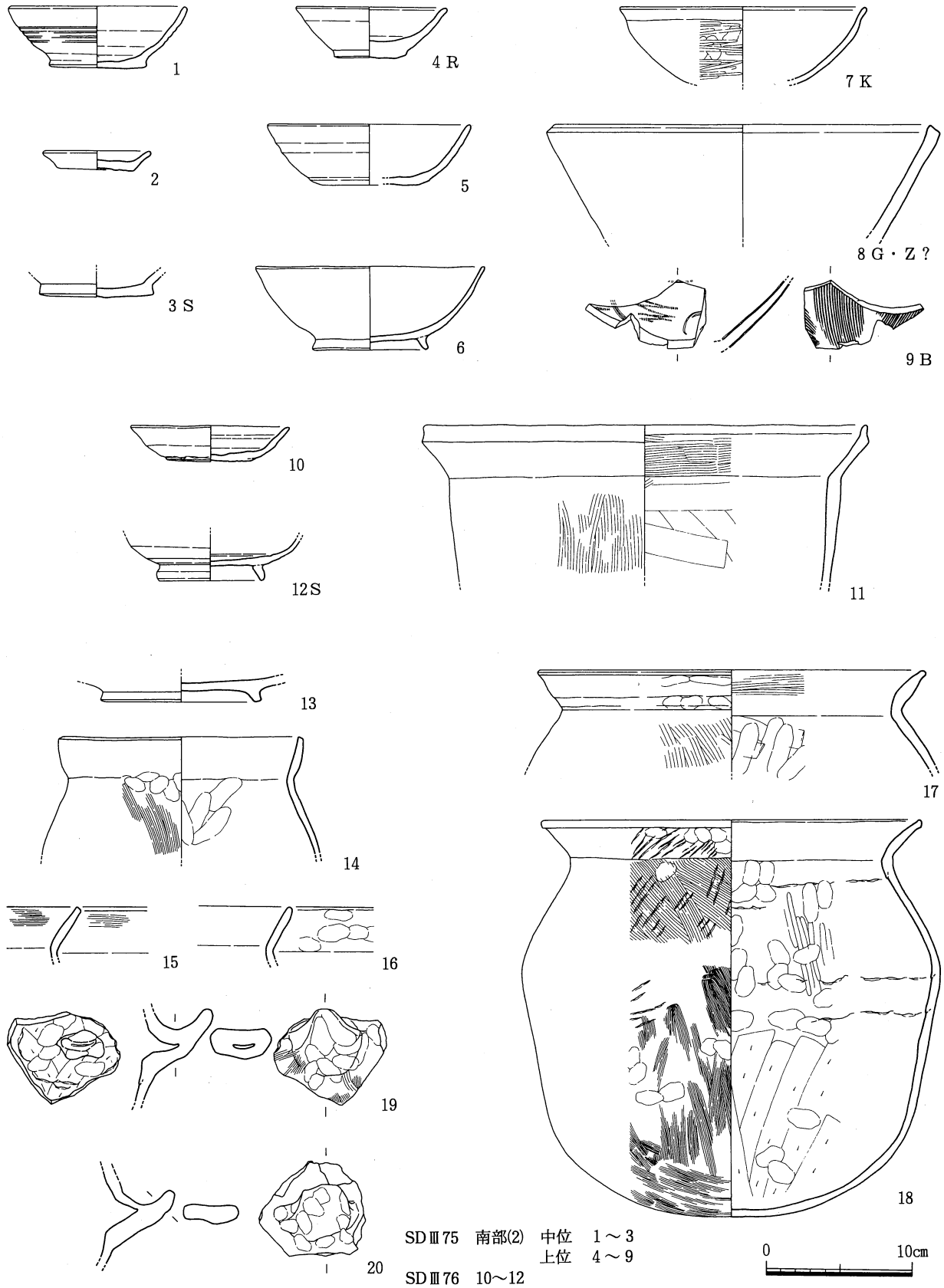


第488図　Ⅲ期溝 出土土器23



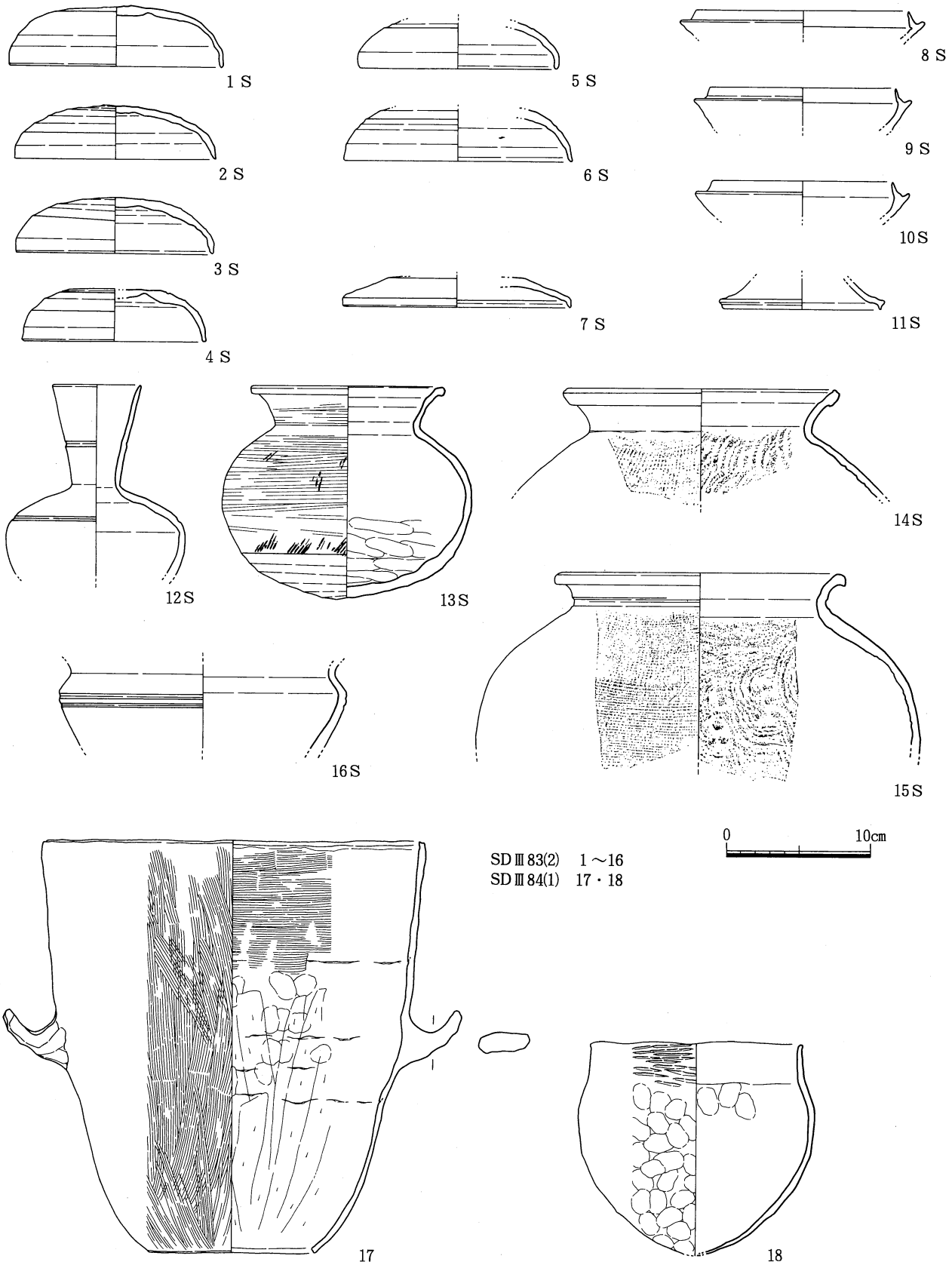
SDⅢ75　中央部－1(2)　上位　1～6
7～13
中央部－2　14
南部(1)　下位　15～22

第489図　Ⅲ期溝 出土土器24

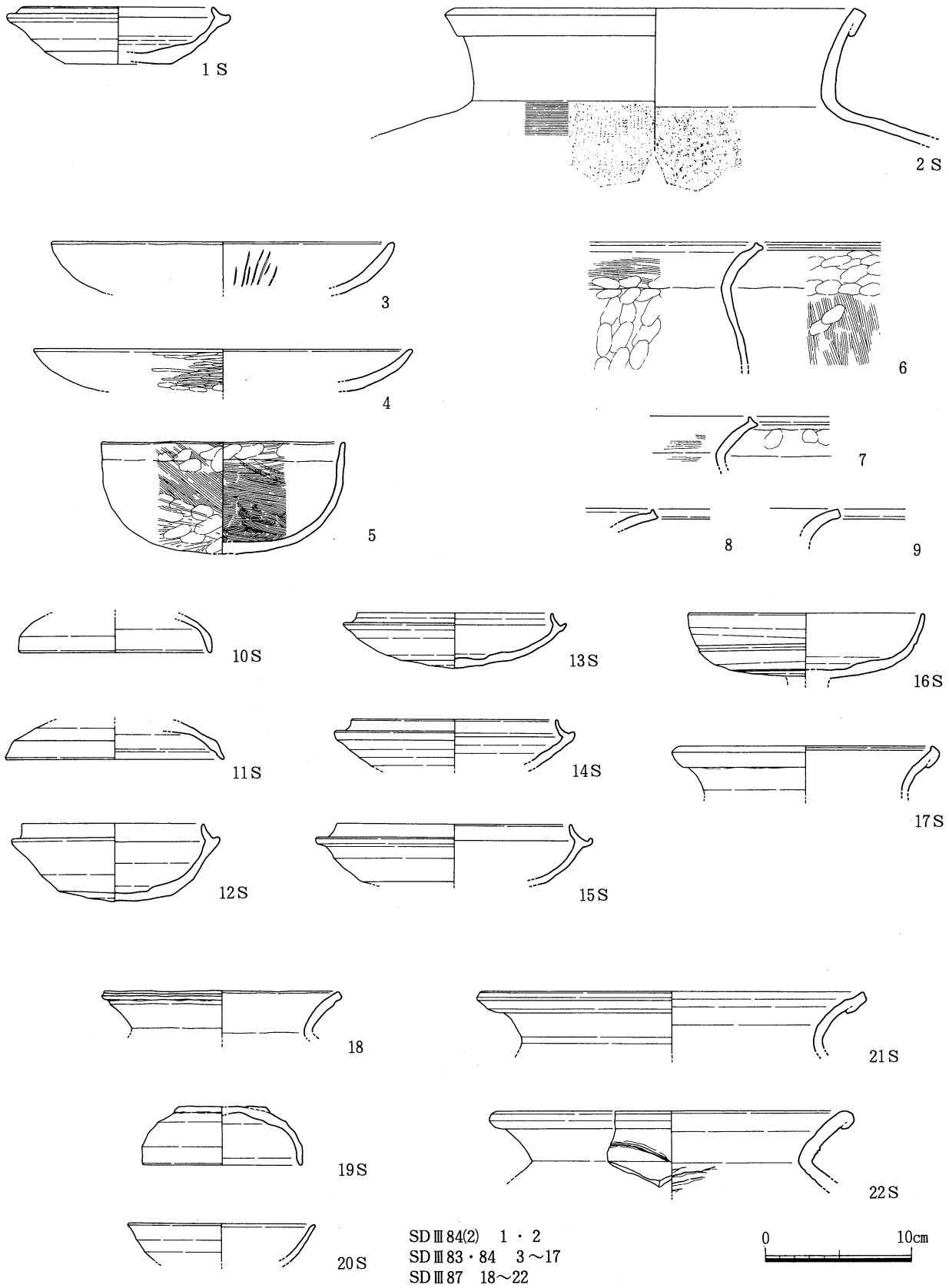


SDⅢ75　南部(2)　中位　1～3
　　上位　4～9
SDⅢ76　10～12
SDⅢ83(1)　13～20

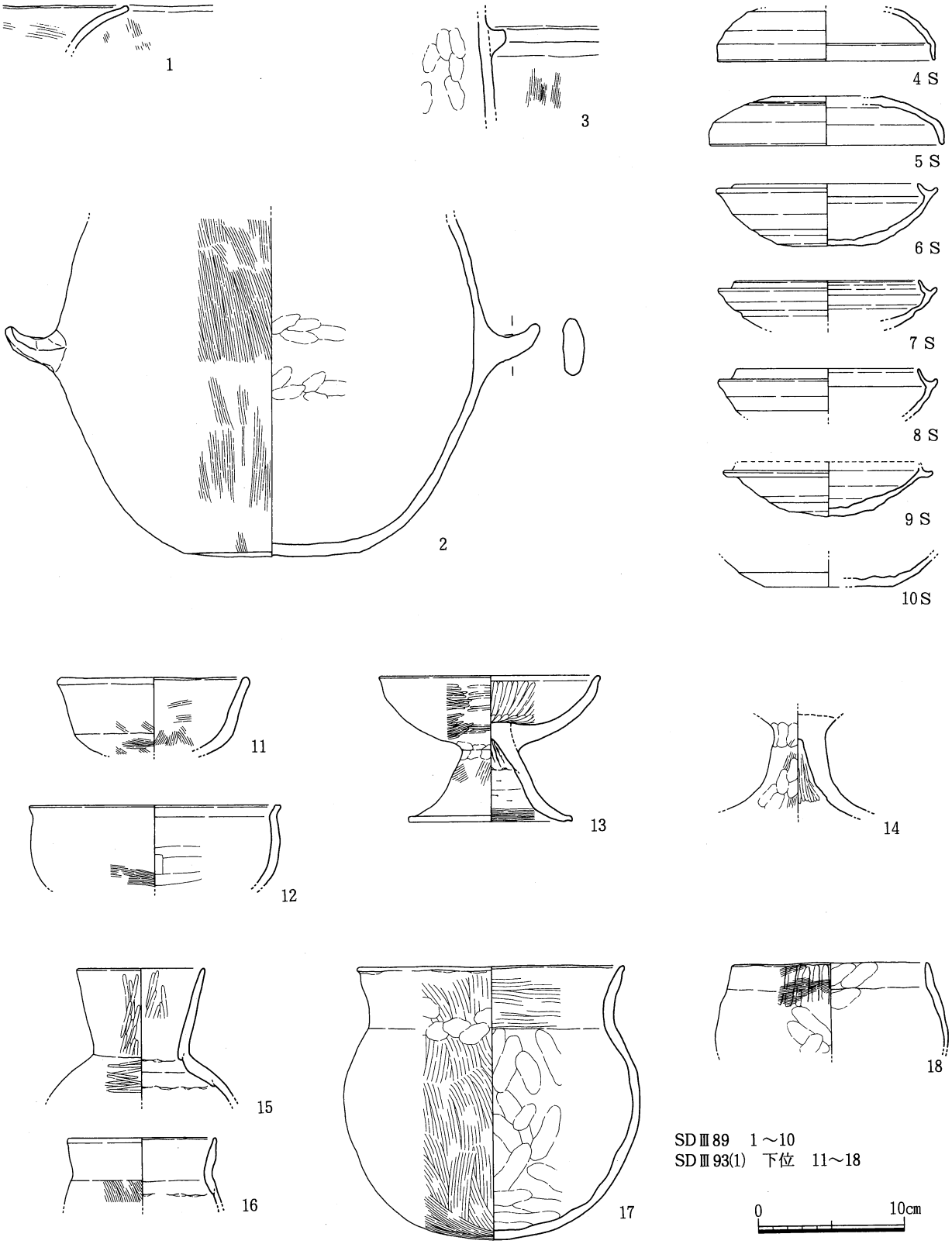
第490図　Ⅲ期溝 出土土器25



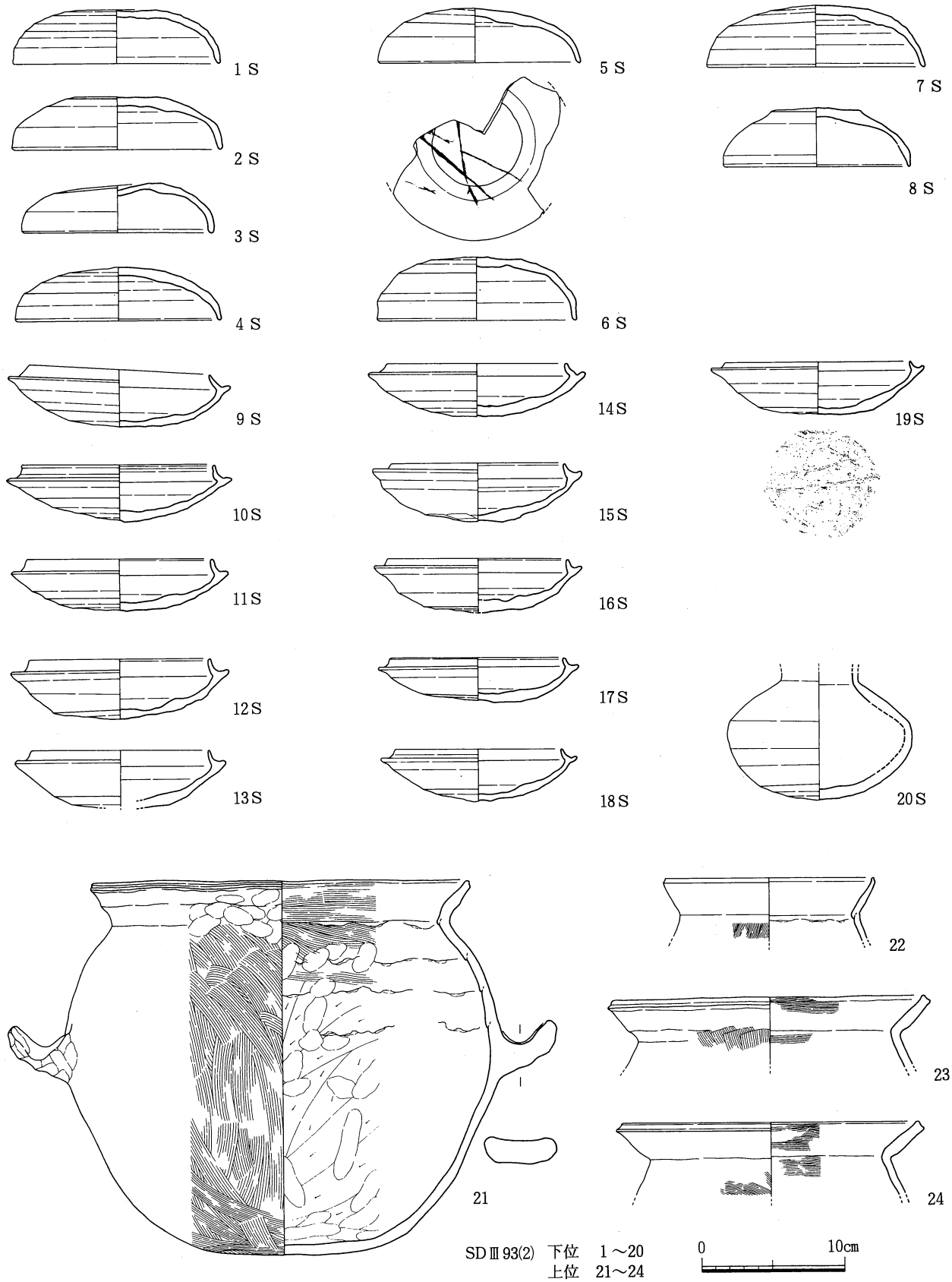
第491図　Ⅲ期溝 出土土器26



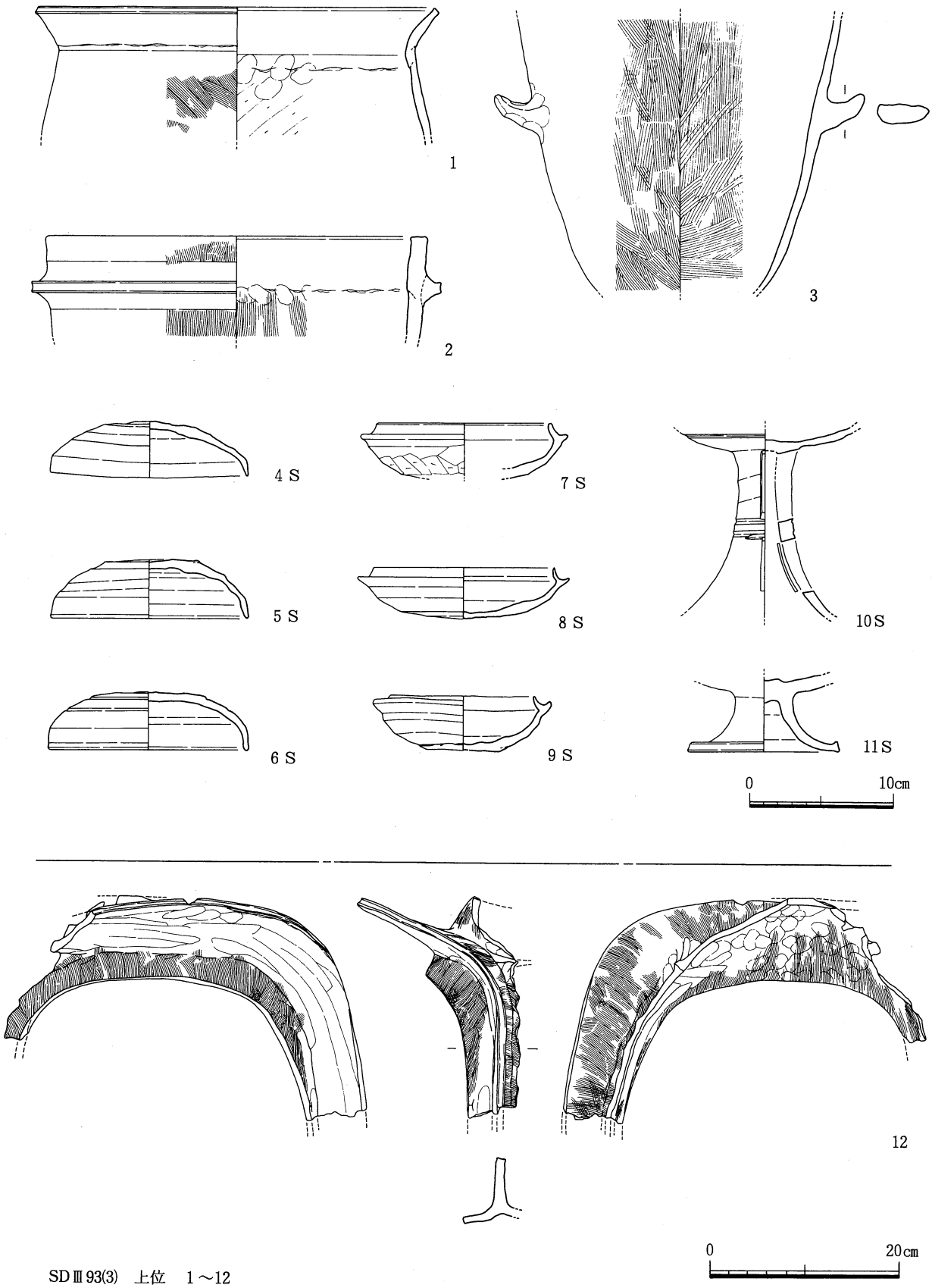
第492図　Ⅲ期溝 出土土器27



第493図　Ⅲ期溝 出土土器28

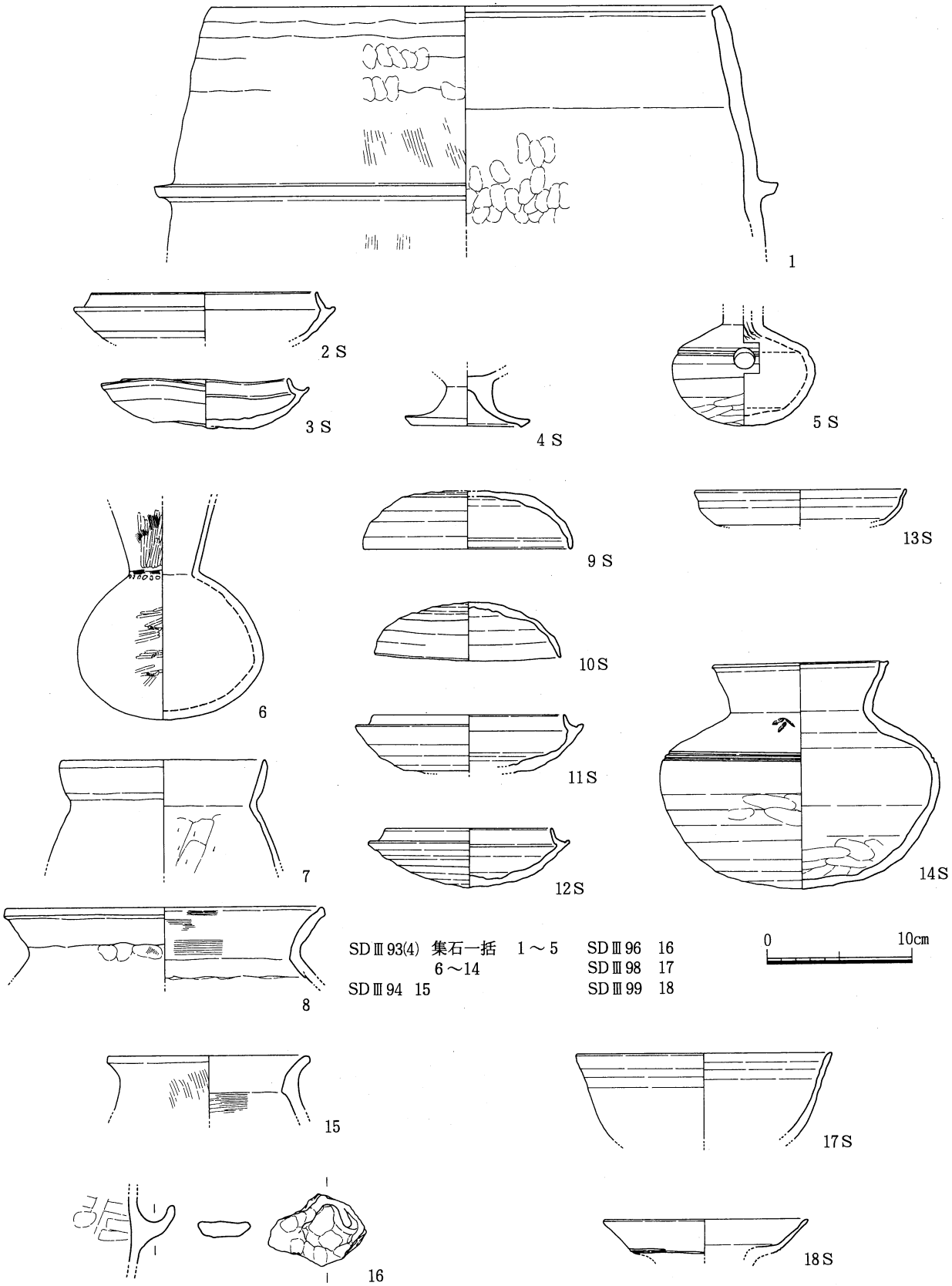


第494図 Ⅲ期溝 出土土器29

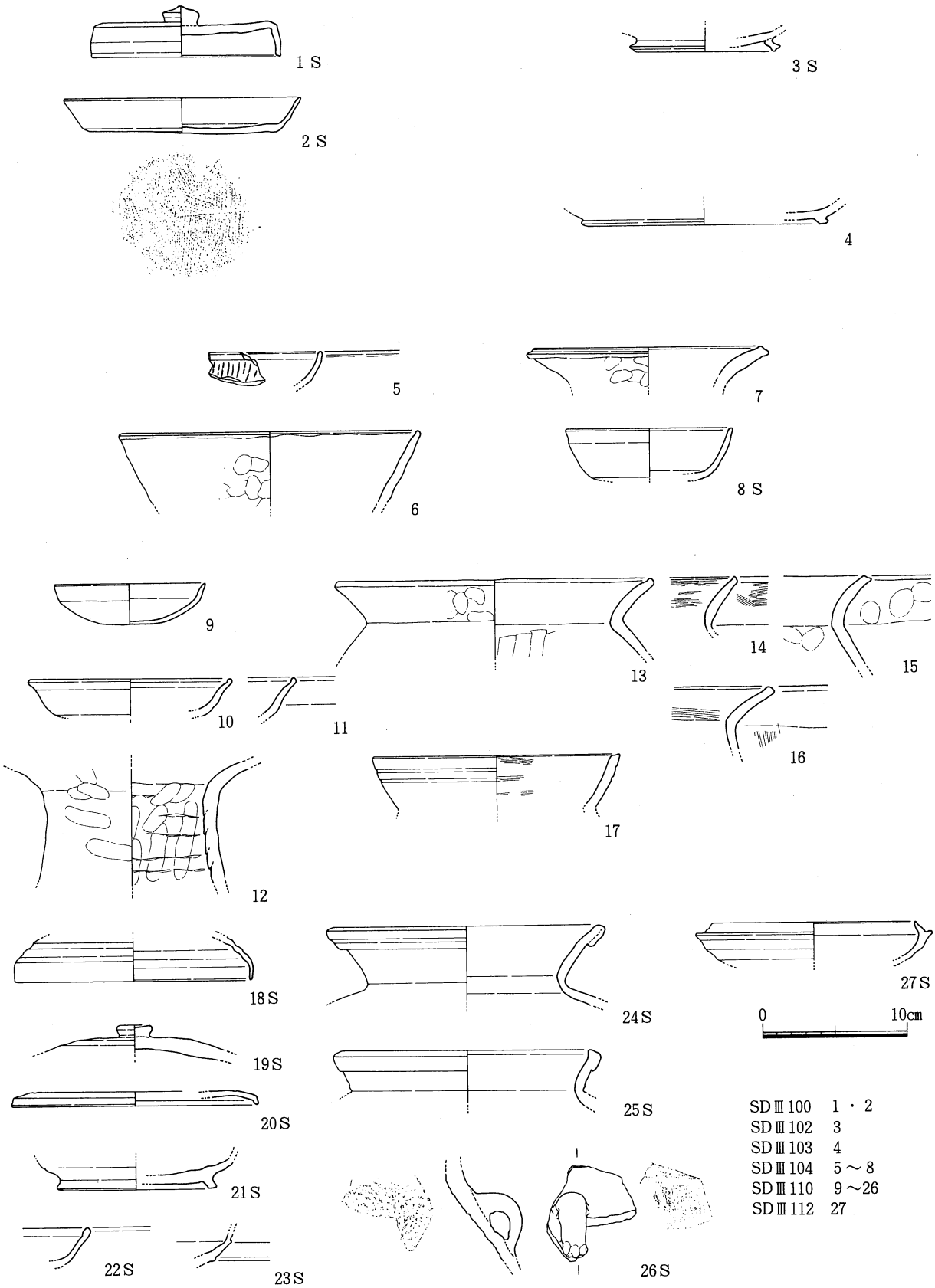


SDⅢ93(3)　上位　1～12

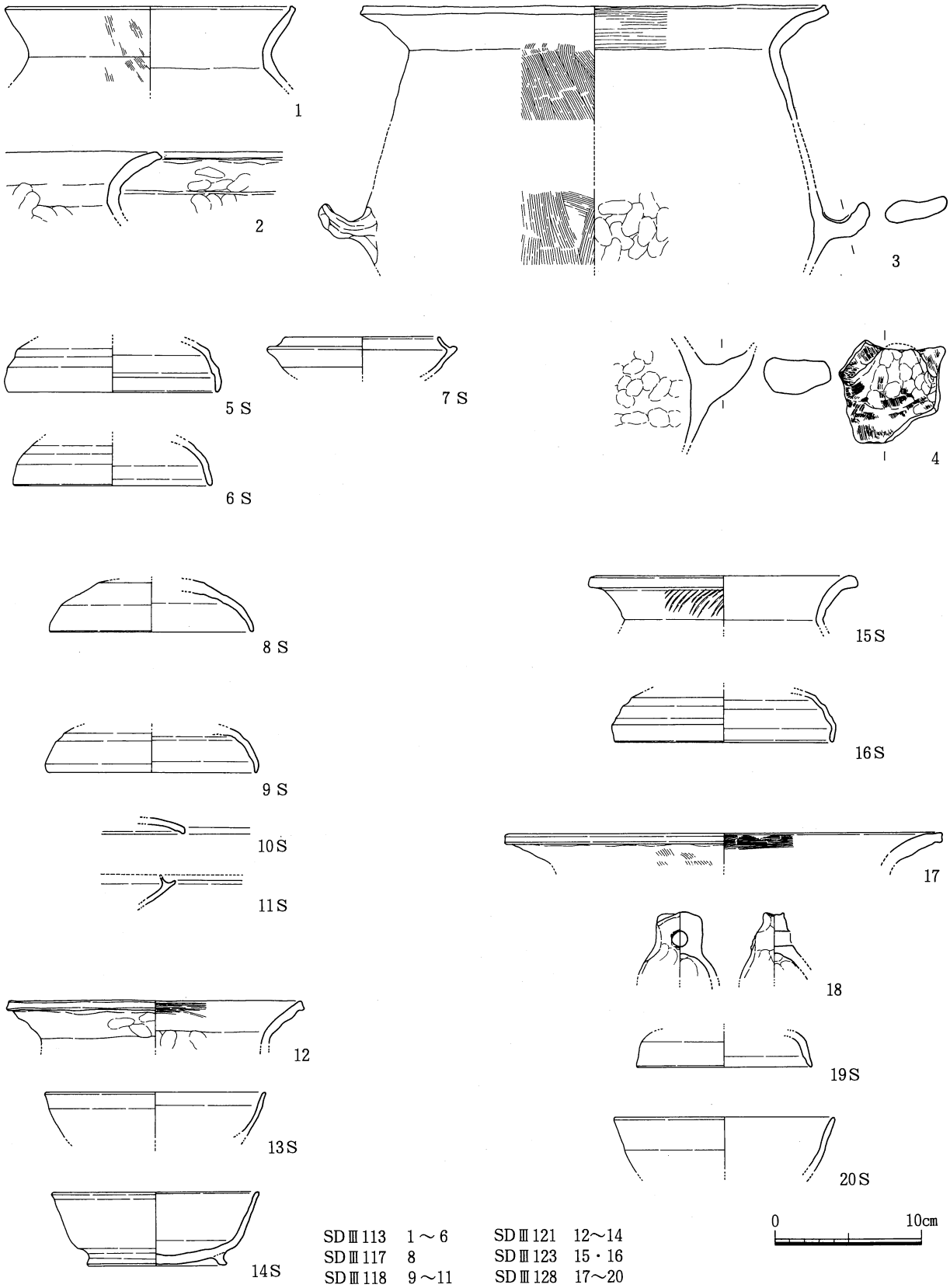
第495図　Ⅲ期溝 出土土器30



第496図 Ⅲ期溝 出土土器31

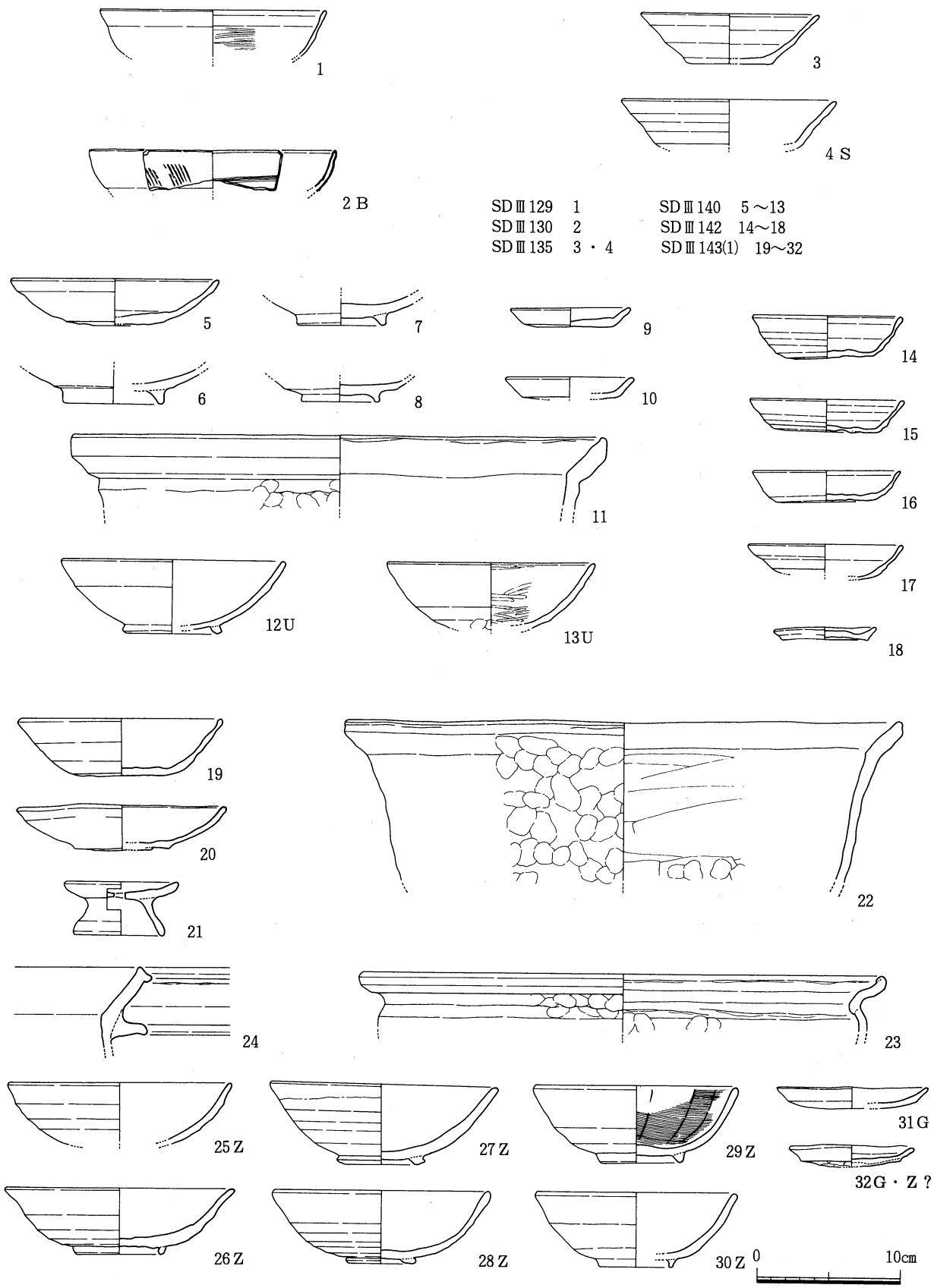


第497図　Ⅲ期溝 出土土器32

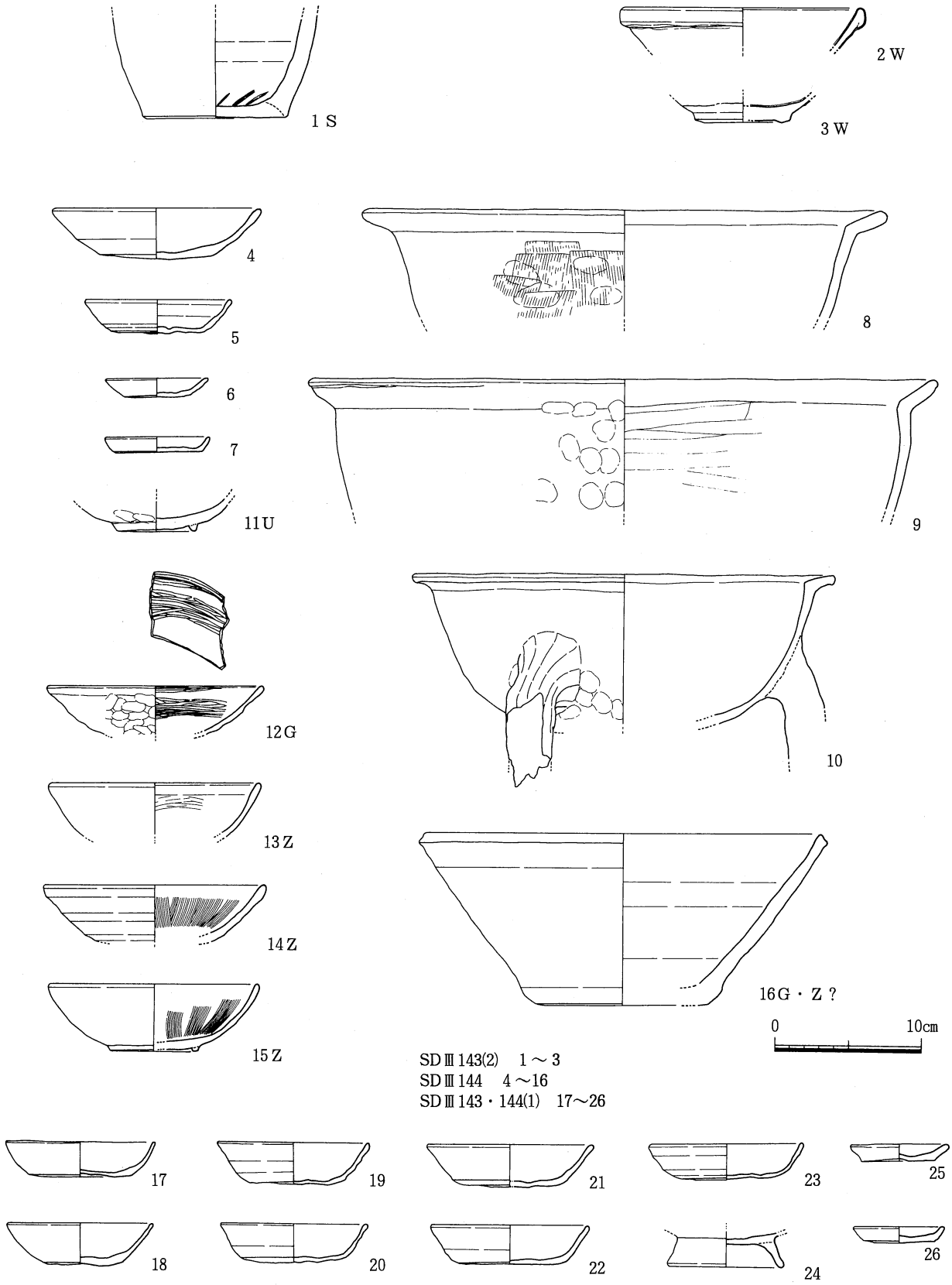


SDⅢ113　1～6　　SDⅢ121　12～14
SDⅢ117　8　　SDⅢ123　15・16
SDⅢ118　9～11　　SDⅢ128　17～20

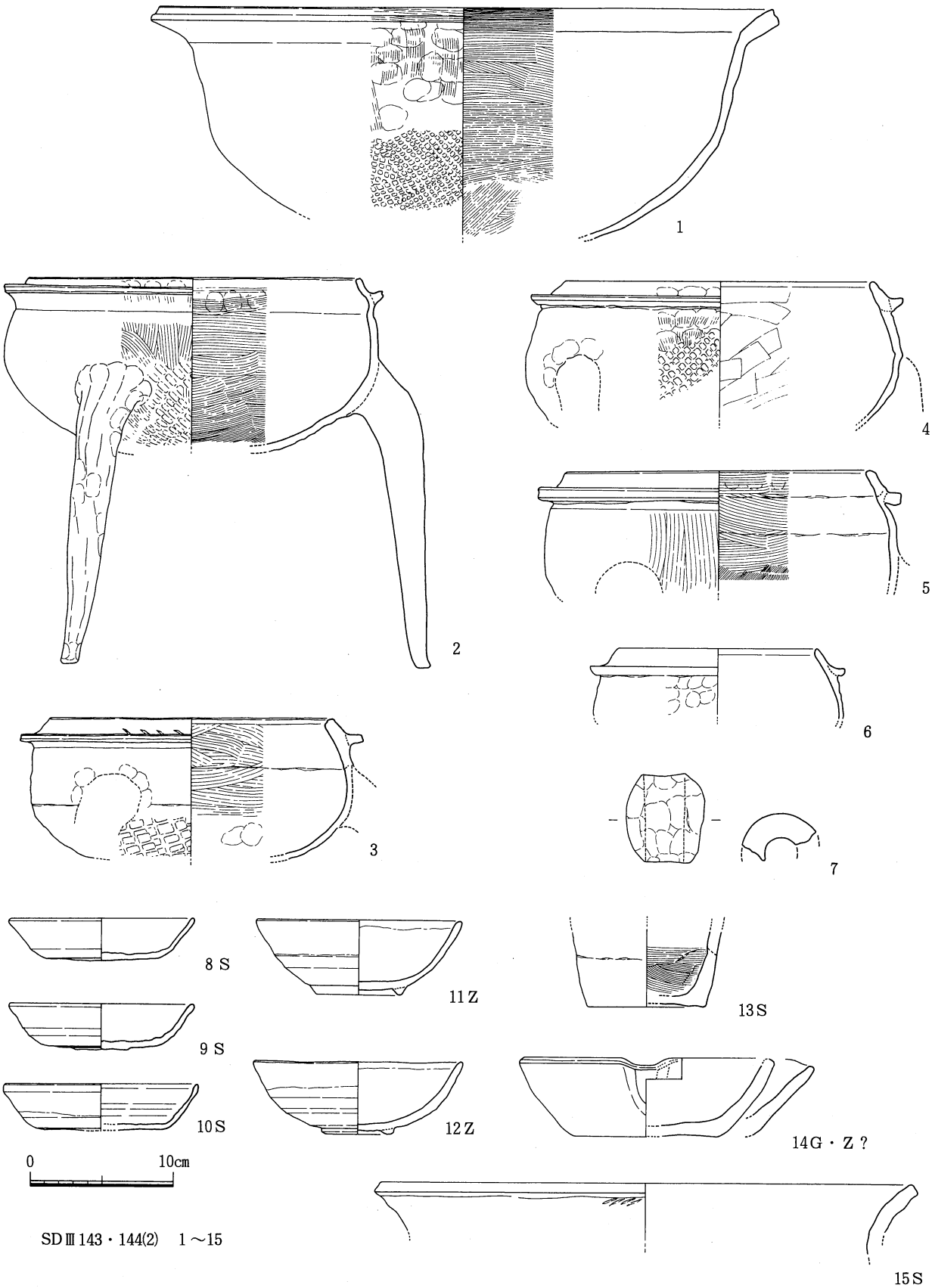
第498図　Ⅲ期溝 出土土器33



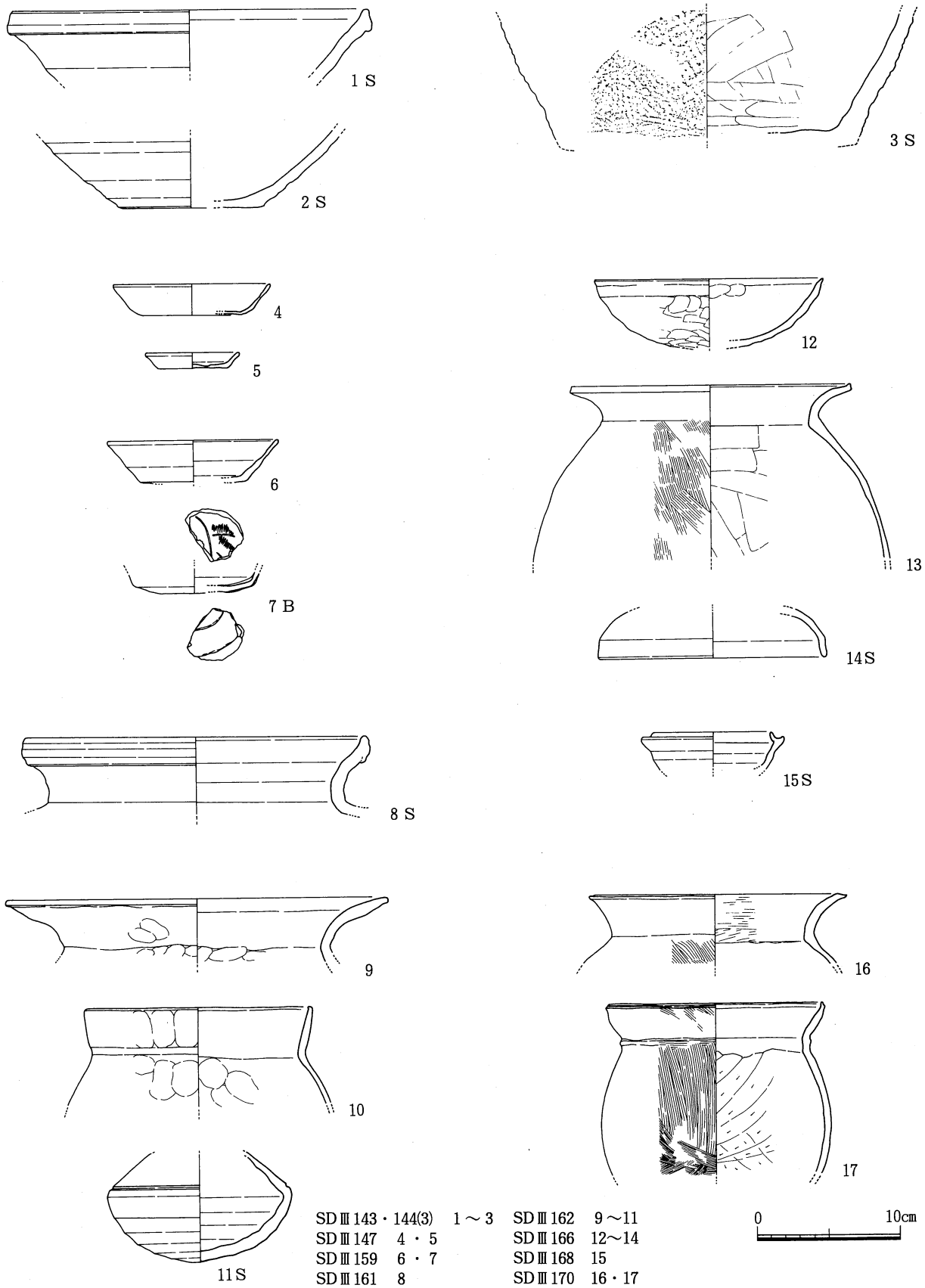
第499図　Ⅲ期溝 出土土器34



第500図　Ⅲ期溝 出土土器35

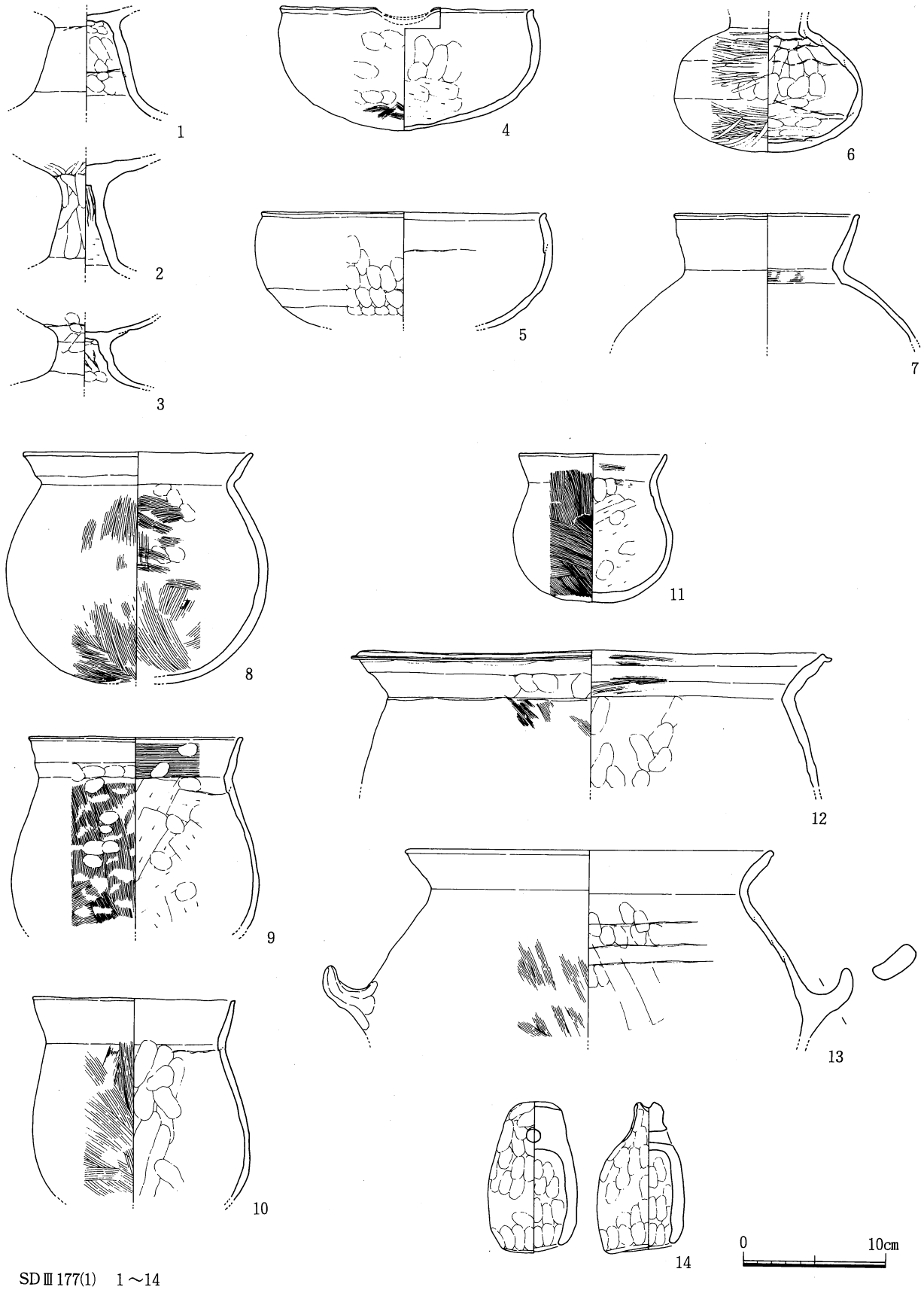


第501図　Ⅲ期溝 出土土器36



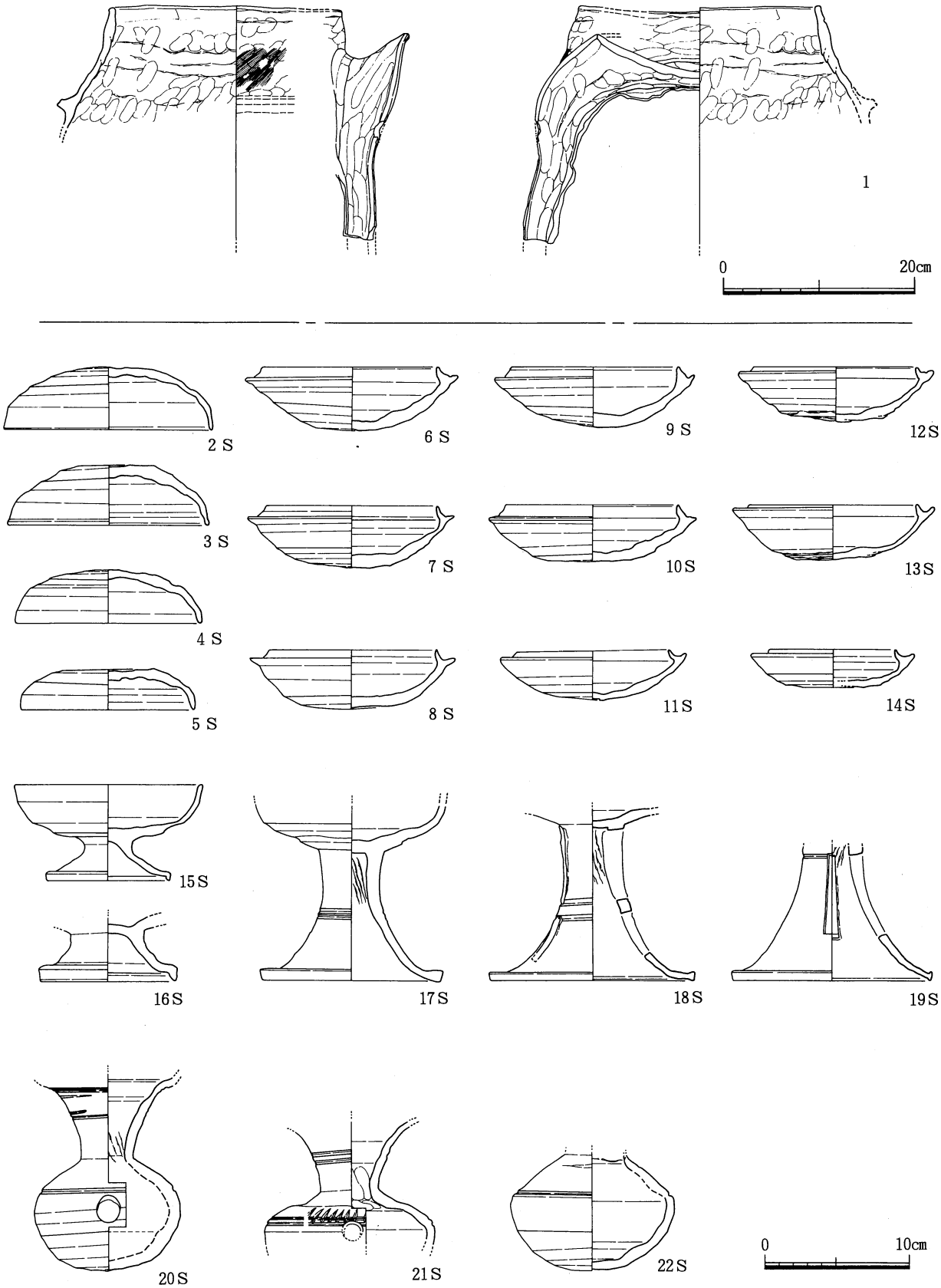
SDⅢ143・144(3)　1～3　SDⅢ162　9～11
SDⅢ147　4・5　SDⅢ166　12～14
SDⅢ159　6・7　SDⅢ168　15
SDⅢ161　8　SDⅢ170　16・17

第502図　Ⅲ期溝 出土土器37



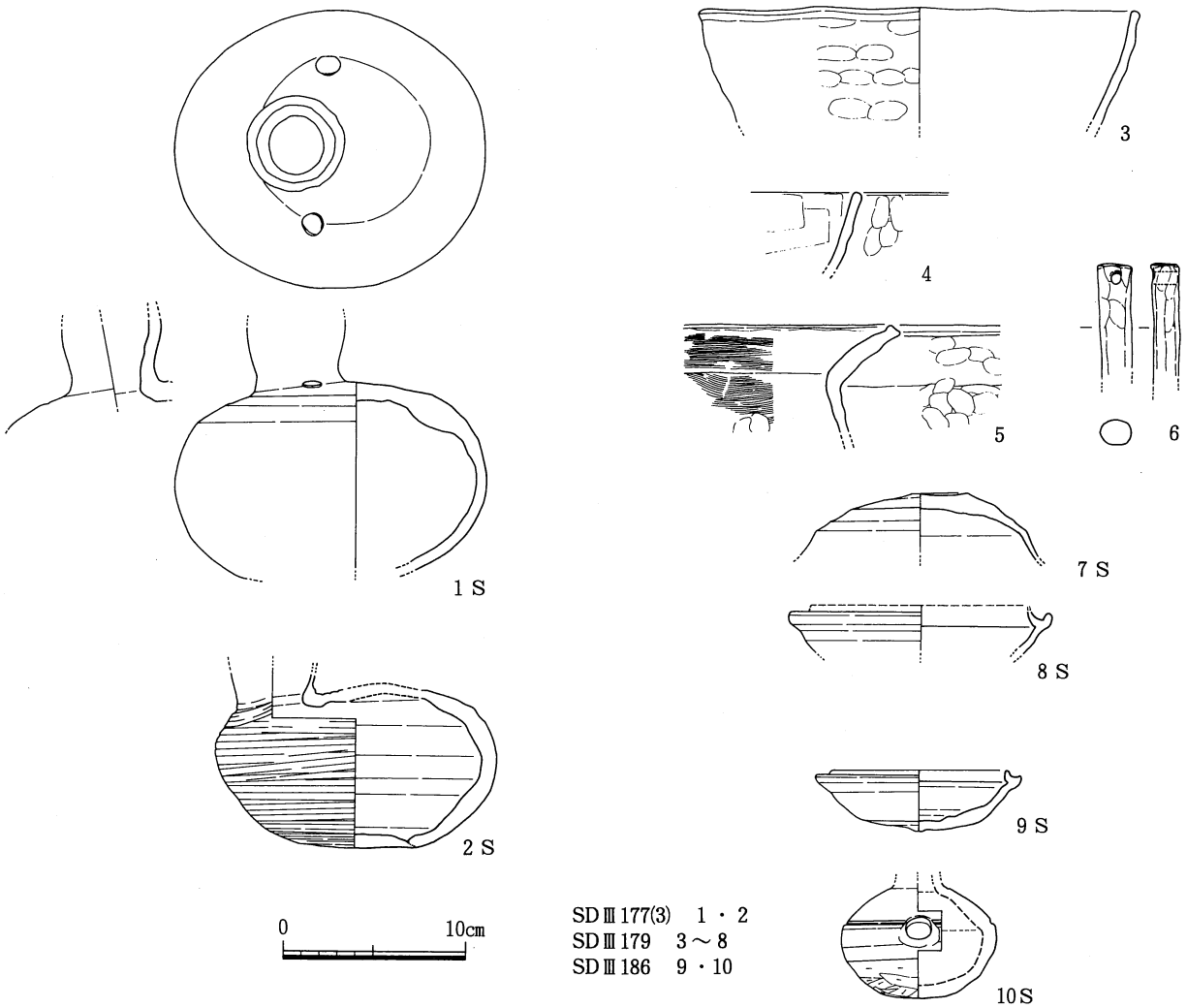
SDⅢ177(1)　1～14

第503図　Ⅲ期溝 出土土器38



SDⅢ177(2)　1～22

第504図　Ⅲ期溝 出土土器39



第505図　Ⅲ期溝 出土土器40

第５節　第Ⅳ期　室町時代

1.はじめに

第Ⅳ期の遺構は第１・２・４微高地上に所在するが，第Ⅲ期の集落に比べ遺構・遺物量はかなり少なくなり，その中心地は第１微高地上に移る。

当期に最低限定できる主要な遺構を微高地単位で集計すれば，第１微高地－掘立柱建物８・井戸２・土坑16・溝10・不定形遺構１，第２微高地－溝１，第４微高地－溝２・不明遺構４等が確認された。第１微高地を除く周辺域は，遺構数も少なく，かなり耕地化が進んでいたものと考えられる。

第１微高地上では規模からみて有力農民層のものと考えられる室町時代末の屋敷地を検出した。この屋敷地は，周囲を掘割りの溝で区画され，その画された空間の面積は最少で約2,055㎡　最大で2,299㎡を測る。敷地内からは，掘立柱建物４・井戸２・土坑８等が検出された。なお，この敷地内には，ピットが約2000あり，かなりの数の住居が複合していたものと推定できる。なお，この時期を最後に下川津遺跡のほぼ全面に耕地化が及ぶ。次に，最大資料化出来る遺構と遺物を順次紹介する。　（西村）

2.掘立柱建物

ＳＢⅣ04（第528図）

Ｇ21区で検出した。３間（5.9m）×２間（2.6m），棟方向Ｎ65°Ｅの掘立柱建物である。東列北２穴を欠損する。柱間寸法の平均は桁行1.7～2.2m・梁間1.2～0.4mを測る。柱穴掘り方はほぼ円形を呈し径約0.4mと，柱間寸法の割には小振りである。深さは0.16mとなる。柱穴から羽釜脚部，備前焼甕体片などを出土した。

（第528図１）は土師質三足羽釜脚部片である。丁寧な指押さえで多角柱状を呈する。　（大久保）

ＳＢⅣ06（第507図　ＳＢ8617）

Ｉ19区で検出した掘立柱建物である。ＳＤⅢ33に切っている。４間（7.7m）×２間（4.2m），棟方向Ｎ65°Ｅを測る。柱間は桁行1.0～3.0m・梁間1.7～2.6mを測る。柱穴掘方は，円形を呈し，径約0.4m，深さ0.47mを測る。　（西村）

ＳＢⅣ07（第507・528図）

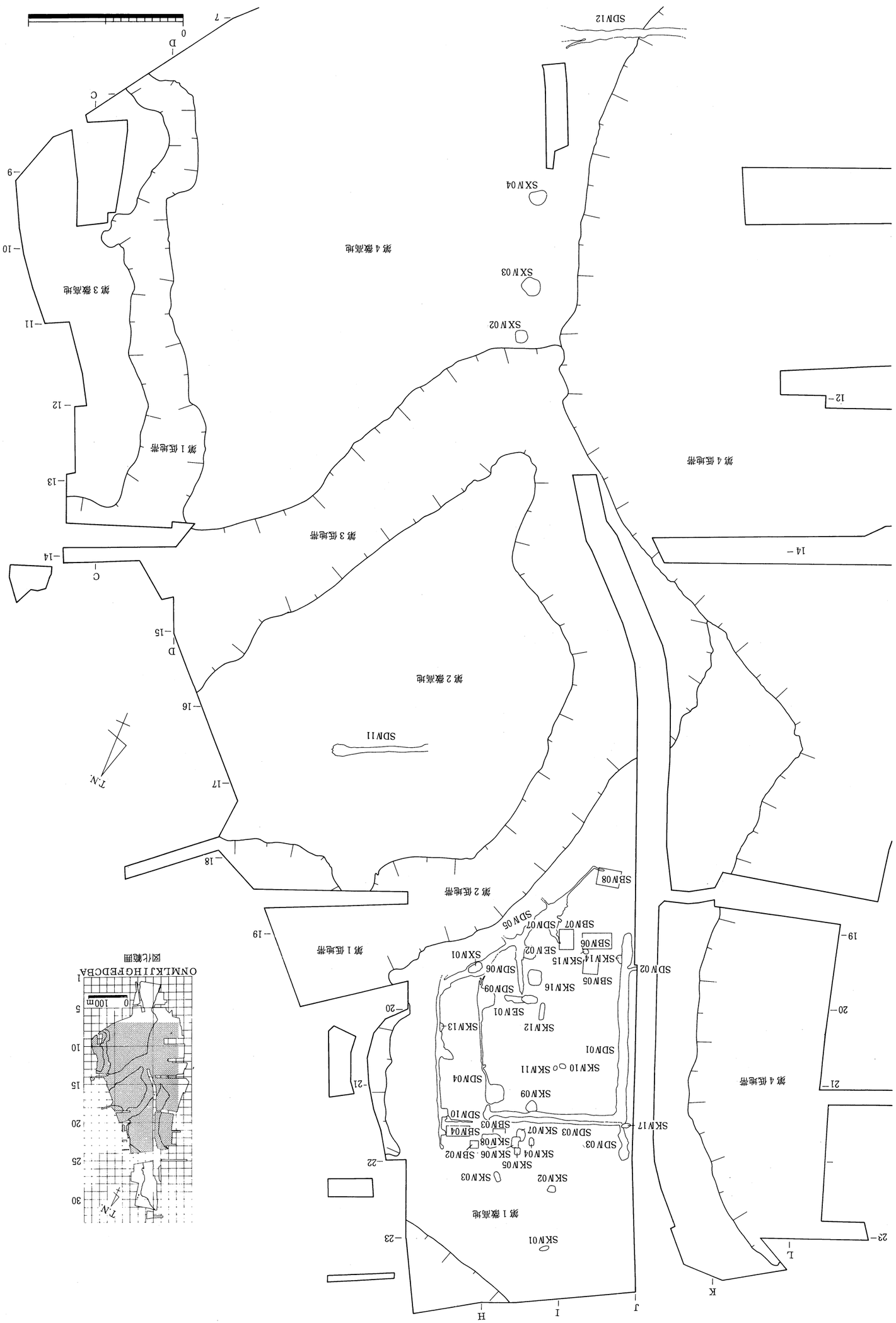
Ｈ・Ｉ19区でＳＢⅣ06の東側で検出した掘立柱建物である。２間（5.0m）×２間（4.0m），棟方向Ｎ25°Ｗを測る。柱間は，桁行2.4～2.6m・梁間1.9～2.1mを測る。柱穴掘方は，円形ないし不整円形を呈し，約0.3m，深さ0.43mを測る。

出土遺物中で図化出来るもの１点を抽出した。（第528図２）は土師器の小皿である。底部より丸味を持ち口縁端部に続く。端部は丸くし上げている。遺物より詳細な時期を判断することは出来ないが，この建物は概ね16世紀前後に属するものと考えられる。　（西村）

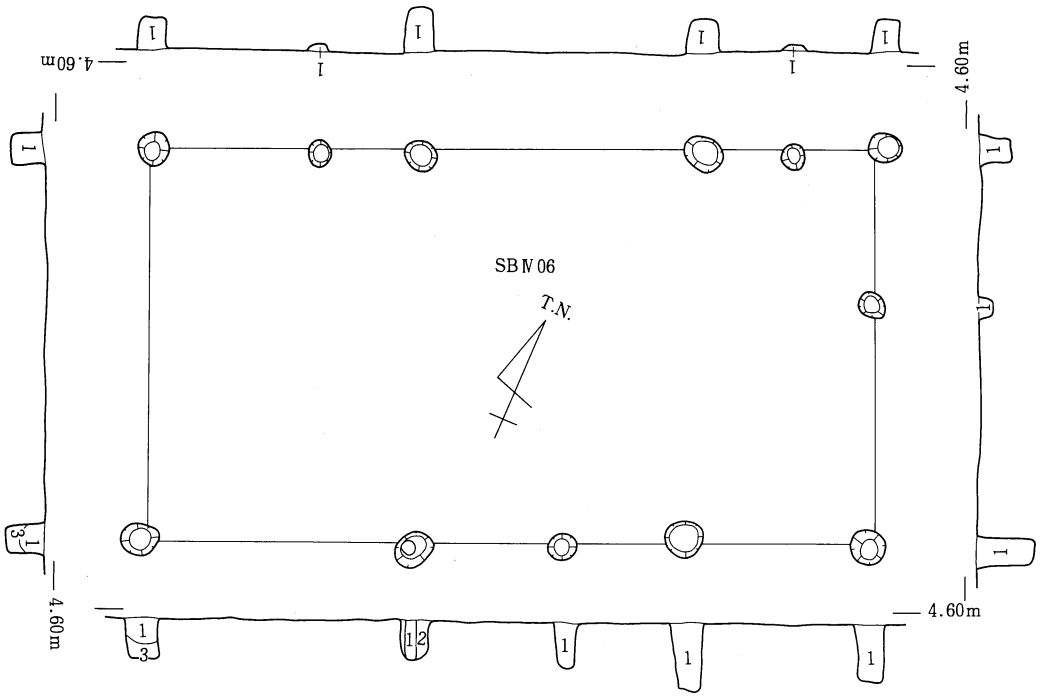
ＳＢⅣ08（第508･528図）

Ｉ19区で検出した掘立柱建物である。３間（6.1m）×２間（4.2m），棟方向Ｎ77°Ｅを測る。柱間は，桁行1.9～2.1m・梁間1.9～2.3mを測る。柱穴掘方は，円形を呈し，径約0.3m，深さ0.23mを測る。

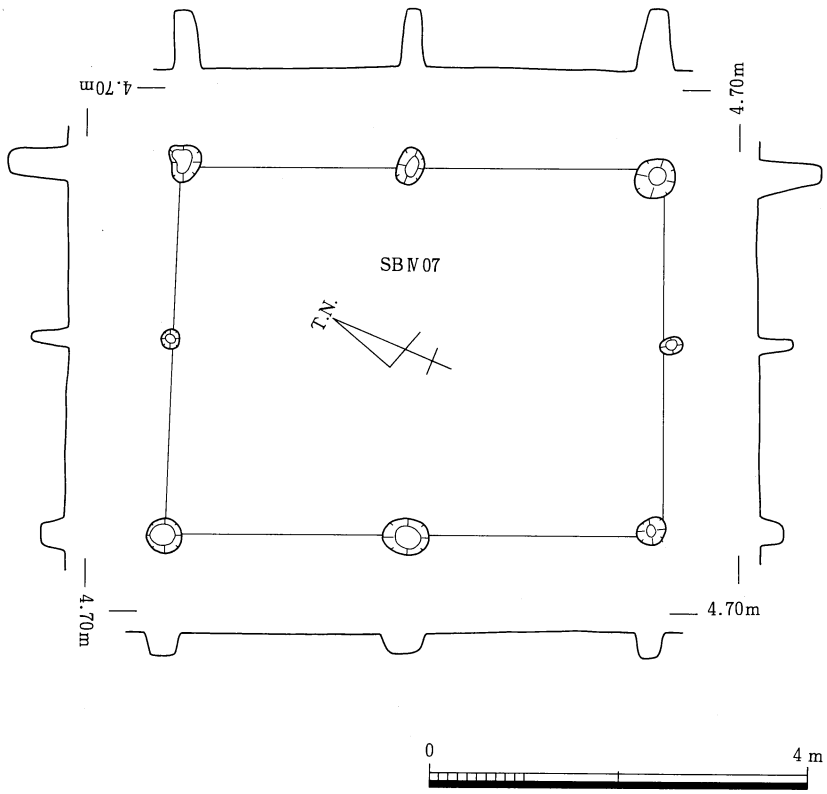
出土遺物中で図化出来るもの１点を抽出した。（第528図３）は底部を欠く土師器の椀である。体部は



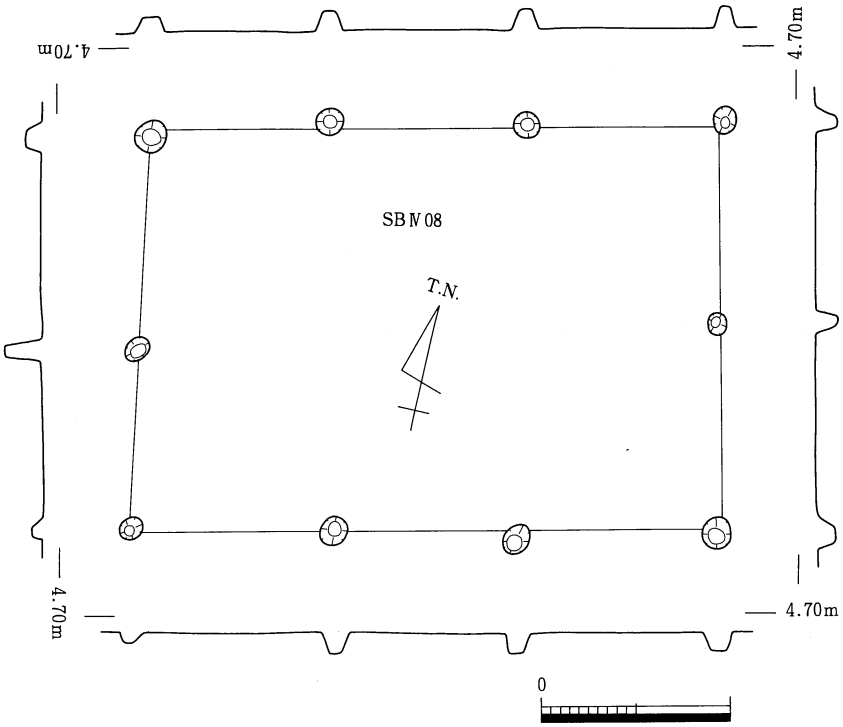
第506図　第Ⅳ期主要遺構 配置図



1. 暗灰褐色土　2. 暗灰黄色土　3. 暗灰黄褐色土



第507図　第Ⅳ期掘立柱建物 平・断面図（1）



第508図　第Ⅳ期掘立柱建物 平・断面図（2）

内湾し口縁端部に続く。端部は丸く仕上げる。遺物より詳細な時期を判断することは出来ないが，この建物は概ね16世紀前後に属するものと考えられる。（西村）

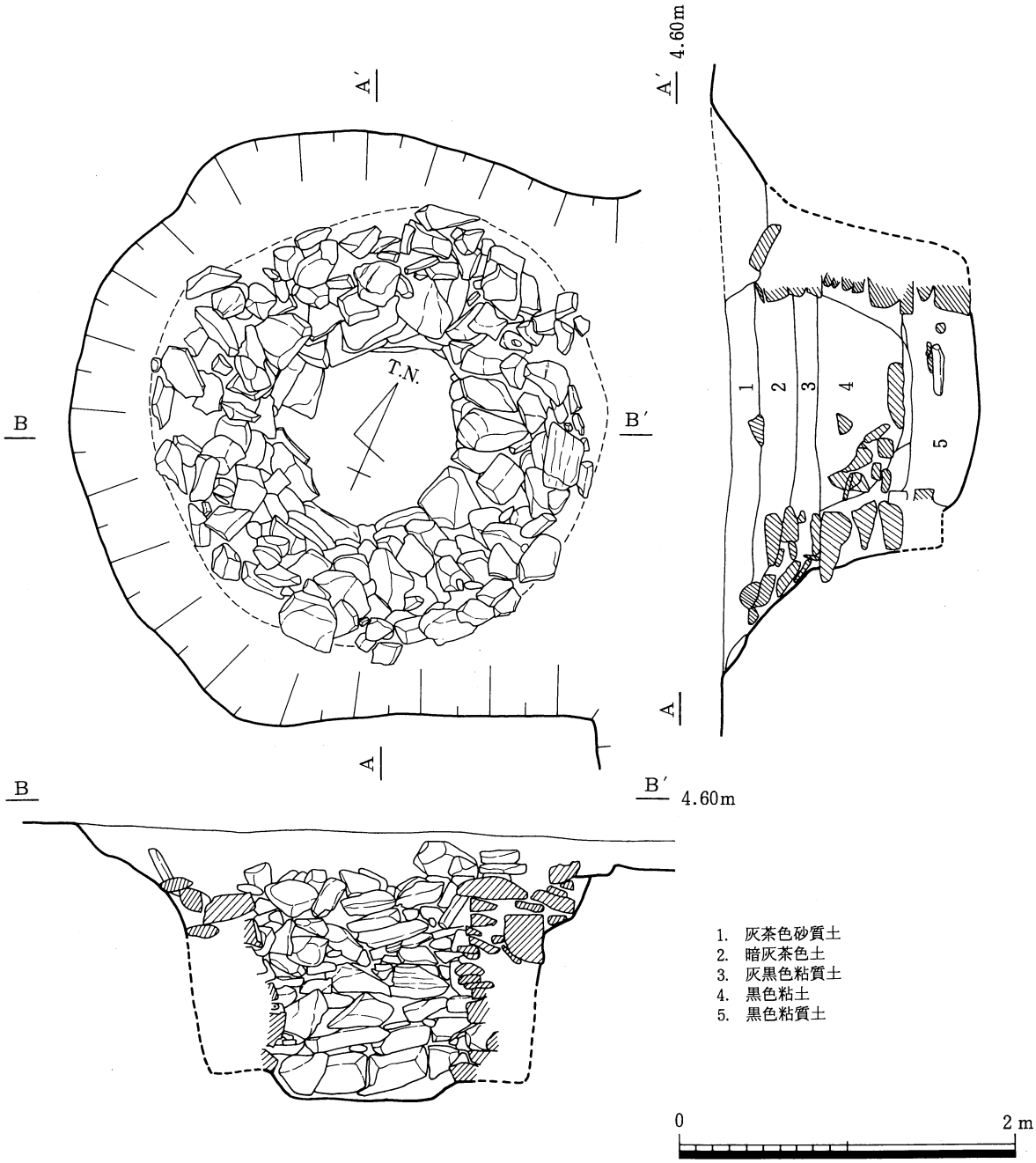
3.井　戸

ＳＥⅣ02（第509・528・529図　図版82・83　ＳＥ8602）

Ｈ19区で検出された。ＳＤⅣ01等により画された屋敷地内に所在する井戸である。掘り方の平面形は不整円形を呈するが，東側は南北に広がりＳＤⅣ06につながる。掘り方の上面から0.4～0.5m下までの上半部は摺鉢状になり，これより下部は垂直に掘り下げられている。上面径3.5m，深さ1.6mを測る。井戸枠は石組で構築され，内径1.2mを測る。この石組は径約0.4m前後の安山岩・花崗岩・サヌカイト・砂岩の角礫・亜角礫・円礫を用い，大きな石材を下部に，扁平な石材を上部に，約７～10段程螺旋状に積み上げている。また，石材の長側面を内側に向けることを原則としている。裏込めの石は検出できず，ベースの砂を充填している。埋土は５層に区分できる。出土遺物は，中位層より下位層にかけてが最も多く，木製品も出土した。また，井戸枠内部には廃絶後に石組を破壊しながら埋め戻したらしく，多量の礫を落とし込んでいた。

ＳＥⅣ02の出土遺物としては，土師質土器・瓦質土器・備前焼き・青磁・染め付け・木製品・果実種・巻貝等が出土している。これらの土器より33点抽出した。

（第528図４～12）は土師質の杯ないし皿である。（10）は石組中（４・５）は中層（４層），（６～９）は上層（１・２層）から出土した。底部はヘラ切りを施し平底である。体部は外上方に延びる。（第528図13～24）は土師器の小皿である。（14～16・21）は　上層（１・２層），（18・21）は中層（４層），（13・17・19・23・24）は石組中より出土したものである。底部はヘラ切りを施し平坦に仕上げている。体部は外上方に短く延び口縁端部に至り，端部は丸い。（24）の底部には対になる小孔が認められる。



第509図　SEⅣ02 平・断面図

（第528図25～27・29）は土師質の羽釜である。（25～27）は羽釜の体部上半部である。（26）は石組中（25）は中層（4層），（27）は上層（1・2層）中からの出土である。体部は内湾し口縁端部に至り，端部を丸く仕上げている。体部外面には指頭痕・ハケ・ナデ，内面には指頭痕・板ナデ・ナデ等で調整している。鍔は口縁端部よりわずか下方に付くが，その形態を比べれば，石組（26）→中層（25）→上層（27）と時期が新しくなるにつれ退化傾向が指摘できる。（29）は羽釜の脚部である。（第528図28）は土師質の摺鉢で石組中より出土した。体部は外上方に延び口縁端部は平坦に肥厚する。外面には指頭痕が認められる。（第528図30）は土師質の十能の把手で，中層（4層）から出土した。外面は指頭痕が顕著に認められ，内面は中空である。上方より下方に掛けて穿孔が認められる。